

---

# Frosty Rain

A l l e n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Frosty Rain

### 【Nコード】

N8111V

### 【作者名】

Allen

### 【あらすじ】

2168年、未曾有の大災害、巨大隕石の飛来より15年。世界には、ルーン能力と呼ばれる異能が溢れていた。

能力を得た人や動物によって、まるで異世界のように混沌とした世界が、人の手により秩序を取り戻してからしばらく経ち 安定し始めたその場所で、一人の青年が己の道を歩き始める。

彼の名は、氷室涼二。死の世界の名を二つ名として持つ、最高位の能力者だった。

## 01・0：プロローグ

『生きる事は罪を重ねる事なのだ』　　そう、誰かが言った。  
何かの映画のシーンで聞いたのかもしれないし、小説に書かれた  
一文だったのかもしれない。  
けれどそれは、決して作り話などではない。  
全て事実であるからこそ、この世界は呪われたように救われないの  
だ。

幸せを追い求めれば、誰かの幸せを奪う事になる。

何かを救おうとすれば、何かを切り捨てなければならなくなる。

だからこそ、赦せないのだ。

ただ、奪われてしまった。相手が何を護るつもりだったのかは知  
らない。

その行為が、多くの人間を救う為だったのかもしれない。

けれど、赦せないのだ。

正義であろうと悪であろうと、奪われたものは戻りはしない。

故に、その行為が何であろうと関係ない。

ここから先、選び取る道が悉く悪と断じられようとも 決して、

それを違える事は無い。

未来永劫、あの存在を赦しはしない。

故に 　これは、罪科の物語だ。

悪と断じられようと、その先に待つものが破滅であろうと……この罪を抱えて、進み続ける。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

ゆらゆらと、光が揺れる。

苔生し、緑に包まれたコンクリートの箱。

そこに映る網目状の輝きが、僅かに遮られる。

水没都市、東京。

十五年前、全世界を未曾有の大災害が襲った。

難を逃れたのは世界中でもごく僅かな国々のみ。特に先進国では、大きな被害を免れたのは日本のみだった。

しかしその日本とて無傷とは行かず、唐突な海面上昇によって関東圏はほぼ水没してしまっていたのだ。

たった一つの、隕石の影響で。

(たった一つ……か)

虚空を見上げ、一人の青年が胸中で一人ごちる。

黒いロングコート、青紫色のマフラー。秋口にしてはあまりにも重装備過ぎる装いだ、彼に暑がるような様子は欠片として存在していなかった。

彼は水没した都市　その水面を歩きながら、マフラーに隠した口元に小さく笑みを浮かべる。

そんな表情を見せつけるかのように、青みがかった黒髪が、ビルの谷間を吹き抜ける風に煽られた。

と　僅かに、水面が揺れる。

「……追いついてきたか、ガラム」

青年が視線を横に向ければ、その方向にある沈んだ瓦礫の上に、一つの影が生まれていた。

人にあらざるその姿は、黄金の毛並みを持つ狼。

しかしながら瞳に知性の光を宿すその獣は、青年へと視線を向けて小さく首を傾げて見せた。

そんな動作に、青年は小さく苦笑を漏らす。

「十五年前の事を考えていただけだ。ここを通ると、いつも考えてしまっただけ」

「……」

狼が、僅かに咎めるような視線を向ける。

そんな感情が分かってしまう事に対して、青年は再び小さな苦笑を浮かべていた。

「分かってるよ。俺にとっても、アンタにとっても……笑い話じゃ、済まないからな」

それはきくと、今を生きる全ての人間にとっての事だろう。胸中にそう浮かべ、青年は息を吐き出す。

あの隕石は、全てを変えてしまった。世界も、生態系も、そして人

々も。

それを最も近くで見ってしまったからこそ、青年にはそれを笑い飛ばす事は出来なかった。

大切なものを、失ってしまったからこそ。

(否 )

『失った』ではない。『奪われた』だ。

凍りついた心の中に、復讐の炎が揺れ踊る。

奪っていったのが、もしもただの災害だったのならば、まだ諦めもついただろう。

けれど事実は違う。現実はそうではない。

故に、彼にはそれが赦せなかった。

故に、彼は己の道を歩み出したのだ。

狼の視線が、青年を射抜く。

その視線を受け、彼は嘆息しながらもその感情を鎮めて行った。

「……悪い。少し、感情的になり過ぎ」

言葉を告げようとした、その刹那。

二対四本の視線が、同時に進んできた道の方向      その先へと向  
けられる。

何かが見える訳でもなく、ただ沈んだビルと、反射する光の網があるだけだ。

けれど。

「……ガラム、先に行っていてくれ」  
『…………』

まるで、『大丈夫なのか？』とでも言いたげな様子で、狼は青年へと向けて首を傾げる。

その視線を受け止めながら、彼は小さく苦笑を漏らしていた。

「どうやら、俺にお客さんみたいだ。アンタは先に行つて、あいつと一緒に待機していてくれ。俺も後から追いつく」

『…………』  
「心配するな。ここは俺の領域だ……最悪でも、簡単に逃げられる」

7

青年の言葉を受け、しばし逡巡した様子を見せつつも、狼はコクリとその首を縦に振る。

そして、金の毛並みを持つ獣は強く瓦礫を蹴り、ビルの壁を駆け上って姿を消していった。

その姿を見送る事も無く、青年は静かに振り返り、そして小さく呟く。

「……………」  
イサ、ラゲズ

その言葉と共に、僅かな光がコートの際間から漏れ出した。



纏うコートが無ければ、彼の両肩が光を放った瞬間を確認する事が出来ただろう。

けれどその光には目もくれず、彼は懐から取り出した黒いバイザーを顔面に装着する。

そして右のこめかみの辺りにあるスイッチを押せば、バイザーの紅いラインが光を放つ。

彼の目には、周囲の光景が今まで以上に鮮明な映像となって映し出されていた。

瞬間、バイザーに警告の文字と上向きの矢印が映る。

「はあああああああッ！」

そして次の瞬間、八本の剣が上空から彼へと向けて射出された。けれど青年は避ける素振りも見せず、その右手を上の方へと向ける。

空を裂き、岩を容易く貫くその鋭い切っ先。

少々小柄な青年の肉体など容易く食い破るその刃。しかし次の瞬間、それらは凍りついたかのように空中に静止していた。

そしてそれとほぼ同時、青年の正面に一人の少女が降り立つ。

彼女は青年の真上に静止した剣と同じ形状の一振りを彼に対して突きつけ、金色のツインテールを揺らしつつ大きく言い放つ。

「見つめましたよ、ニダルヘイム《氷獄》！」

「ユグドラシル……それも、ムスベルヘイムの連中か。一体どんな了見で、民間人に襲い掛かってきた訳だ？」

「ふざけないで下さい、裏切り者が！」

その叫びと共に、青年の頭上にあつた剣たちが砕け散る。そしてその粒子はすぐさま少女の背後へと収束し、そこで再び剣として形成された。八つの刃はまるで翼の如く四つずつ広がり、青年を正面から威嚇する。

「貴方のせいで、お姉様が……！ 貴方を捕らえ、連れ戻してやる！」

「……俺は一応、正式な手順を踏んで抜けてきたんだがな」

「黙れ……ッ！ 貴方の……貴様の所為でええええええええええ！」

少女は、青年へ向かつて跳躍する。九つの刃は、その鋭利な切っ先全てを彼へと向け、その身体を引き裂こうと迫る

「止まれ」

しかし、彼がそう呟いた瞬間　少女の体は、空中に縫い止められたかのように静止していた。

目を見開く彼女へと、青年は更に左の掌を向ける。

「沈め」

そして次の言葉が放たれると同時に、足元にある水面が波打ち、巨大な掌となつて少女の体を掴み取った。  
その衝撃に、彼女は目を見開く。

「これは、<sup>ラッス</sup>……ごぼっ!？」  
「俺の事を知ってるんだつたら……せめて、対策ぐらいはして挑んでくるんだつたな。悪いが、牙を向けられて容赦するつもりは無い」

水の掌は、少女の体を水面の下へ引き込もうと沈み始める  
刹那。

「<sup>カン</sup> K!」  
「っ!」

上空から響いた声に、青年は舌打ちと共に後方へと跳躍する。  
そしてそれとほぼ同時、彼が先ほどまで立っていた場所に、巨大な炎の弾丸が撃ち込まれた。  
爆裂する弾丸と立ち昇る水蒸気に、後方へと着水した青年は、先ほどまでとは違い油断無く構える。  
視線の先は、立ち昇る水蒸気によって覆い尽くされている……けれど、そこに在る確かな気配は、彼を警戒させるに足るだけの力を持っているのだ。

そして、蒸気が晴れる。  
そこに立っていたのは、真紅の髪をなびかせる一人の少女だった。  
その姿を見つめ、青年はマフラーの下で小さく笑みを浮かべる。

「……やはりお前か、《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>」  
「っ、《氷獄》……」

《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>と呼ばれた少女は、青年の姿を見つめて口惜しそうに顔を俯かせる。

伏せられた黒曜の瞳は、長い真紅の髪によって覆い隠されていた。十五年前の大災害以来、人にはある特殊な力が備わると同時、それに伴う肉体的変化が起こっていたのだ。

彼女の持つ真紅の髪も、そして青年の持つ青紫の瞳も

剣の翼を持つ少女を抱えた《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>は、伏せていた顔を上げて真っ直ぐと青年の瞳を見つめる。

と……その腕の中にいた少女が、僅かに身じろぎした。

「おねえ、さま……」  
「……意識があるなら帰還しなさい、《戦乙女》<sup>ヴァルキユリア</sup>。彼は、貴方に太刀打ちできるような存在じゃない」  
「う……」

瓦礫の上に降ろされた少女<sup>レイヴァーティン</sup> 《戦乙女》<sup>ヴァルキユリア</sup>は、若干不満げな表情を浮かべながらも、《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>の言葉に従い後方へと退避して行く。

そしてその姿を追撃せずに見つめ、青年は小さく嘆息を漏らした。

「部下の教育がなつてないな、《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>」

「……私は、貴方のように上手く教える事は出来ないから……隊長  
「俺は退職したんだ。今はお前が隊長だろう、<sup>ひまり</sup> 緋織……いや、《災  
<sup>レイヴァーティン</sup>いの枝》」

「涼二、私は……ッ！」

叫ぼうとした《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>

緋織に対し、彼はバイザーとマ

フラーの下で小さく苦笑を浮かべていた。

《氷獄》<sup>ニゲルヘム</sup>

涼二は、緋織の言葉を手で制し、そして彼女へと向

けて声を上げる。

「戻って欲しい、と言われても俺には無理だ。俺はもう、お前達の  
敵になつたんだからな」

「どうして……！」

「どうして、か」

涼二は、小さく苦笑する。

その表情を、必死に隠しながら。

情を捨てきれない自分を、嘲笑いながら。

「理由はあるが道理は無い。そこに感情はあつても理性は無い。故  
に、説得しようとしても無駄だ、《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>。力づくでなければ、  
俺は止まらないぞ」

「ッ……なら！」<sup>ジュラ</sup>、<sup>カン</sup>、<sup>ティウス</sup>「T！」

緋織の服の下、両脇腹と胸元の辺りが輝く。彼女の周囲には炎が逆巻き、そしてその手の中には、一振りの長剣が姿を現した。莫大な熱量を誇りながらも、本人にはまるで影響を与えない、その赤熱した炎の刃。その熱を振り払うように剣を構え、感情を押し殺した表情で緋織は言い放つ。

「力づくで、貴方を連れ戻す！」

「それが正しい。が」

涼二は、右手を横へと向ける。

水面から上がって来た大量の水は涼二の手の中で剣の形となり、そのまま凍て付いて氷の刃と化す。

それを構え、涼二はバイザーの下で小さく笑みを浮かべていた。

「状況判断が出来ていないな、緋織……もう一度、教育し直してやるぞ」

「ッ……涼二！」

どこか祈るような、泣きそうな声が響き渡る。その言葉に息を詰まらせつつも、涼二は己の心を押し殺し、駆けた。

歯を食いしばりつつも、炎の刃を構える緋織もまた、跳躍する。

そして黒と紅の影は、水没した都市の中、凍結と灼熱の衝撃を撒き散らした

「はあああああッ！」

「ふ……ッ！」

裂帛の咆哮と、鋭い呼気。

それと共に放たれる真紅の火炎と純白の冷気は、互いが互いの世界を喰い合うかのように周囲を蹂躪する。

凍結した周囲の水は炎によって即座に溶かされ、建物に張り付いていた植物達は燃え上がった次の瞬間には氷像と化していた。

しかしその中心地にいる二人に、ダメージを受けたような様子は欠片として存在しない。

二人は互いに互いの剣を弾き合い、同時に距離を開けた。

「大した火力だ。捕らえるつもりじゃなかったのか？」

「貴方なら……この程度、簡単に防げるだろう！」

言い放ち、緋織は刃を振るう。

それと共に放たれるのは、衝撃を纏う炎の奔流。

人体など容易く飲み込み、焼き尽くし、塵すらも残さないであろうその熱量。

それに対し、涼二はただ左の掌を向けただけだった。

が　それと共に、足元にあった膨大な量の水が、瀑布を逆再生するかのように巻き上げられる。

水が炎の渦を飲み込み、大量の水が一瞬で蒸発した事による大爆発すら更なる水の流れて飲み込んで、水流は天高く舞い上がる。

「思い切りがいいのは評価しよう。だが」

上空に舞い上がった水が散り、水面へと雨のように降り注ぐ。

涼二はそれと共に、天へと向けて右手を掲げた。

その動作に、緋織ははっと目を見開く。

「水に溢れたこの場所は、俺の領域だ……相手の土俵で戦うなど、  
そう教えた筈だったが？」

「しま……ッ！」

「凍て付け      フロステイレイン  
《氷雨》」

涼二の右肩が、コートの下で強い輝きを放った。

そして次の瞬間、天から降り注ぐ水の雫に触れたものが、一斉に凍りつき始める。

ビルも、植物も、水面も……全てが凍て付き、周囲は一瞬にして氷の世界へと変貌してゆく。

故に、《氷獄》<sup>ニラルヘイム</sup>。

「く、う……」

異界と化したこの場所で、それでも灼熱の炎を周囲に纏う事で何とか耐えていた緋織。

涼二は、その様子に容赦など見せず、彼女へとその刃の切っ先を向ける。



「ちゃんと、避けるよ?」

「ッ!」

その声が響いた瞬間、緋織へ向けて巨大な氷の槌が振り下ろされた。

その一撃は凍て付いていた水面を砕き割り、周囲へと大量の水を巻き上げる。

間一髪躲した緋織も、その水までもを躲す事は出来なかった。

そして周囲の冷気に、その身もまた凍て付き始める。

必死に剣の炎を纏って氷を溶かそうとしているが、その氷の侵食を止めるのが限度だった。

そんな彼女の姿を見据え、涼二は小さく嘆息を漏らす。

「お前は強いよ、緋織。ここ以外の場所で戦えば、俺も本気を出さざるを得ないほどにな。けれど、これが結果だ。」

周囲の被害を考えれば、確かにここ以外に俺と戦えるような場所は無かっただろうが……まあ、しっかり準備をしなかったのがお前の敗因だ」

「くっ……涼二、どうして。私は、貴方と」

「一緒に戦っていたかった、か?」

膝を着いた緋織は、近付いてきた涼二の姿を見上げる。

その首筋に覗く銀の鎖を見つめ、涼二は小さく嘆息していた。

「……俺も、お前の事は気に入っていた。けれど、お前を連れて行く事は出来なかったんだよ」

「どうして……？」

「お前は、あの場所以外での生き方を知らないからな……今の場所にいた方が、幸せだろうさ」

言って、涼二は踵を返す。

止めを刺さぬまま立ち去ろうとするその姿に、緋織は思わずその背中へと手を伸ばしていた。

「待て……待って、涼二！」

「……追ってくるな、緋織。そうすれば、俺はお前を殺さなくちゃならなくなる。先輩からの最後の饑別ぐらい、受けとっておけ」

涼二は力を解除しつつ言い放ち、そのまま真っ直ぐと水面を歩いて行った。

粉雪のように舞う冷気は、白い霧となってその姿を覆い隠してゆく。消えてゆくその背中へと向けられていた掌は、ぱたりと地面に降ろされた。

「理由ぐらい……話してくれたって、いいじゃない」

凜と澄んでいた筈の表情が、くしゃりと歪む。

誰もいない、滅びた街の中　　磨戸緋織は、それでもその慟哭の声を必死に抑え続けていた。



「……………女々しいな、氷室涼二」  
ひむららふりてい

起き抜けの第一声に自身への皮肉と嘲笑を混ぜる。

そんな無意味な行為をする自分自身へと苦笑しながら、氷室涼二はゆっくりと身体を起こした。

あまり手入れはされていない、無造作に切られた黒い髪は、光の加減で僅かに青みを帯びる。

そしてそれを照らす窓の方へと、彼はその青紫色の瞳を向けていた。

(……………アレから数ヶ月、か)

昨晚に見た夢を、涼二は思い返す。

水没した都市、金色の狼、襲い掛かる《戦乙女》ヴァルキュリア、そして

の少女。

紅

炎を纏うその姿を脳裏に浮かべ、涼二は小さく苦笑を漏らす。

「元気にやってるのかどうか……ま、俺がいなくても上手くやるだろ」

強い光に細めていた視線は、明るさに慣れると共にゆっくりと広げられてゆく。

窓の外に見えるのはいくつもの建物　遠景に見えるクレーンは、建設中のマンションの物だ。

ここは、水没した関東圏の代わりに作られた人工島。

無論、まだまだ関東全域の避難住民を収容できるほど大きい訳ではないが、それでも現在の所、世界最大の人工島となっている。

この地へと移住を求める者はそれなりに多く、そのおかげで人口密度はかつての大都市東京すらも越えるほど。

結果、正式名称こそ新東京島だが、人々の間では『密都』などと呼ばれる事となっていた。

「……………」

涼二の視線と思考は、そんなゆったりとした感覚から徐々に研ぎ澄まされてゆく。

その視界に入っているのは、窓の外、遠景に見える一際大きなビル。そこに刻まれた大樹の紋章を鋭く睨み、彼は小さく息を吐き出した。まるで、息を潜めて獲物を睨む肉食獣のように。

『ユグドラシル』と言う名を持つ組織がある。

それは現在この日本で、大災害以前の政府と同じ働きをしている組織だ。

かつての大災害による被害は関東近辺に集中し、主要機関がそこに集中していた日本は、その当時機能が完全に麻痺した状態にあった。そして、更に追い打ちを掛けるかのように、特殊な才能を持った人間が次々と現れ、国内は混乱して行ったのだ。

そんな中設立されたのが、その『才能』を持つ者によって中核を成された組織、ユグドラシルだった。

才能の一つに、『求心力を高める力』と言うものがある。分かりやすく表現するならば、『カリスマ』だろう。

その在り方は、混乱してゆく道を見失っていた人々にとって、替え難い光明となった筈だ。

そして、元々政府が持っていたあらゆる機関は統合され、その組織は新政府と呼べるものへと変貌してゆく。

そのような経緯を経て、最終的に出来上がったのが、今のユグドラシルだ。

「……下らない」

涼二は、そう吐き捨てる。

そこに込められた感情が並々ならぬ憎悪であると、分かる者ならば分かるだろう。

けれどその感情は誰にも読み取られる事無く、深々と吐き出した吐息の中に霧散した。

頭を掻き、涼二は嘆息する。

「朝飯でも作るか」

ベッドから降り、適当に着替えてから、正面にあるキッチンへと向かう。

涼二の住む部屋は小さなアパートだが、ここは総じて新築の多い密都に建つ建物。

彼が今住んでいるこの部屋は、半ばワンルームマンションのような機能性を持っていた。

しかし、既に慣れた涼二はそんな事は気にも留めず、フライパンに油を敷き、それを熱し始めながら冷蔵庫の中より材料を取り出してゆく。

(卵が安かったんだよね……まあ、あんまり置いておく訳にも行かんし、さっさと使っちゃおうか)

卵のパックを取り出し、ボウルを洗って中に割る。

ガチャンと音が響き、勝手に部屋のドアが開いたのは、ちょうどそんな時の事だった。

涼二はその気配に眉根を寄せながらも、あまり警戒した様子は見せず嘆息する。

この部屋の鍵を持つ人間は、彼の他には殆どいない。そして、その僅かな例外は

「おう、涼二、起きてるかー？」

「朝ごはんたかりに……もとい、食べに来たわよー」

「帰れバカ共」

部屋の中に入ってきたのは、一組の男女。

一人は赤と黒のジャケットを羽織り、大胆に胸元を開けたシャツを纏った茶髪の男。アウトローな雰囲気を出しつつも、どこか憎めない笑みを浮かべた青年。チョーカーと言うには物々しい首輪が印象的だ。

そしてもう一人は、赤茶色のショートヘアにこげ茶色の大きな瞳が映える少女。淡い暖色系の装いは、寒くなり始めた昨今でも明るさを失っていない。ただし、ウロボロスのブレスレットは合わな  
いのではないか、と涼二は思う。

「双雅、桜花。お前らな、何で一々ここにたかりに来るんだ」

「いーじゃん、材料費は払ってるだろ？」

「おまけに、何か良い材料があつたら持ち込んでるんだから。それに一人寂しく食べるより、皆で食べたほうが美味しいでしょ？」

上狼塚双雅に、御津川桜花。

共に、涼二にとって『幼馴染』と呼べる人間だ。

そんな二人は涼二の威嚇をもとませず、片付けてあつた大きめのテーブルを取り出してセッティングし始める。

物怖じしない二人の様子に嘆息し、涼二はトースターに突っ込む食パンの枚数を増やす事にした。

いくら卵を多く買ってあると言っても、こつ毎日たかられてはすぐに消費してしまうだろう。



「つたく……」

長年の経験で、言っても無駄だと分かっている涼二は、深々と嘆息して二人への追及を切り上げた。

小さく肩を竦めつつ割る卵を三個に増やし、フライパンの中へと流し込む。

塩と胡椒で適当に味付けをしつつ、涼二は一度二人の方へと振り返った。

「パン乗せでいいか？」

「おうよ」

「涼二の料理なら何でもー」

「よし、グリーンピース増し増しで入れてやろう」

「やっぱ嘘、この外道！」

悲鳴を上げる桜花に苦笑し、とりあえずパツと茹でて使えそうな野菜を取り出してゆく。

とりあえず、ホウレンソウとブロッコリーを取り出しながらお湯を沸かしつつ、目玉焼きを作るフライパンに蓋をする。

「温野菜のサラダ、目玉焼きトースト……サラダに刻んだベーコンでも入れておくか。飲み物はどうする？」

「オレ牛乳」

「あだし紅茶ー」

「双雅、お前はただでかくなるつもりか。俺への当て付けか」

「いや、お前がちっこいのは俺の所為じゃねえし？」

双雅の言葉に、涼二は思わず言葉を詰まらせる。

涼二の身長はギリギリ170cmに届かず、男性としては少々低めなのに対し、双雅の身長は190弱と言った所。

並ぶとその差が歴然となってしまうので、涼二はあまり双雅と並びたがらないのだ。

ちなみに、桜花も身長は160cm台なので、涼二と視線の高さは殆ど変わらない。

「まったく……まあいい。ほら、食器並べろ」

「うーい」

この部屋には、常にこの二人用の箸やマグカップが常備されていたりする。

今更と言えば今更なこの状況に、涼二は苦笑しつつも料理を進めて行った。

切った野菜を鍋の中に入れて込み、ちょうどいい感じに半熟に焼き上がった目玉焼きは三つに切り分け、一先ず皿の上に出しておく。

そしてトースターから出した食パンを並べ、余ったベーコンを乗せてから切り分けた目玉焼きを乗せる。

「後は味を調べて、と……よし、後は」

とりあえず完成した品をさらに乗せた涼二は、洗い物を流しの中に突っ込み、野菜が茹で上がるのを待った。

二つだけでは寂しいので、レタスとプチトマトを取り出して洗いつつ、彼は背後の二人へと問いかける。

「サラダのドレッシングはー？」

「和風ー」

「何言ってるのよ、胡麻ドレッシングでしょ」

「朝から高カロリーにずっと太るぞお、桜花お」

「うっさいわね。あんたは縦に伸び過ぎなのよ！」

「……さっさと決めろよ」

じゃんけんを始める二人に嘆息しつつ、涼二は大きめの皿にレタスとプチトマトを並べてゆく。

そして茹で上がった野菜を冷ます頃には、二人の決着はついていた。6あいこの末、決定したのは和風ドレッシングである。

「朝っぱらから騒がしい連中だな、お前らは……隣に迷惑だから、あんまり騒ぐんじゃねえぞ？」

「はいはい、朝飯朝飯」

「ごめんなさーい」

「……桜花はまだいい。テメエはせめてポーズだけでも謝罪しろこのバカが」

料理を並べながら嘆息し、涼二もまた円形のテーブルに着く。そして飲み物を注ぎ、三人で同時に手をあわせ、頂きますと声を上げた。

未だに抜けない礼儀正しい習慣。共に孤児院で過ごしていた頃から

の癖に、涼二は小さく苦笑しつつ料理へと手を伸ばした。その隣で、トーストに齧り付いていた桜花が顔を綻ばせる。

「んー、やっぱり涼二はお料理上手だねえ。こりゃ、あたしも負けられないわ」

「うむうむ。いい嫁さんになれるな、涼二は」

「殺すぞ双雅」

半眼と共に、涼二は近くに転がっていたテレビのリモコンを双雅へと向けて投げつける。

しかし、相手はそれをあっさりと片手でキャッチし、テレビのスイッチを入れた。

まるで堪えた様子の無い双雅に、涼二は嘆息交じりにテレビへと視線を向ける。朝のニュース番組は、いつも変わり映えの無い内容ばかりを放送していた。

と　　そんなテレビを見ていた桜花が、突如として歓声を上げた。

「二人とも、あれあれ!」

「あん?」

「どうかしたのか、桜花?」

彼女が指差した方向へと、二人は視線を向ける。

テレビに映っているその画像は、最近密都に完成したばかりの大型ショッピングモールの紹介だった。

ただでさえ土地面積が足りていないのに何をやっているんだ、と色々言われていたが、結局『必要な品物が一箇所で揃えられる』と言

う利点から、多くの住民に受け入れられた次第である。

「……で、そのショッピングモールがどうかしたのか？」

「ほら、今日は二人とも暇でしょ？ あそこに遊びに行ってみよう  
って事」

「あー、まあ暇って言えば暇だな。何か買いたいモンでもあんのか  
？」

「別にー。ただ、久しぶりに三人で遊ぼうかなーって」

「遊ぶって……お前、一応まだスクール卒業してないだろ」

「今日は講義休みですー」

いー、と口を左右に広げながら言う桜花に、そんなものと涼二  
は肩を竦めた。

そして一人であるのショッピングモールの魅力をつらつらと語る桜花  
を他所に、彼は再びテレビの方へと視線を向けた。

ニュースは変わって、今は有名な製薬企業である静崎製薬しずきの新製品  
に関する話へと移っていた。

あまり興味がある内容というわけでもなく、涼二はトーストを齧り  
ながらぼんやりとそれを眺め 隣から放たれた甲高い声に、唐  
突に現実へと引き戻された。

「で、涼二！ そっちは暇なの？」

「ん、ああ……とりあえず、予定は入って

」

いない、とそう言おうとした瞬間だった。

まるで図ったかのようなタイミングで、携帯電話が着信音を鳴らし

始めたのだ。

若干マイナー気味な曲をアレンジした着信音に気付いた双雅が、近くにあった携帯電話を涼二へと投げ渡す。

軽く礼を言いつつ受け取った涼二は、そのディスプレイに表示されていた名前に思わず顔をしかめていた。

小さく嘆息しつつ、通話ボタンを押す。

「……もしも」

『はいはい！ 今日も元気にモーニングコール！ 朝8時42分38秒をお知らせしま』

反射的に通話停止ボタンを押し、携帯電話を放り捨てる。

己の行動に頷きつつ、涼二はサラダの方へと箸を伸ばした。

「……えーと、涼二？」

「ん、何だ？」

「今の……あー、えーと、何でもない。とにかく、今日は暇なんですよ？」

「ああ、まあ」

暇ならいいんだがな、と彼が咳こうとした瞬間だった。

再び、携帯電話が同じ着信音を響かせ始めたのだ。

涼二はしばし無視しようかと悩み、相手がその程度で諦めるような人間ではなかった事を思い出して、深々と嘆息する。

そんな疲れた表情のまま携帯電話へと手を伸ばし、再び通話ボタンを押して耳へと押し当てた。

「……何の用だ、スリス」  
『酷いなあ、涼二。ボク傷付いちゃうじゃないか』  
「お前の凶太さは重々承知だ。で、何の用だ？」  
『はいはい、せっかちなあ』

電話越しに聞こえてくる嘆息の音に、涼二は思わず頬が引き攣るのを感じたが、それを、何とか抑える。  
相手の事は良く分かっていなのだ、相手のペースに引き込まれれば泥沼にはまるだけだと、彼はよく理解していた。  
そして相手が引つかからない事に気付くと、電話越しの相手スリスは、小さく笑い声を漏らしてから声を上げる。

『じゃ、本題だよ涼二。ボクらに依頼が入った』  
「……相手は？」  
『いつものじゃないね。匿名希望さんだけど、一応の信頼は置けそうな相手だよ』  
「もう調べたのか。ご苦労だったな」  
『えっへー、褒めて褒めてー』

耳に届く声に対し、涼二は小さく嘆息を吐き出した。  
この相手は、あまり調子に乗らせると後で面倒になる事が分かっている。

「……で、仕事って訳か」

『うん、そうだね。詳しい内容は後で連絡するから、涼二はいつもの準備をしてくれないかな?』

「了解した。それじゃあ、また後でな」

『あ、ちよつといい?』

「ん、どうした?」

呼び止める声に、涼二は思わず首を傾げた。ここまで来て止められるような用事があつただろうか。

と、一つだけ思い当たる事があり、涼二は再び頬を引き攣らせていた。

そんな涼二の様子を知ってか知らずか、スリスは少し恥ずかしがるような声音　　いや、むしろ甘えるようなそれで声を上げる。

『次こつち来る時までには新作のエロゲを　　』

「じゃ、またな」

『あ、ちよつと　　』

電話を切断し、更に電源を落とした上でバッテリーを抜く。

そこまでしてから一息ついて、涼二はようやく耳を澄ませていた二人の方へと視線を向ける。

最近の携帯電話は外に声が漏れないように設計されている為、そんな事をした所で無駄なのだが。

二人とてそれは分かっているのだろうか、そこは人の逃れられぬ性と言った所だろう。

涼二は、小さく息を吐き出した。



「……済まんな、桜花。仕事が入った」  
「えー……って言いたい所だけど、まあ仕方ないか」  
「つーかよお、涼二。オマエ、仕事って何やってんだ？ ユグドラシルは辞めたんだろお？」  
「ああ……」

双雅の言葉に、涼二は窓の外へと視線を向ける。

そこに見えるユグドラシルの建物へと視線を向け、感慨に耽る

振りをしながら、彼は必死で言い訳を考えていた。

今やっている仕事は、堂々と公言できるようなものではないからだ。しばし悩みつつも、二人に怪しまれない程度の時間で視線を戻し、涼二は無難　だと思われる　内容を回答する。

「……まあ、探偵みたいなもんだな。探偵の手伝いって言うか」  
「ほー、今時そういう時代錯誤な仕事してる奴もいるんだなあ」  
「そりゃいるでしょ。サイバースルーフとか、ネットワーク・ディテクティブとか……色々、需要はあるでしょ？」  
「へえ、そりゃ知らなかった」  
「……とにかく、そんな感じだ。つー訳で、悪いが今日は付き合えない」

軽く頭を下げる涼二の言葉に、桜花は苦笑を浮かべながら手をパタパタと振って見せた。

そこに、あまり執着と呼べるようなものは存在しない。

色々と遠慮の無い性格の人物ではあるが、あまりしつこくない、このカラツとした在り方が周囲に人気なのだ。

共にスクールに通っていた時代に、よく性別問わず人に囲まれてい

た姿を思い出し、涼二は小さく苦笑した。  
そんな口元を見せないようにする為に顔を俯かせていたのだが、どうやら桜花はそれを謝罪であると受け取ったようだ。

「別にいいつてば。また今度だつて大丈夫だし。まあ、開店セールやつてる内には行きたいけどね」

「ああ、それまでには必ず時間を開ける。約束するさ」

「おっけー、約束だよ。破ったら部屋の中に蛇五匹ぐらい解き放つてやるからね」

(……これが無ければなあ)

色々と惜しい女だ、と涼二は胸中で嘆息する。

愛嬌もあり容姿も整っているの、あまり彼女を知らない人間には非常に人気があるのだが　その実、桜花は無類の爬虫類好きなのだ。

特に蛇の類を好んでおり、彼女は部屋にいくつもの飼育ケースを並べて、日夜蛇のど真ん中で過ごしている。

おかげか、深く知れば知るほど、付き合える友人は極少なくなつてゆくと言う状況である。

桜花は涼二の一つ下の十八歳であるが、未だに部屋まで上がり込む事が出来た人物は、涼二と双雅のたった二人だけだった。

そんな輝かしい経歴を思い出しながら嘆息し、涼二は適当に料理を口の中に放り込んで立ち上がる。

「あれ、もう行くの?」

「ああ。急ぎつて訳でもないが、あんまりゆっくりもしてられないからな。お前らと一緒にいると、ずるずると長居しちまつ」

「褒められてんのか貶されてんのか……ま、頑張っ  
て来いよお」  
「おう。洗い物は流して水に浸けとけよ」

互いにサムズアップで応え、涼一と双雅は同時に笑みを浮かべた。  
遠慮の必要ない相手、日常の風景。

けれど 涼二が踏み込むのは、こことは完全に乖離した世界だ。

（さて、行くか ）

そして、氷室涼二は《氷獄》<sup>ニサルヘイム</sup>へと姿を変えた。



## 01 - 2 : 非日常への入り口

家を失った人々に新たな居住地を与える目的で作られた密都。だが、それでも人々が住みながらない地域というものは往々にして存在しているものである。

中でも、その傾向が最も強いのは島の一角、発電所がある地域だ。

「今更どうなるって訳でもないだろうが……ま、それも人の性って奴か」

人通りの少ないこの地域を歩きつつ、涼二は小さくそう呟く。独り言になってしまいが、周囲に人の姿は存在しない為、それほど問題は無い行為となっていた。

この地域に人気が無い理由は、今まさに稼働している発電所の存在が原因となっている。

とは言うものの、この発電所が周囲に何か悪影響を与えている訳でもなければ、突如として爆発するような物質を扱っている訳でもない。

ここにあるのはただの　　と形容するには流石に無理があるが

火力発電所である。

ならば何故、この場所が敬遠されるのか。それは、その炎を発する為に使っている燃料の為だ。

「……隕石を燃料に、か。燃えてるんだし使えるんだろっが、人間の発想つてのはいつもいつも感心させられるな」

十五年前に起こった未曾有の大災害。

それは、巨大隕石の飛来に端を発するものだった。その直径数百キロにも及ぶ小惑星は、元々地球から遠く離れた場所を通過すると思われていた。

しかし、それは突如として進行方向を変え、地球に激突する軌道を取ってしまったのだ。

ただし、軌道を変えた時点では十分な距離があり、対応する為の準備期間は十分に取れるものだった。

軌道を逸らし、降り注ぐのは大気圏に突入した時点で燃え尽きる程度の細かな隕石のみ　　そうなる、筈だった。

かの隕石が、『卵』のようなものでなければ。

「……」

沈黙しつつ、涼二は横目に見える発電所を見上げる。

この発電所の中で使われているのは、その隕石の中に詰まっていた大量の液体　　と言うより、半固体　　だった。地球からの迎撃によって表面を砕き割られた隕石は、その可燃性の中身を地球へと大量に降り注がせたのだ。

隕石は白い炎を上げながら地表へと降り注ぎ、特に『高いエネルギーを持つ物体へと向かって行く』という性質をこの上なく生かして、地表を火の海に変えてしまった。

南極もまた例外ではなく、その結果の海面上昇となっている。

その隕石の中身　　ゼリーのように粘性のあるそれらは、今までの地球にあった物質とは異なる性質を持っていた。

それは即ち、酸素以外の何らかの要素と結合して燃焼すると言う性質だ。

ほんの十年前まで、それが何なのかは解明されていなかったのだが

「俺達と同じ、か。何なんだろうな、あの隕石は」

己の肩を見下ろし、涼二はそう一人ごちる。

服の下にあるはずの、己の体に刻まれた紋章を透視するかのように。

ルーン能力、と一般に呼ばれている異能。それが、涼二の体には刻まれていた。

先天後天などは関係無しに、隕石の飛来より人々の間に現れ始めた謎の異能。

炎を熾し、氷を操り、風を巻き起こす。まるで、物語に謳われている魔法のような力。

異能に目覚めたものは、皆体の何処かにルーン文字と酷似した痣が浮かび上がる事から、そう呼ばれている。

その力の発現は、国内に大きな混乱を巻き起こした　　いや、混乱程度で済んだのだからまだいい方なのだろう。

被害の大きかった国々では、未だに暴行や略奪が横行しているのだから。

今日では、日本はルーン能力の制御とその管理にほぼ成功している……一般的に見れば、だが。

ともあれ、その力の研究は進み、そしてかの隕石の仕組みも解明されたのだ。

調査によれば、あの隕石の炎は、ルーン能力の発動と同様のプロセスで炎を発しているのだと言う。

そして水の中でも一定の勢いで燃え続けるその性質は、エネルギー不足に悩まされる事になった世界で、化石燃料を使わないクリーンなエネルギーとして注目されるようになった、という次第である。

（不気味がるのも当然と言えば当然……多少、神経質に見えるけどな）

隣を歩く人の姿に、今度は声を出す事無く、涼二はそう胸中で咳く。

発電所で使われているのは、かつて世界を滅ぼしかけた物体。

日本ではその被害が少なかった　　正確には、落ちてくる場所が一点に集中した事で迎撃し易くなった為に、かの隕石への偏見は薄い傾向にはある。

が、それでも不気味なものは不気味なのだろう。近くに家を構える



人間は、殆どいないと言っている。

「……ま、おかげでこっちはやり易いんだが」

涼二は小さく肩を竦めながら呟き、人目を確認してから近くにある建設途中のまま放棄されたビルの中へと入り、その一角にある鉄製の扉の鍵を開けた。

その先にあるのは小さな部屋。置いてあるのは精々、三つ並んだロッカーと小さな棚程度しかない。

涼二はキーホルダーに付いた二つ目の鍵を持ち、そのロッカーの一番右側の扉を開けた。

中に入っているのは、黒いロングコートとバイザーだ。

「さて、と……聞こえるか、スリス」

『はいはい。装備を回収できたみたいだね、涼二』

持ち上げたそれらへと声をかければ、バイザーの耳が当たる部分から、涼二にとっては聞き慣れた人物の声が響き渡った。

彼は嘆息しつつポリウムをコントロールし、それを装着しながら声を上げる。

その手つきに澱みはなく、非常に手馴れている事は傍目からでも明らかである。傍目など存在しないが。

「それで、今回はどんな話なんだ？」

『よくぞ聞いてくれましたー』

何やら嬉しそうなスリスの声に、涼二は思わず顔を顰める。このような場合、一度として厄介事にならなかった事が無かったのだ。

そういう場合に回されてくる仕事は、大抵

『今回の仕事は、とある人物の誘拐だよ』

このような、真つ当では無いモノになる訳だ。

そう胸中で呟き、涼二は小さく溜め息を吐き出す。尤も、真つ当な仕事など普段から殆ど行っていないのだが。

バイザーに映し出される映像に、周囲に人間の存在は無いと表示される。

普通に声を出しても問題ないだろうと判断し、近くの棚の上に腰掛けつつ涼二は声を上げた。

「また、随分と思い切った依頼だな。依頼主の事は調べたのか？」

『向こうに気付かれない程度にはね。ちよつと変だったけど……』  
「変？」

『そ。別にライバル企業って訳でもなく、関係者とかそういう類の所でもない……深く調べるのは危険だし、詮索しすぎるのもマナー違反だから止めておいたけど、ちよつと気になるかな』

そこまで調べた時点でアウトだろう、と涼二は考えていたが、そ

れを口に出す事はなかった。

スリスは優秀なのだし、ボ口を出すような真似はしていないだろうと判断した為である。

それに涼二としても、ある程度の情報を得ておかなければ安心は出来ない。

少なくとも、背中から撃たれる危険があるかどうか程度は知っておきたかったのだ。

小さく肩を竦め、涼二は続ける。

「それで、相手はどういう風に接触してきた訳だ？」

「それも結構不可解なんだけど……おっちゃんの方に手紙を渡してきてね」

「……受け取ったのか、思慮深いあいつが」

「まあ、それだったら信頼できる相手とすぐに信じてよかったんだけど、第一声が『筋肉で通じ合った』だったから」

「あー、うん。分かった」

頬を引き攣らせ、涼二はその話を切り上げる。

スリスも同意見だったのか、苦笑じみた笑い声を漏らしつつも会話を進めた。

『まあとにかく、相手はおっちゃんの正体を知っている程度には情報収集の能力がある。結構大きい相手だよ。その分、味方に出来れば心強いと思うけど』

「だから今回は素直に請け負った訳か……了解した。それじゃあ、仕事の内容を説明してくれ」

話を促しつつ、涼二は部屋についている格子付きの窓の方を見上げた。

日は既に高く上っている。もう少しで昼時と言った所だろう。

誘拐を行うと言うのなら、恐らくは夜が結構になるか　　そこまで思考をめぐらせ、涼二はスリスの言葉を待った。

やがて、少しだけ何かを操作するような音が響いた後、スピーカーから声が発せられる。

『……標的は、静崎製薬の社長である静崎義之よしゆのちかの一人娘、静崎雨音あまね』  
「社長の娘を誘拐……身代金でも要求するのか？」  
『さあね。ボクらの仕事は、彼女の誘拐と保護までだ。その先の事は依頼主さんが担当するでしょ』

スリスの言葉に、涼二は小さく頷いた。

それだけでいいというのなら、話は単純だ。相手を誘拐し、適当に世話をしておけばいいだけである。

その後の事は依頼主の方から連絡が来るのであろうし、とりあえず悩むような理由は存在しない。

あまり首を突っ込み過ぎても、厄介事に巻き込まれるだけなのだから。

涼二は、小さく息を吐きだす。

「……了解した。それで、詳細な内容は？」

『決行は今夜十時四十五分。場所は静崎製薬新東京社。静崎雨音が会社に来るのは今日ぐらいだから、今日が一番のチャンスだね』

「会社に来る……？　一体、何の目的で？」

「さあね？　ボクに分かったのは、彼女が来る事だけだよ。何らかの研究の為みただけだ……流石に、トップシークレットクラスの内容はセキュリティが厳しいね。」

「一応こっちで調べておくけど……分かってる事は、そっちのモニターに送っとくね」

「ああ、助かる」

スリスの言葉と共に、涼二が装着するバイザーの視界の一部に資料が表示される。

決行時刻、会社の場所、侵入経路から始まり、警備員の巡回経路やシフト、終いにはターゲットのプロフィールまで付いている。しかし

「……標的の写真は無いのか？」

「あー、どうも、普段は家の方に引きこもってるみたいでね。しかも写真がデータ化された気配も無い。この時代、一体どんな風に生活してるのやら……指紋とかはあるんだけどなあ。一応、ハッキングはまだ続けてみるけど」

「ああ、気付かれない程度に頼む」

「ふふーん。ボクを誰だと思ってるのさ。涼二の率いるグループの情報担当だよん？」

「ああ、そうだったな」

スリスの言葉に、涼二は小さく笑みを浮かべる。

グループと言ってもたった三人だがな、と言う苦笑と、それでも十分在る実力への信頼を込めて。

これが氷室涼二の非日常であり、彼の生きる世界。

「さてと……それじゃあ、下見に行つてくるとするか」  
『はいはい。何かあつたら連絡してねー』  
「ああ、了解した」  
『よつし。それじゃ……』 『ニヴル Heim』、 出動だよ！』

己の二つ名であり、そして己が率いるグループの名前であるその  
単語を耳にし、涼二はバイザーを外しながら笑みを浮かべた。  
そして荷物を脇に抱え、外へと向けて歩き出す。  
絶対の自信が込められたその歩みは、澱み無く目的地へと進んで行  
った。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「さて、と」

スリスの指定した道を通り、その状態を確認しつつ、涼二は静崎製薬の建物を見上げていた。

計画都市らしさの見える、歩道が広く取られているその入り口。

外は若干マジックミラーらしい曇りのついたガラスで覆われているため、全体的に黒っぽく見えている。

バイザーの入ったコートを小脇に抱えつつ、涼二はゆっくりとそこからへ向けて歩いて行った。

(…………ふむ?)

横目でちらりと中を覗き見て、涼二は胸中で疑問符を浮かべる。入り口に立っている警備員の、隙の無い佇まいが気になったのだ。

(ただの警備員にしちゃ、ちょっと心得がありすぎるんじゃないのか、こいつは？  
どこかの警備会社に頼んでるって言うより、個人的に雇ってるような奴か…………?)

とりあえず、気取られない内に視線を外し、涼二は小さく息を吐きだした。

そのまま入り口の正面を横切り、真っ直ぐと歩き抜けて行く警備員は、その姿に警戒した様子を浮かべるような事は無かった。とりあえず安堵し、涼二はそのまま左へと曲がって会社の建物の後ろへと回ってゆく。

(……しかし、警備に堅気じゃない人間を使ってるとはな)

スリスから受け取った資料の中に、この会社で行われている実験の資料が一部混じっていた。

研究されているのは、ルーン能力の出力を抑える薬について。ルーン能力は抑える事が非常に難しい為、刑務所などではかなり気を使っている。

その為、このような物が研究されているという事に関してはそこまで疑問と言う訳ではない。  
だが

(それと、社長の娘が繋がらない。一体どういう事だ?)

今回の侵入経路となる裏口の方へと歩いてゆく。

涼二の思考を占めているのは、件の標的に関しての事だ。普段は家から出てこないと言うその娘を、わざわざ研究所であるこの会社に連れてくる理由とはなんなのだろうか、と。

(娘にその手の知識がある? それとも、娘に強力な能力があって、それを抑える為か?)



疑問を反芻しながら、涼二は横目で裏口を確認する。  
こちらは表よりも人数が少ないとはいえ、ちゃんと見張りは存在していた。

(依頼主が狙っているのは金か、それとも技術か…… 静崎雨音の処遇に関しては、その狙い次第で所だな。

まあ……あまり詮索するのも為にならんし、その辺りはあまり考えないようにしておくか)

思考を切り上げ、涼二はそのまま車道を渡って道路の反対側へと通り抜けた。

そのままぐるっと回っては、妙に疑われてしまう可能性もある為だ。なので、多少遠回りしながら、警備員の目に背景の一部となるようにしつつ涼二は歩いてゆく。

そして再び横断歩道を渡って静崎製薬の横を進み、元いた場所へと戻って行った。

(……とりあえず、問題は無いな)

障害になりそうな物が存在しない事を確認した涼二は、夜まで待機する為、スリスが指定した待機場所へと進んで行こうと

「……………ん？」

した瞬間、その目に会社の前に止まるリムジンの姿が目に入った。

昔ながらの黒い高級車に興味を引かれ、涼二はそちらの方へと振り返る。

車体の長いあの車は運転し辛いのか……などと益体も無い事を考えつつ、涼二は小さく肩を竦めていた。そして、もう一つ考えていた事は

「しまったな、ターゲットがこの時間に現れるんだったら、ここで誘拐した方が　いや、それはリスクが高すぎるか」

確実に姿を見られる事と、警備の多い会社内へ進入する事。

どちらがリスクが高いかと聞かれれば、涼二としてはしばし悩まざるを得ない。が、スリスの腕を考えれば後者の方がいいと判断し、とりあえずターゲットの姿を確認しておこうと視線を向ける。リムジンから現れる、一人の少女の姿を。

「え  
」

青みがかった光沢を持つ真っ直ぐな黒髪。憂いを感じているかのように伏せられている青紫色の瞳。

その全身を包むのは、最早旧時代の遺物と言つ認識すらある藍色の着物。

白い手袋を嵌めたその手で、エスコートする護衛らしき人物の手を

拒み、彼女はゆっくりと車から姿を現していた。  
スリスリから渡された資料の生年月日から考えれば、特徴は一致する。  
しかしそれでも、涼二はその驚愕を抑える事が出来ていなかった。  
何故なら

「……………姉、さん？」

その姿は、かつて十五年前に喪った姉の姿に瓜二つだった  
からだ。

涼二を庇い命を落とした姉、氷室静奈と……………まるで、生き写しである  
かのように。

そんな彼女の視線が　　涼二の瞳を、捉えた。

「　　っ!？」

偶然、だろう。静崎雨音と思われる少女の視線は涼二の瞳からす  
ぐさま外され、彼女は会社の中へと入ってゆく。  
しかし、その姿が完全に消え去るまで、涼二は指一本として動かす  
事も出来ないまま、呆然とその場に立ち尽くしていたのだった。



## 01-3：潜入する黒い影

『さてと……それじゃ、作戦開始だよ』

スリスによって指定された経路を通り、一旦小さな路地の物陰に身を潜めていた涼二は、その言葉と共に立ち上がった。

時刻は午後十時四十四分。あと少しで、裏口の警備が交代する時間である。

彼の装着するバイザーの視界に映るのは、自分の現在位置と建物内の見取り図。

そして、オレンジ色のマップの中で動く赤い点は警備員の動きだ。

(相変わらず、いい仕事をする)

完璧な調査内容に感嘆する。

尤も、口に出せば調子に乗るので、涼二は胸中でそう呟くのみに留

めたが。

小さく息を吐き出し、彼は視界に映る赤い点が動き出すのを静かに待つ。

そして、四十五分

『OK、行つて!』

「ああ」

スリスの言葉と共に、涼二は強く地を蹴った。

スリスは既に静崎製薬の警備コンピュータにクラッキングを行い、監視映像のループや一部機能の停止などの準備をしている。

そして今現在行っているのは、警備員詰め所に置かれている時計の時間をずらす事だ。

それにより、交代の時間になっても新しい警備の人間が現れず、通信機も何故か上手く作動しない事を不審に思った警備員は、詰め所の方へと一旦戻る。

『よしよし、いいタイミング!』

警備員が詰め所の方へと入っていった瞬間を狙い、涼二は建物内へと侵入する。

内部は白を基調とした病院のような内装となっている。

この装備では返って目立ってしまうか、と涼二は少々後悔を覚えていたが、最早そんな事を気にしている余裕は無い。

現在の警備員の位置関係を把握し、彼は静かにルーンを発動させた。

「  
I」<sup>イサ</sup>

そして、その言葉と共にスライディング。

足元を凍結させた涼二は、文字通り滑るように廊下を進んで行った。小回りには欠けるが、これは足音を立てず労力も使わず移動する方法として、氷を操るIのルー<sup>イサ</sup>ン能力者からは愛用されている移動法である。

このフロア内で動いている赤い点は、全て涼二のいる場所から離れた位置に存在している。

一回部分にはセンサーの類は存在しておらず、監視映像もスリスが処理している為、涼二はほぼ自由に活動する事ができた。

バイザー上のマップには進むべき進行ルートが緑の線で表示されており、進む方向に迷う事は無い。

『涼二、進めば分かると思うけど、その方向に貨物用エレベーターがある』

「まさか、エレベーターを使うなどと言わないだろうか？」

『出来なくはないけど、でもそれよりは、涼二が自力で上った方が安全だよ。涼二が着いたら扉を開けるから、エレベーターの中からその上に登って』

「了解した」

スリスの言葉に従い、白い廊下を滑りながら進んでゆく。

巡回する警備員とは必ず角を二つ以上離すようにしながら慎重に進んで行くが、その動きに一切の澱みは存在していない。

その迷いの無さは、スリスへの信頼の現われ  
故にスリスも、  
それに応えているのだ。

『涼二、ちよつとストップ』

「……………」

スリスの言葉に従い、涼二は一度足を止める。  
マップに映る赤い点、近くの通路を動くそれは、人間とはどこか異なる動きで道を進んでいるようだ。  
直接その姿を見ることは出来ないが、そこに何がいるのか、二人にはすぐにその正体を察知する事が出来た。

「警備ロボットか」

『嫌だねえ、最新式だよ。ちよつと待ってて』

それと共に、カタカタとキーボードを叩く音がスピーカーから聞こえてくる。

スリスは空間投影型のデバイスを好まず、アナログなキーボードを使う傾向にあるので、時折こういったものが聞こえてくるのだ。

無論の事、外部から警備ロボットのシステムに侵入するなど、常人には不可能な芸当である。

だが、スリスに限っては、その『常人』の枠から大きく外れた場所に存在していると言えるだろう。

何故なら、スリスはルーン能力を使って電子機器やそのシステムに干渉しているからだ。



『ハガラスアンサズパース  
H、A、Pっと……』

ハガラス

Hは嵐を司るルーンであり、雷や風を操る、最も強力なルーン。

アンサズ

Aは自身の脳の処理能力、特に情報処理や情報収集に長けたルーンである。

パース

また、秘密を表すPのルーンは、隠された物事を探し当てる能力を  
使い手に与える。

故にスリスの前では、いかなる電子機器も鍵の開いた扉に等しいの  
だ。

『はいオツケ、ちょっと止まってもらったよ。今の内今の内』

「ああ、ありがとうな」

数秒間だけ動きを止めた警備ロボットが角から出てくる前に、涼  
二は通路を駆け抜ける。

その先にあるのは、先ほどスリスが告げてきた貨物用エレベータだ。  
再び地面に氷を作りながら滑りぬける涼二の視線の先で、エレベ  
ータは勝手にその扉を開けてゆく。  
スリスの能力による干渉だろう。

「ナイスタイミング」

『勿論ですとも！』

涼二が滑り込むと同時に扉は閉まるが、しかしエレベータが動き

出す気配は無い。

誰かが操作した訳では無い為、今はただ待機している状態に過ぎない。

エレベータ内の監視カメラもしっかりとループしている為、涼二はそこまで来てようやく一息ついていた。

が 生憎と、潜入はまだ始まったばかりなのだ。

「上に移動する」

『了解、気をつけて』

エレベータ内にある手すりに足を乗せ、天井についている四角い蓋のような扉を開ける。

そこに両手を着いて体をエレベータの上へと持ち上げ、蓋を閉めつつ涼二は上を見上げた。

暗視、望遠機能のついたバイザーには、高層ビルの頂上部分までがしっかりと見えている。

『目的地は四十三階。マークをつけていると思うけど、見えるかな？』

「ああ」

涼二の視界には、標的となる場所が四角くズームアップして表示されている。

その位置を確認し、涼二は左手を頭上 このエレベータの続く最上階へと向けた。

コートの下で、左肩が光を放つ。

「  
」  
ラクス

「  
」  
ラクス  
「Lは水と靈感を司るルーンであり、水を発生させて自由自在に操る力を持っている。」

涼二は発生した水を長くロープのように伸ばし、それを最上部にある鉄骨へと巻き付けた。

そして水を操り、その長さを制御すれば　　涼二の体は、勢いよく上空へと登ってゆく。

「戦闘向けの能力なのに、使いようだねえ」  
「お前だって、Hは本来戦闘用だろう。お前みたいな奇特的な使い方をしている方が珍しい」

電気信号を操り、自らの身体を電子機器と接続するなどと言う誰も想定していないであろう能力の使い方は、細かな制御の可能なスリスだからこそ出来る芸当だ。

そこまで考え、涼二は思考を止める。  
それ以上は、お互い不愉快な過去を思い出すことになるからだ。

バイザー内に映し出されたズーム画面と、通常の視界が徐々に重なってゆく。

目的の四十三階が近付き、涼二は水を縮める速度を落とした。  
緩やかな速度へと変えつつ近場にあった梯子を掴み、涼二は目的の階へと到着する。

バイザーに表示されたマップに、近くを巡回する警備員の姿は無い。

『……気を付けてよ、涼二。正直、この階層のセキュリティは一階とは比べ物にならないよ』

「ああ、分かっている」

人の数は確かに少ないが、その分セキュリティは厚い。

けれど、それはスリスにとっての得意分野だ。人がいないのならば、涼二達の側としてはむしろ都合がいいとも言える。

それでも尚、スリスが気を付けるようにと言ったのは

(……進行スピードを落とさなけりゃならないほど、大量のセキュリティがあるって事か)

製薬会社のセキュリティとしてはあまりにも重すぎるそれに、涼

二は流石に不自然さを感じて黙り込んだ。

ここにいる人物、静崎雨音とは一体何者なのか。

そこまでの嚴重な警備にするほど重要な人材なのか 今回の依

頼の不透明さを含め、涼二は小さく息を吐く。

どうにした所で、ここまで来た以上引き返すことは出来ない。

涼二は小さく息を吐きだしつつ左手をエレベータの重厚なドアへと当て、水を使ってそれを無理やりに押し開けた。

そして

「……」

見えてきた光景に、涼二は思わず沈黙する。

古くから使われてきたものではあるものの、その効果性だけは確かな赤外線センサーの山。

嚴重と言うにも限度があるだろう、と言うレベルのそれに、涼二は緊張を通り越して呆れの息を吐き出していた。

「……………スリス」

「分かってるよ……………つたく、コレ設計した奴は何考えてるんだ」

ぶつぶつと文句が聞こえてくるスピーカーに苦笑しつつ、涼二はゆっくりと進んでゆく。

涼二が通るその一瞬のみ、センサーたちは機能を停止してゆく。無論、あまり怪しまれないようにする為、極力避ける為に涼二は地面を凍らせて伏せるように滑りながら移動しているのだが、それでもそれなりの数をやらねばならないようだ。

『あーもう、こっちには監視カメラに熱源センサーって。これ、件のお嬢様はどうやって移動してるのさ。』

いや、ボクは見取り図持つてるんだし、部屋の中だけで生活できるような設計してるのは知ってるけど』

「俺としては、この動かない警備の方が気になるんだがな」

バイザーに示された進行ルート上、そのゴール地点の直前に立つたまま動かない警備員のマークに、涼二は小さく声を上げる。

それに対し、スリスはどこか疲れたような様子で返答した。

「監視カメラを乗っ取って確かめてみたけど、どうやらお嬢様の護衛みたいだね。二分間だけならこの階層を外部から切り離す事は出来るけど……やれるよね？」

「……了解した」

二分、と涼二は胸中で反芻する。

厳しい部分が無いと言えば嘘になるが　それでも、彼は小さく笑みを浮かべて頷いた。

「俺を誰だと思ってる、スリス」

「……にゅふふ。そりゃあもちろん、ボク等のリーダーである氷室涼二さ。期待してるよ、涼二」

センサーだらけの通路を通り超え、立ち上がりながら涼二は頷く。そしてそれと共に　スリスのルーン能力が、この階層を支配した。

瞬間、涼二は駆ける。

「  
イサ、ラクス  
」

二つのルーンを起動し、前へ。

部屋の前に立つのは二人の護衛。若干広い空間となっているその場所、涼二はそちらへと向けて一直線に駆ける。

「むッ!？」

「何……!？」

警備の二人は涼二の姿に目を見開きながらも、しっかりと戦闘態勢を取っていた。

その姿に、涼二は思わず舌打ちを漏らす。

相手が素人ならばやり易かったのだが

「そう、簡単には行かないか」

呟き、涼二は発した氷の杭を二人へと向けて放つ。

空を裂き、甲高い音を立てて迫る無数の弾丸　それに対し、右

側の警備の男がその手を上げた。

「エイワズアルジズ  
E、Z！」

エイワズ  
Eはイチイの木を表す防御のルーンであり、アルジズ  
Zは仲間を護る際に  
使い手に力を与えるルーンだ。

その力によって広がるのは緑色の障壁　その力に弾かれ、涼二  
の放った弾丸は粉々に砕け散った。

そしてその隣をすり抜けるように、もう一人の男が駆け抜ける。

「<sup>ラド</sup>R、<sup>ダガス</sup>D」

<sup>ラド</sup>Rは乗り物を表す加速のルーン、<sup>ダガス</sup>Dは光を操り攻撃するルーンだ。その二つのルーンの起動と共に、警備の男は両手に光の剣を発生させ、高速で涼二へと迫る。それに対し、涼二は小さく笑みを浮かべた。

「悪くはない……が、相性が悪かったな」

「っ……!？」

瞬間、加速していた男の身体が急激に停止した。

その衝撃に男は目を見開き。そして、その体の周囲に螺旋を描くように一筋の水流が立ち昇る。

凍結と停止の<sup>イサ</sup>エ、水を操る<sup>ラクス</sup>し。それが、涼二の力。故に

「お前達の力は、俺にとってはやり易すぎる」

涼二が左手を握り締めると共に、水流は一気に細められ、男の意識を締め落とした。

若干緩ませてから凍結させ、その身体を完全に拘束する。

(まず一人……)



かつて部下に力の使い方を教えていた頃を思い出し、涼二は小さく苦笑する。

この二人の警備は、攻撃と守りを二人一組でこなす事を役割としていたのだろう。

攻撃側を落とされては、あの二つの防御ルーンには攻撃の手立ては存在しない。

無論、銃などの武器での攻撃は可能だが

「ふっ！」

両手に水を集め、剣の形を作り出す。

その剣は、振るうと同時に刃を一直線に警備員の方へと伸ばした。即座に反応した警備員は再び緑の障壁を発生させるが

「甘い」

「な、ぐあー!？」

水の流れは唐突に逸れて上昇し、天井から跳ね返るような軌道を取って、男の頭を強く打ち据えた。

それと同時に緑の障壁は消失し、涼二の手の中にあつた水の剣は先ほどと同じように相手を気絶させ、拘束する。

倒れた二人の兵の姿に、涼二は小さく息を吐き出していた。

「一枚の面しか防御できないのでは、<sup>ラゲス</sup>Lの攻撃を防ぐ事は難しい。

その変幻自在さが売りなのだから……まあ、もう聞こえてないだろうが」

そう呟いて嘆息する。かつて、教官として部下に能力の使い方を教えていた頃の癖が未だに残っているのだ。

と　それと同時に、涼二の目の前にあつた扉が唐突に開いた。思わず身構えるが、何かが飛び出してくるような気配は無い。

「……スリス」

『あ、ゴメン。驚いた？』

「いや、いい。とりあえず、残り時間は？」

『あんまり無いね。これ以上は干渉がばれそうだから、制御を戻す。さっさと中に入って』

「ああ」

スリスの言葉に従い、涼二は部屋の中へと進入する。

そしてそれと同時に扉が閉まり　次の瞬間、この領域内からスリスの力の気配が消えた。

部屋中にまでセンサー系のセキュリティは存在しないと、とりあえず息を吐く。

「……どなた、ですか？」

「　　っ！」

そして、響き渡った鈴を鳴らすようなその声に、涼二は思

わず息を飲んでいた。

ビルの中だというのに和風の様相に揃えられた部屋の中、わざわざ作られた座敷の上に正座して佇む一人の少女。

青みのかかった長い黒髪、蒼紫色の瞳。そして、藍色の着物。

その姿は、正しく

(……違う、そんな筈は無い。第一、年も違うだろう)

己の頭に浮かんだ考えを消し、涼二は一度、大きく息を吐き出した。

彼女が、かつて死んだ姉の筈が無い。見た目は似ていても、背格好が合わないのだから。

だから違うのだと、そう己の言い聞かせ　　涼二はその少女、静崎雨音へと向かって声を上げた。

「静崎雨音、だな？」

「は、はい」

驚いてはいるものの、怯えた様子は無い。

そんな姿に涼二は思わず疑問を抱きつつも話を続けた。

「これから俺に付いて来て貰う。反論は認めない、分かったか？」

「あら。分かりました」

「……」

「……」

あまりにもあっさりと言われた言葉に、思わず言葉を失う。  
数秒間の沈黙の後、涼二はしばし虚空を見上げ、それから再び声を上げた。

「ええと、だな。意味、分かってるのか？」

「はい、貴方に付いて行けばよろしいのですよね？」

「いや、ええと……まあいいか」

『誘拐です』などと堂々と説明するのも憚られ、涼二は小さく嘆息しながら、部屋の窓の方へと進んでいった。

首を傾げながらも素直に付いて来る雨音の姿にしばし葛藤しつつ、その指先に小さな氷の刃を作り出す。

高層階だからだろう。嵌め殺しになってる窓を円形に切り取り、涼二は雨音へと向けて手を差し伸べる。

「掴まれ」

「え……」

「早くしろ」

「で、でも、私」

雨音の様子に、涼二は思わず眉根を寄せる。

その様子は、今更誘拐されそうになっている事実に気付いたとか、涼二が窓から飛び降りようとしている事に恐怖を感じたとか、そういう事ともまた違う。

どこか、その手に触れる事を躊躇っているような、そんな風情だった。潔癖症を疑うような風情だが、彼女も涼二も手袋をしているため、肌が触れ合うような事は無い。それでも視線を右往左往させて迷う彼女に嘆息し、涼二はその手を握って引き寄せた。

「あ……っ」

「冷たいかもしれないが、しっかり捕まっている」

言いつつ、涼二はLのルーンを発動させた。

発生した水のロープが、抱き寄せた雨音の身体を縛り付けて固定する。

そしてもう一つの先端を、対岸にあるビルの屋上へと巻き付け

涼二は、静崎製薬のビルより飛び出した。

『涼二！ 到着地点は見えてるよね！？』

「ああ、大丈夫だ」

対岸にあるビルはいまだ建設途中の建物だ。

昼間の内に侵入していた涼二は、そのの一室に衝撃吸収用のマットを敷いておいた。

無論、それだけで勢いを殺せる訳では無いが

「水よ」

全身を水の球体で包み込んでしまえば、問題は無い。  
あるとすれば、唐突に水に包まれたおかげで、雨音が濡れかけている事ぐらいだろう。

予め説明しておくべきだったかと肩を竦め　涼二は、そのビルの一室へと突っ込んだ。

衝撃を殺すと同時に水が弾け、びしょ濡れの二人がその場に立つ。

「けほっ、けほっ……」

「……済まん、大丈夫か？」

「あ、はい……心配して下さって、ありがとうございます」

柔らかい笑顔を向けられ、涼二は再び沈黙した。

誘拐された事やら、唐突に濡れかけた事やら……色々と怒られる要素はあれど、感謝されるような要素は無い筈だと言っのに。

水に濡れた為か寒さに震えている様子の彼女に小さく嘆息し、涼二は左腕を掲げた。

「集え」

「え……わあ」

二人の身体を濡らしていた水が、まるで無重力空間で浮き上がったかのように染み出し、宙に浮遊する。

それらは周囲を漂うと、弧を描きながら涼二の左手の中へと収束し

そして、消滅した。

身体を冷やす水分は無くなり、とりあえずの暖かさが身体を包む。そしてそんな光景に感動したかのように、雨音は胸の前で手を組んで声を上げた。

「貴方様は、魔法使いなのですね」

「は……？ いや、ただのルーン能力だろう」

「ルーン、ですか？」

「……まさか、知らないのか？」

「はい、存じておりませんが」

今や小学生ですら知っている言葉を知らない、この少女。

からかっている様子も無く、ただただ純粹に目を輝かせながら聞いてくる彼女に、涼二は思わず頬を引き攣らせていた。

（ 箱入りってレベルじゃねーぞ！？ ）

胸中の思いはこれである。

先ほどからの態度は、狙っていたのでも何でもなく、単なる天然の結果である。今に至って、涼二はようやく理解していた。頭痛を感じて嘆息し、唐突に積もってきた疲労に辟易しつつも、この場から離れなければならぬ事を思い出す。

「……とりあえず、付いて来い。色々説明してやるから」

「まあ」

「……今度は何だ？」

ポツと顔を赤らめて頬に手を当てる雨音に、何か嫌な予感を感じて涼二は尋ねる。

それに対し、返って来たのは

「愛の逃避行、なのですね」

「……いや、もう何でもいいや」

緊迫の潜入から一転、何処までも緊張感の無いお嬢様を連れ、涼二は着地地点となったビルから出てゆく。

逃走用のバイクは、ちょうどこの真下に置かれていた。





「最近の乗り物は凄いですね、水の上を走れるなんて」  
「……いや、これは俺が特殊なだけだからな、どう見ても」

氷面スリップ防止加工をしたバイクで、涼二は海面を凍結させて作った氷の道の上を駆け抜けていた。

両脇は海面である為、下手をすればすぐに海へと落下してしまうが、その辺りは慣れたものである。

バイザーはそのまま風除けにし、纏っていたコートはやたら目立つ格好をしている雨音に預け、涼二は自分達が本拠地としている場所へと向かっていた。

(しかし……)

自分の腰に回された腕を見て、涼二は視線を細める。

何を考えているのか分からないほどに天然さを発揮する雨音は、それでも誰かに触れると言う行為だけは忌避しているようだったのだ。着物なのでバイクに横座りしか出来ず、しっかり掴まっているようにと説明したのだが、従順であるはずの彼女は何故かそれだけは中々聞き入れようとしなかった。一度乗せた後では、それほど気にせずやっているようではあったが。

(一体何なんだろうな、コイツは)

あまりにも嚴重なセキュリティに、ルーン能力を持った二人の護衛。

手練と言うほどではなかったが、それでも一般人相手なら比較にならないほどの力を持った二人　アレを雇うには、それなりの金が必要となる。

それだけの価値がこの少女にあるのだろうか、と涼二はただただ疑問を反芻していた。

果たして彼女は何者なのか、と。

「……っつ」

バイザーの暗視機能で道筋を確認し、やがて見えてきた水没都市へと向かう。

海面上昇により水没した東京　そこそが、涼二達が本拠地としている場所だった。

水没したビルとビルの合間を抜け、静謐なコンクリートの木々の間

にエンジン音を響かせてゆく。

消音設計とは言え、何も音が存在しない場所では、十分に響き渡ってしまふものなのだ。

無論、人がいる訳では無いので、それも大した問題では無いが。

やがて見えてきたビル　　その壁に開いた穴へと、涼二は凍

らせた道を繋いで内部へと入り込んだ。

浅く水の溜まった床に降り立ち、バイクを適当に停める。

「ここが目的地なのですか？」

「いや……もう少しだ。付いて来い」

「あら、そうでしたか」

何の疑問も抱かずに付いて来る雨音　　その姿に、涼二の方が

疑問を覚えつつも、目的地へと向かって歩き出す。

向かう先は、この建物の階段……その、下りの方面だ。

そちらへと歩いてゆく涼二の姿に、雨音は首を傾げる。

「泳ぎの練習ですか？」

「皮肉じゃなくて素で言ってる所が恐ろしいな、お前……えーと、  
とにかく見れば分かる。」<sup>ラクス</sup>

嘆息しつつ、涼二は左肩に刻まれているルーンを発動させた。

そしてそれと同時に、階段を埋め尽くしていた大量の水が渦を巻き、それが奥へ奥へと押し出されてゆく。

すっかりと水の引いた階段　　それを見て、雨音が感嘆の声を上

げた。

「凄いですね……ルーン能力、という魔法ですか？」

「いや、だから魔法ではないと……後で説明するから、ちょっと黙っててくれ」

「はい、楽しみにしておりますね」

すっかりとペースを崩されつつも、涼二は雨音を連れ立って階段を下りてゆく。

必要な道筋のみ水が押し退けられ、滝の裏側にでも入り込んだかのように続いてゆく通路。

そんな道を進み、海底と化した東京の道路へと足を踏み入れる。

「わあ……綺麗ですね」

「……まあ、確かにな」

天に昇る満月の光が、海底まで僅かに差し込んでくる。

十五年放置されたこの場所は、汚れを海水に洗い流され、さらに海水浄化計画などの後押しもあり、すっかりと透き通った水を湛えている。

昼間だったら、透き通った海と泳ぐ魚達を見る事が出来ただろう。ともあれ、この場所で空を見上げていても意味は無い。小さく肩を竦め、涼二は再び歩き出した。

光があまり入ってこないこの場所は、夜では殆ど闇に包まれているが、バイザーを装着した涼二にはしっかりと見通す事が出来る。

彼は雨音の手を引き、この空気のトンネルと化した海底を進んで行

った。

そして、一つの建物へと辿り着く。

「ここだ、入るぞ」

「はい」

開きつばなしになった二重の自動ドアを潜り抜ければ、ロビーのようにも見える広い空間。

涼二はその右奥にある階段へと空気の道を繋ぎ、そちらへと向かって進んでゆく。

ここは、大災害の直前に完成した高級マンション。

涼二とスリス、そしてもう一人 たった三人だけのグループ、『ニヴルヘイム』はここを本拠地としていたのだ。

階段をいくつか登り、進んで行けば そこは、今までの暗闇が嘘であったかのように明るく照らし出されていた。

「あら、電気が……」

「スリスの奴、わざわざ出迎えとはな」

本来ならばやる必要のない演出に、涼二は小さく苦笑を漏らす。派手好きのスリスの事、わざわざ待ち構えていたのだろう。

まあ、雨音がある以上はエレベータを使う必要があるのだし、電気を通す必要があったのは確かだが。

それにしても、廊下の照明全開はやりすぎだろう、と涼二は頭を掻きつつ廊下を進む。

と エレベーターホールとなっているその場所に、彼はある見知った姿を発見した。

そこにいたのは、金色の毛並みを持つ狼

「ガルム！ もう戻ってきていたのか」

「わあ……綺麗なわんちゃんですね。ここで飼っているのですか」

『……知らない以上は仕方ないと思うが、私をただの犬と思うのも中々豪胆な少女だな』

「……え？」

突如として響いた声に、雨音はきょとんと目を見開き、左右へと視線を巡らせた。

そんな様子に、涼二は思わず笑みを零す。

「今のはその狼だ、雨音」

「え……このわんちゃんが？」

『だから犬ではないと……いや、いい。元の姿に戻ろう』

エラス  
『』

嘆息が狼の口から漏れ、そしてそれと共に、その胸元に刻まれたルーンが輝く。

エラス  
Ehは、馬と変化を表すルーン。その力は、己の姿を獣へと変化させると言つもの。

つまり

「これでよろしいかな、お嬢さん」

「あら……わんちゃんが人間に。最近の動物は変わってるんですね」  
「……涼二よ」  
「こういう奴なんだ、これは」

人間の姿になった狼　　否、今まで狼へと変化していた人間であるガルムは、雨音の物言いに眉根を寄せて涼二へと視線を向ける。筋骨隆々とした偉丈夫であり、肥大した上半身の筋肉は惜しげもなく晒されている。

下半身はちゃんと黒いズボンを纏っていたが、その下にも大量の筋肉が詰まっている事は傍目からも明らかだった。

短く刈り込んだ金髪に、彫りの深い精悍な顔つき。口周りを覆う髭も、その締まった顔つきをさらに印象深くする効果があった。

「やれやれ……私はガルム・グレイスフィン。元々人間で、ルーン能力で獣の姿へと変化していただけだ。

君に危害を与えるつもりは無いので、安心して貰いたい」

「はい、ガルム様ですね。私は静崎雨音と申します……以後、お見知り置きを」

「成程……中々に、肝の据わったお嬢さんだ」

「状況を理解していないだけだと思うがな」

感心した様子 of ガルムに、涼二は小さく嘆息を漏らす。

彼には、未だに彼女が自分の置かれた状況を理解しているのか、さっぱり分からなかったのだ。

どちらにしろ、大人しくしてくれていると言うのであれば助かるのだし、無理に理解してもらおう必要もない……とは思っているのだが。



「それで、貴方は？」

「ん……ああ、そういえば名乗っていなかったか」

「涼二よ……お前は少し、女性の扱いを覚えたほうがいいぞ？」

「標的に対して何言ってるんだ……」  
「たたく。俺の名は氷室涼二だ。状況を理解してるのかは知らんが、しばらくは俺達と共に居て貰うぞ？」

「はい、涼二様」

従順すぎて何を考えているのかさっぱり分からない……と、涼二は胸中で呻く。

ニコニコとした笑顔で頷いてくる雨音に対してどう反応したものと悩みつつ、彼は一度息を吐き出してから声を上げた。

「……とりあえず、上に行くぞ。スリスを待たせると何を言い出すか」

「ふむ、そうだな。私も上着を取って来たい所だ」

「惜しげもなく見せびらかしといて何言ってるやがる」

ぺしんとガルムの大胸筋をはたき、涼二は小さく嘆息する。

出会う前までは様々な格闘技で肉体を磨き、果てはボディビルダーまでやっていたと言うガルム。

その為、何かにつけて筋肉を見せびらかしたがるその性癖は、涼二も少々辟易するものであった。

基本的に害は無いので、あまり気にしないようにはしているのだが、と

「こら、その二人！ いい加減昇ってきてよ！ わざわざスタンバってるのに！」

「やっぱりやってやがったかこのバカは……仕方ない、行くぞ」

建物内の放送機器を使って声を上げたスリスに対して嘆息し涼二は、ようやくエレベータのボタンを押したのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

最上階より、三つ下の階。

その中途半端な場所に居を構えたのは、出来るだけ目立たない位置にしたかったと言うのがある。

この場所を発見した頃の事を思い出し、涼二は小さく苦笑を浮かべていた。

僅か数ヶ月でここが居住可能なレベルになったのは、偏に無駄と言うレベルのスリスによる努力があったからだろう。

この場所は、涼二、ガルト、スリスの三人が本拠地とする場所

「俺達、ニヴルヘイムの本拠地……の、一つだな」

「放棄可能な場所ではあるが……居心地はいいな」

「そうなのですか……」

目を輝かせる雨音に、涼二は見えないように肩を竦めていた。

誘拐してきた人物を連れ込んだ以上、解放した後はここを放棄しなくてはならないだろう。

けれど、それでも少し惜しいと思ってしまふ程度には、ここは涼二たちにとって憩いの場所となっていたのだ。

そんな高層マンションの最上階付近、放棄され、誰にも使われなかった筈の部屋。

廊下の奥にあるその部屋へと続いていた暗闇は、一つ一つ点灯する電球によって払われて行く。

「……わざわざ演出しやがって、あのバカ」

嘆息しつつも、涼二は二人を連れてその部屋へと歩いてゆく。そしてあと数メートルと言う位置まで近づいたその時、目的の部屋の扉は勝手に開いた。その様子を見た雨音が、ぽつりと呟く。

「ところで、何で銀が速いのでしょうか？」

「は……？」

「……クイックシルバーと言いたいのか？」

「いえ、ポルターガイストさんですか？」

「お前の思考回路が分からん……」

出会ってからわずか数時間ではあるが、涼二はこの少女の扱い方を徐々に心得始めていた。

要するに、なるたけ話は聞き流すようにする、という事である。

生来の性質から、ついつい突っ込んでしまうのだが。

と　開いた扉の奥から、唐突に声が響き渡った。

「はいはい！　お待ちしてたよ、静崎雨音ちゃん」

「あら、普通に声が……妖怪さんだったのですね」

「いやいやいや、人間だから。って言うかポルターガイストからどうしてそこに飛んだのさ」

苦笑の混じる声と共に、ぱちんと指を鳴らす音が響き渡る。

そしてそれと共に、真っ暗だった部屋の中へ、順々に光が灯って行った。

その奥にあるのは小さな机と、そこに乗っている複数のノートパソコン。

そして　そこに腰かける、一人の少女の姿だった。

だぼついたパーカーとジャージのズボンと言う何ともやる気のない格好をした小柄な少女は、赤の混じった明るいブラウンの髪と碧玉の瞳を持つ整った容姿に笑みを浮かべ、声を上げる。

「こんにちは、雨音さん。ボクは降霧スリス。ニヴルヘイムの情報担当だよ。よろしく」

「まあ、よろしくお願ひしますスリス様」

「様って言うのはちよつとなあ……せめて『さん』ぐらいで」

「そうですか？　では、そのように……あら？」

深々と礼をしていた雨音は、そんなスリスの言葉に顔を上げ

小さく、眉根を寄せた。

スリスの視線、その若干外れた焦点に、彼女は違和感を感じていたのだ。

スリスが向けている視線は少しだけ外れた場所へと収束しており、正面からでは少し違和感を感じてしまう。

そんな疑問の表情に気付き、スリスは小さく苦笑を浮かべて見せた。

「あはは。おかしいって気づかれちゃうか」

「え、ええ……その、もしかして」

「うん、ボクは目が見えてないよ」

冗談めかして、スリスは笑う。

その言葉は決して軽い物ではなく　けれど、まるで血液型の話でもするかのようにあっさりど、スリスはその言葉を告げていた。しかし、そんな言葉に、雨音は再び首を傾げる。

「でも……私の事を、しっかりと見ているように思えますけど」  
「ああ、それはあれだ」

言つて、バイザーを外していた涼二が部屋の中へと入ってゆき、スリスの横顔を示す。  
正確には、その眼の下に張られた逆三角形のシールを。  
まだ若干薄暗い為にあまり見えなかったのか、雨音は部屋の中に入つてきて、スリスに少し近づいて観察した。

「……ただの、貼物に見えますけれど？」  
「あー。これね、警察とかが調査用に使うシール型カメラなんだ。  
ボクはHのルーンで電気や電波を操つて、この映像を脳で直接見  
てるのさ。だからまあ、視線の焦点が合わないのは勘弁して欲しい  
かな」

「成程……凄いですね、ルーン能力と言う魔法は」

そんな雨音の言葉に、ぴくりとスリスの頬が引き攣った。  
二人のそんな様子に対し、涼二は小さく嘆息を漏らす。

どうやら、スリスは二人の会話音声までは拾っていなかったらしい。

「えーと……涼二？」

「スリス、お前説明してやれ」

「えー！？ ちょっと、こんな異世界に飛ばされてきたレベルの世間知らずだったなんて、ボク知らないよ！？」

「何だその訳の分からん例えは……」

スリスの言葉に嘆息しつつ、涼二は適当なソファに座る。

部屋の奥のほうでは、ガラムがその上半身にワイシャツを纏っている所だった。

何かにつけて上着を破る彼は、いくつも上着を常備していたりするのだが 閑話休題。

呻きながら頭を掻いていたスリスは、ふと思い出したように顔を上げ、雨音へ 否、全員へと向かって言い放った。

「って言うか、そもそも雨音ちゃんもルーン能力は持つてる筈ですよ。記録では能力を持つてるっている風に書かれてたよ？」

雨音ちゃんも、何か特殊な力持つてるんじゃないの？」

「何……？」

「力、ですか」

そんなスリスの言葉に、ソファへと身体を沈ませていた涼二が身体を起き上がらせる。

対し、雨音は少々悩むような仕草と共に周囲を見回し 花瓶に差しであった一輪の薔薇の方へと視線を向けた。そして、彼女は静かに声を上げる。

「……確かに、あります。けど……皆さんのように、美しくて綺麗な力ではありません」

「種類は同じはずだろう……何故そうも己の力を卑下しているのだ、雨音君？」

「この力は……おぞましい力だから、です」

眩き、雨音は視線を向けていた花瓶へと近付いた。

そして、その白い手袋を外し、白魚のように華奢な指を一輪の花へと触れさせる。その、刹那。

「……！」

「これは……っ！」

愕然とした様子で涼二は立ち上がり、ガラムも驚きの声を上げる。雨音が触れた、その手の中で……その花は、唐突に瑞々しさを失い、枯れ落ちてしまったのだ。

まるで、命を喰らい尽くされたかのように

「……私の力は、素肌で触れたものの命を吸い取ってしまう力です。貴方達のように綺麗な力では……ありません」

「……いや、同じだよ、雨音ちゃん。その力は多分だけど、Sの逆位置ソウバルの力だ」

スリスの言い放った言葉に納得を抱きつつ、涼二は同時に戦慄を



覚えていた。

雨音を連れ去ってからここに至るまで、肌が触れ合ってしまうような場面はいくつもあった。

彼女は、ずっと直接触れないように気をつけていたのだろう。

もしも、彼女に害意があったならば

「ッ……迂闊だった、か」

ソウイル  
Sとは、太陽と生命を表すルーン。

癒しの力という、ルーンの中でも最も優しい力を持つが……逆位置と呼ばれる効果を反転させたルーンでは、相手の力を奪ってしまうライフドレイン能力と化す。

下調べが足りなかった　ここにいる三人、全員がそれを痛感していた。

最も気にしているのはスリスだろう。が、それでも彼女は、無理矢理己を納得させるように頷くと、手袋を嵌める雨音へと向かって声を上げた。

「でも、おかしい……ソウイルSに逆位置は存在しない筈なのに。どこに痣があるの？」

「痣、ですか？」

「そうそう。ある筈だよ。ルーン能力を持つてるなら、皆何処かしらに痣を持つてる筈だから」

「いえ、あの……心当たりがありません。傷痕のようなものならありますけど……」

そしてその言葉に、三人は今度こそ絶句していた。信じられない、といった三人分の視線を受け、雨音はうるたえながら胸元に手を寄せる。

「え、ええと……どうかしましたか？」

「ちょ……ちょっと、見せてもらっていい？ 隣の部屋でやるから」

「あ、はい。分かりました」

雨音に直接触れないように気をつけながら、スリスは雨音の背中を押して隣の部屋へと向かってゆく。

その二人の姿を見送り、ドアの閉まる音が響き渡った後、涼二とガラムは二人してその硬直した視線をぶつけ合った。

「 始祖ルーン」

どちらが呟いた言葉だったかは、二人にも判別が付けられなかった。

ただ、そこには 深い畏怖のようなものが、込められていたのだ。



「お待たせー」

「……スリス」

響いた声に、涼二は隣の部屋から戻ってきたスリスへと視線を向ける。

彼女はどこか疲れた様子で肩を落とし、近くにあったソファへと倒れるように身体を沈めた。

そしてその後ろから、静々と、少しだけ顔を赤らめた雨音が続く。

「触ったら一発アウトの人のチェックをするのって、ホント神経使うよ……」

「普通の服装だったらまだしも、着物だから……腕とかでもない限り、俺達が見るわけにもいかんだろう」

「まあ確かに、おへその上辺りだったけどさあ……あ、雨音ちゃん

も適当に座っていいよ」

「はい、ありがとうございます」

寝転がったまま足をパタパタと揺らしつつスリスが言い放った言葉に、雨音は小さく微笑みながら近場の椅子へと腰掛けた。

その洗練された立ち振る舞いに、涼二は小さく肩を竦める。椅子よりも座敷が似合うな、などと思ってしまったのだ。今はそんな事を気にしている場合では無いが。

「さて……それで、どうだったんだ？」

「……最悪な事に、大当たりだよ」

「そうか……」

スリスの言葉を受け、ガルムが口元に手を当てて沈黙する。

涼二も、また同じように沈痛な表情を浮かべていた。

自分達が、不用意に危険な領域へと足を踏み入れてしまっていた事に、今更ながら気づかされたのだ。

そんな事実にも、スリスは落ち込んだ声音で声を上げる。

「……ゴメン、二人とも。ボクがすっかり調べなかったから」

「いや、スリス。君に責任は無いと私は思うぞ？」

「ああ。データ化された資料だったら、お前が見逃す筈がない……依頼主の方はこれを知っていたのかどうか、つてのは気になる所だな」

「ええと……ごめんなさい、私のせいで……」

「あ、いや。雨音ちゃんは何も悪くないよ。能力を持ってしまっ

は、どうした所で偶然なんだから」

雨音の言葉に苦笑し、スリスは身体を起こした。  
焦点の合わぬ瞳を向け、その細い肩を竦める。

「『能力を持たなければ良かった』なんて、ここにいる人間は誰もが考えた事があるさ。けど、こればかりはどうしようもない。だから、これからどうするか考えた方が建設的だよ」

「……だな。落ち込んでたお前が言つのもどうかとは思つが」  
「ぶー、涼二のいけずー」

唇を尖らせるスリスに苦笑しつつ、涼二はその佇まいを直した。  
そして右側に座るスリス、左側に座るガルム、正面に座る雨音へと順々に視線を巡らせて行く。

「さて……始祖ルーンの所有者って言うんなら、説明しといた方がいいと思うんだが」

「そうだねえ。それに、ちょっとおかしいと思わない、二人とも？」  
「うむ。本来、始祖ルーンにもSソウイルにも逆位置は存在しない筈だからな」

「そう……ボクが見た限りでも、雨音ちゃんのルーンは逆位置にはなっていないかった」

その言葉に、三人の視線が雨音の方へと集中する。

その集中砲火を受け、若干恥ずかしそうに身をよじる彼女に対し、

涼二は冷静に視線を細めていた。

ルーン能力の知識を持たない始祖ルーンの持ち主。明らかに、能力に関する知識を与えられずに育てられてきた形跡があるという事だ。

どうにも、きな臭い。涼二は、そう胸中で呟く。

得体の知れないの依頼主も、あの静岡製薬と言う会社も。

何か厄介な出来事に巻き込まれているような　　そんな気配を感じ、涼二は思わず己の腕を擦っていた。

「え、えと……どういう、事なんでしょう？」

知識のない雨音は、事態を掴めず首を傾げる。

そんな様子に三人は視線を見合わせ、共に小さく肩を竦めた。とりあえず、説明する必要があるだろう、と。

「そうだね……じゃ、ルーン能力から説明しようか」

「あ、はい」

苦笑交じりの表情で、スリスが真っ先に声を上げる。

その言葉に対して素直に頷いてくる雨音に満足しつつ、スリスは続けた。

「もう何度か、ボク達の力は見ているから分かると思うけど……ルーン能力って言うのは、ボク達の操っている、本来人には有らざる

力の事。

涼二が何も無い所から水や氷を出したり、ガルムのおっちゃんに狼に変身したり……これの事を、ルーン能力って呼ぶ。言っておくけど、魔法じゃないよ？」

「成程、そうだったのですか……」

その『そうだったのですか』は前の言葉に対してか、後ろの言葉に対してか。

そんな益体もない事を考えつつ、涼二は小さく嘆息する。

とりあえず魔法ではないという事で納得はしてくれたみたいだが、果たして全て理解してもらえるのだろうか、と。

「で、この能力には二十四の種類があつて、一人に対して最大で三つまで刻まれるんだ。

例えば、ボクならばH、A、Pハガラスアンサズパース」

言つて、スリスは己の手の甲を示す。

その両手の甲に刻まれた文字　直線で描かれた記号の痣こそが、彼女のルーン能力を表すものだった。

左手の甲にあるのが、嵐と雹を表す破壊のルーン、H。ハガラスそして、右手の甲にあるのが秘密を表す探索のルーン、P。パースだ。

「ちなみにもう一つは背中にあるけど、今見せろつて言つのはちよつと勘弁ね。で、雨音ちゃんのおへその辺りにも、同じようなものが刻まれていたでしょ？」

「あ、はい……でも、私のはこんな浮かび上がったようなものじゃ



なくて、傷痕みたいな溝になってましたけど……」

「そう、それが始祖ルーンって言う特別なルーンの証なんだけど……  
…とりあえず、それは後で説明するね」

今問題となっっている始祖ルーンだが、ルーン能力に関する基礎知識がなければ理解しづらい話と言える。

それゆえの後回しだろう、と納得しつつ、涼二は小さく肩を竦めながらスリスに続いた。

「ルーン能力には強さのレベルが存在する。弱い方から順に、<sup>ヒューマン</sup>人間級、<sup>フリーク</sup>人外級、<sup>テイター</sup>巨人級、<sup>ディザスター</sup>災害級、そして神話級だ。

これには、刻まれたルーンの大きさと、その使い手の持つ魂の強さによって変化する……まあ、能力の使い方や組み合わせの上手さでも変化するがな」

「魂……ですか？」

「正確には、魂の放つ光……一般には『プラーナ』と呼ばれる力だ。刻まれたルーンが大きく、そしてこのプラーナの量が大きいほど強力な力を持つとされる」

「靈的次元の観測なんて、ルーン能力が広まってからようやく進歩したんだけどねえ」

「死んだ人間の体重が、死ぬ前より僅かに軽くなるという話がある。僅か21グラムの変化であり、そもそもその話自体も眉唾ではあるが、仮に21グラムと言う質量がエネルギーに変換されるとしたら、どれほどの物になるだろうか。」

それは、誰もがまともに取り合う事の無い研究だった……あの、巨大な隕石が飛来するまでは。

「君も、流石に隕石の話は知っているだろう」

「あ、はい……それは、流石に」

「あの隕石は可燃性であった……しかし、現代の科学ではそれがどのような仕組みで燃焼しているのかの判別がつけられなかったのだ。物理学的な燃焼とは違う。しかし、確かに熱を発している。

国内が落ち着いてからずっと研究が続けられてきたが、その正体を掴む事は中々上手く行かなかつた……あの隕石の放つエネルギーの波動が、ルーン能力者の放つ輝きと同じものであると発見されるまではね」

言いつつ、ガルムはその腕に刻まれたルーンを発光させた。

まるでそのルーンは溝であり、体の内側で光り輝くものが漏れ出しているかのよう。

これこそがプラーナと呼ばれるエネルギーであり、ルーン能力者が放つ力の原動力となるものだ。

「以来、プラーナの観測技術は爆発的に高まった……あの隕石による発電も、そのおかげだろう」

「そのような背景があつたのですか……では、ガルム様達は、先程の位階で言つとどの程度の力を持っているのです？」

雨音のその疑問、当然と言えば当然なその言葉に、三人は目を見合わせて小さく苦笑を浮かべていた。

そんな様子に、雨音は首を傾げる。

「あの、もしかして聞いてはならない事だったのでしょか……？」  
「いや、まあ……戦う相手には隠しておくべき事だが、別に言ったからどうこうなるってモノでもない。ただ  
「ボクたち……みんな、神話級だからね」  
「まあ……！」

両手を口に当てて驚きを表現する雨音に、涼二は小さく苦笑じみた笑みを浮かべる。  
驚くのも無理はない事ではあるが、彼女がその驚き方をするのは少々滑稽な事だ。  
何故なら

「言っておくが、お前も神話級だぞ？」  
「え？ 私が、ですか？」  
「ああ。現在確認されている始祖ルーン保持者は、全て神話級の力を持っている。能力を発動せずにアレだけの力を使ってるんなら、十分にそれだけの力があるだろうさ」

涼二は先程の光景を思い出す。  
現実味の無い、一瞬で枯れ落ちてゆく花の姿を。  
ルーン能力の使い手だからこそ分かる感覚ではあるが、雨音はその時能力を発動していなかった。  
つまり、彼女は常時展開されている微弱な能力のみでアレだけの力を発揮したのだ。

(いや)

それは、いくら始祖ルーンの持ち主だったと言っても不自然である。

それは最早、強力を乗り越して制御不能と言うレベルではないか

考え込もうとした瞬間、スリスの抗議するような視線が突き刺さり、涼二は小さく肩を竦めて視線を戻した。

「……まあ、一般に知られているルーン能力に関してはこんな所だ。そして、ここからがお前に関する話になる」

「先程から話に上がっている、その始祖ルーンと言う力の事ですね？」

「ああ。お前の持っているそれ……痣ではなく、直接刻まれた傷痕のように残るそれは、全てのルーンの元になったものとされている」

涼二の言葉を聞き、雨音はそつと自分の腹の辺りを手で触れる。それは、無意識の動作だっただろう。その下に刻まれているSのルーンは、本来人を助ける力を持つ筈なのだが、どうして、逆位置の存在しない始祖ルーンがそんな事になっているのか。

「始祖ルーンに関しては未だに謎が多い。そもそもルーン能力自体、能力発動のプロセスは明らかになってきてはいるものの、どうして生まれたのか、どうやって生まれたのかは分かっていない」

「……そんな力を、皆さん使ってらっしゃるのですか？」

「まー、便利には変わらないからねえ。ボクなんて、能力使わないと何も見えないし」

肩を竦め、スリスはそう呟く。

軽く流せるような内容ではなかったが、本人が気にしない以上は気にしない、と言うのが涼二やガルムの出している結論だった。

雨音の方は少々挙動不審気味に視線を右往左往させていたが、二人が何を言わないのを見て、黙っている事に決めたようだ。

小さく嘆息し、涼二は続ける。

「とにかく、一つだけ言える事は、この能力が15年前の大災害の日の後から発生した事。そしてその日、始祖ルーンの使い手が生まれた事だ」

「はぁ……詳しいんですね」

「まあ、な」

話を拒むように、涼二は視線を逸らす。

彼にとって触れられない事柄の一つ　スリスでそんな空気に慣れていたのか、雨音はそれに関して追及してくる事は無かった。コホン、と一度咳払いをし、涼二は視線を戻す。

「始祖ルーンの使い手は非常に貴重であり、しかもその能力は他の能力者の追隨を許さない。

ユグドラシルまでもが、何が何でも手に入れようとしているような貴重な存在だ……まず、お前は自分自身がそういう存在である事を理解し、自覚しろ」

「は、はい」

「そして、そういう存在を誘拐してきた事が、どれぐらいリスクの

高い行為であるか……俺達が気にしているのは、そついう事だ」

その言葉に、雨音ははつと目を見開く。

とりあえず理解して貰えたかと、涼二は小さく息を吐き

「……私、誘拐されていたのですね」

『今更そこかッ！？』

スリスと同時に、半ば絶叫のようなツツコミを叫んでいた。吹き出すのをこらえている様子のガルムを尻目に、スリスが目を輝かせながら声を上げる。

「やばいよ涼二、この子真正だ！」

「何でお前はやたらと嬉しそうな顔してるんだ！？ あと雨音、お前は今までの話で何を聞いていた！？」

「魔法じゃない、と……」

「誤認識を直せただけかッ！」

頭を掻き毟り、思わず地団太を踏む。

今までの話が無駄だったのか、と叫び声を上げようとし

「後は、ルーン能力の詳細や仕組み、プラーナに関して、それと始祖ルーン……」

「そつちを先に言え……」

きちんと全て理解していたと言う事を告げられ、涼二はがっくりと倒れるようにソファへと体を戻していた。

ぎしりとスプリングが悲鳴を上げるが、お構い無しである。

彼は、ここに来てようやく彼女がどういう性格なのかを掴んでいた。要するに、色々とズレているのだ。

深い溜め息を吐き出し、このまま眠ってしまおうかと思うほどに感じる疲労感を何とかしつつ、涼二は半ば呻くような声を上げる。

「……とりあえず、お前さんは世界的に見ても重要人物って事だ。

扱いが非常に難しい。ただの人質で済むとは到底思えん」

「そうですね……今なら、涼二様のお言葉も理解できます」

「ああ、だから、とりあえずはまた調査だ……今日はもう休んでいいが、明日になったら頼むぞ、スリス」

「はい」

調べるべき事はいくらでもあるだろう。

眠気が登ってくる頭の中、しかし涼二の思考の芯は何処までも鋭利に冷え切っていた。

ユグドラシルに協力している製薬企業が、始祖ルーン所持者の存在をひた隠しにしていた事。

その始祖ルーンの持ち主の能力が、何故か逆位置による能力発動を常時展開していると言う事。

そして、これらの事実関係を、今回の以来を持ち掛けてきた人物が知っていたのかどうかと言う事。

情報が足りない　それが、今の涼二の偽らざる感想だった。

かつて喪った姉の姿に良く似たこの少女  
彼女に隠された秘密とは、一体何なのか。

無論、涼二も深入りは避けるべきであるという事は分かっている。けれど、完全に無関係でいられると思うほど、涼二もおめでたい性格をしている訳ではないのだ。

「  
っ」

僅かに、頭痛を感じる。

寝室の方へと歩いてゆく雨音とスリスの姿を見送り、涼二は静かに天を仰いでいた。

危険を抱えてしまったのは、事実。けれどこれは

「チャンス、かもしれないな」

「……！」

「ふ……その様子では、お前もそう考えていたか」

深いバリトンの効いた声に、涼二は方目だけを開いて肩を竦める。ガラムの言葉は、何処までも凶星だった。それ故に、これは一つのチャンスであるとも言える。始祖ルーンの持ち主を利用す機会など、そうそう存在しはしない。故に、彼女は切り札となりえる。

「……ま、今後の展開次第か。とりあえず、今日はもう遅い。そろそろ休もうぜ？」



「ああ、そうだな」

靴を脱ぎ、ソファの上に寝転がる。

隣の部屋辺りを使ってもよいのだが、流石にもう面倒だったのだ。

コートを己の上にかけて、瞳を閉じ　　涼二は一度だけ、雨音の姿を夢想する。

その姿は　　かつて、あの大災害の日に殺された姉と、何処までも重なっていた。

## 01-6：失ったものへの想い

高級マンションの最上階      ここには、広いスパのような施設が備えられていた。

無論、管理する人間はいない為、正式に稼働している訳ではない。だが、水泳用のプールだけはその役目を果たしていた。尤も、水道管もガス管も働いていない為、ここに水を満たす方法は一つしかないのだが。

「<sup>ラクス</sup>ッ、つと」

涼二の左肩、そこに刻まれたルーンが蒼い輝きを放ち、それと共に生まれた大量の水が広いプールを一気に満たした。彼の力ならば水温も50    までならば調節できる為、大体35    程度の温度で生成している。

満たされた頃には、競泳用プールと同じ程度の温度になっているこ

とだろう。

そんな滝のような水の流れをぼんやりと眺めつつ、涼二は準備運動を開始する。

そんな背中へと向けて、背後から近付いた彼は声をかけた。

「精が出るな、涼二」

「ガラム……まあ、鍛錬を欠かす訳には行かないだろ」

「お前も熱心なものだ、感心するよ」

そんな言葉に苦笑を浮かべ、涼二は声の方へと振り返る。

そこには、涼二と同じように水着姿になったガラムの姿　盛り上がった大胸筋や見事に割れた腹筋、丸太のような大腿筋など、耐性がなければ眩暈を覚えそうな筋肉の塊ではあるが、涼二も慣れたものだろう。

「そういうアンタだって、トレーニングは欠かさないだろ？　まあ、アンタのやってるトレーニングと、俺がやってるのは随分とタイプが違うが」

「うむ。お前もやってみるか？」

「勘弁してくれ、俺は筋肉ダルマになるつもりは無い」

アキレス腱を伸ばしつつ手をヒラヒラと振り、涼二は苦笑する。ガラムはボディビルダーをやっていた性質上、筋肥大を起こすようなトレーニングをするのが基本だ。

純粹にパワーとタフネスが高まる為、狼への変身という能力を持つガラムにとっては、バランスよりもパワーを求めた方が効率的とな

る。

対し、涼二のルーン能力は遠距離型であり、積極的に近付いて戦闘するような理由は存在しない。

無論、様々な格闘技を修めるガルムの教えもあり、涼二は接近戦が出来ないという訳ではないのだが　どちらかと言えば、受け流して攻撃するような戦闘パターンを好む。

その為、必要以上のパワーを求める事無く、バランスのいいトレーニングを行っているのだ。

「さてと……んじゃ、行くか」

キャップとゴーグルを着け、涼二は水の中へと飛び込んだ。

そうして泳ぎ出すと共に、彼は水を操って自分に対して負荷となるように流れを作り始める。

これは能力の制御訓練と体力作りを同時に行うと言う名目で始めたものだったのだが、これが中々に難易度の高いものだったのだ。

どちらかが疎かになるような事があれば、すぐにガルムからの叱責が飛んで来る。

故に、涼二はひたすら集中してこの訓練を行っていた。

そんな彼の様子をじっと見つめつつ、ガルムは持ってきていたダニベルを持ち上げる。

（大した向上心だ……この出所が復讐心でなければ、どれほど良い青年になっていた事か）

惜しいと、ガルムは心からそう思う。

氷室涼二と言う青年は、人を惹き付ける魅力も、そして己の才能に奢らず仲間と共に切磋琢磨するだけの真摯さも持っている。

しかしその思いの大部分は、己の大切なものを奪ったユグドラシルへの復讐心に埋め尽くされているのだ。

尤も

「人の事は言えんが、な」

呟き、ガルムは小さく苦笑する。

このニヴルヘイムと言うグループは、そ……ういう集まりなのだ。

混乱し、荒廃した日本に秩序をもたらす組織、ユグドラシル。

その平和をもたらす為に行われてきた行為は、最終的に言えば正義だったのだろう。

理性では理解できる。だが、感情では納得できない。

涼二も、ガルムも、スリスも　それが、赦せなかったのだ。

『　ならば俺は、悪となるう』

あの日、涼二はそう言った。

何の因果か出会った、同じ怒りを抱える二人に対して。

『確かに、世界は平和になったのかもしれない。少数の犠牲があったおかげで、今こうやって平和を享受出来ているのだろう。』

けれど、俺はその平和を赦す訳には行かない。俺の、俺達の大切な

ものを犠牲にした上での平和など、認めない』

一致した。一致してしまった。

何処までも深い怒りと憎しみ　その感情に、ガラムとスリスは共感してしまったのだ。

故に、彼らは共に歩み始めた。向かう先の決まった、破滅の道筋を。

『人は俺達を憎むだろう。俺達の選択を愚かと嘲笑うだろう  
俺達を知る人間ならば、俺達を止めようとするだろう。』

けれど、そんな言葉に意味は無い。俺達に在るのは、ただ奪われた  
と言う事実だけだ』

氷室涼二は、姉を。

ガラム・グレイスフィーンは、妻子を。

降霧スリスは、全ての光を。

ただ、奪われたのだ。本当に救い無く、慈悲も無く　奪われて  
しまったのだ。

だからこそ、相手を無残に殺さなくては気が済まない。

『余計な人間を狙う必要は無い。だが、余計にならないのだったら  
いくらでも犠牲にしよう。』

悪と罵られようとも、外道と断じられようとも、決して止まりはし  
ない。

全てを奪い、そして果てるまで……共に、歩もう』

ガラムは、あの時差し伸べられた手を思い出す。

アレが無ければ、一体どうなっていたのだろうか……そう思わずには、いられなかったのだ。

彼は思わず苦笑し　ふと感じた気配に、視線を背後へと向けた。

「やつほー、おっちゃん。今日もマツスルだねえ」

「ははは、スリスか。今日は早起きだな」

「雨音ちゃんに起こされちゃったからねー。涼二は今日も頑張ってるみたいで、感心感心」

うんうんと頷くスリスの視線は、やはり焦点の合わないもの。

視力を完全に失っている彼女には、本来見えない光景　それを、愛おしそうに眺めてる。

殆ど乾いているプールサイドに腰を下ろした彼女の視線には、本来無いはずの色が存在していた。

「見ているだけでも楽しそうだな、スリス」

「うん、楽しいよ。涼二が頑張ってる姿、ボクは大好きだから」

「それを言うなら、どんな姿でも、ではないのか？」

「あはは、それもそうだねえ」

降霧スリスは、己を助け出してくれた氷室涼二に強く依存している。

それは最早、恋や愛といった感情を通り越して、『信仰』と言ってもいいほどに。

ユグドラシルで実験体として利用され、家族も居らず光すらも奪わ

れたスリスにとっては、涼二の存在だけが全てだったのだ。故に、彼女は常に涼二から目を離す事は無い。あらゆる電子システムに干渉し、常に涼二の周囲を警備している。本当なら、この場所に来る事無く、いつもの部屋からでも監視することは出来ただろう。

「……そのあたりは、人間らしさも残っていると言う事か」

「んー？ おっちゃん、何か言った？」

「いいや、何でも無いさ。ところで、食事の方は大丈夫かな？」

「うん、自動調理器に方には電気を流しといたし、すぐにでも使える筈だよ」

水やガスは外から持ち込んだものではあるが、電力だけはその限りではない。

スリスが配線などを弄り、そのHのルーンハガラスによって電力を制御しているのだ。

人知を超えた緻密さと制御力ではあるが、Aのルーンアンサズを持つ神話級能力者の名は伊達ではない。

「ふむ……それでは、朝は遠泳程度で十分か。ある程度したら戻るとしよう。ところで、あのお嬢さんはどうしたのだ？」

「雨音ちゃん？ あの子なら、ルーン能力の制御に関する本を貸してあげたところだよ。常時展開あの威力だと、普通の制御程度じゃどうにもならないかもしれないけど……」

「確かに、焼け石に水だったとしても、やらぬよりはマシだろうな」



二人は涼二の姿を見つめつつ、あの時見た雨音の力を思い出す。触れただけで命を枯れ果てさせる、フェアブラ神話級からしても異様としか思えない能力の強度。

「あれで意図して能力を発動したら、常時エナジードレインとかになりそうで怖いよ」

「ふむ……いくら始祖ルーンの持ち主とはいえ、やはりあの威力は不自然だな。逆位置という点では言うまでもないが」

「そうだね……一応、思いつく限りの事は調べておく。これは勘だけど……すごく、厄介な事になりそうな気がするんだ」

彼女に、視線を鋭くするなどの、目を使った感情表現というものは存在しない。

けれどその声は、見えない何かを警戒するように鋭く変質していた。

(涼二の敵になったら、という事が )

ガルムは、小さく苦笑する。

涼二の事を案ずるその姿だけは、どこにでもいるごく普通の少女に思えたのだ。

こんな時でしかそんな姿を見る事ができないのは残念ではあるが、それでも彼は願わざるを得ない。

自分達が幸せを望む事など、間違っているとは分かっているのに

「さて、っと。それじゃ、ボクは一度戻ってるよ」  
「うむ。私も、涼二が運動を終えたら行こう」  
「はいはい」

一転、普段通りの明るい表情でスリスはプールを去ってゆく。  
その姿も、年齢相応だと見る事ができるだろう。けれど、それはどこか取り繕ったもののようにも思える。  
涼二に言わせてみれば、『普通を目指して斜め上に吹っ飛んでいった』という事だったが。

「やれやれ……私に、父親役は無理という事か」

ガラムは視線を戻し　　ここにはいない相手に対し、小さく咳いていた。

「あんな、スリス……」  
「いいじゃん、遊んでいこうよ。暇なんだったら」

そう言うスリスの目の前にあるのは、四人プレイ用の家庭用ゲーム機である。

食事を終え、戻ろうとしていた涼二を引き止めたのは、とにかく暇そうにしているスリスのそんな言葉だったのだ。

壁にある超大画面のテレビ、そこに映っている映像は、かなり有名な四人同時対戦可能の大乱闘ゲームである。

どうやらスリスは暇さえあればこれをやっていたらしく、腕はかなりのものだったりする。

「つたく、一回だけだぞ」

「よっしゃー！」

ひたすら引きとめようとしてくるその言葉に嘆息し、涼二は諦めて腰を下ろした。

恐らく一回で済む事は有り得ないだろうが、適当に何度か相手をしてやれば満足するだろう、と。

「って言うか、お前もやるのか？」

「あ、はい。誘われましたので」

「……出来るのか？」

「説明書は読みました。あ、ちょっとした小技も、一通りスリスさんに教えて頂きましたよ」

ニコニコと笑う雨音に毒気を抜かれ、涼二は小さく肩を竦める。どうやら、何だかんだで彼女も随分と楽しんでるようだった。ちなみに、最後の一人であるガルムもしっかりと参加するらしいが

「……おっちゃん、付き合ってくれるのは嬉しいんだけど、スクワットやりながらプレイするの止めてくれない？」

「むう」

上下運動を繰り返すその姿にうんざりとした様子を見せるスリスに、涼二は小さく苦笑する。

まあ、無理もない反応ではあるのだが。

「さて、とにかくやるよー」

「はいはい」

やる気に満ち溢れたスリスは、さっさと自分の使うキャラクター

を選んでしまう。

彼女の場合、その気になればコントローラーを握らずにゲームをプレイできるのだが、対戦ゲームの時は対等な立場でプレイするのがポリシーのようだ。

ともあれ、涼二も適当にキャラクターを選んでゆく。

炎の剣を使うキャラクターに、一瞬懐かしさを覚えたが、スリスが不機嫌そうな顔をしたので止めることにし、涼二はそれと同じような動きをするキャラクターを選択した。

スリスは電撃を使う小型のキャラクター、ガルムは大型のモンスター、そして雨音は魔法を駆使して戦う姫となっている。

「よし、じゃあスタート！」

スリスがステージセレクトでランダムを選び、ゲームが開始される。

とりあえず全員暗黙の了解として、ゲームに慣れるまでは雨音を狙わないと言う事で一致していた。

ゲームでは、普段の練習によって腕を高めたスリス、卓越した反射神経を持つ涼二が先行、防御などを得意とするガルムがそれに続く形となっている。

とりあえずある程度戦い、このまま最初の戦いは雨音を無視した形で戦い、最後に残ったプレイヤーが実戦代わりに付き合うような形になる。と、思われたのだが。

「分かりました！」

「うおっ!?!」

唐突に歓声を上げた雨音に、涼二は思わず肩を跳ねさせる。その隙にスリスから攻撃を受けそうになるが、それは何とかガードして凌いだ。

何事かと思い、雨音の操作するキャラクターを探そうとして次の瞬間、涼二のキャラクターは画面外へと吹き飛ばされていた。

「は？」

「え？」

涼二とスリスの呆然とした声が重なる。

何の事は無い、ガードした涼二のキャラクターを投げ技で上に飛ばし、空中で二回コンボを決めただけだ。

が 高威力の範囲が極端に小さい空中技を見事に当てるのは、非常に難しい事である。

そんな二人の様子に堅実なガラムが距離を取る中、雨音はスリスのキャラクターに接近して投げのモーションに入る。

「つまり……空戦エネルギーです！」

「何一つ関係ないっ!？」

「ふむ。反射神経、リズム感覚、どれを取っても一級品だ……格闘技を覚えれば大成するだろう」

「おっちゃんも冷静に分析しないでっ!？」

そんなツツコミを入れている間にも、スリスのキャラクターは空の彼方へと吹き飛ばされる。

その後、雨音のキャラクターは一機たりとも削られる事なく、三人をしつかりと殲滅したのだった。

予想外の敗北に、スリスがぐったりと地面に転がる。

「こ、こんなはずは……」

「舐めてたお前が悪い……つってもまあ、俺も舐めてたんだが。お前、こういうのやった事あったのか？」

「いえ、今日が初めてです」

「初めてでこれって……」

どんよりと黒い雲を背負っているスリスに苦笑しつつも、涼二は雨音の意外な才能に驚愕を隠せずにいた。

「どうやら雨音は、思っていた以上に頭や要領がいいようだ。」

「しかし凄いな、雨音君。このような才能があったとは」

「ふふ、ありがとございますガラム様。でも、これはきつと、とっても楽しいから頑張れるんだと思いますよ」

雨音の解答は、通じているようでやはりどこかがズレている。

けれど、純粹に現状を楽しんでいるその笑顔に、涼二は思わず息を飲んでいた。

「私はずっと一人で、友達もいませんでした……日によって変わる家庭教師の方と勉強して、自分で本を読んで、適度に運動をして……そんな生活だけを送って参りました。」

ですから、本当に嬉しいんです。同じ目線で、一緒に遊んでくださる方がいるのが……だから、ありがとございます」

何処までも純粹に、晴れやかな笑顔で、雨音はそう口にする。

その言葉に三人は視線を合わせ　同時に、笑顔を零していた。やはり彼女は憎めない存在だと、そんな風に再確認しながら。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

元々の道筋とは少々違う場所、人気の少ない場所を通って新東京へと戻ってきた涼二は、能力使用による疲労を癒す為に目に付いた



公園のベンチで腰掛けていた。

と言いつつも、海を渡る程度の能力使用で、彼がそれほど疲労を感じようような事は無い。

精々、軽いジョギングを行った程度の体力しか消費していなかった。

「……………静崎雨音、か」

虚空を見上げ、その脳裏に思い浮かべるのは、しばし預かる事となった少女の姿。

そして、そんな彼女とあらゆる特徴が似通っている涼二の姉氷室静奈の姿だった。

長い黒髪と、青紫色の瞳。少々世間知らずな所も、明るく優しい笑顔も、全てが似通っていた。

「……………いや」

涼二は小さく苦笑する。

全て、というには少々語弊があるのだ。姉が持っていたルーンは、雨音のようなSソウイルのルーンではない。

それよりも、もっと自分に似て、しかももっと強力な力。

姉が僅かだが見せてくれたその力を思い起こし、涼二は小さく息を吐き出していた。

そう、違うのだ。だから、静崎雨音が姉である筈が無い。

(そもそも、年齢も合わないしな……)

資料によれば、雨音の年齢は十六歳。

彼女は一応、十五年前の大災害は経験している。つまり、その時に存命だった涼二の姉が、彼女であるという筈が無いのだ。

そう、だから　　あの日、無残に殺された姉が、戻ってくる事など有り得ない。

「ッ……！」

奪われ、失われたのだ。あの優しい笑顔は、永遠に。

赦せない。一体姉さんが何をしたと言うのだ　　そんな怒りの感情ばかりが、涼二の思考を支配していた。

身を焦がすような怒りはその意識を静かに焼き、そしてそれと共に氷のように冷たく鋭いものへと変化させてゆく。

瞳が向かう先は、遙か彼方に見えるユグドラシルのビル　　そこにいるであろう、ある男に対して。

と　　次の瞬間、どこか苦笑のようなものの混じった声が涼二の背中へとかけられた。

「昼間から随分と猛っているようだね、涼二君」

「む……路野沢さん？」

涼二が振り返った先に立っていたのは、スーツを着込んだ一人の

男性。

無造作に切つてある黒い髪に黒い瞳、薄っすらと浮かべられている笑顔。

二十台半ばほどに見えるその姿は、どこか印象と言うものに乏しく、見てもすぐに忘れ去られてしまふような外見をしていた。

彼はユグドラシルに所属する構成員であり　そしてそんな身でありながら、ニヴルヘイムというグループを発足させた張本人。つまり彼は組織の裏切り者……普段、涼二達に依頼を持ち込んでくる人物なのだ。

今回に限っては、彼以外からの依頼となっていたのだが

「中々、大変そうな仕事を請け負ったようだね」

「……お見通しですか」

思わず、涼二は苦笑する。

いつの間にかあらゆる物事を見破っている。彼は、そういう人物なのだ。

そして言葉巧みに近寄り、誘惑して来る　涼二達は、彼が決して善人と呼べる人物ではないと言う事は初めから理解していた。

けれど、三人はそれを承知で利用されているのだ。手段や方法、そして己の身の安全すらも問わない。それが、彼らの覚悟だった。

路野沢は小さく笑みを浮かべながら涼二の方へと近づき、許可を取ってからその隣へと腰を降ろした。

「今回の仕事、君はどう思うかな？」

「どう……とは？」

「今は少々眼を曇らせてしまっているようだが、それでも君は本質を見抜く眼を持っているだろう。」

冷静に考えるまでも無く、君はいくつかの疑問を抱いている筈だ……

…違うかい？」

「……」

その言葉は、耳を通して頭の中に浸透するように広がってゆく。

そしてそれと共に、猛り狂っていた涼二の怒りも、またゆっくりと静まっていった。

そんな己の状態に驚きつつも、涼二は声を上げる。

「静崎雨音は、始祖ルーンの持ち主。だが、始祖ルーンに逆位置と  
言うものは存在しない筈」

「そう。それは、君も良く知っている事だ」

「……そして、彼女の体に刻まれていたルーンも、逆位置の記号にはなっていないかった」

「しかし、その力はまさしく逆位置のもの。それは、何故か？」

「路野沢さん　　静崎製薬ってのは、本当にただの製薬企業なん  
ですか？」

あのビルに潜入した時から、涼二はいくつかの疑問を抱いていた。  
いくら社長の一人娘で、始祖ルーンの持ち主だからと言って……あの  
警備の厳重さは異常だ。

そして、それほど厳重な警備をしなくてはならない相手を、態々リ  
スクを冒して会社まで連れてくる理由は？

それらの疑問は口に出されること無く　けれど、路野沢はそれから全てを理解しているかのようになり、口元に笑みを浮かべていた。

「あの企業が研究している内容は、確かに周囲に発表している通りの事だ。しかし、それだけではない」

「……と、言うこと？」

「もうスリス君が掴んでいるとは思いますが……あそこは、人工ルーンやルーン強化の研究を行っているのだよ」

「……！」

路野沢の言葉に、涼二は目を見開く。

どちらにも、多くの期間で研究されている事柄ではある。

ルーン能力を持たない人間に対し、人工的にルーン能力を与える事が出来るかどうか。

そして、能力の位階を上げる為、ルーン出力強化を行えるかどうか　そういう研究だ。

危険を伴うのは確かだが、決して禁止されている研究と言う訳ではない……が。

「あの、始祖ルーンの逆位置と言う特異な能力は、人の手によって作り上げられたものだ？」

「可能性は高いのではないかな？　元々、自然に発生するものではないのだから、人によって手を加えられたと考えるのが自然だ」

「……」

自然物でないのならば人工物である

その言葉は、涼二にと

つても確かに納得できるものだった。  
具体的な方法や、それを行った理由などは想像できないが、あの会社は何らかの実験を行っている事は予想できる。  
ならば

「依頼主の知りたい事は、その実験……？」

「さて。僕では深い部分までは調べられないからね。ここから先は、スリス君に調べて貰うといいだろう」

「……はい、ありがとうございます」

既に十分深い所まで調べられているのではないかと涼二は胸中で呟いたが、それを実際に態度に出す事は無くそう声を上げる。

しかし路野沢は、そんな内心すらも見透かしているような笑みを浮かべ、その視線に、涼二は居心地悪そうに身を擦った。

涼二の様子に、路野沢は苦笑を見せる。

「ああ、そうだ涼二君」

「はい、何ですか？」

「前回の仕事の報酬を君の口座に振り込んでおいたから、確認しておいてくれ」

「あ……はい、分かりました」

この周辺の地図を脳内に描き、どの辺りに銀行があったかを思い返す。

二十代に達しない若者が持つにはあまりにも大きすぎる金額が入っているのだが、あり過ぎて困ると言うものでもない。

口座に入っている金額を思い返しつつ、涼二は路野沢へと向けて頭を下げた。

「いつも、ありがとうございます」

「いやいや。君達のように優秀な者達には、あの程度の金額では少な過ぎるくらいだ。あまり感謝されては申し訳なくなってしまつよ」

「……はい」

外見からは分かり辛いのが、路野沢は決して善良な人間と言う訳ではない。否、涼二たちと同じ、悪と断じられる人間だろう。

それを分かっているからこそ、涼二は決して警戒心を解かぬまま頷いていた。

そして路野沢もまた、その態度に対し笑みを浮かべながら頷き、立ち上がる。

「では涼二君、次の仕事の時にでも」

「はい、分かりました」

「では」

軽く手を上げ、路野沢は踵を返して去ってゆく。

その背中を見詰め　　涼二は、深々と息を吐き出す。

「……どうにも、距離が掴みづらいなんだよな、あの人は」

それが路野沢と言う男のやり口だと分かっているからこそ、涼二は苦い表情を浮かべていた。



「…………ふむふむ」

高級マンシヨンの一室。

カーテンが閉められ、若干薄暗い室内　そこには、何台ものコンピュータが並べられ、その画面を輝かせていた。

そんな大量のコンピュータの前に座りつつ、スリスは小さく声を漏らす。

その画面上では、いくつものウィンドウが目まぐるしく変化している。

ハガラス Hの電気信号による端末操作、そしてAのアンサズ情報処理能力によるマルチタスク。

それらの力を操る事でスリスは入力機器に触れる事無く、そのルールの力のみでコンピュータを操作し、ハッキングを続けていた。

(面倒な事してくれるなあ、これ……ダミーファイルに、しかもア  
クセスしたら自動で検知するシステムかあ)

胸中ではそう呟くものの、そんな数多の仕掛けを難なく躲し、ス  
リスは情報の探索を続けてゆく。

感覚のみで様々な情報を処理できるスリスには、使える端末さえあ  
ればどのような情報であれ見る事は容易い。

例えそれが、大企業が機密として抱えるような情報だったとしても、  
意識を枝葉のように伸ばし、光のように走らせ、スリスはありとあ  
らゆる情報を取得して行った。

(根こそぎ行ってるけど、それでも情報が少ない……やっぱり警戒  
されてるかなあ、セキュリティもかなり厳しくなってるし)

痕跡は残していない為、侵入経路はバレていない。

リスク回避を意識しているスリスは、いくら能力が優れていると分  
かかっていても、入念に安全策を練った上で侵入を行っているのだ。  
そうやっていくつもの情報を手に入れてゆくが、その大半は表側

静岡製薬本来の仕事に関する内容ばかり。

その中で情報が暗号文化されている気配も無く、スリスはただ、何  
重にも張り巡らされたトラップを掻い潜りながら情報を探していた。

「これも違う、かあ」

治療用の薬を始めとして、サプリメントの類

そして、開発

していると宣伝しているルーン能力抑制の薬。

通常の企業ならば生命線とも呼べる情報の束ではあるが、簡単に手に入る以上はそれよりも隠したいものがあると言う事だろう。

スリスは、さらに意識を集中させる。発動している三つのルーン、その内のPの力が、隠された秘密を悉く暴き立てるのだ。

「ん……これは？」

と　そんな情報の波の中から、スリスは一つの文章を取り出した。

何やら、報告書のような内容の文章。消し忘れたファイルと言った風情のものだ。

或いは、書き終わって提出する直前の文章か。

「……いや、どっちでもいいかな。一応、断片とは言え欲しかった情報だし」

外部ネットワークに繋がっていないコンピュータの中へと放り込み、そのデータを再生する。

そこに書かれていたのは　ルーン能力の強化に関する研究の報告だった。

そんな内容に対し、スリスは思わず息を飲む。

「ルーンの強化実験……一応各国の主要研究機関が行ってる内容だけど……まさか、一企業がそんな事をしてるなんて」

今現在人々が持っているルーン能力は、皆後天的に備わった力が多い。

無論、十五年の月日が過ぎ、先天的にルーン能力を持って生まれてくる人間も増えたが、どちらにした所で、その力は予め定められた限界を超える事は無い。

ルーンの大きさと、プラナーの量。それだけは、訓練で変わるようなものでは無いからだ。

故に、ルーン能力は才能に大きく左右される力であると言える。

また、強力なルーン能力者の数は、かなり少ない。

能力者のうちの大半は人間級ヒューマンと人外級フリックス。それらに数は劣るが、巨人級ティターンもそれなりに見る事が出来る。

けれど、災害級ディザスターからは極端に数が減り、全体の5%ほど。

フェアフィアフェアフィア神話級に至っては、さらにその十分の一ほどの数しか存在しない。

その為、高位の能力者の価値は非常に高いのだ。

だからこそ、ルーン能力者を強化する実験と言うのは何処でも行われるものとなっているのである。

「ルーン強化、それに人工ルーンの実験まで……一企業に許可が出るはず無い」

情報が何処で削除されているかを調べ、スリスはそこから削除されたデータを復元してゆく。

現れるデータは、先ほどと同じくルーンの強化実験についての報告、さらには人工ルーンの実験に関する報告だ。

ルーン強化と同じく、様々な期間で研究されている人工ルーン。

ルーン能力を持たない人間に人の手でルーンを刻み、能力を発言させる事を目的とした実験。

しかし、ルーン能力の発動の仕組みは解明されているものの、発動後どのように現象へと変換しているのかのプロセスは殆ど明らかになっていない。

だからこそ、この実験は難しいとされているのだが

「おいおいおい、これは……」

スリスは、そこに記されていた情報に対し、思わず口元を引き攣らせていた。

そこには、各国の研究機関      その中でも、最も進んでいるユグドラシルですら掴めているか分からないような情報がいくつも転がっていたのだ。

曰く      通常のルーンは全て始祖ルーンと繋がっており、霊体より発せられたプラーナは始祖ルーンへと送られ、そこで干渉力へと変換されて戻ってくる。

その処理の際にルーンの発光現象が起こり、ルーンと始祖ルーンの接続を確認する事が可能。

その為、始祖ルーンの解析する事で、人工ルーンも始祖ルーンとの接続を可能にすれば

「……依頼主さんは、これを欲しがってたって所かな」

渴いた喉を鳴らし、スリスは呻くように声を上げる。

どうしてこの企業はここまで研究が進んでいるのか　それは、考えるまでも無い。

彼らは、始祖ルーンの持ち主である静崎雨音を抱えていたからだ。彼女の身体、彼女のルーンを調べ上げる事により、彼らはその事実かどうかはまだ微妙だが　を発見するに至った。

「収穫はあった、けど……もうちょっと調べた方が　」

そう呟き、スリスは再び端末へと集中しようとした、次の瞬間。唐突に部屋の扉がノックされ、そこから一人の少女が姿を現したのだ。

それは、今まさに調べていた人物である、静崎雨音。

「失礼します、スリスさん。そろそろお昼の時間ですよ」

「おー、ごめんごめん。すぐ行くねー」

雨音は世間知らずで天然な箱入りお嬢様だと思っていたスリスだったが、時折その認識を裏切られる事があった。

彼女は非常に要領がいいのだ。教えられれば、使った事の無い器具もすぐさまマスターしてしまう。一度聞けば大半の事を覚えてしまう頭の良さは、あのガルムすらも唸らせるものがあった。

ただし、その注目する点が若干ずれているのは玉に瑕だが。

ともあれ、今回も一度で自動調理器の使い方を覚えた雨音が、昼食を用意してくれたのだ。

そんな彼女の姿に頷きつつ、スリスはハッキングを中断してコンピュータを外部から遮断、シャットダウンして席を立つ。

「それじゃ、行こっか」

「あ、その前にガラム様を呼ばなくては」

「あー、うん。それはボクがやっとくから、雨音ちゃんは食事の準備の方をお願い」

「？ はい、分かりました」

苦笑いを浮かべつつ言ったスリスの言葉に、雨音は若干疑問を覚えていたようだったが、特に気にせず彼女は頷いて歩いてゆく。そんな背中を見送り、スリスは深々と嘆息を漏らす。

「……アレは、雨音ちゃんにはちょっと刺激が強いからなあ」

苦笑いと共に、スリスは雨音が向かったのとは別の方向へと歩く。向かう先は、この階層にある部屋の一つ。

そこは、外から様々な品物が持ち込まれている部屋となっていた。その持ち込まれている品とは

「おっちゃーん、お昼」

「ぬふううおおおおおおおおおおおおうッ！」

「……」

扉を開ける鳴り響いてきた雄叫びと、猛烈な汗の臭いに思わず挫けそうになりながら、スリスは深々と嘆息しつつ部屋の中へと入った。

鼻をつまみながら廊下の扉を開け　その奥にある部屋は、邪魔なものは撤去され、全面にマットが敷かれている。

周りに置かれているのは大量のトレーニング器具。

どれもこれも重量最大にして置かれているそれらは、スリスでは1mmたりとも動かすことは出来ないような代物だ。

そして、その片隅　そこに、巨大な錘を背負ったまま懸垂をするガルムの姿があった。

ぎしぎしと悲鳴だか歓喜なんだかの音を響かせる筋肉に、スリスは深々と嘆息を漏らす。

「おっちゃん！」

「ぬううううう……む、スリスか」

「そうですよ、スリスちゃんですよー、っと。おっちゃん、お昼ごはんが出来たってさ」

「ふむ、雨音君か？」

錘を床に置きつつ、ガルムが首を傾げる。

その重さによる衝撃で一瞬体が浮き上がるが、気のせいだったという事にしつつ、スリスは小さく肩を竦めた。

「あの子、結構頭がいいみたい。普通に勉強してたら、結構いい所まで行けたんじゃないかな」

「だが、半ば軟禁同然に扱われていた、か」

「うん……始祖ルーンの持ち主だったからって言うても、流石にち



よつと違和感があるかな」

始祖ルーンを隠したかったと言うなら、何もそこまでする必要はない。

学校に行けないなら行けないなりに、家庭教師でも何でもつけければいいのだから。

けれど、それにした所で、ルーン能力に関する知識が無いと言うのはどう考えても不自然である。

「……こういう表現は、悪いと思うけど」

「む？」

「雨音ちゃんは、飼われていた。そんな感じがするんだ」

「……ふむ」

言つて、スリスは一枚の書類をガルムへと差し出す。

タオルで汗を拭いつつそれを受け取ったガルムは 次の瞬間、その眼を見開いていた。

その書類に記されていたのは、『雨音』と言う少女の養子縁組に関する内容。

「……雨音君は、静崎義之の実娘ではなかった、という事か」

「そう。どんな経緯で彼女を見つけたのかは知らないけど、始祖ルーンに目をつけて連れてきたのは確かだろうね」

そしてその目的は間違いなく、始祖ルーンを研究する事による人

工ルーンの完成。

だとするならば、あの嚴重さも領けるように呟き、スリスは小さく嘆息した。

そう胸中で吐き捨てる

きつとそこには、親子の情は無い。ただの実験材料……ただ、それだけの存在として扱われてきたはずだ。

そんな憤りを吐き出す場所も無く、ガルムがシャツを纏う姿を、スリスはぼんやりと眺める。

「まだ、調べるべき事はいくつかある。詳細が分かったって訳じゃない。けど……」

「何か、思う事でもあるのか？」

「ん……まだ、予想でしかない。けど、あいつらは両音ちゃんを人間として扱っていなかった……そんな風に思える」

だから、赦せない。そんなスリスの言葉が発せられる事はなかったが、ガルムは彼女のそんな考えを僅かながらに察知して、小さく肩を竦めていた。

仲間達の事情は、互いに把握しているのだ。彼も、スリスの抱いている思いがどのようなものであるか、容易に想像する事ができたのだろう。

「ただの道具、実験材料……その為にルーンを弄って、制御不能なまでにして、まるでボクの目と同じように」

「スリス」

「あ……う、ごめん」

「いや、君の言いたい事も分かる。私としても、そのような横暴を赦すつもりは無い」

服を着込んだガルの背中を追い、スリスは部屋の外へと歩き出す。決して穏やかな心境と言う訳ではなかったが、彼女はガルの言葉によって多少の冷静さを取り戻していた。そんな頭の中に、次にすべき事柄がいくつも浮かび上がってくる。そして、そんな気配を肌で感じ取ったのか、ガルムはくつくつと方を揺らしながら声を上げた。

「まず、研究資料。そして、彼女に施されている実験の詳細。そして、依頼者への問い合わせと言った所か」

「……今回の依頼者、かあ。何を考えてるんだかね」  
「さて。少なくとも、今は味方であって欲しいものだがね」

見た目から何処までも肉体派に見えるガルムであるが、その実非常に思慮深く、知識も豊富である。  
二手、三手と先を見据えるその様は、時にスリスと涼二の道標となっていた。

「今の彼女の状態が実験によるものであったとして、ならばどうすればその体質を治す事が出来るのか。  
残念ながら、我々の技術力では到底不可能な事だ。故に、協力者が必要となる」

「……それが、今回の依頼者って事？」  
「雨音君に情が湧いてしまっている今の君達ならば、その方が良いのではないか？」

「う……」

ガルムの台詞に、スリスは言葉を詰まらせる。

涼二が自分にとつての全てであると認識していた彼女にとっては、少々据わりの悪い事実だったのだ。

彼女は思わずぷいと視線を背けながらガルムを追い越し、そのまま雨音のいる部屋の方へと歩いてゆく。

「ふふふ」

「むー……」

手玉に取られている。筋肉の塊の癖に。その老獪さは何なんだ

と、スリスは胸中で叫ぶが、言えば余計にドツボにはまる事は分かりきっていた。

小さく嘆息し、辿り着いた部屋の扉を開ける

「……しかしまあ、随分と溜まってるな」

講座の中身の確認を行い、涼二は思わずそう呟いていた。

まだ二十歳にも満たない若者が持つには、桁が一つか二つ大きいと思われるこの額。

二、三年は遊び呆けても、まだまだ余るであろうそれに、涼二は小さく溜め息を吐き出す。

「どうせ使わないしな」

たまに欲しいものが出来れば買うが、そもそも物欲に乏しい彼にはそういったものが出来る事すら稀だ。

そして暮らしに関しても無駄な贅沢をするような性質は無く、あのアパートに落ち着いている。

要するに、仕事が無い時は暇なのだ。

(さて、どうするか)

指紋と静脈認証に用いた己の左手を見下ろし、そこに手袋を嵌め、金の使い方に関して思いを馳せる。

家具を新調するか 特に古くなったものも無い。

食事でもしに行くか 高級料理でも、そうそうなくなるような額ではない。

ゲームでも買うか ゲームセンターにある筐体を丸ごと買ってもなお余る。しかも双雅が入り浸りそうだ。

「……ほんつとうに、どうするかな」

とりあえず当面の生活費は降ろしてきたので、しばらくは見る事もないだろう。

どうせ報酬が入る度に悩んでいる事でもあるのだ、今更気にしても仕方ない と結論の先送りを行い、涼二はバイクに乗り込んだ。

「まあ、アレだ。双雅や桜花に飯でも奢ってやるか」

建設的な使い方とは言えないが、昨日のショッピングをキャンセルしてしまった負い目もある。

その分の埋め合わせをしてもバチは当たらないだろう、と涼二はバイクを動かす前に携帯電話を取り出した。

とりあえず電源を切りっ放しにしていた事を思い出し、ボタンを押して電源を入れる。

（さてと、どうやって誘うか）

下手に出れば面倒な事を約束させられかねない　小さく肩を  
竦め、涼二は頭を悩ませる。

以前、悪ふざけで女装させられかかった事はまだ記憶に新しかった。  
微妙に冗談では無い。

ともあれ、会話を脳内でシミュレートしながら、通話履歴を呼び出  
す　その、瞬間。

「っつ」

唐突に手の中の電話が震え、涼二は思わず携帯を取り落としかけ  
ていた。

何とかそれを掴み、画面を見れば　そこに映し出されていたの  
は、スリスの名前。

何か起こったのだろうかと首を傾げ、涼二は通話ボタンを押した。

「もしもし。どうした、スリ」

『涼二！　雨音ちゃんが倒れた！』

「は……な、何ッ!？」

今度は違う意味で携帯を取り落としかけつつも、涼二は話を聞く  
ために強くスピーカーを耳に押し付ける。

一瞬、聞き間違えたのかと己の耳を疑うが、スリスの声はそんな甘

い幻想を認めはしなかった。

『速く、戻ってきて!』

「ッ……分かった」

どうやら、埋め合わせはまたの機会になりそうだ。

舌打ちを交えながら通話を切り、涼二は来た道に戻るようにバイクを動かし始めたのだった。



「 ガルム、スリス、どうなってる!？」

「 涼二!」

「 ……病人の前だ、静かにな」

バイクでもと来た道を後戻りし、拠点へと帰ってきた涼二は、すぐさまベッドのある部屋へと駆け込んでいた。

そこにある大きな寝台と、その両側に立つ二人。そして、ベッドでうなされる雨音の姿。

顔を上気させて呻き声を上げている彼女に、涼二は小さく舌打ちをしつつも部屋の中へと入ってゆく。

「 スリス、これはどういう事なんだ?」

「 ……かなり厄介な状態だよ。ここまででは流石に予想できなかった」

タオルで雨音の汗を拭いつつ、スリスが声を上げる。

その顔に浮かんでいるのは、普段はあまり見る事の出来ない焦燥の様なものだった。

そしてそんな表情のまま、スリスはその視線を涼二の方へと向ける。

「雨音ちゃんの身体には、色々と厄介な実験が施されていたんだ」

「実験……？」

「人工ルーンの研究で、身体を調べられていた。それだけだったら……いや、それだけでも許せる事じゃないけど、まだどうにかできる範囲だった。」

でも、彼女に施されていたのはそれだけじゃない」

言っつて、スリスは雨音の肌に直接触れぬよう気をつけながら、その身体へ己のプラナーを流し込む。

瞬間

「っ、これは……！」

その腹部にある始祖ルーンを取り囲むように無数の光のラインが現れ、雨音の全身を覆っていった。時に曲線を、時に鋭角を描きながら広がるそのラインは、整然と並べられた記号のように見える。

「一体……？」

「人工ルーン研究で用いられた、プラナーの回路だろう。彼女はこ

れによってルーンの力を反転させられていた。NOT回路のようなものだな」

「人の手で、ルーンの効果を逆転させていた……」

思わず、涼二はそう呻く。

予想できていた事ではあるし、他に可能性が考えられなかったのは事実だ。

しかし、改めて聞くと現実味の無い事ではある。が、これを見た以上はそうも言っていられないだろう。

舌打ちをし、涼二はその光のラインへとじっと目を凝らす。

「ん……？」

そして、ふと気付いた。

薄いパジャマの上からでも見える光のライン　その一部が、途切れている事に。

細い糸で描かれているようなもので、注意して見なければ気付けなかったが、素肌の部分に浮かび上がっているラインの一部が途切れていた。

「……まさか」

「気付いた、涼二？　これだよ、問題だったのは」

「プラーナのラインが途切れた所為で、力の循環不良を起こしているようだ。どうやら、全体にも強化人間としての処理が施されているようだ……そちらよりも、やはりこのラインが問題らしい」

強化人間 体内のプラーナ循環効率を高め、運動性能を強化した人間の事だが、涼二はその言葉に思わず目を見開いていた。強化人間を作り出すには非合法的な処置が必要であり、基本的に一般に知られた技術では無いからだ。生来の障害などはプラーナの循環不良によって起こっている為、その治療に技術の一部が用いられる事があるが、それ以外は表に出て来る事は無い。

「……一体、どれだけひた隠しにされていたんだ？」  
「ボクでも発見するのにこれだけ時間がかかったんだ……嚴重にも程があるよ」

「ちっ……どちらにしろ、一般の研究所程度じゃ処置のしようが無いか」

強化人間の調整にはそれ専用の器具が必要となる。  
始祖ルーンの持ち主であり神話級能力者の雨音には、循環量強化によるプラーナの枯渇と言う事態は起こらないだろうが、それでも調整が無ければ長くは持たないだろう

「く……ッ！」  
「落ち着け、涼二。迷った所で、我々に取れる選択はそう多くはないぞ」

「選択？ 『他人任せにする』の間違いだろ」  
「確かに。だが、我々には彼女を救えないのは事実だ」

何処までも正論なガルムの言葉に、涼二は唇を噛む。自分達の持つ技術や能力では、雨音の身体を治す事はできない。故に、技術を持つ何者かに彼女を預けるしかないのだ。

「可能性として考えられるのは三つだ。一つ、路野沢氏に協力を要請し、ユグドラシルの施設で彼女の調整を行う」

「却下だ。人工ルーンの技術と、始祖ルーン保持者を奴らに渡す訳には行かない。そんな事をすれば」

「他の始祖ルーンの持ち主も同じく犠牲になってしまうかもしれない、か」

ユグドラシルには何人かの始祖ルーン保持者が存在している。

この研究成果を渡してしまえば、ユグドラシルは確実に彼らを実験対象として扱うだろう。

ルーン能力者を量産される可能性がある事も痛い、涼二にとってはそれ以外の問題も存在している。

かつての部下、思い入れを持っているあの少女もまた

「ッ……二つ目は何だ、ガルム」

「ふむ。二つ、今回の依頼主に接触する事」

「あの人たちの目的は、この技術だと思う……なら、これを盗み出して彼らに提供すれば、雨音ちゃんの調整機具を用意できるかもしれない」

かぶり振って問いかけ、それに対し戻ってきた答えに、涼二は再び沈黙する。

先程よりマシだとは思われる。が

「确实性に欠けるな、時間もかかり過ぎる……それにそもそも、そういったらそこまで信用できるのか？」

「依頼主としては誠実だ。ただ、それ以上は私にも分からん」

つまり、技術に目が眩まないとも限らないと言う事だ。

被害の拡大は防げるが、それでも雨音に危害が及ばないとも限らない。

それに、雨音に処置を行えるだけの器具を揃えるまで、彼女が持たない可能性の方が高いだろう。

「……それで、三つ目は？」

「彼女を、静崎製薬に返す事だ。彼女は貴重な実験材料として扱われている……少なくとも、確実に調整は行われるだろう」

ガルムのその言葉に息を飲み　　だが、納得出来るその答えに、

涼二は抗議の声を飲み込んだ。

分かっているのだ。選択肢など存在していない事は。

「……返した後に奪還する、か？」

「技術と共に彼女を奪い返すのが理想形だろう」

「そう……だな」

「だがな、涼二よ」

小さく、だが重い声が響き渡る。

涼二はその言葉に籠った気迫に息を飲み、ガルムの方へと視線を向けた。

ガルムの強い視線と、その瞳の奥にある深い知性の煌めきに、縫い止められたように涼二は言葉を失う。

「我らの目的は、あくまでもユグドラシルに対する復讐。彼女を救う事がそれに繋がるとは、私には到底思えんのだが？」

「それは……」

「ただの感情論で、我々全員を危険に晒すつもりか」

「ちよっと、おっちゃん！」

「いや、いい……黙っている、スリス」

「涼二……!？」

ガルムの言葉を咎めるように、スリスが叫び声を上げる　　が、

涼二はそれを手で遮った。

そしてガルムの目をまっすぐと見上げ、声を上げる。

「……確かに、お前の言う通りだ、ガルム。俺は、この女に対して執着している。復讐には関係ないものだろう」

「ならば、彼女を救う必要は無い筈だ。依頼主の指示に従っているだけでいい。それ以上のリスクを背負う理由は無いはずだろう？」

「ああ、正論だよ。アンタは間違っていない」

肯定。

ガルムの言葉に対し、涼二は言葉を詰まらせる事も無くそう言い放った。

その言葉に、スリスは体を震わせるが、かろうじて吐き出そうとした言葉を抑える。

そんな様子に胸中で苦笑を漏らし　　涼二は、声を上げた。

「だがな、ガルム。アンタは、それで後悔しないのか？」  
「む……？」

「俺は言っただけだ、ガルム。このまま見逃す事もできる。そうすれば、誰もが平穩に暮らす事が出来る。」

それでも、その選択をしてみれば必ず後悔すると。俺はもう、後悔する選択をしないと　　アンタも、それに同調した筈だ」

鋭い視線。強い意志。

ただただ強固な意志を込め　　涼二は、ガルムへと向かって言い放った。

「答える、ガルム。アンタは、雨音を見捨てて後悔しないのか」  
「……」

その言葉に、ガルムは沈黙する。

小さく肩を震わせているのは、怒りか、それとも

「ふ、ふふふ……」

「……おい、ガルム」



「ははははははは！ やはり、期待通りの言葉を返してくれるな、涼二よ」

「……趣味の悪い試し方をするなよ、アンタは」

互いに、相好を崩す。

きよとんとした表情を浮かべているスリスを尻目に、涼二は小さく苦笑を漏らしていた。

だが、ガルムの言葉のおかげで決心する事が出来たのも事実であり、涼二はその事に対しても苦笑する。

（だが、これで決まりだ）

視線は、雨音の方へと。

ある筈のない姉の面影を見つめ、涼二は小さく頷く。

「……それに、回復系のS、<sup>ソウイル</sup>しかも始祖ルーンの持ち主だ。味方に引き込みたい所だろう？」

「ふむ……確かにな。生傷の絶えぬお前には必要な力か」

「その為には、この逆転した状態の力を何とかしないとねえ」

ようやく調子を取り戻したスリスが、からかうような口調でガルムに同調する。

そんな言葉に肩を竦めつつも、涼二は二人の方へと視線を戻した。無茶な戦いをしている自覚がない訳ではない。

「さてと、それで方針は？」

「うむ。彼女を一度、静崎製薬の方へと戻すのは決定だ。ただし、我々だけでそれを行う訳には行かん」

「依頼主の方に連絡だね？ それだったら、ボクに任せて！ 向こうで繋いで来るから！」

走って出て行くスリスの背中を見送り、涼二とガルスは顔を見合わせて苦笑する。

彼女の姿からは、雨音を助けたいと言う思いが強く伝わって来ていた。

三人が三人とも、すっかりと彼女に情を持っていた事が、どこことなく滑稽に思えたのだ。

ひとしきり笑い　　涼二は、声を上げる。

「さてと……それじゃあ、準備するか」

「うむ。まずは、依頼主を見極めねばな」

そこに含まれる色は、決して悲壮なモノではなかった。

\* \* \* \* \*

『……貴方達の事を侮っていたつもりはありませんでしたが、まさかこの回線をつきとめて連絡してくるとは』

「それはつまり、甘く見ていたという事だろう」

コートを纏い、バイザーを装着した涼二 ニウルヘイム 《氷獄》は、画面

に映った引き攣り気味の少女の顔に向けてそう言い放つ。

てつもり 鉄森シア。ユグドラシルに協力する鉄森グループの若き経営者。

そんな人物が依頼主であった事に若干の驚きを覚えつつも、バイザーによつて表情を隠しながら、涼二は声を上げる。

「こちらの状況に関してはそちらに送った筈だが……このまま人質が死んでしまえば、そちらの目的が果たせなくなるのではないか？」  
『……そう、ですわね』

手元に資料があるのだろう、シアは画面の下を覗き込み、そこで何か紙を捲るような仕草を見せる。

そこにあるのは、スリスが送った資料に間違いのない筈だ。

既に読んであったのだろう、軽く流すように読むと、彼女は深々と嘆息して見せた。

「……成程、確かに厄介ですね。とは言え、普通ならばその程度無視してでも進める所ですが、始祖ルーン保持者となつてはそうも行きません。しかも、Sとは<sup>ソウイル</sup>」

「何か、特別扱いするような理由でも？」

「ええ、シングルルーンでS<sup>ソウイル</sup>を持つ神話級能力者は過去に一人だけ例がありますが……その人物は、死んだ直後の人間ならばどのような状態でも蘇生させたと聞きますわ。それだけの力を手放すのは惜しい」

その言葉に、涼二はバイザーの下で視線を細める。

涼二から見ても常識外れなほど強大な能力。確かに、喉から手が出るほどに欲しいだろう。

あまり信用する訳には行かないが、とりあえずの味方として使う事は出来るだろう。そう結論付け、涼二は声を上げる。

「では、静崎雨音の処置に関して、協力して貰えるという事でかまわないか？」

「ふむ……そうですね。貴方達から受け取った資料は、データ化された一部のものだけ。わたくし達が望む情報までは至っていない。ならば、彼女を交換条件として利用するのでしょうか。」

彼女の奪還は 』

「俺達の仕事、という訳か」

『ええ、作戦の時間は追ってそちらに送りますので』

とりあえずは望み通りの状況を創り上げる事に成功し、涼二は小さく息を吐き出す。

しかし、重要となるのはこれから。まだ気を抜く訳には行かず、涼二は再び意識を研ぎ澄ませる。

この後は直接敵との戦闘になる可能性が高いのだ。油断していれば、どのような目に遭うか分かったものではない。

『 会長、そろそろ』

『ええ、こちらあまり悠長にはしてられませんわね。それでは、ニヴルヘイムの皆さん。ごきげんよ 』

「……？」

画面に映るシアの表情が、一瞬固まる。

涼二は訝しげに眉根を寄せ、彼女が視線を向けている方向へと振り返る。そこにあっただのは、画面をじっと見据えるガルムの姿だった。

そしてさらにガルムの視線を追えば、彼が見ていたのは画面内に映っている巨漢の執事らしい男。

その男もまた、ガルムと視線を合わせ

「『ふんッ！』」

同時に、纏っていた服を盛り上がる筋肉で破き散らした。

「……………って、何してんだアンタ達はッ!?」

「ふふ……………やはり、あの時見た貴方の筋肉は伊達ではなかったようだな」

『貴方こそ。私の目に狂いは無かったらしい』

共にサイドチェストのポーズを決めながら語り合う二人　と  
言うより、二つの筋肉の塊に対し、涼二とスリスは思わず画面から遠ざかる。

ポーズを移行し、ダブル・バイセップス・フロントのポーズで語り合う二人は、その様子に気付いていないようだったが。

(……………って言うか、こんなモノまざまざと見せ付けられて、あのお嬢様は大丈夫なのか?)

他人事ながら、見ていて若干気持ち悪くなってくる筋肉二人に辟易しつつ、涼二は画面の中を覗き込む。

あまりのショックに気絶して、対応が遅れてしまったら問題がある  
しかし、そんな思惑は外れる事となった。

『嗚呼、何て大きく盛り上がった大胸筋……………バルク、カット、どれを取っても素晴らしいですわ!　やはり、わたくしの見立てに間違いはありませんでした!』

「涼二、あの人筋肉フェチ  
」  
「言うな、分かってるから」

うつとりと筋肉に見惚れているシアの様子に頬を引き攣らせつつ、スリスの姿を画面外へと押し出してゆく。別に見られた所で問題があるわけでもないのだが、涼二としては正直あんまり同類と思われなくなかったのだ。

（って言うかあのお嬢様、まさかガルムがいるから俺達を選んだんじゃないだろうな……？）

乾いた笑いと共に胸中で思考を吐き出すが、あまり冗談になっ  
ていないような気がして、涼二は思わず閉口していた。

そくだとしたら、色々と考えていたのが馬鹿らしくなってくるよう  
な事実ではあるが。

しかし、『ニヴルヘイム』の正体を突き止めただけでも十分な情報  
収集能力だ。

恐らく路野沢に接触したのだろうが、そこに辿り着くだけでもかな  
りのものである。

やはり、規模としては大きい所だ。

「……スリス」

「ん、調べとくんだね？ どうしてユグドラシルの協力者なのに、  
その敵対者であるボクらの力を頼ったのか」

「ああ。どうやら、腹に一物抱えてそくだ」

言つて、涼二は小さく笑みを浮かべる。  
もしかしたら、大きな協力者となってくれるかもしれない、と



「…………大丈夫か？」  
「は、はい…………」

バイクの後ろに乗った雨音に声をかけ、涼二はその解答の弱々しさにバイザーの下で視線を細める。隣を駆ける狼姿のガルムもまた、どこか心配そうな視線を雨音へと向けていた。着物や手袋越しに伝わってくる体温は非常に高く、見るまでもなく不調である事は分かりきっている。

（調整不足　調整の前に連れ去ってしまったのが、そもそもの原因か）

胸中で呟き、涼二は小さく嘆息した。

あの日、雨音があの会社に来たのは、体の調整を行う為だったのだらう。

しかし、それが完全に行われる前に、涼二達は彼女を連れ去ってしまった。

今のこの状態は、下調べの不足から発してしまった事と言えるだらう。

(とは言え、スリスを非難するつもりは無いがな)

ただひたすら責任を感じていた様子のスリス　　彼女は、自分の調査不足を自覚していたのだらう。

けれど、データ化されていない資料が多く存在した上、残されていたデータもかなり巧妙に隠されていたのだ。

たとえ神話級能力者のスリスと言えど、それを調べ上げるのは至難の技と言える。

故に、涼二はそれを咎めるつもりは無かった。

まだ挽回の余地はある。雨音を取り戻す事は十分に可能だ。

そこまで考え、涼二は小さく苦笑を漏らした。

(取り戻す、か)

元々自分達が攫って来た側だと言つのに、随分な言い草だと。

しかしそれと同時に、そんな言葉が自然に出てくるほどに雨音へ入れ込んでしまっているのだと、涼二は自覚していた。

自分達の目的を考えれば、愚かな気の迷いともいえるかもしれないけれど

(もう、後悔はしたくない)

『あの時こうしていれば』と言う後悔がいくつもあった。真に復讐すべき相手が誰かも知らず、そんな人間の下でただ力を振るい続けてきた。

氷室涼二は、己の身を引き裂きたいとすら思うほどの後悔を積み重ねてきたのだ。

故に、もう後悔する選択肢を選ばないと決めた。

そしてそれは、仲間達にとっても同じ事。

『聞こえる、涼二?』

「ああ、大丈夫だ」

『よっし。それじゃあ、ナビゲートはしっかり表示されてると思うけど……その目標地点に設定されている所が交渉の場所。』

そして、その前の緑の点で印されたポイントが、依頼主から指定された合流ポイントだ』

涼二の装着するバイザーの片隅に表示されていたマップが、スリスの声と共に少々拡大する。

そこに描かれているマップには、スリスの言う通り二つのポイントと、現在涼二がいる場所のマークが表示されていた。

あまり遠くはない位置だが、発電所近くであるためか、人の気配は

殆ど無い。

「……流石は大手のグループか。集めてるのも結構なレベルのようだな」

『それでも、神話級フェアブラはいないみたいだね。一番強いのも災害級ディザスターの能力者みたいだよ』

「仕事が速いな、お前は」

スリスの言葉に、涼二は小さく嘆息する。

どうやら、早速ハッキングして情報を引き出していたらしい。

シアに知ればどんな言葉が出てくるか分からないが、ガラム

の筋肉 を見せたら許して貰えるのではないか、とどこか乾

いた笑みを浮かべて涼二は視線をマップから離れた。

『で、おっちゃんの方なんだけど』

『うむ、何だ？』

『おっちゃんは、涼二とは別行動。正直な所、静崎製薬の事はまだ調べ切れてる訳じゃないんだ。一体どんな隠し玉を持ってるか分からないから、隠れて待機だよ』

『ふむ、成程な。何かあれば、私がサポートに入ると言う訳か……了解した。涼二、背中は何せてもらおう』

「ああ、頼む」

獣の姿でもつけられるようなインカムなど良く探してきたものと脇を眺めながら涼二は肩を竦める。

肉体派でありながら知識も深いガラムは、突発的な事態にも対処し

やすい為、控えに回る事が多い。  
能力は純粹な近接戦闘型ではあるが、その冷静な判断力は涼二も常に頼りにしていた。

「さてと」

涼二はガルスに視線を向けつつ、バイクにブレーキをかけ始める。その視線を受けたガルスは小さく頷き、涼二とは反対にさらに加速して道を駆け抜けていった。

姿は一瞬で見えなくなってしまうたが、バイザーの画面内では彼が何処にいるのかを一目で確認する事ができる。

どうやら、交渉を行う場所付近で隠れるつもりのようなのだ。

その動きが止まったのを確認し、涼二は雨音を支えながらバイクを降りる。

「……………歩けるか？」

「は、はい……………済みません、ご迷惑をおかけして……………」

「迷惑をかけているのはこちらの方だろう。少しは自分の立場を自覚しろ」

「あ……………ふふ、そうでしたね」

顔色が悪いながらも、雨音は小さく笑みを零す。

そんな様子に嘆息し、涼二は、雨音の身体を抱え上げた。

突然浮き上がった身体に、雨音は目を白黒させて声を上げる。

「りよ、涼二様!？」

「本当ならば動くのも辛いんだろうに……変に遠慮をするな」

「で、ですが……」

「俺は手が塞がっていても戦闘に支障は無い。いいから、黙って運ばれる」

「……はい」

視線を逸らしつつ涼二は声を上げ……そんな不器用な仕草に、雨音はきよとんと目を見開き、そして小さく笑みを零した。

そして彼女は、涼二の体に触れぬよう気をつけながら、そっと彼のコートを掴む。

バイザーの下、涼二は小さく目を見開き　そして、小さく苦笑した。

「さて……」

雨音の身体を抱えたまま、涼二は周囲へと意識を集中して歩き出す。

コートの下に隠れて外からでは見えはしませんが、その左肩に刻まれた<sup>ラゲス</sup>のルーンは、僅かに輝きを放っていた。

周囲に変化は無い　それは、彼が空气中に能力で干渉した水分を散らしているに過ぎない為だ。

殺傷能力は皆無だが、周囲に存在する物体を把握する事が可能となる、<sup>ラゲス</sup>の能力者が良く用いる使用方法である。

尤も、奇襲に備えるような必要があるかどうかと問われれば、涼二としても答え辛い事ではあるのだが。

(この密着している状態では、下手な攻撃は出来ないだろうしな)

荒い息を繰り返す雨音を見下ろしつつも、僅かな水で周囲の状況を探ってゆく。

涼二の能力による検索限界範囲は、およそ半径100mほど。

徐々に広がってゆくその範囲に　　涼二は、複数の気配を捉えた。

「これは……集合地点の辺りか」

どうやら、シアの手の者が既に待機しているらしい。

とりあえず待たされる心配が無い事に安堵し、涼二はそちらへと向けて進んでゆく。

真っ直ぐな道の先　　そこに停まっていたのは、一台の黒いワゴン車と、その傍らに立つ黒いスーツの男だった。

彼は涼二たちの姿に気が付くと、警戒した様子を見せながらも声を上げる。

「……ニヴルヘイムの方ですか？」

「ああ。約束通り、保護対象を連れてきた」

この暗い中、サングラスを掛けている理由があるのかどうかと首を傾げかけ、涼二はふと思いついてその動作を抑えた。

男の掛けているサングラスは、涼二の持つバイザーと同じような働きを持っているのだろう。

涼二は彼と、そして車の中の気配へと注意を向けつつ声を上げる。

「こちらは、そちらの指示に従うよう依頼を受けている。ただし、俺達が請けた仕事は、あくまでも彼女を送り届ける事だけだ。

そして、己の身の安全を優先する……問題は無いな？」

「ええ、そのように。では、参りましょう」

その言葉と共に、車の中から同じような格好をした男たちが現れ、先程の男と涼二を　　と言つより雨音を　　護衛するように囲みながら歩き出す。

若干の落ち着かなさを覚えながらも、涼二は黙ってそれに追従し始めた。

『……涼二、今話した人が災害級能力者だ。けど、戦闘向けじゃないね。思考強化……どうやら、交渉役として連れてきたみたいだ』

スリスの言葉を受け、涼二は声に出さずに頷く。

先程の話を聞く限りでは、ここにいる能力者で他にいるのは巨人級ティターンという事だろう。

あまり強力な戦闘系能力者を連れて来なかったのは、涼二とガルムに期待しているという事か。

(……面倒だな)



涼二は、そう胸中で呟く。

無論何が相手でも負けるつもりは無いが、相手の得体が知れない以上、あまり油断は出来ない為だ。

何をしでかすか分からない　例え絶対的な力を持つ神話級能力者フェアブラと言えど、その力を宿す肉体は人間の物だ。

決して不死身と言う訳ではない以上、油断をする訳には行かない。かつて部下に教え続けてきた事を思い起こし、涼二は気を引き締める。

『涼二、指定の場所に着くよ』

「……………」

スリスの言葉を聞き、涼二は能力を使って周囲を探る。

すると、あまり苦勞する事も無く、交渉相手と思われる気配を察知する事が出来た。

人間が三人　そのうち一人は、ジュラルミンケースのような物を手に持っている。

鉄森シアが望んだのは、静崎製薬が雨音を使って実験したその研究成果。

それが、そこに収められているのだろう。

涼二は、視線を細める。

（人数が少なすぎる……人数の指定をしたのか？）

静崎製薬ならば、雨音が今どのような状況にあるか、その想像が

ついている筈だ。

強化人間の調整には専用の装置が必要　けれど、それでも応急処置が必要となる可能性も十分にある筈だ。

しかも、戦闘になる可能性も考慮しなければならぬと言っているのに。

「……ガルム」

『潜んでいる人間はいない。正真正銘、三人のみのようなな』

『依頼人からの指定は時間と交換材料のみ。人数がいてもボクらが何とかできると思ってたみたいだね。』

あるいは、ボクらの戦闘能力を測るつもりだったのか……そっちも微妙だけど、正直ここで人数を揃えて来ないの思惑も分からない。

気を付けて、涼二』

「ああ」

スリスの言葉に頷き、雨音の体を抱え直しながら涼二は沈黙する。鉄森シアの思惑は恐らく二つ。もしも相手が力押しできたのならば、涼二とガルムの力で殲滅させ、ニヴルヘイムの力を測る事。

相手の実力も同時に測り、可能ならばそのまま乗り込み、研究資料と機具を奪取する事だろう。

相手が素直に応じるのならばそれでよし、研究成果を受け取り、その後雨音の調整の準備が済み次第、雨音を奪取すると言った所か。

『……スリス、スナイパーの可能性は？』

『無いね。対策の為に木々の多い自然公園を指定したんだし、射線が通るような建物は、既に依頼主さんが押さえてるよ。場所が奪取された気配も無い』

耳に響くガラムとスリスの言葉に、涼二はその視線を細める。素直に応じるつもりか、それとも腕の立つ少数人数か。だが、どちらにしる

( 直接戦闘なら負けはしない。そしてどのような結果でも、必ずこいつは取り戻す )

戦うための、覚悟を決める。

その細く鋭い氷の刃のような戦意を保ちつつ、涼二たちは自然公園の中へと足を踏み入れた。

僅かな風が木の葉を揺らす、そんなざわめきのような音だけが響き渡る中、足音を忍ばせる男たちはゆっくりとその場所を進んでゆく。その木々の間 暗視機能の付いたバイザーに映る視界に三人の姿を確認し、涼二は静かに目を細めた。

立っていたのは、研究者と思われる白衣の男が一人。

そして、その人物を護衛するかのように、二人のスーツの男が控えていた。

( …… 能力者、だな )

二人が 威嚇のつもりか 纏っているプラーナの強さから、そう判断する。

そして彼らも、そんな事を考えていた涼二の姿を見て、じっと体を強張らせていた。

今の涼二は、プラーナの力を抑えている状態ではない。その為、そ

の放出量の差を見せ付けられる形となってしまうのだ。  
能力者の位階は、伊達で付けられている訳ではない。  
最上位たる神話級フェアブラは、文字通り神話に名を残すほどの力という意味  
で名付けられているのだ。

「 静崎製薬の方ですね」

涼二達の側にいた男 例の災害級能力者ディザスターの男が、そう口にする。

それに対し、白衣の男がぴくりと肩を震わせ、声を上げた。

「あ、ああ……その通りだ。そこにいるのは雨音様だな？ 要求の物はここにある！」

「ふむ。では、それをこちらに」

「ッ……！」

あくまで冷静に、スーツの男はそう口にする。

それに対して相手は憤ったような様子を見せるが その仕草に、

涼二はどこか違和感を覚えていた。

何かが引つかかる、と。

涼二がじつと相手を観察しているその間、周りに控えていた男達がケースを回収し、中身の確認を始める。

そんな中、涼二はただじつと相手側の戦闘要員を見据えていた。少しでも戦うそぶりを見せれば、その刹那の内に凍て付かせる

そんな意志を込めて、相手を見つめているのだ。

「……ふむ、確かに。では、静崎雨音さんはお返ししましょう」  
(一時的に、な)

胸中でそう呟き、苦笑する。

そして涼二は雨音をそっと地面へと降ろし、一步、二歩と離れた。地面に座る雨音の視線　それを受け、涼二は小さく頷く。必ず迎えに行くと、その意志を込めて。

熱に浮かされた雨音は、ぼんやりとしながらもそれを受けて頷き

「　コード、《死喰いの女王》」  
エリュースニル

その全身に、輝く光のラインが浮かび上がった。

白衣の男の声が響くと同時、雨音の瞳からは意志の光が失われ、丹田の辺りにある始祖ルーンが輝き始める。

「ソウイル」  
「S」  
「ッ………!!」

戦慄と共に、涼二は後方へと強く跳躍した。

プラーナを全身へと行き渡らせ、可能な限り身体能力を強化し、遠くへ

刹那、満ち溢れていたプラーナが全て喰らい尽くされていた。

「が……ッ!？」

力が抜け、着地に失敗し、地面に叩き付けられる。

けれど、涼二はまだマシな方だった。状況を理解できていなかった黒服の男たちは、一瞬でプラーナを喰らい尽くされ、ミイラのように干からび、そして存在を分解されて消滅してゆく。

「これ、が……ッ」

隠し玉と言う訳か　　そう言おうとしたが、フェアブラ神話級の莫大なプラーナすらも瞬く間に失われてゆく中、涼二は意識を保つ事すらも精一杯だった。

その霞む視界の中、全身に光のラインを浮かび上がらせる雨音が、立ち上がってゆっくりとその足を踏み出す。

(拙い　!)

この状況では、逃げられない。

始祖ルーンの力に対抗する方法など、殆ど存在しないのだ。

もつれた足で逃げた所で、この力の効果範囲が一体何処まで存在しているのかも分からない。

(アレを、使うしか……)

失われてゆく力の中、奥の手とも言える力を使う事を決意し

涼二の体は、唐突に襟首を引つ張られ、休息に枯れ果てて行く自然公園から離れていた。

その速度に目を見開きつつも、目に入った黄金の毛並みに納得して涼二は頷く。

「ガラム……」

『大丈夫か、涼二？』

「ッ……あんまり、大丈夫じゃないかもな。魂までは行かなかったが、プラーナの大半を奪い取られた……全力で戦闘した後みたいない気分だ」

力の入らぬ四肢で何とかガラムの毛を掴みつつも、涼二は呻くように声を上げる。

余剰分であるプラーナは失われ、能力を使うにもかなりの消耗を強いられる事となるこの状況。

始祖ルーンに対抗する方法を持つにもかかわらず、一瞬躊躇ってしまった己自身に自嘲を浮かべ、涼二は深々と息を吐き出した。

「まさか、マインドコントロールまで受けてたとはな……流石に、予想外だろ」

『……休んでいろ、涼二。私が拠点まで連れてゆく』

「ああ……頼ん、だ  
」

眩き、涼二は目を閉じる。

黄金に輝く毛並みの上　　涼二の持つその黒い髪が若干伸びてい  
る事に気付いている者は、ガルムただ一人だけだった。



声が、響く。

狂乱と悲鳴。そして、苦痛に喚く声。

涼二は、誰よりもこの音が何であるかを知っていた。

そして、誰よりもどのような光景が広がっているかを知らなかった。それでもその光景が見えているのは、ただの想像の産物でしかないと言っ事なのだろう。

「痛い、痛いよ……暗いよ、何も見えない……お姉ちゃん、助けて……！」

「すぐに病院に連れて行くから！ ちょっとだけ、ちょっとだけ我慢して……！」

俯瞰する視界から見えるのは、二人の子供の姿。

一人は両目から血を流し、泣き叫ぶ小さな少年。そしてもう一人は、

その少年を背負って必死に走っている少女だった。  
周囲に広がるのは巨大な火災。空から降る炎の雨によって、二人の住んでいた場所は火の海と化していた。  
それでも、少女は走る。自分を庇って死んだ両親の遺志を、無駄にしないために。

「待ってて、もうすぐ……」

目が潰れ、見えていなかった光景。  
だからこれは、実際にあつたものとは異なっているだろう。  
けれど、それでも分かる。助かる筈が無い。病院も焼け落ち、両目を潰された少年を救う場所など存在しない。

(夢……)

涼二は、小さくそう呟いた。  
宙に浮かぶ己の意識、俯瞰する視点で見下ろす、かつて訪れた破滅の日。

15年前の、大災害。

その日、少年と少女は死ぬ筈だったのだ。

しかし、それは炎によるものではなく

「ふむ……こんな所にいた訳か」

「え、あ……た、助けてください！ 弟が、弟が怪我をして！」

二人の前に、一人の男が現れる。  
灰色の髪をオールバックにし、それと同じ色の長いコートを纏った  
大柄な男。

彼は、小さな少女の嘆願を無視し、静かにその手を掲げた。

「  
」  
ジュラ

その小さな声と共に現れたのは、長大な槍。  
無数のルーン文字が刻まれたそれは空を斬り、真っ直ぐと少女に向  
けて突きつけられた。

「救せとは言わぬ。存分に恨めば良い。だが、その命とそのルーン  
はここに置いて行け、《死の女王》<sup>ニヴルヘル</sup>」  
「ッ……!!」

槍が突き出される、その刹那。

少女の二つの瞳　その奥に、青白い輝きが灯った。

「  
」  
ハガラス スリサズ  
「H、Thー!」

その叫びと共に、彼女の周囲を取り囲むように巨大な竜巻が現れ  
た。

そしてそれと同時に、男の足元から伸びた氷の茨がその全身に巻き付き、彼の体を拘束する。

少女は風に乗って上空へと駆け上り、そのまま逃げる為に勢い良く飛んで行く。

その、刹那。

「え」

投げ放たれた槍が、少女の体に突き刺さっていた。

彼女は目を見開き、喉奥から血を溢れさせ、それでも何とか風を操りながら地面へと墜落してゆく。

(ツツ………!)

その光景を、燃え滾る憎悪を隠そうともせず、けれど声も出せぬほどに怒り狂いながら、涼二はただただ目に焼き付けるかのように見つめ続けていた

\* \* \* \* \*

「ツ、う……………」

「涼二！ 気がついた!？」

寝起きに響いた声に頭を抱えようとし 涼二は、体の動きが  
酷く鈍い事に気がついた。

震える手を見つめ、己が一体どうなってしまったのかを思い出し、  
そしてようやく覗き込んでいたスリスへと視線を向ける。

彼女の顔は、普段の飄々とした様子は何処へやら、泣きそうなほど  
に歪んでいた。

そんな表情をぼんやりとした頭のまま見詰めつつも、涼二は隣に立  
つガルムへと声を上げる。

「……………あの後、どうなった?」

「研究資料、雨音君、どちらも静崎製薬によって回収された。それ  
より大丈夫か、涼二?」

「ああ……何とかな」

プラーナを大量に削り取られた涼二の身体はかなりの疲労を訴えているが、それでも動ける程度には回復している。

手を握り、開き　そして、涼二はゆっくりとその身体を起き上がらせた。

いつもの拠点である高級マンションの一室、寝室として使っている部屋の大きなベッド。

深く息を吐いた涼二は、その視線を二人の方へと向けた。

「俺はどれぐらい寝ていた？」

「……大体、四時間ぐらい。依頼主の方にも連絡は入れてあるけど

……」  
「……分かった」

頷き、涼二は目を閉じる。

己の中にあるプラーナの総量を確かめ、そして静かに嘆息を漏らした。

普段は溢れんばかりに感じ取れるその力も、今ではかなり減少してしまっている。

「30%って所か……始祖ルーン持ちと戦うには結構キツイ状況だな」

「……涼二。この状況でも、戦うつもりか？」

部屋の片隅に立ち、鋭い視線で声を発するガルムに、涼二は小さく肩を竦めた。

確かに、状況は芳しいとは言えない　　いや、むしろかなり悪い状況だろう。

しかし、例えそうだととしても、涼二の心の内は既に決まっていた。

「あの時言った通りだよ、ガルム」

「……」

「俺は後悔したくない。ここで退けば、俺は確実に後悔するだろう」

確かに、無視すると言う選択肢が無い訳ではない。

けれど、そうしてしまえば、雨音を救い出す事は出来なくなってしまうだろう。

そんな後悔はしたくないと、涼二は視線に強い覚悟を込める。

「姉さんに似てるからとか、そんな理由じゃない。あいつを見捨てる選択肢は、俺が俺を許せないんだ」

「……ふ。やはり、お前はそう言うか」

ガルムは、小さく笑う。初めから分かっていたと、そう言うように。

その瞳には、涼二と同じような戦う覚悟が秘められていた。

そんな色に対して涼二は小さく笑う。どうやら、彼もまた最初から選択してしまっていたようだ。

そして、隣に並ぶスリスも小さく頷く。

「そもそも、ボク達の情報を持つてる雨音ちゃんを敵に渡す訳には行かない。喋りはしないと思うけど、それでも……ちゃんと連れ戻さないかね」

「ああ、そうだな」

笑みを浮かべ、涼二は立ち上がる。

若干ふらつく足を叱咤し、真っ直ぐと。

その身体に蓄積した疲労はかなりのものだが、それでも彼が折れる事は無い。

大きく背筋を伸ばし、涼二は二人へと向けて声を上げる。

「スリス、依頼主の方に連絡を入れてくれ。それと、静崎製薬の現在の状態に関して調査を」

「了解だよ、涼二」

「ガルトム、霊石の貯蔵はどれぐらいあった？」

「それほどの量は無かったと思うが……まあ、お前が一度全力で戦闘できる程度には回復させられるだろう」

プラーナの結晶体である霊石は、砕き割って吸収する事で、少量ながらプラーナを回復する事が出来る。

しかしかなりの高級品であり、小さな欠片でも数十万と言う高値がつくような品物だ。

それを複数持つて、しかも湯水のように使うような真似をするような者は存在しない　普通ならば。

涼二達がそれを所持しているのは、今まで戦ってきた相手から奪ったものがいくつか存在している為だ。



ちなみに、普通に買おうとすると足がついてしまうので、正規ルートでの購入は行っていない。  
尤も、大きな欠片を用いたとしても、涼二のプラーナ総量から考えるところごく一部しか回復できないのだが。

(それでも、無いよりはマシだ)

胸中で呟き、小さく笑みを浮かべる。

あの時の雨音は、キーワードによるマインドコントロールを受けていた。

つまり彼女を助け出すには、必然的に彼女と戦わざるを得なくなるという事だ。

しかし、彼女は始祖ルーンを持つ能力者、普通に戦うだけでは再びプラーナ吸収の餌食となる事だろう。

(……俺達でも、始祖ルーンに対抗するための方法はたった一つだけしかない。その為には、一瞬でいいから全力を出せる状況でなければ)

涼二は、胸中で小さく呟く。

三人の中で、始祖ルーンの力に対抗するだけの力を持っているのは涼二のみ。

故に、雨音と戦うのは彼となるだろう。

「……作戦が必要になるな。ガラム、頼めるか？ 俺はプラーナの

補給に行ってくる」

「ああ、了解した。では……三十分後に、スリスの部屋でという事にしておこう」

「うん、分かった。ボクも、色々調べとくよ」

「頼む。それじゃあ、一旦解散だ」

三人は頷き、それぞれの目的となる部屋へと向かって行く。

二人の背中を見送り、涼二は倉庫代わりに使っている部屋へと向かって行った。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

(……結局、プラーナは半分程度が限界か)

とりあえず動き回るのは困らない程度の力を回復し、涼二は廊下を歩く。

その身に宿すプラーナの総量は、普段のおよそ半分と言った所。周囲を一瞬で凍てつかせるような大規模な使い方は自粛せねばならない量だ。

己の身に刻まれたルーンたちを意識し、涼二は静かに目を瞑る。

「……よし」

確信を得て、小さく頷く。

全ての力を問題無く発動出来る事に安堵し、涼二はスリスの部屋の扉を開けた。

若干薄暗く、その中にぼんやりと浮かび上がる数多くのディスプレイ。

めまぐるしく変化するウィンドウの中には、主に静崎製薬社内の見取り図のようなものが多く見受けられた。

そんな画面たちの前で話し合っていたスリスとガルムの二人は、涼二の気配に気づいて振り返る。

「涼二、もう大丈夫なの？」

「ああ……と言っても、とりあえずだけどな」

戦闘行動に支障はないが、それでも全力を出せるかと聞かれれば微妙な所だ。

それでも、勝算はある。ならば、それを最大限に生かす方法を取ればよいだけ。涼二は、頷きながらガルムへと視線を向けた。それを受け、彼もまた小さく頷く。

「さて……今回の事に関して、依頼人の見解だが」

「こちらは、これ以上のリスクを冒す事は危険、と判断しました」

ディスプレイの一つに映った画面、そこに映る一人の少女が声を上げる。

どうやら、既に話を交わしていたらしい。鉄森シアに対して首を傾げ、涼二は声を上げる。

「いやに諦めがいいんだな」

「いいえ、諦めてはおりませんわ。ですが……」

「生憎と、鉄森グループの手勢に、始祖ルーン保持者に対抗しうる能力者は存在しないそうだ」

「ああ……まあ、そりゃそうだな」

横から響いたガルムの言葉に、涼二は小さく肩を竦めた。

ある意味、当然と言えば当然だ。フェアブラ神話級すら珍しいのに、その上を行く始祖ルーン保持者への対抗手段などそうそうありはしない。そして、彼女の手に届く範囲にいる可能性は

「故に、彼らとの直接戦闘はあなた方にお任せいたしますわ」  
「まあ、初めから増援は期待してなかったし、それに関しちゃん問題ない」

嘆息交じりに額へと手を当て、そして涼二は今更ながら素顔を晒してしまった事に気が付いたが、相手も顔を出しているのだからあまり差は無い。

涼二は、既にこの相手の事を警戒に値する人物と認めていた。簡単に手放してくれるとも思えず、そして雨音の事もある為、協力はしなければならぬ。

最終的には、スリスの調査次第となってしまうだろう。

「わたくし達が協力できるのは、あなた方の撤退……そして、奪取したデータによる、静崎雨音の調整です」

「……つまり、今後も協力体勢を結びたいと？」

内心、涼二は舌打ちする。

協力とは名ばかり　これは人質を取られているのと同じ状況なのだ。

雨音は、その体質を完全に元に戻さない限り、調整無しでは生きてゆく事が出来ない。

雨音の命を盾に協力させられる関係　そういったものも有り得るのだ。

警戒の度合いを高め、涼二は視線を細める。が、そんな表情に対し、シアは少しだけ口元を綻ばせた。

『協力というより、共闘でしょうか。わたくしは、あなた方と対等な関係で臨みたいと思っておりますわ』

「……何？」

涼二は、思わず眉根を寄せる。

ガルムも意外だったのか、同じように訝しげな表情を浮かべていた。確実に優位を取れるこの状況で、彼女は何故その立ち位置を放棄したのか、と。

「どういっつもりだ？」

『人の感性を持つている者相手には、人として対応した方が良く』

『そう考えただけですわ』

その言葉に涼二は顔を顰め、対してガルムは感心したように目を見開いた。

シアは、涼二達が雨音に対して情を抱いていた事に気づき、同じように対等な関係を築こうとしているのだ。

利用し、利用される関係では、信頼と言うものが発生する事は無い。だが、対等な関係としてならば、『感謝』というおまけが付いてくる事があるのだ。

それを見抜いているから、彼女は対等な関係を望んだ  
立場を捨ててまで。 優位な

「……厄介な手合いだな、アンタは」

『褒め言葉として受け取っておきますわ』

「まったく……了解した。静崎雨音の奪還はこちらに任せて貰おう。  
正直、増援があつたとしても邪魔なだけだ」  
「災害級ディザスターぐらいなら欲しい所だけど、それ未満だと流石に邪魔になるからねえ」

涼二の言葉に、肩を竦めながらスリスが同意する。

戦闘向けではないスリスだとしても、災害級能力者程度ならば赤子の手を捻るようなものだ。

下手な増員は息を合わせる事も難しい為、返って邪魔にしかならないだろう。

「さて、では作戦だが……まあ、相手もこちらが来る事を予測している以上は、潜入してもそれほど意味は無いだろう」  
「ふむ……」

ガルムの言葉に、涼二は小さく呟きつつ口元へと手を当てる。  
警戒されているのだから、雨音だけを連れ去ると言う訳にも行かないと言うのは確かだ。  
連れ去る前に、再びあの能力を発動されてしまうだろう。

「故に、今回は正攻法だ。正面で盛大に暴れ、注目を集めている間に、まずはセキュリティの中枢を押さえる」  
「ここだね。25階……ここをボクが担当するって事だね？」  
「その通り。そこで建物全体のシステムを掌握する　そうすれば、涼二が目的の場所まで辿り着けるだろう」

「……そこで、雨音を確保か」

普段ならば、スリスが出る必要は無いだろう。

しかし、内部からでなければ手に入らないデータ、そして 誰にも見せる訳にはいかなない能力というものが存在している以上、彼女が出撃した方が確実だ。

「その正面で暴れるのはお前がやるって訳か？」

「ふふ……迷い込んできた金色の毛並みを持つ刻印獣が、ルインクリーチャー運悪く建物の前で暴れるだけだ」

ルインクリーチャー刻印獣というのは、ルーン能力を持つて凶暴化した動物の事だ。

時折人知を超えた力を発するものも存在し、非常に恐れられている存在でもある。

倒して報奨金が出るほどなのだから、その危険性が窺えるであろう。そんなモノが暴れば、当然ながら騒ぎになり、戦える者は前へと出て来る事だろう。

「その混乱の間に俺達が侵入する、か……単純だが、分かりやすいな」

「だが、その分雨音君の警護は厳しくなるだろう。お前にかかっているぞ、涼二」

「……分かってる、何とかするさ」

ガラムの胸板を拳で叩き、涼二は笑う。

そこにあるのは、決して悲壮な覚悟ではなかった。



「やるぞ。必ず勝つ」

「勿論！」

「ふふ……」

そして ニヴルヘイムは、本格的に動き出したのだった。

緑の光に包まれた周囲が、緩やかに揺れる。  
半ば沈んだ意識のまま、雨音はぼんやりと周囲の光景を見つめていた。

衣服は奪われ、淡い緑色の液体に満たされた容器の中、その意識は覚醒と喪失を繰り返す。  
そしてその長い髪は、水の力で広がり緩やかに漂っていた。

（スリスさん、ガルム様……）

その中で僅かに残った意識は、連れ去られた時の事　あの三人と共に話をし、食事をし、ゲームをした時の事を思い返していた。僅かな、本当に短い時間だったけれど、確かに穏やかで楽しかった記憶。

そして

(涼二、様……)

冷淡で、けれども仲間達の前では優しく穏やかな表情を見せていた青年。

彼の姿を思い出し、雨音はまどろむ意識の中で静かに目を閉じていた。

その姿を、出来るだけ明確に思い返す為に。

(私も、仲間になれたら……同じような表情を、向けて頂けたのでしょうか?)

益体もない思考に、しかし苦笑するほどの意識の余裕も存在しないまま、雨音はぼんやりと思考を続ける。

自分に対し、どこか切なそうな視線を向けていた彼。一体何を考えていたのか、僅かな付き合いしかない雨音には分からない。

けれど、それを無視する事は、彼女には決して出来なかった。

(貴方は何を考え、そして何を望んでいたのですか?)

分からない。

雨音は、分からない事はいつも諦めながら過ごしてきた。

知りたいと思っただとしても、それを知る為の方法がなかったから。

だからいつも諦めていたのだ。『無駄だから』と、『意味が無いか

ら』と。  
けれど

(知りたい……)

何故彼は、自分の姿を見た時に驚いた表情をしていたのか。  
何故彼は、誘拐してきた自分に対し、ああも色々話をして  
くれたのか。

何故彼は、皆でゲームをして遊んだ時、ああやって笑顔を  
向けてくれたのか。

そう、雨音は思ってしまった。

知りたいと。氷室涼二と言う青年の事を知りたいと。

そう、思ってしまったのだ。

(けれど　　もう、会えませんかよね)

彼の事を殺そうとしてしまった。その事実が、雨音の心を苛んで  
いたのだ。

僅かに動く手で、彼女は己のルーンをそっと撫でる。

涼二が人を癒す力だと言っていたこのルーン　　けれど、雨音に  
はこれが呪いのように思えてならなかった。

仲良くなってくれた人々とも触れ合う事ができない、そんな呪いな  
のだと。

(……だから、来ないで)

警報が鳴り響いたのは、そんな瞬間だった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「さてと、準備完了かな」

スリスの小さな声が路地裏に響く。

涼二、スリス、ガルムの三人　　強大な力を持つ神話級能力者が  
集合する。

そんな周囲の様子を見据え、涼二は声を上げた。

「それじゃあ、手筈どおりにか」

「うむ。陽動は任せてくれ」

いつも通りのコートとバイザーを装備した涼二と、それと全く同  
じ服装をしたスリス。

二人は互いの装備を確認し、そして涼二の<sup>ラクス</sup>の力を利用して、隣に  
立っている雑居ビルの屋上へと登って行った。

そんな二人の姿を見送り、ガルムは小さく息を吐き出す。

その格好は普段と変わらず、何処にでもあるようなスーツ姿  
けれど　　彼にとって、変装など元々無意味なものなのだ。

「<sup>エウス</sup> Eh、<sup>テイワズ</sup> T、<sup>ラド</sup> R」

ガルムの太い両腕と胸元にあるルーンが輝きを放つ。

その輝きと共にガルムの全身は頭髮と同じ黄金の毛に包まれ

「<sup>イラストス・ベステイア</sup> 《血染めの狼》」

その姿は、巨大な人狼へと変化していた。

馬と変化を表す獣化のルーン、<sup>エウス</sup> Eh。戦いと勝利を表す身体強化の

ルーン、T。<sup>ティウス</sup>そして乗り物や騎乗を表す加速のルーン、R。<sup>ラド</sup>それによって生み出されるのはただ強く、ただ速い獣 純粹な強さのみを追い求めた、ガラム・グレイスフィーンのルーン能力。

『さて……では、往くとしよう』

そして ガラムは、強く地を蹴った。

勢い良く上空へと跳躍した巨体はゆったりと滞空し、そして静崎製薬ビルの真正面に着地する。

その巨体は獣化に伴い重さも格段に上昇している為、着地の衝撃だけでビルの前にある広場の地面が砕け散る。

轟音を響かせる巨体に、警備員達もすぐさま気付いて反応した。

「な……刻印獣!? 何でこんな所に!？」

「このッ!」

入り口の両側に立っていた警備員、その左側にいた男が、ガラムへと向かって拳銃を発砲する。

小型ながら十分な威力を持つ銃は、正確にガラムの身体を撃ち抜こうとし

(止まって見える……)

けれど、Rのルーンを発動したガラムには、銃の弾丸などその程

度のものでしかない。  
弾丸を躲しつつ接近したガルムは、鋭く伸びた鉤爪で、男の身体を容赦なく薙ぎ払った。  
鋼すら抉る五条の一閃は、警備員の身体を容赦なく細切れにし、周囲へと撒き散らす。  
一瞬で血に染まる周囲と、ガルムの胸元。その獰猛な視線は、すぐさまもう一人の方へと向けられた。

「ひ……ッ！ お、応援だ！ 応援を寄越せ！ ビルの前でバケモノが暴れてる！」  
(……そうだ、それでいい)

出来るだけ騒ぎを起こし、腕の立つ人間をこちらに集める事がガルムの目的だ。  
故に、応援を呼ばれる前に倒してしまつては意味がない。  
その為、彼へと手を下すのは若干遅らせていた。が 彼は、もう用済みだ。

元々、ガルムは殺人を好むような人間ではない。  
出来る限りは殺さないようにするし、殺すにしても一瞬で殺す事を心がけている。  
しかし、それは必要な場合のみに限つた話だ。  
ここでは、己が人間である事を気付かれてはならない。故に、獣として振舞う必要があるのだ。  
目的の為ならば己の意思すらも黙殺する。ただひたすら、機械のように己が目的を果たす。  
それが、ガルム・グレイスフィンと言う男だ。



例え、悪と断じられようと。

涼二の言葉が、ガルムの脳裏に蘇る。

それに対して口元に小さな笑みを浮かべ、ガルムはその爪を振り下ろした。

「  
エイウズアルジズ  
E、Z！」

刹那、現れた緑の障壁が、ガルムの鋭い爪を受け止めていた。

小さく目を細めながら距離を取れば、ビルの中から現れたのは警備員を引き連れた一人の男。

(……防御系のルーン能力者か)

涼二から聞いた報告を思い出し、ガルムは納得しつつ低く構える。そしてそれとほぼ同時、男の背後に構えていた警備員達が、一斉に銃を構えた。

それと共に、ガルムは全身にプラーナを行き渡らせる。弾丸が発射される直前　　ガルムは、強く跳躍した。

「なッ!？」

そのままビルの側面へと飛びつき、爪を突き立てる事でその側面

を駆け抜ける。

目指す先は、正面にいる警備員の集団。

プラーナを放出　　光を纏う爪が、彼らの中心へと振り下ろされる。

「散開！」

『遅い……！』

小さく、聞こえないように呟く。

そしてその刹那、振り下ろされた爪が避けようとした人々の身を引き裂き、迸った衝撃波が残った人間を吹き飛ばす。

ルーン能力者の男はかろうじて防いでいたが、その直後に横殴りに回転して叩き付けられたガルの蹴りが、その障壁を紙切れか何かのように引き裂いていた。

そして、反転。

『オオオオオオッ！』

一直線に突き出された手刀　　その鋭い爪の先端が、男の胸を容赦なく貫いた。

「が、ふ……！」

『……………』

血を吐き出す男の顔を、残った左手で掴む。

そして、ガルムはその首を折り、職務を全うした男の命を終わらせた。

男の体を地面に落とし、そしてガルムは再び跳躍する。

その体を貫こうとしていた弾丸は空を貫き、そしてそれを放った警備員は、上空から振り下ろされた踵落として碎け散った。

そして、左右に向けて振り払われた両腕が、その横にいた男二人を裂く。

黄金に紅を纏わせ、ガルムは構えた。

まだ、敵の気配はしている。

『強いプラーナの気配……ふむ。ディザスター災害級ほどの能力者がいるか。これは、多少は楽しませて貰えそうだ』

小さく嗤い、ガルムはその気配が到着するのを待ちながら、周囲を取り囲む警備員たちへと躍りかかった。

加速した手刀の一撃が警備員をその装備ごと両断し、直後に跳躍して弾丸を躲す。

追い続けるように乱射される弾丸を次々と躲しながら、ガルムは近くに立っていた街灯の柱を切断し、それを近くにいた敵へと向けて蹴り飛ばした。

「うわぁッ!？」

男たちはそれをかろうじて躲すも、巻き込まれた事で次々と転倒

してゆく。

ガラムはその街灯を追うように駆け抜け、それを掴み取る。巨大な街灯を片手で持ち上げたガラムは、それを用いて警備員たちを横から薙ぎ払った。

「い」

「げあアツ!?!」

その一撃の重さは、高速で走る電車に撥ねられる以上の衝撃となる。

人体など容易く砕け散るその一撃　しかしガラムは、背筋を懸け上がる悪寒に、すぐさまその街灯を手放していた。

そして代わりに繰り出された鋭い爪が、上空から振り下ろされた光の刃を受け止める。

そこにいたのは、手刀から光剣を伸ばす一人の男。

「よくも、誠治を……!!」

「裕樹!　その化け物を押さえている!」

現れたのは、二人のルーン能力者だった。

ガラムに接近している光剣の男は、高速で駆け抜けながらその剣で攻撃を繰り出してきている。

(涼二が言っていたもう一人の能力者が　)

胸中で呟き、ガルムも駆ける。  
相手が持っていたルーンはDとR。<sup>タガス</sup><sup>ラド</sup>加速型軽戦士系の使い方をして  
いる能力者。  
確かに、加速は単純で強力なルーン能力である。  
が

( それ以上の加速を持つ者には、意味が無い )

プラーナをRのルーンに集中、それと共にガルムは強く地を蹴つ  
た。

刹那の内に肉薄し、その速さに男は目を見開く。  
突き出される爪 　しかし、男もまた消耗を度外視して加速した  
のか、その一撃に光の剣を合わせ、受け流して見せた。

( ほっ…… )

内心で、ガルムは感嘆の息を吐き出す。

あの土壇場でこれだけの反応を見せたのだ、どうやら能力だけと言  
う訳ではなく、しっかりと剣を扱う訓練を受けているようだ。

男は下段から振り上げるようにガルムへと向けて一閃を繰り出す。  
ガルムがその一撃を左の爪で受け止めつつ蹴りを放てば、男はその  
一撃を後ろに跳躍しながら剣で受け、衝撃を殺しながら距離を取っ  
た。

一撃でも喰らえば死へと直結すると言うのに、中々に上手いものだ、  
とガルムは感心しつつ駆けようとし

「スリサス  
Th！」

『ぬ……！？』

地面から伸びた茨が、ガルムの体を縛り付けていた。  
氷の巨人を表す妨害のルーン、Thスリサス。その力は、確かにガルムの動きを止めていた。

（あちらが災害級か！）

位階は一つ劣るとは言え、非常に強大な力を持つ能力者。  
力任せに破る事も出来るが、いかなガルムとは言えども若干のタイムラグは存在する。  
そして

「Kカン！ 燃え尽きるッ！」

男の掲げた手の上に発生する、巨大な火球。  
炎と始まりを表す火炎のルーン、Kカン。いかなガルムとは言え、正面から喰らえば無傷では済まない。  
故に

『ウウオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアッ……！』

「　　っ!？」  
「ひッ!？」

極大の殺気と力を込め、ガルムは雄叫びを放っていた。

びりびりと震える空気は物理的な圧力すら伴って周囲へと叩きつけられ、知覚にあったガラスにヒビすら走らせる。

気当たり、というものが存在する。強い殺気や威圧のこもった視線を受けると、人はどうしても萎縮してしまうものだ。

獣の威嚇は特にそれが強いと言えるだろう。

無論、訓練されている人間が相手では、動きを止められたとしても一瞬のみ。

けれど、ガルムにとっては一瞬だとしても十分すぎる時間となる。

『ガアアアアアアアアアッ!』

「こ、このオ！」

ガルムへと向けて、男の炎が放たれる。

けれどその一瞬前に、ガルムは茨による拘束を抜け出していた。

強い踏み込みと共に景色を置き去りにし、爆発する炎すらも推進力へと変えて、その爪は一直線に男の首を刎ね飛ばす!

悲鳴を上げる暇すらなく絶命した男からは視線を外し、炎の先

未だ状況を理解していないであろう光剣の男へと向けてガルムは駆ける。

炎を吹き散らし、ただ前へ。

「なっ、貴様ッ！」

男もガルムの姿に気付き、光の剣を発生させるが　　遅い。  
その時点で、ガルムは既にその爪を振り上げている所だったのだ。  
そしてこの体勢では、受け流すと言う選択を取る事は出来ない。  
結果

「がッ!？」

振り下ろされた一撃に、男は地面へと叩き伏せられていた。  
動く事もできない状態なのか、荒い息で痛みに喘ぐ男を、ガルムは  
静かに見据える。

「どう、して……こんな……」

『　　ただの、エゴだ』

「な　　」

人の言葉を解した事に驚愕したのだろう、男が目を見開く。  
けれど、それが彼の最期の反応だった。  
振り下ろされた爪は正確に男の首を切り裂き、その胸から分離させ  
る。  
血を吹き出して倒れた男の痛いから視線を外し、ガルムは静かに視  
線上げた。

『　　……後は、お前達の出番だ。頑張ってくれ、二人とも』



そう呟く狼の姿  
な形に変化していた。

けれど、その口元はどこか笑っているよう

「派手にやってるみたいだな」

「うん。ボクらも頑張らないとね」

涼二の言葉に、スリスは小さく頷く。

ビルの上から見えているのは、人狼へと変身したガルムが、その身体能力を遺憾なく発揮して大暴れしている光景である。

あまりにも速く、あまりにも強く、そしてあまりにも荒々しいその戦い方に、スリスは小さく肩を竦めた。

「しっかし、張り切ってるなあ」

「確かに。随分とやる気だな、あいつも」

「まあ、それに関しちゃう僕たちも人の事は言えないけどね」

互いに笑い合い、そして二人はビルの方へと視線を向ける。真夜中のそこは、窓から漏れる光以外に照らし出されるものは無い。尤も、バイザーを掛けた涼二と、暗視カメラからの映像を直接電気信号で見ているスリスには、暗闇など何の意味も無いものではあったが。

「……さて、スリス」

「うん、もういいと思うよ」

正面入り口の状況を覗き込みながら、スリスはそう口にする。

そこには既に大量の屍と、それでもガルムの侵入を阻もうとする警備員達の激戦が展開されていた。

圧倒的な差にもかかわらず逃げない辺りは、しっかりと金を受け取ってやっているプロの仕事というイメージがある。

また、内部で動いている警備員　彼らもまた、入り口の方へと集中してきている為、内側の警備はかなり手薄な状態になっていた。

つまり、今ならば容易く侵入する事も可能と言う事だ。

とはいえ、この状況では、最早戦闘は避けられない。

無理矢理制御室まで突入してビル全体の制御を奪い取り、その後涼二が目的の場所まで行く必要があるのだ。

決して油断する事は出来ないし、失敗も許されない。

けれど。

「……涼二」

「ん、どうした？」

スリスは、じっとビルを睨む涼二へと囁きかける。  
その傍らに、まるで支えるかのように寄り添いながら。

「必ず、成功するよ。だから、自信を持って」  
「……！ ああ、必ずだ」

スリスの言葉に、涼二は口元に小さく笑みを浮かべる。  
その腕に抱き寄せられる事に僅かな満足を得て、スリスもまた笑みを浮かべていた。  
そして、涼二の手の中に水の塊が発生する。  
彼の視線は真っ直ぐと、向かうべき場所へと向けられていた。

「涼二、見えてるよね？」  
「ああ、目標地点は分かってる。その先のシミュレートもばっちりだ」  
「けど、ボクがここに参加している以上は、突発的な状況には対応しづらいから注意してよ？」  
「分かってる。お前も頼むぞ？ 俺が本気で戦うには、お前の協力が必要不可欠なんだからな」  
「うん、勿論だよ」

そういつて、スリスは嬉しそうに笑う。  
頼りにされている事が何よりも嬉しいと、そう言っかのように。

けれどそれを口に出す事は無く、彼女は強く涼二の体にしがみついた。

そしてしっかりと掴まっている事を確認し、涼二はその手の水をビルの屋上へと向けて伸ばす。

屋上の手すりに巻きついた水がしっかりと体重を支えられる事を確認し、二人は、視線を合わせて頷き合う。

「行くぞ」

「うん！」

そして、二人は勢い良く空中へと身を投げた。

水のロープは二人の体重をしっかりと支え、加速しながら真っ直ぐにビルへと突っ込んで行く。

涼二のバイザーにはその突入すべき場所がしっかりと表示されており、二人の身体は一直線に目的地へと到達した。

例え強化ガラスだったとしても、涼二の力に貫けないはずが無い。氷の弾丸によって無数の穴を空けられた窓ガラスは、その蹴りの一撃によって見事に破壊された。

ビルの中で着地に成功した二人は、すぐさまその廊下を走り出す。流石に人目に付かないようにと言う訳には行かず、少なくともはいるものの、警備員は確かに存在していた。けれど

「H、A  
ハガラスアンサズ

ジャミング  
《妨害電波》！」

スリスがルーンを発動させる。

放たれるのは、警備員達の連絡危機を妨害する為の強力な電波だ。涼二達の姿を見て仲間へと応援を呼ぼうとしていた警備員は、ノイズしか発しない通信機に目を見開く。そんな様子を見つめながら笑みを浮かべ、スリスは声を上げた。

「涼二、ここはボクがやるよ。涼二はプラーナを温存してて」

「ああ、頼む。けど、無茶するなよ？」

「大丈夫、涼二ほど無茶はしないから」

それに関してはお互い様だと彼女は笑い、涼二は小さく肩を竦める。

そんな様子にスリスは再び笑みを浮かべ　その周囲に、雷光が迸った。

彼女の向かう先に存在するのは、武器を向けて威嚇している数人の警備員達。

「サキタ・インドラ《インドラの矢》！」

彼女の周囲を待っていた雷は、その言葉と共に幾条もの閃光となつて虚空を貫いた。

放たれた光は避ける暇も与えず彼らに突き刺さり、その身体に強力な電圧を叩き込んだ。

痺れて倒れる彼らの横を走り抜け、スリスは小さく笑う。

「運が良ければ死なないよ」

「やれやれ」

電流を抑えているから死にはしないだろうが、その身体にかかった負荷は並々ならぬものだ。

決して、そのまま起き上がれるようなものではない。

下手をすれば障害を残しかねないものだが、スリスには全く罪の意識と言ったものは存在しなかった。

彼女は通常の教育を受ける事無く、ただただ実験体として生かされてきた存在だ。

解放され、一般的な知識を身につけた今となっても、その倫理観は常人と遙かに乖離したものとなっている。

「……」

けれど、涼二にもそれを咎める意思は存在していなかった。

スリスは何を聞かされたとしても自分自身に付いて来る　　その確信があったから。

そして、スリスもまた、それに違わぬ強い意思を持っていた。

「よっ、ほっと……うん。涼二、ここからは別行動だよ」

「ああ、俺は上に向かう。お前は、セキュリティルームの制圧を頼んだぞ？」

「任せて。それじゃあ」

「　　幸運を」

互いに拳を突き合わせ、二人は別々の方向へと走り出す。

スリスはセキュリティルームの方面へ、そして涼二はエレベーターの縦穴の中に潜み、雨音がいる場所が判明するまで身を隠すのだ。掛けてゆく涼二の背中を感じ取りつつ、スリスはセキュリティルームの方へと駆けて行く。

「さーて、と」

涼二と同じバイザーを装備するスリスには、このフロア内の正確な情報を読み取る事ができた。ともあれ、頭の中にその情報を正確に再現する事が出来るスリスには、このフロアのマップなど直接ゲーム内に入り込むタイプのゲームと変わらない。

無論、直接目で見ている訳ではなく、能力を使った視認に過ぎないのだが。

しかし、そこには正確な地図と立体映像、そして警備員達の動きを正確に把握していた。

「ほいっと」

スリスのそんな軽い声と共に放たれた電撃は、壁に反射して軌道を変えると、その先から向かってきていた警備員の身体を打ち据える。

神話級能力者のスリスならば、もっと高い出力で能力を放つ事が出来る。

それこそ、天から落ちる雷をそのまま再現する事だって可能なのだ。けれど、彼女はそれをしない。Aアンサズを持つ彼女は、人を倒す最低限の



威力を心得ているのだ。  
あまり手加減をする事は無いが。

敵を殲滅した事を確認したスリスは、マップ内で付近を動く相手がいない事を確認すると、近くにあった防火扉の制御盤へと手を触れた。

「ハガラスアンサズバース  
H、A、P

フルミーナ・クラッカー  
《電光の侵入者》  
」

そしてスリスは、Aの力によって作り出した分割思考を、制御盤を通して社内のネットワークへと侵入させる。

(とりあえず、防火扉が下りてきてもらっては困るから、その部分をシャットアウトする事として……)

さらに、セキュリティルームの扉にかかった電子錠を解除する。その部分の制御は内部からの操作権限を切り離し、さらにある程度のセキュリティシステムを解除。  
本来ならば気付かれないように慎重に行う操作だが、今回は気付かれてでも無理矢理止めればそれでいい。  
無論の事、泡を食ったオペレーターたちはスリスの操作を妨害しようとしてくるが

(ボクの侵入を止めなきゃ、スーパーコンピュータでも持つてくるんだね)

胸中で呟き、スリスは小さく笑う。

この階層のあらゆるセキュリティを支配し、ようやくその手を離したスリスは、目の前にある扉を前に少々考え込んでいた。

(どうしようかな……待ち受けてるんだよね、確実に)

スリスはカメラを支配して、内部の状況を既に把握している。

罵声を上げながらキーボードを叩いていた彼らは、今でも制御を取り戻そうと躍起になっている所だろう。

けれど頭が回る人物なら、スリスが次にセキュリティルームそのものを制圧しようとする事が分かる筈だ。

そしてスリスの能力は、室内ではかなり使いづらい威力を持っている。

持っているルーンの中で戦闘に用いる事の出来るものはHのみ。ハガラス

そしてその力は、全てのルーンの中で最も高い破壊力を持つとされている。

下手に使えば、セキュリティルームの機械を破損させてしまうのだ。

「……しょうがない。ちょっと疲れるけど、アレで行くか」

嘆息し、スリスは再び能力を発動しつつ、微弱な電気を周囲へと向けて流してゆく。

そしてそれと共に、スリスはセキュリティルームの扉を開いた。

同時　　多くの銃口が、スリスへと向けられる。

それを受けて、スリスは両手を挙げながら口元に笑みを浮かべた。

銃口を向ける男の内、一人が声を上げて威嚇する。

「何者だ、何の為にこんな事をする!？」

「そりゃ勿論、囚われのお姫様を助ける為だよ」

当然だ、という風にスリスは肩を竦め、断言する。

無数の銃口を向けられたこの状況　下手をすれば一瞬で命を失うというのに、彼女の言葉には何処までも余裕が満ち溢れていた。そんな様子のまま、スリスは続ける。

「君達だって分かってるんだろう？　この会社が、非人道的な実験を行ってるって事ぐらい」

「っ……」

その言葉に、数人がびくりと肩を震わせる。

やはり、この会社が雨音に対して行ってきた実験を知っている者がいる。

そして、知りながらそれを見て見ぬ振りをして来たと言う事も。

嘲笑うように、スリスは笑みを浮かべた。

「酷いよねえ。何も知らない子供を連れてきて、小さい頃からずっと実験台に利用してきたんだらう？」

可哀想だよな、雨音ちゃん。何も教えられず、ずっと軟禁されて利

用され続けてきた……何とも思わないのかな？」

「ッ、五月蠅い！」

「ああ、自分は知っているだけで無関係だからって事？ まさかそんな訳ないだろう？ 誰も助けてあげなかったのなら、同罪に決まってるじゃないか」

スリスは嗤う。何も知らない人間を食い物にして、利用してきた愚か者達を。

光を奪ったあの研究者と同じ、この外道達を 降霧スリスという少女は、決して許しはしない。

「彼女が助けを求めていなかったとでも思ってるの？ ただの道具とでも思ってたわけ？  
それとも、給料貰ってやってるんだから、文句は言えないって？  
そんなの言い訳に過ぎないって」

刹那、大きく響く乾いた音と共に、スリスの身体が揺れた。  
赤い飛沫が、宙を舞う。

「黙れ、化物！ これはなあ、お前達なんかには邪魔されていい実験じゃないんだよ！」

「お、おい！」

引き金を引いたのは、部屋の端に立っていた一人の男。

彼は傾ぐスリスの身体へ向け、さらに二度、三度と繰り返して弾丸

を放った。

狂ったような笑みを浮かべる男は、次々とまくし立てながら倒れた彼女へと銃を向ける。

「この実験が成功すれば、様々な場所から仕事が舞い込む！分かるか、こんなモノ見逃せるはずがないんだよ！

どうせ何もしなきゃ勝手に死んでたか、ユグドラシルに吸収されたガキなんだ、だから俺達が有効活用

「ああ。つまり、ボクを怒らせたって訳だ」

そして次の瞬間、男の両足は背後から放たれた風の刃によって切断されていた。

「ぎっ、あああああああああああああッ！？」

絶叫と同時、男の思考を混乱が支配する。

確かに、スリスは入り口の場所で倒れていた筈だと言うのに

「残るは君だけなんだけど……遺言はあるかなあ？」

「な、何で……！？」

彼女は、背後からゆっくりと歩いて来る所だったのだ。

いつの間にか入り口付近で血の海に倒れていた身体は消え、そして周囲のオペレーターたちは全て絶命し、スリスは無傷のまま逃げる

事もできない男へと近寄ってゆく。  
その口元に浮かぶのは、凄惨な笑み。

「人を動かしてるのって、結局は電気の信号なんだよね。あらゆる情報も、脳が神経使って処理している以上、何らかの電気信号に変換されて体の中を駆け巡ってる訳だ」  
「なっ!？」

男は、利益に意識を取られがちな人物ではあったが、それでも深い知識を持つ人間だった。  
故に、スリスの言おうとしている事が理解できてしまったのだ。それが、常識的に考えてありえない力であるという事も。  
そんな事が出来るこの少女は、一体何者なのか　そんな言葉が、恐怖と共に男の思考を支配する。

「だから、さ。その電気信号を弄ってあげれば、幻を見せる事だって可能だと思わない？」

「ば、かな……そんな事、出来る訳」

「それが出来るんだよ。君達みたいな下衆の所為で、さ」

スリスは嗤う。その笑みの中に、特大の憎悪を込めて。  
両目から光を奪ったユグドラシルと同じ、この外道共へと　た  
ただだ、純粹な殺意を向ける。

「どうして……そんな簡単に、人の幸せが奪えるのかなあ。幸せじ

やなくても、せめて不幸じゃない状態ぐらいには放っておいて欲しいのにな」

「ひ、い……」

「結局、自分が良ければそれでいいんだよねえ……だから」

声が、低く絞られる。

その全身が纏う雷光と風　怒りの中でも、その嵐のルーンを完全に制御しながら、スリスは嗤う。

「ボクも、自己満足させて貰うよ」

「ぎっ、がああああああああああああ！？」

そして　男は、雷光の中で神経に極限の痛みを流されたまま、風の渦の中で寸断され尽くして行った。





「ふッ！」

「ぐあっ!？」

鋭い呼気と共に、涼二は駆ける。

その手の中にはコンバットナイフが一つ　袖の中から取り出したそれを、涼二は前方にいた警備員へと向けて投擲した。真っ直ぐに飛んだナイフは男の手に突き刺さり、彼が持っていた拳銃を地面へと叩き落す。

そしてその隙に、涼二は一瞬で男の懐へと肉薄していた。

「な……!？」

突如として目の前に現れたその姿に驚き、男の身体が硬直する。そしてその隙を、涼二は見逃さなかった。上向きに放たれた掌底が、

目を見開いたまま硬直している男の顎を打ち据える。

一撃で意識を消し飛ばされた男は、そのまま力なく仰向けに倒れて行った。

ナイフを回収し、涼二は再び前進する。

流石に、足がつきそうな品物を残して行く訳にはいかないのだ。

(予想外に足止めを喰らったな……こっちに何かあるのか?)

貨物用エレベーターへと向かう途中に受けた妨害に、涼二は小さく目を細める。

この階層のマップへと視線を向け、そこにある反応には特におかしい部分はなく、涼二は首を傾げていた。

マップ内で警備員として表示されているマークは、彼らの持っている通信機などの反応を用いて位置を割り出している。

その為、そういった装備を持たない人間は表示されないのだが

「……プラーナの気配」

涼二は、小さく呟く。

離れていても分かる、強力なプラーナの波動。

意図的にある程度放出していなければ、こんな風を感じ取る事は出来ないだろう。

そしてこの密度は、間違いなく災害級以上の力がある。  
ディザスター

(誘ってる、って訳か)

胸中で小さく呟き、涼二は静かに意識を集中させた。

感じ取る事が出来るプラーナは、非常に強力なもの。集中さえすれば、何処にいるか程度は把握する事が可能だ。  
しかし

(確実に畏だな。だが、それにあえて乗るかどうか )

もしも、雨音と見せかけての別の能力者だったとしたら  
それはそれで問題ない、と言えるが。

ディザスター  
災害級がいたとしても、涼二の実力ならばそれほど苦もなく倒せる  
だろう。

そして、ファープラ雨音以外に神話級能力者がいる可能性は限りなく低い。

(方向からして……この巨大な会議ホールの辺りか。戦闘を想定してるな、これは)

プラーナを感じる方向と強度から考え、涼二はそう判断する。

コンサートホールのようにすら見える会議ホール。席や机が多く動きづらくは感じるが、それでも能力を使うならばこれぐらいの広さがなければならぬだろう。

涼二が能力を使うならば。

(雨音の能力は場所の広さなど関係ない。むしろ、狭い場所の方が

逃げ場がなくて有利な筈だ。なのに、こうやって誘っていると  
事は……)

可能性としては二つ。

一つは罠であり、強い能力者の力を使って迎撃しようとしているか。  
もう一つは、両音の戦闘テストをしようとしているか、と言った所  
だろう。

小さく息を吐き出し

涼二は、声を上げた。

「……スリス、聞こえるか」

「ん、何？ まだデータを引き出してる途中だから、この周辺のシ  
ステムを落とすのにはしばらくかかるけど」

「あいつと会って来る」

「え……？ ちょ、ちよつと涼二!？」

通信を切り、涼二は歩き出す。

だが、それを遮るかのように、耳元でスリスの声が叫びを挙げた。

「ちよつと涼二！ せめて映像記録が残らないようにしなきゃいけ  
ないんだから！ その力は記録に残す訳にはいかないでしょ!？」

「分かってるさ。だから、最初は気付かれない程度に抑えておく。  
使えるようになったら連絡をくれ」

『どうしてそこまで……!』

焦ったような声が響き、涼二は小さく苦笑を漏らした。

それは決して、バカにしているといったモノではない。  
むしろこれは、自分自身に呆れていた為に出た吐息だった。

「どうにも、な。理由は無いんだ。けど、あえて言うなら  
『…………言うなら?』」

「あいつの能力に対する感情を、正面からぶち破ってやりたい」

強すぎる能力に対し恐怖を覚えると言うことは、高い能力を持つ  
能力者にはそれほど珍しい事ではない。

物心つく前から実験体として扱われてきたスリスはともかく、涼二  
やガルムにも覚えのある事ではあった。

さらに、能力に目覚めた時には既に成人していたガルムと違い、ま  
だ幼かった涼二はその恐怖を良く知っている。

人に触れられない　そんな恐怖を抱える雨音とは少し違うだろ  
うが、それでも涼二は彼女の感覚を多少なりとも理解する事が出来  
ていたのだ。

「自分の力に怯えてんじゃねーよって、教えてやろうと思ってな」  
『でも、それだったら準備が終わってからも…………』  
「それとも、俺が負けるとでも思ってるのか?」  
『む…………あーもう、分かったよ。涼二が負ける訳がない!』

半ば自棄の混じった声に、涼二は小さく苦笑を漏らす。  
けれど、そこには何処までも強い信頼が込められていた。

そんな彼女に対し、涼二は胸中で感謝の言葉を発する。

そしてその足は、感じるプラーナの波動の方へと向かって歩き出し

ていた。

「  
」

小さく、口の中で囁くように声を上げる。

室内にもかかわらず感じる風に小さな笑みを浮かべつつ、涼二は真  
つ直ぐにその方向へと向かっていた。

進行する通路には警備員の姿は見当たらない。

彼の耳に聞こえてくるのは、正面入り口で暴れていると思われるガ  
ルムの戦闘音程度だ。

けれど、感じるプラーナの波動は徐々に強くなってゆく 巨人<sup>ティターン</sup>

級程度ならば、目の前で戦っている時に感じるレベルの密度だろう。

それだけの力を放出しても問題ないのは、やはり神話級<sup>フェアブラ</sup>のみとなっ  
てしまう。

ならば

「……いるんだろう、雨音」

僅かに伸びた髪に触れつつ、涼二は会議ホールの扉を開ける。

防音しようの為二重になっている扉を抜ければ 装着するバイ

ザーの視界に、壇上に立つ雨音の姿を発見した。

感情なく、ぼんやりと見開かれているその瞳に、涼二は静かに視線  
を細める。

マインドコントロール。強化人間に施される処理の一つではあるが、  
その実非常に制御が難しく、あまり実用的ではないとされている。

それは、ルーン能力に精神的な要素が大きく影響すると言う事実か

ら発せられているのだが

「きちんと能力は発動していた。随分と進んだ研究をしているようだな、静崎義之」

『私としても自慢な物だね。どうかな、我が作品は素晴らしいだろう？』

響いたのは、スピーカーから発せられた声。

その声の主が何処にいるのかは分からないが、どうやらホール内の声は聞こえているらしい。

雨音の父親、静崎義之の言葉に対し、涼二は小さく息を吐き出した。

「随分と誇らしげなこつて。まあ、勝手にしてくれとしか言いようがないな……ただし、俺の知らない所で、彼女を巻き込まずにだ」

『ほう……？ 随分と面白い事を言うものだな、氷室涼二君』

「……！」

その言葉に、涼二はぴくりと眉を跳ねさせた。

そんな様子に気付いているのかいないのか、義之の声は続ける。

『ユグドラシル最強の実働部隊、《ムスペルヘイム》の前隊長。神<sup>ファ</sup>話級のルーン能力者であり、突如として組織から謎の脱退を遂げた高位能力者……それが君だったね、《氷獄》<sup>ニヴルヘイム</sup>』

「……こいつから聞いて、そこから独自に調べた訳か」

雨音の方へと視線を向け、涼二は小さく嘆息を漏らした。

彼女は相変わらさずぼーっとしたまま、胡乱な視線で前方を見つめ続けているだけだ。

そこに意識の気配を感じる事は出来ないが、僅かに、放たれるプラーナが揺らいでいるように感じる。

それが一体どんな意味なのかは、涼二には分からなかったが、しかしそんな気配には気付かず、義之は続ける。

『さて……ところでなのだが、一つ取引をしないかな、ニヴルヘイム《氷獄》』

「取引？」  
『そう。我々に鞍替えしないか、と言う話だよ』  
「何だと？」

バイザーの下で視線を細め、涼二は僅かに荒れた声を上げた。姿は見せず、声だけの存在。涼二はゆっくりと前に進み出つつ、相手の言葉を待つ。

小さく囁くように、スリスへと声をかけてから。

『今の依頼主よりも高い金を出そう。君達ほど強力な能力者の集団は何にも代えがたいほどの価値がある。私としても、君達のような実力者は是非とも手に入れたいのだよ。君達は、いわゆる傭兵のような存在だ。この戦いも商売でやっているに過ぎない。』

ならば、今以上に収入がある方に付くのは道理ではないのかな？』  
「……フン」



成程、納得はできる　　そう、涼二は小さく胸中で呟いた。  
ニヴルヘイムは、金さえ受け取ればどのような仕事でも行う非合法  
なグループだ。

より高い金を払ってくる方に付くのは理に適っている事である。  
が　　静崎義之は、一つだけ読み違えた。

「残念ながら、見当違いだな」

『何？　何が見当違いだと？』

「俺は金を受け取ったからやってるんじゃないんだよ。俺がやりた  
いからやっている……納得し、後悔しない為に戦う。」

そこに道理やら何やらは存在しない。俺達はただ、感情のままに動  
くだけだ。お前ごときには、俺達は使えない」

故に、従えようとしたところで無駄なのだ。

彼らを理解し、いかに行動の理由を与えるかという事　　それが、  
ニヴルヘイムを動かすという事だ。　　そして

「こいつを、こんな風を利用してある事が俺には気に食わん。故に、  
俺達がお前に従う事はありえない。」

分かったか、静崎義之。俺達は、俺達がやりたいからコイツを連れ  
戻しに来たんだ」

『……そうか、残念だよ。ならば　　死ね』

刹那、雨音の足元が爆ぜた。

思わずそう錯覚するほどの強い踏み込みと共に、雨音は涼二へと向けて肉薄する。  
腰溜めに構えられた拳が高速で迫り　涼二は、突き出された拳を掴みながら雨音の足を払い、彼女の体を投げ飛ばした。

「……役に立つもんだな、ガルム」

あらゆる格闘技を修めたガルムの技の一つ、合気道による受け流し。

小さく息を吐き出しつつ振り返れば、雨音がちょうど着地した所だった。

背中から落とすつもりだったのだが、彼女は器用に空中で体を振り、上手く着地したようだ。

感情の浮かばぬ彼女　その唇が、小さく動く。

「  
ソウイル  
S」

「……ッ！」

その声に対し、咄嗟に身構える。

僅かな風が虚空を舞い、周囲のプラーナが雨音へと向けて急速に集まり始めた。

そう、涼二のプラーナも

「  
ハガラス  
H」

刹那、涼二はそう声を上げた。

それと共に、涼二の周囲に強い風が逆巻き始める。

雨音の持つ吸収の力はその風に遮られ、涼二まで届く事無く吹き散らされた。

『ほう、もう一つルーンを隠し持っていた訳か……だが、そんなものでは我が作品の力を防ぎ切れんよ』

「……」

答えず、涼二は意識を集中させる。

再び突進してくる雨音。跳躍して踏み潰すように蹴りつけてきたその一撃を後方へと跳躍して躲し、涼二はホールの壇上へと立った。そしてそれを追うように、雨音は一直線に突進する。

「ラグズ  
ー！」

涼二の右手に水が集い、周囲へと向けて網のように展開される。

頼りなく見えるが、力任せに引き千切るにはガラムほどの力が無ければ難しいこの水の網。しかし雨音は、触れただけでそれを消滅させてしまっていた。

僅かに乱れるプラーナの波動。触れれば一撃で吸いつくされ、絶命するであろうその拳が、涼二へと向けて真っ直ぐに突き出される。

「風よ……」

小さな戦慄と共に笑みを浮かべ、涼二は風を使ってその拳を絡め取る。

僅かに逸らし、それと反対の方向へ跳躍しながら、雨音の足元へと氷を走らせた。

一瞬で消滅させられる訳では無いのだろう。足を滑らせて、雨音の身体が転倒する。

(しかし、厄介だなこりゃ……)

胸中で呻き、涼二は再び油断無く構えた。

身体能力は高いものの、決して対応できないほどのレベルではない。問題なのは相手に触れる事が出来ない事と、あまり強くない能力ならば吸収し、無効化してしまうという事。

さらに、周囲には常にプラーナを吸収する領域が存在している事だ。風による護りを張っていたとしても、その領域にいる限り、徐々にプラーナを吸収されてしまう。

「まったく！ おい、意識は無いのか!？」

「……」

無言のまま、再度突進してくる雨音。

その体を発生させた風で押し返しつつ、涼二はさらに叫び声を上げる。

「力に負けてんじゃない！ お前は、それで満足なのか！？」

『無駄だ、君の言葉は聞こえていないよ』

「っ……」

響く声。しかし僅かに、だが確実にプラーナの波動が揺らぐ。

先ほどから感じていた僅かな違和感　その正体に気付き、涼二は小さく笑みを浮かべた。

以前相對した時、あの公園の時よりも、明らかに吸収の力が低い。僅かながらだが、力を抑えているのだ。

表情はなく、意志の感じられない瞳　けれども、彼女の口が、僅かに開いた。

「っ、う……し、て……きて、しまっ……です、か」

父親の耳には届かないであろう、本の僅かな声。

逆巻く風に掻き消されてしまうほど弱いそれを、涼二は決して聞き逃さなかった。

浮かべる笑みは、ただただ歡喜のそれ。

「お前こそ、どうしてだ？　諦めてるような事口にしながら、どうしてそんな風に意識を保っていられる？」

「わ、たし……」

『何……！？』

風の膜を潜り抜け、雨音はその手を勢い良く突き出してくる。それをギリギリで躲しながら、プラーナを削り取られつつも、涼二は笑みと共に続けた。

「楽しかったからだろう、諦め切れなかったからだろう！ だったら、何て言えばいいくらい分かってるだろうが！」

「ッ……！」

表情に変化の無かった雨音が、その目を大きく見開く。輝きを失っていたはずの瞳には、涙の雫が揺れていた。力を削り取られ、肩で息をしつつも 涼二は、言葉を止めない。

「さあ、言ってみる 雨音！」

「涼、二……様……私、を……」

『くっ……殺せ、雨音！』

響く声。しかしそれにも踏みとどまり、初めて名前を呼ばれた雨音は その言葉を、告げる。

「私を、助けて……！」

「 心得た」

涼二は、ただ不敵に笑う。そしてその耳元に、一つの言葉が届けられた。

『準備できたよ、涼二。敵は君の真上だ……やっちゃって！』  
「ああ！」

叫び、涼二はバイザーを筆り取る。  
その瞳の中に不敵な色を宿らせて。  
体の中に残るプラーナを昂ぶらせ、その身に宿す刻印へと意識を集  
中させる。

『このッ、殺せと言っているだろう、雨音！』  
「ッ、あ、ああ……っ！」

叫び声と共に、雨音の身体が動き出す。  
大きく広げられた掌は、真っ直ぐと素顔を曝した涼二の顔面へと向  
かい

「  
スリサズ  
Th！」

地面から伸びた氷の茨によって、その動きを止められてい  
た。  
腕を、足を、そして身体を拘束された雨音は、手を伸ばしたその姿  
勢のまま驚愕に目を見開いている。  
そしてその驚愕は、もう一人の人間にも伝わっていた。

『バカな……何だ、何だそれは！？　なぜ、四つもルーンを持っている！？』

人が持つルーンは最大で三つ。それは、この世界に生きる人間にとつての常識だ。

それ以上の数を持つ者は今日まで生まれてきておらず、どれだけ強力な能力者の中にも四つのルーンを持つ者は存在しない。

けれど。

『それに……何だ、その姿は！？』

「<sup>ラグス</sup>……<sup>ラグス</sup>Lが表すのは、水と靈感……そして、『女性』だ。おかげで、<sup>ラグス</sup>Lのルーンを持つ男つてのは皆中性的な容姿をしてる訳だが」

長く伸びた黒髪、丸みを帯びた輪郭。

その青紫に輝く両の瞳に二つのルーンを宿し、女性の姿へと変貌した涼二は、その口元に皮肉気な笑みを浮かべていた。

「まあ、そのルーンがあつたおかげで、俺はこの姉さんのルーンを受け取る事が出来た。そう……氷室静奈の持っていた、<sup>ハガラス</sup>Hと<sup>スリサス</sup>Thの始祖ルーンをな」

15年前の大災害の日、涼二と静奈は死ぬはずだった。

ある男の槍によって腹部を貫かれた静奈も、両目が潰れて助けられる人間も失つた涼二も、その結末を免れ得ぬはずだった。



けれども、そこに一人の男が現れたのだ。

路野沢一樹<sup>かずき</sup>　彼は瀕死の二人を回収し、既に手遅れとなっていた静奈の、その瞳を涼二へと移植した。

どうして死なせてくれなかったのかと、そう叫んだ時があった。けれども、同時に感謝もしていたのだ。今の涼二は、それを深く理解している。

路野沢は善人ではない。利用する為に生かされた事も、涼二は十分に理解している。

けれど、それでも　姉と一つになる事が出来た今を、涼二は感謝していた。

「I、L、H、Th

」

雨音から距離を取り、涼二は全てのルーンを発動させる。

雨が降り、周囲は凍て付き、嵐が逆巻き、氷の茨が地面を覆う。

そう、それは正に死の氷獄<sup>ニブルヘイム</sup>。

死の女王が支配する、氷に包まれた滅びの世界。

「終わりだ、静崎義之。お前の築いたものは、全て俺が貰い受ける！」

スピーカーは凍りつき、既に彼の言葉は響かない。

けれど、その断末魔を聞き逃すつもりはなかった。

涼二は、腕を振り上げる。伸びた茨が天井へと突き刺さり、そこを伝いながら水と嵐が竜巻のように駆け上った。

凍結の竜巻は天井を突き破り、その先にあつた監視室を蹂躪する

「消える」

パチン、と涼二が指を鳴らすと共に  
のような嵐は、一瞬で消え去っていた。

周囲に満ちていた地獄

しかし凍結した周囲が戻る訳ではなく、僅かに生き残った証明の輝きを氷の表面が反射している。

そんな中、落下してくる物体が一つだけ存在していた。

その大きな氷の塊は、ホールに落ちると共に、その中身ごと粉々に砕け散る。

大きく息を吐き出し、乱れた長髪を整え、涼二は小さく笑みを浮かべた。

「あばよ、雨音は頂いて行くぜ」

コントロールが切れたのだろう。ぐったりと意識を失っている雨音に近付き、その皮膚に直接触れぬようにしながら抱き上げた。

寒さのせいかわ、顔色はあまりよくない。けれど、その顔には確かな笑みが浮かべられていた。

そんな表情に満足し、涼二は小さく頷く。

「さて、さつさとずらかるとするか」

プラーナも残り少ない。

けれど、ここにいつまでも立っている訳にも行かず、涼二は元来た道を戻るように歩き始めた。

凍りついた棺のような会議ホールを、置き去りにして。

01-14:エピソード(前書き)

次回連載は9/10からとなります。

冷たい雨が降り注ぐ。

涼二は、冬に振る雨と言うものがあまり好きではなかった。

静謐な雨音や、強く吹きすさぶ風などは気に入っているが、この冷たい雨だけは気に入る事ができない。

自分が緩慢なる死へと向かっていた、あの日の事を思い出してしま  
うから。

小さく、苦笑。

「静崎製薬で、大事故。違法な実験を行っていた事も明るみに……  
か。違法な実験つてのも、詳細は開かされてないのにねえ」

「その辺りは、あのお嬢さんが手を回してくれたのだろう。我々の  
影が見えず、やりやすいだろう」

テレビに映る映像を眺め、スリスとガルムはそう口にする。  
そんな二人の様子と、若干複雑そうな表情を浮かべている雨音の表情に、涼二は小さく肩を竦めた。

(いくらあんなのつつつても、そうそう割り切れるもんじゃねえか)

長く伸びたままの髪を指で梳き、視線を再び窓の外へと向ける。  
そんな涼二は、未だに女性の姿　　姉である氷室静奈と同じ、つまりここにいる雨音に似通った姿へと変化したままだった。  
と言っても、この身体は完全に女性のもつという訳ではないのだが

「それにしても驚きました。涼二様が女性の方だったなんて」

「違うわッ！　俺は男だよ、能力の関係でこうなってるだけであつて！」

「まあまあ。どっから見ても美人なんだし」

「嬉かないってんだよ……それにそもそも、完全に女の身体って訳じゃないだろ」

涼二は<sup>ラケス</sup>のルーンを媒介に姉の持っていたルーンを使うことで、その姿が姉のものに近付いているに過ぎない。

男性としての要素が残っている以上、完全な女性へと変化できる訳ではないのだ。

結果、中途半端に両方の要素が残り、両性具有という状態になっている。

しかし外見からそれが分かる訳でもなく、むしろ女性的な要素

主に胸　　の自己主張は激しい為、分かっていたとしても女性にしか見えないのが現実だ。  
そんな己の状況に嘆息するしかない涼二に、スリスはサムズアップしながら声を上げる。

「ボクは全然オツケーだよ！　ドンと来いふたな」  
「やかましい」

そんな事をのたまうスリスの額へと氷のつぶてを投げつけ、涼二は嘆息交じりに視線を戻した。  
そして、きょとんとした表情を浮かべている雨音へとその顔を向ける。

「……とりあえず、お前の身の安全は確保する事ができた」

「は、はい」

「その長年にわたって続けられてきた強化処理を完全に消し去る事はできないが、少なくとも無理が生じない程度に抑える事は可能だ。元々、オーバーブースト気味だったからな」

涼二が口にしたのは雨音の現状だ。

静岡製薬にて雨音を奪還した涼二達は、そのまま鉄森グループが準備した車で逃走、途中で分かれて一度拠点へと戻ってきた次第である。

雨音は会社の方で調整を受けていたため、しばらくは調整無しでも問題は無いようだ。

さしあたっての問題は、彼女の処遇である。

「まあとにかく、あのお嬢様との約束も取り付けた。協力関係も築けたし、お前の調整に関しては全く問題ない」

強いて言うならば、一々鉄森の所有する機器の所まで赴かなければならない所か　と、涼二は胸中で嘆息する。  
一応調整は一ヶ月に一回程度でも問題は無いので、どうとでもなる話ではあるのだが。

「あ、そういえば涼二」

「どうした？」

「鉄森の屋敷で厄介になるのもいいって、路野沢さんが言ってたよ？」

「……何？」

スリスの言葉に、涼二は眉根を寄せながら首を傾げる。

いつの間に連絡を取っていたのかと言う事も気にはなっていたが、その言葉の意味の方にまずは疑問を持っていたのだ。

そんな涼二の表情に対し、スリスは小さく苦笑しつつ声を上げる。

「どうも、あの人にボク達の事を教えたのは路野沢さんみたい。まあ、楽な生活できるのは助かるんだけどね。

一応、考えといた方がいいんじゃない？」

「ふむ……」



他人と関わる事はリスクが高いが、それと比べてもお釣りが来るほどのメリットはある。

しかし即決すると言う訳にも行かず、涼二はガルムの方へと視線を向けた。

どう判断すべきか。そんな疑問の視線に対し、ガルムは少々思考するような様子を見せる。

そしてしばし沈黙し　　彼は、その顔を上げた。

「……私としては、どちらとも言えないな。どちらにもそれ相応のメリットとデメリットはある。だが　　」

「だが？」

「この選び方は、雨音君の選択次第だと私は思っているよ」

「え……わ、私ですか？」

慌てたような声音で目を見開き、雨音は視線を若干揺らす。  
そんな彼女の様子に三人は苦笑を漏らし、そしてそのままガルムは続けた。

「そう難しい質問ではない。この先、君がどうしたいのか……そういう話だ」

「私が……？」

「一つは、鉄森グループに保護される事。君の身柄の安全は確保して貰っているし、それを破ったらどうなるかぐらいは向こうも分かっているだろう。」

安全に、かつ平穏な日々を送る事が出来るはずだ」

指を一本立て、ガルトムはそう口にする。

確かに安全で、ニヴルヘイムの面々もこれまでと変わらない日々を送る事が出来る選択肢。

変わることにいえば、精々依頼人に鉄森グループが増えると言った事程度だろう。

これまでとあまり変わるような要素は存在しない。

それを考え、そして理解した上で、雨音は先を促した。

「では、他には？」

「ふむ。もう一つは……君が、我々と共に来るかどうかと言う選択肢だ」

「おい、ガルトム！？」

咎めるように、涼二は声を上げる。

血なまぐさく未来の無い世界に彼女を引き込む事、そして何かに復讐しようと言う訳でもない彼女の運命を捻じ曲げてしまう事それらを押し付ける事などできない。

けれど、それに対する反論は意外なところから上がった。

「んー、ボクは反対しないけど」

「スリス！」

「怒らないでよ。雨音ちゃんは別に戦闘に出すって訳じゃないでしょ？ 正体や存在を知られる事も無いし、それにルーンの正逆を何とかできれば、涼二の怪我の心配が多少は薄れるんだから」

「う……」

無茶をする事で心配をかけている自覚はある　　思わず、涼二は言葉を詰まらせていた。

雨音の力は、Sの神話級能力だ。ソウイルファープラ即ち、どのような傷でもたちどころに癒してしまう強大な治癒能力。

それがあれば、確かに怪我の心配は多少なりとも薄れるだろう。

身を案じてくれている言葉には反論する事が出来ず、さらに納得してしまった事で、涼二の反論の言葉は口から出る前に消滅していた。

「それにだな、涼二よ」

「……まだ何かあるのか？」

ガルムの言葉に対し、涼二は胡乱な目線で声を上げる。

そんな様子に対して苦笑を漏らしつつ、ガルムは声を上げた。

「鉄森のお嬢さんは信頼できるかもしれないが、その周りの人間までも一様に信じる訳にはいかんだろう？」

「……他の人間が暴走して、こいつを利用するかもしれない？」

「可能性は無いとは言えん。それは、お前も望む所ではない筈だ」

反論できず、涼二は再び沈黙する。

しかしそれでも今まで安穏と生きてきた少女を殺し合いの世界に引き込むのは気が引け、涼二は呻き声を上げながら仰け反り、頭を抱えた。

と　　そこに、最後の声がかかる。

「涼二様」

「……………何だ？」

「お心遣い、有難く存じます。ですが私は、折角できたお友達とお別れしたくは無いのです」

「だが……………！」

そつと、雨音は唇の前に指を立てる。

落ち着きのある美貌に僅かな笑みを浮かべ　その姿に、涼二は  
思わず息を飲んでいた。

見た目と言う点ではどちらもかなり似通っており、姉妹と言われても納得できるような姿だったのだが。

「無粋な事は仰らないくださいませ、涼二様。今の私にとって、大切なものは貴方がたしかいないのです。

いえ、初めて出来た大切なものと言っても過言ではありません。ですから、私は貴方がたの事を知りたい」

「……………幻滅するぞ？」

「それは私の決める事です」

強い想い。思わず息を飲むほどの意志の強さに、涼二は圧倒されていた。

長い間戦ってきた涼二すら飲み込むほどの意志力　包容力、とでもいうべきもの。

それを纏いながら、雨音は笑う。

「皆さんが何を思い、何を信じて戦っているのか。私は、それを知りません……ですから、皆さんにどうしろなどと偉そうな事は言えません。」

「ですから、私に皆さんの事を教えてください。大切な人達だから、皆さんの事を知りたい」

「っ……」

それは、純粹な好意。

共に、家族に向けられる感情に、涼二だけでなく他の二人も飲み込まれていた。

ガルムだけは、僅かに嬉しそうな笑みを浮かべていたが。

「だから、皆さんの事をちゃんと知れるまで……私を、連れて行っては頂けませんか？」

雨音は、そう締めくくる。

圧倒されるほど暖かく、優しいその視線。

その気配は、まるで世界を包む柔らかな雨の音のように。

それを受けて　スリスは、楽しそうに笑い声を上げた。

「……だってさ、涼二。ちなみに、ボクは賛成だよ？」

「お前な……」

「ボクも、雨音ちゃんの事が知りたい。データで見ただけじゃ、人の事なんて何も分からないんだ。だから、知りたい……それって、いい事だよな？」

言外に、『知らないまま突き放すのはいい事なのか』という意味を感じ、涼二はぴくりと頬を引き攣らせる。

滅多な事では反論してこないスリスの言葉への驚愕と共に、涼二はその言葉に思わず頷きそうになっていた。

そして、同じく意味を感じ取ったガルムが、笑いをこらえるような表情を浮かべながら声を上げる。

「涼二よ、巻き込みたくないと言う思いも、決して間違っていると言う訳ではない。しかし、彼女も己の行為に責任を持ってぬわけではあるまい」

「……それは」

雨音は、己の行いの尻拭いを誰かに求めるような人間ではない。

世間知らずで天然ではあるが、勤勉で努力を惜しまない 故に、

己の発言には責任を持つだろう。

それが分かっってしまうからこそ、涼二の揺らぎはさらに大きくなった。

姉によく似た姿を持つ彼女を巻き込みたくない その思いは、  
いまだに強い。

けれど、同時にそんな彼女と共に居たいと言う感情もあつたのだ。

「……それに、ですけど」

「まだ、何かあるのか？」

「ええ。涼二様は忘れてしまっているかもしれませんが、私は人を殺してしまったのですよ？」

その言葉に、涼二は大きく目を見開く。

思い起こすのは、あの交渉の日。マインドコントロールを受けた雨音が、その力を使って人々のプラーナを喰らい尽くしてしまった時の事だ。

あれは、決して彼女の意志によるものではない。けれど

「例え故意でなかったとしても、私が原因となってしまう事は事実。何もせず、安穩と平和な生活を送る事は、私には出来ません」  
「だが、償いになる訳ではないんだぞ？」  
「存じております。ですから、これはただの自己満足です」

少し悲しそうな表情で、雨音は笑う　その顔に、涼二は深々と溜息を吐きだした。

「……分かった」

「涼二様！」

「ただし、危険な場所には連れて行かんし、嫌だと思ったらさっさと出て行くように。ったく……」

ぶつぶつと文句を言いつつ、涼二はソファに深く体を沈め、その後頭部を背もたれへと乗せる。

頭痛を覚えて額を抑える手は、やがて力なく椅子の上へと落とされた。

未だに、体は元に戻らない。  
プラーナが完全に回復し切るまで、元の姿に戻る事が出来ないのだ。  
けれど、多少は穏やかな気分で見られるのは、この姿に精神が引き  
摺られている為か。

(……現金な奴だな、俺も)

三人に見えないように、口元に自嘲を浮かべる。  
目の端に僅かに映る外の景色。冷たい雨の降り注ぐコンクリートの  
木々。  
堪らなく嫌いだったはずのそれが 今日だけは、少しだけ心地  
よく感じられた。

\* \* \* \* \*



ガラス張りの天井に、冷たい雨が降り注ぐ。

広い部屋にはその静謐な音が響き渡り　そんな中、一人の男が机に向かい、黙々とペンを動かしていた。

短めに刈り込まれた灰色の髪に、黄金の瞳。その額には、傷痕のような紋様が刻まれている。

そんな男は、ふと顔を上げ、ある方向へと視線を向けた。

瞬間、静謐さを引き裂くように、一つの声が響き渡る。

「おや、どうかしたのかな《必滅の槍》？」

「……このような時まで、その名で呼ばずとも良いだろう、一樹」

「おっと、済まないね槍悟。つい癖になってしまったようだ」

おどけて笑う路野沢に、槍悟と呼ばれた男性は小さく笑みを浮かべる。

そこにあるのは、信頼の籠った感情だ。

そんな笑みを受けて、路野沢もまた小さく笑う。

「それで、どうかしたのかな？」

「何、強いプラーナの気配を感じただけだ。随分と強力な能力者が力を使っているようだな」

「君がそう評するほどか……世界は広いものだね」

飄々と、路野沢は笑う。

その中の不穏な気配に気付きつつ　いや、そんなモノすらも飲み込みつつ、槍悟は不敵な笑みを浮かべた。

「ああ、実に楽しめそうだ。いずれ相見えるような事があればよいのだがな」

「望むのなら、いずれ叶うさ。それが」

「宿命と言うものだから、か？」

「おや、言われてしまったね」

「元々、それは私の台詞だろう」

クスクスと笑う路野沢に、槍悟は笑みを浮かべたまま肩を竦めて見せた。

決して刺々しい空気は無い。二人の間にも、信頼の籠った言葉同士が交わされている。

だと言うのに　二人の強大な気配は、常に互いを食い尽くそうとするかのようにせめぎ合っている

その間にある感情は、何と表現すればよいものか。それは、誰にも分からない　当人達すらも。

そしてそんな空気の中、槍悟は小さく笑いながら声を上げる。

「だが、君もそう言うのなら、そうなのだろう。是非、楽しみにさせてもらうでしょうか」

「ははは、光栄だね。きつと、気に入ると思うよ」

二人は笑う。

ユグドラシルと呼ばれる組織を取りまとめる、二人の人間。その言葉の中にあつたのは、どこかあまり合わない渴望のような感情。

それらを込めて、大神おおがみ槍悟は小さく笑う。

「楽しませて貰おう。いずれ、な」

雨音は、いつまでも静謐な音を響かせ続けていた。



## ルーン能力について&読者の皆様への募集

ども、Allenです。  
とりあえずFrosty Rain第一話を読んで頂き、ありがとうございます。  
うございます。

まだ読まずにとりあえずここから見てみたという方もいらっしゃるかもしれませんが、キャラクター紹介と言っわけではないので、話を読んでみたほうが分かりやすいかと思えます。

今作は、このように一話を大体10万文字程度にまとめ、それを連続更新すると言う形をとっていきます。  
しばらくは充電期間となり、次回の更新は9/10を予定しておりますので、しばしお待ち下さい。

また、その間に、読者の皆様にお願があります。  
作中で登場するルーン能力に関して、組み合わせて能力を作るのに一人では限界を感じています。

なので、ここで能力を募集したいと思います。

ルーン能力は、1〜3のルーンを組み合わせる事で考えております。  
また、

#### 《エンチャント》

能力同士を組み合わせる事。

二つ以上のルーンを同時に発動し、単一の発動では得られなかったような効果を発生させる。

緋織シユリがJで創り上げた剣カンからKの炎を発していたのがこの効果。  
掛け算のように制御が難しくなっていてゆき、使用には熟練が必要。

#### 《ファンクション》

《エンチャント》によって術者が作り上げたものなど、術者固有の能力使用法を指す。

名称を決める事で一つの能力として固定する事が可能で、作り上げた能力は名称を宣言する事で発動可能。

涼二の《氷雨》フロステイレイン、ガルムの《血染めの狼》イラトス・ヘステイア等がこれに当たる。

等のように、それぞれのキャラクターを代表するような能力を作り上げています。  
読者の皆様には、三つのルーンを組み合わせて能力を考えて頂きたいのです。  
戦闘向けだけではなく、料理人が持っているような能力など、様々な場面を想定しております。

作中に登場するルーンと、主な効果は下記の24となります。

モブ敵の能力として使用する場合がありますので、活躍させたい時にはそのようにご連絡下さい。  
これらの募集は、感想にてお待ちしております。  
それでは、よろしく願います。

F  
フェオ

家畜と富を表す努力のルーン。  
努力することにより、所持者の持つ才能の開花が約束される。

U  
ウルズ

野牛と勇気を表す強化のルーン。  
肉体、精神をバランスよく強化できる。

Th  
スリサズ

氷の巨人を表す妨害ルーン。  
茨を操り、相手の動きや攻撃を妨害できる。

A  
アンサズ

アンサズ神を表す解析のルーン。  
自分自身の情報処理能力、情報収集能力を高められる。

R  
ラト

乗り物や騎乗を表す加速のルーン。

自分自身を加速、高速移動を可能にする。

K カク

炎や始まりを表す火炎のルーン。

炎を操り攻撃する事が出来る。

G ゲーボ

贈り物や出逢いを表す友好のルーン。

持っている者は人に好かれやすくなる。

W ウィン

喜びや愛情を表す補助のルーン。

自身や他者の精神コンディションを改善する。

H ハガラズ

嵐や雹、災害を表す破壊のルーン。

風、雹、雷を操る事が出来る。

N ノウシズ

欠乏や忍耐を表す精神強化ルーン。

自分自身の精神力を強化する事が出来る。

I イサ

氷や凍結、停止を表す氷結のルーン。

氷を操ったり、物の動きを遅くしたりする事が出来る。

J ジュラ

刃、収穫を表す創造のルーン。

一年以内に起こる成功を予見する、または刃のある武器を作り出す事が出来る。



E  
エイワズ

イチイの木を表す防御のルーン。  
障壁を発生させたり、植物を操ったりする事が出来る。

P  
パース

賭博や秘密を表す探索のルーン。  
相手の隠している事を察知する事が出来る。

Z  
アルジズ

保護を表す協力のルーン。  
仲間を護るときに己の力を強化する事が出来る。

S  
ソウイル

太陽や生命力を現す治癒のルーン。  
自分や他人の傷を癒す事が出来る。

T  
ティワズ

戦いと勝利を表す身体強化のルーン。  
自分自身の身体能力を強化する事が出来る。

B  
ベルカナ

成長や白樺を表す発展のルーン。  
成長や学習の速度を早くする事が出来る。

Eh  
エワズ

馬と変化を表す獣化のルーン。  
自分自身の姿を獣へと変化させる事が出来る。

M  
マンナズ

人間を表す協調のルーン。  
人に指示を出す際の最適解を求める事が出来る。

L  
ラグズ

水や靈感を表す水流のルーン。  
水を操る、或いは鋭い感覚を得る事が出来る。

Ng  
イング

豊穡や完成を表す成功のルーン。  
植物や人間を成長させる事が出来る。

O  
オセル

遺産や領土を表す大地のルーン。  
土を操る、或いは限定空間内でさまざまな現象を引き起こす事が出来る。

D  
ダガス

日や光を表す光輝のルーン。  
光を操る事の出来る。

・ルーン能力者は、1〜3個のルーンを所持している。  
・それぞれ、シングルルーン、クロスルーン、トライルーンと呼ばれる。  
・一部の能力には、効果の反転した逆位置のルーンと呼ばれるものも存在する。

・また、能力の強さに応じてレベル分けされている。下から順に、  
ヒューマン、フリックス、テイタン、ディザスター、フェアブラ  
人間級、人外級、巨人級、災害級、神話級。



無数の書棚が立ち並ぶ空間。

若干薄暗く広大なその部屋は、時折立っている柱に支えられた、巨大な図書館のような場所。

しかし、書棚に並んでいるのは本だけではなく、大量のバインダーに納められた書類の束だった。

そんな空間に、涼やかな声が響く。

「正面入り口の前で暴れていた刻印獣<sup>ルーンクリーチャー</sup>は、他の事件でも時折目撃されているものですが、その例はごく稀で情報はあまりありません」

「……うん、そうだね。僕も、それに関しては殆ど記憶していないかな」

無数の書棚に囲まれた部屋の奥。

そこに、二人の人物の姿があった。

一人は、設置されている机に広げられた資料を読む銀の髪の青年。その長い髪をうなじの辺りで一括りにしている彼は、眼鏡の位置を直しながら声を上げる。

「それで、内部の状況に関しては……これだね」

「はい。どうやら、静崎製薬で行われていた実験資料は念入りに破棄されてしまったようです」

「ふむ……耐火金庫の中身まで、か。こちらは人為的だけど、やつた者の正体は掴めず……随分と手馴れてるなあ」

そんな青年の声に答えているのは、紫がかった長い髪をもつ一人の少女。

ゆったりとウェーブを描くその髪を揺らし、彼女は温和そうな笑みを浮かべつつ声を上げる。

「事実関係に関しては、その報告書に書かれている内容で全部です……と言う事で、お疲れ様、悠君」

「うん、ありがとう怜。さてと、次の資料は」  
「今日はこれで全部だよ。全く、いつも仕事しっぱなしなんだから。今は報告書も来てないんだし、休憩にしよう？」

「あ、あはは……うん、分かったよ」

腰に手を当て、たしなめるように言う少女 伊藤怜。

それに対し、青年 詩樹悠は、相好を崩しながら眼鏡を外し、

大きく背筋を伸ばして凝った身体をほぐしていた。

ユグドラシルには、ルーン能力者に関する様々な事件が飛び込んでくる。

能力者をただの人間が抑えるのは難しい。それ故に、ユグドラシルには治安維持部隊と呼べるものが存在しているのだ。

これには様々な部隊が存在し、警察と共に動いて事件の捜査を行う《フギン》、機動部隊として警察に協力する《フレキ》。そして、ルーン能力を使った凶悪犯罪を鎮圧する目的で作られた、最強の戦闘部隊である《ムスベルヘイム》などが存在している。

そして、そういった部隊からもたらされる報告は、全てこの図書館中央情報室《ミーミル》に集められているのだ。

「さて。それじゃ、私はお茶を淹れてくるね」

「うん、いつもありがとう。怜のお茶は美味しいから、楽しみだよ」

「ふふ。いつもそう言ってくれるから、私も作り甲斐があるよ。それじゃ、ちょっと待っててね」

悠の言葉に嬉しそうに頷き、怜は書棚の向こうへと姿を消して行く。観葉植物の向こう側に彼女の姿が消えて行ったちょうどその時、やってきた職員が悠に対して声をかけた。

「室長、よろしいですか？」

「あ、うん。何ですか？」

室長　　すなわちこの情報室のトップである悠は、そんな職員  
の言葉に首を傾げる。

周囲の書棚の整理を行っている他の職員達は、そんな二人の様子に  
聞き耳を立てている様子ではあったが、それには気付かない振りを  
しつつ、悠は彼に続きを促した。

新人で、若干緊張した様子のある彼は、直立不動の姿勢のまま声を  
上げる。

「は、ムスペルヘイムの隊長殿がお見えです」

「緋織ひおりが？　ああ……今回の件が耳に入ったのか。うん、通してい  
いよ」

「了解しました！」

成程、今の緊張は僕と緋織二人分のものか、と胸中で納得  
し苦笑しながら、悠は去ってゆく職員の背中を見送る。

とりあえず机の上に広げられた資料を纏め、適当に積み重ねてから  
机の脇へと置いておく。

そんな事を続けられた紙の束が山のように積み重ねられていたが、  
日を置かずに怜の手によって片付けられる事となるだろう。

若干申し訳なく感じながらも、見えてきた紅の髪に悠は思考を切り  
替える。

磨戸すりこ緋織　最強の実働部隊たる、ムスペルヘイムの現隊長。

そしてその脇に緊張した様子で立つ、金髪のツインテールを揺らす  
少女に、悠は小さく笑顔を浮かべていた。

「やあ、いらっしやい《災いの枝レイヴァーティン》。本日はどのようなご用件で？」

「《口伝詩人シゲルドリーヴァ》……いいえ、悠。堅苦しいのは無しで」

「あはは、ごめんごめん」

からかいの言葉をたしなめられ、悠は小さく苦笑を漏らす。

とはいえ、隣でガチガチに固まっていた少女の緊張をほぐす程度の効果はあったようで、きよとんと目を見開いている彼女へと悠は声を上げた。

「君は初めて見る顔だけど、確か緋織の補佐官に選ばれた子だったかな？」

「は、はい！ 把桐羽衣わきりういと申します！ コードネームは《戦乙女ヴァルキユリア》です！」

「うん、僕は詩樹悠。コードネームは《口伝詩人シングルドリーヴァ》だよ。さ、立ち話もなんだから二人とも座って」

笑みを浮かべ、悠は二人へと椅子を勧める。

実力主義のユグドラシルでは、悠や緋織のように若手ながら高い位に就いている者も少なくはない。

それ故に、悠もこういった話というのは既に慣れたものであった。

椅子を引き寄せ座った二人に満足し、悠は声を上げる。

「さて……改めて、今日はどんな用件で？」

「……ファーブラルンクリーチャー、神話級の刻印獣が確認されたと聞いたから、その情報を確認に」

「成程」



若干目を逸らしながら言う緋織に、悠は小さく苦笑を漏らしていた。  
そういう名目で来た、という事なのだろう　　彼女自身の目的は別にある。  
そしてそれを理解しているからこそ、悠はあえてその言葉通りに声を上げた。

「恐らく、犬の類だね。刻印ルーンは恐らくTとR。ティウスラド人狼の形態を取っていたらしいから、もしかしたらMもあるかもしれない」

「……人間が、その姿になっていた可能性は？」

「エラスEhの力でかい？ そうだね……可能性が皆無とは言えない。けれど、人と獣の間を保つのは非常に難しい……それは、君も分かっているよね？」

「でも、相手は神話級。ファープラ常識は通用しないと思った方がいい」

「ふむ、一理あるね」

緋織の言葉に、悠は肩を竦めながら頷く。

そんな応酬に居心地悪そうにしている羽衣の姿を視界の端に捉えながら、悠は緋織の瞳へと視線を向けた。

彼女は、何らかの確信を得ている　　いや、得た確信を誰かに肯定して貰いたいのだ。

それに気付いているからこそ、悠は表には出さないようにしながら胸中で嘆息する。

「あ……緋織ちゃんだけじゃなかったんだ。失敗しちゃったなあ」

そこに、一度離れていた怜がお盆とティーセットを持って現れた。お盆の上に置かれているのは三つのティーカップ。悠と自分自身、そして緋織のものだ。あまりにも準備が良すぎるその状態に、緋織は大きく目を見開く。

「怜……私が来る事、予想してたの？」

「そりゃあね。イサラクス、それに神話級。こんな報告を聞いて、緋織ちゃんが飛んで来ない筈がないから」

「べ、別に私は、そんな……」

無然とした表情で唇を尖らせる緋織に、怜はクスクスと笑みを漏らしている。

そんな彼女に対して緋織は口を開こうとするが 抗議の聲は、意外な所から上がった。

「そんな事はありません！」

「羽衣……！？」

「神話級が相手となれば、必然的に私達が動く必要があります！ですから、危険な能力者の力を知るためにここに来たのです！ あんな男の事なんて……！」

「はい、落ち着いて」

ぱんぱん、と悠は軽く手を叩く。

それと共に羽衣ははっと目を見開き、顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

そんな様子に小さく苦笑しつつも、悠は怜の方へと視線を向ける。

「あんまりからかつちゃダメだよ、怜」

「あはは……ゴメンね、二人とも」

苦笑交じりの表情を浮かべつつ、怜は手に持ったお盆を机の上に置いた。

そして、裏返していたカップを戻し、その中へとティーポットから紅茶を注いでゆく。

それと共に広がる僅かな林檎の香りが、周囲へと漂っていた。

「はい、お詫びの印にどうぞ」

「え、あの、えっと……」

「私は伊藤怜。コードネームは《アウレア・ポーマ植物園》。悠君……ここにいます、

ミール室長の補佐官です。よろしくね、羽衣ちゃん」

「は、はい！」

緊張した様子の羽衣に苦笑しつつ、怜は紅茶とお茶請けのクッキ―を机に置く。

ただし、それはあくまでも三人分。自分の分は、そこには無かった。

それを見咎めた緋織が、申し訳なさそうな様子で声を上げる。

「怜、私の分はいいから……」

「私はいいの。後で、悠君と二人っきりで休憩するから……ね？」

「あはは……うん。まあ、そういう訳だから、遠慮しないでいいよ」  
「……分かった。私も、怜のアップルティーは好きだから」

照れたように笑う悠の様子に、緋織も小さく笑みを零す。

そんな様子をニコニコとした笑顔で見つめる怜と、相変わらず緊張した様子の羽衣。

三人の様子を観察し、悠は胸中で小さく嘆息を漏らした。

(……やっぱり、気にするなって言う方が無理だね)

相変わらず落ち着かない様子の緋織。

彼女は才能を見出されて以来、ずっとある一人の男とパートナーを組んで戦ってきた。

緋織は、彼の事を心の底から信頼していたと言っても過言では無いだろう。

けれど、彼 氷室涼二は、突如としてその姿を消してしまった。緋織は、何も告げずに去ってしまった涼二の事を恨んでいる。けれど、彼の事を信じようとするその感情を抑える事は出来ていなかった。

「……今回の事件で ファープラ の出力を以って使われたのは、 ハガラス スリサズ、ソウイル、そして S のルーンだ」

「え？」

「さっきの反応、建物内で起こった方の事件についても知っているんだろう？」

建物内で使われた形跡のあるルーンは、 イサ、ラグズ、ハガラス スリサズ、ソウイル、S の五

つ。少なくとも二人以上の能力者が動いている」

そこまで告げてから紅茶に口をつけ、悠は小さく息を吐く。

悠は少しだけ口を湿らせてから、目を見開く緋織へと向けて続けた。

「イサ ラグズは、それほどの出力で使われた訳じゃない……内部にいた能力者に関しては、ハガラズ スリサズ ソウイル フアーブラを操る神話級能力者として捜査されているよ」

「……そう」

安心したように、けれどもどこか残念そうな様子も漂わせ、緋織はそう呟く。

ティーカップの陰に苦笑を隠しつつ、悠は彼女の様子を静かに観察していた。

涼二が加担していなかった事に安堵しつつも、彼の行方を掴む事が出来なかった事を残念がっている。

そんな様子を外面から感じ取り、悠はここにはいないかつての友人に対して文句の一つでも言いたい気分になっていた。

吐き出された溜め息が、空気に溶ける。

「まあ、詳しい情報に関しては、もう少ししたら書架に並ぶ予定だから……それまではこのぐらいの情報で勘弁して」

「……うん、分かった。ありがとう、悠」

「どういたしまして。訓練の方、頑張つてね」

「ん、そっちも、あんまり根を詰めすぎないように」

君にだけは言われたくないなあ、などと胸中で呟き。

紅茶とお茶請けはきっちり消費してから席を立つ緋織の姿を、悠は表情を変えぬまま見送っていた。

そんな彼女の姿が見えなくなるのを待ち、悠はようやく息を吐き出す。

「お疲れ様、悠君」

「あはは……嘘は苦手じゃないけど嫌いだなあ」

微笑む怜の表情に癒されながらも、悠は苦笑交じりに呟いた。

自分は緋織に嘘を付いている　先ほどの話の中には、多くの嘘が含まれていたのだ。

何故なら詩樹悠は、氷室涼二がこの組織から離反した理由を全て知っているから。

そして、彼がずっと隠し続けてきた奥の手までも知っているのだから。

「しかしまあ……罪作りな奴だよねえ、涼二も」

「悠君がそれを言うかな？」

「え？」

「何でもないよ」

クスクスと笑いながら、怜はティーセットを片付け始める。

そして、そんな様子をぼんやりと眺めていた悠へと向け、彼女は声を上げた。

「ねえ、悠君」

「ん、何？」

「どうして涼二君は、私達にだけ全部を話して行ったのかな？」

そんな彼女の言葉に、悠は虚空を見上げ　　小さく、苦笑を漏らす。

彼が思い起こすのは、かつて友人がこの組織を去った前の日の話。氷室涼二は、全てを話して行った。抱いている強い憎しみも、その眼に宿した強い力も、全て。

悠と怜、そのたった二人だけに全てを話して、彼は去って行ったのだ。

彼の目的を考えれば、正気とは思えない。それは決して悟られてはならぬものであり、そしてそれまでは決して悟られる事の無かった筈の話なのだ。

けれど、彼は全てを話してくれた。それを、悠は嬉しいと思う。

「……涼二は、分かっていたからだよ」

「分かっていたからって……一体、何を？」

「僕達なら、例えその話を聞いたとしてもこの組織から離れようとしないうって、ね」

そう言っつて、悠はかつての彼の話を思い返す。

十五年前の大災害を経験した人間ならば、その話は十分に同情出来るものであったし、彼の憎しみを多少なりとも感じ取る事は出来た。これを聞いたのが緋織だったならば、彼女は間違いなく涼二につい

て行こうとしていただろう。  
けれど、それでも悠は決して付いて行こうとはしなかったのだ。

「僕は、この組織から抜ける事はできないからね。そもそも、僕はこの仕事に誇りを持っているんだから……」と言ってもまあ、この誇りだって、涼二のおかげで得られたようなものだけだ」

「……そして私は、そんな悠君から離れようとはしないから……だから涼二君は、私達に？」

「僕はそうだと思う。それだけ、僕の誇りを理解してくれていたんだって思うと……少し、嬉しいんだ」

悠は微笑む。親友と呼んでも過言では無い、あの青年の事を思い返して。

その表情に含まれていたのは、友情と親愛と、そして闘争心だった。

「だからこそ、涼二の秘密は護る。けれど、それ以上はしない。もしも直接対決するような事になったら、決して手加減はしないって決めてるんだ」

「……ずるいなあ、男の子って」

ポツリと呟かれた怜の言葉に、悠はきよとんと目を見開く。

そして、「冗談ではなく本気で拗ねている様子の表情を浮かべている彼女に驚き、あたふたと慌てた声を上げ始めた。

「え、いや、ずるいって？ 僕とあいつは友達だし、それは怜だっ



て同じじゃないか」

「そんな何も言わずに通じ合っちゃってるの、ずるいと思っちゃうんだよ。きつと、涼二君だって同じ事考えてるんだろっし」

「そ、それは……」

あながち否定できない事に頬を引き攣らせ、どう言い訳したものと悠はひたすら言葉を探る。

彼の持つルーンによる強靱な精神も類稀な記憶力も、この時ばかりは役に立ってくれなかった。

そうして必死に悩んでいるうちに　ふと、怜がクスクスと笑みを漏らしている事に気づく。

そこまで来て、悠はようやく自分がからかわれていた事に気が付いた。

「れ、怜ってば……」

「ふふ、ゴメンね悠君。でも、羨ましいって思ってるのはホントなんだよ?」

「あ、あはは」

笑顔を絶やささない怜は、それでもそんな笑顔の奥にどこか油断な無いらしいような色を秘め。

叶わないなあ、などと思いつながらも、そんな笑顔に惹かれている自分がいることを悠は自覚していた。

そして、彼はそんな話題の中心となった親友の事を思い返す。

「……今、あいつは何をしてるのかな?」

「分からないけど……でも」

「でも？」

「またいつか、昔みたいに笑い合えたらいいなって……緋織ちゃんも私達も、あの子も一緒に……ね？」

「……そうだね」

頷き、悠は虚空を見上げる。

彼は、今何処にいるのか

(……意外と、近くにいいのかもしれないな)

そんな事を考え

悠は、小さく笑みを零していた。



## 02-2: ショッピングモール

「人がいっぱいですね……」

「まあ、この人工島はかなり人口密度が高いからなあ」

隣に雨音あまねを連れ立って歩きつつ、ようやく男の姿に戻れた涼二は彼女の言葉に対してそう口にする。

高い秋空の下、二人は新しく出来たショッピングモールへと向かっていた。

若干寒くなってきた為、涼二は普段とは別のダウンのコート、雨音も着物の上に淡い青の羽織を纏っている。

そんな格好の彼女がかなりの注目を集めていたが、その辺りは当の昔に諦めている。

気にしない振りをしつつ、涼二は人との接触を気にする雨音へと向けて声を上げた。

「一応、能力の切り替えは出来るようになったらだろうか？　そこま

で人との接触を気にする必要はないと思うが」

「そうですね……癖のようなもので」

「……そうだな。まあ、仕方ないか」

前回の事件から、涼二達は鉄森てつもりグループの下で厄介になっている。スリスが持ち帰った資料によって雨音の研究に使われていた機材も明らかとなり、今では静岡製薬でなくとも彼女の調整を行えるようになっていた。が、流石に短時間で完全に元に戻す事は出来なかった。

今現在では能力が二分化されているような状況で、自由に切り替えをする事も可能だが、どちらの出力も半分程度まで落ちてしまっているのだ。

しかし、とりあえずは相手の命を吸ってしまったわずに済むようになってたにもかかわらず、雨音は相変わらず人との接触を避ける傾向にある。

(……まあ、触れられるのを避けようとはしなくなっただし、多少は進歩してるんだろっけどな)

喜び勇んでスキンシップを取っていたスリスの姿を思い出し、涼二は小さく肩を竦めた。

流石にあれは遠慮が無さ過ぎる。とは思っているのだが、アレのおかげで雨音の苦手意識が薄れていると考えるとあまり文句も言えない。

ガルのほうも、雨音の才能を見て以来、彼女に護身術を覚えさせたがっているようであったが

「ところで、涼二様？」

「ん、何だ？」

「今日はどうして私を誘ってくださったのでしょうか？」

「あれ、説明してなかったっけか？」

首を傾げながら問いかけてくる雨音に、涼二もまた首を傾げていた。

そして虚空を見上げながら己の記憶を検索し　出てくる際に、

『買い物に行くぞ』としか告げなかった事を思い出す。

あまりにも適當すぎる己の物言いに、涼二は口元を引き攣らせていた。

「あー、うん。お前の日用品を買おうと思ってな」

「日用品、ですか？」

「ああ。鉄森に頼めば揃えてくれるとは思って、やっぱり自分で使うものは自分で選びたいだろ？」

「成程……お心遣いありがとうございます、涼二様。気が利かない様で利くのですね」

「……言うようになったな、お前も」

半眼で言うが、雨音はきよとんと首を傾げるのみ。

どうやら素で言っていたらしいその言葉に、涼二は見えないように顔を逸らしながら嘆息していた。

持ち前の要領の良さを発揮して、真綿が水を吸うように知識を吸収している雨音ではあるが、この天然ぶりだけは相変わらずだったのだ。

とりあえず涼二も慣れてきてはいたので、あまり気にしないようにする事としたが。

「……まあとにかく、そういう訳で、お前を新しく出来たショッピングモールに連れて行こうと思ったわけだ」

「テレビで見ました。大きなお店なんですよね？」

「ああ。まあ、元から行く予定があったからな。そのついでみたいなもんだ」

見えてきた巨大な商業施設を見上げつつ、涼二はそう口にする。

縦も横も奥行きも、かなりの大きさを持つこの建物。これだけの敷地面積となれば、周辺住民から文句が出てくるのも納得できる規模ではあった。

今となつてはすっかり受け入れられている次第ではあるのだが。

特に近場のカフェやコンビニは、以前よりもかなり客足が増えている事だろう。

人通りの多い周囲へと視線を走らせながら、涼二は目的の人物達の姿を探し始めた。

「さてと、あいつらは……」

「あいつら？」

「ああ、俺の幼馴染二人なんだが……流石に女の日用品なんて俺には分からないからな。さらに、普通の生活様式とまるっきり異なってるスリスも参考にならないし。」

だから、その辺り任せられる奴に来て貰おうかと思ってたんだ」

まあ、女は一人だけだが　と、涼二はそんな事を胸中で口にする。

そうやって頭の中で自己完結しているから必要な情報を告げられないのだと言う事には、今のところ気付いていなかった。

流石に簡単な人探し程度に能力を使う気にはなれず、涼二は辺りをきよろきよろと見回しながら目的の姿を探す。

メールを見て確認すれば、集合場所は正面入り口前の時計台の前と書いてあったのだが

「いよお、涼二。また別嬪さん連れてるじゃねえか」

「っと　気付いてたんならさっさと声をかけるよな、双雅そつが」

背後から小突かれ、涼二は軽く後頭部を抑えながらも振り返る。そこに立っていた上狼塚双雅かみおいつかの姿を見上げつつ、涼二は小さく肩を竦めた。

いつも通りの髪型ではあるが、流石に寒いのか、胸元を開けるような真似はしていない。

その代わり、普段のピアスに加えてイヤカフスまで装着していたり、着ているジャケットにやたら鎖の装飾があったりと、相変わらずの装飾過多である。

涼二は一応接触の直前に気配を掴んでいたのでそれほど驚きはしなかったが、雨音はその姿を見上げて目を見開いていた。

「大きな方なんですネ……涼二様、この方が？」

「ああ、コイツが俺の幼馴染で　」

「女性の方には見えませんが……」

「オイ涼二。テメエ、一体どんな説明してやった」



双雅の言葉のトーンが下がり、半眼で睨むように涼二の姿を見下ろす。

涼二もまた雨音の言葉に頬を引き攣らせ、慌てて声を上げた。

「違う違う、俺が言ったのはもう一人の方だ！ コイツはおまけ、付き添い！」

「あ………そうでしたか。申し訳ありません、おまけ様？」

「………涼二、ちょっと後で話がある」

「こいつの言動の責任を俺に求められても困るっての………」

深々と嘆息し、涼二は横目で雨音の様子を観察する。

きよとんと首を傾げている彼女の様子からは、決して悪意や悪戯心のようなものは感じ取れない。

即ち、彼女は完全に素で先ほどからの発言をしているのだ。

「分かつてはいたんだがな………雨音、コイツは上狼塚双雅って言うんだ。俺の幼馴染の一人だよ」

「あら………度々済みませんでした、上狼塚様。私は静崎<sup>しずまき</sup>雨音と申します」

「お、おう。苗字も長げえし、涼二の事は名前で呼んでるんだろ？ だったら、俺の事も双雅で構わねえよ」

「はい、分かりました双雅様」

「………様付けってむず痒いな」

背中に手を突っ込んで掻き始める双雅の様子に、涼二は隠れて苦笑する。

自分自身にも覚えのある感覚ではあるが、その辺りは我慢して貰う事とするしかないだろう　　いや、頼めばさん付けでも許してもらえるのだが。

ともあれ、彼女がやたらと丁寧なのは今に始まった事ではない。

とりあえず、完全に説明不足であったことを理解した涼二は、説明の為に口を開こうとし

「ああああああああああああっ!?!」

周囲に響いた素っ頓狂な叫び声に、思わずそれを中断していた。

三人がその声の方へと視線を向ければ、そこに立っていたのは赤いピーコートを纏った茶髪の少女。

こげ茶色の丸い瞳の眦を大きく吊り上げた彼女は、涼二達の方へとその指を向けて更なる叫びを上げる。

「アンタ達、何やってんのよ!?!」

「え、いや、何って……?」

「女の子ナンパして!　しかも和服美人!　どっちの趣味だ!」

「どっちかって言うと涼二じゃねえの?」

「擦り付ける気がテメエ!?!」

涼二は咄嗟に双雅の胸倉を掴み上げようとするが、彼はさっと身

体を反らしてそれを躲す。

話の中心になつてゐる雨音はといえば、何を言われているのか分からない様子できよとんと首を傾げている。

ナンパと言つ言葉の意味が分からなかつたのだらう、と救いになつてゐるのかいないのか分からない考えを胸中で吐き出し涼二は声を上げた。

「桜花<sup>おしづか</sup>、話を聞け」

「五文字以内」

「俺は保護者」

「ちつ、漢字含めて五文字か……」

舌打ちする桜花に涼二は半眼を向けるが、生憎と彼女に堪えた様子は無かつた。

どうやら、半分ぐらい分かつていて先ほどの台詞を言い放つていたようだ。

「涼二様、こちらの方が？」

「ああ、コイツは御津川桜花<sup>みとがわ</sup>。双雅と同じく、俺の幼馴染だ」

「ま、よろしくね……で、涼二。この子は一体何なの？ っついていか、様付けって何よ？」

「あー……」

後者に関しては雨音の癖としか説明のしようが無かつたが、前者に関しては少々悩みどころではある。

雨音の境遇を正直に話す訳にも行かず、しかして下手な情報を出せ

ば怪しまれるだけ。

そもそも、涼二と雨音には基本的に何ら接点と呼ばれるものは存在せず、ニヴルヘイムを除いた涼二の交友関係を把握している二人には下手な誤魔化しも通用しない。  
と

「桜花様ですね。私は、静崎雨音と申します」

「え？ あ、はい。よろしくお願ひします……」

何やら釣られて敬語になっている桜花に、涼二は小さく苦笑を漏らしていた。

どうやら、雨音の様子に毒気を抜かれてしまったらしい。こういう時には、彼女の悪意の無さは役に立つ。

「今は涼二様の下でお世話になっておりますので、何か御用がありましたら涼二様の方に」

「涼二、ちょっと話があるわ」

「OK、分かった。だから袖の中から顔出してるその物騒な生物は仕舞え」

咄嗟に逃げようとした涼二の肩を桜花が掴む。

そんな彼女のコートの袖口からは、白い蛇が顔を出して涼二へと向けて牙を剥いていた。

シャーという威嚇音、そしてその鋭い牙を恐々と見つめつつ、涼二は咄嗟に弁解の言葉を口にする。

「とりあえず、お前が思ってるような事は無い。俺の家にそいつを泊めてる訳じゃない」

「ほほう、じゃあどういう事だと？ 着物着せて様付けで呼ばせてるくせに？」

「それはソイツが最初っからそうだったんだ！」

底冷えするような笑顔で蛇をちらつかせる桜花に、半ば絶叫するように涼二は声を上げた。

桜花の持つルーンはG、Eh、M。

ゲーボ エワス マンナス  
フリックス  
能力の強度は精々人外級であり、しかもEhとMが効果を打ち消し合っている為に獣化する事は出来ないが、その代わり動物に好かれやすいと言つ性質を持っている。

その力を使って、彼女は蛇を自由自在に操っているのだ。

「この間探偵の手伝いみたいな仕事してるって言っただろ。そいつは、そこで預かる事になったんだよ。

そいつを預かってるのも、その事務所みたいな場所だ。それで、そいつの日用品が無かったから買いに来たってだけだ！」

「……そうなの？」

「はい、大体そのような感じかと」

「ちっ、何だつまんねえ」

「双雅、テメエは後でぶっ飛ばす」

ガムを噛みながら舌打ちをしていた双雅へと悪態を飛ばし、涼二は深々と嘆息する。

一応納得したのか、桜花はその手を離して袖の中へと蛇を仕舞って

行った。

涼二としても双雅としても、肌に直接蛇を纏わり付かせているのは理解し難い性癖ではあるのだが。

「ハア、そういう事ね……ええと、雨音ちゃんだったかしら？」

「はい、桜花様」

「様は勘弁して欲しいなあ……桜花ちゃんとか桜花さんとか、そういうのじゃダメ？」

「いえ、構いません。それでは、桜花さんで」

「うん、それならそれで」

満足した様子で桜花は頷く。

彼女の視線は足元から頭の先までじっくりと雨音を観察し　　む  
むむ、と小さく呟いた。

「コーディネートは難しそうね……完全に和風イメージが染み付いてるわ」

「あー、まあ服はこっちの方で何とかする予定ではあるんだが。流石に着物を買うのは手間が掛かる」

「そりゃ、ここで着物が買えるとはあたしだって思っただけだよ。

けど、部屋着とか簡単な外出時の服とか、あるでしょ？」

「あー……雨音、ちょっと」

「はい」

桜花の言葉に、涼二は軽く視線をそらしつつ雨音の事を呼び寄せた。

そして、二人に気付かれぬように声を絞って小さく囁き掛ける。

「いいか、雨音。決して、ルーンを見せるんじゃないぞ？」

「はい、私のルーンは貴重なものだからですね？」

「ああ、確実に騒ぎになるからな。着物を脱ぐ事があっても、せめて一人でやってくれ。試着室にあいつを入れるな」

「心得ております、涼二様」

頷いた雨音に満足し、涼二もまた彼女へと向けて頷き返す。

聞き分けの良さは相変わらず　だが、持ち前の天然で口を滑らせないかどうかは涼二としても若干不安な所だった。

小さく嘆息し、涼二は目の前の建物を見上げる。

オープンしたばかりの大型ショッピングモール。

個々を経営しているのは他でもない、現在涼二達が雇われている鉄森グループだ。

様々な分野に事業展開をしている彼のグループは、まだ年若いながらも腕は確かな会長、鉄森シアによって運営されている。

現在涼二達の直接の上司となっている彼女とは、友好的な関係を築けていると言っても過言では無いだろう。

彼女は身内に対して甘いと言う涼二の性質を一目で理解し、自分達をその『身内』という範囲内に含めてしまおうとしているのだ。

それだけの眼力を持つ相手と対等な立場を築けるのは、涼二達としても利点が大きい。

故に、涼二達　即ちニヴル Heim も、彼女との共闘関係を認めると言う選択を取ったのだ。

「しかしまあ、このショッピングモールも鉄森グループのだったとはな」

「優待券と言うか、商品券貰っちゃいましたね。これ、どうしましよっ？」

「まあ、何か適当に買えばいいだろうさ。それに、欲しいものがあったらなんでも言ってくれていい。どうせ、金なんていくらだも余ってるんだからな」

「それは……」

「遠慮するな。どうせ、お前は金持ってないだろ」

そうでした、と口元に手を当てる雨音に苦笑し、涼二は再び視線をショッピングモールの方へと向ける。

ニヴルヘイムとして稼いだ金はいくらでもあるので、雨音の買い物に費やす程度ならばどうと言う事は無いのだ。

とは言え、前回ショッピングモールに行けず、さらに何度も

女性の姿になってしまった為　　約束を断ってしまった涼二

は、幼馴染二人に一品ずつ奢らされる約束となっている。

財布の中に入れられる金は有限なので、途中で金を引き出してこない限りはそこまで余裕があると言う訳でもなかった。

遠慮など到底存在しないであろう二人の様子を思い出し、涼二は静かに嘆息を漏らす。

と

「ほら涼二、アンタいつまでポーっとしてるのよー!」

「色々見るんだろオ、時間なくなっちまうぞ?」

「っつ、悪い」



物思いに耽ってしまっていた事を自覚し、苦笑交じりに視線を戻す。

そんな涼二の視線の先には、悪戯っぽい笑みを浮かべた双雅と桜花の姿があった。

これ以上奢らされる数を増やされてもたまらないと、涼二は雨音を促して歩き出す。

日常の象徴たる二人　そこに、非日常であった雨音を出逢わせてしまう事に若干の躊躇いはあった。

けれど、雨音には非日常に染まりきって欲しくないと　涼二は、そう思っていたのだ。

思い入れと言ってしまうえばそこまでであるし、姉と似ているからと言われれば否定は出来ないだろう。

けれどもそれは、紛れもなく涼二自身の願いであった。

「で、まずはどこを見るんだ？」

「洗面器具とかかな。今までは簡易の物を使ってたけど、ちゃんと自分のものが欲しいだろ？」

「はい、お心遣いありがとうございます」

「あんまり畏まらなくていいわよ。涼二の友達なんですよ？　だったら、あたしたちも友達！」

四人で連れ立って歩き出す。

そんな中で、桜花の言葉に目を見開きながら驚き、そして嬉しそうに顔を綻ばせた雨音を見て　涼二は、小さく微笑んでいた。

やはり、彼女にはまだ経験が足りない。

ずっと一人きりで、実験体として扱われてきた頃とは違うのだ。そして、そういった事を教えるのに、桜花以上に適した人物はいない

と涼二は思っている。

だからこそ、涼二は彼女を連れてきた事を後悔しないと  
そう、  
決心する。

「さて……今日は楽しむとするか」

寒くなり始めた日々。

秋晴れの空には、嫌いな冷たい雨を降り注がせよつと言つゝ気配は存在していなかった。



## 02 - 3 : 見かけた影は

「涼二、俺はアクセの店見てくるぜえ」

「おう、買っただったら領収書貰って来いよ」

「値段だけだったらレシートでもいいだろ。ま、了解だ」

後ろ手に手を振りながら去ってゆく双雅の背中を見送り、涼二は小さく肩を竦める。

高そうなものを買われそうだからと言う事ではなく、単純に何処までも予想通りだったからだ。

指輪やペンダントやピアスと、双雅はああいったシルバーアクセサリーの類を好んで身につけている。

物々しいデザインの首輪と相まって、似合っていることは確かなのだが

「あいつ、あれ以上チャラくなってどうするつもりなんだろうな」

「さあ？ チャラさの世界選手権にでも出場するんじゃないの？」  
「まあ。頑張つて優勝しないといけませんね」

間に立つ雨音の言動に涼二と桜花は視線を合わせ 別に双雅の事だからどうでもいいか、と訂正せずに聞き流した。

双雅も雨音に対しては手が出せないであろうと言うのが、二人の共通見解だ。

見るからに不良、アウトローと言う雰囲気的双雅は、その見た目の通りに不良の間ではそれなりに名の知れた存在である。

喧嘩っ早く、常にふらふらと様々な場所をねぐらにして暮らしており、普段何処にいるかは涼二や桜花でも把握し切れてはいない。

二人は彼が不良グループのリーダー的な事をやっていると言う話を聞いていたが、そちらの事情に巻き込まれた事はほとんど無かった。稀に、双雅へのお礼参りとしてやって来た不良を三人で叩きのめすような事もあったが、そういう時にはきっちりと謝罪してくれるのが双雅という男である。

筋を通す所は筋を通す。暴力的な事情には決して堅気を巻き込まない。

それが、上狼塚双雅と言う男のポリシーだ。

(……………まあ、俺に関しちゃそうでもないか)

時折喧嘩の戦力として駆り出された事を思い出し、涼二は小さく嘆息した。

双雅は相手が堅気の人間かそうでないかというのが空気で分かるらしく ムスペルヘイムにいた時点で堅気ではないが 涼二

が相手の時は、そう言った遠慮というものは存在していなかった。それほど迷惑していると言いつ訳でもなく、基本的にされるがままの涼二ではあったが。

「さて。洗面器具もパジャマや部屋着も買ったし……次、何処行く？」

「家電の類は揃ってるからな……多少趣味の物でも見ていいんじゃないか？」

「そうねー。で、雨音ちゃんの趣味って？」

その辺りは涼二もあまり知らなかったので、二人の視線が雨音の方へと向けられる。

そんな二人分の視線を受けた雨音は特にうるたえたような様子もなく、頬に手を当てながらたおやかに声を上げた。

「好んで行っていたようなものは、あまり……ですが、スリスさんに頂いた本を読むのとか、一緒にゲームをしたりするのは楽しかったです」

「へえ、読書にゲームね。じゃ、とりあえず本屋からかしら……とここで涼二、スリスって誰？」

「同僚だ同僚。本屋なら上の階だ、とつとと行くぞ」

「あ、双雅にメール打つとくわ」

携帯を取り出してボタンを押し始める桜花に、涼二は小さく肩を竦める。

空間投影ディスプレイ型や音声認識型、さらに視線思考追尾型など

様々なタイプが出ているというのに、知り合いはどれもこれもアナログなボタン式を使っているのだ。

（ああ、そついや　　）

雨音に携帯を買ってやるべきだろうか、と涼二はぼんやりと思考する。

尤も、雨音が一人で行動するような事はしばらく無いだろうから、あまり慌てる必要も無いのだが。

基本的に、彼女はスリスかガラムと共に行動する事になるだろう。

戦闘方ではない為、基本的には後方で待機する事になる　　ならば、スリスと共に後方支援が常か。

涼二がそんな事を考えている間に、桜花の連絡は終了していた。

302

「ほら、何ボーつとしてるのよ。行くわよ二人とも」

「はい、楽しみです」

「おー」

嬉しそうに笑う雨音と、気のない声を上げる涼二。

対照的な二人は、桜花の後に続いて建物内を登るエスカレーターへと乗り込んだ。

上の階層の床の影からは、徐々に『天林堂』という有名書店の看板が現れる。

大型ショッピングモールの十二階　　ここは、広大なフロアの大

半が一つの本屋と言う、書痴には堪らない場所となっているのだ。

全域を埋める事は出来なかったのか、一応一部はCDショップとな

っているが。

データ書籍が台頭する時代となった今日でも、紙媒体の書物が役目を終えた訳ではない。

データ特有の扱い辛さや読み難さは依然として存在しており、また保存と言う点でも紙媒体の方が優れている。

その為、このような大型書店には、未だに客足が途切れるような気配は存在しないのだ。

「わあ……沢山ありますね」

「そりゃね。多分、ここは密都最大の書店だろうし」

「多すぎて探し辛いつてもあるがな……ま、そこはあの端末で調べればいいんだが」

「所要所に立ち並ぶ情報端末は、この書店に置かれている本を検索する為の装置である。

著者や発行年数、題名など様々な条件で検索できる機械であるが、この書店の規模から考えると若干数が足りない。

常に人が前に立っており、使うには並ばなくてはならないような状況が続いていた。

そんな様子に、桜花は呆れたように肩を竦める。

「少しは自分の足で探せばいいのにねえ」

「言ってやるなよ。何処にどんな本が並んでるのか分からなけりゃ、探すのだけで一時間は掛かるぞ」

「ま、そうだけどさ……っと。それで、雨音ちゃんはどんな本が欲しいの？」

「あ、はい。そうですね……」



雨音はキヨロキヨロと周囲を見渡し 特に思い当たるような物は無かったのか、諦めた様子で首を捻る。その状態でしばし待ち、雨音はその視線を上げた。

「ルーン能力に関する本が、欲しいです」

「能力の本？ そりゃいっぱいあるだろうけど……雨音ちゃんって何のルーンを持つてるの？」

「<sup>ソウイル</sup>Sだ。<sup>テイターン</sup>巨人級だが、それなりの力はあるぞ」

雨音が何かを答える前に涼二がそう声を上げる。

始祖ルーンも<sup>フェアブラ</sup>神話級も、教えれば余計に騒がれるだけだからだ。そんな涼二の言葉に雨音はきよとんと目を見開いていたが、納得したのかコクコクと首を縦に振る。

そして桜花は、そんな二人の様子には特に疑問を持たず、感心したように頷いた。

「へえ、<sup>ソウイル</sup>S単品とはね。雨音ちゃんらしくっていいんじゃない？」

「……はい、ありがとうございます」

桜花が口にしたのは単純な賞賛ではあるが、その言葉に対して雨音は若干複雑そうな表情を浮かべていた。

流石に能力が反転しており、その為に人を死なせてしまった事があるなどとは桜花も思わないだろう <sup>ソウイル</sup>Sとは、本来人を癒すだけの優しい力なのだ。

小さく嘆息し、涼二は桜花からは見えない位置で軽く雨音の背中を叩いた。

それに驚いたのか、雨音は目を見開いて涼二の方へと視線を向け、意図に気づいたのか嬉しそうに笑顔を浮かべる。

しかしそれには気付かない振りをしつつ、涼二は目的の本がある棚の方へと歩き出した。

「まあ、ルーン能力に関してだったら端末を使わんでもある程度場所なら分かるだろ」

「そうねー。結構な数あるだろうし、適当に見ながら探しましょうか」

店内の簡単な見取り図からどの辺りにルーンに関する本があるかを確かめ、三人はそちらへと向けて出発する。

途中、雑誌のコーナーや新刊のコーナーで足を止めつつも、彼らはルーン能力に関する書籍の棚へと辿り着いた。

あまり高すぎないように設計された本棚の中には、大量の書籍が所狭しと並んでいる。

それらを見上げて、『よし』と腰に手を当てながら呟いた桜花は、涼二達の方へと視線を向けた。

「で、雨音ちゃんはどれくらい知識あるの？」

「……正直、殆ど無いな。一応基本は知ってるが、能力を使うのは全く無縁な生活をしてたらしい」

「ふうん……ちょっと訳ありみたいね。ま、何だっさいいけど」

特に気にした様子も無く頷くと、桜花は本棚にかじりつくような様子で参考になりそうな本を探し始めた。そんな彼女のさっぱりとした様子に小さく笑み、涼二もまた本を探し始める。

残された雨音は、二人の姿を見比べるようにきよるきよると視線を動かし、そして、涼二の後ろに続くように本棚へと近づいて行った。

雨音は相変わらず相手に触れぬように気をつけながら服の裾を引っ張り、涼二へと向けて声を上げる。

「ええと、どのような本を探せばよいのでしょうか？」

「どのような、か。まあ、とりあえず桜花の方が基本に関する本を探してみるみたいだし、こっちはSソウイルに関する専門書を探すつもりだ」

「Sソウイルの……」

まあ、流石に反転したSソウイルに関しては資料なんて存在しないだろうが、などと胸中で呟き、涼二は肩を竦めながらも探索を再開する。

この本棚にはそれぞれのルーンに関して解説書のようなものが存在しており、それぞれのルーンの成り立ちや効果に関して詳しく解説されている。

無論の事、Sソウイルもそのうちの一つだ。

「ふむ……これとか、これだな」

涼二が取りだしたのは、『ルーン能力の教本…Sソウイル編』、『これで

あなたも一流能力者！ 太陽と命、人を癒す優しきルーンソウルと題された二冊の本。

どちらも、全てのルーンに関して個別に刊行されている解説書だ。前者は硬派な書籍で、非常に詳しくその能力や前例などについて説明されている。

後者は前者程の詳しさは無いものの、イラストなどを交えて分かり易く説明されている本だ。

涼二としては、題名を交換した方が良いのではないかと思う所がある。

「とりあえず、見た感じでどちらがいい？」

「そうですね……」

ぱらぱらと頁をめくり、両音は二つの本を見比べる。

とりあえず目が行っているのは、やはり図の多い後者の本のようだった。

その様子に、涼二は小さく苦笑を漏らす。

「あの、涼二様。どちらにも良く分からない単語が多いのですが…」

「ああ、そりゃあ仕方ないだろう。そっちに関しては、多分桜花が搜してくる本に説明されてるさ。で、どんなのが分からないって？」

「あ、はい。この単語とか……」

言って両音が指差したのは、目次に書いてある『一般的なファンクション』と言う言葉だった。

それを見て、成程と涼二は胸中で頷く。

涼二たちが雨音に説明したのはあくまでも基本知識と言うレベルの話であり、こういった使い方に関する事は教えていなかったのだ。

「《ファンクション》って言うのは、簡単に言うと『必殺技』だな」  
「必殺、技？」

「要するに、能力の使い方をパターン化して、技と言う形で使うって事だ。例えば、俺が水のロープを使って飛びまわったりするのもそれに当たる」

《ファンクション》とは、あらかじめそいつた技を決めておく事で、いざと言う時にその技を呼び出し易くする為の方法である。ルーンはそれぞれ操作の仕方やプラーナの量によって様々な効果を発揮し、その場に応じて使い分ける事は難しい。故に、予めパターンを決めたものを型のように作り上げ、そこにプラーナを流し込む事で能力を発動させると言うプロセスで能力を発動させる事で、能力の使用を容易にしているのだ。

「自分の魂にあらかじめ使い方のプロセスを登録しておくんだ。後は、プラーナを注ぎ込みさえすれば発動できる。  
力さえ入れれば発動できるから、『関数ファンクション』なんて呼び名がついてるんだ」

「成程……ただ力を使うだけでは駄目なのですね」  
「駄目、とは言わないがな。形骸化されちまうよりは、まっさらな状態で使った方が応用が利く場合もある。」

ただ、制御の難しい微妙なバランスで能力を使わなけりゃならない場合は、これはかなり役に立つもんだ」

例えば、ガルムの《イラスト・ベステイア血染めの狼》。

人狼と言う人と獣の中間の姿を保つのは、普通に能力を使う上では非常に難しい。

そこで、ガルムはこれを《ファンクション》として登録する事で制御を簡単に行っているのだ。

尤も、それを創り上げるまでに数年の歳月を費やしたらしいが。

「で、これには二種類……《フォーミュラ・ファンクション》と《オリジナル・ファンクション》が存在する」

「それにはどのような差が？」

「前者は、ここに書かれてるような奴の事だ。即ち、能力の一般的な使い方……お前のSで言うなら、傷を癒すとか疲れを取るとか、そういった使い方の事だ」

涼二はあまり《フォーミュラ》に頼らず、自分の制御力頼みに能力を使う事が多い。

しかし、能力に関して初心者である雨音には、このように形にされている方が使い易いだろう。

「で、《オリジナル》ってのはその名の通り、自分で創り上げた《ファンクション》の事だ」

「自分で、創り上げる？」

「そうだ。お前はシングルリンだから分かり辛いかもしれないが、能力ってのは一人一つと決まった訳じゃない。

だからこそ、他の能力と組み合わせる事で自分独自の使い方を編み出す

事が多いんだ」

「じゃなきゃ、せつかくのルーンが無駄だからな、と小さく呟きながら涼二は続ける。

その脳裏に浮かんでいるのは、仲間達が能力を使っている時の姿だ。

「例えば、スリスが能力を使って電子機器を操る事。あれも、あいつが持つ複数のルーンで操ってる訳だ」

「個人差があるからこそ、自分自身で力を工夫しなければ一人前とは言えない」と、そういう事ですか？」

「ま、そうだな」

何を以って一人前と言うべきなのかは涼二にとっても分からなかったが、とりあえずは理解を得られたようなので、満足して頷いておく。

と　そんな所で、桜花が一冊の本を手に二人の方へと近付いてきた。

「ほら、雨音ちゃん。これなんか、一通りの基本が押さえられて手分かりやすいよ」

「あ……ありがとうございます、桜花さん」

「い、いやあ。そんな改まって礼を言われると照れるって言うか」

「

「どうせ話題の本のコーナーで紹介されてた奴だろうしな」

「そこ、うっさい！」

眦を吊り上げて叫ぶ桜花に苦笑しつつ、涼二は軽く本の内容へと目を通した。

能力の使い方や基礎、プラーナの使い方に関して詳しく載っている本、『能力使用の基礎・ランクアップを目指して』。

内容も図解などが多いため分かりやすく、初心者向けといたところだろう。

これならば問題は無いだろうと涼二は頷き、本を雨音へと手渡した。

「うん、いいと思うぞ。これなら雨音にも分かりやすいだろう」

「お、お墨付きも貰ったわね。はい、雨音ちゃん」

「はい。それじゃあ、この二冊を……」

先ほど涼二が持ってきた本の後者の方と、今桜花が持ってきた本。その二冊を持って、雨音は恐縮したような様子を浮かべながらもその声を上げる。

どうやら、分かりやすさを優先したらしい。

（まあ、初心者だしな。最初はそんな所か）

「さて！ それじゃ、他にも見て回りましょうか！」

と　涼二の思考を遮るように、桜花の声が上がった。

その内容に、涼二は胡乱な視線を彼女の方へと向ける。

「あん？　まだ何か見るのか？」



「当たり前でしょ？ 日常的にずっと能力の訓練してる訳じゃないんだから、もうちょっと趣味に出来る本も探すべきでしょ？」

「あ、えっと……流石にそれは申し訳ありませんので……」

「いいのいいの、どうせ涼二の金なんだし」

「おい」

威嚇するように低い声が発せられるが、謳歌は怯んだ様子も無く雨音の背中を押して歩き出す。

「ほらほら、あっちの方に小説のコーナーとかあるよ。色々読んでみればいいじゃない！」

「え、あの、えっと……」

桜花によって連れ去られて行く雨音の姿を見つめ、涼二は深くと嘆息した。

あの様子は、どうやら本人にも何らかの買いたい本があると見た

そんな事を考えながら半眼を向けつつも、涼二も二人の背中を追うようにして歩き出す。

ああなると、しばらくは解放されない事を知っているのだ。

どの道戻った所で暇には変わらないので、涼二は諦めて付き合う事を決意する。

と

「ん……？」

ふと視界に入った大柄な影に首を傾げ、涼二はそちらの方へと視線を向ける。

どこか記憶に引っかかるその姿　直接確認しても中々思い出す事ができず、涼二は思わず首を傾げていた。

角刈りの黒髪と、浅黒い肌。そして、服の上からでも分かる隆起した筋肉。

一目見て連想するのはガルスであるが、生憎と彼とは髪の色が全く違う。

「あれは……確か、鉄森の執事だったか？」

かつて通信を行った時、鉄森シアの背後にいた大柄な執事の姿を思い出す。

すぐに服を破き飛ばして筋肉の見せ合いになった為、精神衛生的に視界から外していた涼二ではあるが、その姿には少しだけ覚えがあった。

彼は何やら慌しい様子で携帯に向かって話しながら、涼二の姿に気付く事も無くエレベーターの方へと向かってゆく。

このショッピングモールは鉄森グループが経営している為、ここにおいてもおかしくはないのだが

「……妙に慌ててたな。何かあったのか？」

「ちよつと涼二、何ボーつとしてるのよ！」

「つと……悪い、今行く」

大した事では無いだろう、と涼二は小さく嘆息し、声を上げる桜

花の方へと向かって歩いてゆく。

彼女が手に持っている爬虫類図鑑に対して若干の呆れを抱く頃には、涼二は既に先ほどの男の事を記憶の片隅に追いやっていた。

それが、事件のきっかけとなる事にも気付かずに。

## 02 - 4 : ニヴルヘイムの現状

買い物を終え、涼二と雨音の二人は桜花や双雅と別れ、新たな拠点となった場所へと向かっていた。

それなりの時間をかけた為か、十時に集まったにもかかわらず、今はもう夕方となってしまうている。

夕日に照らされた密都の街並みを歩きながら、涼二はぼんやりと周囲の景色を眺めていた。

「日が落ちるのも早くなってきたな……」

「そうですね。もう冬も近いでしょう」

少しだけ強く吹いた風に髪を押さえながら、涼二の言葉に雨音が同意する。

冷たさを孕む風は、しかしまだ肌に凍みるほどの強さは無く。心地よい冷気は、室内で火照った身体に染み渡ってゆく。

「涼二様、それは私がお持ちいたしましたでしょうか？」  
「お前は自分の服を持つてるだろ。重い物は俺が持つ」  
「しかし、私の買い物だった訳ですから……」  
「いいから。女に荷物持たせて隣を歩くなんて、恥ずかしいだろうが」

桜花に聞かれれば『古風な考えだ』と笑われそうな内容だ、と涼二は胸中で小さく苦笑しつつ、何冊もの本や洗面器具などが入った袋を抱え直す。

その動作が重そうに見えたのか、雨音は気が気では無い様子を見せるが、気付かない振りをしつつ涼二は歩いていった。

雨音の方も、その男性を立てるといふ奥ゆかしい考え方からか、それ以上追求してくる事はなかったが。

彼女は小さく息を吐き出し　そして、穏やかな笑みを浮かべる。

「涼二様、今日は私の為に、ありがとうございます」  
「気にするな。どうせ、必要な事だったしな」

照れたようにそっぽを向きながら、涼二はそう口にする。  
そんな様子に、雨音はクスクスと小さな笑みを零していた。  
彼女が笑みの中で思い返すのは、今日という日に体験した様々な出来事。

「……本当に、楽しかったです。初めて見るもの、初めて口にした

もの……どれもこれも、新鮮な体験でした」

「まったく、大げさだな……当たり前のもばかりだろ？」

「私にとっては、それが当たり前ではありませんでしたから」

静かな声音に涼二は振り返る。

そこにあつた雨音の表情は　どこか寂しそうな、懐かしそうな笑顔だつた。

いつも上品に笑う彼女の憂いの表情に、涼二は思わず息を詰まらせる。

「不幸は不幸であると自覚せよ……ガラム様には、そう諭されました。私は今まで、不幸と呼べる存在だつたのでしよう」

「……まあ、な。確かにその通りだ」

雨音がこれまで受けてきた実験を思い返し、涼二は顔を顰めながらも頷く。

彼女が静崎義之ちしむねによつて引き取られる前の経歴については、今のところ明らかになつていない。

けれど、スリスが手に入れてきた資料では、彼女は物心つく前から実験体として使われてきた事が分かっている。

幸い、始祖ルーンを持つ存在として出来るだけ長生きさせようと言う魂胆があつたのか、寿命に影響が出るような実験は行われていなかったのが唯一の救いと言つた所だろう。

「ですが、今は幸せです」

「……雨音」

「当たり前前の幸せを、知る事が出来ました。沢山の本があつて、探すのがとても楽しかったり、他愛もない事で笑う事が出来たり、初めて食べた食べ物がとても美味しかったり……」

「ハンバーガーなんて、大したモンじゃないだろ」

「それでも、ですよ」

口元に手を当て、雨音は上品に笑う。

先ほどとは違う、心の底から嬉しそうな笑顔

それに対してど

こか安心している自分に、涼二は半ば呆れを覚えていた。

「……あんなので幸せになれるなら、安いもんだよ。お望みとあらばいくらでも連れて行ってやるさ。似たような店ならいくらでもあるからな」

周囲を示しつつ、涼二は苦笑交じりに告げる。

周囲にはハンバーガーの店を始め、牛丼やうどん、ドーナツの店など、様々なチェーン店が立ち並んでいる。

この辺りは食事関係の店が軒を連ねて値段競争を行っている為、それなりに安く食事が出来る事で有名だ。

そんな周囲の状況に気付いていなかったのか、雨音は改めて周囲へと視線を向け、その瞳を輝かせた。

視線を涼二のほうへと戻し、彼女は嬉しそうに声を上げる。

「本当ですか？」

「ああ、勿論。ま、ああいう食事は太り易いから、しっかりと運動してないとダメだな」

「あら。それでは、ガルム様に運動をお教えいただきましょう」

本当に、心の底から楽しそうに雨音は笑う。

当たり前の事で悩めるのが、本当に嬉しいとでも言うかのように。それは涼二にとって、幼馴染の二人と共に過ごす時間と等しい事だ。非日常の世界を忘れ、僅かながらの平穏を得る事が出来る、あの場所と。

「やりたい事が沢山あります。知りたい事だって、山ほど。ですから」

雨音は笑う。

あの時、出会った頃に浮かべていた、静謐な笑みとも違う。今の彼女の顔には、陽だまりのような穏やかさがあった。

「　　助けてくださいありがとうございます、涼二様」  
「……………」

涼二は、その言葉に思わず視線をそらす。何処までも純粋な好意、感謝の念に、照れを抑える事が出来なかったからだ。

悪意を向けられる事に関しては慣れてるが、好意を向けられる事は得意ではない　それが、涼二の特徴だった。



「改まって言うほどの事でもないっての……ほら、行くぞ。あんまり遅いと、スリスがまた五月蠅くなるからな」  
「ふふ……はい、分かりました」

雨音は嬉しそうに笑う。

そんな表情を肩を竦めながら眺めつつ、涼二は新たな本拠地となった場所へと向けて歩いて行ったのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

鉄森グループ本社ビル。

ユグドラシルの発足以降に企業を立ち上げ、瞬く間に成長した鉄森グループの本社は、この密都に存在している。繁華街を通り越し、オフィス街の地域まで足を踏み入れ、真っ先に目に入る巨大なビルがその建物だ。

グループの会長鉄森シアの私的な護衛という形で雇われたニヴルヘイムの面々は、この会社内に半ば顔パスではいる事が出来る。求められればIDを提出する必要はあるのだが。

「しかしまあ、結構な手腕だな」

強化ガラスによって外が見えるエレベーターから眼下を見下ろしつつ、社内の様子を思い浮かべて涼二はそう嘆息する。

社員は誰も彼も慌しく、しかし充実した表情で仕事をこなしていた。無論、それはどうした所で難しい。誰もがやりたい仕事に就けるとは限らないからだ。

しかし、この会社ではシアが直接面接を行い、それぞれの適正を見出した上で、その仕事の割り振りを行っている。

観察眼も優れているのだろう、その割り振りに過ちはほぼ存在せず、結果として非常に充実した職場となっているのだろう。

（一体、何のルーンを持っているんだか）

胸中でそう呟き、エレベーターで到着した会へと足を踏み入れる。

と ふと、涼二は違和感を覚えて足を止めた。

そして唐突に立ち止まった彼へと、後ろから付いて来ようとしていた雨音は首を傾げる。

「涼二様、どうかなさいましたか？」

「あ、いや……大した事じゃないんだ」

ここ数日、出入りする時には必ずあの筋肉質な執事の送り迎えがあったのだ。

しかし今日に限ってそれが存在していなかった為、それに対して涼二は若干の疑問を覚えていた。

尤も、昼間ショッピングモールで見かけたあの男が涼二の見間違えでなかったとしたら、特に不思議と言う事でもないのだが。

(……まあ、何か用事があったんだろ)

そろそろシアが戻ってきている時間であると言っのに姿を見せないのは気になったが、彼らの用事に口を出すつもりも無いので、涼二はその疑問を意識の隅へと追いやった。

そして立ち止まっていた足を進め、涼二はこの高い階層にあるフロアの一室へと向かってゆく。

そこは、鉄森グループによって雇われたニヴルヘイムの面々に宛がわれた部屋の内の一室。

その部屋では

「む、戻ったか二人とも」

「おー、おかえりー」

あまりにも予想通りと言えば予想通りな姿の二人が、それぞれ趣味の活動を行っていた。

巨大なダンベルを交互に上げ下げしているガルムは相変わらず上半身裸であり、そしてスリスの方はといえばスティック状のスナック菓子を口に加えながら携帯ゲーム機を弄っている。

そんな二人の姿に呆れを交えた嘆息を吐き出しつつ、涼二は雨音を連れて部屋の中へと入ってゆく。

「ぶれないな、お前は」

「えー、何さそれー」

「ったく……ほら、お前が頼んでたゲームソフトだ。ただし、エロゲは無しだからな」

「ええ!？」

半ば悲鳴のような声を上げるスリスに、涼二は頭を抱えつつ近くにあつた椅子へと腰を下ろす。

そしてそれと同時に、跳ねるように起き上がってきたスリスが、袋の中身を確かめて講義の声を上げた。

「むー、ボクだけだと買いに行きづらいのに！」

「いや、お前一応18なんだから、買えない訳じゃないだろ。そもそも、友人やら雨音やらを連れてる時にそんなモノ買えるか」

確かにスリスは小柄であり、見方次第では雨音とそれほど変わらないか、下手をすればそれ以下の年齢にも見えかねない。

しかし偽造とはいえ身分証名称も存在しているので、決して買えない訳ではないのだ。

それでも行きたがらないのは、単なる出不精でしかない。

相変わらずな様子のスリスに嘆息し、涼二はその背を椅子の背もたれに預けた。

黒い革の高級なソファは、深く沈んで包み込むように涼二の体を受け止める。

と同じように反対側の椅子に座った雨音が、きよとんと首を傾げて見せた。

「あの……」

「ん、何だ？」

「えろげ、って何でしょう？」

その言葉に、部屋の中にいた三人が沈黙する。

涼二、ガルトム、スリスは互いに視線を合わせ　そして、それぞれがどのような方向性で話そうとしているかを察知した。  
そして

「興味あるなら一緒にやろう！」

「止める馬鹿。雨音に妙な知識を植えつけるな」

「えー、ある意味必要な知識だよ？」

「あんな無駄に歪められた知識なんぞ使い物になるか」

あんなものは使いやしく情報が歪められている　というのが、涼二の見解である。

基本的に、スリスの好むゲームはそういったシーンなどが存在する  
必要が無い、即ち基本のストーリーやらキャラクターやらを重視す  
るタイプのゲームなのだが、だからと言って複数人でやるようなゲ  
ームではない。  
どちらにしろ、世間知らずな雨音にとっては教育上よろしくない内  
容であった。

「とにかく、アホな事言ってる暇があったら自分で買って一人でや  
れ」

「ぶー、涼二のいけずー」

「……結局、何なんでしよう?」

「まあ、何と言うか……君は、基本的な保健の知識を身につけた方  
がいいかもしれない」

「はあ、良く分かりませんが……」

苦笑交じりのガルムの言葉に雨音は首を傾げ、その二人の様子に  
涼二は少しだけ安堵の吐息を吐き出していた。  
雨音がしつこく追求してきた場合、どのように説明したものかと悩  
んでいたのだ。

尤も、基本的に彼女がそんな風に食い下がると言う行動を取る事は  
ないのだが。

それはそれで問題があるかもしれない、などと胸中で呟き、涼二は  
小さく苦笑する。

現在の所、ニヴルヘイムはこのように鉄森グループに協力するよ  
うな形で保護されていた。

尤も、普段からこの建物に滞在しているのは涼二以外の三人だけで  
はあるのだが。

とは言っても、ニヴルヘイムはあくまでも、依頼を受けて活動する傭兵のような存在。

普段から何かをする訳ではないので、普段は涼二も自宅で待機しているのだ。

以前使っていた建物より交通の便がいい為、涼二としてもやり易い所である。

雨音は、以前までの問題はほぼ解決されたといっても過言ではない。

スリスが静崎製薬から持ち出した大量の資料を基に、鉄森シアの主導で雨音の調整機具が製造され、それによって雨音は今まで受けていた強化処理を緩和する処理を受ける事となった。

しかし、長年かけて体に馴染まされていたプラーナのラインは完全に消し去るには至らず、能力は中途半端に半分ずつ残る、というような状態となっている。

このままゆっくりと戻していくという方針ではあるが、雨音としても人に触れられるようになった現状は非常に嬉しいものようだ。

スリスは、以前よりも恵まれたネットワーク環境で、その手腕を存分に発揮している。

ライバル企業のネットワークにハッキングを欠け、バレないように機密情報をいくつも奪取しているのだ。

アンサス Aのルーン特有のファンクション、マルチタスク 《並列思考》によって同時平行でエロゲをやっていたりもするが、生憎と仕事はしっかりとやっている為、誰も文句がつけられない状態だったりする。

そしてガルムは、その筋肉故にシアのお気に入りである為、時折ボデイガードを努めているのだ。

(…………あれ、何もしてないのって俺だけ?)

机の上に置いてあつたスナック菓子をかじりつつ、若干の危機感を覚えて涼二は頬を引き攣らせる。

何もやっていないと言う点では雨音も同じではあるが、研究に協力している為役に立っていないと言う訳ではない。

（突っ込んでこない辺り、スリスは気付いてないのか……まあ、ガラムは気付いても何も言わんだろうが。

そもそも、俺達は依頼が無い限り動く必要が無い訳で。うん、俺は何もしなくてよし）

自堕落な自己完結をしつつ、涼二は窓の外へと目を向ける。

夕方から夜になり始める紫色の空は、雲ひとつ無く晴れ渡っていた。夕日に染まる雲が好きな涼二としては、若干惜しいと思う所ではあるのだが。

「……さてと、俺は戻るかね」

「あれ、泊まっていかないの？」

「理由も無いしな。あんまり家を空けとくと、バカ共が勝手に入り込んで荒らしそうだし」

今更ながら合鍵を渡した事を後悔しつつある涼二であつたが、今更言つた所で意味は無い。

スリスに対してヒラヒラと手を振りつつ、他の二人にも目配せをし、涼二はその場から立ち上がった。



特に何かやる事がある訳ではない。あの一人きりの部屋には何も無く、ただ孤独な空間が広がっているだけだ。けれど　　涼二は、孤独な空間を好む人間でもあった。仲間達と過ごす時間を嫌っている訳ではない。けれど、一人で考える事が出来る時間と言つたものを、涼二は非常に好んでいたのだ。

「さて、じゃあ何かあったら連絡してくれ」

「んー、了解」

「涼二様、また明日お会いしましょう」

「ああ、買って来た道具はしっかり使えよ」

雨音に声をかけ、ガルスには目配せをし、互いに苦笑交じりに頷いてから涼二は扉へと向けて歩き出す。

態々ここまで雨音を送る気になったのは何故だったか　　そんな事を考え、ドアノブへと手を伸ばした、その瞬間。

「嵐山あひしやまがいませんわッ!？」

「うお!?!」

蹴り破るような勢いで開けられた扉から、涼二は咄嗟に手を離す。しっかりと足跡が着いた扉の向こう、そこに立っていたのは現在のニグルヘイムの雇い主である鉄森シア。

彼女は非常に慌てた様子で、涼二達へと向けて声を上げた。

「ニグルヘイムに指令です！　我が執事、嵐山果須かすを搜索なさい！」

半ば啞然としながらも　　またしばらく自宅に帰る事が出来なくなつた現状に、涼二は深々と溜め息を漏らしていた。

「……まあ、アンタの命令なら従わざるを得ないんだが、せめて分かるように説明してくれないか」

帰宅を取り止め、取り乱すシアを落ち着かせながら椅子に座らせてから、涼二は嘆息交じりにそう呟いた。

目の前の少女　　鉄森シア。金髪碧眼の彼女は、そのポニーテールに纏めた髪を揺らし、沈んだ表情を浮かべている。

年の頃はあまり変わらず　　否、少し低いぐらいかもしれないと、涼二は目算をつけていた。

そんな少女がこのような巨大な会社を動かしている事には驚愕を禁じえなかったが、それでも取り乱している所を見ると歳相応にも思える、と涼二は小さく肩を竦める。

普段なら気付いていたであろう涼二の観察の目に、しかしシアは気付かぬままかぶり振って声を上げた。

「嵐山は……わたくしの使用人にして護衛です。本来なら、わたくしの命令が無い限りは片時も離れる事はありませんわ」

「それが、連絡しても応答が無いって事？」

「ええ。今朝から視察に行かせていたのですが、時間になっても戻って来ず……連絡も」

スリスの言葉に頷き、シアは顔を俯かせる。

そんな彼女の言葉を吟味しつつ、涼二はガルムの方へと視線を向けた。

彼も得た情報から考察しているようではあるが、まだ情報が足りない。

「……執事って、あの角刈りの男だったな。あいつなら、アンタのところのショッピングモールで見かけたぞ。視察するのは、あのショッピングモールの事を言っているんだよな？」

「ええ、その通りですわ。現在までの経営状況のチェックに行かせていたのですが……」

「ふむ……スリス、ちょっと頼めるか？」

「ん、何ー？」

流石にスナック菓子を摘むのは止めたのか、ゲームをスリープモードにしたスリスが涼二の言葉に首を傾げる。

どちらにしろあまり気にしないような面子ばかりではあったが、一応分別はあったようだ。

小さく息を吐き出しつつも、涼二は彼女へと向かって声を上げる。

「俺が見たとき、あの男は何者かと電話をしていた。てつきり鉄森かと思っていたんだが、どうやら違うみたいだからな。通話記録をチエックしてくれ。流石に録音データは無いだろうが、電話番号から相手の事を割り出せるだろ」

「ん、了解。ちょっと待つてねー」

ノートパソコンを開いて早速ハッキングを始めるスリス。  
そんな彼女からは視線を外し、涼二は小さく苦笑交じりの声を上げた。

「しかし、少し意外だな」

「はい？」

「アンタの事だよ。人を使うのには慣れてそうなイメージがあったんだが……側近とはいえ、一人いなくなっただけでここまで取り乱すとはな」

多少からかうようなニュアンスを込めて、涼二はそう口にする。  
が どうやら、彼女にとってはあまり冗談にならなかったようだ。

「当然ですわッ！」

「ぬおっ!?!」

バン、と力強く机を叩き、シアは勢い良く立ち上がる。

その瞳に籠った気迫に、涼二は思わず顔を引き攣らせていた。が、彼女はそんな涼二の様子に気付かぬまま、勢い良く声を上げる。

「あの素晴らしい筋肉を数時間とはいえ見る事が出来ないなんて、わたくしにとつては耐えられません！」

「……そっちかよ」

「うむ、確かに素晴らしい筋肉だがな」

「頼むからお前までボケに回らないでくれ」

得意げな表情で頷いているガルムへは半眼を向け、涼二は感じた頭痛に頭を抱えた。

隣から雨音によって頭を撫でられていたが、とりあえずスルーし、呆れを交えた表情をシアへと向ける。

若干威嚇じみた険相になってしまっていたが、彼女は一步も引く事無く続けた。

「いいですか、人間には筋肉は必要不可欠なものなのです！」

「そりゃ、自分の筋肉は要るけどな」

「わたくしの多忙な日々を潤いを与えてくれる嵐山の筋肉……アレが無くなってしまったては、わたくしはどうすればよいと言うのですか！」

「仕事しろよ」

一つ一つの確にツッコミを入れていくが、生憎とシアには全く堪えた様子は無い。

涼二は深々と嘆息し、仲間に助け舟を求めようとして 援護し

てくれそうな人物がいない事に絶望した。  
そして涼二が両手で蹲るように頭を抱えている間にも、シアの欲望に満ちた主張は続く。

「ええ、確かにガルム様の筋肉も魅力的ですわ。嵐山のそれと引けを取らぬほどに完成された肉体美……嘗め回すように観察したいのは事実です」

「……頼むから嘗め回すようにとか言うな。仮にも女だろ、お前「  
ですが！」

「どうやら全く聞こえていないらしい」と、涼二は小さく嘆息を漏らす。

感極まっているらしいシアはそんな涼二の様子に気付かず、芝居がかった様子のまま声を上げた。

「だからといって嵐山を失う訳には行きませんわ！ たった一つの上腕二頭筋ですよ！」

「……いや、二つあるだろ上腕二頭筋。まあ、本人がいないんだっ  
たら意味ないが」

深々と嘆息。

しかし　と、疲労感に満ちた感覚の中でも、涼二はしっかりと思考を展開していた。

何だかんだとおかしな主従ではあるが、嵐山と言う男は実際にかなり優秀な執事なのだ。

主であるシアとの信頼関係も厚く、戦闘に関してもかなりの実力を

持っている。

だと言うのに、何の連絡も無く姿を消すと言うのはあまりにも不自然なのだ。そう、よほどの緊急事態でも無い限りは。

「……ガラム」

「うむ。流石に、万が一と言う事もあるからな」

窓の外を見れば、既に日が落ちて電灯の光無しでは見通す事の出来ない闇に包まれた状況だ。

搜索の為に外に出る事を考えてはいるが、この時間に当ても無く探し回るのは効率が良いとは言えない。

今日は室内で情報収集に努め、明日までに戻って来なかったのならば探しに出ると言うのが妥当な所だろう。ただし

(……このお嬢さんは納得しないだろうからなあ)

未だに熱弁を奮っているシアの様子を半眼で見つめつつ、涼二は小さく嘆息する。

普段の冷静な経営者である彼女ならば非効率的な命令をするような事は無いだろうが、今の彼女にはそんな余裕があるとは思えない。仮にも巨大グループの経営者だと言うのに、こんな体たらくで大丈夫なのかと若干不安を覚える涼二ではあったが、普段の彼女の優秀さを考えると、この程度で揺らぐような会社でもないのだろうと納得する。

と



「……涼二、これちよつと変だ」

「ん？ 何か分かったのか？」

スリスの上げた言葉に、涼二は顔を上げて視線を向ける。  
彼女は先ほどまでの弛んだ表情を引き締め、眉根を寄せながら声を上げた。

「かかってきた番号は特定できたけど、そこから先が調べられないようになってる。最新のプロテクトだよ、これ」

「探知不能な番号からかかってきた電話……？」

「それに、本人も衛星探知システムは切ってるみたいだよ。ちよつときな臭いと思わない？」

「……ふむ」

スリスの言葉に、涼二とガルムは思考を巡らせる。

息を飲んでいるシアと状況を理解していない雨音を含め、部屋の中には一時だけの沈黙が降りた。

そして 涼二は、声を上げる。

「スリス、場所の探知は出来るか？」

「相手と本人ね……両方、ちよつと時間はかかるけど可能だよ。どつちかっていうと本人を探す方が素早く出来る」

「分かった。なら、そちらを優先してくれ」

スリスにそう指示を出し、涼二は立ち上がる。  
夜とは言え、相手の位置さえ分かればある程度の目算をつけて探す事は出来る。

スリスならば、数分ほどでそれを完了させる事が出来るだろう。  
ならばやる事は決まっていると、涼二は小さく笑みを浮かべてガルムへ、そしてシアへと視線を向けた。

「俺達に指示を出せ、依頼主殿。そうすれば、俺達はアンタの命令通りに動こつ」

「……！」

そんな涼二の言葉に、シアは大きく目を見開く。  
しかし彼女はそんな驚愕を一瞬で納め、そして凜とした視線を涼二へと向けた。

「では、ニヴル Heim に依頼です。我が従者、嵐山果須の搜索をなさい」

「……了解した。一応緊急性があるかもしれないから、値段交渉とかは後にしといてやるさ。ガルム、行くぞ」

「ああ」

「雨音、お前はこつちでスリスの手伝いを頼む。飲み物を運ぶ程度で構わないから」

「分かりました、涼二様。お気をつけて」

自分が行っても役には立てないという事を理解しているのだろう、

雨音は若干申し訳なさそうな笑みを浮かべ、そう頷いた。

自分自身の実力を弁えたその姿勢は涼二にとっても好ましい物であり、小さく頷き返す。

ガルスもまた涼二に続くように立ち上がり、スリスは画面にその顔を向けたままひらひらと手を振った。

「じゃあ、行ってくる。連絡を頼んだぞ」

「はいはい、じゃあ気を付けてね……あ、シアちゃんちよっとお願いがあるんだけど」

仕事に関しては真面目なスリスに苦笑し　　残る三人の言葉に  
耳を傾けながら、涼二はガルスを連れ立って与えられた部屋を出て  
行った。

「嵐山の部屋、ですか」

シアの言葉に頷きながら、スリスは雨音を連れ立って廊下を歩く。先導するシアの案内の元向かっているのは、失踪したと言う件の従者、嵐山に与えられていると言う部屋だった。

歩きながら両手で持ったノートパソコンは、スリスの能力による干渉で自動的にいくつもの画面を展開していた。

フェアブラ アンザス マルチタスク  
神話級のA能力者として持つ大量の《並列思考》の半分以上をパソコンでの作業に傾けながらも、スリスはシアへと語りかける。

「流石に、携帯から分かる資料程度じゃ何も分からないからね。彼が個人行動を取るに至った理由を調べるには、やっぱり本人の部屋を調べた方がいいだろうし」

「そうですね……と言っても、わたくしも何があったか気づく事は出来なかったのですが」

「おっちゃんと同種の間人っばいからねえ、あの人。自分の感情を隠すのは得意そうだし、無理も無いと思うよ」

肩を竦めつつ、スリスは嵐山のいる場所を調べ、それと同時に通話記録にあった相手のプロテクトをゆっくりと慎重に突破してゆく。まだまだ時間のかかりそうな作業に辟易しつつも、スリスはシアへ

と向けて続けた。

「でも、そういう人間だからこそ、こういう感情的な行動に出るにはそれなりの理由があると思う……って言うのはまあ、おっちゃん  
が言ってた事だけど」

「理由、ですか……」

「想像は出来ませんが、大切な事だったのでしょうね」

目を閉じ、雨音がそう口にする。

大切と呼べるものが少ない雨音にとっては実感しがたい事なのか、  
あるいは少ないからこそ共感できるのか 能力によって得てい  
る視界に僅かながら映る雨音の姿を見つめ、スリスは肉体の目を閉  
じる。

「……ここですわ」

「っと……じゃ、お邪魔します」

いつの間にか到着していた事に気付き、開けて貰った扉をくぐつ  
て、スリス達はその部屋の中へと足を踏み入れる。

嵐山に与えられている部屋は使用人の物とはいえ非常に大きく、し  
かし部屋の広さに比して私物と思われる物は非常に少なかった。

「おっちゃんの部屋に似てるなあ」

それを眺め、スリスは苦笑交じりにそう口にする。  
この部屋の持ち主の私物と思われる物は棚の上に置かれた本と、所々に置かれているトレーニング器具のみである。  
そんな中、スリスは部屋の片隅に置かれたパソコンを発見し、小さく笑みを浮かべた。  
彼女はすぐさまそれへと歩み寄り、電源を入れる。

「……勝手に見るつもりですか？」  
「ボクとしては、こつちを探す方が速いからね。必要のないデータは見ないよ」

まあ、一通り目は通すけど。

胸中でそう呟き、スリスは三つのルーンを再び発動させた。  
残る半分の《並列思考<sup>マルチタスク</sup>》をそちらへと傾け、張られていたパスワードをあつという間に突破する。  
流石にほぼ全ての意識を傾けている状態では外の話に耳を傾ける余裕は無く、スリスは無言でその無数のデータへと目を通し始めた。

(……予想通りと言えば予想通りだけど、やっぱり筋トレ関連ばかりだなあ)

隠しファイルの類まで全て探し出しながらも、スリスは小さく苦笑を浮かべていた。

食事法やそれに伴うメニュー、シアの予定表と、それに伴う自身身の行動。

さらに

「……っと」

ノートパソコンの方で行っていた作業の内の一つ、嵐山の位置特定に関して作業を終え、スリスは一旦意識の一部を二つの画面から離れた。

その作業に割り当てていた意識を離れただけなので、特に作業効率落ちる訳ではない。

小さく頷き、スリスは携帯電話を取り出した。

指で操作するのも面倒臭く、能力で干渉して通話記録を呼び出してコールを開始する。

「……あ、涼二？」

『ああ、位置が分かったか？』

数コールの内に戻ってきた返事に小さく笑み、スリスは頷く。

小さく笑みを浮かべ、その向こうにいる姿を想像し、声を上げた。

「そつちにデータを送る。場所的には繁華街からちよつと外れた所みたい。何をするつもりなのかは知らないけど、今はとりあえず動いてないよ」

『了解した。今からガルドと二手に分かれながらそつちへ向かう』

「うん、分かった。地図データを二人の携帯に送るから、それを頼りに向かって」

『感謝する。何か分かったら連絡してくれ。こつちも追って連絡を』

入れる』

「オツケー。じゃ、頑張つて！」

通話を切り、スリスは息を吐く。

そして電話へと傾けていた意識を戻し、余った《マルチタスク並列思考》を残った作業へと割り振った。

嵐山に電話をかけてきた存在のプロテクトを破るにはまだ時間がかかりそうではあるが、もう一つの作業は大半が終了している。  
が

（何も見つからない……何も無いの？ いや、もしかして）

先日の事件での事を思い出し、スリスはこのパソコンでの削除口グを検索した。

その上部、ゴミ箱の中からも念入りに消されているデータの中に、文章データを発見する。

ファイルの名前は単純に『調査』。

これだけでは今回の件に関係しているとは限らないが

「他に思い当たる物もなし……やってみるか」

頷き、スリスはデータの復元を開始する。

しかしやるうと思つてすぐに終わるような作業ではない。

分割した意識を集中させながらも、スリスは後ろにいる二人へと声をかけた。



「雨音ちゃん、シアちゃん！」

「はい、何かお手伝いする事がありますか、スリスさん？」

「うん。ちよつと、この部屋を探ってみて。日記とかがあったら尚いいんだけど……メモ書きとかでも何かヒントになるかもしれない」

「いいのかしら……？」

若干遠慮がちな様子のシアではあったが、躊躇う事無く行動を開始する雨音に続き、部屋を見て回り始めた。

そんな二人の様子を確認してから、スリスは再び意識をパソコンの方へと集中させる。

消されたデータを小さなものから手当たり次第復元しつつ、ただ淡々と作業を進めてゆく。

一応《マルチタスク並列思考》の内のいくつかを二人の方へと向けながら、スリスは復元したデータを次々と再生していつていた。

と

「……あら？」

「ん、どーしたの雨音ちゃん？ 何か見つけた？」

「ごそごそとゴミ箱を漁っていた雨音が、何かを発見して首を傾げている。」

一応お嬢様出身の彼女があのような行動をしていることに若干の違和感を覚えていたものの、しっかりと働いてくれているので文句も言えず、スリスはその考えを意識から放り出しつつ声を上げた。

雨音がその中から見つけ出したのは、何やら紙を丸めた物。

どうやらメモ用紙の切れ端のようだ。

「えっと……走り書きのメモを破り捨てて、若干残っていた部分みたいな感じです」

「ちょっと見せなさい……確かに、嵐山の筆跡ですわね。けど、グレイプ……？」

「グレイプ？ 葡萄がどうかした？」

「いえ、葡萄ではないと思いますけど……何かしら、これは」

ゴミ箱に捨てられていたのは、『グレイプ』までで途切れてしまったメモ書きの一部。

そこまででは意味を成さない単語に、スリスは思わず首を捻っていた。

が、それでもヒントには変わらない。

その単語に関して、パソコンの中を検索する

「……！」

そこに、一つだけヒットする内容が存在していた。



ぱちんと携帯を閉じ、涼二はその視線を繁華街の外へと向ける。状況はあまり好転したと言う訳でもないが、それでも進展した事に変わりはない。

涼二はメールと共に地図データが送られてくるのを待ち、ガルムへと電話をかけた。

「……………もしもし、聞こえるかガルム？」

『ああ、大丈夫だ』

2コールで繋がったガルムに小さく頷き、通行の邪魔にならぬよう道の脇に立ちながら涼二は声を上げる。

その視線の中には、普段と違う鋭利な色が浮かんでいた。

「標的のGPS反応をスリスが強制起動して掴んだ。そっちにもデータが行っていると思うが」

『うむ、来ているぞ。さて、どう追う？』

「反応が移動していないのが気になる。ただ止まっているだけならいいんだが、もしかしたら携帯を落としているのかもしれない。

その場合を考えて、二手に分かれた方が得策だろう」

『そうだな……ではそうしよう。今の位置からではお前の方が近そうだ、先に目標地点へと向かってくれ』

「ああ、了解した」

通信を切り、涼二は小さく息を吐く。

地図に記された地点は今いる場所から北西へと向かった地点

確かにあまり遠いと言いつ訳ではないが、未だに反応は動こうとしていない。

一応手がかりにはなるだろうが　　と嘆息し、涼二はその方向へと向けて走り出した。

（飯を喰ってるだけならいいんだが……ああ、そっぴや腹減ったな）

何だかんだで夕食を食べそびれていた事を思い出し、若干憂鬱な気分になりながらも、涼二は目的の方向へと向けて真っ直ぐに進んでゆく。

携帯に表示されている地図を拡大し、路地裏の行き止まりなどを確認してから、涼二はその細い道へと飛び込んだ。

道なりに行くには少々遠回りなので、若干狭いがこのような道を選んだのだ。

角は多いものの、一度地図を見ているので何処をどう曲がればいいのかは覚えている。その記憶の通りに、涼二は路地裏を進んでいったと

「ん……？」

ふと気配を感じて、涼二は立ち止まる。

自身の方へと向かってくる気配と言う訳では無いが、何か複数の存在が動き回っている気配。

そして、響くのは肉を打つような鈍い音だ。

「これは……」

あまり係わり合いになりたくない部類の騒動。

けれど道は一つしかなく、今から戻って回り道をするよりは無理矢理突っ切ったほうが良いと判断し、涼二はその音がする方へと向かって飛び出していった。

見えてきたのは、建物の立地の関係上出来上がったと思われる小さな広場。

そして、そこで戦闘　　というよりはケンカ　　を繰り広げる  
数人の男達だった。<sup>ラグズ</sup>

思わず顔を顰め、Lのルーンを使って飛び越えようと　　した、  
次の瞬間。

「おう、涼二じゃねえか。奇遇だな、こんな所で」

「な……そ、双雅!？」

唐突にかけられた言葉に動揺し、涼二は思わず発生させようとしていた水を霧散させてしまっていた。

そしてそれと同時に、双雅を囲っていた男達の視線が一斉に涼二の方へと向けられる。

状況としては、双雅一人に対して不良と思わしき男達が十人ほど。一応ルーンは使っていないものの、状況としてはかなり不利である。だと言うのに、双雅についているのは僅かな掠り傷程度で、その脇には倒れている不良たちが四人ほど折り重なっていた。

そんな厄介事を絵に書いたような状況の中心で、不敵な笑みを浮かべた双雅は涼二へと向けて声を掛ける。

「ちょうど良かったぜ、涼二。ちょっと手伝ってくんね?」

「……俺は今急いでるんだが、何でこんなアホな状況になってるんだ」

「ああ!？　んだテメエ、上狼塚の仲間か!？」

「……」

何かするまでも無く巻き込まれた現状に、発する声すら見つからず涼二は深々と嘆息する。

とりあえず　　双雅を含めて　　掃討すべきか、それとも無視して進むべきかを悩む。

涼二は双雅のケンカの実力を知っている。彼ならば、この程度の数に囲まれても問題は無いだろう。

ただし、それはこの人間たちが能力を使わなかった場合の話だ。

双雅自身は「シユラ」を持っていてだけの巨人級能力者。

決して弱いと言える能力ではないが、それでも多人数の能力者を相手にするには少々弱い。

それを補って余りあるだけの野性的な勘とケン力殺法を持っているのは確かだが、それでも、気になってしまった事に涼二は嘆息を漏らしていた。

(俺って奴は、どうしてこう……)

自覚している『身内に甘い』と言う性質。

これだけはどこまで行っても変えられないのかと自嘲を零し、のろのろと構えようとした。ちょうど、その瞬間だった。

しばし黙って思考していた涼二へと、不良たちの怒鳴り声が投げ掛けられる。

「おいコラ、シカトこいてんじゃねエぞこのチビが！」

「……あ？」

「あーあ」

顔を俯かせたまま硬直した涼二の口から漏れた声、そして呆れたような表情で呟いた双雅の声は、周囲に響き渡る事も無く、怒鳴り散らす不良たちの声にかき消される。

故に、彼らは気付けなかった。

「ハッ、女みてえな面しやがって！ 上狼塚もろとも殺して」

「……おい、テメエ等」



氷室涼二と言う男の、逆鱗に触れてしまった事に。

涼二は瞳の奥に秘められた二つのルーンが反応するのを何とか抑えながらも、その怒りだけは抑えようとせず、殺意の籠った視線を上げる。

その圧倒するような気配は、すぐさまこのあまり広いとはいえない空間を支配した。

そんな肌で感じるような気配を受け、双雅は楽しそうに笑みを浮かべる。

「おーおー、流石は元ムスペルヘイム」

「な……ッ!？」

「茶化すな、双雅……ま、今回は手伝ってやるさ。礼は要らん。こいつ等から貰うからな」

歪な笑みを浮かべ、涼二は一步前へと踏み出す。

それに気圧されたかのように住人の男達は思わず後退し、そんな己の行為に驚愕したかのように目を見開いた。

そしてそんな中、前列にいた男の一人が、歯を食いしばって叫び声を上げる。

「なッ、舐めんじゃねええあああああッ!」

繰り出されたのは右の拳。

涼二はそれに対し、身体を半身にしながら左手を添え、拳をわずか

に逸らしながらカウンター気味に相手の顔面へと右の拳を叩き込んだ。

もんどりうって吹き飛ばされる男に、しかし周囲の不良たちは束縛から抜け出そうとするかのように叫び、そして涼二へと殺到した。

その背中の中の一つを、容赦の無い蹴りが打ち抜く。勢い良く前へとけり出されバランスを崩した男は、それと共に正面から繰り出された鞭のようにしなる蹴りによって側頭部を抉られ、錐揉み回転しながら他の男を巻き込んで昏倒する。遠慮など欠片として存在しない跳び蹴りを放った張本人は、その口元に皮肉気な笑みを浮かべて声を上げた。

「おいおい、俺を忘れてんじゃねえぞ？」

「上狼塚、テムエツ！」

「そういきり立つなって。楽しく喧嘩しようじゃねえか、なア？」

そう口にし、双雅は駆ける。

いきなり倒れるような前傾姿勢になったかと思うと、その身体は爆ぜるように地面を蹴り、握り締められた拳が先ほど巻き込まれて起き上がるうとしていた男の頬を打ち抜く。

そしてそんな拳を振り切った姿勢の双雅の肩をいつの間にか接近していた涼二が蹴りながら跳躍し、呆気にとられた表情をして棒立ちになっていた男の顎を蹴り上げる。

そのまま着地した涼二は、体を起こした双雅と共に背中合わせの体勢で立つ。

「そオいや、こういうのは久しぶりだったな、涼二」

「そうだな……ったく、忙しい時に面倒に巻き込んでくれやがって」

「わりいわりい、今度何か奢るって」

「別にいいさ、こいつ等から貰うって言ってるだろ」

互いに軽口を叩き合い　二人は、駆けた。

「ふ……ッ！」

自身を弾丸と化すかのように、涼二は鋭い呼気を発しながら駆ける。

二人へと襲い掛かってこようとしていた男達の出鼻を挫くかのように、涼二は一步で前方にいた男の懐まで肉薄していた。

そして男としては小柄なその身体で潜り込むように身体を沈ませ、さらに相手の足の間へと己の右足を差し込んで退路を断ち、その肩と左手を当てるように体当たりを放つ。

威力を存分に伝え、60kg強の弾丸となったその一撃は、男を容赦なく吹き飛ばす。

「テメエッ！」

刹那、左側から拳が迫る。

それをしっかりと目で捉えていた涼二は、身体を横向きに沈み込ませるようにしながら左手を振り上げ、放たれた拳を受け流しながら相手の胸を打ち上げるようにアッパーを放った。

そして僅かにプラーナを使って腕力を強化し、吐瀉物を吐き出そうとしている男を投げ飛ばすように拳を振り抜く。

放物線を描きながら吹き飛ばされる男は、その拳が触れた時点で意識を消し飛ばされていた。

己自身の体格や体重、そして相手の力までも利用して戦うその技は、正しく武術のもの。

ムスペルヘイムの時代に長年かけて身につけ、さらにガルムの指導によってより洗練させている力。

能力の強大さだけに留まらず、己自身すらも洗練させていたからこそ、涼二はムスペルヘイムの隊長として選ばれていたのだ。  
対し

「ハツハア！」

コンパクトなフックで近場にいた男のこめかみを抉り、さらにその襟首を掴んで頭突きを繰り返した双雅は、昏倒した男を放り投げながら横へと向けて鋭い蹴りを放った。

近場にいた相手の腹部を撃ちぬくその動きには、涼二のように洗練された動作は存在しない。

が、双雅の繰り出す攻撃には、全て避けようが無いほどのスピードが存在していた。

「オラオラどうしたア!？」

突き出される拳の一撃が、右側から迫ってきていた男の身体を吹き飛ばし、壁に叩きつける。

鼻が折れて血が噴出していたが、まるでその臭いに酔うかのように

凶暴な笑みを浮かべ、牙を剥き出しにしながら双雅は嗤う。その姿は、正しく獣のそれだった。粗暴で、洗練された部分など欠片も無く、まるで本能のままに戦う姿。けれどそれはただ力強く、ただ素早い。それが、上狼塚双雅と言う男の戦い方。振り払った腕が人を吹き飛ばし、放たれた蹴りが相手を地面に沈める。嵐のような動きの双雅と、疾風のような動きの涼二。その二つの暴風に、ついに一人の男が一線を越えてしまった。

「クソツ、クソツ……これでも喰らえツ、<sup>イサ</sup>エ！」  
『！』

放たれたのは、氷柱のような氷の弾丸。当たれば怪我だけで済むとも限らない、凶器となりうる攻撃。それが向けられた事に対し、二人の目の色が一瞬で変化した。

「<sup>ラゲズ</sup>」  
「<sup>ジュラ</sup>」  
「<sup>ジュラ</sup>」  
「<sup>ジュラ</sup>」

その言葉と共に生み出されたのは、片や水を収束させて作り上げた、鞭のようにしなる剣。そして、もう一方は肘から先を覆い尽くすような金属の膜、そしてその指を覆う鉤爪だった。

涼二の繰り出した水の鞭は神速で宙を駆け、己へと向かってきてい

た氷の棘を全て叩き落した。  
そしてその脇で、鋼鉄と化した両腕を振り翳しながら突撃した双雅が、己に命中しそうな氷を左手で碎きながら右の拳を握る。  
ただのケンカならば、そこまでする理由はない。  
あくまでも人間同士、己の肉体のみを使って相手を征しようという  
暗黙のルールの上での戦いだ。  
けれど、男はそれを破ってしまった。故に

「出直して来なッ！」

鋼の鉄槌と化したその拳は、男の顔面へと向けて容赦なく打ち放たれた。

容赦なく顎や歯を砕いた一撃は男の意識など容赦なく消し飛ばし、地面へと落ちた相手へと向けて双雅は侮蔑の視線を向ける。

「まったく、ガキが玩具振り回してんじゃねえぞ」

ぱきん、と碎け散るような音を立てながら、双雅の腕を覆っていた金属が消滅する。

それを眺めつつ、涼二もまたその手にあつた水の剣を手放した。  
地面に倒れる男は白目を向き、殴られた部分が裂けたのか、緩やかに血を流している。

その凄惨な状況に怖気づき、男達は息を詰まらせながらその足を後退させて行った。  
そして

「う……うあああああああああ！」

「お、おいッ!?!」

一人が逃げ出し、その直後、堰を切ったかのように残っていた男達が敗走を始めた。

追うような真似はせずにそれを眺め、涼二と双雅は互いに視線を合わせて苦笑する。

「サンキュ、助かったぜ涼二」

「別に、俺がいなくてもお前なら何とかしそっだったかな……」

「まあな。ほれ、報酬だ」

倒れている男から抜き取った財布をヒラヒラと揺らす双雅に、涼

二は一瞬口元に手を当て……苦笑を漏らす。

よくよく考えてみれば、わざわざそんな事をせずとも、金に困るような生活はしていなかったのだ。

「いや、いい。感謝してるんだったら、ソイツで飯でも奢ってくれ。今は急いでるんでな」

「お、そうか？ そいつは悪かったな……ま、それならまた今度つて事で」

「ああ。じゃ、俺は行く……またな、双雅」

「おう、頑張つて来いよ」

互いにサムズアップを交わし、涼二は目的の道へと走り抜けてゆく。  
その背中を見送り　　双雅は、小さく息を吐き出した。  
涼二とは反対の方向へと歩き出しつつ、暗闇に包まれた別の路地へと向かって声を掛ける。

「おい、終わったぜオッサン」  
「ああ……感謝するよ」

表通りの電灯の光は届かず、建物の影で漆黒の暗闇となったその場所。

そこから現れたのは、筋骨隆々とした角刈りの男　　嵐山果須だった。  
ズボンのポケットから取り出した煙草に火をつけながら、双雅は横目で彼の事を観察する。

（随分と、思いつめた様子だねえ）

肺を満たす紫煙を吐き出し、双雅はそう胸中で評する。  
その体格ゆえに、大柄な双雅から見ても一回り以上巨大に見えるその男からは、それでもどこか萎んだように憔悴した印象を受けた。  
そんな考えはしかし口には出さず、一度涼二が去っていった方向へと視線を向け、双雅はニヒルな表情で声を上げる。

「言葉での感謝なんかいらねえよ。俺が欲しいのは、アンタの持つ



てるその情報さ。ま、これから手に入れる情報って言うてもいいかもしれないがなあ」

「それは……構わないが。しかし、何故君があんなものの情報を気にするのだ？」

「別に、答えるほどのことじゃねえさ」

「……そうか」

言葉こそ軽いものの、その声の中に含まれた強い拒絶の意志を読み取り、嵐山はそれきり押し黙る。

そんな様子に苦笑しつつも、双雅は再び煙草を啜えてその煙で肺を満たしていた。

黒い闇を白く染め上げるように空中へと煙を吐き出し　そして、双雅は声を上げる。

「さ、て……そんじゃ、教えて貰おうかあ」

その瞳に映るのは、先ほどのような荒々しい色ではなく、もっと冷たく鋭利な輝き。

まるで刃物のように、触れるものを全て傷つける刃のように。

かすかに漏れ出る憎悪を滲ませ、上狼塚双雅はその名前を口にする。

「『グレイプニル』の情報を、な」



涼二が戦闘を終え、目的の地点へと進み始めてからちょうど一時間後辺り。

尚も嵐山のパソコンを調べ続けていたスリスは、そこから拾い上げた一つの単語に関して調査を進めていた。

「…………『グレイプニル』」

「先ほどから何か見当を付けたようですが…………それは一体何なのかしら？」

「ちよつと待って…………大体、分かりそうな感じなんだけど」

嵐山のパソコンの中、既に削除されたはずのデータの中には、その単語に関する資料がいくつも残っていた。

そしてそれら一つ一つに目を通してゆく度に、スリスの表情は硬く強張ってゆく。

出てきたのはいくつかの研究資料や論文。ある研究者が考案した、

『グレイプニル』という道具に関する話。

「……内容は、単純だ。静崎製薬が表向きに発表していた事と同じ。高位の能力犯罪者を抑えるため、能力を低下、或いは使えなくする方法が無いかって言う研究だ」

「それは確かに、様々な所で研究されている内容ですわね。けれど、何故それが嵐山のパソコンに？」

「それは……まだ、分からないけど」

キーボードを操作しながら、スリスは後ろから話しかけてくるシアの言葉に首を振る。

その隣に並ぶ両音は良く分かっていないようではあったが、『静崎製薬』という単語に対して少し表情を曇らせている。

しかしそれには気付かず、スリスは読み取った資料の内容を話し始めた。

「これは投薬ではなく、外側から装着する道具によって能力を抑えようとする研究だ」

「そんな事が可能なんですか？」

「可能、なんだろうね。僕だってそっち方面の知識が深い訳でもなし、実現可能なかどうかは理論を読んだだけじゃ分からない。

けど……君の執事はわざわざこんな資料を探し出して、その上で動いてるんだ。これに関する何らかの事件に巻き込まれた、と考えた方がいいのかもしれない」

能力抑制に関する研究は様々な場所で行われている。

それに関しては別段疑問と言う訳ではなく、ごく自然な流れであるとスリスは理解している。

けれど、このパソコンに残された資料を読み解いてゆくほどに、その研究の危険性 否、非道さを理解できてしまったのだ。

「能力を拘束、抑制する為に別の能力を使う理論……」

能力に対抗する為に能力を使う。

それは人間同士でも言える事であり、そんな考えに至る事に関しては否定できない事でもある。

もしも相手の力を遮るのならば何を使うのか。防御のルーンであるエイワズEか、或いは束縛のルーンであるスリサズThか。

しかし、どちらにした所で、そんなものに実用性などというものは存在しない。何故なら

(ルーンは、生物にしか刻まれない)

魂の輝きたるプラーナを燃料とするルーン能力は、魂を持たない存在に刻まれる事は無い。

それ故、ルーンを用いた道具と言うのは、どうした所で大量生産をする事は不可能となってしまう。

目的のルーンが刻まれた刻印ルーンクリエチャーを探し出し、それを捕獲し、さらにルーンを使用可能なまま摘出する方法 確かにそんな技術の研究も行われていたが、犯罪者の拘束に使うといった目的で作るには、どうした所で数が足りなくなってしまう。

（だから、違う。これは犯罪者の拘束なんていう目的で始められた研究じゃない）

これには、別の目的が存在する。

能力の抑制と言うのは確かにその通り。しかし、それは広く存在する犯罪者ではなく、僅かな数だけ存在する巨大な脅威の相手をする事を想定している。

強大な能力を持つ存在

例えば、始祖ルーン能力者。

（……これは、敵対する始祖ルーン能力者を生きたまま拘束する事を目的に研究されている道具だ。間違いない、この研究を始めたのはユグドラシル……あいつ等、始祖ルーンを全て手に入れるつもりだって言う事？）

それは、決して他人事と言える事態ではない。

スリスたちのリーダーである涼二は、まさに敵対する始祖ルーン能力者なのだから。

この『グレイプニル』と言う道具が、自分達に牙を剥かないとは思えないのだ。

始祖ルーン能力者の相手を想定したこの道具の拘束力は非常に高い。決して軽視出来る存在ではなかった。

そこまで考え、スリスは小さく息を吐き出す。

（……むしろ、重畳だったね。今回の件があったおかげで、こんな厄介な道具の存在を知る事が出来た。知らないまんまだったら、ど

んな事になつていたか)

思わず冷や汗を拭いながらも、スリスは口元に小さく笑みを浮かべていた。

確かに強力な道具ではあるが、その性質さえ知っていれば決して對抗策を取れない訳ではない。

この道具に関する情報をさらに集めようと、スリスは検索のスピードを上げ

「な　　ッ!?!」

そこに現れた情報に、思わず目を剥いていた。

唐突に驚愕の声を上げて身体を奮わせたスリスに、後ろにいた二人が疑問の声を上げる。

「スリスさん、どうかしたんですか?」

「何か厄介な情報でも?」

「ッ……厄介って言うか、何だよ、この研究……!」

ぎり、と齒軋りを鳴らし、スリスは現れた情報を睨むように凝視する。

そこに書かれていたのは、件の『グレイプニル』を製造する為の方スリサス法。

必要となるのはThのルーンと、その力を発動させる為のプラーナ。そこまではいいのだ。その道具の性質上、ルーンの力を発動させる

為に生物から剥ぎ取ったルーンとプラーナが必要となる。  
だが、この道具は

「人間のルーンとプラーナを使う……そんな研究、あつていい筈がない！」

「な……!?!」

「……スリスさん、それって」

スリサズ

「必要とするのは、人間の持つThのルーンと人間二人分……って言うより、巨人級<sup>テイターン</sup>二人分のプラーナだ。どんなに少なくとも、二人以上の人間を殺さなきゃ、こんなモノは作れない！」

ガン、と机に拳を叩きつけ、スリスは怒りを露に叫ぶ。

彼女は、決して犠牲になってしまった人間の事に関して怒りを抱いているのではない。

ただ、人間を使った実験そのものが許せないのだ。

盲目でも周囲の情報を取得するにはどうしたらよいか　そんな研究の為に全ての光を失った。

故に、スリスは赦せない。この実験も、この実験を行っている人物も。

「詳しい作り方までは分からないけど……こんなの、存在する事自体が赦せない！　こんなの　」

「スリスさん」

と　怒鳴り散らすスリスのその頬に、そっと雨音の手が触れた。



今は能力が反転した状態ではなく、純粹なSソウイルの力を宿したその暖かな手。

そこに、僅かな光が灯った。

「ソウイル  
S」

「え、あ……」

その光はスリスの身体に触れると共に吸収され、淡い燐光と共に消えてゆく。

そしてそれと同時に、スリスの荒れ狂っていた感情はゆっくりと沈静して行った。

ゆっくりと離れて行ったその手を追うようにスリスが振り返れば、そこには淡い笑みを浮かべている雨音の姿。

彼女はスリスの表情に対し、柔らかく笑いながら声を上げた。

「鎮静効果のある能力の使い方……覚えてたんですけど、効果があつてよかったです」

「雨音ちゃん……」

「冷静に。落ち着いてゆっくりと……憤っているのは貴方だけじゃないんです、それを忘れないで」

「あ……うん、ありがとう」

落ち着いた心を抱えて小さく息を吐き、スリスはゆっくりと深呼吸して　雨音へと向けて笑みを浮かべた。

そして感謝の言葉を口にしながら頷き合い、やれやれと肩を竦めるシアに苦笑しながら、パソコンの画面へと向き直る。

(……よし)

両手で自分の頬を叩きつつ気合を入れ直し、スリスは検索を再開する。

復元されたファイルの中からいくつかをピックアップし、そこから情報を引き出そうとした　　ちょうど、その時。

ジャージのポケットに入れていた携帯が、唐突に着信音を響かせ始めた。

その画面に映っていた名前は、先程と同じく涼二のもの。

時間的にはそろそろ到着する頃だったかと頷き、スリスは通話ボタンを押した。

「……もしもし、涼二？　どうかした？」

『ああ、ちよつとな。お前が割り出してくれた場所に向かってみたんだが、執事本人はいなかった』

「あれ？　場所は確かにそこだったんだけど……」

『それに関しちや間違いじゃないだろうな。ここには携帯だけが落ちていた。GPSを追ったんだろ？』

「あー……そつか、ごめん、僕の配慮が不足してた」

頭を掻きながら嘆息し、電話へと向けてスリスはそう呟く。

それに対し、涼二からは何処か苦笑するような反応が戻ってきた。

『いや、いつまで経っても動かなかつた事に疑問を抱いていたから

な。この事態も予測していた。とりあえず携帯の中にあるデータを送るから、そつちで解析して貰えるか？」

「あ、うん。了解」

涼二の言葉に頷き、携帯とパソコンを繋ぐためのケーブルを左手で探し始める。

無論、作業中とはいえ《マルチタスク並列思考》を持つスリスがどちらかに意識を奪われるという事は無い。

道具を探すと並行して会話にも集中しながら、スリスは涼二の言葉を待った。

涼二もそれが分かっていたのか、僅かな間を置く事なく声を上げる。

『それで、そつちでは何か分かったか？』

「あ、うん。まだ標的の場所に関しては分からないけど……うん、ちよつと関係のありそうな道具は出てきた」

『道具？』

「そう。『グレイプニル』って言うんだけど……」

肩で携帯を押さえつつ、スリスは両手でパソコンを操作する。

その画面に表示されているのは、これまでに出てきた資料の大まかなまとめ。

強大な能力者を対象に絞って作り上げられた拘束具。

「とんでもなくふざけた代物だよ、コレ。用途は対象の拘束と能力の抑制。その完成度によっては、始祖ルーンの保持者ですら能力を押さえつけられる」

「何……?」

「今の所分かってるのは、コレが人間の持っているルーンとプラナーを基に作られる物だって言う事だけ……人間を殺して作り上げられる道具だよ、コレ」

「ッ……!」

電話の向こう側で、涼二が息を飲む声が響く。

雨音によって鎮静化させられたとは言え、それでも尚怒りの収まらないスリスは、見えないように歯を食いしばってから声を上げる。

「多分って言うか、こんな事をする奴等は他にいないだろうけど……恐らく、ユグドラシルの行ってる研究だと思う」

「……ああ、そうだな。それに関しては俺も賛成だ。技術の倫理性はともかく、そんな強力なアイテムを求めるのはユグドラシル程度だろう」

どこか苦い口調で、涼二はそう口にした。

そこに含まれているのは、かつてそこに所属していたからこそその己を責めるような感情。

そして、そんなユグドラシルを憎んでいるからこそその、決して赦せないと牙を剥くその怒り。

それを電話越しに感じながら、スリスはその感情に引き摺られぬよう心を落ち着かせながら声を上げる。

「……多分、だけど、路野沢さんなら何か知ってるんじゃないかな？」

『ああ、そうだな……その可能性はある。分かった、こっちの方  
向に間に問い合わせておこう』

「うん、こっちも引き続き調べる……お互い、何か分かったら連絡  
しよう」

『ああ、じゃあ頼んだぞ』

どこか感情を抑えたような無機質な声音に小さく苦笑を浮かべつ  
つも、スリスは頷いて通話を終了させた。

そして探し当てたコードを携帯とパソコンに接続し、涼二から送ら  
れてくるデータをパソコンの中へと移動させる。

現れたのは通話やメールの記録。番号などは全てプロテクト突破を  
狙っているノートパソコンの方へと移し、それらの情報を含めて発  
信者の位置特定を急ぐ。

そしてデスクトップパソコンの方では、尚も削除データの復元を行  
い

「……………ん？」

復元と共に現れた『Diary』というファイルに、スリスは思  
わず首を傾げていた。

良く携帯端末に利用される日記ソフトの形式ファイルであり、パソ  
コンでも使用できるソフトとして普及しているもの。

尤も、日記をつける人間などそう多い訳でもなく、とりわけ人気  
が高いと言つほどのものでもないのだが

「とりあえず、見てみるかな」

ファイルを起動し、画面を展開する。

そこにあっただのは、カレンダーのように日付ごとに組み分けされた画面であり、その日付けをクリックすればその日付けで書かれた日記の内容が表示される。

そこでは規則正しく毎日内容が書かれており、適当に開いた場所にはその日に行ったトレーニングのメニューなどが記録されていた。ガルトと同じく人間とは思えないほどの内容に軽く頬を引き攣らせながらも、スリスはいくつかのページを閲覧してゆく。

「……………」

思わず声を上げそうになり、スリスはそれを咄嗟に抑えた。

後ろの二人に感づかれないようにウィンドウを隠しながらも、その内容を読み取ってゆく。

（『妹の佳奈美かなみが連れ去られた。相手は技藤翔やまふじという男。かつて、ユグドラシルの研究機関である《ドヴェルク》に所属していた者だ』

）

ドヴェルクと言う名に、スリスの肩が一瞬跳ねる。

それは、かつてスリスから光を奪った研究者達が所属していた所と同じだったからだ。

何とか身体を震わせる怒りを抑えつつ、スリスは冷静さを保つよう

意識しながら別の日付の内容を読み取ってゆく。

（『技藤から連絡があった。数日後、指定の場所に来るようにと。私に選択肢など存在しない……忌々しい男だ』）

人質に取られているのと同じ状況。

その内容を読み取りながらも、スリスは嵐山佳奈美という人物に関して検索を行っていた。

余計な情報は必要無い　　探すべきは、彼女の持っているルーンの情報のみ。

この国ではルーン能力者の場合、刻まれているルーンとその人物の持つ能力の位階が個人情報として記録されている。

違法なクラッキングではあるが、スリスにとっては今更な事だ。

（……見つけた。やっぱり、スリスThを持つてる……しかも、ディザスター災害級か。良くこんな人を捕まえられたなあ、その技藤とか言う奴）

嵐山佳奈美は、ベルカナ スリスBとThのルーンを持つディザスター災害級能力者。

あまり戦闘向けといった能力ではないが、ディザスター スリス災害級のThが持つ拘束力は大型トラックを難無く動けなくしてしまうほどのものだ。ルーンが強ければ、それだけグレイプニルの強度も強くなる。

（『技藤という男に関して調べてみた。奴はグレイプニルという道具を作ろうとしている……それは、スリスThのルーンを使う事によって作られる道具だ。奴は、私と佳奈美を使ってその道具を作ろうとし

ているのだろう。

決して許す訳にはいかない。けれど、会長に迷惑を掛ける訳にも行かない。私一人で解決せねば』( )

スリスは、小さく息を吐き出す。

責任感が強すぎるためか、或いは自分達を信用していなかったのか。恐らくはその両方なのだろう、とスリスは思わず嘆息を漏らしていた。

会長であるシアを護る人間としてはその選択は正しいのかもしれないが、やはりスリスは最初から話してくれていた方が助かったの  
と思ってしまう。

依頼をされればどのような仕事でも請け負う傭兵　それが、ニ  
ヴルヘイムなのだから。

(……けど、大体分かった。標的は技藤翔、その目的は対能力者用  
拘束具グレイプニルの作成と完成。その材料とするため、嵐山果須  
と嵐山佳奈美に目を付けた。

標的は嵐山佳奈美を誘拐、それを餌に嵐山果須を呼び出し、二人を  
捕らえようと画策している。

それに対し、嵐山果須は独自に行動を開始。恐らく、嵐山佳奈美の  
奪還を目的としているものと考えられる　( )

後ろの二人に見られぬよう気をつけながら、スリスは涼二へと送  
る資料を作成してゆく。

シアはこういった自体にも慣れているかもしれないが、スリスとし  
ては出来る限り大事にしたいくない。

ニヴルヘイムという存在を、あまり人目の付く形にしたいくないのだ。



それに

(この人の状況、それにこの道具……もしかしたらだけど、おっちやんも )

かつて聞いた話を思い返し、スリスは苦い表情で顔を顰める。

この話を聞けば、あの冷静沈着なガルムとて冷静ではいられないだろう。

普段こそ思慮深く優しいが、一度怒り狂えば例え涼二であっても手に負えないほどの激情を持った男。

あまりその姿を見られたくないであろうから、とスリスは小さく息を吐き出す。

イラスト・ベステイア  
ね ( 《血染めの狼》 …… 本当に、そのままにならなきゃいいんだけど

半ば祈るように                      スリスは、胸中でそう口にしていた。



「…………『グレイプニル』、か」

データ送信終了のボタンを押し、涼二は小さくそう口にする。聞かされた内容は何処までも不快で、それでいてスリスに対して申し訳なく感じるものでもあった。

かつての涼二はユグドラシルの行いを知らず、ただ利用されるがままに戦っているだけだった。

己の全てを奪ったのが、その組織の長である事を知らないままに。

「しかし、強大な能力者を押さえ込むための道具か……悠に聞けば何でも分かるんだろうが、贅沢は言ってられないか」

頭をかきながら独りごち、涼二は再び携帯電話を操作し始めた。

探し当てるのは、かつて涼二の命を救い、涼二に真実を教えた人物。そして、涼二がリーダーを務めるニヴルヘイム設立の立役者路野沢一樹。

通話記録の中からその番号を呼び出し、涼二は発信を開始した。

（……………しかし、人間の持つルーンとプラーナを使って作り上げる道具……………まさかとは思うが、ガルムの言っていたアレは　　）  
『　　ふむ、涼二君か？　こんな時間に、私に何か用かな？』

思考を巡らせようとしたその瞬間、携帯電話から声が発せられた。こんな時間と言っても、日が暮れるのが早くなり始めた為の暗さであり、まだまだ遅い時間と言っ訳ではない。

周囲を見渡して小さく苦笑を浮かべながら、涼二は声を上げた。

「夜分遅くに申し訳ありません、路野沢さん。少し、お尋ねしたい事があります」

『ふむ。君の方から私に以来とは、中々珍しい事もあったものだ。まあ、親心としては中々に嬉しい事だが』

何心にもない事を言ってるんだか、と胸中で呟き、涼二は再び苦笑する。

涼二は決して、この路野沢と言う男を信用していない。その実力に対する信頼はあるものの、決して信用してはならないと言つのが、ニヴルヘイムの共通見解である。

そして、路野沢自身もまるで警告するように涼二達へと口にした言葉でもあった。

どういつつもりなのか、と疑問にも思ったものではあるが、結局はその言葉に従う事となっている。

「『グレイプニル』という道具の研究に関して、何か知っている事はありますか」

『ほう、あのベルトの事が……今更と言えば今更だが、あんなものを調べてどうするつもりかな？』

「今更……？ 済みません、今はかなり情報が不足してまして。その道具が能力を押さえつける効果があるって事ぐらいしか分かっていないんです」

その他の情報も無い訳では無いが、今の所確実性に欠ける情報ばかりだ。

涼二は路野沢のもたらす情報も含めた上で総合的に判断し、それがどのようなものなのか見極めようと頷いた。

そして電話の向こう側にいる路野沢は、そんな涼二の様子に気付いているのかいないのか、いつも通りの調子を崩さぬまま声を上げる。

『ふむ……まあ良いだろう。しかし『グレイプニル』とは、また随分と前のものを持ち出してきたものだ』

「……そんなに昔の研究なんですか？」

『昔といえば昔だね。十年以上前からその研究は存在していたのだから』

そんな路野沢の言葉に、涼二は小さく目を細めた。

その頃は、涼二達が孤児院で世話になっていた時期である。

そんな昔から続けられている研究だとは思ってもよらず、半ば呆れと感心を含め、涼二は肩を竦めた。  
涼二の姿に気付いているのかいないのか、調子を変える事無く路野沢は続ける。

『対能力者用拘束具、通称『グレイプニル』。《ドヴェルク》にて研究、開発された道具だ』

「……あの研究所で」

『気に入りはしないだろうが、話は進めさせてもらっても良いかな？』

「あ、はい。済みません」

声の中に低い怒りの音が混じったのを聞き取り、路野沢は溜め息交じりにそう口にする。

その指摘に目を見開きつつ、涼二は深呼吸して荒ぶりかけていた感情を鎮めた。

涼二は己の未熟さを嫌う。故に、精神制御の方法もしっかりと心得ていた。

呼吸から涼二が落ち着いていたのを感じ取ったのか、小さく笑いの混じった声音で路野沢は続ける。

『ふむ、では続けよう……『グレイプニル』が製作された元々の目的は、高位の能力者の力を封印する事。

敵ならばその力の通り、位階を二つほど減退させるほどの封印能力を持って相手の力を押し留めてしまおう』

「……敵ならば？」

『その通り。アレは、味方に使う事も想定したものであったのだ

よ』

その言葉に、涼二は思わず眉根を寄せる。

力を封印する……一つ位階が違えばそこには圧倒的な差が存在するとまで言われる能力を、二位階分も減少させてしまうその道具

それを、味方に使うというのは一体どういう事なのか、と。

そんな涼二の疑問を感じ取ったのか、路野沢はゆっくりとした声音を崩さずに声を上げる。

『力を抑える　　否、力を悟らせなくする。そのメリットは、君ならば十分に理解できると思うが？』

「……！　成程、そういう事か」

反射的に顔を左手で押さえ、涼二はそう呟く。

その目に宿しているのは、絶対に隠さなくてはならない二つのルーン。

かつて姉の持っていた、ハガラススリサスHとThの始祖ルーンだった。

ルーン能力者にとって、力を悟らせない事は非常に重要な要素となる。

ファンクションもそうではあるが、どのような力を持っているかどうか、それを知らない事は即ちどのような攻撃を受けるか分からない事にも等しい。

涼二が力を隠すのはそれ以外の理由もあるが、基本的にルーン能力は大っぴらにするべきものではないのだ。

それに対し、『グレイプニル』の持つ性質は

「能力を強制的に押さえ込み、プラーナ量からも相手に力量を悟らせないようにする……そして必要に応じて拘束を解除し、力を解放すれば」

『そう、これ以上ない奇襲になるだろう……まあ、そういう理論の元作られた訳なのだが、いささか問題があつてね』  
「問題？」

路野沢の言葉に、涼二は首を傾げる。

話を聞く限りでは、問題点と言つべきものは存在しないように思えたのだが

『この道具は、一度装着すると破壊するまで外れなくなってしまうのだよ』

「……拘束用なら、まだしも」

『そう、自身の能力抑制と言つ点ではほぼ利用価値が無いものとなつてしまつた』

あまりといえばあまりな事実には、涼二は思わず呆れの籠つた表情を浮かべる。

それでは、能力抑制と言つ点に関する価値は全く存在しないものとなつてしまつたろう。

路野沢も同じような考えなのか、苦笑のような吐息を吐きつつ声を上げる。

『いやはや、世の中上手くは行かないものだね。もしもその研究が成功していたら、君の能力を隠すのに役立っていただろうに』



「……仮にそうだとしても、人間を素材に作られた道具なんてゴメンですがね」

『おや、そうか』

路野沢の言葉に、何らかの感情を読む事は出来ない。

ただ単純に、事実を受け止めている。それだけの様子しか見せない相手に、涼二は思わず顔を顰めていた。けれどそれを声には出さず、続けて尋ねる。

「それで、『グレイプニル』の拘束を解除する方法はなかったんですか？」

『あるといえはあるのだが……実用には少々面倒でね』  
「と言うと？」

『素体となった能力者以上の力を持つスリサスThの使い手が、能力を無効化する事……それが、『グレイプニル』の拘束を解く方法だ。つまり  
り』

「……その道具では、俺を拘束する事は出来ない」と

己の右目を目蓋の上からそつと抑え、涼二はそう口にする。  
その瞳に宿しているのはスリサスThの始祖ルーン。それは即ち、スリサスThにおける最高位の力を持っている事に等しい。

つまりどのような能力者を使って『グレイプニル』を作り上げたとしても、涼二ならば確実にその拘束を解除できてしまうのだ。

その事実を認識した涼二の言葉に、路野沢は肯定の言葉を発する。

『そついう事だ。君にとっては、あまり価値のある物では無いだろ

う……それで、それがどうかしたのかね？」

「ああ、いや……ちょっとした事件で関係してきたもので。それと、もう一つ聞きたいのですが」

『ふむ、何かな？』

路野沢の言葉に、涼二は思わず顔を顰める。

彼は問い掛けようとしている事が一体何なのか、とっくの昔に気づいている事だろう。

それでもあえて聞いてくるのだから、やはり底意地の悪いところがある。しかしそれをおくびにも出さず、涼二は声を上げた。

「その『グレイプニル』とか言う道具……まさかとは思いますが、ガルムの」

『君ならば確信を得ていると思っていたのだがね』

その言葉は、決してはつきりとしたものでは無い。

けれど、その言葉の中に込められた肯定の意味に否応無しに気付かされ、涼二は深々と溜め息を零していた。

意地の悪い言い方ではあるが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

知ってしまったこの事実、それをガルムに伝えるか否か

(……あいつ相手じゃ、どうした所で気づかれちまうか)

ニヴルヘイムは構成人数が少なく、それだけ個人の秘密以外の話

は筒抜けになつてしまふ事が多々あつた。

そして今回、仕事と言う形で一緒に動いているガルムには、情報を隠す事などは不可能となつてしまふ。

だが、この話を聞けば、冷静沈着なガルム・グレイスフィーンとて、怒りを抑える事は不可能だろう。

何故なら、それこそがガルムの抱くユグドラシルに対する恨みなのだから。

深々と、涼二は嘆息を漏らす。

「……とりあえず、了解しました。解除できると言つたのならば、問題はありません」

『そうか。まあ、そのルーンを使う所を見られる訳には行かないのだし、気をつけるに越した事は無いだろう』

「……はい、分かりました。それでは」  
『ふふ。では、頑張る事だ』

通信が途絶え　　涼二は、深く息を吐き出す。

話しただけでも関わらず若干の疲労を感じ、涼二はゆっくりと背筋を伸ばしながら携帯を閉じる。

やはり路野沢への苦手意識を拭えない事に苦笑をもらし、涼二は近くにあつた建物の壁へと背を預けた。

溜め息じみた吐息を漏らしつつも、閉じた携帯を見つめながらただゆっくりと待つ。

「あの時、声をかけとけば良かったな……思った以上に厄介な事になつたもんだ」

シヨツピングモールで見かけた姿を思い返し、苦笑を浮かべる。あの時は知らなかったのだから仕方の無い話ではあるが、ここまで大事になるとは涼二も思っていなかったのだ。

今は行方の知れないあの執事の姿　何をそこまで急いでいたのか、と涼二は胸中で呟く。

と　その瞬間、涼二の携帯が鳴り響き始めた。

「つと」

一瞬通話かと思いボタンを押しかけるが、着信メロディの違いからメールである事に気づく。

妙に重いそのメールに、添付ファイルが付属されていることを確認し、涼二は納得したように肩を竦めた。

メールに添付されていたのは、先ほど路野沢と話した『グレイプニル』に関する詳細なデータと、それを研究していた技藤翔という人物について。

そして、電話番号からの逆探知プロテクトを破る事によって発見した技藤がいると思われる場所の地図。

それらの情報に一通り目を通した所で、今度は通話の着信音が鳴り響いた。

集中していた所に突然であった為、思わずびっくりと反応して携帯を取り落としかけながらも、何とか涼二は通話ボタンをプッシュする。相手をマトモにチェックしていなかったが、聞こえてきたのはスリスの声だった。

『涼二、資料は読んでくれた？』

「ああ、かなりの量をまとめてくれたな、感謝する」  
『むしろ、それぐらいしかなかったんだけどね。とりあえず、さつさと向かったほうがいいかもしれない……あの執事さんが既に場所を把握しているんだとしたら、手遅れになる可能性もある』  
「……そうだな」

頷きながらも、涼二は<sup>ラクス</sup>しを使って水のロープを作り出し、目の前に立っているビルの屋上へと巻きつける。

そのまま勢い良く上昇しつつも、電話越しにスリスへと語りかけていた。

「ガルトにも地図のデータは送っておいてくれ。ただし、『グレイプニル』の事はまだ伝えるな」

『うん、それは分かってる。おっちゃんなら大丈夫だとは思ってたけど……』

「それは俺もそう思うが、万が一の事があると困るからな。一応、同時に行動したい」

『ん、そうだね……了解』

頷く気配に頷き返し、じゃあな、と声をかけて涼二は通話を終了させる。

そして再び地図データを起動、自分自身の現在位置と、目的地となる技藤の研究所までの道のりを計算した。

場所は少々は慣れていて、普通に向かうにしてもバイクを使うにしても多少の時間はかかってしまう。

けれど、間の建物を無視して直線で移動できれば

「……かなり、短縮は出来るな。よし」

ラゲズ ハガラス

「かH、使用するルーンを考え、わざわざ移動の為だけにそんなリスクを冒す必要もないかと苦笑する。

そして涼二は左肩のルーンを発動させ、左腕から延びる水のロープを使って勢い良く空中へと飛び出した。

パチンコで放たれるパチンコ玉のように強く空中へと投げ出され、ゆったりとした滞空時間の後に落下しようとする身体を、再び引っぱりあげるように水のロープで打ち出す。

昔のリメイク映画にこんな動きをする外国ヒーローがいたような気がするが、あまり気にしないようにしながら涼二は集中を崩さぬように目的地への道を進んで行った。

(こつこつというとき、バイザーが無いのは不便だな……)

見通しの甘かった自分自身へと苦笑し、涼二はそう胸中で呟く。

出てくる前に考えていたのは単なる人探しであり、このような誘拐事件に繋がるとは露ほどにも思っていなかったのだ。

一度身軽な動作でビルの上へと着地しつつ、方向を確かめながら水を伸ばす。刹那、涼二は“カシュン”という音と、何者かの呻き声のようなものを聞いた。

「！」

下手をすれば聞き逃してしまったであろう程の小さな音。けれど、涼二はその炭酸飲料の缶を開けるような音に聞き覚えがあった。

(消音銃……！)

弾丸が発射される音を極限まで押さえ込む事を目的として作られた拳銃。

採算が合わず、サイレンサーのほうが性能が高いと言う事で殆ど出回ってはいなかったが、涼二はかつてムスペル Heim に所属していた時代にこの音を聞いた事があった。

身を乗り出しながら音が聞こえた方向　　ビルの裏にある細い路地を見下ろす。

そこに、二人の男が対峙していた。

一人は筋骨隆々とした男で、もう一人は白衣を纏った学者風の男。そして、その学者風の男の手には、一丁の拳銃が握られていた。

「<sup>イサ</sup>イー！」

咄嗟に作り上げた氷の弾丸で、男の持つ銃を弾き飛ばす。

そのまま涼二は男を捉えようと飛び降りたが、思った以上に相手は冷静だった。

武器を失ったと見るや、男はすぐさま踵を返して表通りへと逃げ込んでゆく。

その背中を舌打ちしながら見送りつつ、<sup>ラゲス</sup> L の力を使って安全に着地しながら、涼二はもう一人の男　　嵐山へと駆け寄った。

「おい、大丈夫か!？」

「君、は……ぐッ!」

「……拙いな」

嵐山の身体には、いくつかの弾痕が刻まれていた。その位置はすぐさま死に至るようなものではないものの、出血量が多い。

舌打ちしながら、涼二は携帯を取り出し、すぐさまガルムへと向けて発信を開始した。

そして数コールのうちに、コール音が鳴り止む。

『涼二、何か』

「ガルム、急いで戻って雨音を連れて来い！俺のいる位置はスリスから聞け！」

『雨音君？……怪我人か!』

「ああ、急げ！」

『了解した!』

通話を切り、携帯をポケットの中に仕舞う。

出欠で意識が朦朧としているのか、呻き声を上げている嵐山を地面に寝かせ、涼二はすぐさま応急処置を開始した。その顔に、しかめっ面を浮かべながら。

「面倒な事になってきたな、本当に……!」





周囲の警戒を続けながら、涼二は路地裏で静かに仲間の到着を待ち続けていた。

地面に横たわる嵐山の身体に左手を触れさせ、涼二は己の左肩に刻まれたルーンを発動し続ける。

水を操るルーンであるし、その力を使って、嵐山から流れ出る血を塞ぎ止めていたのだ。

氷を使った止血と言う手段もあったのだが、血を失い体力を消耗した状態では危険を伴ってしまう。

「……………はあ」

小さく、息を吐き出す。

前回の事件からブリーナは回復し切っている為、特に問題なく能力を発動する事は出来ているが、どのような能力でも長時間発動し続

けると言うのは中々に難易度の高い行為なのだ。

スリスはそれ専用能力を鍛えているからこそ簡単に能力を使えるものの、涼二はそう簡単には行かない。

目を閉じ、周囲の気配に気を配りながらも能力を使ってこれ以上の出血を防ぐ。

(ま、コレも練習か……)

嵐山の様子を確かめても、すぐさま命を落としてしまうような状態ではない。

自分自身にも施した事のある血流操作ではあるが、ここまで深手を負う事も少ないので、あまり使う機会が無い能力を鍛える事が出来る絶好のチャンスとも言える。

いずれ、自分が使うかもしれないこの技の

(……いや、今はいい)

軽く頭を振り、涼二は思考を切り替える。

その思考の中に浮かべているのは、先ほどから得ていた『グレイプニル』という道具に関する情報だ。

曰く、能力を抑制する事の出来る拘束具。

曰く、人間のルーンとプラーナを用いて作り出される禁忌の道具。

この嵐山と言う男が襲われていた理由は、その道具に関係している事なのだろう。

技藤翔という研究者は、嵐山の妹を連れ去って、それを出汁に彼の事を呼び出した。

そしてそのプラーナを奪い、グレイプニルを完成させるつもりだったのだろう。

(嵐山佳奈美……生きてるか生きてないかは微妙な所だな)

ある程度の資料を手に入れることが出来たとはいえ、具体的な作成手順まで判明した訳ではない。

現時点で彼女が生存しているか否かは、例え涼二でも分からない事だった。

可能な限り助けたい所ではあるが、どちらにしても今ここを離れる訳には行かない。

能力によつて嵐山の出血を止めていなければ、あまり長くは持たないような状況なのだ。

とは言え、もうそろそろ

「涼二様！」

『涼二、ここにいたか！』

「！ ああ、二人とも早く！」

響いた声に顔を上げ、涼二はそう声を発する。

それと共に、路地の奥から金色の獣がその姿を表した。

獣 ルーンのカによつてその姿を変えたガラムは、背中に雨音を乗せながら出来るだけ揺らさないようにしつつ涼二の方へと駆け寄ってくる。

「雨音、仕事だ……出来るな？」

「はい、涼二様。この方を癒せばよいのですね？」

「ああ。今の出力だとしても、お前の力なら癒す事は可能なはずだ」  
「……はい」

ガルムの背中から降りつつ、雨音はゆっくりとその手袋を外しながら意識を集中させる。

その後ろで、Ehの力を使って元の姿に戻ったガルムは、何かあった時の為にかいつでも動けるようにじつと待機していた。

そして、雨音の着物の下、腹部の辺りが淡い光を放ち始める。出力こそ落ちてはいるものの、その身に宿す強大なプラーナは変わらず。以前戦った時の重い圧迫感を思い出し、涼二は思わずぴくりと肩を跳ねさせていた。

雨音は静かに目を閉じ、大きく深呼吸をする。

それは己の体内　否、魂から放たれるプラーナを強く認識する為の集中法。

体内を循環するプラーナの流れを理解し、それを己の持つルーンへと集中させる。

そして、ゆっくりとその手を前へ。掲げられた二つの掌は交差するように重なり、その手には柔らかな青紫の輝きが宿り始める。

「  
ソウイル  
S」

その言葉と共に、雨音の両手に宿っていた光は粒子となって嵐山へと降り注ぎ始めた。

それと同時に彼の体も同じ輝きに包まれ始め、彼の体に刻まれてい

た銃痕が内側からゆっくりと癒されてゆく。  
その体内に残っていた銃弾は押し出されるように零れ落ち、まるで  
逆再生するかのごとく傷は消え去って行く。  
僅か数秒　その間に、嵐山の傷は完全に消え去っていた。  
すっかりとした手応えを感じたのか、安堵したように息を吐き出す  
と、雨音はゆっくりとその目を開く。

「ふう……これで、どうでしょうか？」

「ああ、大丈夫そうだ。流石だな、雨音」

「力の扱いにも慣れてきたようだね、雨音君」

「はい、皆様のご指導と、涼二様を買っていただいた本のおかげで  
す」

「あれからずっと読んでたのか？」

買ってからあまり時間は経っていない筈なのだが、と涼二は小さ  
く肩を竦める。

しかし彼女の力のおかげで嵐山が助かった事に変わりはなく、特に  
何かを言うつもりはなかった。

とりあえず、涼二は一応ながら倒れている嵐山の傷を確認し、完全  
に傷が癒えている事を確かめて小さく頷く。

出力が落ちている事もこれだけの傷を短時間で癒せるその力は、流石  
と言つべきなのだろう。

「大丈夫そうだ。さっさと起こして情報を手に入れたい所だが……」

ちらりと、涼二はガラムの方へと視線を向ける。

プラーナを流し込む事による気付けという方法があるので、傷が癒えた今ならば起こす事は難しくくない。

が、今完全には現状を把握していないガルムに、突然あの話を聞かせるのは危険ではないか、と涼二は危惧しているのだ。

涼二の視線に気付いたガルムが小さく目を細め、真意を問うように首を傾げる。その姿に、涼二は小さく嘆息していた。

話さない訳には、行かないだろう。

「……ガルム、この人を起こす前に一ついいか？」

「何だ、涼二？」

「今回の件、路野沢さんにも確認したが……どうやら、アンタに係のある事らしい」

その言葉に　　ガルムは、大きく目を見開いた。

そしてそれと共に、思わず総毛立つ程の強い感情がプラーナの波動となってガルムの体から放たれる。

直接目を見なかったとは言え、その強い感情を受けた雨音がふらりと身体を揺らすのを見て、涼二はガルムへと向けて強く言葉を発した。

「ガルム、落ち着け！」

「ッ……濟まない、取り乱してしまった。雨音君も、大丈夫か？」

「は、はい」

傾きそうになる身体を何とか支え、雨音は小さく頷く。

二人の様子に小さく安堵の息を吐き、涼二はガルムへと声をかけた。その視線は先程よりも強く、咎めるような色が含まれている。

「ガルム、アンタの気持ちも分からない訳じゃない……俺達は全員、同じ穴の貉だからな。けど、だからこそあまり取り乱さないでくれ。アンタに暴走されたら、どうしようもない」

「ああ……濟まない、分かっている。が……何処まで抑えられるかは、私にも分からないな」

どこか苦笑じみた表情を見せ、ガルムは告げる。

その感情を理解できてしまうからこそ、涼二は小さく嘆息を零していた。

彼自身、もしも仇を目の前にしたとすれば、自制出来る自信が無かったのだ。

399

「……戦うなどは言わないさ。だが、せめて俺達がフォローできる範囲にしてくれよ?」

「ああ、分かっている。苦勞をかけるな」

「お互い様だ……よし、起こすぞ。雨音、手伝ってくれ」

「はい、分かりました」

雨音を呼び寄せ、重い嵐山の上半身をゆっくりと起こす。

そして涼二はその両肩へと手を当て、自分自身のプラーナをゆっくり彼の体へと流し込んでいった。

涼二のプラーナに刺激される形で嵐山のプラーナの巡りが高まり、彼の意識、身体を急速に覚醒させてゆく。



そして 嵐山は、びっくりと身体を震わせると共に目を覚ました。

「ッ、く……ここ、は」

「気が付いたか。どこか身体に異常は」

「ッ！ 佳奈美、佳奈美は！？ 奴はどこに」

「おい、落ち着け！」

目を覚ますなり狼狽を始めた嵐山に対して眉根を寄せ、涼二はプラーナを発しながらそう強く語りかける。

今は取り乱しているとは言え、元々は冷静で思慮深い人物。

己を取り戻す事さえ出来れば、冷静な判断をする事も可能だ。

そんな涼二の読みどおり、強いプラーナの波動に縛り付けられた嵐山は、焦りに支配されていたその瞳に理性の光を取り戻していた。

「き、君たちは……」

「アンタの主の依頼で、アンタの事を探しに来た。どこか身体に異常は無いか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

嵐山の言葉に頷き、涼二は彼の肩から手を離す。

両音の力は寸分の狂いなく発動していたようで、嵐山の身体は完全な状態にまで修復されていた。

とは言え、流れた血が戻った訳では無いので、若干貧血気味となっ  
てしまっているのだが。

それを理解しているからこそあまり無理に動かすような真似はせず、涼二はその座り込んだ姿勢を維持させたまま声を上げた。

「状況は理解しているか？」

「……ああ。私の力が及ばなかったばかりに……！」

「そう思うんだったら、最初から俺達に声をかけて欲しかった所なんだがな。そうすりゃ、こんな面倒事にはならなかっただろうに」

スリスが敵の居場所を探り出し、涼二とガルムが突入して人質を連れ戻し、敵を捕縛する。

ニヴルヘイムからしてみれば、たったそれだけの仕事でしかないのだ。

今回涼二達がここまで走り回る事となったのは、偏にこの執事の独断専行が原因である。  
が

「君達の扱いは会長の私兵……私の独断で動かす事も、会長の手を借りる訳にも行かぬからな」

「融通が利かない男だな……まあ、いい。それで状況は……アンタの妹が、『グレイプニル』の材料にだか何だかの為に連れ去られ、アンタはそれを取り戻しに動いていた訳だ」

「ッ……！」

涼二の言葉に、ガルムはびくりと肩を震わせる。

そんな様子を視界の端に捉えながら、涼二は頭の中で現在の状況を整理していた。

攫われたのは嵐山の妹。そして、その犯人は元ユグドラシルの研究者。その研究は

「涼二、現在の状況を詳しく説明して貰っても構わないか？」  
「……ああ、だが、さっきも言ったが暴走しないでくれよ？」  
「分かっている」

大きく深呼吸しながら、ガルムは涼二へと向けて問いかける。  
そんな彼がきつちり冷静さを保っている事を確かめて、涼二は首を縦に振った。  
携帯電話を取り出してスリスへ連絡する準備をしながら、現在の状況を説明し始める。

「今回、この執事の妹　　嵐山佳奈美が何者かによって誘拐された。犯人は技藤翔という名の研究者。コイツは元ユグドラシル、《ドヴェルク》に所属していた人間だ」  
「……あの研究機関に、か」

ガルムの声音が、低く唸るようなものに変化する。  
纏う空気が猛獣のそれへと変化しつつある中、しかしその激情を制御しつつ、ガルムはその言葉を吟味する。  
彼とスリスにとって、《ドヴェルク》と言う名は鬼門と言っても過言では無い。  
スリスに関して言えば、物心ついた頃からその研究施設で実験体として扱われてきており、ガルムに関しては別の研究によって妻子を奪われてしまった。

今回の相手が既にユグドラシルから離れているとは言っても否、手の届きやすい範囲に出てきているからこそ、二人の自制が効

くかどうか分からない。  
けれど、ここまで来て話さない訳にも行かない。

「技藤の作るうとしてしているものは、『グレイプニル』と呼ばれる拘束具。これは、拘束した者のルーンを弱体化させる力を持つベルト状の道具だそうだ。そして……これを作るには、人間のルーンとプラーナが必要になる」

「それは……ッ！」

「奴の目的は、嵐山佳奈美のルーンと嵐山果須のプラーナを使って『グレイプニル』を作り上げる事……間違い無いか？」

「……ああ、その通りだ。しかし、良くこの短時間にそれだけの事を……」

「伊達に少数精鋭はやってない。さて」

立ち上がり、涼二は携帯電話を操作した。

繋ぐのはスリス。彼女はあらかじめこちらの様子を監視していたのか、2コールもしないうちに通話は繋がった。

相変わらず心配性な様子の彼女に対し小さく苦笑しつつ、涼二は声を上げる。

「スリス、ガルムの端末にデータの転送を頼む」

『それは大丈夫だけど……いいの？』

「ああ。ここまで来て、行くなどとは言わないさ……ガルム」

「ああ……私に先に行けと、そういう事かな？」

涼二の言葉に顔を上げ、ガルムは頷きながらそう口にする。

表情は冷静さを保ってはいるものの、やはりその中の激情を隠しきれてはいない。

故に　これ以上、隠させる事は危険だと、そう判断したのだ。涼二はガルムの言葉に頷き、声を上げる。

「俺達の目標は、嵐山佳奈美の確保、および技藤の拘束。そして、奴の研究資料の完全破棄だ」

「了解した……が、二つ目は保障出来ぬな」

「分かっているさ。俺だって、目の前にして抑え切れるかどうか分からないからな」

そう　だからこそ、生死は問わない。

それを言外に確認し、二人は互いに頷き合った。

流石に、このような会話を両音の前で堂々とする事は憚られたのだ。

ガルムの持つ携帯が鳴り響き、そこにスリスの送ったデータが届く。

それを確認し、ガルムは踵を返した。

「では、先に行く」

「ああ、頼んだぞガルム。こちらも、後から行く」

「ガルム殿……妹を、頼みます」

「どうか、お気をつけて」

三人の言葉を受け、ガルムは背中越しに首を縦に振る。

その背中に込められた強い思いを隠すようにしながら、彼はゆっくり

りと目的地向へと向かって歩き出した。

その姿が、金色のプラーナによって覆い尽くされる。

「エフス  
Eh

！」

そのルーンによって変化するのは黄金の狼。

獣の姿へと変化したガルムは、さらにRラドのルーンを使って加速し、瞬く間に狭い路地裏を駆け抜け、高いビルの壁を駆け上って姿を消していった。

その背中を見送り、涼二は嵐山へと視線を向ける。

「では、俺もガルムを追いかけろ。雨音の事を任せても？」

「ああ……その位はやらせてくれ。私では、何の役にも立てないからな」

その言葉には頷くだけに留め、涼二はガルムが去っていった方向へと向けて左手を向ける。

そこから現れるのは、Lラクスのルーンによって精製された水のロープ。それは一直線にビルの屋上まで伸びると、涼二の体を撃ち出すかのごとく引き上げていった。

空高く飛び上がった涼二は、目的の方向へと向けて再び水のロープを撃ち出す。

勢い良く空を駆けながら、涼二は雨音たちの元から去って行った。

「へえ……こいつぁ、面白い事になってんな」

獣のように気配を殺し、その様子を眺めていた一人の男の存在に気付かずに。

彼は首筋を掻きつつ、雨音たちから離れるようにしながら路地裏を進んでゆく。

その目の中に、面白がるような色と、隠された深い憎しみを宿しつつ。

「さあて、と。何もかも終わらせられちまう前に……俺も、動かねえといけねえな」

ポツリと、そう呟き

男は、夜の闇へと姿を消していった。





仲間達が出動し、シアも会議で席を外した部屋の中。  
一人部屋に残ってパソコンの画面と向かい合っていたスリスは、そこに映し出される情報に対して深々と嘆息を吐き出していた。

「ここまで来るともう呆れるよ……ホント、性根の腐った奴ってどこにでもいるもんだね」

その画面に映し出されているのは、技藤が強固なプロテクトを掛けてまで隠していた研究所、その内部のデータだった。

《ドヴェルク》時代に作られた資料　その時に作られた『グレイプニル』ルーンクリヤーに関する報告。

最初の頃は刻印獣のルーンを使って作られていた筈の『グレイプニル』が、何処で足を踏み外したのか、人体を使った実験を行うようになってしまった事に関して。

そして、それがついに禁止されてしまった事。  
その原因は

「あの時は派手にやったからなあ……あはは」

降霧スリスが実験施設を出奔する時に、最後に行ったクラッキン  
グである。

《ドヴェルク》に蓄積されていた無数のデータを各所へと送信し、  
その違法な研究を白昼の下に曝そうとした事。

最終的には全ての情報が流れ切る前に遮断されてしまったのだが、  
それでも《ドヴェルク》には捜査のメスが入る事となった。

『グレイプニル』を初めとした違法研究は断念を余儀なくされ、結  
果として技藤はユグドラシルから放逐されたのだらう。

尤も、ユグドラシルは失墜しない程度に危険な研究を隠蔽してしま  
ったので、組織を潰すほどにダメージを与える事はできなかったの  
だが。

そして、《ドヴェルク》の断罪をユグドラシルのトップである大神  
槍悟そしが行ったのも、周囲の心象を良くしてしまったのだ。

「トカゲの尻尾切りだ……《ドヴェルク》のトップは追及を免れて  
る。そいつを探し出す事が出来れば」

それが、スリスとガルムにとっての復讐の対象となる。

実験と言う名の下に二人の全てを奪った存在。その全てを取りまと  
めていた人物こそ、二人が強く憎む相手だった。

しかし今までその存在の足取りを掴む事は出来ず、巧妙に隠された

情報はその尻尾の陰すらも見る事は叶わなかった。  
けれど

「『グレイブニル』……違法研究に直接関わっていた人物なら、何かの情報を持っている可能性は十分にある。これ以上無いチャンス……逃す訳にはいかないよ、おっちゃん」

口元に小さく笑みを浮かべ、スリスはそう口にする。  
降って湧いた好機　これを逃す訳には行かないと。  
その相手を探し出して殺す　それこそが、ニヴルヘイムの存在  
異議なのだから。

「しっかし、今回は思わぬ展開だね……しっかりした準備が出来なかったのが本当に惜しい。変身してると、おっちゃんには通信が届かないからなあ」

画面の中に映るモニターの一つには、高速で街を駆け抜けるガルのマークが映し出されていた。  
道を違える事無く一直線に進んで行く彼は、もう数分のうちに目的地へと到着する事だろう。

そんな彼へと通信を行えない事を歯がゆく感じながら　バイザ  
ーを装備していない涼二ともリアルタイム通信は出来ないのだが  
スリスは小さく嘆息を零していた。

一応涼二にはこのことを伝えているし、聡明なガラムならば言わずとも気づく事が出来るだろう。  
だが、怒り狂う獣と化した彼に、果たして時勢が聞くのかどうかは

スリスとしても疑問な所ではあった。  
その為、出来れば話しておきたかったのだが、生憎と今はデータを  
探る程度しか出来る事がないのだ。

「はあ……ままならないなあ、どうにも……ん？」

と、データの中にふと見慣れない単語を発見し、スリスは思わず  
首を傾げていた。

それはどこか走り書きのようなテキストデータ。  
拾い上げた単語は『グレイプニル』、『逆手に取った』、『隠蔽』、  
そして

「『フロースワイトニル悪名高き狼』……?」

物々しいその名称　まるでユグドラシルで与えられるコード  
ネームのような名前に、スリスは眉根を寄せる。  
何やら危険視するような形で記されているその名前は、スリスでも  
聞いた事の無いものだったのだ。

危険視されるほどに高位の能力者に関しては、スリスがその情報を  
集めている　『レーヴァティン災いの枝』、『ミヨルニル磨戸緋織』、『とあめ雷神の槌』、『とあめ大神徹』、『  
ウオルスング・サガ光輝なる英雄譚』、『みしお大神美汐』などもその一例だ。  
しかし、その『フロースワイトニル悪名高き狼』と言う名に関しては、情報に特化した  
スリスでさえ今まで耳にした事のない単語だった。

「ユグドラシルの人間が危険視する能力者……『グレイプニル』の

資料の中で出てくるって事は、それを使わなければならないほど危険な相手だったって事？

なら、その能力者を味方にする事が出来れば

貴重な戦力になるのかもしれない、と 獲らぬ狸の皮算用と言う言葉を脳裏に浮かべつつも、スリスは小さく呟いていた。その名前に関し、更なる検索を開始する そんなスリスの《並ルチタスク列思考》の一角が、画面の端に映る地図、そこに映るガルムが目的地へと到達した瞬間を捉えていた。

「さあ……始まりだよ」

不敵な笑みは己へと向けてか、或いは戦場に立つガルムへのものか。

何処までも自信に満ち溢れた笑みを浮かべながら、スリスは自分自身の戦場へと繰り出して行った。

\* \* \* \* \*

金色の毛並みが夜の街に光の軌跡を描き、その巨体は人の目に止まる間もなく通り過ぎてゆく。

強く地を蹴り、一つの跳躍で一軒家を跳び越え、ガルムはただただ真っ直ぐに目的の場所へと向かっていた。

その視線は余計なものを映さず、その先にいるであろう敵を見つめている。

怒りに毛を逆立てながら、溶ける周囲の景色には目もくれず、ガルムはさらに速度を上げた。

『『グレイプニル』……！』

その名には、確かに聞き覚えがあった。

かつて、ガルム・グレイスフィンが愛する家族を失った日の事。住み辛くなった祖国を捨てて日本へと渡り、慌しいながらも平穏な日々を送っていたあの頃の事。

彼の家族は、唐突に奪われてしまった。

『許さん……永遠に、許しはしない……ッ!』

娘のハティはそのルーンを奪われ、妻のイアールは娘と共にプラーナを奪われた。

傷付き、絶望の内に死んでゆく筈だったガラム　そんな彼を救ったのは、他でもない涼二と路野沢の二人だったのだ。

涼二はいずれユグドラシルから離れて復讐の道に走る事をガラムへと告げ、ガラムもまたそれに賛同した。

全てを奪われた者が身を寄せ合い、足りない力を補って復讐へと走る　それが、ニヴルヘイムの始まり。

その復讐心こそが、彼等にとって何よりの燃料なのだ。

故に　例え暴走している事を自覚していたとしても、ガラムはその歩みを止める事ができなかった。

『もう少し、もう少しだ……!』

強く足元をけり、ガラムはビルの上から跳躍する。

例えどれほどの高さから飛び降りようと、ガラムの強靱な肉体は小揺るぎもしない。

その怒りを燃料として燃やしながら走る暴走特急　その憎悪は全て、家族を奪った者達へと向けられていた。

生きたままルーンを剥がされ、苦痛の内に死んで行った娘の最期も、娘を奪われ、絶望に泣き叫びながらプラーナを奪われてしまった妻の最期も。

全てを奪われたあの光景は、今も変わらずその脳裏に焼きついている。

『 エフス  
テイワズラド  
Eh、T、R

！  
』

見えてきたのは、建築資材を置く為に建てられた倉庫のような場所。

その前方に、人狼の姿へと変化したガルムが地響きを上げながら降り立った。

鋭く細められた彼の瞳は、ただただ一直線に目の前の扉 嚴重に閉ざされた合金製のそれを見据える。

人の気配など皆無なこの場所ではあったが、しかしガルムの持つ強靱な感覚はそれを確かに捉えていた。

『 人間の臭い……少なくとも、誰かがいるのは確かなようだな』

ならば、とガルムは拳を構え 握り締めたその拳を、硬く閉ざされた金属の扉へと向けて一直線に突き出した。

空を斬り、甲高い音すら立てて突き出されたその一撃は、その威力を余す事無く対象へと伝え 頑丈極まりないそれを、飴細工か何かのように折り曲げて吹き飛ばす。

無論の事、そのあまりの破壊力に巨大な轟音が響き渡るが、ガルムには最早姿を隠す意思など微塵も存在していなかった。

ガルムは消し飛んだ扉の奥へとその足を踏み入れ 同時に、悪寒を感じて身をよじる。

刹那、一瞬前までガルムの体があった場所に、一筋の熱線が閃いていた。

背後にあった木材をその熱量で焼き斬ったそれは、入り口から見え



ない位置に隠された装置から発射されている。

暗闇に隠れてはいるが、獣化して夜目が利くようになったガルムにはその姿がはっきりと見える。

そしてそれを確認した直後、ガルムの姿は一瞬でぶれて消えていた。同時、鋭い爪が空を裂く音と、仕掛けられていた装置が破壊される音が響き渡る。

(当たり前だな　！)

湧き上がる暗い歓喜に、ガルムは獯猛に牙を剥いた。

それは威嚇のようであり、笑みを浮かべたようでもあり　ガルムも、その感情を抑える心算は欠片として存在していなかった。

そして、ガルムは暗闇の中を駆け始める。

途端に動き始める無数のセキュリティ。以前の静岡製薬と違い、こちらでは攻撃目的に作られた装置や警備ロボットなどが多数配置されていた。

サイレンサー機構のついた銃撃装置から放たれる弾丸を躲し、振り抜いた爪の一閃が離れた場所の装置を破壊する。

Rによる超高速の攻撃によるカマイタチの発生。これもまた、一つラトのファンクションであった。

『オオオオオッ！』

隣から突撃してきた四つ足の警備ロボットの攻撃を躲し、打ち下ろすような拳の一撃がそのボディを粉々に打ち砕く。

砕け散った部品は、打ち据えられたガルムの拳によって一直線に飛

び、その正面にあつた機械と共に粉碎した。

強靱な肉体と精神を手に入れるT、<sup>ティウス</sup>獣のごとき強大な性能を得るE<sup>エ</sup>h、<sup>ラス</sup>そして何者にも捉えられない速さを手に入れるR。<sup>ラト</sup>純粹な戦闘の為のルーン三種。それらを持つ<sup>ファープラ</sup>神話級の能力者とは、即ち神話に名を残す英雄と等しい。例えどんな数の機械が襲つてこようとモ

(邪魔だ、木偶が！)

ただの、障害物でしかない。

振り払う腕が当たったものは弾けとび、その破片も弾丸と化して周囲を破壊してゆく。

それはまさに暴風。触れたものを飲み込み、破壊する竜巻のような存在。

怪物と化したガラムがたつたの数秒暴れただけ　それだけで、  
廃倉庫に偽装されたこの場所は本物の廃墟と化していた。  
そして

『見つけたぞ……ッ！』

その強力無比な拳が、地面へと向かつて振り下ろされる。

岩盤すら貫き砕くその拳は、土で覆つて隠されていた隠し扉を暴き、それを容赦なく貫いていた。

そして内側からその扉を掴み、力づくで引っこ抜くように扉を外す。ぶちぶちと千切れる金属には目も向けず、ガラムはただその下に続く長い階段を見下ろしていた。

暗い洞くわうのような地下への道  
び込んでいった。

身体を覆う浮遊感と、吐き気を催すような墜落感。

落下する夢を見ているようで、酷く気分の悪い感覚を味わいながら、ガラムはその最深部に着地した。

『ここ、か……』

湧き上がる怒りに身を任せる。

止まるつもりなどない　ギリギリの所で目的を忘れぬよう自制しながらも、ガラムは目の前にある扉へと拳を放っていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

物の少ない執務室。

整然と並べられた本にはあまり手をつけられた気配はなく、どこか現実味のない空間を作り出している。

そんな場所で、窓の外へと視線を向けていた路野沢一樹は、ふとかがつてきた通信に右の眉を跳ねさせた。

その相手は、彼にとって少々珍しい相手だったのだ。

「……変わった事もあったものだ。君の方から連絡をしてくるとはね」

『まあ、俺としても変わったモンだとは思っけどなあ』

どこか自分自身に呆れたような声が、携帯電話の向こう側から響く。

そんな声にくつくつと笑みを浮かべ、路野沢は愉快そうに声を上げた。

「いやはや、僕としては頼られる事は好ましいものなのだよ。もっと頼ってくれても構わないのだがね」

『見返りが恐いからなあ。遠慮しとくさ。それに、アンタは俺の性は知ってるんだろお？』

「ははは、一匹狼とは何とも皮肉な事だ」

その言葉に込められていたのは皮肉か、或いは単なる事実を淡々と述べているだけなのか。どちらにしろ、その通話相手はその言葉を軽く流す程度にしか受け止めていなかったようだったが。しかしそれにもまるで堪えた様子を見せず、路野沢は変わらぬ調子で声を上げる。

「さて……君がかけてきたと言う事は、やはり『グレイプニル』の話かね？」

『まあな』

「充電期間はもう十分だと、そういう事かな？」

『いいだろオよ、いい加減飽きてきた所なんだ』

「ふむ……成程」

『彼』の気質を理解しているからこそ、路野沢は愉快そうに笑みを浮かべる。

何処までも楽しそうにしている。しかし、それすらもどこか芝居じみたものに見える、現実感の無い表情だった。

部屋の中の生活感のなさ、そして彼自身。全てが、作り物じみた違和感を空間に投影する。

けれど、それを見咎める者は何処にもいない。

「安心するといい。そう待たずして、枷を解き放つ者は現れるよ」  
『へえ、ソイツは重畳』

「その時が来たら、追って連絡するでしょう……君の望みも、叶えられるかもしれないからね」

『……言うじゃねえか』

路野沢は嗤う。

誰もいないその場所で、人形じみた笑みを浮かべながら。それは美しく、それ故に醜い。無貌に等しいそのカタチは、酷くイビツだった。

「望みは叶えよう。戦う限り、機会は与えるさ。それが、僕の仕事だからね」

『ソイツはまた、大層なこつて』

カキン、と電話の向こうで小さな音が鳴る。

何か、金属同士がぶつかるような音 或いは、爪で金属を弾いたような音だった。

その響きは、どこか呪わしい。鎖に繋がれた獣が、外の世界を望んで唸るように。

解き放たれ、血肉を貪る事を願うかのように。

『さて、それじゃあそろそろ行くとしようかね』

「ふむ。君も行くのかい？」

『まあ、な。お礼参りはしておきたいところだろオよ』

カキン、と再び音が鳴る。

その音はどこか、歯と歯がぶつかり合う音にも似ていた。

繋がれた獣は、静かに息を潜める。繋いだ相手が油断するのを待ち、その喉笛を喰い千切る為に。

その音を心地良さそうに聞きながら  
路野沢は、ただただ楽し  
そうに声を上げた。

「君の行動には意志がない。ただ、己の本能のままに生きる獣  
故に道理は通じず、力づくで叩き潰す他ない。一応の理由はある  
が、それも口実に過ぎぬのだろうか？」

『よおく分かってるこつて……ま、そーゆー事だ』  
「ああ、全く……君達に対する興味は尽きないよ」

それは皮肉だろうか。それとも、純粹なる賞賛だろうか。  
その声から判別する事が出来るものは、この世の何処にも存在しな  
いだろう。

そして、路野沢は告げる。電話の向こうにいる、その獣へと向けて。

「では、僕から言う事は何も無い……本能に従いたまえ、  
《<sup>フロースケ</sup>悪名高  
<sup>イットニル</sup>き狼》」

その言葉は、どこか言霊のように響き渡っていた。





02-11: 救せないもの(前書き)

今回の能力者の案はRAYさんより頂きました。

地下深く隠されたその場所は、外の様相とは違い最新の研究施設の設備を整えていた。

先程の光景とはあまりにも場違いなそれを見て、ガルムは一瞬だけ目を見開く。

が 飛んできた弾丸に対して即座に反応して身を躲していた。その先にいるのは、幾人かの男たち。

「来たぞ！」

「殺すなよ、生かして捕えろ！」

その言葉に、ガルムは小さく口元を歪める。どうやら、彼らは分かっているようだ、と。

まるで自分達が狩る側であると勘違いしているようなその言葉  
即座に後悔させてやる、そう誓うように。

そしてそのまま、ガルムはRのルーンへと回すプラーナ量を増加させた。  
ギヤリ、と 鋭い脚の爪が、金属質な床を擦る音が響く。  
そして次の瞬間、ガルムの体は弾丸のように飛び出していた。

『 ツー！！ 』

空気摩擦の熱を感じながらも、その身は刹那の内に彼らを容赦なく蹴散らし、破片となったその体を散らす。

しかし油断はせぬまま、ガルムはさらに通路の奥へと向けて駆けだした。

放たれる警備ロボットの攻撃を躲してその鋼鉄の体を鉤爪で引き裂き、雇われたと思われる能力者を攻撃の前に加速して打ち砕く。  
一步も止まる事無く進み、周囲に破滅を振りまき続けるその姿は、紛れも無い災厄そのものだった。  
と、次の瞬間

「 『ヒューマン・ブレット』  
《猪突猛進な振る舞い》！ 」  
『 めッ！？ 』

高速で宙を駆け抜けてきたその一撃を紙一重で躲し、ガルムは思わず足を止めていた。

その攻撃は非常に早く、目視してから躲すまでほとんどタイムラグが存在していなかったのだ。

無論、ガルムが加速しながら直進していたのも相まっているのだから、

( Rラドの能力者か……！ )

獣としての姿を崩さず、声を出さぬままにガルムは胸中でそう叫ぶ。

互いに向かい合いながら加速していた事によって衝突しかけたが、どうやら相手はそれが目的であつたらしい。

主に拳や爪と言つたインパクトの瞬間を狙うような攻撃法を取るガルムと違い、今回の相手が行つた攻撃は体当たりによるもの。

( ただの自爆特攻とは違う……強化した上での加速突進か )

だが、それにしても と、ガルムは若干の疑問を吐き出す。

加速の際に殆ど風圧を感じなかつた事に、ガルムは違和感を感じていたのだ。

別の能力が干渉している可能性もあると、油断せぬままにガルムは構える。

同じくRラドの能力者であるガルムならば逃げる事も不可能ではないだろう。

だが、追いつかれぬようスピードを落とさぬまま進むのはいかな高い技量を持つ彼とは言えども不可能だ。

ここで迎撃せねばならない。周囲に注意を払いつつも、ガルムは相手へと向けて駆けた。が

( 体が重い……！？ Oオセルの重力操作……いや、Iイサの停止減速か！ )

舌打ちしつつ、ガルムはプラーナの出力を上げる。

能力による直接干渉は、それ以上のプラーナを叩き付ける事で解除する事が可能だ。

だが、一瞬でも動きを止めてしまったガルムの身体は、単なる的ではない。

「テイワズラド T、イサ R、I

」

前方にいる男は、地を蹴る体勢を作りながら再びルーンを発動させる。

この距離、この体勢では躲す事は不可能。怒り狂っていても戦闘では冷静な部分を残しているガルムの思考は、客観的にそう判断する。そして即座に、ガルムは新たな形でルーンを発動させた。

( ハイ・ピート 《神速の律動》！ )

ラフト Rによる思考加速      それは、感覚の延長に他ならない。

アンサズ Aの持つ高速思考と違う点は、理路整然とした思考回路を作り出せる訳ではないという事。

ファーフラ しかし、神話級の能力者にして深い知識と聡明さを持ち合わせるガルムは、それに準ずるほどの力を発揮する。

相手が飛び出してくるまでの一瞬で思考を完了させたガルムは、更なるファンクションを発動した。

發動させたのは、ティワズ エワズ TとEhを組み合わせた強化のファンクション。加速を捨て、純粹に力と強靭さを求めたその姿は、先ほどのしなやかな 十二分に大柄ではあったが 人狼よりもさらに一回りほど大きい。

肥大化した筋肉の鎧は、銃弾も生半可な能力も通じないほどに強力な防具となる。

そしてその状態で防御の為に腕を交差させ、ガルムは突っ込んでくるその神速の突進を待ち受けた。

一瞬の空白 　そして、衝突。

『ぬう……ッ！』

強烈な威力を受け止め、ガルムはその足の爪を地面に突き立てながら、その衝撃を必死にこらえていた。

重圧は一瞬 　その強大な力を、ガルムは一人で受け切る事に成功する。

目の前にあるのは、驚愕に目を見開いた男の姿。

まだ地面に降りる前のその身体を、ガルムは両腕を振り払うようにしながら地面へと叩きつけた。

「が……ッ!？」

普通の人間ならばそれだけで砕け散るほどの腕力。  
けれど、Tテイワズを持っていたその男の身体は、生憎とその一撃だけでは致命傷たりえなかった。  
故に、ガルムは腕を振り上げながら小さく告げる。

『敬意を表しよう』

静かに告げる、その言葉。

獣と思っていたものが声を上げた事に、男は大きく目を見開く。  
しかしそれを意に介さず、ガルムは男にのみ聞こえる程度の小さな声で告げる。

『私に攻撃を全力で『受け止め』させた男は久方ぶりだ』

そして　その巨大な拳が、地面へと向けて打ち下ろされた。  
Rラトの加速など存在しないにもかかわらず、目にも留まらぬほどの速さで放たれたその拳は、容赦なく倒れた男の背中を打ち貫き、この施設全体を大きく揺らした。  
轟音と鳴動、そして金色の毛並みを赤く染めた獣は、その破滅の中で尚も立ち上がる。  
鋭敏になった嗅覚は、その血の臭気の中でも尚、どこか覚えのある臭いを感じ取っていたのだ。  
そちらの方へと向かって、ガルムはその強靱な肉体を解除しないまま歩き出す。

『こちらか……』

先ほどまでのような速さはない、だが進行を止める事も無く、ガルムは一步一步目的の方向へと進んでゆく。

放たれる銃弾も、人体を砕け散らせるような爆発物も、鎧と化したガルムの肉体を傷つける事は叶わない。

速さを捨て、防御と攻撃に偏重した戦闘形態 それが、 《冥府 オプティの門番 イモス・ハウンド》だった。

《血染めの狼》ほどのバランスの良さは存在していなかったが、それでも戦闘を行うには十分すぎるほどの能力である。

能力を使って姿を変化させるにはそれ相応のプラナーが必要であり、状況に合わせて一々変化するのは、フェアブラ神話級のガルムですら少々厳しいものがある。

それ故、元の姿に戻るのはあまり合理的とは言えないのだ。

(あまり時間は無い、が )

繰り返す戦闘での冷静な思考によって、ガルムの意識は少しだけ冷静さを取り戻していた。

感じ取っている臭い 少し、あの執事に似た感じのするそれは、もうあまり遠い場所ではない。

放たれる攻撃や向かってきた能力者などを羽虫の如く振り払いながら、ガルムはそちらの方向へと進んで行った。

振るった拳が当たった壁が砕け散り、進む道は血に染まる。胸元を血に染めたその姿は、凄惨なまでに恐ろしい様相を成していた。

けれど、止まらない。ガルムを止められる者が存在しない。



降りてくる分厚い隔壁も、手刀を刺し込んで貫通し、無理矢理に二つに裂いてしまう。

弾丸を放ってくる大型の警備ロボットは、それらを意にも介さぬまま進み、無理矢理に踏み潰す。

暴虐を振り撒きながら進んだ先は……一つの、金属製の扉だった。ガルムは、その扉を引き剥がすように破壊する。

「ひっ……!？」

そこにいたのは、一人の女性だった。

病人用の簡易服のようなものを纏い寝台に寝かされていた彼女は、ガルムのその姿を見て恐怖に表情を引き攣らせている。

少しだけ感じ取る事の出来るあの執事の面影に、ガルムはどこか苦笑じみた吐息を吐き出した。

本当に、配慮が足りなかったと。今の自分の姿は、少なくとも助けに来た人間のものでは無い。

けれどこのままでは埒が明かないと、ガルムは彼女 嵐山佳奈美へと向けて声を上げた。

『私は、君の兄上から依頼を受けて君を助けに来た者だ』

「……………え……………？」

『信じられないのも無理は無いし、君を実験台にしようとした者達への個人的な恨みからの行動でもある。だが』

呟き、ガルムは腕を振るう。

その爪の一閃が、佳奈美を拘束していたベルトを切り裂いていた。

自由になった彼女は、驚いた表情を浮かべながら己の両手を見つめている。

そんな彼女へと向けて、ガルムは続けた。

『部屋の隅に行つて、隠れていて貰いたい。私の力は、護衛には少々不向きだ』

「は、はい……」

恐る恐る、警戒しながら距離を取るように離れてゆく佳奈美の姿に、ガルムは再び苦笑を漏らす。

そして彼女が部屋の隅まで避難したのを確認すると、握り締めた拳を部屋の壁へと向けて叩き付けた。

「ひっ……きゃあ!？」

引き攣つたような悲鳴は黙殺し、腕を振り払うように壁を破壊する。

その向こうにいたのは、複数の研究者の姿だった。

気付かれないと思つていたのだろう、戦闘者でもない彼等は、ガルムを前にして恐怖に表情を引き攣らせている。

ガチン、とガルムの鋭い牙が鳴る　黄金の体毛を逆立てながら、その見た目を更に一回りほど大きくして、ガルムは怒りの唸り声を上げた。

「ひ、ッ……け、警備員は何をしている!？　早くコイツを」

ガルムの振るった腕が、甲高い音を立てて霞む。そしてその瞬間、叫び声を上げていた男の頭部が弾けとんだ。夥しい血を噴水のように吹き上げながら事切れる男を見据え、ガルムはつまらなそうに息を吐き出しながら声を上げた。

『技藤とやらは何処にいる』

唸る、怨嗟のような声。

そこに籠る巨大な憎しみに、研究者達は縛り付けられたように動きを止めていた。

だが、その視線だけは全てある方向　そこに立つ一人の男へと向けられている。

黒縁の眼鏡をかけた茶髪の男。うろたえてばかりの研究者達の中で、たった一人だけ冷静さを保っていた存在に、ガルムはその視線を向ける。

『貴様か』

「……はあ、ついていない。折角ここまで漕ぎ着けたと言っのに」

死を目の前にして態度を崩さぬその余裕に、ガルムは訝しげに眉根を寄せる。

技藤はそんな彼の困惑を理解しているかのように、口元に笑みを浮かべながら声を上げた。

「だが、これも正当な使い道と言えるか  
」  
『何を言ってる……ッ!?!』

刹那、ガルムの周囲から紐状の物が飛び出し、その巨体へと向かってゆく。

ガルムは反射的にそれを爪で薙ぎ払ったが、そのベルトは、鋼鉄すら斬り裂く爪を受けてもビクともしなかった。

その事実には驚愕する間もなく、ベルトはガルムへと向けて襲い掛かる。

『これは、まさか『グレイプニル』……!?!』

ラド  
Rを交えた状態、イラスト・ベステイア  
《血染めの狼》ならば躲す事も可能だった。ただろう。

けれど、今のガルムはスピードではなくパワーとディフェンスに偏重した姿。

その姿では、それを躲す事など、叶わなかった。

\* \* \* \* \*

「やっぱ、コレは必要か……」

密都内に点在する隠し場所の一つから持ち出したコートとバイザーを纏い、涼二は夜の街の上空を駆ける。

その身に水のロープを纏い、様々な建物に繋ぎながら飛び回るその姿は、さながら蜘蛛のようだった。

僅かに赤く光るバイザーは、さながら複眼と言った所か。

自分自身の皮肉に苦笑しながらも、涼二はようやく目的地の姿を監視していた。

「ようやく着いたか……って言うか」

地面に降り立ち、その建物の状況を眺めながら、涼二は思わず頬を引き攣らせる。

それほどまでに酷い状況だったのだ。壊滅しているといっても過言

ではない。

本気で暴れたらしいガルムの爪痕を眺めながらも、涼二はその廃工場を装った施設の中へと足を踏み入れてゆく。

「……こりやまた、随分と猛ってるな、あいつ」

無数に刻まれた爪痕、砕け散った機械、地面に開いた大穴。

どれもこれも人間業では無い破壊力　その痕跡を目の当たりにして、涼二は小さく苦笑を零す。

見事なまでに破壊し尽くされたその場所は、彼が向かって行った何よりの証拠でもあった。

（今は戦闘音が聞こえない……暴れるまでも無い状況か、或いは暴れられなくなっているか……一応、考えておいた方がいいか）

胸中で呟き、涼二はバイザーの上からその右目を押さえる。

その瞳に刻まれた、スリサスThの始祖ルーンを。

出来ればそれが活躍する機会が存在しないことを望みながら、涼二はラゲスルーンを発動させて地下へと降りていった。

「　スリス」

『はいはい、調査完了。バイザーに表示するよ』

スリスの明るい声と共に、涼二の司会に施設の地図が表示される。

相変わらず完璧なまでの調査結果に、涼二は思わず苦笑を浮かべていた。  
地下深くの地面に降り立ち、その画面を身ながら涼二は暗がり姿を隠す。  
どうやら、ガルムはゆっくりと道を進んでいる所ようだった。

(アレをやったのか……となると、本格的に警戒が必要になるかな)

胸中で嘆息しつつも、人の目がなくなる瞬間を捉えて涼二は施設の中へと侵入してゆく。

涼二の目的はただ一つ　　ある意味では、いつも通りの行動だった。

即ち、ガルムが視線を集めている間に、涼二が目的となるもの手に入れる。

今回の目的は、依頼内容である嵐山佳奈美、そして『グレイプニル』とユグドラシルに関する資料。

スリスの手によって監視カメラの映像が偽装された通路を走り抜けつつ、涼二は小さく笑みを浮かべていた。

(尻尾は必ず掴んでやる……待っている、ユグドラシル)

その瞳に映るのは、ガルムとは違い　　しかし、同じものでもある憎しみの炎。

冷たく燃え上がる青い炎のようなそれは、涼二の感覚を先にいる敵へとより鋭く尖らせて行っていた。

向かうべき場所は実験室、そして資料やデータが収められた場所。

『これだけ大規模な実験施設を作っていたんだ、ユグドラシルの手が入っているのは確実だよ。』

けど、問題はトカゲの尻尾切りぐらいは簡単に行えるって言う事。あいつらは、ここを切り捨てるぐらいは簡単にする。』

「ああ、それは俺が一番良く知ってるさ」

元々ユグドラシルに所属していたからこそ、涼二は強い実感を持つてそう口にする。

そしてそれに対し、どこか頷くような気配を見せながら、スリスが声を上げる。

『実際、もう向こうから干渉を受けてる可能性はある。気をつけてね、涼二』

「分かってるさ……だが、この混乱状況だからこそ」

『セキュリティが解除しやすい、ってね。データロックさえ解除してもらえれば、ボクがいくらでも情報を奪ってこれる。頼んだよ、涼二』

「ああ、任せろ」

頷き、涼二は駆ける。

冷静さを保ちつつも、どこか急ぎながら。

それ故、涼二は気付かなかった。



「……」

彼の後を追い、一人の人影が内部へと侵入していた事を。

「……本格的にこんな真似をする事になるとはな」

換気ダクトの中に氷を張って滑りながら進みつつ、涼二は小さく嘆息を漏らす。

狭苦しい場所ではあるが、能力を使えば音を立てずに進む事は可能だった。

流石にこの施設内に配置された人員を全て把握し切る事までは流石のスリスでも出来ず、涼二はこのような安全策を取って進んでいたのだ。

いかなスリスとは言えど、強固なプロテクトに護られた施設内を短時間で調べ切る事は不可能だったのだ。  
だが

( 必要な情報は出揃ってる。ならば )

後は、己の腕次第でどうとでも出来る。

そう胸中で呟き、涼二はバイザーに映し出された己の位置と、内部の地図を照らし合わせた。

己の位置や把握できた警備員の位置、そして目的地の場所などの位置関係を確認しつつ、目的のデータベースへアクセスできる場所へと向かう。

流石にこの狭い空間で戦うのは不可能であると分かりきっているのに、涼二は無駄な寄り道をせずに一直線にそちらへと向かっていた。時折見える部屋や廊下の状況を確かめつつ、音を立てないようにただ前へ。

(……ガルムの奴、本気でやったみたいだな)

僅かに見えた、盛大に血の飛び散っている廊下を眺め、涼二は小さく嘆息を漏らした。

パワー偏重型のファンクションである《オフティームス・ハウンド冥府の門番》。あのパワーは涼二の力でも防衛し切れないほどに強力なものだ。

分厚い氷の壁も、まるで薄皮のように容易く引き裂いてしまう。だからこそ、それほど心配していると言っわけではないのだが

「……まあ、あいつでも万が一はあるか」

思わず声に出してしまったことに気付き、涼二は口を嚙む。そして小さく肩を竦め、緩やかに滑る身体を停止させた。

現在の場所は資料室の上部  
況を確かめた。

僅かに霧を放ち、涼二は内部の状

今の所、内部に人はいないようだ。

「よし、っと」

換気口を蹴破り、涼二は資料室の内部へと侵入する。

若干薄暗いその部屋はあまり広いわけではなく、多くの棚が圧迫するように並んでいた。

そしてその奥に、検索用のパソコンが備え付けられている。

笑みを浮かべながら頷き、涼二はそのパソコンを起動させた。

「さて……と」

懐から取り出したのは、ケーブルのついた黒いカード状の装置。

これは涼二のコートの中に常備されている装備の一つであり、スリスが自作したクラッキングツールであった。

接続したパソコンに対する侵入を容易にする、スリルの波長に合わせた道具。

涼二はそれをパソコンに接続し、装置を起動させる。

「……繋いだぞ、スリス。どうだ？」

「ん……大丈夫だよ。ちょっと待ってて、調べてみるから」

通信機の向こうからは、カタカタと高速でキーボードを打つ音が聞こえてくる。

かなりの集中をしているらしい彼女に小さく苦笑しつつも、涼二はその掌をこの部屋の入り口の方へと向けた。

途端、Lのルーンラクスによって現れた水が、Iの力イサによって凍結する。

巨大な氷によって塞がった入り口を眺めて満足しつつ、涼二は周囲の棚に収められた資料達へと視線を向けた。

大半は書類を納めたファイルであり、背表紙の所には簡単なタイトルらしきものが記されている。

が、専門の知識を持たぬ門外漢の涼二には理解の及ばない内容ではあった。

「さてと、どうしたもんかね……」

これらを全て運び出すほどの人手は無く、そして内容を理解するだけの知識もない。

挙句の果に、情報の取捨選択をする時間すらも限られている。

よい状況とは到底思えない今現在の状態に、涼二は思わず嘆息を漏らしていた。

そして、バイザー視界に映るマップへと視線を向ける。

「……何人か、こちらに向かってきてるな」

舌打ち混じりに、そう呟く。

今更自分達の存在に気づかれた所で大した差があると言う訳ではないのだが、ピンポイントに情報封鎖が掛けられて、スリスの作業が

妨害されるのは防がなければならない。

余り時間を掛けている暇は無いのだ。

じっと息を殺し、涼二は氷に包まれた扉の奥へと注目する。

マップ上の反応は、真っ直ぐに廊下を進み 資料室の前で、止まった。

「……………はあ」

涼二は、思わず深々と嘆息を吐き出す。

静かな部屋の中に響くのはパソコンの駆動音と、開かない部屋の扉を叩く外の人間達の声だ。

ただ扉を破ろうとしているだけならば問題はないのだが、コレでネットワークの封鎖を行おうとするような人間に情報が行き渡っては堪らない。

厄介な状況に辟易しつつも、涼二はその手を凍りついた扉へと触れさせた。

『おい、どうなってる!?!』

『早く開ける、鍵がかかっているのか!?!』

断続的に響く扉を叩く音、そしてそれと共に聞こえてくる喚き声。ガラムの襲撃によって冷静さを失っているおかげか、まだ他方に連絡すると言った事は行っていないようだが、それも時間の問題だ。故に、涼二はその両肩に刻まれた二つのルーンを発動させた。

その言葉と共に、扉の向こう側で涼二の力が吹き荒れる。

顕現するのは冷たい雨　　しかしそれは、触れたものを全て凍りつかせてしまう死の雨だ。

一滴でも触れれば、当たり所によっては死に至る強力凶悪なファンクション。

かつて《氷獄》<sup>ニゲルヘイム</sup>のコードネームを得る前は、この《氷雨》<sup>フロステイレイン</sup>こそが氷室涼二の二つ名だった。

その力は、<sup>フェアブラ</sup>神話級の能力者ですら防ぎ切る事も避ける事も難しい

降り注ぐ雨を躲せる者などいないのだから。

そんな強大な力に曝された三人ほどの男達は、冷たい雨に包まれて一瞬で物言わぬ氷像と化していた。

その姿を確かめる事は出来ないが、反応が途絶えた事を確認して涼二は小さく頷く。

「よし……とりあえずは、大丈夫か」

扉付近から手を離し、涼二は安堵の息を吐き出す。

しかし状況が好転したと言いつ訳でもなく、早急にこここの探索を終える必要があるのも事実だった。

後頭部を掻きながら、涼二はバイザーのマイク　　その向こうのスリスへと向けて声を上げる。

「スリス、どの資料が必要になるのか早く教えてくれ」

『はいはいちょっと待って、もうすぐ出るから……っ』

タン、とスピーカーから音が響く。

どうやら、エンターキーを押した音らしい。

そしてその直後、スリスは読み上げるように声を上げた。

『必要なのはA - 6の棚にある研究報告、B - 2の棚にある実験記録、D - 8の棚にある資料。最初の二つは『グレイプニル』に関する情報で、最後のは研究に協力した人員について書かれてる。棚のロックは外しておいたよ』

「了解した。探しておくから、次の道筋を検索しておいてくれ」  
『りょーかい』

スリスの言葉に頷きながら、涼二は並ぶ棚に刻まれた文字列を探してゆく。

本来ロックが掛けられている筈の棚は、スリスが設定を弄った為に必要な部分のみが開かれていた。

『グレイプニル』に関する研究報告と実験記録、そして協力者の名簿　　たった三つではあるが、それだけでも持ち運んで邪魔にならないと言っにはぎりぎりのレベルであった。

「戦闘には流石に邪魔だな、こりゃ……」

内容を確認しつつ、パソコンを停止させる。

そしてクラッキングツールを取り外し、コートの中のケースに資料を納め、涼二は再び天井にある換気ダクトの方へと跳躍した。



一度だけ、部屋の中を眺める。  
そして小さく嘆息し　涼二は、ダクトの中へと姿を消していった。

「さて、ガルムの援護と人質の救出と行きますかね」

そう、小さく言い残して。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

『…』

両腕と両足、そして胴と肩を壁から伸びたベルトによって押さえつけられたガルムは、思わずそう呻き声を上げていた。

力が減衰しているのだ。身体を拘束する『グレイプニル』という名のベルト　その力は、神話級の力を持つガルムに対しても存分に発揮されていた。

岩を容易く打ち砕くその膂力すらも、『グレイプニル』は完全な形で押さえ込んでいたのだ。

「やれやれ……研究のしづらい世の中になってしまったものだ。身を隠してまで研究を続けていたと言っのに……」

ガルムの隣を歩きぬけながら、男　技藤翔はそう口にする。

それはガルムに対して語りかけていると言っより、独り言に近いようなものだった。

技藤は、目の前のガルムに恐怖を覚えるでもなく、ただ淡々とそんな言葉を口に出している。

「すっかりと能力者の権利が整備されてしまった。化物扱いされていた昔の状況だったなら、こつも面倒な方法を取らずに済んだものを」

『貴様……ッ！』

技藤の言葉に、ガルムは激昂するように声を上げる。

しかしながら、技藤の口に出ている言葉は紛れも無い事実だった。

十五年前、能力者という存在はただの異端でしかなかったのだ。隕石の飛来も能力者によるものであるという根も葉もない噂が流され、その次の日には迫害していた当人が能力者へと変わる。

正しく地獄だったと　　当時を経験しているガルムには、それが実感として感じられる。

ユグドラシルという法の執行者が現れるまでは、この国でも混乱が絶えなかったのだ。

それでも、ほぼ壊滅した故国よりはマシだったと、ガルムは思う。けれど

「こんな所にまで邪魔が入られたら、何処で研究をすればいいのやら」

『このような研究など……ッ！！』  
「何をそう毛嫌いです。今の世の中は、我々の研究によって成り立っていると言うのに」

呆れたような表情で、技藤はガルムの方へと振り返る。

その瞳の中にあるのは、何処までも淡々とした、無感動な感情。ただ事実を語っているだけだと言う自負が、そこにはあった。

そして　　それが事実である事も、ガルムは知っていた。

「我々の研究が無ければどうなっていた？　この国は本当に秩序を取り戻す事が出来たのか？」

『……………』

そう、それは紛れもない事実だ。

ユグドラシルが裏で無数の屍を積み上げたからこそ、今日の平穏な日常がある。

世界中がいまだ苦しみに喘いでいる中、この国の人々が真つ当な生活を送れるのは、他でもないその犠牲のおかげなのだ。  
だが

『関係、無い……ッ！』  
「……ほう？」

唸るような怨嗟の声。その言葉に、技藤は小さく目を見開いた。  
ぎしぎしと軋む『グレイプニル』。その強靱な肉体に強く食い込む事すら気にせず、ガルムは巨大な咆哮を上げた。

『貴様等がどれだけの人間を救い、その影でどれだけの人間を殺して  
ていようが知った事ではない！』

貴様等は、全てを奪った……私から、妻と娘を奪ったのだ！  
例えどのような大義名分があろうと、私は未来永劫、貴様等を赦す事など無いッ！』

繋がれた床が、ベルトが、そしてその肉体そのものまでもが軋み  
を上げる。

けれど、その校則は決して外れる事は無い。  
何処までも効率的に力を分散し、決して外れる事のない束縛を作り  
出す。

それ故、技藤はガルムに対し何ら脅威を覚えていなかった。

「妻と娘……ああ、成程。君はあの時の実験体の関係者か」

「ッ!?」

技藤の言葉に、ガルムは大きく目を見開く。

そして、次の瞬間に湧き上がっていたのは、大気を震わせんばかりの巨大な殺意の塊だった。

それを涼しげに受け止めながら、技藤はただ淡々と語る。

「アレの事は覚えているよ。期待していたのだが、結局失敗してしまったからね。私としても、数少ない失敗例の一つだ」

「」

失敗と言う言葉に、ガルムは言葉を失う。

失敗した、つまり彼女達によって『グレイプニル』が作り出される事は無かった。

ならば一体、彼女達の死は何だったと言うのか。

ただ、無意味に失われただけだと、そう言うのか　そう、ガルムは愕然と己に問いかける。

「今回は失敗する訳には行かない。ディザスター災害級の能力者を使って実験を行うのだから。それに、フェアブラ注ぎ込むプレーナは神話級が飛び込んでくれた……最高の『グレイプニル』を作れるだろう。感謝するよ」

その言葉の中で、ガルムの鼻はある臭いを感じ取っていた。

怒りに塗り潰されそんな意識の中、僅かに残った理性が感じ取ったもの。それは、涼二の臭いだった。僅かに、視線を上げる。

「さて、では実験を　　何!？」

その場所に、嵐山佳奈美の姿は無かった。

ガルムが一瞬だけ見る事が出来たのは、天井の通気候から伸びた水のロープが、彼女の体を絡め取って攫っていった事。

そして、周囲へと、馴染みのあるプラーナの気配が広がった事だった。

姿を見せぬ涼二の、その右目に刻まれているはずのルーン　　T<sup>スリ</sup>  
h<sup>サス</sup>の力。

それと共に、減衰していた力が元に戻る。それを自覚し、ガルムは最後のファンクションを発動させた。

『　　』  
《完全獣化》<sup>ベルセルク</sup>『　　』

ガルムの瞳から、理性の色が消える。

獣としての闘争本能で意識を塗り潰し、力を失った　　涼二の力によって上書きされた『グレイプニル』を力任せに引き千切る。そして自由になったその身で、ガルムは巨大な咆哮を上げた。

『　　』

オツ！！」

技藤が驚愕と共に振り返った、その瞬間。

ガラムの拳は、一瞬の内に敵の顔面へと突き刺さり、周囲の部屋ごと男の身体を完全に打ち砕いていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ハアツ、ハアツ……」「コレさえ持ち出せば……！」

白衣を纏った一人の男が、ある資料を持って壊滅しかけた施設の通路を走っていた。

目指す場所は緊急用の脱出口。その手に『グレイプニル』に関する最新資料を持ち、男はただただ逃げる為に走り続けていた。

「これさえあれば、研究は続けられる。これさえ」

うわごとのように呟きながら、男は目的の場所へと到着する。

緊急用脱出口は外から入って来れぬよう、基本的にセキュリティ口ツクが掛けられていた。

横にある端末へと解除用パスワードを入力し、そこから外へと脱出しようとドアに手を触れる　瞬間。

「「ア、ッ!？」」

唐突に走った衝撃に、男は横へと吹き飛ばされていた。

吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、痛みに喘ぎながら男は目を白黒させて起き上がる。

そこに立っていたのは、一人の青年だった。

「おーおー、出口までの案内ご苦労さん。ってな訳で、コイツは貰っていくぜ」

「な、何だ、お前は!？」



床に落ちた紙の束を拾い上げ、皮肉な表情で嗤う青年に、男はそう叫ぶ。

しかし相手は、ヘラヘラと笑みを浮かべているだけだ。

そしてそのまま彼の事を無視し、青年は扉を開けて外へと出てゆく。

「ま、待て

」

咄嗟にそれを追うように扉を開けて 男の体が、一瞬だけ揺れた。

扉の影から伸びたのは、外に出ていた青年の腕。

銀色に染まったそれは真つ直ぐに男の胸へと伸ばされ、それを貫いていた。

「な、あ……………」

「じゃあな」

血に染まった腕を引き抜き、青年は歩き出す。そこに残っていたのは、たった一人の死体だけだった。



02-13:エピソード(前書き)

中間発表があるため、次回更新は10/10になります

「うーん……」

戻ってきた森崎グループの本社ビル。

事後処理に追われ、疲労困憊の状態で椅子に腰を降ろした時には、既に朝日が登りきっている時間帯だった。

そして現在、ニヴルヘイムに宛がわれた部屋の中で、涼二の持ち帰った書類を見ながらスリスは眉根を寄せていた。

周囲にいる他の三人は、ガラムを除き若干眠そうな表情でその様子を眺めている。

結局、徹夜する事となってしまうたからだ。

しかしそんな状況でもすぐに休むと言う訳には行かず、シアを待つ間こうして持ち帰った情報を確かめる事となったのだ。

「確かに、いい情報ではあるんだけど……」

資料を机の上に降ろし、スリスは小さく肩を竦める。そこには、どこか失望のようなものが込められていた。

「最新の情報って訳じゃないね……ここにある情報も確かに有用だけど、出来れば新しいものが欲しかったかな」

「だが、流石にもうあの施設からは手には入らないぞ？」

「分かってるよ……だから、今ある情報から辿っていくしかない。

けど、大きな進歩なのは確かだよ。流石、涼二だね」

「まあ、怪我の功名みたいなものだがな」

スリスの言葉に苦笑しつつ、涼二はそう口にする。

今回の事件は、殆ど突発的に起こったものであり、それが自分達に関連する出来事であるとは思っていなかったのだ。

思った以上に厄介な出来事になってしまったものではあったが、予想外の自体としてはそれなりにいい結果を残せた。

尤も 若干一名、納得し切れていない人物はいたのだが。

「まー、そーゆー訳だからさ……あんまり責任感じすぎるもんじゃないって、おっちゃん」

「……醜態を曝したのは事実だからな。反省せねばなるまい」

手を組み、その上に額を乗せた体勢で頂垂れるガルムに、涼二とスリスは視線を合わせて嘆息した。

確かに、ガルムが己にとっての仇を相手に暴走していたのは事実だ

ろう。

けれど、涼二やスリスはそれを計算に入れた上で行動していたのだ。その為、結果的に言えば、ガラムが敵を陽動してその間に涼二が侵入すると言いつつもものパターンに収まっていたのだ。

結局の所、何か問題があったと言いつ訳ではない。この世界は、結果が全てなのだから。

「……まあ、次に冷静でいてくれればいいって。一応、直接の仇的な奴は倒せたんだろ？」

「ああ……だが、《ドヴェルク》に指示を出していた存在には辿り着いていない」

「その辺りを調べる為に協力者の名簿とかを取ってきたんだけど……ま、これからってトコだね」

スリスの言葉に、涼二はコクリと頷く。

裏側にいる存在が一体何者なのか。それはまだ分からないが、そこに辿り着かなくてはスリスとガラム二人の復讐は完了しない。

(……そう考えると、相手が分かっている俺はまだ楽なのかもしれない)

とは云え、相手は同時に最も倒す事が難しい位置にいる存在なのだ。

その事を思い出し、涼二は感じた憂鬱に対して小さく嘆息を吐き出していた。

だが、それでも諦めるつもりは無い。徹夜に慣れておらず、尚且つ

慣れない力を使った雨音が舟をこぎ始めているのを視界の端で確認し、他の仲間に見えぬように肩を竦める。

と　　その時、部屋の扉がノックされた。

「どうぞー」

「失礼しますわ」

部屋の中に入ってきたのは、嵐山によって扉を開けてもらったシアだった。

彼女は執事と、そしてその後ろに続く少女を引き連れ、徹夜明けの疲れた様子すら見せずいつも通りの様子で自分用に置いてある席に着いた。

涼二はちらりと彼女の後ろ　　あの時助け出した女性へとその視線を向け、小さく肩を竦める。

そんな涼二の様子には気付かず、シアは声を上げた。

「この度は良くぞ依頼を完遂してくれました。あなた達の働きに感謝しますわ」

「どうも」

徹夜明けでは皮肉を挟めるほど頭が回るわけでもなく、涼二は低い声で簡単にその言葉を受け取る。

シアもそんな涼二達の様子を理解しているのか、特に気にした様子も無く続けた。

「依頼は完遂、さらに我が執事の個人的な問題まで解決して頂きました。報酬には上乘せさせて頂きますわ」

「まあ、個人的な目的の一部だったので」

「ええ、存じております。ですが、これは個人的な感謝ですので、素直に受け取って頂けるとありがたいのですが？」

「……了解」

要するに、余分な借りは作りたくないという事なのだろう

そう判断し、涼二は小さく嘆息を零していた。

普通に考えれば失礼極まりない態度だろうが、シアが気にした様子は無い。

対等な立場を望んだからこそ、彼女はそれを平然と受け止める事が出来るのだ。

「まあお疲れでしょうし、長々と話すのも邪魔でしょう。わたくしは早めに退散しますわ」

「助かる。正直、結構疲れてるんだ」

何せ、一晩かけて足と能力を使いながら街を駆け抜け、そして能力を使った戦闘もこなしたのだ。いくら戦闘訓練を重ねた一流の能力者とは言えど、きついものはきつい。

一応、まだしばらく活動する事も可能ではあるのだが、必要も無いのにそのような事をするほど、涼二は酔狂な人間ではなかった。疲労を溜め息と共に吐き出し、涼二は頷く。



「では、わたくしのお礼はこの程度で……話す事があるなら、話して行きなさい」

立ち上がり、振り返りながらシアが告げたのは、嵐山の後ろに控えていた佳奈美に対して。

その言葉に彼女は肩を跳ねさせながら驚いていたが、少しの間言葉を吟味して、覚悟を決めたように涼二達の方へと視線を向けた。

『グレイプニル』の材料として捕らえられていた彼女 嵐山佳

奈美は、ガルムが捕らえられているちょうどその間に涼二によって救出されていた。

涼二としては、解放された瞬間暴れ出したガルムの攻撃に巻き込まれかけた事に対して若干の文句があったが、とりあえず大事には至らなかった。なので気にしない事になっている。

一応は災害級の能力者<sup>ディザスター</sup>とはいえ、戦闘に関してはずぶの素人。周囲の状況に騒ぎまくる彼女を連れ帰るのは、中々に骨が折れる行為だった。

そんな佳奈美は、涼二達へ 主に涼二へと向けて、深々と頭を下げる。

「この度は助けて頂き、本当にありがとうございました。私だけじゃなく、兄さんまで」

「そっちはその依頼主から命じられた仕事の範囲だ。礼を言うんだったら姫さんに言っておいてくれ」

「……何ですの、その呼び方？」

「眠いんで適当だ、気にすんな」

欠伸を噛み殺し、涼二はそう口にする。

そしてどこか納得いかなそうな表情をしながらも、シアは彼の様子に肩を竦めていた。

しかし頭を下げているか並は二人の様子に気付かず、後ろで見守る嵐山だけが苦笑じみた表情を浮かべていた。

「あの、お礼を……」

「アンタを助けたのはついだから、気にしないでくれ」  
「で、ですけど……」

顔を上げ、尚も食い下がる彼女に対し、涼二は小さく嘆息する。実際の所、涼二も彼女が生きている可能性は半々程度に考えていたのだし、さらに自分達が必要とする資料を奪取する事を優先していたので、あまり感謝されると居心地が悪いのだ。しかしそんな涼二の心境は知らず、佳奈美は尚も食い下がる。

「このまま何もお返しできないのは、私としても納得できません！」  
「うあー……」

眠気で思考能力が低下している中、がんがん響く声に頭を抱えつつも、涼二は遅くなった頭を必死に回転させる。

ちらりと見た佳奈美の顔は、本気の熱意に燃えていた。一応年上の筈なのだが、その表情のおかげか随分と若々しく見える。

そんな彼女へと向け、涼二は問いかけた。

「……アンタ、仕事何してんだ？」

「はい？ ええと、私は兄さんと一緒に鉄森家の使用人を」  
「ああ、じゃあここの手伝いをしてくれ。見られちゃ拙い資料があるが、アンタならもうそれなりに知ってるから大丈夫だろ」  
「え……あ、は、はい！」

無論、その辺りの配置はシアが決定しているのだろうが と  
涼二は隣に立つシアへと視線を向ける。

彼女は何処と無く呆れたような表情を浮かべていたが、一度目を閉じて嘆息すると諦めたように苦笑を浮かべた。

「好きにするといいですわ。彼女一人抜けた程度で回らなくなるほど、仕事が立て込んでいる訳ではありませんもの」

「そうかい……じゃ、借りる」  
「よ、よろしくおねがいします！」

微妙に囁んでいる佳奈美へと嘆息しつつ 涼二は、その身を深くソファへと沈めていた。  
身体を包む倦怠感がじんわりと癒えて行く感覚に、そっと目を閉じる。

(今日は一日寝るとするか)

結局自宅に戻る事が出来なかった事を考えつつも、涼二はゆっくりとその睡魔へ身を委ねて行ったのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「……………参ったなあ、これは」

資料を眺めつつ紅茶を口に運び、悠は嘆息交じりの息を吐き出す。そこに記されていたのは、ユグドラシルが秘密裏に保有していた研究施設が壊滅したとの知らせだった。

そこは主に『グレイプニル』を研究、開発する為の施設であり、今となつてはそれほど重要度の高い施設と言う訳ではなかったのだが

「救いと言えば、コレが一般や司法局には公表できない内容だった事ぐらいか……」

『グレイプニル』の研究は完全に違法であり、これを周囲の人間に知られる訳には行かない。

その為、研究施設の内容を知っているのは上位の幹部クラスと、全ての情報を統括するミーミルの室長、詩樹悠程度なのだ。

空になったティーカップを置き、読み終わった資料から視線を外して深々と息を吐く　凝った肩を解しつつ、悠は小さく苦笑を浮かべていた。

実際の所、ミーミルでこの事を知っているのは一人ではないのだ。

「それで、涼二君は大丈夫そうなの？」

「まあ、ね。一応涼二も、出力はそれなりに抑えていたみたいだし」

悠の副官である怜は、今回の事件に関する概要を知っていた。

元より、誰よりもこのユグドラシルという組織の闇に精通している二人なのだから。

資料の中には、イサ ラグスの使われた形跡に関して語られている。

一応、出力としては災害級程度に抑えられているようだが

「ムスペルヘイムの人達が動く事にならなくてよかった、って所かな……現場を見たら、間違いなく『フロステイレイン氷雨』が使われたって確信するだろうし」

「涼二君がいた頃からの隊員さんだったら、確かにそうかな」

小さく苦笑気味に、怜はそう口にする。  
恐らく、緋織だったら黙ってはいなかっただろう、と。  
それには全面的に同意せざるを得ないので、悠もまた苦笑を浮かべて新たに注がれた紅茶へと手を伸ばした。

「涼二達も今回はちょっと無用心な感じがしたけど……突発的な事態だったって事かな」

「突発的にあんな場所見つけちゃうかな……？」

「まあ、涼二だからね……変に運がいいのか悪いのか」

やれやれと肩を竦め、悠は苦笑を漏らす。

いつも何かと厄介事に巻き込まれていた涼二の姿を思い出し、彼ならばありえなくもないと納得してしまったのだ。  
その隣で怜は軽く資料を眺め、小さく首を傾げる。

「この『グレイブニル』って……どうしてまだ研究が続けられてたの？」

「ああ……不安が尽きなかったからだろうね」

「不安？」

悠の言葉に、怜は再び疑問符を浮かべる。

そんな彼女の様子に小さく笑いつつ、悠は己のルーンを発動させてその記憶を辿った。

そのルーンの一つが刻まれているのは、彼の舌の上　　傷痕のよ

うな<sup>アンサズ</sup>Aのルーンが力を放つを感じつつ、悠はゆっくりと声を上げた。

「『グレイプニル』はね……元々、一人の能力者の力を抑える為に作られたものなんだ」

「一人？ それって？」

「『予言の巫女』<sup>ヴォルヴァ</sup>がその存在を示唆した、大いなる破滅の引き金となる能力者。その能力者の力を封じ、そして確実に殺す為に『グレイプニル』は作られた」

能力を使うと喉が渇く　　そう呟き、悠は紅茶を口にする。

その眼鏡の下の視線は、先ほどとは違い鋭く細められていた。まるで、その先に敵がいるかのように。

「けれど、『グレイプニル』の研究は何者かの手によって逆手に取られてしまった」

「逆手？ それって、どういう事なの？」

「何者かが『グレイプニル』を使い、その人物を逃がしてしまったんだ。強力な能力とプラーナゆえに非常に目立っていた彼も、その両方を抑えられては探し出す事も難しい。

いつ爆発するかも分からない爆弾が、行方知れずのままになっているようなものだ」

そんな悠の言葉に、怜は大きく目を見開く。

この組織が危険視するような相手が行方知れず  
ど危険な事なのか、良く理解しているからだ。

それがどれほ

けれど

「力が封じられてるんだったら、一応は大丈夫なんじゃ……?」

「『グレイプニル』は、高位の力を持つ<sup>スリサズ</sup>Ttのルーンによって解除する事が出来る。そして、それを持つ者は今やユグドラシルの敵なんだよ、怜?」

「あ……!」

怜の顔に理解の色が広がるのを見て、悠は小さく頷いて見せた。

先にあるかもしれない脅威。いつ来るかも分からないからこそ、その力は恐ろしいものだ。

そして 今回の件で、その脅威が現れる工程に一步足を踏み込んでしまった。

「もしも『グレイプニル』に対する対処法を心得てしまった涼二が彼に出会えば、彼は間違いなく解き放たれてしまうだろう。涼二だけだって十分に脅威だったのに、そんな存在まで加われれば  
「気をつけないといけないの……かな」

不安そうに、怜はそう口にする。

それに対して一度目を閉じ、悠は小さく声を上げた。

そこに、僅かな不安と そして、笑みを浮かべながら。

「尤も、それぐらいの方が戦い甲斐があるってものだとは思っけどね」



「……もう、悠君ってば」

呆れたような表情で、怜はそう口にする。

そんな彼女の様子に小さく苦笑を浮かべ、悠は声を上げた。それでも、どこか楽しそうな様子は消さないままに。

「緋織だけじゃ、涼二とその人物には届かないかもしれない。それを何とかするのが僕の仕事だと思ってるからね」

「うーん……まあ、涼二君が出てくるとなったら緋織ちゃんも美汐ちゃんも黙ってはいないと思うけど」

「美汐はまだまだ経験不足だからね……勉強だけはしっかりしてるけどさ」

もう一人の友人の姿を思い出し、悠は小さく笑う。

誰よりも優しく、誰よりも愛され、誰よりも友人想いな彼女なら

きっと、何が何でも涼二の事を連れ戻そうとするだろう。

果たして仲間に甘い涼二が、彼女に対して強く出る事が出来るのかどうか。

少しだけ意地悪な事を考えながら、悠は最高のAの力を使って無数の思考を張り巡らせる。

手加減はしない。それが、彼に対する礼儀なのだから。

「まあ、美汐はいい意味で思い切りがいいから、涼二が相手でも迷ったりはしないだろうけど。ただ、彼が出てくるとなると……」

「さっきから言ってる『彼』って、『グレイプニル』の力で逃げちゃった人の事だよな？ 悠君、知ってるの？」

「ん、まあ……名前までは伝わってないけど、どっという風に呼ばれていたかは知ってるよ」

災厄をもたらす能力者として、念入りに抹殺されようとしていた一人の少年の記録。

けれど彼はその姿を消し、依然としてその行方が知れないままとなっている。

そんな彼の、二つ名は

「フロースヴァイトニル《悪名高き狼》……彼は、そう呼ばれていた」  
「フロースヴァイトニル《悪名高き狼》、か」

その名を吟味するように、怜は小さく呟く。

そんな彼女の様子を眺めていた悠は、一度視線を降ろし、それから虚空を見上げていた。

この先どうなってしまうのかは分からない。けれど

（もう一度、あの頃のように戻ればいいと……そう思ってるよ、涼二）

ここにはいない相手に対し、悠はそう小さく呟いていた。



「オペラ、ですか？」

「そうだよ、羽衣<sup>うい</sup>」

ユグドラシル最強の実働部隊、ムスペルヘイム。

その任務の危険度は他の部署とは比べ物にならないほど高く、その分だけ隊員の扱いは優遇されたものであった。

個人で家を保有していない場合は一人ひとりに個室が与えられ、家賃を払う必要もない。

無論、それに納得できないものも往々にして存在してはいるのだが、ムスペルヘイムが当たる任務は常に死の危険と隣り合わせなものであり、その実態を知る者は決して文句を言えるような代物ではなかった。

そんな己の暮らす環境と、今回の任務で関連してくる相手の居住環境を思い浮かべ、<sup>ひおり</sup>緋織は小さく肩を竦める。

ここはムスペルヘイムの隊長に与えられる執務室。そのデスクに着

いた緋織は、己の副官である羽衣に対して声を上げた。

「私がオーケストラの指揮者をやってる事は知ってるでしょう？」  
「はい、お姉さまの事なら何だって！」

力みながら断言する羽衣に、緋織は思わず苦笑を漏らす。

自分を慕ってくれているのは確かだが、その好意には若干隔意を感じてしまうのは事実だった。

しかしその感情は表に出さないようにし　　気付かれたらどんな反応を示すか分かったものではない　　緋織は、書類に目を通しながら嘆息交じりの声を上げる。

「元々、私はオペラ指揮者としてやっていた。オペラ歌手である、美汐様と一緒に。最近あまりそちらの活動はしていなかったのだけれどね」

「美汐様って……もしかして、総帥の娘さんの？」

「そう。大神美汐……ユグドラシルの次期総帥としても名高い能力者」

その姿を思い浮かべ、緋織は己の紅の髪を掻き上げた。

頭の中で思い浮かべる人物は、緋織と同じような長い髪を持つ少女。ただし、その姿は光輝と言う単語がこれ以上ないほどに似合う存在だった。

光を反射するプラチナブロンドと、その中で輝く黄金の瞳。

高い才能とそれに驕らない精神、そして多くの人を惹きつけるその在り方。

選ばれた人間であると言うその評価も頷ける。そう胸中で呟き、  
緋織は視線を上げた。

「私は彼女と古くからの友人で、共に活動していた事もあったから。  
あの世代の能力者は皆凄かったけど」

幼い頃から能力に触れていた人間達が、ようやく社会で活動でき  
るまで成長した時期。

それまでは表舞台に姿を現す事が殆ど無かった始祖ルーン能力者達  
が、その姿を見せ始めた頃だ。

アンサズ  
Aの始祖ルーン能力者、詩樹悠。

カン  
Kの始祖ルーン能力者、磨戸緋織。

ウルス  
Uの始祖ルーン能力者、大神徹。

そして、タガス DとGの始祖ルーン能力者、大神美汐。

さらにれい 怜や、それらの能力者に勝るとも劣らない実力を持つひむろりよ 氷室涼  
二。

天才と呼んでも過言ではない者達が軒を連ねていた時代の事を思い  
出し、緋織は懐かしさに目を細める。

「美汐様は私達のように厳しい訓練は受けていない。けれど、それ  
でも私と互角に渡り合えるだけの実力を持っている」

「……凄いですね、その人」

羽衣の声に硬さが混じるのを感じ取り、緋織は胸中で苦笑を漏ら  
す。

彼女は元々、プラーナ量こそあるもののルーンの大きさはティターン 巨人級ほ

どであったために、それほど高い判定を受けられない存在だったのだ。

ルーン能力は天性の才能に依存する。プラーナ量などは特にそうだが、けれど羽衣は、その不足を努力で補った。能力の強度を上げられないのならば、使い方で、戦略で勝利を勝ち取る。

結果として、今の彼女は災害級の判定を得る事が出来た。ディザスター

たゆまぬ努力の末に得る事が出来た、ムスペルヘイムの隊長補佐と言う役目。故に彼女は、努力せず高い力を持つ者を好かないのだ。

(……美汐は、努力不足って訳じゃないけど)

心の中では敬称を付けず、緋織はそう呟く。

大神美汐は、むしろ人並み以上の努力を積み重ねているような存在だった。

彼女の能力は直接戦闘と言うより、むしろ将としての在り方に重点を置いている。

味方に指示を出し、味方を奮い立たせる。それこそが、大神美汐と言う能力者の真髄だ。

いかな緋織とて、彼女に対し集団戦で勝てるとは思っていなかった。無論、負けるとも思っていないが。

「まあ、とにかく」

とまれ、と思考を切り替える。

今考えるべき事は大神美汐本人の事と言うよりも、このオペラにつ

いてなのだ。

「このオペラコンサートの目的は、どちらかと言えば対外へのアピールにある」

「アピール、ですか？」

「今でも、能力者は恐怖の対象とされる事があるから……私や美汐様をアイドル扱いして、能力者全体のイメージアップを図りたいんだと思う」

「そんな事にお姉さまを使うと!？」

「必要な事、だからね」

憤慨した様子羽衣に、緋織は苦笑を見せる。

能力と言うものは戦闘の為の力であるという意識の強い羽衣にとっては、能力者をそのように使う事それ自体が信じられなかったのだらう。

無論の事、能力とは戦闘ばかりではなく、悠のように補助にも使えるものではあるのだが。

けれど、そればかりでいられる訳が無い。能力は、管理しなければ破滅を呼ぶものなのだから。

「崩壊した……いや、中途半端に崩壊した今の日本を纏め上げるには、能力の力が要る。」

けれど、その秩序を乱しているのもまた能力。だからこそ、ユグドラシルは能力者を集めなければならない」

「分かっています。その為の『スクール』ですし、奨学金制度だって……」

「けれど、能力者は恐怖の対象である事に変わりはない」



人の身で超常の力を操る能力者。

才能さえあれば子供でも家一つ破壊する事が可能で、しかもそれを抑え込む事は非常に難しい。

能力者を集めた『スクール』は、能力者の育成と倫理教育を行う場所と言う面の他に、能力者を隔離する場所と言う役割も持っているのだ。

一般の世の中に能力者がいれば、人々は怯えて暮らすことになる。

だからこそ、『スクール』  
或いは、ユグドラシルという隔離所が必要となってしまうのだ。

「そして、そんな能力者達を集めているユグドラシルは、一般人からしてみれば得体の知れない存在でしょう」

「それはっ……そうかも、しれませんが……」

「『自分の事を人間だと思っけていても、化け物にならない為に生きていたとしても、周りの人間はそう見てくれるとは限らない』……結局、世の中はまだまだ本当の秩序には届かないままだ」

先任　　涼二の言葉を口にしながら、緋織は自嘲気味にそう呟く。

それが彼女自身の言葉ではない事を羽衣は気づかなかったようだ。無論、気付けば騒ぎ出すので気付かれなくて正解ではあったのだが。そんな事を考えながら息を吐き出し、緋織は肩を竦めつつ続ける。

「だからこそ、一般人の恐怖を和らげる事は私達にとっても必要な事。その為の偶像として選んだのが、私と美汐様だったという事」

「偶像つて……」

「アイドルなんてそんなモノだと思っけど」

頬を引き攣らせる羽衣に緋織はそう告げる。

広告塔とするには、美汐は最適な人選であると言えるのだ。

何故なら、彼女の持つルーンはG<sup>ゲーボ</sup>。それは、『人に好かれる』力を持つ、ある意味人心掌握のルーンなのだ。

始祖ルーンとしてその力を持つのなら、例え映像越しだったとしても、人の心を集めるには十分すぎる。

「能力者に対する隔意の軽減、そしてユグドラシルのイメージアップ……今回の話の目的は、こんなところかな。」

まあ、本来ならそれに私が加わる理由は無いのだけど、美汐様の護衛は要る訳だから」

「……いえ、お姉さまに関してもお姉さまの言った通りの目的はあると思いますけど」

「それは無いよ。私には、美汐様に並び立つほどの魅力は無い」

断言する緋織の言葉に、羽衣は気付かれぬように小さく嘆息を漏らした。

彼女は以前からこのように、自分自身の魅力に気付かない節があるのだ。

誰が見ても変わることは無い、掛け値なしの美少女である磨戸緋織。彼女には、自分が女であるという自覚が薄かった。

幾度も苦勞をさせられた事があり、羽衣はその一つ一つを思い浮かべて疲れたように肩を落とす。

そんな様子に首を傾げながらも、緋織は続けた。

「まあとにかく、そういうことだから。多分ムスペル Heim から何人か護衛として付くことになるかもしれないから、一応皆にそう伝えておいて」

「はい、分かりました。人員としてはどれぐらい？」

「一応、私が一番近い場所で護衛をしている事になるし、それほど人数は多くしなくても大丈夫だと思う」

「まあ確かに、お姉様が護衛についている以上、私達の警備はそれほど必要にはならないでしょう」

実働部隊ムスペル Heim、その隊長にして最強の能力者である磨戸緋織。

彼女がすぐ傍についている以上、これ以上の警備など高望みと言うべきものだった。

尤も、万が一と言う可能性がある以上は、そのまま誰も動かさないと云う訳には行かないのだが。

「はい、それじゃあ羽衣、当日の予定を預けるから人員の配置をお願い」

「分かりました、お姉さま。お姉さまの手を煩わせる事の無いよう、努力します」

「期待してるよ」

頷き、退室してゆく羽衣の背中を見送り

緋織は、執務室の

椅子に背中を預けて深く息を吐いた。

気配の中に混じるのは、若干の疲労。

それは肉体的な疲労というよりも、精神的な疲労という面が強かった。  
そして彼女の視線は、再び机の上に置かれたパンフレットへと向けられる。

「……題目は、『ニーベルングの指輪』か……確かに、美汐の好きな話だけだ」

緋織は、かつて共に切磋琢磨していた時代を思い出す。

その時には美汐はもっと近い場所に降り、悠達とも毎日のように話をしていた。

そして何より、涼二がそこにいたのだ。

彼は常に、自分達を導き続けてくれていた。その時にかけてもらった言葉を、笑顔を思い出し、緋織は再び溜め息を吐く。

「涼二は……見に来て、くれるかな」

ありえないであろう可能性を口にした己自身に、緋織は苦笑を漏らす。

否。それは最早、自嘲を孕む物でもあった。

涼二ははユグドラシルを裏切った。尤も、脱退自体は正式な手順であった為、敵と言う認識は殆どされていないが。そうである以上、彼が緋織の前に姿を現す事などある筈がない。

(ある筈、ないんだ)

緋織は、そう小さく己に言い聞かせる。

涼二はもう戻ってこない。力づくでも連れ戻す事が出来なかった以上、彼が自分から戻ってくると言う事は無いだろう。けれど

（私は、弱いのかな）

美汐は、未だに諦めていない。

必ず涼二をユグドラシルに連れ戻すと　その為に力を付けるの

だと、彼女はそう息巻いていた。

彼が居やすい場所にする事が出来れば、彼が帰ってきたいと思うような場所に出れば、きっと戻ってきてくれるのだと……美汐は、そう信じて疑わなかったのだ。

「……強いな、美汐は」

緋織はかつて友人達と一緒に戦っていた頃を思い出す。

未だ秩序を取り戻したとは言えず、治安は決してよくなかったあの頃。

命を削るような日々で、来る日も来る日も戦いに明け暮れていたあの頃。

しかし、それでも　緋織は、満足していたのだ。

いつか平和になった時に一緒に笑い合う事ができると、そう信じていたのだから。

椅子から身を離し、立ち上がる。  
パンフレットを持つ手をだらりと下げ、緋織はゆっくりと窓の傍へと近づいた。  
ブラインドの下りたそれを少しだけずらし、外の景色へと視線を向ける。

「涼二……どうして、何も話してくれなかったの？」

ポツリと、緋織の唇からそんな言葉が零れ落ちる。  
それは責めるようであり、悔いるようでもある言葉。

どうして話してくれなかったのか、どうして気づく事が出来なかったのか  
そんな言葉が、あの日から変わらず緋織の中で響き続けている。

それは、紛れもなく後悔だった。

「……はあ」

自嘲気味に息を吐き出し、緋織は窓から身を離す。

そして、しばしぼんやりと虚空を見上げ　　ゆっくりと、その身を翻す。

そんな彼女の足は、自然と部屋の扉の方へと向いていた。

かつて涼二が使っていた執務室　　この場所は、居るだけで彼の姿を思い出してしまうのだ。

だからここにはいたくないと、そう胸中で呟きながら、緋織は部屋の扉を押し開ける。

「久しぶりに、美汐と話をしようかな」

悠、怜、美汐、緋織、涼二。

それが、かつて友としての絆を結び合った者達の輪。  
欠けたのはたった一つであったというのに、滑稽なほど形を失って  
しまったそれ。

けれど、その輪を必死に修復しようとしている美汐を、決して滑稽  
だと思ふ事は出来なかった。

緋織の手は、そっと己の胸元に触れる。

服越しに押し付けられる固い感触　それは、首にかけられたシ  
ルバーのペンダント。

それは、かつて涼二によって贈られた、緋織にとってたった一つの  
宝物だった。

「結局私も……」

この絆を捨てる事は、出来ないのだ。

小さな呟きは音にならず、空気の中に溶けてゆく。  
そんな僅かな、しかし万感の思いの溶けた空気は、閉じた部屋の中  
でいつまでも漂い続けていた。





「おう、おはよーさん」

「あ、おはよー」

「おはようございます、涼二様」

「氷室さん、おはようございます」

「おはようと言うには少々遅いかな」

いつもの通り、鉄森グループ本社ビルへと顔を出した涼二は、一つ増えた挨拶を受けつつ、首に巻いたマフラーを外す。

季節はもう冬に入ろうという所。日によっては真冬並の寒さを発するこの季節の中、涼二はいつもより厚手のコートとマフラーを身に纏っていた。

とはいえ、室内に入ればそんなモノも必要ないのだが。

脱いだコートやマフラーを受け取る佳奈美に軽く礼を言いつつ、涼二はいつもの定位置　　部屋に入って左手にあるソファ　　へと腰掛けた。

佳奈美の持ってきた暖かいコーヒーを受け取りつつ、涼二は声を上げる。

「何か変わった事は無かったのか？」

「別に、特に何も無いかなあ」

開いたパソコンを隣に置いたままソファに寝転がり、携帯ゲーム機で遊んでいたスリスは、ずりずりと身体を滑らせながら涼二へと近づいて彼の太腿にその頭を乗せた。

俗に言う膝枕の体勢であるが、こういう甘え方はいつもの事なのでそれほど気にせず放っておく事にする。

そもそも、開いているパソコンは自動で画面が切り替わり、様々な場所へのハッキングを行っているのだ。仕事をしている以上、涼二は特に文句を言うつもりは無かった。

とはいえ、堂々とこういう事をやられても反応に困るのは確かだ、と涼二は小さく嘆息する。

「あの、涼二様」

「ん、どうした雨音？」

掛けられた声に、涼二はスリスへと向けていた視線を上げる。

その声は言わずもがな、涼二の正面に座っている雨音のものであった。

彼女は机の上に何冊かの本を積み、その内の一冊を手に持って呼んでいる。

そこに積み上げられているのは、全て能力に関する教本であった。

彼女は、この間通常通りに自分の力を使って人を癒した時以来、能力の可能性に魅入られていたのだ。

「ここの所が分からないのですが……」

「つつても、俺だつてSソウイルの事はよく知らんが……ああ、プラーナの放出強度とルーンの数の問題の事か」

「はい。放出量の関連は、ルーンの大きさに依存していたと思ったのですが。」

「ああ、それは確かにそうだ。が、放出量と放出強度つてのは別のものだからな」

「そうなのですか？」

きよとんと首を傾げる雨音に、涼二は小さく苦笑を漏らす。

本来の力に戻った雨音の能力 Sソウイルは、順調にその強度を増しており、今では大怪我も一瞬で癒せるほどの力へと変わっている。

今の彼女ならば、この間の事件で嵐山が負っていたような傷すらも一瞬で癒し切る事が可能だろう。

それでも尚、完全に能力が元に戻った訳ではないのだから、その力の凄まじさが窺える。

そんな彼女の力を思い浮かべつつ、涼二は続けた。

「放出量つて言うのは、確かにお前の言う通りだ。ルーンが大きければ、それだけプラーナを放出できる量が多くなるのは道理だからな」

「はい。では、放出強度とは？」

「そうだな……強度と量を両立は、シングルルーンの持ち主でなければ難しい。要するに、単一のルーンの方が勢い良くプラーナを放

出できるんだ」

「涼二、それ説明が分かりづらいよー」

膝の上のスリスの言葉に、涼二はぺしりとチョップを落とす。

そんな様子にガラムが苦笑を浮かべていたが、それには気付かない振りをしつつ、涼二は言葉を吟味した。

どう説明したものか、と胸中で呟きながら。

「……そうだな。例えば、水槽に穴が開いていたとしよう」

「船の底に溜まった水はどうやって抜くのでしょうか？」

「……ええと、まあそれはともかく。その溜まっている水がプラーナで、開いている穴がルーンだとする。その場合、三つ穴が開いているよりも、一つ穴が開いてるだけの方が勢いが強いよな？」

このたとえ話においてみれば、その水の飛び出る強さこそがプラーナの放出強度と言うものになる。

プラーナの総量とルーンの大きさに左右されるものではあるが、結局はルーンの数が少なければそれだけ強い力を発しやすいと言う話になるのだ。

「プラーナの放出強度が強ければ、それだけ能力の強度が増す。単純な放出系……<sup>ハガラスカン</sup>HやK、そしてお前の<sup>ソウイル</sup>Sなんかも、放出強度の強さによって能力が強くなるな」

「となると、私は」

「お前の場合は、ちょっと前例がないから判断に困る事になるんだよな」

そう呟き、涼二は小さく苦笑する。

その言葉を聞いたのか、雨音は首を傾げ、そんな彼女の仕草に涼二は息を吐きつつも続けた。

じゃれて来ようとするスリスの手を躲しながら。

「ルーンの中で最も強い力を持つ始祖ルーン。しかもシングルルーンであり、プラーナの総量もかなりのものだ。お前が全力で能力を使った場合、何処までの出力を持つのか……流石に、俺でも想像できないんだ」

「成程……分かりました、ありがとうございます涼二様」

ぺこりと礼をする雨音に、涼二はヒラヒラと手を振る。

その内心に、どこか慄くような感覚を残したまま。

ひよっとしたら、彼女は本当に、死者を蘇らせるほどの力を持っているのかもしれない。

そんな、背筋が寒くなるような想像を頭を振って振り払い、涼二はどこか苦笑の混じった息を吐き出した。

「しかし、雨音も結構安定してきたな」

「はい、能力の調整の方も、かなり進んできていますから」

横から声を上げたのは、仕事を終えて控えている佳奈美だった。

彼女は先日的事件以来、使用人の服装 所謂メイド服 を纏ってニヴルヘイムの面々の世話をしている。

尤も、普段別の場所に住んでいる涼二のみはその恩恵に肖る事が少なかったが。

それなりの秘密を知ってしまったてはいるが、彼女自身は非常に信頼できる人物であるという事は、ニヴル Heim 全員の共通認識となっている。

能力の強度自体もそれなりに高いので、安心できる人材であるのは確かだった。

そんな仲間内からの評価は知らず、佳奈美はニコニコとした笑顔で声を上げる。

「それにですね、雨音さんは今度の能力調整で、完全に力を元に戻す事が出来るようになったんですよ！」

「へえ、ソイツは目出度いじゃないか」

「ふふ、ありがとうございます涼二様」

歡心を交えた涼二の言葉に、雨音が嬉しそうに顔を綻ばせる。

知らないのは涼二だけであつたようであり、ガルムやスリスも同じように嬉しそうな、或いは安心したような表情を浮かべていた。

若干仲間外れにされたような気分を覚えながらも、その知らせ自体は非常に嬉しいものであり、涼二もまた安堵を浮かべる。

雨音の身体に掛けられていたのは、二つの処理である。

一つは、大きく問題になっていた能力の反転処理。今回、完全に元に戻す事が出来るようになったたというのはこれの事である。

触れただけで生き物のプラーナを奪ってしまうあの体質は非常に厄介であり、戦闘に使う事が出来るとは言え、その力を望む者は誰も居らず、すぐさま元に戻す事が決定していたのだ。

しかしながら、もう一つ 強化人間としての処理は、行き過ぎ

た強化が無い限りはそのままいいと、雨音本人が申し出ていた。確かに、必要以上の強化がなければ身体に害がある訳ではない。元々のプラーナ量が多くルーンも一つしか持たない雨音は、基本的にプラーナが余りがちであるため、プラーナ循環量を増やす処置を受けていたとしてもそれほど問題は無いのだ。それに

『邪魔にならないのならば、残しておいて頂いても構いません。今のままでは、皆さんの足手纏いになりませんし……せめて、足を引つ張らない程度にはなっておきたいのです』

力をどうするかと言う問答の末、雨音が出した結論がこれだった。元々戦場に出ない扱いなのだから、強化があるうと無かうとそれほど差は無い。が、いざと言う時にあった方がいいのではないかというガルムの考えもあり、結局雨音の強化処理は残す事となってしまうた。

涼二としても、別段あった所でそれほど問題はないという認識ではあったので、それほど気にしてはいないのだが。ともあれ、彼女は未だに強化人間としての身体能力を宿したままだった。

ガルムほどではないとはいえ、純粋な身体能力ならば涼二とも引けを取らない。インドア派のスリスとは比べ物にならない程に高い運動能力を有していた。

ガルムに言わせてみれば、元々の才能もあったからという事らしいが。

「涼二様、どうかなさいましたか？」  
「っと……いや、何でもない」

思わずポーンと雨音の顔を見つめ続けてしまっていた事に気付く、涼二は謝罪しつつ視線を外す。

思わずそらす視線の先は、いつもの癖で窓の外へと向く。冬らしい曇り空ではあるが、雪が降り出すにはまだまだ季節が早かった。しばし無言の時間が続き、ガルムがバーベルを持ちながらスクワットをする音は聞こえていたが、ふと、扉をノックする音が響いた。

「どござ」

扉の方へと視線を向け、涼二はそう声を上げる。

背後でバーベルを床に降ろした時に発せられたと思われるドスンと言う音が響いたが、その辺りは極力気にしないようにしつつ、そしてそんな中、扉を開けて入ってきたのは、嵐山を従えたシアだった。

彼女は部屋をぐるりと見回し、そしてポツと顔を赤らめる。

「まあ、ガルム様……今日も素敵な僧帽筋ですわね」  
「挨拶としてどうなんだ、それは」

あんまりと言えばあんまりな一言目に、涼二は思わず反射的にツッコミを入れる。



生憎と、シアはそんな言葉などまるで気に掛ける事は無かったが。小さく嘆息をしつつも、涼二は膝に乗ったスリスを無理矢理起き上がらせ、シアの方へと向き直った。

彼女は基本的に多忙であり、用も無いのにこの場所に来る事は少ない。

ならば、今回も何らかの理由があつて来たという事だろう。

そんな涼二の視線に気付いたのか、シアは表情を引き締めつつ己の指定席になってきている椅子へと腰を下ろす。

時折ブービートラップでも仕掛けてやるうか悩みつつある場所ではあつたが、涼二はさっさとその益体もない思考を切り上げた。

「さて……では改めまして、皆さんこんにちは」

「いや、挨拶は別にどうだっていいんだが……何か俺達に用があるんだろ?」

先の個性的過ぎる挨拶を思い浮かべ、涼二は半眼を浮かべつつその口にする。

さもありません、と肩を竦めるシアには、そんな表情にも堪えた様子などまるで存在していなかったが。

彼女は無造作にぱちんと指を鳴らす。それと共に、シアの背後に立っていた嵐山が一枚のパンフレットを机の上に置く。

首を傾げながらもそれを拾い上げ　　涼二は、眉根を寄せた。

「オペラのコンサート、だ?　これが一体何だつて?」

「護衛をお願いしようかと思ひまして。貴方がたならば、容易い話でしよう?」

少々挑発的な部分があるものの、特にには気にせず涼二は肩を竦める。

これほど人が集まりやすい場所ならば、護衛でも普通の人材で十分な筈なのだ。

にも拘らず、シアはニヴルヘイムに依頼という形でこの案件を持ち込んだ。

(一体、どういう事だ……?)

疑問に思い、涼二はそのパンフレットへと視線を巡らせて行く。

どこか面白いような表情を見せるシア　その顔に浮かぶ笑みに気付かずに。

スリスもまた隣から覗き込んできているが、それは気にせず涼二は情報を取得してゆく。

題目は、リヒャルト・ワーグナーの『ニーベルングの指輪』。  
四部構成からなり、あまりにも長すぎる為に一日では纏めきれない大舞台である。

(そういえば、コレはあいつが好きだったオペラだな　)

そこまで考え、出演者の欄へと視線を向けて　涼二は、思わず絶句していた。

そこには、あまりにも見覚えのあり過ぎる名前が並んでいたのだ。指揮者として、磨戸緋織。歌手の一人として、大神美汐。

ヒロインであるともいえるブリュンヒルデ役を任されているのは、

涼二としても思わず納得してしまった部分ではあるが

「おい、どういう事だこれは!？」

「どうもこうも……わたくしはユグドラシルの方から誘われたに過ぎませんわ。この護衛の話に関しては、貴方の事を思っただけで持ってきたのですわよ？」

「何……?」

「たまには直接顔を見るのもいいのではないか、と思ひまして。随分と、気にかけていたようですね」

見透かされたようなその言葉に、涼二は思わず言葉を詰まらせた。シアの態度によるものではなく、彼女の言い放ったその言葉が、紛れもない事実であったためだ。

氷室涼二は、磨戸緋織や大神美汐の事を気に掛けている。

彼女等は、かつて涼二がユグドラシルに所属していた頃、特に交流のあった二人なのだ。

同年代の同姓と言う点で、最も気が合っていたのは悠だったが

それでも、最も長い時間を共に過ごしていたのは緋織であったし、ムードメーカーとして常に中心にいたのは美汐だった。

「……余計な、お世話だ」

「それは御免あそばせ。それで、どうするのかしら?」

その言葉を否定と取らない時点で、最初から選択肢など存在していないのだろう。と、涼二は胸中で悪態を吐く。

しかしそんな涼二の鋭い視線も気にかげず、シアはどこか勝ち誇っ

た笑みで彼の事を見つめていた。  
それを受け、再びパンフレットへと視線を戻し、涼二は深々と嘆息を漏らす。

「……あいつら、か」

意識せず漏れた呟きに、涼二は口を噤む。

会う事は出来ない。緋織と直接顔を合わせれば、戦闘にしかならぬいだらう。

それに、美汐も自分の事を連れ戻そうとして来る筈だ　　そう結論付け、涼二は小さく嘆息を零した。

己の内心を、理解してしまっていたからだ。

(それでも、元気がどうかぐらいは確かめたい、か)

涼二は、表情には表さぬように自嘲する。

復讐者としての道を選んだ自分には、あまりにも似合わぬその選択それを自覚し、けれどそれを否定する事も出来ず、涼二はぼんやりと虚空を見上げていた。

否定など、出来る筈も無い。何故なら彼女等は

(俺が最後の最後まで悩んでいたのは、あいつ等の事だったしな…  
…)

まだ全てを教え切れていない。まだ人の上に立つには経験が足りなすぎる。

けれど、全てを奪った人間がいるあの組織で、それ以上戦い続ける事は涼二には不可能だった。

最も気に掛けていた彼女達すら手放すほどに、涼二の抱える憎悪は大きかったのだ。

それでも 涼二は確かに、彼女達の事を気にかけていた。

双雅や桜花が家族であるとするならば、彼女達は親友であったと、涼二はそう思っているのだ。

「さて、どうするんですの？」

にやりとした笑みを浮かべたまま、シアがそう口にする。

そんな彼女の様子に、涼二は苦虫を二桁単位で噛み潰したような表情を浮かべていた。

結論など、最初から決まっていたのだから



(これは、少し予想外だったな……)

部屋を出て美汐を探しに行こうとしていた緋織は、部下から告げられた伝言に従い、このユグドラシルの建物の最上階へと向かっていった。

まるで狙い定めたようなタイミングで、総帥 大神槍悟によって声を掛けられたのだ。

重要な連絡がある為、執務室に来るように、と。思わぬ事態に首を傾げながらも、緋織はそこへと向かうエレベーターへと足を運び、そこで一人の人物と鉢合わせした。

「お？ お前は……」

「徹様。お久しぶりです」

短く刈られたオールバックの黒髪、そして強い意志を宿すような藤色の瞳の偉丈夫。

大神徹　　緋織にとつては、親友である美汐の異母兄弟。

対外的に言えば、実働部隊フレキの隊長にして切り札。直接戦えば、その実力は緋織と拮抗している実力者だ。

そんな人物がこの場所にいた理由は

「へえ、お前も親父に呼ばれたのか、緋織」

「ええ。美汐様の事について、話があると」

「相変わらず、かったい奴だなあお前は。敬語を使われたら、美汐の奴は機嫌を損ねるぞ？」

「……そついう、立場ですのぞ」

次期総帥である美汐と、隊長とは言え実働部隊所属の緋織。

その間には、大きすぎる立場の差が存在しているのだ。

それに関しては徹も同じ事ではあるが、彼は美汐の兄である為、その態度を改めるようにと緋織が言うような事は無い。

そんな緋織の態度に対し、徹は呆れの混じった溜息を漏らして声を上げた。

「まあ、怒られるのは俺じゃねえし、別にいいけどよ……ちつとはあいつの希望を叶えてやれよな」

「……友人として、居られるような場所でしたら」

「あー、じゃあ二人つきりの時にでも友達扱いしてやれ。あれで、結構寂しがり屋なんだ」



エレベーターの到着を告げる音が鳴ると共に、徹はひらひらと手を振りながら視線を背け、エレベーターの中へと進んでゆく。そんな背中を眉根を寄せながら見つめていたが、緋織は小さく嘆息をしてから彼を追うように中へと入りこんだ。

徹が最上階のボタンを押すと共に扉は閉まり、高速エレベーターはすぐさま動き出す。

壁に体を預け、ガラス張りになっている部分から外の景色を眺める徹の姿を、緋織はぼんやりと見つめていた。

(彼は )

ユグドラシル総帥、大神槍悟の息子。

司法機関連動機動部隊たる《フレキ》<sup>ウルズ</sup>の隊長。  
Uの始祖ルーンを持つ神話級ルーン能力者<sup>フェアブラ</sup>。

大神美汐の異母兄。

《雷神の槌》<sup>ミヨルニル</sup>。

ユグドラシルにおける、最強ランクの能力者の一人。  
そんな彼は

( ) 涼二の事、一体どう思っていたんだろう？)

無意識に、緋織はそんな事を考える。

かつて、涼二がこの場所にいた頃。部署の違う彼とは会う事が少なかったが、それでも美汐の関連で話をする事は度々あった。

美汐の兄。年齢は、涼二より僅かに上と言った所。

美汐は大災害の後に生まれたため、幼いころは良く世話をしてもらっていたと聞いている。

そんな徹に関する話を思い出し、緋織は小さく息を吐き出した。

分らないのだ。

(涼二と、悠と、それから徹様……三人で話してる所は、何度か見た事がある)

遠目から見ている、和やかに話している様子は見てとれた。

けれど、普段から彼らが顔を合わせていたような様子は無く、女性陣ともそれほど話す事は無かったのだ。

悠は怜を、徹は美汐を、そして涼二は緋織を。

それぞれが親しくしている以外では関わりはそれほど大きくなく、緋織も悠の事はそれほど詳しく知っている訳ではない。

とは言え、情報取得の為に顔を合わせていたのだから、滅多に会わない徹ほどではなかったのだが。

(一体、何を話していたんだろう?)

緋織は疑問を反芻する。

かつて一度疑問に思い、何をしていたのかと尋ねた事はあった。

その時涼二は、ただ『仕事上の苦労話だ』とか『男同士の話だ』等としか答えなかったが、本当に、それだけだったのだろうか、と緋織は考えてしまう。

根拠など何も無い、ただの戯言に過ぎないものだと言うのに。

「……おい、何だよ、人の事ボーっと見やがって」  
「あ……いえ、何でもありません」

そう告げ、緋織は視線を逸らす。  
そんな彼女の様子に、徹は軽く頭を掻き、大仰に嘆息して見せた。  
緋織は首を傾げ、彼の方へと視線を戻す。

「何か？」

「何かって言うか、まあ……お前に対して何かあるって訳じゃねえよ」

「私に対して……では、それ意外に何か？」  
「いや、何つーか……涼二の奴は本当に、女の扱いが下手だと思っ  
てな」

その単語に、緋織はぴくりと肩を跳ねさせる。  
緋織にとっては、何よりも大きな意味を持つその名前　徹の口  
にした涼二の名前を、彼女は決して無視する事はできなかった。  
視線が鋭くなるのを止められず、常人ならば萎縮するような鋭さを  
込めて緋織は徹を睨む。  
しかしそれをあっさりと受け流しながら、徹は再び嘆息を零してい  
た。

「どういう……意味ですか？」

「お前がそういう風になっちまう事に気付いてなかったって事だよ。  
ったく、出てくなら女へのフォローぐらいして行けってんだ」

「私は……ッ！」

「あの頃と、涼二の奴がいた頃と同じように出来ると、本当にそう言えるのか？」

「……！」

言い返せず、緋織は言葉を詰まらせる。

以前は、涼二の事を考えて物思いに耽るような事はなかったからだ。彼の事を、ずっと信じていた。共に同じ戦場を駆け続ける事が出来ると、緋織はそう信じて疑わなかった。

けれど、それは幻想でしかなかったのだ。

氷室涼二はユグドラシルを去り、緋織は彼の後釜のように今の立場へと収まった。

涼二に言わせれば、始祖ルーンもちである緋織はいずれこの位置に来ていたという事ではあったのだが、緋織にとってみれば涼二は永遠に自分の上官だったのだ。

「……貴方は」

「ん？」

「貴方は、何か知っていますのですか？ 先任が失踪した事、その理由でも何でも」

「知らん。理由を知ってて、大した理由じゃなかったんなら、探し出してぶん殴ってる所だ」

当然であると胸を張りながら言い放つ徹に、若干の期待を外されて、緋織は思わず視線を伏せる。

胸の中で、何かもやもやしたものが立ち込め続けていたのだ。

振り払いたいと願っても、決して逃れる事ができない不安のような

もの。

以前の自分がどんな存在であったか　　今の緋織は、それを思い出せないままだった。

「……つたく」

徹の嘆息。そして、それを掻き消すかのように、エレベーターが到着の音を響かせる。

問いたい事はあったが、口に出す機会を失い、緋織は開いてゆく扉へと視線を向けた。

その先にあるのは大きい扉。本来なら最高級のセキュリティが施されているそれは、今日に限っては大きく開け放たれたままだった。

そんな様子に、緋織も徹も思わず呆れを交えた吐息を吐き出す。誰がこれをやったのか、心当たりがあったからだ。

「お兄様！　それに、緋織も！」

鈴を鳴らすような美しい声音。

それを聞き、二人は扉の奥へと視線を向けた。

否、正確には、その先に存在している黄金の輝きへ。

光り輝くプラチナブロンドと、ただただ希望に輝く金の瞳。

その鮮やかさを際立たせるように、彼女の服装は白に包まれていた。ワンピースの上からブレザーを羽織、落ち着いた様相を見せる彼女

大神美汐は、しかしそんなお嬢様然とした服装には似合わぬ明るさで、声を上げながら二人の方へと駆け寄ってくる。

「この所会いに来てくれなかったから、寂しかったんだよ？」

「あ、ええと……その、済みません、美汐様」

「む……呼び捨てで呼んでってば！」

「え、ええと……」

眉根を寄せながら口元を引き攣らせ、緋織は横目でちらりと美汐のさらに奥　大きな机に着いている大神槍悟へと視線を向ける。挨拶も出来ぬままで失礼に当たってしまうのは確かだが、美汐も無視する事はできなかったのだ。

とりあえず怒っていないかどうかを確かめようとして、槍悟が和やかな笑みを浮かべているのに気付き、緋織はほっと安堵の息を吐く。

「その、今日は大切な話があってここに呼ばれたので

「あ、そうだった！」

何かと扱いやすい部分に思わず苦笑を漏らしながらも、緋織と徹は部屋の中へと進んでゆく。

そして槍悟の正面に立ち、深く頭を下げながら声を上げた。

「レイヴァーティン《災いの枝》、磨戸緋織。参上いたしました」

「ミヨル《雷神の槌》、大神徹。参上しました」

「うむ、ご苦労」

低く響くような声に、二人は頭を上げる。

灰色の髪ディザスターの男性、大神槍悟。その強大なプラーナは、災害級の能力者すら波動だけで圧倒してしまうほどの力を持つ。自身の力に意識を集中させてその圧力に耐えながら、緋織は彼へと向けて声を上げた。

「本日は、どのようなご用件でしょうか？」

「うむ。貴公は既に聞いているとは思いますが……例の、オペラに関してだ」

「はい。その任務ならば、こちらも把握しております」

任務、という物言いに対し、徹が若干の苦笑を漏らす。

しかし死角であり、そして槍悟も表情を変える事はなかった為、緋織がそれに気付く事はなかった。

槍悟は彼女の言葉に頷き

「少々、問題が発生してしまったのだよ、《災いの枝》レイヴァーティン」  
「っ!?!? ……相談役ですか」

いつの間に現れていたのか 槍悟の横に、一人の男が立っていた。  
路野沢一樹カズキ。総帥の相談役と言う、一般的に考えれば意味不明な立ち位置にある存在。

神出鬼没で何を考えているのかも分からず、しかも《予言の巫女》ヴォルヴァという始祖ルーン能力者を個人で所有する事を許されている。緋織は、彼の事がどうにも苦手だった。

路野沢も、緋織が態度を硬くした事に気づいている しかし口

元に浮かんだ軽薄な笑みは変わらず、彼は同じような調子で声を上げた。

「実は、一つ予言が下されてね」

「予言……美汐様や私に関わる事ですか？」

「だと思いが、ね。君も知っているとは思いが、《予言の巫女》<sup>ヴォルヴァ</sup>の予言は酷く抽象的でね。僕としても、彼女は一体どのような方法で能力を使っているのかは知りたい所ではあるのだが

「御託はいい、さつさとどんな予言だったのか教える」

焦れた様子で、徹はそう口にする。

その予言の内容に拳がっているのが美汐の可能性があるという点も不機嫌の原因であるが、彼もまた路野沢の事を気に入っていない人間の一人と言う事だった。

しかし、そんな神話級<sup>フェアブラ</sup>の能力者による威嚇もものともせず、口の端に笑みを浮かべたまま路野沢は声を上げる。

「『古の英雄は歌劇となりて紡がれる。英雄の名、炎の壁に眠りし者、銀月の槍に貫かれん』と、言う事だよ」

「直接言われたって分からねえよ！ 解読したのを言え、解読したのを！」

「落ち着け、徹」

食って掛かるうとした徹を、槍悟の言葉が押し留める。

流石の徹も父の言葉には逆らえず、ぐつと言葉を詰まらせて引き下がった。



路野沢の表情は相変わらず　　しかし元々の表情の時点どこか嘲笑にも似たものであった為、徹の拳は抑えきれぬ怒りに震えていた。

「ふむ。では、分かり易く説明するでしょう。次期総帥殿が此度参加する歌劇は、知つての通り『ニーベルングの指輪』。

古の英雄譚と言う事だ。これが、《ヴォルズング・サガ光輝なる英雄譚》の異名を持つ次期総帥殿を指しているのは自明の理ではないかな？」

「……それでは、オペラの日に美汐様が何者かに狙われると？」

「そういう事になるのでは無いかと、僕は踏んでいるのだがね……今の話を聞いて、君はどう思うのかな？」

「……私の任務は、元より美汐様の護衛です。やる事に変わりはありません」

「成程、何かを変える訳ではないと　　しかしそれでは、予言を覆す事は不可能なのではないかな？」

変わらぬ表情で、路野沢はそう口にする。

どこか嘲っているようにも感じられるその言葉に、緋織は反論の言葉を見失っていた。

変える意志がなければ、予言の内容を変える事は出来ない。

「あまり苛めるものでは無いぞ、一樹」

「おや、心外だね槍悟。僕は事実を口にはしているだけだが？」

「時として事実は人を傷つけるものだろう……それに、対策を講じぬ訳ではないし、こうして危険を予め知っておくだけでも変わるものだ。

無論、私としては中止しておきたい所なのだが　　」

「ダメだよ、お父様！」

「このように、既にやる気になってしまっているのでは」

苦笑交じりに、槍悟はそう口にする。

そしてそれに同調するかのように、美汐は胸を張って堂々と声を上げた。

「能力者に対するイメージアップは絶対に必要な事でしょうか？ 今後のユグドラシルの為ってだけじゃない、この国の為にも必要な事だもの。だから、次期総帥として私が頑張らないと！」

「しかし美汐様、《予言の巫女》<sup>ヴォルヴア</sup>が予言した事である以上、そのままなのは危険が

「大丈夫だよ、私は緋織の事を信じてるもの。絶対に護ってくれるって！」

満面の笑顔で言い放たれたその言葉に反論できず、緋織は深々と嘆息する。

そのまま視線を元に戻せば、いつの間にか先ほどまでの穏やかな気配を消した槍悟がそこにいた。

響くプラーナの波動は強大で、押し潰されそうなその圧力に、緋織は思わず息を飲む。

「では、《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>。貴公に、《光輝なる英雄譚》<sup>ヴォルスング・サガ</sup>の護衛任務を言い渡す。ムスペルヘイムの動員数も増加させる……上手くやりたまえ」

「この身に代えても」

敬礼と共にそう返答し、緋織は覚悟を改める。  
しかしその隣で、徹は不満そうに眉根を寄せながら声を上げた。

「おい、親父。俺はどうするんだよ？」

「お前は、既に《フレキ》で任務が入っているだろう……本来ならお前達の仕事ではあるが、司法局との衝突は避けるべきだ。それゆえに、ムスペルヘイムを動かしたのだぞ？」

「ちっ……クソ、そういう事かよ」

不満そうに舌打ちしながらも、槍悟の言葉を否定するような事は無い。

徹もまた、己の仕事の重要性をしっかりと理解しているのだ。  
そんな彼の様子を見て、槍悟は小さく口元を綻ばせる。

「では、頼んだぞ」

「はい、了解しました」

「……よし、話し合いは終わりだね！ それじゃあ緋織、オペラの打ち合わせとか練習とか、色々あるよ！」

「み、美汐様……」

話し合いが終わったと見るや、美汐は歓声を上げて緋織の手を取る。

まだ退出の許可を得ておらず、しかし美汐の手を振り払う事も出来ない緋織は、視線を右往左往させたまま部屋の外へと連れ出されて

いった。

先ほどとは若干違う色の笑みを浮かべる路野沢に気付かないまま。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

緋織達が話している部屋の外。

彼女達の相談が終わる少し前、そこには一人の少年が壁を背にするようにしながら立っていた。

閉じられた両の瞳、男にしては若干長く伸びている黒髪。

そんな少年は、気配を殺したまま部屋の中の言葉を盗み聞きしていたのだ。

(……銀月の、槍)

彼は、そう胸中で呟く。

開ける事のない瞳の奥で、何かの決意を定めるように。  
そこにあるのは、酷く冷たい感情だった。

彼は、ふと誰かに見られているような感覚に顔を上げる。

「……」

見えはしない。けれど、その気配には心当たりがあった。

部屋の中で話しているはずの、軽薄なあつ男。

そんな人物からもたらされた予言は、ある種天啓のように少年の胸に響いていたのだ。

もしかしたら　と。

「……僕、は」

思わず口に出しそうになり、彼は口を噤む。

そして話し合いが終わるような気配を感じ、踵を返してその場から去って行った。

彼の名は、大神白貴しらい。大神美汐みしほの、血の繋がった弟だった。



「ふッ！」  
「……っ！」

適度に勢いを抑えた拳が、添えられた手によって逸らされる。

涼二はその腕を掴まれる前に拳を払うと、今度は左足を大きく旋回させた回し蹴りを放った。

対し、向かってくるそれを見つめていた雨音は、半歩後退してギリギリの間合いでそれを回避する。

それを見て、涼二は思わず感心に目を見開いていた。

（頭がいいだけじゃない、運動神経もかなりのものだ。それに、目も悪くない……本当に、軟禁されてたのが惜しい奴だな）

ガルムによって雨音に施された護身術は、あまり始めてから時間が経っていないにもかかわらず、ある程度手加減した状態の涼二と打ち合えるほどまで成長していた。

涼二としては、動きやすいジャージに着替え、さらに髪を縛っている雨音の姿は少々新鮮ではあったが、そこは気にせず軽い組み手を続けてゆく。

（合気道、か。強化人間としての身体能力もあるし、もう少し攻撃の出来る格闘技でもよかつたんだろうが……まあ、雨音らしいと言えはその通りかもしれないな）

攻撃をいなし、躲すか反撃を放つその体の動かし方は、ガルムが得意とするものでもある。

本来は受け流した後に必殺の攻撃を打つのがガルムの戦い方ではあるが、雨音はあくまで護身の為の格闘術のつもりなのか、あまり反撃を繰り出す事はなかった。

Sのルーンを持つ雨音らしいと言えはその通りであり、思わず納得して涼二は苦笑を漏らしていた。

ニヴルヘイムにいる人間としてはあまり似合わない考え方ではあるが、彼女は極力人を傷つけない事を望んでいたのだ。

「よっと」

「きゃっ！？」

涼二は裏拳を放つと見せかけて身体を沈め、足払いを放つ。

駆け引きに関してはまだまだ素人な雨音はそれにあっさりと引つか



かり、バランスを崩して転倒しかけた所を涼二によって支えられた。息を吐き出し、雨音の身体を元通りに立たせ、涼二は小さく笑みを浮かべる。

「ま、こんな所だろ。反省点はガルムに聞いて来い」

「はい。ありがとうございます、涼二様」

行儀良くペこりと頭を下げる雨音に、涼二は小さく苦笑を浮かべながらヒラヒラと手を振った。

彼女はそのまま踵を返し、はなれた場所で観察していたガルムのほうへと走って行く。

その背中を見送り、涼二は近くに置いてあったスポーツドリンクを持ち上げた。

蓋を開けて喉を潤しつつ、ほっと息を吐く。

息が乱れるほどではない　涼二にとってみれば、雨音との組み合わせは軽いジョギング程度のものであった。

無論、強化処理によって人並み外れた体力を誇る雨音にとってもそれは同じであろうが

(いきなり強度を上げて、付いては来れないだろうからなあ)

苦笑し、涼二は先ほどの組み手の内容を思い浮かべる。

雨音は確かに身体を動かす事は出来ていたが、結局はそこまでなのだ。

まだ戦いにおける駆け引きなどは全く理解していないし、付け焼刃以上のものにはなりようがない。

元より、護身目的でしかない以上は、使う機会が無い方が良いのだが。と、ぼんやりと雨音の背中を見つめていた涼二に、横から声がかかった。

「お疲れ、涼二」

「ん……何だ、見てたのか」

スリスに投げ渡されたタオルを受け取りつつ、涼二は口元に笑みを浮かべる。

彼女もまたそれに応えるように笑みを浮かべ、声を上げる。

「雨音ちゃん、凄いでしょ？」

「ああ、確かに。まだ始めたばかりなのにこの完成度か」

確かな感心を交え、涼二は頷く。今は無理でも、一年もすれば十分な戦闘技能者として通用するようになるだろう。

それほどまでに、雨音の学習能力は凄まじいものであった。教えるのがガラムである以上、かなり実戦的な技術を教わる事が可能である為、いずれは涼二に着いて来る事も可能になるだろう。

(……連れて行きはしねえけどな)

胸中で呟き、飲み干したスポーツドリンクのボトルを放り投げる。回転しながら弧を描くように宙を舞ったボトルは、狙いを外す事無くくずかごの中へと直行した。それを視線で追ったスリスは、軽く口笛を吹く。

「お見事」

「まあ、能力で補正したしな……それで、何か用か？」

「んー？ 何で用があるって思ったの？」

「お前は別に格闘になんて興味ないだろう」

スリスは基本的に、ガルトムや涼二の組み手の様子などを見に来る事は無い。

そもそも、見に来る必要がないからだ。室内の監視カメラにアクセスし、どんな場所からでも涼二達の様子を観察する事が可能なのである。

そんな彼女が姿を現すのは、直接話したい事柄があるからに他ならない。

そこまで胸中で考え、涼二は気付かれぬように小さく肩を竦めた。

このタイミングで話したい事など、あの事柄しかないからだ。

「ねえ涼二、オペラ見に行かないの？」

「……お前な、俺の事情を分かかって言ってるんだろ」

「まあそりゃ、ボクは涼二の事で知らない事なんてないよ」

堂々と、ストーカーまがいの事を言い放つスリスに、涼二は思わず嘆息する。

あながち間違いでもない辺りに頬を引き攣らせながらも、涼二は肩を竦めつつも返した。

「確かに、姫さんが言っていたのは間違いじゃない。あいつ等の面を見たいって気持ちは、確かにあるさ」

「じゃあ、どうして行かないの？」

「いや、分かりきってるだろ……って言うか、お前こそ止めないのか？」

少々意外に感じ、首を傾げる。

そんな涼二の仕草に、スリスは小さく笑みを浮かべていた。

光の宿らぬ瞳には、どこか面白がるような色を輝かせながら。

「そりゃあね。涼二がやりたいんなら、ボクが反対する理由は無だよ。第一、涼二が恨みを抱く相手でないんなら、ボクがどうこう言うつもりも無いしね」

「……そうかい」

嘘だ　と、涼二は言葉には出さずそう呟く。

幼い頃から植えつけられ続けてきたスリスの憎しみは、並大抵のものではない。

涼二と言うストッパーが存在しなければ、どれほど残忍な方法でも取れる存在なのだ。

交通システムを掌握してあらゆる事故を引き起こす事も、空を飛ぶ飛行機を操って地上へ墜落させる事も、スリスにとっては思いのままなのだから。

今この瞬間にその気になれば、地上を火の海に変える事すら容易い。光を奪った研究者達が憎い、それらを操っていた存在が憎い、そんな研究を許していた者達が憎い、そんな事をしていた組織の全てが憎い。スリスの中で燻る憎悪は、決して軽いものではないのだ。

「とにかく、気になるんでしょ？ だったら見に行けばいいのに」「あんな、そもそもあいつ等に俺の姿を見られる訳には行かないだろうが。下手な変装じゃ一目で気付くぞ」「何のお話ですか？」

ふと掛けられた声に涼二は振り向く。

そこにいたのは、同じように首にタオルをかけた雨音と、その後ろに立つガルムの姿だった。

若干苦笑じみた表情を浮かべているガルムに半眼を向けつつ、涼二は深々と嘆息を漏らす。

「一応、少し話したとは思いますが……例のオペラの話、あそこに俺の知り合いが出るんだよ」

「はい。確か、指揮者と歌手の方の」

「磨戸緋織と、大神美汐。どちらも、ユグドラシル時代に友人だった人間だ」

そう告げ、涼二は雨音から視線を外して虚空を見上げる。

彼が思い起こすのは、かつてユグドラシルで戦っていた日々の事だ。戦う事に疑問を持たず、自分が従っている相手が誰なのかも知らずに、ただただ戦場を駆けていた日々。度し難いそれを涼二が穩

やかに思い返す事が出来るのは、認め合った友人がいた為である。例え偽りに満ちた戦いの日々であったとしても、彼等と過ごした穏やかな休息を、涼二は確かに大切なものであると認識していた。

「あいつ等の事は、確かに気になる。だが、顔を殆ど知られていないお前達はともかく、有名すぎる俺は見られる訳には行かない。だから、行くかどうか迷っていた……そういう話だ」  
「成程……」

納得したように頷き、雨音はそう小さく声を上げる。

そんな彼女の様子に、また予想外の言動が飛び出すかと涼二は構えていたが、生憎と彼女の口から飛び出してきたのは至極真つ当な台詞だった。

「大切な方々だったのですね」  
「いや、それは……まあ、否定は出来ないか。緋織は五年以上に渡って先輩後輩、或いは上司と部下をやった間柄だったし、立場に関係なく放しにかけてくる美汐も気に入ってはいたさ」

まあ、美汐の印象に関しては、Gゲーボの始祖ルーンによる影響が含まれていたんだろうけどな、と涼二は胸中で苦笑する。

美汐の持つGゲーボのルーンは、意識して発動せずとも常にある程度の効力を発揮している。

その力は劇的ではないものの強力で、基本的に初対面でも彼女に不の感情を持てる者は存在しない。

一応ながら始祖ルーンを持っていた涼二は、その影響をある程度抑

えられていたのだが、それらを差し引いたとしても彼女自身が好ましい人間であるとは感じていたのだ。

「会って話をする事は？」

「……まあ、安全策を講じた上で話す事は不可能じゃないとは思いますが、どの面下げて会いに行けばいいか分からなくなてな。それに、あいつ等は何が何でも俺の事を捕まえようとしてくるだろうし、皆にも迷惑を掛ける事になる」

「私としても、それには同感だな。リスクが大きすぎる割に、リターンが小さいのだからな」

「ボクもそう思うけど……」

若干不満そうな表情を浮かべ、スリスは唇を尖らせる。

彼女にとっては涼二の願いこそが全てであり、涼二の希望を叶えられるならある程度のリスクを冒す事は覚悟している。

そんな彼女の事を理解しているからこそ、涼二は小さく嘆息しつつ声を上げた。

「いいんだ、覚悟していた事だからな。決別も無しに復讐が出来るとは思っていないさ。いずれは戦う相手だしな」

緋織も美汐も、ユグドラシルから離れるような事はありえない。

彼女達は、あの組織を担ってゆく次の世代なのだから。

涼二にとっての復讐の対象とは、ユグドラシルという組織そのものではない。

独裁的な在り方は反発を得やすいものではあるが、混乱している情

勢である今の日本では、むしろ独裁という形の方が上手く国を取り纏める事が出来る。

故に、涼二はユグドラシルそのものは必要であると考えていた。

涼二が復讐の対象としているのは、あくまでも姉を殺した人物ただ一人。

自分の復讐の為に国全体を巻き込もうとするほど、彼は手段を選ばない訳ではなかった。

「…………ふむ」

涼二の様子を見つめ、ガルムは小さく呟く。

観察するようなその視線は、確かに涼二の内心を垣間見ているようではあった。

ガルムにとっての復讐は、ユグドラシルというよりもドヴェルクに対して向けられているようなものであった。

正確に言うならば、そのドヴェルクに指示を出していた人間と云うべきか。

彼もまた、ユグドラシルと言う組織全体に恨みを持っている訳ではなく、またユグドラシルがこの国にとって必要であると言う事を理解できるだけの理性を持っていた。

故に、磨戸緋織と大神美汐の両名に対しては、良くも悪くも思い入れがある訳ではない。

その為、ガルムは冷静に現状を分析する事ができていた。

「そつだな……………そこで今回の件、と言う訳か」

「ガルム様？」



「ガルム？ 一体、何の事だ？」  
「いやなに、確かに涼二の言う通り、そのお嬢さんたちと顔を合わせる事はどうしても控えねばならないのは事実。  
しかし、涼二のモチベーションを上げる意味を兼ねて、彼女達の顔を見るぐらいはしても良いのではないか？」

それが、ガルムの出した結論であった。

そんな彼の言葉に、自分の感情的な部分が喜びを感じている事に苦笑しながら、涼二は小さく肩を竦める。

確かに、彼女達に合いたいのは事実。だが、その為のリスクが大きすぎるのだ。

涼二としては、それをしっかりと理解しているはずのガルムやシアが、何故そんな事を言い出したのが気になっていた。

明らかに、自分達にとって致命的な事態となりかねない行為なのだから。

「あのな、ガルム。だから顔を見せる事自体が危険なんだって何度も言ってるだろ」

「遠くから見ているだけなのですし、気付かれないのでは？」

「万が一って事もあるだろ。第一、ユグドラシルの関係者なら俺の顔を知っていたとしてもおかしくないだろ」

ガルムやスリスもユグドラシルと関係が無かった訳ではないが、ガルムは既に死亡扱いされており、スリスも実験体として扱われていた時代とは人相が少々変わっている。

しかし、かつてムスペルヘイムの隊長であった涼二は、件の二人以外にも顔見知りは無数にいるのだ。

と　　そんな時、スリスは何かを思いついたかのようにぽんと手を打った。

「あー、成程。おっちゃん、そういう事考えてたんだ」

「うむ。ちょうど雨音君もいる事だしな」

「私ですか？」

「……何でそこで雨音が出てくるんだ？」

理解している二人と、何が何だか分からない二人。

雨音はそれほど気にはいかなかったが、二人のどこかニヤついた視線に眉を潜め、涼二は問いただす為に声を上げようとする

その、瞬間。

「ああ、ここにいましたのね」

「ん、鉄森か。何か用か？」

「ええ、衣装の事で少し相談をと思ひまして」

「衣装？」

その言葉に涼二は首を傾げた。突如背後で響いた音に振り返った。

見れば、そこは背を向けたスリスが肩を震わせている。どうやら、今のは彼女が吹き出した音であつたらしい。

「……何だよ、スリス」

「い、いや……ぶぶ。多分行けばわかると思うよ、うん」

「行けば？」

「ええ。用意してありますから、早く来てくださいな」

「いや、つて言うか俺はまだそこに行くとした決めた訳じゃ って

おいガルス、押すな！」

「往生際が悪いぞ、涼二。大丈夫だ、バレない方法があるのだから  
な」

自信満々に言うガルスに、涼二は思わず首を傾げる。

そしてその視線をスリスへと向けるが、彼女は呼び寄せた雨音に対して耳打ちをしている所だった。

状況が分からず、されるがままに涼二は連れ出されてゆく。

話を聞いた雨音が、妙にニコニコした笑みを浮かべている  
のを不安げに見つめながら。



「……アンタさ、コレを一体どうするつもりな訳？」

「オイオイ、人が折角苦労して取ってきたのに、酷え言い草だな」

「酷いのはアンタの頭の方よ」

密都に建つ高層マンションの一つ。

その中間辺りの階層、弱いライトで照らされた薄暗い部屋の中には、一組の男女が低いテーブルを間に向かい合っていた。

一人は、手に書類を持っている女性。彼女は眠そうな半眼に不機嫌な色を宿し、どこか険の籠った声を上げている。

青空と曇り空の中間とでも言うべき、青みのかかった銀髪と、水色の瞳。

分かりやすい能力者の外見をした彼女は、手に持った書類をヒラヒラと振りながら声を上げる。

「確かにこれは、『グレイプニル』に関する最新のレポートだね。研究者としては、非常に価値の高い資料ね」

「お前にとっても美味しい資料ってトコだろよ？」

「そうね、その点に関しては評価してやってもいいわ」

明らかに年上であろう女性に対しているのは、皮肉った笑みを浮かべる青年。

鉾のついたジャケットに、冬にもかかわらず胸元を開けたスタイル。そして何よりも目を引く、首に嵌められた大仰な首輪

かみおいつか  
上狼塚

双雅そらの姿が、そこにあった。

彼は笑みを消さぬまま、わざとらしく肩を竦めつつ声を上げる。

「つつてもよオ、俺にはソイツの内容なんて分からねエんだし？」

「……アンタ、本当にそいつを外す気があるんでしょうね？」

「あるに決まってるだろオがよ」

ニヤついた表情を消さぬまま、双雅は首輪 『グレイプニル』を撫でる。

それは、彼の力を封じると共に彼の命を護ってきたもの。

双雅としてもそれには感謝しているし、この首輪に対して愛着が存在しないと言う訳ではなかった。

しかし

「いい加減、暴れなくなってきたな。そこらのチンピラじゃ喰い足りなくなってきた所だったんだよ。だから、いい加減こいつを外し

ちまいたい」

「はあ……あ、そ。アンタの感情なんかどうでもいいけど、現時点じゃそれ、外す手段なんて無いわよ？」

「現時点じゃ、ねエ」

にやりと、口の端を笑みに歪め、双雅はそう口にする。

そんな彼の言葉に対し、女性は不快そうに表情を歪めていた。上狼塚双雅という男は、決して頭が言い訳では無い。けれど、物事を察する勘のような物は優れていた。

そう　　あたかも、獣の本能であるかのように。

「……そうね、外す方法が無い訳じゃない。前まで確信はなかったけど、この資料のおかげでそれを得られたわ」

「へエ……で、その方法ってのは？ さっさと教えてくれよな、スヴィティさんよ」

「……アンタ、本当に一々偉そうよね」

双雅の言葉に顔を顰め、空色の女性　　スヴィティ・リユング

は深々と嘆息を漏らしていた。

彼女はかつてユグドラシルから双雅を逃がした存在であり、彼の首にその『グレイプニル』を嵌めた張本人でもある。

スヴィティは、あの頃の己の判断が間違いであったとは思っていない。

けれど、天涯孤独となった彼の育て方を間違えてしまった事だけはしっかりと自覚していた。

大半は、孤児院に押し付けていたのではあるが。

(ハア……アタシには、子育ての才能は無いって所かしらね)

指先にくるくると前髪を絡め、スヴィティは嘆息を漏らす。

彼女は、決して己の判断を後悔していない。けれど、双雅の事を見守り続けられなかった事は失敗だと思っていた。

親友だと言う二人の友人を得られた事は、スヴィティとしても喜ばしい事ではあったが　彼は結局、人間らしい生活を得る事は出来ていない。

闇の世界で、血と泥に塗れて、奪い合う生活を続けている。

それは、スヴィティの願い　脅威として排除されることなく、人として生きて欲しいと言う願いに反していた。

親の心子知らず。故にスヴィティは、彼の『グレイプニル』を外す事に対して反対していたのだ。  
しかし

(そういう訳にもいかない、か)

双雅は、既に独断でユグドラシルの関連施設に手を出してしまった。

その時、その施設は既に何者かの襲撃を受けていたとはいえ、顔も隠さぬままぶらりと現れて、何人かを殺害した後に資料を奪って逃亡。

大々的に指名手配するような事は難しいが、それにしたとしてもユグドラシルに目を付けられてしまった可能性はある。

そうなれば、力を封じられたままの双雅に逃げる術など存在しない。スヴィティは、再び憂鬱な溜め息を吐き出した。



「……まず順当な方法として、だけど」

「おう、どうすんだ？」

「アンタの『グレイプニル』は、フェアブラ神話級の能力者を素材として作られた最高級の物よ。つまり、正規の手段で外すのはかなり難しい」

双雅の『グレイプニル』は十年以上に作られた物で、当時重大な犯罪を犯した能力者のルーンによって作られている。

その能力は最高位、即ちフェアブラ神話級の能力者であった。

『グレイプニル』を外す為には、その元となった能力者以上の能力強度、およびプラーナ量の力でスリサズThのルーンを上書きしなくてはならない。

「当初、プラーナの研究はまだ完全に進んでた訳じゃなかったから、元になった人間が具体的にどれぐらいの力を持っていたかは分からない。

つまり、アンタの『グレイプニル』を確実に解除する為には、かなり高位のスリサズThの能力者が必要になる」

「……フェアブラ神話級で、さらに上位ねえ」

双雅が猜疑的な声音を発する。

その言葉の中には、言外に『どうやって探すんだ』といった感情が見え隠れしていた。

それを読み取り、スヴィティもまた同じように眉根を寄せる。

それほどまでに高位の能力者は、殆どがユグドラシルによって押さえられてしまっている。

しかも、その中でたった一つのルーンのみを狙いを絞らなくてはならないのだ。ユグドラシルのデータベースにでもハッキングをしなければ、そんな情報は手に入らない。

「……だからまあ、正規手段としてせめて現実性があるのは、スリサスThの始祖ルーン能力者を探す事」

「一応、ソイツはユグドラシルに所属してはいないんだったか？」  
「その代わり、何処にいるかも分からないけどね」

そう言い放ち、スヴィティは肩を竦める。

始祖ルーン能力者は、その全てがユグドラシルによって捕捉されている訳ではない。

一部行方不明となっている能力者が存在するのだ。  
スリサスThの能力者もその一人　その存在は、完全に闇に包まれている。

「現状やれねエんだつたら意味ねエだろ？」

「ま、そうね……実行可能だつたら確実に行けるけど、こうなると流石にね」

この状況では、悠長にスリサスThの始祖ルーン能力者を探す事は出来ない。  
そして偶然に任せていられるほど、スヴィティは楽観的な思考を持ち合わせてはいなかった。

結果、もう一つ　スヴィティとしては、こちら現実にない　の内容を口にする。

「となると……もう一つの案よ」

「おう、あると思ってたぜ」

にやりとした笑みと共に、双雅はそう告げる。

そこに籠っている信頼に対し、思わず嬉しく思ってしまう自分を自覚して、スヴィティは呆れの嘲笑を吐き出していた。

親心など、自分には似合わない　と。

「おい、何ニヤついてんだよ？」

「ああ、ゴメンなさいね。もう一つの案もう一つの案……と、ああ、あつたあつた。これよ」

「あん？」

書類の束を捲り、スヴィティは一枚の資料を取り出して机の上に滑らせた。

ちょうど双雅の目の前で止まったそれに書かれていたのは、一人の能力者に関する資料。

それを視て、双雅は訝しげに眉根を寄せる。

「ンだよ、コイツは？」

「渡してるんだからしっかり読みなさい、このバカ。そいつの能力　　って言うか、ファンクションの所よ」

「ん……ッ?!　おい、マジかよこれ」

「驚いた事に、マジらしいわね」

最早驚きの境地を通り越したスヴィティは、ヒラヒラと手を振りながら背もたれに身体を預ける。

その書類に帰されていたのは、一人の少年に関する記録。

有する能力は、エイワズイサ E、ベルカナ I、ベルカナ B。

ユグドラシルによって与えられているコードネームは

「《トルイド古木の魔術師》      ファンクションは、他者の能力のキャンセル、か」

「最初に見た時は我が目を疑ったわよ。一体どんな発想で、そんな能力を使えるようになったんだか」

エイワズ Eによって作成した樹木を他の能力へ干渉するための媒介とし、ベルカナ B、ベルカナ Iの力でプレーナ効率の加速と減速を繰り返す事でプレーナ流の不順を引き起こし、能力を強制停止させる。

記録にはそのように書かれているものの、スヴィティはとてものでは無いが信じられない、と嘆息していた。

複数のルーンを組み合わせたファンクションほどその干渉力が高く、ディザスター使い手も災害級という高位能力者である為、その力は非常に強力である。

双雅から書類を取り返したスヴィティは、その内容へと目を通しながら再び嘆息を零す。

「初見殺しって感じの能力よねえ……下手すりゃ、ファーブラ神話級すらあっさり仕留められるんじゃないの？」

「確かになア……面白いじゃねエか、こいつ」

「アンタの個人的な感想なんて非常にどうでもいいけど、とにかく第二の案がこの少年よ」  
「成程な」

納得した表情で、双雅は頷く。  
能力のキャンセル、という話を聞いて、その案の正体に思い当たったのだ。

その能力で、『グレイプニル』を構成するTihスリサズの力を停止させる  
それが、スヴィティの提示する第二の案。

「実際の所、実験としてその少年の能力が『グレイプニル』を始めとしたルーンによるアイテムを無効化できるかを確かめるみたいだったからね。」

実験はまだ行われていなかったし、まだ确实と言える訳じゃないけど、チャンスが無いって訳でもないわ」  
「ふーん……けどよ、こいつを捕まえる方法があんのか？」

スヴィティの持つ書類をぱちんと指で弾き、双雅は肩を竦める。  
そしてその言葉に対し、スヴィティもまた困ったように額に手を当てていた。

この能力者が民間ならば簡単な話であった。そして、例えユグドラシルの所属だとしても、ただの構成員だったのならば方法が無い訳ではないのだ。

しかし、この少年は

「大神白貴……ユグドラシル総帥の息子だものね……ホント、面倒

な事この上ないわ」

「オンゾーシさんって訳だ。接触する機会なんてあんのか？」

「一応、だけどね……あーもう、優秀なハッカーが欲しくなるわね」

言つて、スヴィティは己の脇に置いてあつたハンドバッグに手を伸ばす。

「ごそごそとその中を探り　取り出したのは、一枚のパンフレットだった。」

表面に描かれているのは、大きなコンサート会場の写真。

そこに描かれている題名を見て、双雅は眉根を寄せていた。

「ああ？　何だそりゃ？」

「コンサートのご案内よ。これの出演者の所、ちょっと見てみなさい」

手首の動きだけで投げ放たれたパンフレットは、ぴつたりと双雅の前に着地する。

彼は訝しげな表情のままそれを受け取り、ぴらぴらと振りながら言われた通りに出演者の欄を探した。

それが記されていたのは、パンフレットのちょうど裏面。

そこに目を通し　双雅は、その目を大きく見開いた。

「おいおい、何だア、こりゃ。バケモノが二匹もいるってのはどういう事だよ？」

「大方、能力者に対するイメージアップの作戦って所じゃないの？　トップクラスの能力者であり、さらに美少女だって言うんだから」

ページを開いた所にある写真には、二人の少女の姿が映されている。

一人は、真紅の髪をした指揮棒を持つ少女。そしてもう一人は、ブラチナブロードを流すドレスを纏った少女。

その類稀なる美貌を否定する事は出来ず、双雅は小さく肩を竦めていた。

けれど、その口元に浮かぶのは嘲笑じみた笑みだ。

「ハッ、バケモノはどう言い繕った所でバケモノだろオよ。カルト的人気を得てどうすんだ？ 力で国を従えてる連中が、そんな事して何になるってんだかなア、オイ」

「アタシに言われたって知らないわよ。平和ボケしたこの国には、そっちの方が性に合ってるって事なんじゃないの？」

「下らねエ話だぜ」

言い放ち、双雅はパンフレットを投げ捨てる。

幼い頃から、物心付いたばかりの頃から、双雅は命を狙われ続けてきた。

彼にとつては力が全てであり、そして同時に、力が忌むべきものであると考えている。

いつそ苛烈なまでの、その考え。

けれど彼は、決して己のすべき事を見失ってはいなかった。

「……で、そのオンゾーシ君がそこに来る可能性は？」

「十分にあるでしょうね。何せ、このお姫様の血の繋がった弟だもの」

組んだ足に肘を突きながら頼杖を突き、スヴィティはその口元に笑みを浮かべる。

大神白貴は、殆ど公の場に姿を現す事はない。ユグドラシル次期総帥たる大神美汐、そして部隊の体調を任されている大神徹はまだしも、何の役目も負っていない彼が姿を見せる理由は無いのだ。

何故大神槍悟の息子たる彼が、高位の能力者であるこの少年が何の役目も負っていないのか　それは、単純だ。

彼は、生まれつき全盲だったのだから。

「なら、どうする?」

「さあ? その子とどう交渉するかはアンタに任せるわ。アタシは、そこまで面倒見切れないもの」

「ああ、それでいいさ。自分の尻拭いは自分です……それぐらい分かってるっての」

からからと、双雅は笑う。

自分が命を落としかねないというのに、全く気にした様子もなく。

そんな彼の様子を見て、スヴィティは少しだけ顔を顰めていた。

けれど、彼女はそれを気付かれない程度に抑えて首を振り、肩を竦める。

「ま、騒ぎにならないように気をつけることね。殆どの意識が舞台の上のお姫様に向いてるって言っても、全く警護がないって訳じゃないでしょうから」



「ああ、分かっているさ。まあ、『グレイプニル』の事は多分知らねえだろうし、外させるだけなら何とかなるだろオよ」

笑みながら、双雅は言い放つ。

その自信は一体何処から来るのか　と、スヴィティは呆れの混じった嘆息を漏らしていた。

けれど、彼を止める事は不可能。その事は、彼女自身が最も強く承知している。

故に、彼女はこう口にしてしまうのだ。

「……ま、ある程度の事なら協力してあげるわよ。感謝しなさい」

「おーおー、感謝してるぜエ、スヴィティさんよ」

「ふん……つたく、可愛くない奴よね、アンタは」

「可愛げのある俺ってのもどオなんだよ？」

「……」

その言葉にスヴィティは虚空を見上げ、想像する。

自分の言う事を素直に聞き、皮肉ではなく普通の笑顔を浮かべる双雅の姿

(……………)

思わず怖気が走り、スヴィティは大仰に肩を震わせ、己の腕を抱いていた。

似合わないにも程がある。

そんな彼女の反応に、言った本人である双雅は微妙に口元を引き攣らせていた。

「自分で言っというてなんだがよ、その反応はどうなんだ、オイ」

「あんたこそ、似合わない事ぐらい分かってんでしょ」

「……まアな」

双雅は苦笑を漏らす。

本当に、全くもって似合わない。

それが自分自身なのだと、知ってしまったのだから。

「さて、と」

パンフレットを拾い上げつつ立ち上がった双雅にスヴェイティは視線を向ける。

さっさと部屋から出てゆこうとするその背中　　彼女は、そこへと言葉を投げ掛けた。

「早速下調べ？」

「ああ、入り込むにも、色々必要なモンはあんだろ？」

忍び込むだけならば難しくは無いが、普段どおりの格好ではあまりにも目立つと言っもの。

その為の準備をすと言い、双雅はさっさとこの部屋を立ち去って

行った。

そして、閉じた扉をぼんやりと見つめる。

スヴェイティは、嘆息す

「ホント、世話が焼ける」

そして、結局放っておけない自分も自分なのだと自覚し、  
彼女はゆっくりと立ち上がったのだった。

かつて、これほどの恥辱を味わった事があっただろうか。広い部屋の中、しかしカーテンの閉じられたそこは、人工的な光にのみ照らされている。

その場所で、ぶるぶると拳を震わせながら、涼二は己を苛む怒りを抑えていた。

ここで取り乱せば、相手の思う壺なのだ。冷静に対処しなければならぬ。冷静に

「出来るかあああああッ！　おい、これは一体どういう事だ！？」

「どういふと言われましても……まあ、見ての通りですわね」

涼二の叫びに対し、シアはただただ冷淡に声を上げる。

彼女が見つめるのは、地団太を踏む涼二の姿。

ただし彼　　と言っべきかは微妙だが　　の姿は普通のそれとは全く異なるものへと変化してしまっていた。長く伸びた、何処となく紫の混じる黒い髪、全体的に丸みを帯びた体の輪郭。少々小柄な青年から、すらりと背の伸びた女性へと　　涼二の体は、全てのルーンを起動した際に現れる女性の姿へと変化していたのだ。

「ああ、ようやく分かったよ、こういう意味が畜生……」  
「ユグドラシルの連中も、涼二のその姿は知らないからねー。っていうか、今になってようやく気付いたんだ」  
「この姿の事は出来るだけ意識しないようにしてるんだよ！」

頭の後ろで手を組んだスリスが、あっけらかんと言い放つ。そんな彼女に対する言葉は非常に苛立ちに満ちたものであったが。今の涼二の姿は、全てのルーンを起動する事によって女性へと変化し、その上でシアの持ってきた女物のスーツを纏っている。むしろ、スーツだからこそ纏っていると言っても過言ではもいだろう。もしもこれでドレスか何かだった場合、涼二は全力で暴れ出していたかもしれない。

「……ああそうだな、コレなら確かに気付かれないだろうさ。ああ気付かれないだろうさ」  
「何かヤケクソだねえ、涼二」  
「喜々として着せやがったお前が言うか!？」

先ほど、スリスは不意打ちで電撃を打ち込んで涼二を痺れさせ、さらに能力による干渉によってその身体を操って、強制的にHとTハカラススリhサズを発動させたのだ。いかな神話級のスリスと言えど、他人の体から能力までを完全に制御するのは難しい。しかし、ルーンを通してプラーナを放出させるだけならば、他人に幻覚を見せる事すら可能な彼女にとってはそれほど難しい話ではなかった。

結果、涼二は痺れた身体のまま女物の服に着替えさせられ、現在に至ると言う訳である。

「ったく……って言うかだな、鉄森。わざわざこんな事せねばならんほど危険な場所なのか？ 俺が出て来なきや護衛が間に合わないって訳じゃないだろ」

「ええ、まあそうですね」

「……つまり、どー言う訳で俺をここまでして連れ出そうとしてるんだ？」

「言つまでもないですわね」

呆れたように、シアは肩を竦めて嘆息する。

彼女はその瞳を半眼にし、息を吐き出しながら声を上げた。

「ガス抜きですわよ、貴方のね」

「ガス抜き、だ？ むしろ余計にストレスが溜まってるぞ、オイ」

頬を引き皺らせ、涼二は呻く。

いくら女性の姿になれるとは言っても、涼二に女装趣味など存在していない。

むしろ女性の姿に変化する事はストレスでしかなく、さらには姉の姿に変化する事で、かつての事件を思い出して憂鬱になってしまうのだ。

しかし、シアはそんな涼二の主張に対し首を横に振る。

「わたくしを舐めているのではないでしょうね？ 貴方とユグドラシルの次期トップ達との関係、知らないとおもいませんか？」

「……だが、それとこれに何の関係がある」

「はあ……悪いですけど、契約中の世話は私が見るようにと路野沢さんに言われているんです。あんまり溜め込まれては、こっちが迷惑ですわ」

そんな彼女の言葉に、涼二は聞こえないように小さく舌打ちする。自分が上手く利用されていると言う事。そこに路野沢が関わっている以上、油断していればあっさりと利用されてしまう。

涼二の半ば睨むような視線を受けつつも、シアは同じように顔を顰めつつ声を上げた。

「あの方は、恐いですわね。貴方達を上手く使えと、そう言っているのですから」

「……本当に、な」

その実力に対する信頼はあるものの、信用する事は決して出来な

い。

路野沢一樹とは、そういう男なのだ。

大仰な様子で肩を落としてつつも、シアは続ける。

「とにかく、気になるのでしょうか？ 復讐を決めたくせに、貴方には切り捨てられないものが多過ぎる。元より、貴方は己の思いを溜め込んでしまふ性質があるようですしね」

「……随分、断言するんだな」

「そりや当たり前でしょ、涼二。大企業のお偉いさんなんだよ、彼女は」

それぐらい出来なきややってられない と、言外にそんな意

志を込めながら、スリスが隣で声を上げる。

その言葉に、涼二は納得しつつシアの姿を眺めていた。

年若い、少女と言う形容しか当てはまらない彼女。その素の姿を幾度も目撃している涼二にとっては、それこそが彼女本来の姿であると印象付けられていた。

けれど、それは正確ではない。少女らしい姿のシアは、あくまでも彼女の一面に過ぎないのだ。

「とにかく、私としては、貴方は彼女達に会った方がいい……そう思っています。それが貴方にとっても、私にとっても利益となりますからね」

「効率主義な事だな」

「ええ、それこそがこの世界で勝ち残るコツですもの」



どこか誇るように、シアはそう口にする。  
それを見て小さく苦笑を浮かべ　　涼二は、長く伸びた髪を掻き上げてから声を上げた。

「はあ……分かった、アンタに従うよ。ただ、直接接触はしない」「ええ。それは、わたくしもリスクが高いと思っておりますから」「別に正面に立っても気付かれやしないと思うけどね」。普通、変化系のルーンも持っていない奴が変身とかすると思わないでしょ」「まあ、それはそうなんだが……」

親友にして幼馴染の、やたらと勘が鋭い青年の姿を思い浮かべ、涼二は嘆息交じりの息を吐き出す。

ああいった人種には、僅かな癖や仕草などで気づかれてしまいかねない。

無論、気をつけていればバレはしない自信が涼二にはあるのだが

流石に、そんなリスクを冒す価値のある話ではない。

と、そこで、並んでいる衣装を漁っていたスリスが声を上げた。

「でもさー、涼二。それとは別に声かけられそうだよねえ」

「あ？ どういう意味だ？」

「だってその格好、護衛には見えないじゃん。私服SPって訳でもなし。雨音ちゃんと並べば、何処に出しても恥ずかしくない美人姉妹　　あ痛たたった!？」

「妙な事を抜かすなこの阿呆」

小さく縮んだ手でスリスの頭を掴み、掌全体で押さえつけるよう

に圧迫する。

その圧力によって響く痛みには悲鳴を上げるスリス。

そんな彼女の頭を掴んでいる涼二は、口元を嗜虐的に歪めながら声を上げた。

「ははははは。おいスリス、何か妙な言葉が聞こえたような気がしたんだが？」

「いやあ、だってその姿雨音ちゃんにそっくり　　痛い、痛いってば！」

「誰が姉妹だ、誰が！俺は男だ！」

「その姿で言ってもまるで説得力は無いですけどね」  
「余計なお世話だ」

スリスの頭を離し、涼二は吐き捨てる。

ころんと地面に転がったスリスは、頭を抱えながら呻いている。

涼二は嘆息しながら視線を外し、自分自身の体へと視線を向けた。

この姿は、涼二の姉である氷室静奈しずなの肉体に似せて構成されている。  
H、Thの始祖ルーンが記憶している元々の主の姿を、Lのルーンラクスが受け皿として受け取っているのだ。

この二つの始祖ルーンを扱う為には氷室静奈の肉体が最も効率が良  
いからだろう、というのが路野沢の見解である。

そして、雨音は静奈の生き写しであると言えるほどに似通った容姿  
を持っている。

つまり

(並んだら、冗談じゃなく姉妹に見えるよなあ、コレ)

自分でもそう思ってしまった、涼二は苦笑を漏らす。流石に、姉と呼ばれるのは勘弁して貰いたかったが、と

「とりゃあっ！」

「っ……！？ お、おい、何してやがる！？」

一人で考えて油断していたのがいけなかったのだろう。

涼二は、背後から飛び掛ってきた存在を回避する事ができなかった。その存在　　スリスは、その両手を涼二の胸へと回し、その二つの果実を揉みしだいている。

「何が女じゃないだろう！ この大きさ、普通に女の子より大きいじゃないか！ 納得行かない！」

「はあ！？ お前、何言ってる」

「ああ、それに関してはわたくしも同意しますわ」

「おい！？」

助け舟を求めようとした涼二は、思いがけずじとつとした半眼を向けられて硬直する。

シアは腕を組むようにしながら己の胸元　　スリスほどでは無いが、若干控えめ　　を押さえ、涼二の姿を恨めしそうに睨んでいた。

涼二からしてみれば、言いがかりもいい所である。

この姿は、決して意識しているものではないのだから。

「お前らな……」

「女の子にも色々あるんだよ。それなのに、不都合な部分だけ完全無視で、いい部分だけ女残してるなんてズルイじゃんか」

「……まあ確かに、生理だの何だのは無いがな」

この姿が作り上げているのは、あくまでも始祖ルーンが必要とする氷室静奈の模倣である。

ルーン達にしてみれば、プラーナの放出方法さえ近ければ問題は無い。

それ故、この女性体は見せかけのようなものでしかないのだ。

生理などは存在しないし、基本的に体の内部は男性の時のそれと変わっていない。

一応ながら、一部は女性特有の臓器なども形成されているが、それも本物とは言い難いものである。

「全く、女になれるのに女心が分からないんだから」

「ああ、それに関しちゃ分かってる事が一つだけある」

「ん？ 何？」

「男には絶対に分からん代物だつて事だ」

嘆息しつつ手を後ろにまわし、スリスの身体を引っ張り上げるようにして引き剥がす。

猫の子供のようにぶら下がったスリスを降ろし、涼二は小さく嘆息した。

女心などと言うものが理解できれば、ユグドラシル時代に苦勞しな

かった　と、そこまで考えて、涼二は再びかつての事を考えてしまっていた事を自覚した。  
思わず自嘲し、頭を抱える。

(……成程、言われるだけの事はあるか)

思った以上に重症だった事に涼二は苦笑した。

幼馴染と戦友だけが心の支えだった時代　そんなモノは、当の昔に過ぎ去ったものだと思っていたというのに。  
姉を失い、穏やかな生活を手に入れて、けれどそこから離れてただ我武者羅に戦おうとして、結局誰かに縋る事でしか立つ事が出来なかった。

そんな中、始めて自分を縋ってきた存在　緋織は、涼二の心の中で大きなスペースを占めていたのだ。  
彼が気付いたのは、つい最近ではあったが。

(……あんな物、見ちまったからな)

かつて、ユグドラシルから抜けた日の事。

追ってきた緋織を打ち倒し、己の心とも決別しようとしたあの瞬間。涼二は、緋織の首にかかる銀の鎖を見てしまったのだ。

あれは、緋織を初めて部下として任務に連れて行った日の帰り、成功の褒美として買い与えた安物のペンダント。  
露天で売っている程度の銀細工であり、とっくの昔に捨てたものだ  
と思っていたそれ。

(あれさえ無ければ、少なくともここまで意識を引つ張られる事も無かっただろうに……上手く行かないもんだな、本当に)

嘆息と共に視線を戻し　涼二は、何やら相談を行っている二人の姿を発見した。

こそこそと話し合うスリスとシアに、嫌な予感を覚えて半眼を作る。しかし、涼二が二人に問いただそうと口を開いたその瞬間、部屋の扉がそれを遮るように開いた。出鼻を挫かれ、鼻白みながら涼二は振り返る。そこには、扉を開けた雨音の姿があった。

「失礼します、涼二様……あら、凜々しいお姿ですね」  
「出来れば男の時に聞きたい台詞だな、それは」

乾いた笑みを浮かべ、涼二はそう口にする。  
女の時に凜々しいと言われても　まあ、その言葉は女性を形容するものかと聞かれれば少々微妙な所ではあるのだが。  
とにかく、と涼二は口を開こうとし

「ほら、雨音ちゃん、お姉ちゃんだよー」  
「ええ。名前は静崎涼子りょうこと言うのはどうでしょうっ？」  
「そのまんま過ぎない？　静崎涼音すずねなんてどうだろうっ？」  
「……おい、お前ら」

低く、地の底から響くような声で　　声質が変わっているので言葉のあやだが　　涼二は、二人に対して呻く。先ほど相談していたのはこの事か、と頬を引き攣らせながら半眼を向ける。そして嘆息し、涼二は雨音の方へと視線を向けた。

「おい雨音、こいつ等の言う事は無視して　　」  
「私に、生き別れの姉が……!?」  
「うおい!?　　思いつきり騙されてんじゃねーよッ!」

口元に手を当てて目を見開き、肩を震わせている雨音に、涼二は反射的にツツコミを入れていた。元々この姿の涼二を見た事があつた筈なのだが、彼女の声は完全に信じているそれだ。このままでは厄介な事になりかねない、と涼二は半ばヤケクソ気味に声を上げる。

「俺だ、俺!　　氷室涼二だ!　　この姿は前にも見ただろ!」  
「そんな男性らしい名前だったのですか……」  
「違つだろっが!?!」

雨音の様子は変わらず、本気で言っているのか冗談なのかの判別がつけづらい。葛藤と共に頭を抱え、涼二は感じ始めた頭痛に呻き声を上げていた。彼はもうオペラを見に行く事を認めてはいるし、雨音の姉の役をやることも別にやぶさかではないと考えている。

けれど、本当に姉にされるのは認めがたい所であった。

とりあえずどうやって全員の頭を冷やしてやるうかと考えながら、涼二はガルムの助け舟がやってくるのをひたすら待っていたのだった。



落ち着かないものだ、と涼二は胸中で一人ごちる。

高級車の車内。所謂リムジンと呼ばれるこの車の内部は、家庭用の車の内部とは訳が違う造りをしていた。

高級な革が張られた座席、通常よりも広く取られたスペース、そして全く揺れる事のない車内。

涼二はそんな車内に雨音と並んで座りながら、ぼんやりと外の様子を眺めていた。女性の姿で。

そんな彼の様子に、シアは呆れたような表情で声を上げる。

「いい加減往生際が悪いですわね……もう着くと言うのに」

「それとこれとは話が別だ。俺は女の格好をして喜ぶような性癖は無い」

「いつそ今から趣味にしてみました？」

「誰がするか」

半眼で吐き捨て、涼二は体を座席に沈める。

その姿は、先日着替えた女性用のスーツである。灰色の上下に、タイトスカートからは黒いストッキングに包まれた足が伸びている。足がスースーして落ち着かなかつたので、涼二としては生まれて初めてストッキングの存在をありがたく思った所であった。

「落ち着け、涼二……いや、今は涼音君と呼ぶべきか？」

「……まあ、人前ではな。俺だって、それ位はしつかり弁えてるさ」

助手席に座っているガルムの言葉に、涼二は肩を竦めながら嘆息する。

実際に、ユグドラシル時代にも潜入の任務が無かった訳ではない。必要に駆られて、年相応の子供として振舞った事もあった。流石に、女性に化けた事は無かったが。

ともあれ、必要さえあれば涼二はどんな役にもなりきる自信はあった。たぶん。恐らく。

「畜生……いいよな、お前は。普通の格好が出来て」

「その分仕事も多いがな。おかげで、スリスも付いてこなかったのだし」

スリスはオペラになど全く興味が無く、おまけにユグドラシルの人間への好印象など皆無なので、大人しく本拠地でオペレータ兼予備人員として待機している。

涼二としても、一緒にいるだけで散々からかわれそうだったので、

そこは助かる所だったのだが。

結果として、このオペラへはスリスと佳奈美を除いた全員　シ

ア、涼二、雨音、ガラム、嵐山の五人が向かっていた。

あまり狭いとは言いがたい車内で己の現状に嘆息しながら、涼二はちらりと横目で二人の少女の様子を観察する。

いつも通り　ただ、いつもよりも若干華やかな着物を纏った雨音。ただし、相変わらず色は青系の落ち着いたものである。

そして、対照的にドレスを纏ったシア。彼女のドレスは、色はともかくデザインはかなりスマートなものとなっている。

彼女も招待された側であり、少々緊張気味な様子ではあったが。

(まあ、変な意図を持って呼ばれたって事は無いだろう)

鉄森シアがユグドラシルに対し敵対にも似た行動をしている事は、今の所バれていない。

涼二が観察していた限り、むしろ彼女はユグドラシル自体への敵対行動と言つより、彼らが秘匿する情報を手に入れる事に集中しているようではあったが。

ともあれ、今回の招待は、それを追及されるような内容ではない。情報の制御は、スリスの最も得意とする分野だ。

「会長、もうすぐ到着します」

「そう、分かりましたわ」

運転する嵐山の声がかかり、沈黙していたシアが口を開く。

緊張している為か、その声は普段よりも若干硬い。対し、あまり己

が緊張していない事に気付き、涼二は小さく苦笑した。  
むしろ、かなり落ち着いている。これからかつて決別  
と した相手を見に行くと言うのに。 しよう

やはり完全には吹っ切れていなかったのだと自覚し、その笑みはどこか自嘲じみたものへと変化する。  
と

「涼二様……ではなく、お姉様。どうかなさいましたか？」

「うん、あー……まあ、向こうじゃ間違えないように」

出来るだけ男らしさが語尾に出ないように気をつけながら、涼二は雨音をそつたしなめる。

一人称と語尾さえ何とかすれば、多少の違和感があったとしても、カッコいい系の女性として見て貰えるだろう。

どちらにしろ、他人と話すような事はまず無いだろうから、あまり意味は無いのだが。

そう結論付け、涼二は小さく肩を竦める。

「で、どうかしたのか？」

「いえ、少し考え事をなさっていたようでしたから」

「ああ……まあ、少し感慨深くてな」

苦笑し、涼二は窓の外に見える劇場へと視線を向ける。

ユグドラシルから離れたのは、秋の始まりごろの話。

僅か数ヶ月程度しか経っていないと言うのに、涼二は随分と長い間顔を見ていなかったような感覚を覚えていたのだ。

「戦う事は、出来る。あいつ等が俺の事を恨んでくれるなら、やりやすいさ」

「そうして、くれるでしょうか？」

「……俺の自惚れでなかったら、あいつ等はまだ俺を恨まないでくれているかもしれないな」

かつての日々を思い起こし、涼二はそう口にする。

決して、簡単に途切れる絆ではなかったと　　そう断言出来てしまっただけに、彼女達と通じ合っていた。

初めからユグドラシルを離れると分かっていたら、涼二がそんな絆を結ぶ事は無かっただろう。

けれど、その絆を後悔する事ができない自分がある事を、涼二は自覚していた。

「まあ、直接対面するにはまだ早い。今の俺達じゃ、奴等には敵わないからな」

「それほど、強いのですか？」

「緋織だけなら……互角だろうが、経験の差で勝てる自信はある。けど、それだけじゃあ、真に討ちたい敵へと届かない。俺達に必要なのは強い仲間か、或いは必殺の機会だ」

真に討ちたいのはただ一人。

けれど、今の状態でそこに辿り着く事は到底不可能だ。

内部からの暗殺でも意味が無い。殺意を持ったまま近くにいれば、人を操る事に特化した彼の男はあつという間に気付き、そして逃げ

道を塞いでしまう。

功を焦るな      その言葉を伝えたのは、路野沢だったが。

「とにかく、今はまだその時じゃない。確実に届く瞬間も、敵の操る攻撃も、それを打ち破る手段も分からない。その瞬間を決して逃さない為に、今は力を蓄えるしかないんだ」

「……」

劇場が近付いてくる。

その光景を真っ直ぐと見つめ、涼二はただその魂の持つ鋭い殺意を研ぎ澄ませていた。

\* \* \* \* \*

「たつのしいたつのしいオペラ」

「……元気ですね、美汐様」

「もう、緋織つてば……二人つきりなんだから、呼び捨てでいいのに」

「いえ、あの」

周囲へと視線を向け、緋織は思わず口元を引き攣らせる。

確かに、周囲に見知った人間はいない。が、それとは別に、オペラの関係者が多数存在しているのだ。

別段、友人同士である事が知られたからと言って問題があるという訳ではないのだが。

「変に勘繰られてしまいます。自重して下さい、美汐様」

「全く、緋織は真面目なんだから」

「美汐様が大雑把過ぎるだけです」

「あ、今のはいつもの緋織みたいな感じだね」

クスクスと笑いながら告げる美汐に、緋織は小さく嘆息していた。全く分かっていない。緋織とて、彼女の『皆と仲良くなりたい』という願い自体は理解しているが、今はそれに気を使っているほどの余裕は無いのだ。

緋織に課せられた任務は、あくまでも美汐の護衛。

彼女の身の安全の確保こそが第一であり、出来るだけ他の事に意識

を割きたくなかったのだ。

「でも、緋織のその格好、見るの久しぶりだね」

「あ……ええ、確かに」

腰を屈め、下から覗き込むようにしながら美汐が笑む。

そんな彼女に若干仰け反りつつも、緋織は首を縦に振っていた。

今の緋織が纏っているのは、黒いスーツのような衣装。オペラ指揮者として緋織が使っていたものだ。

腰の後ろは燕尾となっており、女性というよりは男性向けの服装

タキシードにも見える。

対し、美汐が纏っているのは純白のドレス。これでヴェールが付いていれば、ウエディングドレスにも見えなくはない。

この格好を見た羽衣曰く、『そういう意図があったんじゃないでしょうか?』との事だった。

「美汐様は、緊張しておられないのですか?」

「緊張はしないよ。いつもやってた事だし、それに久々に歌えるのが楽しいんだから」

美汐が演じるのは、『ニーベルングの指輪』においてヒロインとも呼べるブリュンヒルデ。

花嫁と言っならば確かにその通りかもしれない　と、緋織は胸中でそう呟く。

そんな彼女の内心を知ってか知らずか、相変わらず明るい調子を保ったまま、美汐は緋織へと向けて笑いかけた。



「緋織は緊張気味かな？」

「ええ、久しぶりですから……その、少し」

「あはは。まあ、前日は大成功だったって聞いたし、私達も頑張らないとね」

「……余計にプレッシャーをかけないで下さい」

「大丈夫だよ、緋織なら絶対に成功するから」

笑顔で、まるで疑う様子も無く、美汐はそう断言する。

根拠の無い自信であるとも言える。けれども、彼女のこれは絶対なる信頼を元に発せられた言葉だ。

仲間に対する全幅の信頼。決して恐れる事無く仲間の力を信じる心。人を惹き付けるその性質と、惹き付けた人を信頼するその心。それ故、彼女の周りには人が集まるのだ。

心地よい陽だまりのようであり、同時に、迷い道に行く末を指し示す閃光のような存在。

だからこそ、周囲の人間も彼女の信頼に応えようとするのだ。

「……私も、か」

「ん？ どうかした、緋織？」

「いえ、何でもありません……必ず成功させましょう、美汐様。私が、貴方をお守りします」

「ふふ。緋織がいるなら百人力だよ。でも、私だってちゃんと色々練習してるんだから、困った事があつたら言っつてね。私も、緋織を助けるから」

「勿体無いお言葉です、美汐様」

笑顔と共に、緋織はそう口にした。  
彼女の信頼、それに応えたいと。それだけの力をつけてきた己を信じるように。

今の緋織の立ち位置は、涼二によって明け渡されたものに過ぎない。それが自身の実力によって勝ち取ったものであると言う実感が薄かったのだ。  
けれど

（美汐に信じて貰えるなら……そして、そんな美汐を私の力で護り切れたなら）

改めて、今の己を誇る事が出来ると　　ようやく、涼二に対して胸を張る事が出来ると、緋織はそう決意する。  
この任務を、確実に成功させるように、と。

周囲の人々が動き始める。  
どうやら、準備を始めるようだ。

「美汐様、そろそろ」  
「うん、分かってるよ。それじゃ、今日は一緒に頑張ろう」  
「……はい、美汐様」

力強く頷き、緋織は美汐の後に続いて歩いて行った。  
その様子を遠くから見つめる少年の姿に気付かずに。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「おーおーおー、盛り上がってんなア」

普段では絶対に着ないような服装　スーツを身に纏った双雅は、窮屈そうにネクタイを緩めながらそう呟いた。いかに普段のファッションを気に入っている双雅と云えど、こんな場所での服装をするほどトチ狂ってはいない。出来るだけ目立たないように標的に近付き、交渉する。それが、双雅が定める目標だ。

「さてさて？ あのオンゾーシ君は何処にいるのかねエ、っと」

獣のように気配を殺し、双雅は広い会場内を進んでゆく。その姿は堂々としていながら、決して人の印象に残らない。まるで人々の視界の端だけを選んで進んでいるように。まそれは、茂みの中で息を潜め、得物を狙う獣にも似ていた。

(しっかしまア、随分と人が来てるこつて)

半ば呆れを交え、双雅は胸中でそう呟く。

まだ劇場内に入らない人々が周囲に存在しており、彼らは何やら仕事上の話と思われる会話を続けている。

今回のオペラはユグドラシルが主催であり、その関係者には広く招待状が送られていると言う事は、予め調べていた双雅も知っている。社交界にも近い印象を受けるこの場所に、双雅は居心地悪そうに眉根を寄せていた。

(どいつもこいつも……嫌だね、組織の人間って奴は)

基本的に自由を好む双雅である。

何かに縛られて何かを成すと言う事は、彼の性質に合わない行為であった。

けれど、そんな人間がいなければ国が動かないのもまた事実。

自分が生きてゆくだけならば何ら問題は無い。双雅はそう思っ

ているのだが。  
と

「お？」

周囲のざわめきの声を聞き、双雅は周囲に視線を巡らせる。

そこに見えたのは、黒山の人だかりとなっている人々の姿。そんな彼らの隙間から、僅かに紅と金の色が揺れていた。

彼らの奥にいるであろう、見目麗しい二人の少女。

その二人の姿を思い浮かべ、双雅はそんな人々の横を迂回するようにしなから歩き出した。

（あいつらが、涼二がユグドラシル時代に友人だったとか言ってた連中か）

ある日突然様子が変わり始めた幼馴染の姿を思い浮かべ、双雅は小さく嘆息する。

ユグドラシルでやって行けるかどうかの不安やら、向こうで友人を得た事やらを話していたのは遠い昔。

双雅としては、涼二がユグドラシルを抜けたのはありがたい事ではあったのだが。

いずれ戦う事になってしまいかもしれなかったのだし、少なくとも敵にならないのであればやり易い。

「しかしまあ、何があったのかね涼二の奴は

ッ！？」

双雅がそう呟いた刹那　不意に、人垣の中心にいた二人のプ  
ラーナが爆発的に高まった。

思わず息を飲み　　と言つよりも半ば絶句し　　双雅は反射的  
に近くにあつた巨大な観葉植物の影へと隠れる。

そしてその数秒後、人垣を無理やり掻き分けて二人の少女が姿を現  
した。

彼女たちはきよろきよろと周囲を見回し、訝しげに眉根を寄せてい  
る。

「あれー？　確かに『涼二』って聞こえた気がしたんだけどなあ…

…」

「聞き間違いだったのでしょうか？」

「二人で一緒に？　うーん……」

首を傾げながら戻ってゆく二人の姿を隠れながら見つめ、戦々恐  
々と双雅は呟く。

その頬を、ひくひくと引き攣らせながら。

(……あのバカ、お嬢さん方に何しやがったんだ、オイ)

涼二から話を聞いただけでは、単なる異性の友達か、或いは部下  
と言う程度の認識だった。

それが蓋を開けてみれば、尋常ではないほどに執着している。

(名前が微かに聞こえただけでアレって……『涼二』ってのはその  
まで珍しい名前じゃねエだろ)

人違いで同じ事をやらかしているのではないか、などと考えつつ、  
双雅は観葉植物の影から脱出する。

去ってゆく少女たちの背中を嘆息交じりに見送り、双雅は周囲へと  
視線を走らせた。

彼の手に入れた資料によれば、今回の目的 能力キャンセルの  
ファンクションを持つ少年は、あの大神美汐の弟であると言う。  
今回のオペラとは関係ないが、仮にも姉の舞台。VIP待遇で招待  
されている可能性は十分にある。  
この場にいる可能性も

「  
ゴング」

不敵に口の端を釣り上げ、双雅は呟く。

僅かに見えたその姿。学校の制服のような服装をした、黒い髪の少  
年。

先天性視覚障害を患っていると資料にあった筈の彼は、目を閉じて  
いるにもかかわらず、たった一人で危なげなく立っていた。

その閉じられた目の奥に、嫉妬と羨望の気配を隠して美汐  
の姿を見詰めながら。

「……へっ」

双雅は、ただただ愉快そうに笑みを浮かべる。  
それは、普段浮かべている軽薄なものとはまた別　嘲笑するよ  
うでもあり、そして心底賞賛しているようでもあるその表情。  
彼はただ、嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「いいね、さっきの希望に満ちたお嬢さんよりは遥かにマシだぜ、  
坊主」

そつがの獣じみた感覚は、その気配だけで少年の宿す思いを看破  
する。

そして同時に、彼は勝利の確信を得ていた。  
あの少年を手玉に取る事は、酷く簡単である、と

「……さてと、後はチャンスだけって訳だ」

勝機を逃してはならない。  
けれど、その緊張感すらも心地よいと言つかのように、双雅は人ご  
みの中へと姿を消して行った。





現地に到着し、涼二がまず最初に考えた事は、立ち方に対する注意だった。

女性と男性では、姿勢の時点で既に差がある　　と言うよりも、お前の立ち方は女らしくなさ過ぎる、との注意を受けた為である。とりあえず、立ち方は雨音、歩き方はシアを真似する事に決めた涼二は、落ち着かない様子で周囲を見渡しながらシアが動き出すのを待つ。

『ぶ。ぶ。ぶ。……涼音ちゃん可愛い』

「……後で覚えてる、スリス」

髪に隠すようにしながら装着しているインカムより聞こえてきた声に、涼二は若干の殺意を込めてそう呟いていた。

スリスの所有するアダルトゲームの山を氷漬けにしてやろうと密かに決心しつつ、姿勢に気を遣いながら周囲を見渡す。

と　　ふと違和感を覚え、涼二は眉根を寄せた。

「ん……？」

涼二の視界の中には、かなり沢山の人々がひしめいている。

これが全員ホールの中に入るのかというのは若干疑問ではあったが、今の問題はそこではない。

涼二の目に映っているのは、それとは別の場所　　と言うより、景色全体である。

その中で、少しだけ普通の人々と違う動きをしている存在を複数察知したのだ。

「あれは……」

あまり動かず、待ち合わせと言った風情で要所要所に立っている人々。

けれど、彼らは時々耳に手を当てるような姿勢を見せていたのだ。その動きは、涼二にとっても非常に馴染みのあるものである。

「通信用の道具か、能力……フレキシじゃないな。警察の姿は無い……となる」と

ムスペル Heim　　己のかつての所属部隊であり、最強の実働部隊と呼ばれる彼らの事が脳裏に浮かぶ。

視線を細めてみてみれば、何人かはかつて己の部下であった人物を散見する事ができた。

そして、その数が多い事に、涼二は視線を細める。

確かに、今回はユグドラシルの次期総帥、大神美汐がその姿を現す。その為に厳重な警備を敷いているというのも理解できない話ではないのだが

(美汐の傍には、緋織が存在している筈だ。だとしたら、こんな厳重な警備は無駄でしかない……)

最強の能力者である緋織　ユグドラシルでもごく一部しか存在しない神話級の能力者が美汐の警護をしている。

本来ならば、それ以上は穴を埋める程度の人員しか必要ないのだ。だと言うのに、この状況。

眉根を寄せ、涼二は襟に隠した小型マイクへと語りかけた。

「スリス、少し気になる事がある」

「ん？　どしたの？」

「ムスペルヘイムの人員が、かなり多めに配置されてる。気になった程度だが、理由を調べておいてくれ」

「ん、了解。可能な限りだけどね」

「ああ、頼む」

あまり期待しないように、という意志を言外に伝えられつつも、涼二は小さく頷いた。

この状況、ユグドラシルの中枢に足を踏み入れるようなレベルの話

でもある。  
アクセス出来るかどうかは分からない情報ではあるが、スリスを暇  
にしておく理由も無い。

「何を立ち止まっていますの？」

「っと……ああ、悪い」

「……」

涼二の様子に、ガルムは無言で視線を細める。

彼もまた、多くの人員が配置されていると言っこの現状に気づいた  
ようだった。

小さく頷き、涼二は彼に近づいて声を掛ける。

「ガルム、どう思う？」

「順当な所で行けば、大神美汐の護衛と言った所か……しかし、そ  
れにしても数が多い」

「そうなんだよな……何かあったと見るべきか？」

「頭の片隅には入れておいた方が良さだろう。親の過保護と言う可  
能性は？」

「無いだろうな……大神槍悟は、公私混同する男じゃない」

敵だからこそ過小評価はしない。

涼二は視線を鋭くしつつ、けれど周囲には気付かれないようにその  
殺気とプラーナの高まりを隠しながら声を上げる。

「何らかの犯罪予告の可能性も考えるべきだ。あってもおかしくはないだろうからな」

「ふむ……だが」

「ああ、俺達に累が及ばない限り、手を出す必要は無いだろう。元より、神話級フェアブリアが二人もいるんだ、手を出す余地があるとも思えない」  
「確かに」

そう呟き、ガラムは苦笑交じりに頷く。

周囲に神話級フェアブリアが多いからこそ感覚が麻痺しているが、本来ならかなり強力で貴重な能力者なのだ。

そんな存在が二人 防ぐ者さえいなければ、この人工島を壊滅させられる規模である。

態々手を出す必要など無い。

（しかし、あるかどうかも分からないような脅威に対して、ここま  
で戦力を割くか？

けど、事実として人は動いている。有り得る可能性は 　　）

涼二の脳裏に浮かぶのは路野沢の顔、そして…… 《予言の巫女》  
の名。

一年以内のあらゆる出来事を予言する神話級能力者フェアブリア。

彼女の力によって、何らかの予言が成されていたとしたら

「……警戒は、しておくべきか」

予言の内容がどのようなものであれ、己が関わってこない限りは干渉しない。

その考えを、涼二は曲げるつもりは無かった。

けれど、そこに路野沢が関わっているのならば、否が応にも関係してきてしまう可能性はある。

そもそも、シアに今回の話を持ってきたのは路野沢である。

この先の状況すらも見越している可能性は十分にあるだろう。

「いや……今は、いいか」

どの道、路野沢の企んでいる事など、涼二にはその一部とて想像出来ない。

あの男はそれほどまでに深い思慮と、計算高さを持っているのだから。

未だに、ユグドラシルでどうやってあれほどの権力を手に入れたのか理解できず、涼二は溜息交じりの息を吐き出す。

ともあれ　　今ある情報だけでは、想像する事すらも不可能だ。

スリスが情報を探し当てるのを待つか、或いは

(実際に何かが起こるまで、つて所か)

決意を新たにしながら、涼二は胸中で呟く。

何も無い事が望ましくはあるが、路野沢が関わっている以上、何らかの思惑が動いていると考えた方が妥当である。

嘲笑じみた表情を浮かべる彼の姿を思い起こし、涼二は顔を顰めていた。

と

「はぁ……」

どこか溜息にも似た息を吐き出す、雨音の音が響いた。そんな彼女の様子に意識を元に戻し、涼二は首を傾げる。

「雨音、どうかしたか……な？」

「あ、お姉様……いえ、人が沢山いるな、と思ひまして」

普通に話す時には男っぽい口調を避けるという事をギリギリで思出し、涼二は一瞬口籠りながらもそう告げる。

それに対し、ごくごく自然な様子で雨音は返した。

よもや、本当に女　　と言うより姉だと思っているのではなからうか、と若干戦慄じみたものを感じながらも、涼二は声を上げる。

「やっぱり、人ごみは苦手という事か」

「はい……こればかりは、癖になってしまっていますから」

今や、反転したSによるプラーナの強制吸収も、能力自体の暴走も起こらなくなっているのだが、それでも雨音はまだ慣れる事は出来ていない。

その力に晒された経験を持つ涼二も、あの力に対する恐怖はよく理解している。



無理に慣れる、と言うつもりはなかった  
無論、慣れた方が良いのは確かなのだ。

「まあ、今は能力が暴走する心配は無い。だから、安心していいんだ」

「……はい、ありがとうございますお姉様」

（あれ？ 何かナチュラルにお姉様になってないか？）

若干頬を赤らめ、嬉しそうに頷く雨音。

涼二はその表情が非常に魅力的であると感ずる反面、この先もその呼び名が固定されてしまうのではないかと言う危惧を覚えてしまう。とはいえ、嬉しそうな表情を見せる雨音に対しては強く出られない涼二であったが。

「会長、準備が整いました」

「ええ。それでは、参りましょう」

「護衛は私が引き受けよう。嵐山、君は車を」

「うむ。それでは、しばしの間任せたぞ」

車の担当である嵐山は、ガルムの言葉に頷いて車を動かしてゆく。駐車場に向かった彼の事を少しだけ見送り、シアはガルムを控えさせながら劇場の方へと歩き出した。

そしてその背中を追い、涼二も雨音を伴って歩き出す。

未だ、スリスからの連絡は無い。

「お姉様、オペラと言うのは……」

「ん？ ああ……そうか、両音は見た事はないか」

「はい、自他共に認める世間知らずですので」

それを自分で堂々と言うのもどうかとは思つが　と胸中で苦笑し、涼二は肩を竦める。

まあ、事実である為、それに関してどうこう言うような事は無かつたが。

その辺りは気にしないようにしつつ、涼二はかつての日々に思いを馳せながら声を上げる。

「オペラってのは歌劇……簡単に言つと、歌と音楽と演劇を纏めたようなものだ」

「成程、バーゲンセールですね」

「お前はバーゲンセールも分かってないだろう」

相変わらず理解不能な思考回路ではあるが、涼二も既に慣れ始めている。

あっさりとツツコミを返しつつ、嘆息交じりに声を上げた。

「ミュージカルとも近いが……あつちが劇の側面が強いから。オペラも劇の面が弱いと言う訳じゃないが、歌の方を重視しているイメージがある」

涼二とて、決して詳しい訳ではない。

緋織や美汐が話すのを聞き流していた程度のものだ。  
けれども、彼女達が情熱を持ってそれに取り組んでいた事は十分に理解している。

故に、彼はそれを軽んじるつもりは無かった。

「まあ、原曲の歌詞で行くんだろうし、何を歌ってるかは分からないかもしれないが……雰囲気を楽しめればいいよ」  
「成程、分かりました」

語尾には気をつけつつそう告げ、涼二は軽く息を吐く。

四人は既に劇場の入り口に着き、ガルドが全員分のチケットを提示している所だった。

その様子をぼんやりと眺め　ふと気配を感じ、涼二はゆっくりと、小さな動作で視線を背後へと向ける。

感じたのは何らかの視線のようなもの。ムスペルヘイムの者達に目をつけられたのかと思ったが、それとは違う。

(何者だ……?)

ムスペルヘイムの者達に気付かれぬようにするため、<sup>ラクス</sup>プラーナや<sup>ラクス</sup>シを使った索敵をする事は出来ない。

しかし、この微弱な気配だけでは、これだけの人々の中からその姿を発見する事は不可能だった。

少々気になるものの、これ以上気配を辿る事は出来ない。

既にその視線すらも感じることは出来ず、すっきりしない気分ながらも涼二は視線を元に戻した。

そんな彼へと向け、雨音は訝しげな表情を浮かべる。

「お姉様、どうかなさいましたか？」

「……いや、何でもない」

安心させるように笑みを浮かべ、涼二は雨音へとそう告げた。

が、その表情の裏で、静かに意識を研ぎ澄ませる行く。

先ほどから感じる不穏な予感、それが徐々に表面化してゆくように感じ、涼二は小さく息を吐いた。

どうにも、きな臭い。

(気をつけておくべき、だな)

静かに決意し、涼二は目を閉じる。

何事も起こらないに越した事は無いのだが、涼二はそう簡単にはいかない気配をひしひしと感じていた。

ともあれ、彼はそんな鋭い気配をうまく隠しながら、雨音のフォロ―をしつつ劇場内を進んでゆく。

既に女性の姿である事は完全に失念しており、しかしながら慎重に警戒するその姿は落ち着きのある女性に近く、結果として仲のいい姉妹にしか見えない状態ではあったが。

「……む」

天井についている、能力やプラーナに反応する警報装置を発見し、涼二は小さく声を上げていた。

能力を使えば数秒で感知し、起動する最新鋭の警報機。

涼二としては、少々面倒だと言わざるを得ない道具であった。

あれを躲すには、スリス並みの能力の制御力が必要となってしまうだろう。

まあ、彼女が外から機械をストップさせれば済む話ではあるのだが。

(……無駄に戦闘思考になってるな)

苦笑交じりに己を戒め　しかしそれでも、かつて戦闘職であった頃感覚を否定する事は出来ず、涼二は視線を上げつつ声を上げた。

「ガルトム、少しいい？」

「む、どうした涼音君？」

「少し辺りの様子を見てきたい。雨音を任せてもいいかな？」

「うむ、了解した」

涼二の意図を理解したのだろう。

ガルトムは納得した様子で頷き、涼二の言葉を肯定する。

何か起こった時の為に、周囲の構造や状況を把握しておく　スリスからのデータを堂々と受け取れない以上は、自分の感覚で把握するのが確実だ。

雨音はそんな涼二の言葉に若干残念そうな表情を浮かべていたが、ガルトムが肯定した以上はそれを否定するつもりも無いのだろう、し

っかりと頷いていた。

涼二は最後にシアへと視線を向け、彼女からも了承を貰い、三人に對して軽く手を振る。

「それじゃあ、また後で。座席は」

「チケットに書いてあるでしょう？ そちらで合流すると良いでしょうね」

「ではお姉様、また後ほど」

雨音の言葉には若干の苦笑を交えて頷き 涼二は、ホールへ向かう扉から逸れて周囲をぐるりと回るように歩き出した。

警報装置の位置を確認しつつ、周囲のムスベルヘイムの人員たちに気付かれないようにゆっくりと。

その胸中には、若干の苦笑が浮かんでいた。

(自分で鍛えた連中に苦戦する事になるとは……嬉しいやら悲しいやら)

ともあれ、気取られれば面倒な事になる。

自分で育てた以上、何処が穴となるかは十分に理解している為、彼らの目を盗む事はそれほど難しくはなかった。

改めて警備の多さに驚きながらも、涼二は会場内の地理を把握してゆく。

警備たちは、どこか落ち着かない様子で周囲に視線を巡らせていた。

(何かを探してる。やっぱり、ただの警備って事は無さそうだな…  
…何らかの脅威を想定してる)

ただし、彼らの様子をあえて言うのならば

( その脅威が何なのかを理解できていない、って言った所か )

彼らの配置は、臨機応変な対応が出来る状態。

逆に言えば、一点に集中すれば彼らを出し抜く事も不可能ではない陣形だ。

これは何か特定の脅威を見ているというより、どんな場面でも柔軟に対応できるようにした形だ。

防御には向くが、敵戦力の制圧には欠ける。

そんな彼らの配置を一つ一つ確認しつつ、涼二は若干広いホールのような場所に足を踏み入れていた。

そこでは、何人もの人々が話し合い、互いに交流を持っている

その、奥。

「ッ！」

涼二は、思わず息を飲んでいた。

そこにいたのは、幾人もの人々の視線を集めている二人の少女。

紅蓮の炎と金色の光 磨戸緋織と大神美汐。彼女達 と言

うより美汐のみだが は周囲に愛想の笑顔を振り撒きながら、

様々な人々と挨拶をしている。

そんな彼女達の様子に、涼二は思わず口元に笑みを浮かべていた。

(……元気そう、だな。良かった)

安心したように、涼二は頷く。

大変そうではあったが、彼女たちの表情は生き生きとしていた。まるで、これから行う劇が楽しみで仕方ないと言っているように。

「……やっぱり、大丈夫だな」

心配する必要は無いと　そう、涼二は笑う。

彼女達は己の力でやって行く事が出来ると、涼二はそう確信し……ふと見えた顔に、ぴくりと肩を跳ねさせた。

「ん……？」

どこかで見た覚えのある顔が見えた気がして、涼二は周囲へと視線を走らせる。

けれど、もう一度同じ感覚が起こる事は無く、周囲に広がっているのはただただ雑踏のみ。

度々起こる不思議な事態に、涼二は小さく首を傾げてゆく。

「何だ……？　気のせい、だよな？」



しっかりと見たわけでは無いので、単なる見逃しの可能性の方が高い。

しかし漠然とした不安を覚えつつ、涼二はもう一度見て回ろうと心に決め、最後に一度だけ二人のほうを見つめる。

その笑顔を、脳裏に焼き付けるかのように。

開演十分前となり、周辺地理の把握を終えた涼二は、速足で己の座席へと向かっていた。

一応予想はしていたものの、シアが用意していた座席は、劇場内でもトップクラスにいい場所のもの。

一体どれほどの値段なのかと半眼を浮かべていた涼二だったが、彼の持つ資産から考えれば手の届かない値段と言う訳ではなかった。

（我ながら、微妙な金銭感覚だな……）

金の使い道が無く、そのくせ高い報酬を受け取るような仕事をしている。

一応ガラムやスリスと山分けする事になっているが、ガラムも浪費癖は無いので、彼らは金に困ったような事は無かった。

スリスのみ、ゲームに金をかけていたりするのだが。

それでも、使いきれないほどの金が溜まっている当たり、自分達にも需要がある物だ　　等と、涼二は嘆息交じりに肩を竦める。

パンフレットにある城内の扉の位置、そして座席番号の対応関係を確認しつつ、涼二は最も近い扉を探して行く。

時間ぎりぎりではあるが、それに関して文句を言うような人間は今日この場に來ていない。

その人物はと言えば

「……………スリス、どうだ？」

『んー……………今回はちよつと無理くさいかなあ』

通信機の向こうから、どこか苛立ちの混じった声が聞こえてくる。彼女自身はそれを抑えているつもりなのだろうが、と込み上げてくる苦笑を押さえつつ、涼二はマイクへと向かって囁くように声を上げた。

「明文化はされていないと？」

『うん、そうだと思う。特別な理由に関してはデータで存在しない……………多分だけど、上位の幹部から直接ムスペルヘイムの隊長に伝えられたんじゃないかな？』

一応、次期総帥の護衛って言う理由がある訳だし、ある程度の人員増強は適当な理由をつければ何とかなると思う』

「確かに……………余計な騒ぎになる事を避けたか。となると、流石に理由を探す事は無理そうだが……………」

口元に手を当て、涼二はスリスの言葉を吟味する。  
データとして存在しない以上、スリスがどのような手を使った所でそれを調べる事は叶わない。  
データ方面に無類の強さを誇ろうとも、限界と言つものは存在してしまふのだ。  
それに関しては皆仕方ないと割り切っているため、特に言及するよ  
うな事は無い。

「……スリス」

『分かつてるよ。一応、システムは掌握しながら通常運用させてる。いざとなったら、館内全てを制御する事が出来るよ』

「流石だな。一応、ユグドラシルの連中も監視してるだろうに」  
『舐めないでつて。これに関して、ボクに勝てる能力者なんていないよ』

大げさなまでの自信と取れるかもしれないが、それは純然たる事実であると言える。

彼女の技能は、ハカラスアンサズバースH、A、Pという三つのルーンとフェアブラ神話級というポテンシャル、更に比類なき制御力の下に運用されているのだ。  
普通の人間ならば、この領域に達する事などありえない。

何故なら、スリスはその能力が必要だからこそ使っているからだ。  
全盲である彼女は、能力による補助が無ければ周囲の様子を見る事は出来ない。

故に、彼女は常に能力を使い、能力を制御している。それが無ければ、人間の体内信号を操るなど、絶対に不可能だ。

とまれ　と、涼二は思考を切り替える。

何が起こるにしろ、打てる手は打った。後は、スリスに任せて自分

は仲間達の所に戻るだけだ。

「とにかく、任せたぞ、スリス」

『うん、了解したよ、涼二』

誇らしげに頷く様子を想像し、涼二は苦笑交じりに通信を切った。気付けば探していた入口も近く、涼二はそちらへと向けて歩いてゆく。

ふと、黒髪の少年とすれ違った。

「氷室さん？」

「ッ……!？」

刹那、耳に届いた声に対して涼二は己の耳を疑っていた。即座に動揺を抑え、その声を上げた少年の方へと振り返る。そこに立っていたのは、黒い髪に学校の制服のような服を纏った少年だった。

見覚えのあるその姿に、涼二は内心の焦りを表面化しないように声を上げる。

「いえ、人違いですが……貴方は？」

「あれ、女性の方……? 確かに氷室さんだと思ったんだけど、人違いか……ごめんなさい、間違えました」

言つて、少年はぺこりと頭を下げる。  
それに対し、涼二は見覚えのあるその少年  
大神白貴に対し、  
愛想笑いを浮かべながら声を上げる。

「ええと、何か御用でもありましたでしょうか？」

「はは……ごめんなさい、呼び止めてしまつて」

力なく、白貴は笑う。

彼の経歴、事情……美汐の弟が全盲であつた事を思い出し、涼二は  
内心で舌打ちをしていた。

彼は目が見えない代わりに、プラーナに対する感応度が高いのだ。  
その為、彼は他人のプラーナを感じ取り、その波動で人を識別して  
いる。

涼二も、姿は変われどプラーナが変わる訳ではないので、もしも親  
しい間柄であつたならば一発で気付かれていただろう。

じわりと冷や汗をかきつつも、プラーナを波立てないように意識し  
ながら、涼二は声を上げる。

「もう行つても大丈夫でしょうか？」

「あ、はい。お手数おかけして済みません」

「いえ、お気になさらず……」

軽く礼をし、そそくさと退散する。

そしてその姿が見えなくなった所で、涼二は壁にもたれかかりなが  
ら深々と息を吐いていた。

本当に、心臓に悪い。

「あんまり知らない相手で良かった……」

不意打ちにもほどがある、と胸中で呟き、涼二は再び姿勢を戻す。こんな場所で気付かれれば、美汐や緋織の耳に入ってしまう可能性もあったのだ。

そうなれば、オペラどころの話ではない。

「しかし……大神の人間が、護衛の一人も無しとはな」

一度背後を振り返り、少年の消えて行った廊下を一度だけ見つめ、涼二は目を閉じてかぶり振る。

近付かないように気をつけなければと決意を新たにし、涼二は会場内へと足を踏み入れた。

そして、彼は素早く周囲へと視線を走らせる。

ある程度の座席の場所は分かっているのだ。後は

（あのバカデカイ筋肉の塊が二人も居れば、居場所もすぐに分かるってもんだ）

肩を竦め、涼二はそう一人ごちる。

傍目から見て目立ちすぎると二人がいる場所へ向かうのは、少々勇気のいる行為であったが。

とはいえボーっと立っている訳にも行かず、涼二は覚悟を決めてそ

ちらへと向かってゆく。  
席に付こうとする人々が多く、進んでゆくには少々難儀するが、  
良い席はそれだけスペースも広く取られていたらしい。  
涼二は比較的楽にその中へと入って行く事が出来た。

「お待たせ」

「遅かったですわね」

「お姉様、こちらです」

腕組みをして瞳を閉じていたシアは、その右目だけを開いて嘆息しながらそう告げ、雨音は自分の隣に開けた席をぽんぽんと叩きながらアピールする。

若干非難の気が混じったシアの視線は躲しつつ、涼二は邪魔にならぬようすぐさま席の方へと足を勧めた。

涼二が隣に座ったのを見て、雨音は満足そうに頷く。

「もうすぐ始まるのに来ないから、迷子になってしまったのかと思  
いました」

「そうだったら傑作でしたのにね」

「そこまで方向音痴じゃないさ」

肩を竦め、涼二はそう口にする。

と言うよりも、むしろ涼二は既にこの建物内の地理をほぼ完全に把握しているような状態だった。

出口の数や通路の広さなど、普通は注目しないような場所も把握していたのは癖としか言いようが無いが。



(脱出時のルートやらいざと言う時に立てこもれそうな部屋とかを確かめちまうのは、職業病と言うか何と言うか。まあ、その職業はもう辞めてる訳だが)

胸中でそう呟き、椅子に身を沈めながら嘆息する。

座席そのものも高級なもので、涼二は先ほど感じていた緊張が解れてゆくのを感じていた。

我ながら動揺しすぎていると、涼二は苦笑する。

この姿でバレル事など全く想定していなかったのだから、その動揺も当然と言えば当然なのだが。

先ほどの醜態を思い起こし、若干憂鬱な気分を味わっていた涼二は、ふと隣から袖を引っ張る気配に気付き、そちらへと視線を向ける。

「あの、お姉様」

「ん、どうかした?」

「どうかしたのか?」と言いそうになる所を何とか耐え、涼二は首を傾げる。

相変わらずごく自然に妹と言うスタイルで話しかけてくる雨音には疑問を覚えつつも、彼はその視線をパンフレットの方へと向ける。それと共に、雨音は問いかけの声を上げた。

「『ニーベルングの指輪』、と言うんですよね? これは、どういう話なんですか?」

「どづいつ、と言つても……そこにあらずじが書いてあるんじゃ？」  
「確かにありますけど……」

ぺらりと捲つた所に書いてあつたのは、紙の関係上あまり長くは書けなかつたと思われる全体のあらずじ。

それを見て、成程　と涼二は胸中で納得しながら苦笑した。  
コレでは、今回の話を理解するのは少々難しいだろう。

「……今日のこれは、第二幕の『ワルキューレ』。昨日やったが、序章的な役割の話である『ラインの黄金』だった」  
「随分と長いお話なんですね」  
「小説にすればそれなりに纏められそうだけど、歌と音楽で表現だから」

と　話し始めようとしたその瞬間、周囲の明かりが弱まり始めた。  
それに気付き、二人は視線を正面へと向ける。

そこではちょうど幕が開き、舞台がその姿を現した所だった。  
オーケストラピットの中では楽団がそれぞれの楽器を構え　そ  
こに、紅の髪を持つ少女が立つ。

「……緋織」

「あの方が……？」

目を見開き、雨音は小さくそう呟く。

そんな彼女の小さな声は、緋織が礼をした事により起こった拍手によつて掻き消された。

そしてそれも、緋織が指揮棒を掲げると共に収まって行く。

しんと静まり返る、静謐な劇場内。

そして 音楽が奏でられ始める。

嵐のような前奏曲は、全ての人々を震わせるように劇場内に響き渡った。

そんな中、雨音が小声で涼二へと話し掛ける。

「……お姉様、美汐様と言う方は？」

「ああ、まだ舞台には出ていない。ブリュンヒルデ……美汐の役に  
出番が出来るのは、もうしばらく後だから」

今舞台上上がっているのは一組の男女で、そのどちらも美汐ではない。

ニーベルングの指輪における主役級 ジークフリートとブリュンヒルデの役割はまだ来ない。

今あそこに立っているのは、ジークムントとジークリンデの二人の役だろう。

神々によつて生み出された人間の双子 皮肉にも感じるその存在に、涼二は小さく苦笑する。

『 Wes Herd dies auch sei, hier  
muss ich rasten 』

男性 ジークムント役が歌い始める。

傷付き疲れた戦士が迷い込んだ先は、己の知らぬ妹が嫁いだ先。  
そして、そんな男と戦っていたのは、ジークリンデの夫。  
最初に聞いたときには、大した偶然だ、などと考えた涼二であった  
が。

『Ein fremder Mann? Ihn muss ich  
hfragen』

続くように、ジークリンデ役の歌が響き始める。  
かつて緋織や美汐から幾度も教えられたその物語。  
その終焉を思い出し 涼二は、思わず小さな笑みを浮かべてい  
た。

(望みと近いようで……遠いな)

大神槍悟ヴォータンの死を望めど、ユグドラシルヴァルハラの崩壊を望まない。  
この物語を知っている涼二としては、己が望みの歪みに対して小さ  
く苦笑を漏らす。

雨音は、じつと舞台に集中している。

歌の意味は分からないであろうが、響き渡る音楽と朗々とした歌は、  
彼女の心を惹き付けるに足る魅力を持っていた。

そんな彼女の様子を横目に眺めながら、涼二は口元に小さな笑みを  
浮かべていた。

そして彼は肘掛に頬杖を着き、ゆったりとリラックスして鑑賞を始  
める。

目当てである美汐の役、ブリュンヒルデが現れるのは第二幕から。第一幕でも六十分ほど続く為、今はぼんやりとしていても問題は無い。

と ふと、小さな雑音が響く。どうやら、誰かがホールの扉を開けたらしい。

(始まったばかりでトイレか?)

眉根を寄せながらそちらへと視線を向けた姿に、涼二は思わず首を傾げていた。そこに僅かに見え

そこに僅かに見えた姿が、どこか見知ったそれに見えてしまったからだ。

(気のせいかな? ちょっと、あいつに似てたような気がしたが……)

気にはなったものの、そんな確証もない事を一々確かめる気にもなれず、涼二は肩を竦めながら視線を戻した。

そして前方にある劇へと意識を集中させ 不意に、舞台袖からプラーナの高まりを感じた。

「…………ツ!？」

驚愕と共に、背もたれに預けていた身体を起こす。

感じ取れたのは僅かなもの 訓練を受けていなければ気付けな

いであるうそれ。

涼二達の中でも、それを感じ取る事が出来たのは彼とガルムだけであつた。

そして舞台の上にいる緋織もぴくりと肩を震わせたが、指揮を乱す訳には行かず、そのままオーケストラへと集中している。けれど

(おいおいおいおい……ッ!?)

舞台袖の奥で、美汐のプラーナが移動しているのを感じ取り、涼二は思わず頬を引き攣らせていた。

その後ろを護衛役と思わしき能力者が付いて行っていたが、まともな状況であるとは思えない。何故なら、彼女のプラーナは、戦闘時であるかのように高まっていたからだ。

「ガルム……!」

「ああ、行って来い」

自分達に何かあつたときしか動かない　　そんな自分の言葉を

忘れ、涼二はガルムへと視線を向ける。

そんな彼の内心を理解したのか、ガルムはどこか苦笑を交えて首肯した。

胸中で礼を言い、涼二は席を立って素早く出口へと向かってゆく。その扉は、先ほど開いたものと同じ場所。

「緋織が傍にいるならまだしも、あのバカ……！」

音楽に紛れる程度の小声でそう毒づき、涼二はホールの外へと飛び出して行ったのだった。

妙な事になった　不可思議な波長のプラーナを持つ男に連れられながら、大神白貴はそう考えていた。

彼は先ほど、会場内にいた所をこの男によって連れ出されてしまったのだ。

『ちよつと用があるんだけどよ。外に出てくんね？』等と、到底頼むような態度ではなかったが、白貴としてもオペラにはあまり興味がなく、それよりもこの男の持つ不可思議なプラーナの方が気になっていた。

大神白貴は、生まれつき目が悪い。

初めから、全盲と呼べるレベルで視力が低かったのだ。

彼の母はそれを嘆き、あらゆる手を尽くして彼の視力を回復させようとした。

けれどその願いは届かず　今でも尚、その瞳は光を映していない。

しかし、成果が皆無と言う訳ではなかった。



強化人間の技術ですら回復させる事が出来ないその視力。

純粹に神経系の障害は、強化人間の技術でも癒す事は叶わない。

けれど、ルーンにはそれ以上の可能性が眠っていたのだ。

白貴が持っていたのは、E、I、B。エイワズ イサ ヘルカナ植物に關係する二つのルーンの中、Iイサが混ざっているのは使いづらい、と目されていたものだった。

しかし、その中には一つだけ特殊なものが含まれている。Bヘルカナ

所持者が深層心理で最も望んでいる何かを成長させる、白樺と成長を表すその力。

その力によつて彼に与えられた才能は 彼が、唯一他者の気

配を知る事が出来ていたもの。

即ち、プラーナの感知能力だった。

「ま、目の見えねエ奴の気持ち分かんとか、んなテキトーな事抜かすつもりはねエけどな」

「……貴方は、一体？」

酸素不足で燃え上がれない炎。

水が溜まり過ぎて破裂寸前の水道管。

酷く危うく、それ故に注目させられる そんな気配に対し、白

貴はぼんやりとした口調で問いかけていた。

対し、その奇妙なプラーナを揺らめかせながら、男は笑みに歪んだ声を上げる。

「お、自己紹介とかいる？ そーゆー事気にする奴かよ、お前さんは？」

「……」

全てを見透かすように、男は嗤った。

否　　彼は、全てを見透かしている。

そう、白貴だからこそ分かるのだ。彼は、この男は

「お前は、そんな事は気にしねえ。何故なら、他人になんざ興味はねえからだ。俺に対しても……そう、偉大なお父上サマに対してもなア」

「……どうして、そう言えるんです？」

「当然だろオ？　　テメエ自身、分かってて聞いてるんだろーが」

歪だ、と　　白貴はそう胸中で一人ごちる。

この男は、歪なのだ。人は必ず、何かの為に生きている。

何かをなす為に、何かを得る為に、何かを見つけるために　　しかし、この男にはそれがない。

(僕にすらあるそれが……この人には、無い)

この男は、獣なのだ。

ただ、本能のままに生きている　　生きる為に生きている。

それは、決して人間の生き方では無い。獣が、生きる為に喰らっているのと同じ事だ。

ならば、この男が生きる為に喰らうものは一体何なのだろうか  
そんな事をぼんやりと考え、白貴は静かに意識を集中させる。

この男の不自然なプラーナ……その正体が、気になったから。

「なア……お前、恨んでんだろ？」

「っ」

耳元で囁くような、愉悦の声。

その言葉に、白貴はぴくりと肩を跳ねさせていた。

恨む　その言葉が、彼の心の内に棘のように突き刺さる。

暴き立てるようなその言葉は、確かに事実だったのだから。

「悔しいよなア、恨めしいよなア？　お前が持ってないもの、あの

フロイライン  
お嬢さんは全て持つてるんだろ？」

「ッ……！」

「地位もそうだ。名声も……力も信頼も、立場すらも　あの女

は、全てを持つてる。俺としちゃアどーでもいいが、普通の人間なら、そりゃあ羨ましいだろうよ。

それが近ければ近いほど……なア？」

「……否定は、出来ません」

心を読む能力か、或いはただの本能か　白貴は、男の言葉を

否定する事が出来なかった。

そう、大神白貴は恨んでいる。全てを持つ少女、黄金の輝きを持つ者、大神美汐の存在を。

彼女が光を纏うのは、自分から全ての光を奪っていったからではないか　そう考えてしまうことすらあったのだから。

「だろうなア。ま、当然の感情だ。別に恥じる必要なんぞねエゼ？」  
「そう、でしょうか」

「あア。ま、あの女がズリイだけだろ？ 人の上に立ちゃ、それだけ嫉妬も受けんのが当然ってモンだ。それを好かれるだけなんつーのはルール違反なんだよ」

「……ルール、か」

思わず、白貴は苦笑する。

こんな話の中だったとしても

「一体、誰が決めたルールなんでしょうか？」

「ハッ、そんなモン決まってるだろオ？」

男は嗤う。ただただ、その不安定なプレーナを揺らめかせながら。酷く危ういそれ。けれど、その揺らぎすらも楽しむかのように、彼は嗤う。

「俺がルールだ、つてなア」

「……成程」

理解する。感覚の一つを持たず、それ故に多くの事を知る少年は、自分の前にいる男の性質を理解した。

やはりこの男は獣なのだ。と。

どこまでも刹那的なその在り方。それは決して、人間にあるべきモ

ノではない。

生きる為に生きる。喰らう為に喰らう。この世の全てが、自分が生きる為だけに存在している　傲慢な獣。

けれど、それは酷く楽しそうだと……白貴は、そう思ってしまった。いた。

「……それで、僕に何の用でしょう？」  
「おっと、忘れてたぜ」

悪びれる様子も無く、男はそう口にする。

それが目的で、リスクを冒して白貴を連れ出したのであろうに、そんな事など全く気にせず。

けれど、それをらしいと思ってしまう、白貴は苦笑を漏らす。

そんな彼の手を取り　男は、自身の首に白貴の手を這わせた。

首を絞めているようなその体勢に、白貴は思わず息を飲む。そしてそれと同時に、掌に伝わる硬い感触に、彼は首を傾げていた。

「これは……？」

「『グレイプニル』　つつつてな、能力を押さえ込みまう、クソツタレな道具だ」

「能力を、押さえ込む……」

男の言葉を反芻し、白貴はぼんやりとそう呟く。

同時に、白貴は納得を得ていた。この男の中で不自然に揺れているプラーナ。

これは、この『グレイプニル』と呼ばれる道具の力で無理矢理に抑

えられた結果であると言う事を。

「ここまで言えば、俺がどうしてお前を尋ねて来たのか分かるよなア？」

「……はい」

左胸にある己のルーンの一つに触れ、白貴は小さく首肯する。

この男が何処でその事を知ったのか、それは白貴には分からない。けれど、この男が何を求めているのかは明白だった。

鎖に繋がれた獣　彼は今、自由になる事を望んでいる。

より願いたい通りに生きる為に。より多くを喰らう為に。

誰よりも強い獣であると　その在り方を、証明するかのように。

「……で、どうだよ？　出来そうなのか？」

「やってみないと、分からないです。コレ自体がプレーナを持っているのも確かですけど……」

白貴の持つファンクション、能力を打ち消し相手を貫くヤドリギの矢。

あらゆる能力者に対して必殺となりうるその力。

それが、男の首輪に宿った力までもを打ち消せるのかは分からなかったが　けれど、それは。

「やってみなきゃ分からない、か。いいねエ、賭け事ってのは嫌いじゃないぜ？」

「……僕も、そう思えてきた所です」

失敗すれば、彼の力が解き放たれる事は無い。

成功したとしても、放たれた矢は彼の首を貫いてしまつかもしれない。

けれど、彼は　この獣は楽しそうに嗤っていた。

己の命が刈り取られるかもしれない、その刹那までもを愉しむように。

そして白貴も、初めて触れるような獣性に対し、僅かながらの愉悦を覚える。

満たされなかった心が、僅かに潤うように。

「じゃあ、どつちに賭けます？」

「言つまでもねエだろ？」

男は嗤う。ただ、楽しそうに。

そんな彼から一步、二歩と離れ、その手の中に生み出される樹の蔭で構成された弓を持ち上げ　白貴は、光を映さぬ瞳を開いた。

何も見えはしない。けれど、燦るプラーナだけは伝わってくる。

男の、不敵な笑い声と共に。

「　俺の、完全勝利だ」

小さく笑い、矢を番え

背後に、強大なプラーナの気配を感じ

取った。

白貴は思わず、ぎり、と歯軋りの音を響かせる。  
その気配は、彼にとって何よりも馴染みのあるものだったから。  
何よりも優しく、力強く、それ故に何よりも妬ましいと感じていた、  
その気配。

「<sup>ハク</sup>白君ッ！」

「み、美汐様！」

現れた気配は二つ。

強大無比なプラーナを放つ<sup>ファープラ</sup>神話級と、それとは若干劣る<sup>ディザスター</sup>災害級ほどの気配。

響いた二人の少女の声に、白貴はゆっくりと振り返った。

滾り始めていた心は急速にその脈動を失い、乾き冷えた感覚のまま彼は声を上げる。

「……姉さん、どうしてここに？ もう、舞台は始まっているんでしょう？」

「私の出番は第二幕からだから……それより、白君は何してるの！  
？ こんな所で能力を使って！」

「姉さんには関係ありません」

にべも無く、白貴はそう告げる。

その言葉に、美汐は言葉に詰まったように仰け反るが、それでも退く事無く声を上げた。

強い意志を、その目に秘めて。



「関係ある！ 私は貴方のお姉ちゃんだから！ 何かあったって分かるような状況で、放っておける訳ないよ！」

「おーおー、流石だねエ英雄さんよ。露骨な拒絶も気にせずか」

「……貴方は、何者ですか」

もう一人の少女　羽衣が、美汐を庇うように前に出る。

今の所彼女は能力を発動させていないが、いつでも戦闘ができるようにプラーナを高ぶらせていた。

そんな圧力を感じ取りながらも、男は不敵な口調を変えぬまま声を上げる。

「別に？ ただの観客以外の何に見えるよ？」

「……少なくともただの観客には、白貴様に能力を向けられる理由は無いと思いますが」

「いやいや、俺は単にこの少年の能力を見せて欲しいって頼んだだけさ。レアな能力だって聞いたんでなア」

男は、軽薄に笑う。

対し、羽衣はさらに警戒感を高めていた。

そんな間に挟まれつつも、白貴は変わらぬ様子で声を上げる  
美汐に対する、拒絶の言葉を。

「僕の事は放っておいてください、姐さん。僕は、貴方に干渉されたくありません」

「気にするよ、放っておける訳ない！」

「ッ……」

白貴は、拳を握りしめる。

本当に、嘘偽りなく、大神美汐は純粹に優しい少女だ。

誰よりも人を、友を、家族を想い、優しく手を差し伸べようとする。その優しさ故に、Gの力ゲーボを正しく、強力に使いこなしている。

己の能力によりその力を拒絶でき、更に資格からの効果を受け付けない白貴だけが、その力から逃れていた。

(分かってる……間違ってるのは、僕の方だ)

己が抱いているのは下らない嫉妬で、純粹に自分の事を思っ  
てくれている姉の方が正しい。

誰よりも己と向き合ってきた白貴だからこそ、その自覚をしっかりと持っていた。

けれど 感情を、収める事が出来ない。

彼女の事が許せないと、そう思ってしまう。

理性ではなく、感情。或いは 背後にいる男のごとき、本能か。

「まあいいじゃねエか。お姉さんとしちゃ、多少は弟の自由意思を尊重してやってもいいんじゃない？」

「……貴方が信用できる人だったら、それでもいい。けど」

「へエ、俺は信用ねエってよ？」

「それは……まあ」

流石にそこを否定することは出来ず、白貴はそう口にする。それに対し男はくつくつと笑い、そしてはつきりと声を上げた。

「ま、アンタらの都合なんざ関係ないがね。アンタらがこっちを無視で己の意志を押し通そうとしてるように、こっちにも目的があるんだ」

「やる気ですか……状況が分かってないみたいですね」

羽衣はそう呟き、それと共に、爆発的にプラーナが高まる。並ぶのは九つの刃。《戦乙女》ヴァルキユリアの名を持つ羽衣を象徴するその力。抑え込まれた男の力では、これに対抗することは出来ないだろう。

「  
！」

気付けば、白貴はその手の中の弓を彼女へと向けていた。手の中に生まれるのは、ヤドリギの矢。羽衣が驚愕に目を見開くその表情は、白貴には見る事は叶わない。その一矢は滑らかな動作で引き絞られ

「駄目っ！」

いきなり割り込んできた美汐へと向けて、放たれた。何よりも、その事に白貴は驚愕し

強大な風とプラーナが、吹き荒れた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「 スリス！」

『 やっぱり何か首突っ込むんだねえ、涼二……はい、警備システム  
掌握したよ』

涼二の声に、スリスは嘆息混じりながらもあっさりと建物内の警  
備システムを支配する。

いつもながら完璧なその仕事に小さく頷き、涼二は全速力で建物内

を駆け抜けて行った。

『って言うか涼二、自分達に被害が及ばない限り無視するんじゃないのか？』

「いや、まあ……そうなんだが」

自分自身でも自分の選択の甘さを自覚し、涼二は思わず口元を引き攣らせる。

けれど、コレはある意味では仕方ない事だ　と、彼は己の瞳にあるルーンに集中しながら胸中で呟いた。

大神美汐の持つGの始祖ルーン。今自分がこうして動いているのは、間違いなくその影響であろう、と。

(……本当に、恐ろしい能力者だよ、あいつは)

若干の戦慄を交え、涼二はそう呟く。

知らず知らずの内に好意を抱かせ、何もせぬままに味方としてしま

う。人間の中で生きていくのに、コレほど強大な能力も存在しないだろう。

能力は何も、戦う為だけの物ではない　それを知る涼二だからこそ、その恐ろしさを十分に理解していた。

『涼二、目標はこの先の角を曲がった所……なんだけど』

「ん、何だ？　歯切れが悪いな」

『いや、うん。何て言うか……涼二の友達の人がいるんだけど』  
「は……？」

その言葉に涼二は思わず疑問符を浮かべ　そして、角を曲がった瞬間に絶句していた。

回り込むような形で美汐達を追っていた涼二の視界に入ってきた姿……それは、あまりにも見覚えのありすぎるものだったからだ。  
そう、それは

「双雅……！？　何で、こんな所に！」

いつもとは違う、似合わぬスーツを纏った双雅の姿。  
その横に並ぶのは大神白貴、そして相対するのは大神美汐と把桐羽衣。

そこに並ぶ面々を眺め、戦況をしっかりと把握する。出した結論は、たった一つ。

(ここで戦闘させる訳には行かない……！)

力を使えば、どちらもただでは済まない。

殲滅、制圧を担当するムスペルヘイムの人間に、能力キャンセルという稀有な力を持つ少年。

双雅も、ユグドラシルの二人も、決して無傷では済まない。

刹那、白貴が弓を引き絞ったのを見て、涼二はすぐさま能力を発動させた。

「ハガラス スリサズ  
H、Th！」

即座に奥の手 両の瞳に刻まれた始祖ルーンを発動させる。  
その瞬間、地面から伸びた氷の茨がヤドリギの矢を一時的ながら絡め取り、吹き荒れた暴風がその軌道を逸らした。  
結果、矢は飛び出してきた美汐の横に逸れながら通路の奥へと飛んで行った。  
それを確認し、涼二は叫ぶ。

「双雅、こつちだ！」  
「！」

その言葉に即座に反応した双雅は、隣にいた白貴を小脇に抱えて走り出す。  
そんな彼が通った後の地面に氷を張り巡らせつつ、涼二は厄介な事態になってしまった事に対して深々と嘆息を漏らしていた。

「……とりあえず、空き部屋行くか」

双雅を先導するように走り出す。  
そして角を曲がる寸前 足を滑らせて盛大に転ぶ、美汐の姿が僅かに見えた。





廊下を駆け抜け、探索の際に見つけ出した部屋へと駆け込んだ涼二は、双雅たちが入ってくるのを確認してドアを閉めた。さらに扉を厚い氷で凍て付かせ、内部への侵入を遮断する。

「よし……スリス」

『うん、気付かれてない。一応この部屋に監視カメラは無いし、警備システムのクラッキングを終わらせるよ』

「ああ、逆探知されたら堪らないからな」

『そんな事されるほど、ボクのクラッキングは甘くないけどねー』

そんなスリスの言葉に小さく苦笑し、軽く扉から離れると、涼二は大きく息を吐いてその場に座り込んだ。

白貴を地面に降ろした双雅も、手でパタパタと扇ぎながらその場に座り、口元にいつも通りのシニカルな笑みを浮かべる。

「おー、助かったぜ涼二」

「ああ、あの状態で放っておけるほど付き合いが短いって、訳……じゃ……」

思わずいつも通りに対応しようとし、涼二は硬直する。

凍りついた表情で涼二が双雅の方へと視線を向ければ、そこには心底楽しそうな彼の表情があった。

ひくりと口元を引き攣らせ、曖昧な笑みを浮かべながら、涼二は若干震える声を上げる。

「お、お前……いつから……？」

「いや、勘。まア、所々癖とか仕草とか、お前らしい所があったし？」

「何でそんなモン見てんだよキメエ」

「ハッハー！ 双雅様の直感を舐めんなっての」

双雅は得意げな表情で笑い、そんな彼の様子に対して涼二は深々と嘆息する。

今の涼二の姿は、外見からでは完全に女性のものとなっている。

とてもではないが、普段の涼二の姿とは結びつきもしないはずだ。

それを、ただの直感で気付いてしまうとは と、涼二は胸中で愚痴じみた声を漏らした。

そして、その視線を双雅の隣、ゆっくりと身体を起こした白貴へと向けた。

彼はぼんやりと頭を起こし、目の閉じたその顔を涼二の方へと向け

る。

「貴方は、やっぱり……氷室涼二さんだったんですね」

「……今更言い逃れは出来ないか」

嘆息を漏らし、涼二は背中を壁に預ける。

彼はユグドラシルの人間であり、出来るならば関わりたくは無かった存在だ。

この姿の事、能力の事 相手に知られる訳には行かない。いざとなれば、殺さなくてはならないだろう。

が、そんな涼二の気配の変化に気付いたのか、双雅はいつも通りの調子のまま声を上げる。

「おっと、いくら女装が恥ずかしいからって、口封じってのは困るぜエ、涼二」

「女装言つな。こつちにも事情つてモンがあるんだよ。ユグドラシルの人間にこの力の事を知られる訳には行かない」

いずれは見せる事になるだろうが、それまでは隠し続けておくべき力。

切り札となり得るコレは、決して見つかる訳には行かない。

そんな涼二のプラーナの高まりを感じ取ったのか、白貴はびくりと肩を震わせながら声を上げた。

「僕は……誰にも、言いふらすつもりはありません」

「信用できないな」

「本当です。それに、僕は……もう、ユグドラシルに居たくありませんから」

「……何？」

白貴の言葉に、涼二は眉根を寄せる。

面白そうな表情でニヤついている双雅は無視し、涼二は彼に問いかけた。

「どういう事だ？ お前は仮にもユグドラシルの」

「僕は姉さんの……大神美汐の影でしかない。ここにいる以上、僕は永遠に姉さんの存在に劣等感を抱き続けるしかない。そんなのはもう……嫌なんです」

その言葉に、涼二は思わず目を見開く。

美汐の事を知り、その上で彼女を嫌う事が出来るものなど、涼二は今までに見た事が無かったからだ。

彼の稀有な能力がそれを防いでいるのか　涼二には分からなかったが、その言葉が本心である事だけは読み取れた。

彼は、この少年は、少なくとも美汐に対して恨みのような感情を抱いている。

「……分かった、今はそれを信じよう」

「……はい」

「で、だ　」

ほつと安堵の息を吐く白貴を他所に、涼二は双雅の方へと視線を向ける。

相変わらず軽薄な笑みを浮かべている彼へと半眼を向けつつ、涼二は苛立ちの混じった声を上げた。

「お前はこんな所で何してやがったんだ、このバカ」

「ひでエ言い草だな、オイ。素直に俺が劇を見に来たとか考えねエのかよ？」

「劇じゃなくてオペラだし、そもそもお前はそんなモノに興味ないだろうが」

バツサリと切り捨て、涼二は嘆息する。

相も変わらず軽薄な様子の双雅には、そんな態度も全く通用した様子は無かったが。

彼はその笑みを絶やさぬまま、にやりとした笑みと共に声を上げる。

「まあ正直な所を言うと、俺はその少年に興味があった訳よ」

「お前が、コイツに？」

涼二は確かに、何故双雅がこの少年を連れてきていたのかが気になっていた。

彼がこの場所に来た理由が、この少年に接触する為。

ならば、彼に対して一体どんな用事があったと言ってのか。

あまり自分の都合に他人を巻き込もうとしない双雅が相手だからこそ、その理由を読み取る事が出来ない。

訝しげに視線を細める涼二に、双雅はくつくつと笑いながら手を振った。

「ま、気にすんなつての。迷惑はかけねえよ」

「既に迷惑被ってるがな」

「カカツ、ソイツは確かにそうだな」

笑う双雅に、涼二は嘆息する。

何も分かっていない　と、小さく呟いて。

それを聞き取っていたのか、訝しげな表情を浮かべる双雅に対し、涼二は肩を竦めながら声を上げた。

「何遠慮してんだよ、このバカ」

「あん……?」

「俺とお前はダチだろ。一々俺に遠慮してんじゃねーよ。いいから、俺に頼れ」

それは、偽らざる涼二の本心だった。

ユグドラシルと言う戦場で戦っていた涼二にとって、双雅と桜花おうつかの二人は日常の象徴。

それ故に、涼二も仕事の内容を二人との付き合いで持ち出す事は無かった。

そしてそれは双雅も理解しており、本当にどうしようもなくなった時にしか涼二を頼るような事は無かったのだ。けれど

「今の俺は、もうお前と同じような状態なんだよ。二足草鞋じゃない、俺はもう非日常の世界に入り切ってる。たまに元の場所に戻って来てるだけだ」

「……お前」

「だから、もう巻き込むだの何だのは気にするな。例えどうなったって、お前を責めるような真似はしない」

そんな言葉に、双雅は目を見開く。

始めてその軽薄な表情を崩していた彼は、やがてくつくつと笑い声を零し始めた。

そんな様子に、涼二は訝しげに眉根を寄せる。

しかし双雅は涼二の表情には気付かず、やがて大きな笑い声を上げ始めた。

「クハツ……はははははははっ、ひー、あー。流石だぜ涼二。そんな格好で言われたら惚れちまいそーだ」

「……冗談になってないからやめろ、気色悪い」

涼二にとっては記憶の中でかなり美化されている存在である、氷室静奈の姿。

それは、彼にとって最も理想的な女性とされていた。

故に、美しいという言葉は真に受けてしまう部分があるのだ。

そんな形で顔を顰める涼二に、双雅は尚も笑い声を上げながら涼二の肩をバシバシと叩き、声を上げる。

「安心しろって、男とよろしくヤル趣味はねエ。見た目が極上でも、中身がお前じゃなア」

「余計なお世話だっつーの。で、話すのか話さないのか、どっちなんだ？」

「話す話す、ある事ない事語っちまうぜ、オイ」

「無い事は要らん」

肩を叩く双雅の手を払い除け、涼二は小さく嘆息した。

上機嫌な様子になった双雅なら、確かにいらぬ事まで話し始めかねない。

無いように気をつける事を決意しつつも、涼二は彼の正面に座り直し、聞く体勢を作った。

その中間から少しずれた位置に座る白貴は、二人の様子を見守るように沈黙している。

そして、ある程度時間をかけて笑いを収めた双雅は、一度深呼吸してから口を開いた。

「はー、っと。さて、どっから話すかね」

「とりあえず、そいつを攫おうとした理由は何だ？」

「ああ、そいつね。一応そのポーズには話したんだが、そいつの能力を使つて欲しくてな」

「《古木トルイの魔術師》を？」

彼の話に関しては、涼二もそれなりに詳しく知っていた。

直接話した事は殆ど無いが、彼に関してはいつも美汐に言っただけで聞か

し



(そんな溺愛する弟から嫌われていたとはね……大丈夫か、あいつ?)

人前では決して弱さを見せようとしないう美汐の姿を想いだし、涼二は小さく肩を竦める。

今は白貴の事を探して右往左往しているのだろう　　が、事が終わって一人きりになれば、盛大に落ち込んでしまうのではないか。人の上に立つからこそ、常に英雄として在ろうとするからこそ、本当の彼女を知る者は少ない。

気にはなつたが、今それを気にする暇は無い。若干の心配をかぶり振って消し、涼二は肩を竦めつつ声を上げた。

「それで何する気だつたんだ、お前は。ユグドラシルの重鎮でも暗殺するのかわ？」

「あー、それはそれで面白そうだけどよ。生憎と、誰かを攻撃するのは目的じゃねえよ」

ちらりと横眼で白貴の様子を見つめ、双雅はそう口にする。

そんな彼の言葉に、涼二は首を傾げていた。

白貴の持つ能力のキャンセルは、あくまでも攻撃の為の能力。

それを向けられれば、涼二でも防御は難しい代物である　　躲す事は難しくないが。

「じゃあどういつつもりだ、双雅。わざわざこんなリスクを冒す必

要があるのか？」

「これだよ、これ」

言つて、双雅は己の首筋を叩く。

いつも通り、そこに嵌められているのは少々大仰な首輪。

普段とまるで変わらないそれに対し、涼二は思わず眉根を寄せる。

「……それがどうしたつて？」

「こいつはな、『グレイプニル』っつー道具なんだよ。面倒臭い事に、つけた人間のプラーナや能力を抑え込みまうっつー代物だ」

「ッ！」

双雅の言葉に、涼二は大きく目を見開く。

それは、以前に関わった事件にて中心に存在していたものの名前だ。装備した者のプラーナとルーンを抑え込み、能力を抑制してしまう拘束具。

「幼い頃にこれをつけられてな。まあ、危険な能力者だつて事でユグドラシルに狙われてたんでよ、これをつけて能力を隠す事で逃げおおせた訳なんだが」

「……それを、壊すために？」

「僕ので壊せるかもしれないから、と。それで……やるんですか？」

「おう、頼むぜ。貫通させないように気を付けてくれよ？」

再び手の中に弓を発生させる白貴と、顎を上げて堂々と待ち受ける双雅。

そんな二人の姿に、涼二は込み上げる笑いをこらえきれずに口元を抑えていた。

そんな彼の様子に、残る二人が首を傾げる。

「おい、何だよ涼二」

「いや、何つーか……色々予想外で。って言うか……まさかとは思うが、《悪名高き狼》<sup>フローズワイトニル</sup>ってのはお前の事か？」

「……ッ!？」

涼二の言葉に、双雅は大きく目を見開く。

その名は、かつてユグドラシルによって危険とされ、処分されそうになっていた強大な能力者の呼び名。

かつて僅かに耳にし、そして最近スリスから伝えられたその名

しかし、流石の涼二も、その名と双雅を結びつけるような事はしていなかった。

けれど、それならば辻褄は合う、と涼二は胸中で頷く。

そして何より、双雅の浮かべる驚愕の表情が、それを肯定していた。

「お前、何でそれを……!？」

「まあ、前に小耳に挟んでな……だが、納得できた。だからお前は『グレイプニル』を外そうとしてたって訳か」

「あ、ああ。ま、そーゆーこった。つー訳で、邪魔すんなよ」

「いや、そいつは聞けないな」

「……あん？」

訝しげに、双雅は眉根を寄せる。

そんな彼へと向け、涼二は肩を竦めつつ言い放った。

「それを外すのはいいが、お前が死ぬかもしれないんだつたら意味が無い。そんなリスクを背負わせる訳にはいかねーよ」

「悪いな、涼二。こいつを外す方法はねエんだ。お前、『グレイプニル』の事は知ってるんだろ？ こいつを外す方法は、殆ど存在しねエ」

「ああ、知ってるさ。と言うより、基本はたった一つ……元となつた力よりも強力なThスリサスの能力で上書きする事だろっ？」

「そうだ。だから無理なんだよ。コイツは神話級能力者のルーンで作られた。その方法じゃ、コイツを外す事はできねエ」

「たった一つだけの例外を除いて、だろ？」

「ああ。だが、そんなもんでも無く探すより」

そう告げようとした双雅の目の前に、掌が差し出される。

涼二は双雅の言葉を遮るようにながら、その右目に宿るルーンを輝かせた。

刻まれたルーンはThスリサス　その青紫の輝きに、双雅は大きく目を見開く。

「お前、それは……！」

「コレは、俺の姉さんのルーンだ。姉さんの持っていた、Thスリサスの始祖ルーン」

そう、それこそが唯一の例外。

フェアブル  
神話級の力を持つルーンを越えた、全てのルーンの頂点に立つもの。全くもって傑作だ、と涼二は胸中で苦笑する。

涼二にしか外せない道具を、双雅はこの15年近くの間ずっと傍で装備し続けてきていたのだ。

偶然と言うよりも、むしろ何かの作為を感じるこの事態に、涼二と双雅は二人して嘆息を吐き出す。

「まあ、ともあれ……お前の拘束を解いてやるのは構わないと思ってる。けど、これから先は俺達に協力してくれないか？」

「協力？ お前、確かに何か色々やってたみたいだが……何が目的なんだよ？」

「俺達……ニヴルヘイムは、かつてユグドラシルによって何かを奪われたもので構成されている。まあ、例外はあるが。まあ、グループって言うより、それぞれの目的を果たす為に手を貸し合ってるよ。うなもんだ。」

お前も狙われてたって言ってたな。まあ、お前が復讐を望むかどうかは知らないが……手伝ってくれとありがたい」

かつてユグドラシルに危険視されていたほどの能力者。それは、涼二にとっても喉から手が出るほど欲しい存在だ。

彼としても、それが自分の幼馴染であり、さらに自分の能力でかせを外す事が出来るというのは、一体何の皮肉なのだと言いたい所ではあったが。

ともあれ、そんな涼二の言葉を受けた双雅は、小さく肩を竦めて見せた。

「別に、復讐とかはどうでもいいんだけどな」

「……そうか」

「けどよ」

『グレイプニル』を外す事を交換条件にするつもりまでは無かった為、涼二は双雅の言葉に表情を曇らせる。

が、それに続くように双雅は声を上げた。

その顔に、いつも通りのシニカルな笑みを浮かべて。

「ユグドラシルに喧嘩売るなんて、楽しそうじゃねエかよ。何で最初から声掛けねエんだ、お前？」

「……お前な」

「くははっ。ま、とにかくやってやるよ。ただし、細かい指図までは受けねエぞ？」

「ああ、分かってる。頼りにしてるぜ、相棒」

互いに言葉を発し、そして互いに苦笑する。

幼い頃から共に在った、唯一互いに対等であると認める存在。

そうであるが故に、彼らは誰よりも深く互いの事を理解しあっていた。

そんな二人の様子を、どこか羨望のようなものを込めて見守っていた白貴は、次の瞬間ふと顔を上げていた。

「このプラーナ……お二人とも、姉さんが近付いてきます」

「っと……流石の感知能力って言った所か？」

「それが取り柄ですから。やるなら、急いでください」

「だそうだが、涼二。頼んでいいか？」  
「ああ」

頷き、涼二は双雅の『グレイプニル』へと手を伸ばす。

長年彼を縛り続けていた枷。それは、同時に彼の命を護り続けてきたものでもあった。

けれど、それはもう必要ない。

「スリサズ  
Th」

「

その力を塗り潰すように、涼二の力の波動が放たれた





「ッ……」

能力を使いながら瞳の痛みを感じ、涼二は若干顔を顰める。

本来己のものではない両の瞳に刻まれた始祖ルーンを、涼二は一点に絞って高い出力で使う事が出来ない。

普段ならば、四つのルーンの力全てを掛け合わせて使用している為、それほど問題はないのだが

(コレは、ちょっとしんどいな……)

しかし、その鈍い痛みを隠すようにしながら、涼二はじっと双雅の首元に集中してゆく。

そこに嵌められた首輪　彼の力を封じるそれを、己の力で塗り潰してゆくように。

以前ガルムを拘束していた『グレイプニル』を外す時には、これほど苦労する事はなかった。

あれは神話級の能力者によって作られたものではなかったからだ。

「氷室さん、急がないと」

「分かっている……！」

白貴の声に、涼二は若干の苛立ちを交えてそう声を上げる。

『グレイプニル』の上書きは確実に進んでいる。しかし、彼らを追う美汐達の反応が近付いてきているのは確かだった。

この枷を外し切る前に見つかってしまえば、涼二はその姿のまま戦わなくてはならなくなる。

そのリスクは、何としても避けねばならないものであった。

仲間想いな美汐に見つかれば、自分の正体に気付かれてしまうかもしれない。そんな不安が、涼二を急かす。

「落ち着けよ、涼二」

「双雅……」

そんな切迫した状況の中でさえ、双雅は変わらぬ調子のまま声を上げた。

口元に浮かんでいるのは相変わらずの余裕ぶった笑み。

そんないつもと変わらぬ彼の在り方に、涼二は若干の落ち着きを取り戻していた。

(そういえば、昔から全員を引っ張ってきてたのはコイツだったか)

悪ガキで、いつもいつも孤児院の先生達に注意されてばかりいた双雅　けれど、涼二も桜花も、彼と共にいる事を止めようとはしなかった。

その理由を具体的に言葉にする事は出来ないが、けれど確かに、二人は安息を感じていたのだ。  
それと同じものを味わい、涼二の表情は和らいでゆく。

「力みすぎんな、ってトコだ。落ち着いたか？」  
「ああ」

苦笑し　涼二は、さらにプラーナの出力を高めた。

『グレイプニル』のみを狙い、その他にプラーナが漏れ出さないよう精密に操作しながらも、さらに出力を高める　それは、涼二の制御能力をもってしても難易度の高い行為だった。

目に響く痛みに耐えながらも、涼二はひたすら集中して『グレイプニル』を侵食してゆく。  
背後に美汐の気配を感じ取る余裕すらなくなり、痛みに意識を朦朧とさせながら、それでも

「ぐくく……ッ！　な、めるなッ！」

涼二は、その力で『グレイプニル』を埋め尽くした。それを確認すると共に涼二の力は霧散し、同時に双雅の首から大仰な首輪が独りでに外れて転がり落ちる。

その首には、傷痕のような二つのルーンが刻まれていた。

「ッ……サンキュー、涼二」

僅かに、双雅の体が震える。

けれどそれは、恐怖や痛みといったものではない。

彼の表情に浮かんでいるのはあくまでも歡喜、そして武者震いとも呼ぶべきもの。

右目を押さえながら息を整えていた涼二は、そのプラーナの高まりに残る左目を大きく見開いていた。

そして何より、その二つのルーンに対して。

「双雅、お前……！」

「これが俺って訳だ……恩に着る、借りは必ず返すぜ」

「ああ、それは存分にな……で、何するつもりだ？」

「いやなに、目の前にちょうどいい相手がいるんでな。ちつと肩慣らししてこようと思って」

その言葉に、涼二は絶句する事も無くただ大きな嘆息を吐き出していた。

一応ながら、その言葉は予想していたものであったからだ。

相手はユグドラシルディサスタイの災害級フアーブラと神話級の能力者。

普通ならば、たった一人の能力者が叶う相手ではない。  
だが

(……まあ、コイツだしな)

たった一つだけ確かなのは、氷室涼二という人間が上狼塚双雅という人物を信頼していると言う事だ。

涼二は、彼と幾度か若者らしいケンカを共にした事もある。

もしも危険になれば、彼はさっさと戦線を離脱する。勝敗になどこだわらない　涼二はそれを、十分に理解していたのだ。

そして何よりも、彼の首筋に刻まれたルーンが、彼の生存を後押ししてくれている。

それ故に、彼が双雅を止めるような事は無かった。

「……大丈夫、なんですか？」

「まあな。お前はとつとと涼二と一緒に逃げときな……　ツと、そう  
だ。忘れてたぜ」

そう呟き、双雅は懐から携帯電話を取り出す。

僅かな操作の後に彼はそれを耳元へと当て　その数秒後、口元  
に笑みを浮かべながら声を上げ始めた。

「おう、スヴィティ。こっちは終わったぜ？」

『……その様子じゃ、怪我は無いみたいね』

「今の所はなア。今からそっちに俺のダチが行くんで、先にそいつ

等連れ帰って保護してくれや」

『は？ アンタ、何言って』

「場所は予め指定した所だ。じゃ、頼んだぜ」

『ちよ』

それだけ一方的に言い放ち、双雅は通話を打ち切る。

呆れた表情の涼二は白貴の表情を受けながらも、彼は変わらぬシニカルな様子で声を上げる。

「ま、そういう事だ。お前ももうきついだろ、涼二。先にこの坊主を連れて脱出しといてくれ」

「……言っても聞かないんだろ？」

「よよく分かってらっしゃる」

ただいつも通りに笑う双雅に、涼二は嘆息を零す。

言っても無駄だと言う事は、十分に理解していたのだ。

それなりにプラーナも使っており、さらに出来るだけ力を晒したくない涼二としても、さっさと逃げる手段がある事は渡りに船である。手を伸ばして白貴の腕を掴みながら、涼二は右目を閉じつつ声を上げた。

「それで、その指定の場所とやらは？」

「ああ、この劇場の脇、一つ離れた路地の所だ。方角的には……向こうだな」

「スリス」

『あー、確認したよ。確かに方角的にも合ってるみたい』

周辺の情報を把握しているスリスの言葉に、涼二は小さく頷く。この部屋には窓もあり、逃げ出す事は難しくない。涼二としても、ここで戦線を離脱する事に異を唱えるつもりは無かった。

だが……一つだけ、やる事がある。

「双雅」

「おう、何だア？」

「お前が戦う事になりそうな能力者……その能力を伝えとく。怪我をされても困るからな」

「へエ、そいつは助かるぜ」

勝負の対等さ等にはこだわらない双雅に、涼二は小さく肩を竦める。

双雅は己の思うが侭に行動する獣のような存在だ。故に、その思考回路を把握する事は難しい。気を取り直しつつ、涼二は声を上げた。

「先ほど追いかけてきていたのは、《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》大神美汐と、確か《ヴァルキユリア戦乙女》把桐羽衣だ。そして、後からでも追ってきそうなのは、《レイヴァーティン災いの枝》たる磨戸緋織」

「どいつもこいつも、大層な名前だねエ」

「お前が言うか、お前が」

フロースヴァイトニル  
《悪名高き狼》なる名前をつけられている双雅へと突っ込みを入れ、涼二は嘆息する。  
けれど、その言葉を止める事はなかった。

「レイヴァーティン《災いの枝》は単純だ。あいつはカンKの始祖ルーン能力者で、ジュラJで作り出した剣を媒介に炎を操る。テイワスTで身体能力も強化してるがな」

「割と一般的な戦闘系能力者だな」

「ヴァルキユリア《戦乙女》はよく知らん。以前戦った事はあるが、少なくともジュラJとHの能力者である事は確かだな。九本の剣を作り出して、それを翼のようにしながら斬りかかってきた」

「何だア、また女の子に恨まれるような真似をしたってか？」

「人聞きの悪い事を言うな、このバカ」

涼二は再び嘆息する。

実の所、涼二はこの二人に関してはあまり警戒していると言っ訳ではなかった。

問題なのは、最後の一人なのだから。

「そして、最後の一人。《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》は」

一度睡を飲み込み、涼二はゆっくりと語り始めた。  
大神美汐が次期ユグドラシル総帥たる、その所以を



\* \* \* \* \*

「こつち……！」

「……思ってますが、どうやって探知してるんですか？」

ドレス姿と言う、あまりにも動きづらそうな服装のまま走り回る美汐へと、羽衣は半ば呆れを交えた表情で声を上げた。

彼女達はこの広い建物の中、連れ去られた白貴を追って走り回っていたのだ。

上手い事プラーナを抑えている為か、二人の探知能力では逃げた者達の力を感じ取る事は出来なかったのだが

(ホント、この人はどうやって探し出してるのかしら?)

先行する美汐を追いながら、羽衣は胸中でそう独りごちる。

彼女としても認めざるを得ない。大神白貴、そして先程の男へと声をかけていた女性は、明らかに高位の能力者であると。

あれだけの技量を持つ存在ならば、己の持つプラーナを完全に抑え込み、追跡を撒く事はそれほど難しい事ではないのだ。

けれど、そんな中でさえ、美汐は迷う気配すら無く廊下を駆け抜けて行く。

ドレスのせいでその速度は若干遅いが、それでも驚くべきスピードであった。

（あの男の方のプラーナを感知してる？ いえ、でもあの男の力はそれほど強力ではなかった。なら……本当に、勘？）

それこそまさかだ、と羽衣は胸中で嘆息する。

勘で居場所が分かるのならば、誰だつて苦労はしない。

フェアリー神話級か、或いは始祖ルーン能力者に許された超感覚だとも言うのだろうか。

そんな事を考えていた羽衣は、僅かに冷気を感じ取って立ち止まった。

そんな羽衣の様子に気づき、美汐もまた足を止める。

「羽衣ちゃん、どうしたの？」

「ちゃん付けは止めてくださいと何度も……ええと、どこから冷たい空気が流れてきている気がするのですが」

「え……あ、本当だ！」

先程、あの男が逃げ出した時に、床に氷が張っていた事を思い返す。

盛大に転んで尻を打った屈辱を思い出しつつも、羽衣は冷静に周囲へと視線を向けていた。

あの時、あの男が能力を発動させた様子は無かった。となれば、あの女の声こそがその能力者であったと言う事になる。

（恐らくはIイサ ああ、胸糞悪いあの能力。あれの使い手が背後についていた。となれば、この近くの何処かにいる筈）

頷き、羽衣は感じた冷気をたどってゆっくりと歩き出す。敵が近づいている事を感じ、静かに能力を発動させながら。

「ジュラ、ハガラスH

《ヴァルキュリア戦乙女》」

その言葉と共に現れるのは、背中に広がる九つの長剣。

その内の一振りを右手に持ち、羽衣は静かに意識を研ぎ澄ませながら進んだ。

制服の上からわずかに覗く素肌が、刺すような冷たさを感じ取る。いかに冬とは言え、室内でそんなものを感じ取るような事はない。能力以外は。

「羽衣ちゃん」

「……はい。恐らく、あの扉です」

美汐の言葉に頷き

呼び方はもう諦めた

羽衣は刃の切

っ先で扉の一つを示す。

扉の下の床が僅かに凍り付き、若干白く霜が降りているそれ。

表決の能力で封じられたのであろうそれを見つめ、羽衣は静かに刃を構えた。

「扉を破ります。既に逃げられている可能性もありますが、敵がまだ存在している可能性は十分にありますので、美汐様も能力の準備を」

「うん、ありがとう、羽衣ちゃん」

言って、美汐は始祖ルーン

光を操るDタカスの力を発動する。

それと共に彼女の手の中には光の片刃剣が形成され、彼女はそれを軽く振って感触を確かめた。

その一振りに、羽衣は戦慄する。

(……凄いプラーナの密度)

自分が形成した剣を容易く寸断するほどの切れ味を持つであろうそれに、羽衣は覚えた嫉妬を抑え込む。

彼女は才能という言葉を嫌っていたが、それを感じずにはいられないほどの力であった。

認める他無いのだ

美汐は、緋織が言う通り強力な能力者であ

るよ。

かぶり振る。

(下らない、下らない嫉妬。そんなものは私に要らない。私はただ……お姉さまを、追いかけていればいい)

他の能力者などどうでもいいのだ。

自分が、そして自分のあこがれた能力者だけが強くなれば。故に、羽衣が許せないと思う者はたった一人しか存在しない。

「……行きます」

その憎き相手に刃を叩き付けるつもりで、羽衣は刃を振り上げた。

その、刹那。内部から、極大のプラーナが膨れ上がった。

「ッ!？」

半ば反射的に、羽衣は全ての刃を防御に回して美汐を庇う。

そして次の瞬間、その刃達の内半分以上が叩き付けられた何かに寄って砕け散っていた。

「な……ッ!？」

いくら数を揃えているとは言っても、災害級の能力者である羽衣ディザスターの力で形成されたその剣は、決して強度が低いと言えるものではない。  
それを

(ただの拳で、砕くなんてッ!?)

羽衣は、内心で悲鳴を上げる。

砕け散り、プラーナに返され消滅してゆく剣の中。

見えていたのは、何の変哲もないただの拳だったのだから。

羽衣は美汐と共に後方へと跳躍し、再び剣を形成しながら強い視線を前方へと向ける。

そこに立っていた、大神白貴を連れ去った男に対し。

「貴方は……ッ!」

「おーおー、胸までぶち抜くつもりだったんだが、意外と硬かったなア」

その言葉に若干の戦慄を覚えつつも、羽衣は齒を食いしばって怒りの視線を向ける。

一体何が起こったのか、彼女にはまったく理解できていなかった。

先程話していた時、この男の力はそれほど強力な物ではなかった。

感じるプラーナは、精々の所で巨人級ティターンと言った程度。

全力を出すまでも無く制圧できると、ただあの余裕な態度だけが不気味だと、羽衣はそう思っていたのだ。そうだと、言うのに

「何よ、この力は!？」

「さアな? これは元々俺の力だぜ？」

「ふざけるな! 一体何をしたら、こんなに能力が強化される!？」

今、目の前の男から感じる力は、美汐と比べでも遜色が無いほどの巨大さだった。

間違いないく神話級フェアブラ。その力は、他を隔絶するほどに強大な物。

しかしそんな変化の中でも、男は一切態度を変えることなく、軽薄な笑みのまま声を上げる。

「言ってるんだろ、これは元から俺の力だつてな。ただ、今まで強制的に力が抑えられてたつてただけだ」

「力を抑えられて……?」

「まアな。ま、そんな事より……諦めの悪いもんだなア、お嬢さんよ」

「……白君は、何処ですか」

荒れ狂うプラーナの中、進み出た美汐は様子を変える事も無くその口にする。

しかし、そこに浮かべられている表情は、先程までよりも遙かに緊迫したもの。

それを受け、男はただただ皮肉った笑みを浮かべる。

「オイオイ、過保護すぎるってのは育てる上でよろしくないぜエ、お嬢さん。もうちよっと自由意思を尊重させてやらなきゃな」

「自由意思を認めるって言うのは、決して悪い人とするむのを見逃すと言う事ではないと思いますか？」

「クハハツ、いや確かに、それはその通りだわ」

愉快そうに　　ただ愉快そうに、彼は笑い声を上げる。

しかし、二人の強大な能力者から放たれ続ける力は、留まる事なく高まり続けていた。

そんな力の奔流に息を飲みながら、羽衣はごくりと喉を鳴らす。

「つつてもまア、選んだのは俺じゃないし？　勝手に付いて来る奴の責任まで持てって言われても困るんでな。戻らないのはお宅らに責任があるんじゃない？」

「それはその通りかもしれない。だからこそ、白君とは話し合わなきゃいけない。嫌われてるならそれだっていい……それでも、互いが抱いている想いを知る事すらできないのは、悲しい事だから」

「ハツ……成程成程、こいつは出来たお嬢さんだ。が　　生憎と、お願いは聞けないね」

刹那、方向性を定められず放たれていたプラーナが、男の首筋に集中する。

その高まってゆく力の中で、愉悦と戦意に燃えた笑みを浮かべながら、男は　　獣のような男は、ただただ歓喜の咆哮を上げた。



「俺の憂さ晴らしに、付き合っ  
て貰わなきゃならねエからな！」  
T、  
R、  
J

彼の首筋に刻まれていたルーンに、羽衣はこれ以上無いほどの驚愕を覚えていた。

そこにあつたのは、二つのルーン。傷跡のように、直接身体に溝として刻まれた、原初のルーン。

TとRの始祖ルーンだった。

男の咆哮と共に、その体の表面を黒ずんだ銀が多い始める。

腕も、足も、胴も、その頭すらも、Jによって発生した金属によって覆い尽くされて行く。

鉤爪のように尖った指先、肘から伸びる刃のような杭、背中に二本曲線を描いて伸びている翅のような刃。

そしてその頭部すら、鋭く尖った狼の頭部のような兜に覆い尽くされ、その獣は完成する。

「  
《悪名高き狼》  
」

鎧の奥で表情を喚起に染め、男はそう宣言する。

かつて、滅びの始まりとなると予言された、最悪のルーン能力者それが今日、この地上に復活した。



ハカラス  
Hの力で空を駆け、涼二は双雅が指し示した方角を目指す。

腕に抱えた白貴は出来るだけ揺らさぬよう心がけ、指定された車を発見した涼二は、ゆっくりと地面に降り立った。

空中で酔ったのか、若干ふらついている白貴を地面に降ろし、涼二は軽く車の窓を叩きながら声をかける。

「おい、アンタ」

『っと……ちょっと驚いたわ』

窓越しにくぐもった声が響き、そこから一人の女性が顔を出した。青みがかかった銀髪と空色の瞳をした女性。スヴィティは、それと同時にその眼を瞬かせる。

「あら……どちら様？」

「おい、双雅から話を聞いてたんじゃないのか？」

「え？　じゃ、アンタが涼二？」

「……ああ、そうだ」

脳裏に双雅の姿を思い浮かべ、涼二は思わず眉根を寄せていた。

涼二が今女性の姿へと変化している事を、双雅は伝えなかったのだろう。

間違いなくわざとであろうそれに嘆息しつつ、涼二は近くに立っていた白貴を引き寄せた。

「大神白貴もここにいる。早目にここを離脱して欲しい」

「成程……確かに、そうみたいね。それで、あの馬鹿は？」

「ああ、あいつなら」

涼二がそう呟いた、その刹那。

若干離れた劇場からガラスの砕け散るような音が響き渡った。

咄嗟に振り返れば、涼二の目に空を射抜くように放たれた光条が映る。

空の彼方へと消えて行くそれに、若干の頭痛を感じて彼は嘆息した。

「……多分、あそこだ」

「あー……ったく、あのおバカは」

「あの、早く行った方が……姉さんに気付かれるかもしれないですし」

「っと、そうだったわね。さっさと後ろに乗りなさい」

その言葉に頷き、涼二は車のドアを開けて白貴を中に押し込む。そして自分も乗り込みつつ、襟元のマイクへと小さく語りかけた。

「ルート上の監視カメラの類、頼んだぞ」

『広くて面倒だなあ……了解。それじゃ、また後でね』

若干の不満を交えつつも、涼二の言葉を違える事無く、スリスは同意の言葉を発する。

そんな彼女の返事に満足しつつ、涼二は席に座り込んで扉を閉めた。細かな振動を発するエンジンが動き出すとともに、涼二は一度窓の外へと視線を向ける。

彼は、そこに見える光へと、名残惜しそうな表情を浮かべていた。

「クハハハハハッ！」  
「く、う……ッ！」

建物内で神話級同士の争うのは危険であるという認識の下、羽衣たちは窓の外へとそれぞれの能力を使って飛び出していた。

そんな中、二本の剣を交差し、羽衣は突き出されてきた拳の一撃を辛うじて受け止める。

しかしその衝撃を完全に殺すには至らず、彼女は自ら後ろへと飛ぶ事で何とか体勢を持ち直した。

そして舌打ちしつつも、砕け散った剣の代わりに、剣翼の中から二本の剣を選び直す。

Hの力で空を駆けながら、羽衣は飛行能力を持たないはずの相手に苦戦していた。

(何て威力……力の節約なんて、する余裕も無い)

形成した剣で効率よく戦うのが羽衣の戦闘スタイルだが、今回の敵 フローズサイトニル 《悪名高き狼》上狼塚双雅の一撃は、難無く彼女の剣を砕いてしまう。

全身を獣のような装甲に包まれ、要所要所から飛び出した刃を振る

う全身凶器。

それが、ただの能力者の行った事であったならば、ただの愚か者だと断じられるだろう。

羽衣の、そして美汐の刃を受け止めるほどの強度を持つ鎧。それにはそれだけの重量があり、普通ならば歩く事すらままならない物のはずだからだ。

「<sup>ティウス</sup>Tの、始祖ルーンなんて……」

身体強化のルーンたる<sup>ティウス</sup>T。その最上位のルーンを持つからこそ、双雅はその不可能を可能にしていた。

バケモノじみた 否、本物のバケモノが持つタフネスと、常識外れの攻撃力。

しかし、双雅の持つ力はそれだけではなかった。

「たあああああああッ！」

「うおつと、あぶねエあぶねエ」

背中に光の翼を展開し、光の尾を引きながら駆け抜けた美汐の剣を、双雅は後方へ跳躍する事で回避する。

その回避距離は、一瞬で数十メートルと言う長さまで達していた。空中に小さな金属塊を形成した双雅はその上に立ち、鎧の奥でくつくつと笑い声を上げている。

「ほらほら、俺はここにいてるぜ？ ちゃんと狙えよな」

相も変わらず馬鹿にしたような口調でそう言い放つ彼に対し、羽衣は苛立ちを交えて視線を細める。が、それでも思考は冷静さを保ち、羽衣は必死に相手の分析を行う。能力の強度でも、プラーナの量でも圧倒的に劣っている自分は、どのように動けば勝ちを手に入れる事が出来るのか。才能の不足を努力で補った羽衣だからこそ、この場で冷静さを失う事は無い。

(相手のルーンはTとRとJ……内、TとRは始祖ルーン。一人で二つの始祖ルーンを持つてるなんて、美汐様に並ぶバケモノじゃないの)

胸中で舌打ちしつつも、羽衣は駆ける。

羽衣もまた、Rのルーンを持つ者。能力で劣る相手に届かずとも、反応できないと言いつ訳ではない。

背中の剣翼に嵐を纏わせ、羽衣は神速と共に双雅へと刃を振り下ろした。

その刃に、雷を纏わせて。

「はあああああッ！」

「やる気満々だねエ」

Rの加速を使用しながら、気の抜けた声を上げつつ双雅は身を躲す。



対し、羽衣は再び小さく舌打ちした。  
本来ならば、ここで背中<sup>の</sup>刃を飛ばし、相手に追撃を当てる所だといふのに、それが出来なかったのだ。  
例えそれが本気で投げ放たれたものであったとしても、双雅の拳の前には一撃で粉碎されてしまう。

（本当は、私一人で戦うべきなんでしょうけど　　）

巨大な光線を放つ美汐をちらりと視線の端で捉えつつ、羽衣は再び宙を駆ける。

いかな羽衣とて、自分一人で神話級<sup>フェアブラ</sup>の能力者と渡り合えるなどとは思っていない。

それも、始祖ルーンを二つも持つようなバケモノとは。

護衛としては美汐を下がらせ、自分一人で戦うべきなのであろうが

（私一人では、到底無理）

冷静に、羽衣はそう判断する。

あの強大な能力者と相対するには、美汐の力が必要であると、羽衣はただ淡々と事実を認めていたのだ。

が　　そんな羽衣の考えを尻目に、何を思ったか、美汐はその場で動きを止めてしまった。

「羽衣ちゃん、行って！」

「　　っ!？」

その脇を通り過ぎながら、しかし止まろうとしない己自身に驚愕しつつ、羽衣はまっすぐに双雅へと突撃してゆく。

一人では到底敵わない。美汐と共に攻めかからなければあつという間に押し返される。

それは、美汐も分かっている筈だ。

故に、この選択は悪手と言わざるを得ない。その筈なのに

(何故私は、止まろうとしていない!?)

それどころか、ますます速度を上げて強大な敵へと向かって行っている。

それは美汐の持つGゲーボの力によるものなのか。

それとも、彼女の持つ別の何かがそうさせたのか。

それは羽衣にも分からない。けれど、一つだけ確かな事があつた。

「ゲーボ G、ダガス D、オセル O　　」

美汐が強大な力を発動しようとしている、その事実だけがその溢れるようなプラーナに背中を押され、羽衣はただただ空を駆けける。

そんな彼女の耳に、双雅の僅かな声が届いていた。

「へエ、コイツが」

その言葉に、羽衣は思わず眉根を寄せる。

その言葉の意味が分からないのだ。これではまるで、この男は美汐の能力を知っているようではないか、と。

そんな疑問を抱きながらも、羽衣は刃を振り上げる。

そして、それと同時

「  
《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》！」

美汐の叫びと共に、黄金の輝きが周囲に展開された。

そしてそれと同時に、羽衣はその力の性質を理解する。

オセル  
Oのルーンは、一定の領域内に特定の効果を発生させるもの。  
美汐がその力を使った場合には

（ 能力全体の、強化なんて！ ）

驚愕と高揚を交えつつ、羽衣は刃を振り下ろした。

その剣速は、普段とは比べ物にならないほどに速く、鋭い。

そして迎撃に突き出された拳と打ち合っても、彼女の剣が碎ける事はなかった。

それは即ち、能力全体が強化された事の証。外部から注ぎ込まれたプラーナによって、羽衣の力は確かにその強度を増していた。

純粋な破壊力では、緋織に遠く及ばない。

細やかな制御力も、涼二に届く事はない。

しかし美汐には、次期総帥と呼ばれるに相応しい能力があつたのだ。王として兵を率い、兵を束ね、誰もが英雄となれる力を分け与える。それが彼女　　大神美汐の能力だった。

「はあああああッ！」

「カハハッ！　いいね、面白いぜお前らア！」

双雅は歡喜の咆哮を上げる。

そんな彼の言葉に対し、砕けることになつた剣を振るいながらも、羽衣は眉根を寄せていた。

美汐の能力は、白貴のそれと同様に、通常ではありえないほどに珍しいものだ。

しかし、双雅はそれを見てもまるで動揺する気配が無い。

（肝が据わっているから？　いや、そんな理由ではありえない……この男は、最初から美汐様の能力を知っていた！？）

一体何故、という疑念が浮かぶ　　刹那、眼前に突き出されてきた杭に対し、羽衣は戦慄を覚えながらそれを打ち払いつつ飛び退いた。

双雅の肘打ち。彼の肘から生えた杭のような刃が、彼女の頭蓋を貫こうと迫っていたのだ。

「おいおい、よそ見してんじゃねエぞ！」

「ち……ッ！　この獣が！」

「カハハハッ！ 全くその通りだなア、オイ！」

獣と呼ばれ、それでもただ愉快そうに双雅は笑う。

その背中に生える刃の翅は、その咆哮と共に鎌首をもたげた。

相手の命を刈り取る、死神の鎌のように。

双雅は腕を交差させ、その鉤爪、肘の杭、背中の鎌の全ての刃を前面に出した構えを取る。

その体勢に、羽衣は相手が何をしようとしているのかを理解した。

そして

「羽衣ちゃんッ！」

「ッ……！」

背後から、声。

ちよつど真後ろから響いたそれに、羽衣は戦慄する。

この位置関係      この場所に押しやられたのだと、彼女は同時に理解していた。

もしも避ければ、美汐に直撃してしまう、と。

「さア、どうする《戦乙女》<sup>ヴァルキユリア</sup>さんよ      ツ！」

「くっ！」

舌打ちし、羽衣は全ての刃を前面に出し、防御の構えを取る。

そしてそれとほぼ同時、双雅は空中に作り上げていた足場を蹴った。

同時、<sup>ティウスラド</sup>TとRが効果を発揮する。

刃を纏う金属の塊は刹那の内に神速を得て、一瞬と言つ間すら置かず、正面から羽衣の剣へと直撃する

「やらせないッ！」

しかしその前に、立ちほだかった一振りの剣があった。

その刃は炎を纏い、双雅の身体を打ち払う。

そしてそれと同時に放たれた炎が、その身体を容赦なく包みかけるが、彼は瞬時に後退する事によって難を逃れた。

「つとオ……真打登場つてか」

作り出した足場の上に立ち、双雅は鎧の中でシニカルな笑い声と共にその声を上げる。

対し、現れた少女　磨戸緋織は、その炎を纏う刃を構えつつ、静かに視線を細めて見せた。

「……予言のイメージとは随分違うけれど、敵である事は間違いないな  
さそうね」

「お姉さまッ！」

「緋織ちゃん、オペラは!？」

「僅かな合間に交代してもらいました……全く、一人で先走って」

「あ……あ、あはは」

美汐の誤魔化すような笑みに、緋織は肩を竦めながら嘆息する。そして、無造作に刃を横に薙ぎ払った。同時に、甲高い音と共に刃は途中で静止する。そこに立つ、双雅の右腕に受け止められて。

双雅は小さく笑みを浮かべ、残る左腕で緋織の脇腹を狙った。

「爆ぜろッ！」

刹那、二人の間に発生した火球が強烈な爆発を起こした。

常人なら容易く碎け散るであろうそれを間近に受けながら、しかし両者は全くの無傷で跳び離れる。

緋織は距離を置いた相手の姿を観察し、静かに嘆息を零した。

「成程、確かに強い相手らしい……こんなモノに二人で挑んだ理由は、後で追及させて頂きます」

「ひ、緋織ちゃん……」

「それよりも今は」

呟き、緋織は一度剣を消失させる。

しかしその構えは変わらず、踏み込む隙を見せないそれに、双雅は僅かに感嘆の吐息を発した。

そしてその背後には領域の展開を終えた美汐が、さらに緋織の補助をするように、羽衣がその刃を構える。

「カン K、ジュラ J、テイワズ T

」

放たれるのは、紅に染まるプラーナ。  
その莫大なエネルギーを全て炎に変換しながら、緋織の手の中には一振りの長剣が現れる。  
先程彼女が持っていた簡素なそれとは違い、柄には細かな装飾が施され、そしてその刀身は紅に染まっていた。  
莫大な熱量を誇る炎の剣。ムスベルヘイムの長、実働部隊最強の能力者に許された、その力

「  
《レイヴァーティン災いの枝》  
」

荒れ狂うプラーナが、熱風となって周囲に吹き荒れる。  
その物理的な圧力に、双雅はただただ歓喜の笑みを浮かべていた。  
美汐の能力によって後押しされたそれは、最高位の能力者ですら届くかどうかわからないレベルに到達している。

( つつても )

小さな呟きと共に、そうがの鎧からは次々と金属の棘が伸び始める。  
そしてそれは、音速を遙かに超える加速と共に三人へと向けて放たれた。  
羽衣は面喰らったように目を見開くが、それよりも一瞬早く、緋織が真紅の刃を振りかぶる。



「はあッ！」

巻き起こった炎を壁のように展開され、そこに飛びこんだ棘の群れを瞬時に蒸発させた。

金属すらも瞬時に融解、消滅させるその熱量は、正面から受け止める事は不可能である事を示している。

しかしその時には、双雅は緋織を回り込むようにしながら美汐へと接近していた。

目を見開き、美汐は刃を構えようとする　　が、身体強化系や加速系を持たない彼女では、Rの始祖ルーンラトが放つ速さには到底届かない。

が、そこに割り込む影があった。

「美汐様！」

「退けザコがッ！」

九つの剣を盾にして、羽衣が双雅の突進ルートへと割り込む。

対し、吼えた双雅は、その突き出す拳にすら加速をかけ、神速の一撃を叩き込んだ。

拳は折り重なるように並ぶ剣達を一本、二本と碎け散り、プラーナへと帰って消滅してゆく　　そして、その一撃は剣が残り二本となった所で停止した。

その結果に、羽衣は思わず安堵の吐息を吐き出す。

刹那、美汐の悲鳴が響き渡った。

「羽衣ちゃん、危ない！」  
「え」

羽衣の視界に入ってきたのは、大きく広げられた四本の棒のようなもの。

昆虫の足にも似たそれは、双雅の背中から生えた四つの刃であった。一箇所だけ関節のように曲がるそれは、さしずめ蠶螂の鎌のような様相をしている。

その刃が勢いよく振り抜かれ、発生した光の壁が、それを受け止めた。

「み、美汐様！」  
「ッ……緋織ちゃん！」  
「言われなくとも！」

動きの止まった双雅へと、緋色の刃を振り翳す緋織が駆ける。

彼女はその長剣を相手の背中へと振り下ろそうと、裂帛の気合を込めて刃を振るう。

絶大なる熱量と破壊力を持つ一撃は、防御の始祖ルーンでも持たなければ防ぎ切れないほどに強力なもの。

しかし彼女は、背筋を駆け上った悪寒に従い、反射的に刃を止めて横合いに構えていた。

そしてそれとほぼ同時、彼女の剣に大きな衝撃が走る。

「な　　！？」

彼女の刃に叩きつけられていたのは、双雅の臀部より伸びた尻尾のような連結刃だった。

《レイヴァーティン災いの枝》に触れて若干融解しかかっているものの、その凶悪な様相は変わらない。

双雅の姿は、正しく全身凶器と呼べるものへと変化していた。

両側を挟まれた彼は、思い切り身体を回転させつつ美汐の障壁を蹴り、三人の傍から離脱する。

獣のような容貌、鉤爪の生えた手、杭の突き出た肘、薄い刃が伸びる翅、大きく広がった四本の大鎌、そして連結刃の尻尾。

最早人とは言いがたいその姿を纏い、双雅はただ愉快そうに声を上げる。

「いいねエ、面白エぜお前ら。ま、色々と惜しいがな」

「……………」

彼のその言葉に、緋織は目を細める。

彼女としても、それは百も承知の事だったのだ。

「確かに強エ、そののねーさんに全方位無差別爆撃をやられたら、流石に俺でも躲し切れる自信はねエよ。けど、そいつ等が邪魔で出来ねエんだろ？」

「……………貴様の目的は何だ」

「つれないねエ。ちつとは付き合ってくれてもいいだろ、隊長さんよっ」

「無駄話をするつもりは無い」

切っ先を向け、緋織はそう宣言する。

その背後には、相変わらず力を制御し続けながらも戦線に身を投じようとする美汐の姿。

彼女の力は確かに強い。だが、この場では

「お前さんの力は、強化なんかされんでも十分過ぎるモンだろ？」

皮肉なもんだ、仲間がいるより一人で戦った方が有利だってんだからなア」

「ッ……緋織ちゃん、私！」

「下がってくださるのは確かに私としても安心できますが　も  
う大丈夫です」

不敵な表情で、緋織はそう断言する。

そんな彼女の言葉に、双雅は訝しげに首を傾げ　それと同時に、  
周囲に満ちた気配に顔を上げた。

いつの間にか、地上と空中のそれぞれに幾人もの能力者が現れ、彼の事を取り囲んでいたのだ。

彼らはただの能力者ではない。全て緋織の部下であり、最強の能力者集団

「三対一では、貴様の方が有利だろう。けれど、我等ムスperlヘイムから逃げられるなどと、ゆめゆめ思わない事だ」

「……」

全方位から攻撃の意思を向けられている感覚に、双雅は動きを止めながら沈黙する。

否。彼の身体は、小さく小刻みに揺れていた。しかしそれは、恐怖や怒りといったものではない。それは、正しく

「く、か……カハハハハハハッハハハアッ！ ああ、いいないぜ、テメエはやっぱり面白い！ 流石、涼二が絶賛するだけの事はあるわ！」

「な……ッ！？」

大いなる愉悦を、その表に浮かべる。

そんな彼の発した言葉に、緋織は思わず言葉を失っていた。否、彼女だけではない。

「涼二……？」

「まさか、隊長！？」

以前からムスペルヘイムに所属していた者達。

彼らもまた、その名を聞いて冷静で居続ける事は出来なかったのだ。そして、双雅は決してその隙を見逃さなかった。

その体が、突如として爆ぜる。

「何!？」

吹き飛んだ鎧や刃が、弾丸となって周囲に襲い掛かる。

緋織は咄嗟に炎の壁を発生させてそれを防いだが、一瞬視界が遮られる事によって、双雅を捕らえる機会を失っていた。

彼は装甲をパージすると、瞬時にRのルーンラドを発動させ、神速で上空へと逃れていたのだ。

「じゃあな、楽しかったぜ」

「ま、待て！ 貴様は、何故涼二の事を

」

鋭く発せられる詰問の声。

しかし、それが最後まで告げられる事はなかった。

双雅はそのルーンの力ですぐさまトップスピードに乗ると、誰にも追いつけない速度でこの場を離脱してしまっていたのだ。

一瞬で見えなくなる姿を見送る他無く、緋織は悔しげに手を握り締める。

と　そこに、一人の男が肩を竦めながら接近した。

「残念だったな、隊長」

「……新森副隊長にいもり。いえ、私達の任務は美汐様の護衛です。それを失敗した訳では無いし、果たすべき任務も残っている」

「そうか……では、我々は元の持ち場に戻る。少々、動揺を鎮めるのには苦勞しそのだが……そちらはそちらで、頑張ってくれ」

「……はい」

返事はするものの、心ここにあらずといった様子で、緋織は双雅の去っていった空を見つめている。そんな彼女の様子を見つめ、美汐もまた、どこか後悔の混じるような表情を浮かべていたのだった。

03 - 14 : エピソード (前書き)

次回は11/10より連載します。



「はい、ここがあんた達に提供する場所だよー」

やる気のない声音で、スリスが後ろに立つ三人に対してそう告げる。

そんな建物の中の様子を見て、スヴィティは感心したように頷いた。

「へえ……いい場所ね。目に付きづらいのに、交通の便も悪くない」  
「おまけに、周囲には監視用の隠しカメラを大量に仕掛けてあるからねー……まあ、全部を制御できるのはボクぐらいだろうけど」  
「ハッハー、住めりや何処だってかわらねエさ」

そう声を上げたのは双雅だ。

彼は早速部屋の中に入り込むと、四角いテーブルに添うように置か

れていたソファに腰掛け、両腕を広げてくつろぐ姿勢を取る。そんな彼に対し、涼二は半眼を向けつつ嘆息した。

「お前な、いきなりくつろぎ過ぎだ」

「いいだろオがよ。くつろぐ為に貰ったんだ」

「隠れる為でしょ。しかも貰ったんじゃないんで借りただけ」

「あはは……」

後ろから双雅の頭を殴りつけるスヴィティと、彼らの様子に苦笑を浮かべる白貴。

何だかんだで纏まっている様子に安堵しつつ、涼二は周囲へと視線を向ける。

ここは、ニヴル Heim が使っているアジトの一つである。旧東京水没街にて彼らが使っていた本拠地とは違い、彼らが一時的に隠れる為に使っていたものだ。

人通りはあまり多くなく、さらに逃げる為の通路も多いと、目に付かないようにしているには最適な場所だったのだ。

流石にあの水没都市とは比べるまでもないが、あの場所は交通の便以下の問題があり、さらにはスリスの能力が無くては生活できないので、こういった密都にある建物を融通した次第である。

現在の所、双雅は指名手配のような状況となっている。

フェアリア 神話級能力者の犯罪者が潜伏していると言う話になれば大衆が混乱する為、流石に世間一般に対して情報が流布されている訳ではないが、それでも司法局などにはすっかり話を通ってしまったている。

「……まったく、あいつ等の前で顔なんか出すからだ、このバカ」

「まア、ソイツに関しては反省してるぜ。で、あのハカ桜花の方はどうなってる？」

「一応、路野沢の奴に頼んで秘密裏に保護して貰ってる。あいつの方に捜査の手が回る事は無い」

「そオかい。ンならまア、一応は安心か」

路野沢の顔を思い浮かべつつ涼二は肩を竦め、それに対して双雅もにやりと笑みを浮かべた。

互いに、自分達の裏にあの存在があった事は既に話してある。何故話さなかったのか、という事は気になったが、聞いても上手くはぐらかされるだけに終わってしまったのだが。

「……一応、言うておくけど」

「あん？」

と、そこで不満げに眉根を寄せていたスリスが声を上げる。

彼女の顔は返事をした双雅を無視し、一直線に白貴の方へと向けられていた。

スリスのプラーナが若干高まっている事に気付いたのか、白貴もまた彼女の方へと向き直る。

同じく全盲と言う障害を持つ二人　しかし、スリスの表情にはシンパシーのようなものは存在していなかった。

「涼二の友達である彼はいい。でもボクは、お前の事は認めない」

「おい、スリス？」

「元々、ユグドラシルの人間を許すつもりは無いんだ。裏切ったな

んで、そうそう信じられない」  
「……信じてくれとは、言いません」

スリスの敵意を感じ取り、白貴は若干声を硬くしつつもそう応える。

それに対しスリスも、態度を軟化させる様子も無く、睨みつけるような視線を向けていた。

が　そんな彼女の頭を、涼二は嘆息交じりに押さえる。

「わぶっ」

「落ち着け、スリス。少なくとも、コイツは敵としてここにいる訳じゃない。それに、もしも敵対するのであれば、すぐにも殺せる場所だろう」

「能力は危険だが、俺なら見てから避けられるしなア」

からからと、双雅は笑う。そんな二人の言葉に、スリスはとりあえず敵意を抑える　そんな気配は、存在していなかった。

自身の言葉をスリスがまるで聞き入れる気配が無い事に、涼二は思わず目を見開く。

例えばどんな事であれ、彼女が涼二の言葉を最終的に違えるような事は無かったと言うのに。

「スリス……？」

「ボクは、認めない……お前なんか仲間なんて、認めない！　お前のせいでボクはこうなっただぞ！？」

お前がそんな風に生まれてこなかったら　　！」

「っ！ 貴方は、まさか……」

自身の目を指し示しながら、スリスは絶叫する。

その言葉に涼二は目を見開き、そして白貴もまた思い当たる事があったのか、その表情に驚愕を浮かべていた。

そんな彼の言葉を肯定するように、スリスは尚も続ける。

「そうだよ、お前の目をどうにかする為の研究で、ボクは光を奪われたんだ！ ボク以外にも、沢山そんな人間がいたんだぞ！？ それなのに、自分は勝手に周囲を把握する方法を身につけて……ボクらの犠牲は一体何だったって言うんだ!？」

「お前……」

その怒りを、憎しみを理不尽と断ずる事までは出来ず、涼二は思わず沈黙する。

涼二も、もしも氷室静奈の死が全くの無意味だったと聞かされたとすれば、冷静でいられる自信は無かったのだ。

そんな彼女の様子に対し、白貴も申し訳無さそうに視線を伏せる。

彼もまた、ユグドラシルの裏側を知る人間だったのだ。

「……謝っても、貴方の気が済むとは思えない」

「当たり前だ……ッ！」

「だから……貴方の光を奪った人物の事を、教えます」

「……え？」

きよとん、とスリスは表情を失う。

その次に彼女の顔に浮かんできたのは、驚愕と期待の表情だった。今まで知る事の出来なかった本当の仇敵　ドヴェルクを操っていた存在。

「……………彼の名は、豊崎翔平。《豊穰の飛剣》と呼ばれる能力者です。

彼はドヴェルクの最高責任者で、母からの依頼を受けて僕の視力を回復させる為の研究を行っていたそうです」

「豊崎、翔平……………そいつが、ボクの……………！」

「お前とガルムの、だな。貴重な情報を感じする」

「いえ……………僕が原因である事は、確かですから」

「不可抗力だつてのに、変な事気にする奴だなア、おい」

「……………お前は気楽過ぎだ」

パタパタと手を振りながら声を上げる双雅に、涼二は嘆息を零す。けれど、思いがけず手に入れた情報に対し、彼は会心の笑みを浮かべていた。

この事は、スリスやガルムにとって大きな一歩となるのだから。

「まあ、何だ。とりあえず、よろしく頼むぞ、三人とも」

「おう、大船に乗ったつもりでいろよ」

「アンタが偉そうにすんじゃないっての」

再び、スヴィティがポカリと双雅の頭を叩く。

そんな様子を苦笑交じりに眺めつつ、涼二はふと、己の手の下から抜け出したスリスの方へと視線を向けた。

彼女は何も言う事無く、踵を返して部屋の中から出てゆく。  
けれど　同時に、白貴に対する恨み言を吐くような事も無かつた。

スリスの内心に気付き、涼二は小さく聞こえないように苦笑する。  
そして彼女がドアを閉じ、その姿が見えなくなった所で、そんな表情のまま声を上げた。

「どうやら、とりあえずは認めてくれたみたいだな」

「そう……なんでしょうか？」

「ああ。まあお前自身の事と言うより、お前がここに滞在する事を、  
って言う感じだったかな」

スリスも、己の心と折り合いをつける事は難しいらしい、と涼二は胸中で苦笑する。

結局彼女は、白貴を無視する事にしたのである。

今はそれ以上に重要な事が　豊崎翔平を調べると言う仕事がある。

彼女とガルムにとっての復讐対象。それは、今日の前にいるいつでも仕留められるような相手よりも、よほど重要な事だったので。

「まあ、しばらくはここに隠れているといいさ。何か頼み事があったら、また連絡する……それじゃ、またな、双雅」

「おう、何かあったら呼べよ」

すっかり部屋の主という風情になった双雅に苦笑しつつ、涼二は後ろ手に手を振りながら、ゆっくりとその部屋を後にしたのであった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

ユグドラシルの最上階。

そこに存在している総帥の部屋で、緋織は大神槍悟ではなく、路野  
沢一樹を前にしていた。

「ふむ、成程……次期総帥殿の護衛には成功したが、その敵は取り  
逃してしまった、と」

「……はい、申し訳ありません」

「いやいや、謝罪の必要は無いよ、レイヴァーティン《災いの枝》。君の任務はあく



までも、次期総帥殿の護衛なのだから。むしろ、敵を深追いしなかつた事を賞賛しよう。君は、立派に任務を果たしているよ」

ゆつたりとした拍手の音が広い部屋に響き渡る。

口に出されているのは賞賛の声。しかし、緋織にはそれが、どこか嘲っているようにしか聞こえなかった。

それは己の錯覚なのだ、と緋織は自身にそう言い聞かせ、路野沢へと向けて声を上げる。

「相談役、今回現れた敵に関してですが」

「ああ、報告書は読んでいるよ。行方不明になっていたTとRの始祖ルーン能力者とは、ね」

「……ご存知なのですか」

その言葉は問いかけと言うより、初めから確信を得て放たれたものであった。

路野沢は最初から、その報告で驚いた様子も、それどころか僅かな動揺すらも見せなかったのだから。

今でも彼はいつもと変わらぬ薄ら笑いを浮かべており、その抑揚の無い喋り方も変えずに声を上げている。

「その質問は肯定しよう、《災いの枝》レヴァティン。私は、この能力者の事を知っているよ」

「では、あの男は一体……？」

「さて……もう十二、三年前の話だがね。彼は、ユグドラシルによって危険視されていた強大な能力者だよ」

「ユグドラシル創設当時の？」

路野沢の言葉に、緋織は目を見開く。

そんな頃では、あの男もまだ幼い子供ではないか、と。

「いやはや、手違いがあつて逃げられてしまつてね……排除し損ねたが故のツケ、と言う訳だよ」

「そんな幼い頃ならば、排除せずともしつかりとした教育を施せば

」

「僕が決定した訳ではないのでね。問われた所で、答える言葉は持ち合わせていないね」

「あ……済みません、差し出がましい真似を」

言つて、緋織は顔を伏せる。

路野沢の口調には、決して責めるような色がある訳ではない。

彼はいつも通りに淡々と、いつも通りに薄い笑いを浮かべながら話しているだけだ。

それがたまらなく不気味で、緋織はただ静かに口を噤む。

「封じられた力も解き放たれた……まさか、君と次期総帥殿を同時に相手にして逃げおおせるとは。いやはや、想像以上のものだ、《フロレスヴィートニル悪名高き狼》の名は伊達ではないらしい」

「……それが、あの男の？」

緋織としては、ムスペルヘイムの面々が無視された事に不満を覚

えていたが、取り逃してしまつた以上、そう抗議した所で隊全体の恥になるだけの事である。

ならばここは口を挟まず、己だけの恥にしてしまつた方が良い

そう考え、緋織はとりあえず思いついた疑問を口にした。

路野沢は、そんな彼女の内心を知つてか知らずか、変わらぬ表情のまま声を上げる。

「その通り。破滅を生むとされた三つの力の内の一つだよ」

「三つ、ですか」

「そう………《死の女王》<sup>ニラルヘル</sup>、《悪名高き狼》<sup>フロースヴァイトニル</sup>、そして《世界を喰らうもの》<sup>ルム</sup> この名を持つ能力者が、やがて大いなる破滅を生むのだ、とね」

それが一体どのような能力者なのか、それは緋織には分からないけれど、その一角 《悪名高き狼》<sup>フロースヴァイトニル</sup> のみでも、あれだけの苦戦をしたのだ。

それほどの能力者が三人も相手になるとしたら。

(っ………！)

内心の戦慄を抑え、緋織はそつと視線を伏せる。

始祖ルーンを持つ神話級能力者である緋織とて、それに勝利できる自信は無かつた。

そんな彼女の様子に、路野沢は僅かに笑みを深くする。

「安心するといい。その一角  
のだから」

《死の女王》ニアルヘルは既に倒れている

「そう、なのですか？」

「ああ、そうだと。彼女は既に、総帥殿によって討ち取られているよ、安心したまえ」

その言葉に、緋織は僅かに安堵の息を吐く。

それは普通ならば気付かれぬほどに小さなものであったが、路野沢の浮かべる表情にどこか見透かされた気分になり、緋織は思わず眉根を寄せた。

やはり、この人物は苦手だ、と。

「……では、また指令がありましたら」

「ああ、引き留めてしまつて済まなかつたね。では、ごきげんよう」

やはり何か含みのあるような言い方に緋織は不快感を覚えるが、それでもこの男と顔を合わせ続けるよりはマシだと判断し、すぐさま踵を返した。

一応ながら退室の際には礼をし、けれどもそれを終えてからは一度も振り返る事なく、緋織はすぐさまその部屋から離れて行く。

そんな気配を感じ、路野沢はただただ楽しそうに笑みを浮かべていた。

「いやはや、嫌われたものだ」

「それも当然ではありませんか？」

ふと、声が響く。

背後から響いたそれに、しかし路野沢は振り返るような事もせず、ただ口元の笑みを深めた。

その口からは、やはり芝居がかった言葉が発せられる。

「おや……身体に障るのではないかな、《予言の巫女》殿？」  
「多少出歩く程度、大した負担にはなりませんから」

路野沢の隣を、ゆっくりと通り抜けるように、その人影は現れる。白いローブ 付いているフードを目深に被り、全身を隠すような風情を見せる女性。

無機質なその姿は、僅かに除く鼻先と口元だけが人間である証拠を見せていた。

彼女こそが、路野沢一樹の所有する始祖ルーン能力者、《予言の巫女》である。

彼女は路野沢とはまた違った、抑揚のない無機質な声を彼に向かって上げる。

「貴方は、何も教えてあげないのですね」

「おや、それは心外なお言葉だ。僕は、しっかりと情報を伝えた筈だが？」

「伝えた言葉はごく一部 事実であつても、真実とは言いがたいものです。彼女の不信感を募らせる事に、何か利点でも？」

どこか責め立てるように、《予言の巫女》はそう口にする。

しかし、それに対して路野沢は小揺るぎもせず、声を上げた。

「問題は無い。彼女は、僕の思う通りに動いてくれているよ」

「……私には、貴方が分からない」

少しだけ視線を逸らすようにし、《ヴォルヴァ予言の巫女》はそう呟く。

その言葉の中には、どこか恐れのようなものが含まれていた。

彼女はその力で、未来に起こる事を予言することが可能だ。

しかし、その力を以ってしても、この路野沢一樹と言う男の思惑を看破する事が出来ない。

それは、《ヴォルヴァ予言の巫女》にとっては何よりの恐怖と呼べるものであった。

「貴方は……一体何なのですか。何の為に、こんな事を」

「赦せないからだよ」

たった一言

ヴォルヴァ

けれど、その一言の中に深い憎しみを感じ取り、《ヴォルヴァ予言の巫女》はその身を硬直させる。

しかし路野沢はそんな気配を再び一瞬で消し、普段通りの抑揚の無い声音で続けた。

「赦せない、赦す訳にはいかないのだ。そう、僕は奪われた。故に

奪い返す　それが僕の願いだよ、《ヴォルヴァ予言の巫女》殿」

「貴方は、本当に……」

分からない　理解が出来ないと言う恐怖に、しかし《ヴォル予言の巫女》は抗いながら路野沢の前に立つ。  
分からない中でも、たった一つだけ分かる事を、口にするために。

「　　終焉の角笛は、遠からず鳴り響く事でしょう」  
「……ふむ」

「その戦いが貴方の望みだと言うのなら……私の最後の命脈は、この世界の為に使いますよ」

「それはそれは……ならば期待しているよ、かすみのみや霞之宮の英雄殿」

その、言葉に　　《ヴォル予言の巫女》は、決別するようにしながら  
路野沢の元から歩み去った。





## 04-1:プロローグ

それは、その日何処からともなく現れた。  
黒く染まる空、赤く染まる大地、そして漆黒の嵐を纏う巨大な姿。

『GuOooaaAaAaAaAhhhhhhhhhh  
hhh ツ!』

巨大な咆哮が、天高く響き渡る。  
それを発したのは、一頭の巨大な怪物だった。  
黒く染まった巨体、三対も存在する巨大な翼、鋭く尖った頭部に付いた七つの瞳は紅く燃え上がる。  
全てが漆黒に染まった巨大な龍。  
その胸元には、傷痕のようなルーンが強い輝きを宿していた。

「ニースホッグ《黒翼の悪龍》……ッ！」

逃げ惑う人々の内の誰かが、そう口にする。

世にも恐ろしいその姿は、この世界においてはあまりにも有名なものであった。

およそ十四年前に現れた刻印獣<sup>ルインクリーチャー</sup>。最高位のルーンたる始祖ルーンをその身に宿し、復興を始めようとしていた一つの国をあっという間に完全なる壊滅へと追い込んだバケモノ。

あらゆる国々がその被害に遭い、強力な兵器の使用すら考えられ始めていたその時、ニースホッグは突如として姿を消した。

何の前触れも無く、忽然と。

記憶とは、薄れるものだ。

しかし、届けられた映像を見た人々の記憶には、未だに《恐怖》としてその姿がこびりついている。

巨大な翼を広げて嵐を巻き起こし、遮るものをなぎ倒すその姿。

まるでプレーナを喰らう事だけが本能であるかのように、次々と逃げ惑う人々を貪ってゆく悪食の龍。

あらゆる兵器も、あらゆる能力も通用しない存在に対し、人々は『次は自分なのではないか』と言う恐怖に怯え続けていた。

そしてその染み付いていた恐怖が、突如として現れたこの怪物の正体を探り当てたのだ。

これは、十四年前の悪夢の再来なのだ、と。

逃げ惑う人々に、他者を気遣う余裕など無い。

弱いものは淘汰され、淘汰された者は龍によって喰らい尽くされる。

「うあつ!?!」

一人の少女が、足を取られて転倒する。

人を生きたまま喰らう悪龍は、近場に入る人間をその力で捕らえ貪りながらゆつくりと彼女は近付いてきていた。

「あ、あああああ……!」

絶望の声が、彼女の口から零れ落ちる。

逃げるべきだと分かっていたとしても、恐怖に竦んだ彼女の足は動こうとしなかつたのだ。

そしてそんな人々の絶望など意に介さず、黒き龍は己の願望を満たそうと歩を進める。

刹那。

「撃てええええッ!」

怒号が、周囲の絶望を掻き消そうと響き渡った。

それと共に、煙の尾を引いて無数の弾頭がニーズホッグへと飛来する。

超高速、超高性能のロケット弾は、ニーズホッグに反応の暇すら許さずに命中、その強大な威力を存分に発揮した。

距離が開いていたとは云えその爆圧に押され、少女は地面を転げるように吹き飛ばされる。

あちこちを打ちつけた痛みを耐えながら、ゆっくりとその身体を起こせば　彼女の視界には、軍服を着た男達の姿が映っていた。

「あ……！」

「生存者確認、彼女を避難させる！　奴は我々が引き付けるぞ！」  
『了解！』

駆けつけた軍人達の姿に、少女の目には希望の色が復活する。あの恐ろしいバケモノへと勇敢に立ち向かおうとする彼らに対し、彼女は今までの絶望が払拭されてゆくのを感じていた。

目の前の男性が、グチャグチャになって潰れるまでは。

「  
」

声を出す事すら出来ず、少女は目を見開く。

血が、肉が、内臓が眼球が骨が性器が　全て混ざり合って弾け飛び、降り注ぐ。　

暖かい真紅の雨を浴びながら、彼女はただひたすら混乱していた。先ほどの攻撃は絶対にあのバケモノの動きを止めていた筈だと言うのに、何故あの黒い龍は無傷なのか、と。

「隊長ッ！？」

「クソッ、撃て、撃てええええッ！」

銃が、或いは能力が、ニーズホッグへと向けて放たれる。

しかしその銃弾は全て黒い身体に辿り着く前に地面へと落下し、能力は消え去ってしまう。

対し、ニーズホッグはその真紅の瞳を向けただけで、何の前触れも無く人の身体を磨り潰してしまっていた。

「　　は。あ、はは」

少女の口から、笑いが零れる。

それは周囲の銃声は悲鳴、怒号や爆音に紛れて消え去る程度のものでしかなかったが　　彼女は、紛れも無く終わってしまった。狂笑を浮かべ、失禁し、涙を流し　　ほんの僅かに残った消え去る寸前の理性は、ニーズホッグの胸元に輝くルーンを見つめていた。

オセル

○　　有する力は何らかのルールを定めた領域の展開、および

土と重力の操作。

「は、はは……あははははっ、あははははあA a a hはh a あ a h  
あ a hはははh h a　　」

やがて周囲から完全に人の声が消えても、少女は笑い続ける。

目の前に、あれほど恐れていた巨大な龍がいる事すら認識せずに。

そして　　最早欠片も残さぬほど理性を失った彼女の笑い声は、さして間を置く事無く龍の口の中へと消え去った。

周囲に残されたのは、燃え盛り、瓦礫と化した街並み。

既に、人の気配など何処にも存在していなかった。

黒き龍は、ゆっくりと天を仰ぐ。

そしてその首は、何かを感じ取ったかのようにぴくりと反応し、ある方向へと向けられた。

『G r r r r r R……！』

ニーズホッグは小さく唸り、そしてその翼に巨大な風を纏う。

ハガラス Hの力をその翼に乗せ、オセル Oの力で己の身に掛かる重力を消し去り

ニーズホッグは、その方角へと瞬く間に飛び去っていった。

巨大な破壊の爪跡を、その場所に残して。

\* \* \* \* \*

「と、言う事らしいよ、ネウジ槍悟」  
「そうか……ニースホッグ、あの悪食のルンクリーチャー刻印獣が戻って来たか」

ユグドラシルの最上階。

傍らの壁際に立つ路野沢の言葉に、おおがみ大神槍悟は閉じていた瞳を開いた。

路野沢によってもたらされた情報は三つ。

十四年前に姿を消したルンクリーチャー刻印獣、ニースホッグが再びその姿を現した事。その復活により、隣国　アジア圏の人民コロニーが壊滅した事。

そして　その最悪の魔獣が、今日本に向かってきている事だった。

そんな緊急事態の中ですら、路野沢はいつも通り変わらぬ様子で声を上げる。

「あれの狙いは、良質のプラーナを喰らう事。この国に向かって来ようとするのは、ある意味では当然の事だよ」  
「……確かに、な」

感慨深げに、槍悟は首肯する。

そんな彼の言葉に、路野沢は僅かに口元をゆがめながら声を上げた。

「やはり、懐かしいかい？ 唯一君の槍を受けて倒れなかった存在と言っのほ」

「……そうだな、思い入れが無いと言えば嘘になってしまっだろう。だが、それとこれとは話が別と言っものだ」

そう呟き、槍悟は立ち上がる。

救援の間もなく隣国は壊滅してしまった。そして、手を拱いて見ていれば、次にその運命を辿るのは日本だ。

故に、すぐにでも動かなければならぬと　　そう覚悟を決め、彼は声を上げる。

「一樹、ムスペル Heim からは災害級以上の能力者を集めろ」

「ふむ、その力量で攻撃を届かせる事が出来るかな？」

「後先考えぬ一発限りの大技であれば、有効打を与えられる可能性はある。だが、直接の戦闘を行うのは神話級の仕事だろう」

有り得ない、とニースホッグの力を知らない人間ならば言っだろう。  
災害級が後先考えずに放っ渾身の一撃は、街一つに壊滅的なダメージを与えられる規模に達する。

能力の応用によって災害級判定を受けた把桐羽衣わきりういであろうとも、その気になれば高層ビル一つを完全消滅させる事は可能だ。

しかし、ニースホッグにはそれほどの一撃ですら致命打には遠く及ばない。

そんな意思を言外に告げる槍悟の様子に、路野沢は小さく笑みを零す。



「随分と言うものだ。だが……君の言う以上は、事実なのだろう。では、そのように手配するでしょう」

「ああ、頼む」

「それで……フェアブラ神話級には、誰を推薦するのかな？」

「……そうだな」

僅かに、槍悟の声のトーンが変わる。

どこか、何かを押し殺すような表情は、しかしその鉄面皮の下に一瞬で消える。

それは、彼が僅かながらに見せた人間らしい感情だった。

そしてそれを感じ取り、路野沢は気付かれないように小さく笑む。

「……ミヨルニル《雷神の槌》はこちらに残す。向こうに連れてゆくべきは、レイヴァーティン《災いの枝》とヴォルスング・サガ《光輝なる英雄譚》だ。

他にも、ムスペルヘイムに名を連ねているフェアブラ神話級は連れてゆくようにしろ。

作戦参謀にはシグルドリーヴァ《口伝詩人》を。と言っても、彼にはこちらにいて、通信のみで指示を出す事になるだろうがな」

「成程、彼ならば確かにヴォルスング・サガニーズホッグの情報を成句に覚えているだろうね。しかし、ヴォルスング・サガ《光輝なる英雄譚》を出してしまっても大丈夫なのかな？」

小さく首を傾げるように、路野沢はそう問いかける。

ユグドラシルの時期総帥にして、大神槍悟の愛娘。

彼女をそのような危険な場所に放り込むのは、中々に危険の伴う行

為である。

しかし、槍悟は小さく首を振った。

「恐らく　　ニーズホツグの能力領域に対抗できるのは、《光輝ヴォなる英雄譚ルズンゲ・サガ》以外には存在すまい。そして、その能力領域を無視しながら戦える者は、私しか存在しないだろう」

「ふむ、成程。それは確かに肯定せざるを得ないだろう。《黒翼の悪龍》の持つ力は、それほどまでに強大なものだ」

そう、それがあつたからこそ、ニーズホツグは必滅の定められた大神槍悟の一撃を耐えたのだ。

それを理解しているからこそ、路野沢は嗤う。

何とも皮肉であると　　それに対抗しうる存在が、親子として生まれた事に。

「では、急ぎ準備をしましょう。各方面に伝えねばならない事は多い」

「ああ、頼んだぞ。私は住民の避難を急がせる」

「それが良いだろう。尤も　　あの悪龍は、君を狙ってくる事だろうと思つがね」

間違いなく覚えていると、だからこそあの魔獣はこの国へと進路を向けたのだと　　そう確信しているかのごとく、路野沢はそう口にする。

相も変らぬ秘密主義。十五年以上の付き合いを持つ槍悟にすら、未だ読みきれぬその黒い男。

けれど、だからこそ 並び立つ者のいない大神槍悟にとって、唯一対等であると呼べるモノだった。そんな己の考えを自覚し、槍悟は僅かに鉄面皮を崩す。その口元に浮かべられていたのは、小さな笑みであった。

「次代を失うわけには行かぬが……私としても、彼の悪龍との戦いは望む所だ。この島を犠牲にする訳にも行かぬがね」

「ならば、旧東京を戦場とするが良いだろう。あの場所ならば、君も存分に力を振るえよう」

「助言に感謝しよう。ならば、そのように 無論、私の出番など存在せぬ方が良いのだがね」

大神槍悟の出番がある事。それは即ち、美汐みしお達の敗北を示しているのだから。

それは決して、槍悟の望む所ではない。けれど、最初から彼自身が出るリスクを負う事が出来ないのも事実。

それを理解し、路野沢は目を閉じながら声を上げた。

「ああ、それならば、僕も出来る限りの手を尽くすでしょう。彼女達の物語は、こんな所で終わってよいほど軽い物ではない」

「……相変わらずの秘密主義だな、一樹。お前の切り札とは、一体どこにある事やら」

「気になるのならば待つと良いだろう。何、遠からず君に魅せる事となる筈だ」

路野沢は、ただそう不敵に嗤う。

ただ、嬉しそうに　その裏に極大の憎しみがある事を知っているのは恐らく己だけであると、槍悟は僅かにそう思う。

しかし、その矛先が一体誰に……否、一体何に向けられているのかは、彼にも想像出来ないものだ。

けれど、それ故に。そうであるからこそ、路野沢一樹は大神槍悟の予想を大きく上回る事が出来る。

彼のあらゆる意味での裏切りを見る事こそが、槍悟の楽しみなのだ。

「では、各員に話を通すでしょう。此度は流石に無傷で済むとは思えんが……だからこそ、彼らはよく動いてくれる」

これまでの事件など傷に含まれないと、言外にそう告げ、路野沢はその視線を窓の外へと向ける。

その方角は、遙か西　いずれ、その黒き翼が現れるであろう方向へ。

彼の表情は歪む事無く、何処までも愉悦に彩られていた。

「さあ……最後の目覚めは近い。そしてその時こそが、終焉の角笛が鳴り響く時だ」

槍悟には、その言葉の意味は分からない。

けれどそれは　どこか、不吉な予言のようでもあった。

「雄鷄の声は黄昏を告げ、開戦の号令は響き渡る　ヴィーグリ

ーズの野は何処であるか。まあ良い、いずれ分かる事だ」

「……楽しそうだな、一樹」

「ああ、楽しいよ槍悟。これほど楽しい事があるだろうか。君達の戦場は、心躍るほどに美しい」

路野沢は振り返る。真っ直ぐと、濁った笑みを浮かべながら。

そんな彼に、槍悟もまた笑みを浮かべる。

唯一認められた相手　それは即ち、友であると同時に敵であると。

「君の望みを叶えよう。君の至福を永遠としよう。それこそが、僕の誓いなのだから」

「ならば、私は躊躇わずにこの槍を振るうのみ」

例えそれが

『　滅びの道であるうとも』

兄弟のような二人は嗤う。

始まりの誓いを再び口にして、全てを始めるかのように



冷たい雨が、降り注いでいた。

冬の日の、凍えるほどに冷たい雨。

災害以来世界の気温は全体的に上がってはいたものの、それでも日本の冬の寒さは変わらずに存在していた。

雪が殆ど降らない程度になったそれは、彼にとっては逆に辛いものであったが。

(……)

思考の中にすら言葉も浮かばず、彼は凍える身体を丸める。

普段ならば、こんな事は思わなかっただろう。こんな事を考える必要など無かっただろう。

けれど、今彼は、考えている。

何がどうなったのか、何故こうなってしまったのか　しかし、

その行為自体が不自然である事を、彼自身気付いていなかった。

ともあれ

(……寒い)

暖を取る方法などいくらでもあっただろう。

普段どおりにすれば良い、思うが俛に行動すればよい。その筈だった。

けれど彼には、その当たり前が無くなってしまっていたのだ。

故に、彼からは従うべき何か<sup>か</sup>が失われてしまっている。

故に、生きる為の方法すら、彼の中には微塵も残らず消し去られてしまったのだ。

あの『欠片』を飲み込んだ日から

(死ぬのか……?)

そんな思いが、彼の中に発生する。

病は気から、という言葉があるが、  
実際に死なないような病気で  
であったとしても、気の持ちよう次第ではそれに至ってしまった事  
例もある。

今の彼は、完全に死の影に抱かれてしまっていた。

けれど。

「 どうしたの? 」



そこに、掛けられた声があった。

彼はゆっくりと、その瞳を声のあった方向へと向ける。

それは たった一人の、幼い少女だった。

子供らしい動物の耳のような飾りのついたフードの下からは赤茶色の髪が覗き、その大きなこげ茶色の瞳を丸く見開いて少女は声を上げる。

「どっしたの、寒いのか？」

寒さに赤くした顔で、白く広がる息を吐きながら、彼女はゆっくりと彼の元へと近付いてゆく。

子供らしい傘は若干傾いてしまい、彼女の肩を雨が濡らしていた。

「ひとりぼっちなのか……？」

何故彼女は、己の事を気に掛けようとするのだろう。

彼は、ぼんやりとそんな事を考える。

少女は動かぬ彼の方へと躊躇する事無く近付き、恐れる事無くその手を伸ばしていた。

そして ふと彼の体に、暖かな感覚が灯る。

(これは……?)

彼女の手を伝って伝わってくる暖かな感覚。  
そして、それと共に流れ込んでくる不思議な力。  
己の中の何かを書き換えられているようでありながら、不思議と不快感の無いそれに、彼はゆっくりと身体を起こす。  
改めて彼の視界に入った少女は、どこか泣きそうに歪んだ顔で、ポツリと呟いた。

「あたしも、ひとりぼっちなんだ……」

不意に、彼は胸を打たれる感覚を感じる。  
尤も、そんな感覚などは今までの彼には無縁なものではあったのだが、表現するならば、そんな言葉しか有り得なかつただろう。  
彼女の事が愛おしいと、この差し伸べられた手に報いたいと、彼は心の底からそう思ったのだ。

「……一緒に、行く？」

彼は、ただ静かに首肯する。  
それが、燃え落ち壊れた世界で、唯一つだけ確かなものを、彼が手に入れた瞬間だった。

\* \* \* \* \*

その日、氷室涼二はほぼいつも通りの起床を迎えていた。いつもと違う点は、彼が目を覚ます前に、既にいつも通りの光景が展開されていた事だ。

「……おい、お前ら」

「あ、おはよー涼二」

「何だ、鈍ってんのかア？俺達が部屋の中に入り込んできても気付かねエなんてよ」

「そもそも入り込んでくるなこのアホ共が」

目覚めてすぐ彼の目に飛び込んできたのは、何故か置いてある自分用のエプロンを身に付け料理をしている桜花と、リラックスした姿勢でテレビを見ている双雅の姿だった。

特に双雅には厳しい視線を向けつつも、涼二は眉根を寄せつつ声を上げる。

「お前らが勝手に入ってくるから、反射的に攻撃しないようにしてるんだよ。寝てる最中にお前らの見分けなんか付くか」

「あはは。涼二それ、双雅なら遠慮なく攻撃するって言うてる？」

「ああ、コイツなら死なん」

最近双雅の実力を知っただけあり、涼二も本気でそれを確信していた。

そしてその対象とされた双雅もまた、いつも通りの笑みに彩られた表情で、『こえーこえー』と冗談交じりの声を上げている。

そんな二人の様子に嘆息し、起き上がった涼二は洗面所の方へと足を向けていた。

桜花がこの部屋を訪れるのは、半ば日課となってしまうている。と言うのも、ここの所あまり自宅に帰ってきていなかったからか戻ってきた日の翌日、涼二は桜花によって叩き起こされる事となってしまったのだ。

いなくなるならちゃんと連絡をしろ、戸締りとかしつかりしていないかった、そもそも何してたんだなどなど、怒り心頭となった彼女に朝っぱらから説教を受けていた涼二である。

近所迷惑になるからとある程度ボリュームを抑えられてはいたが、それでも小一時間ほどその話は続いていた。

結果、しばらく部屋を空ける時は、しっかりと連絡するようにと約束を取り付けられた次第である。

ふと、顔を洗いながら涼二はぼんやりと考える。

(そついや桜花の奴、どうやって俺が帰って来た事に気付いたんだ……?)

涼二は知らない。彼が留守にしている間、桜花は毎日のようにこの部屋を訪れていたと言う事を。

それに気付いていた双雅に桜花はひたすらからかわれる事となったが 閑話休題。

顔を洗い、歯を磨いて涼二が戻ってきた頃には、桜花の作っていた朝食はほぼ完成しているような状態だった。

勝手に入り込んでいた事に文句を言いつつも、食事を作ってくれる事に対するありがたさを感じながら、涼二は己の席に腰を下ろす。

そして彼は向けた視線の先 双雅に対し、小さく嘆息交じりに声を上げる。

「……おい双雅、何勝手に出て来てやがる」

「問題ねエって。ちゃんと、目に付かないような場所を通ってきたさ。それに」

言つて、本来あまり人に見られてはならない筈の双雅は、その視線をテレビ画面の方へと向ける。

つられて涼二もそちらへと視線を向け 思わず、目を見開いた。そこに映し出されていたニュースは、あまりにも突飛でもあまりにも荒唐無稽な内容だったからだ。

「アジアコロニーが壊滅……？ 一体何があつたんだ？」  
「ああ、とんでもなく強エ<sup>ルンクリーチャー</sup>刻印獣が出現したらしいぜ。何の前触れも無く、唐突にな」

その言葉に追従するように、テレビには一枚の写真が映し出される。

衛星からの映像記録も存在している筈だが、あまりにも不適切な映像であつたために放映させられなかつたのだらう。

ともあれ、そこに映っていたのは

「こいつは……あの、十四年前の化け物じゃねーか」

「ああ。ニーズホツグとか呼ばれてたんだよな？ 何で今になつて出てきたのかは知らねエが、とにかくコイツのおかげでユグドラシルも大忙し、俺の事を追っかけてる暇も無くなつたつて訳だ」

「ユグドラシルの動きが縛られても、司法局まで麻痺する訳じゃないだろ……気をつけてるんならいいが、もうちよつと慎重に動け」

「心配性だねエ」

「お前が大雑把すぎるだけだ」

嘆息しつつ、涼二は再びテレビの方へと視線を向ける。

映っているその姿 黒い巨体と三対の翼、七つの瞳。

揺らめく炎によってかなり画質は悪いものの、伝えられているその姿を想像する事は十分に可能だつた。

涼二は、この存在についてそれほど詳しく知っていると言つて訳ではない。

十四年前には生きる為に必死であつたし、あまりそういった事を気にかけている余裕も無かつたのだ。

それでも、一応ながら記憶には残っているのだが。

「しかし、たつた一匹でコロニーを壊滅させるか……ファーブラ 神話級<sup>1</sup>ってだけじゃない、かなり強力な化け物だな」

「まあ、確かになア」

涼二や双雅も神話級<sup>2</sup>ではあるが、強力な能力者や兵器が存在しているそこにたつた一人で攻め込み、壊滅させられるかと聞かれれば簡単に頷く事は出来ない。

それでも、出来るかもしれない可能性が存在しているのだから、神話級<sup>1</sup>の 1それも始祖ルーン能力者と言うモノの規格外さが窺える。

そんな中、たつた一人だけ常識的に語れる範囲内の能力者は、出来上がった料理を運びながらテレビの方へと視線を向けつつ声を上げた。

「また、凄い事になってるわね……」

その声の中には、あまりショックを受けた様子などは無い。

ただ僅かに寄っているその眉根は、襲われ死した者達を偲ぶものではなく、かつて十五年前に自分達も味わった地獄を思い起こしてしまっているに過ぎないものだ。

あの頃は、他者を思う余裕など存在しなかった。

そして一人で生きている者達は、未だに対岸の火事ごときを気にしている余裕は無い。

故に、彼らが気にするのは己の事だけだった。

「アレって、こっち来るの?」  
「周辺各国は厳戒態勢だわな。あのドラゴンがどんな基準で人襲つてんのかしらねエけどよ」

それぞれの皿に焼き鮭とご飯と味噌汁をおきながら、桜花は『へえ』と気の無い返事を零す。

涼二としても、どう転ぶか分からないと言う双雅の言葉には同意していた。

悠から話を聞いたわけでもないのに、あの刻印獣の事については全く情報が無い。

唯一つだけ知っているのは、十四年前に現れた時、ニーズホッグは大神槍悟によって撃退されたと言う事だけだった。

それ以外では一般の広まっている噂　人間を主食にしている、とにかく視界に人間がいる限り襲い続けるという程度の話だけ。

故に、今だ人口では最大の数値を誇るアジアコローニ―に出現したのであるうが

「もしも同じ個体なら……いやまあ、あんな化け物が二匹もいるとは思いたくないが、とにかくこっちに来る可能性もあるんじゃないのか?」

「え、あれってこっち来んの?」

「いや、確証なんて何もないし、単なる予想……って言うか思いつきに過ぎないけどな。前に現れた時、あいつを撃退したのはユグドラシルの総帥だろ?」

「あのトカゲ野郎がそれを覚えてて、その復讐に来るってか?」

「だから思い付きだっけって言うてるだろ」



言い方面であろうと悪い方面であろうと、龍の生態など誰にも想像できるものではない。

誰にも分からないものは、想像する他ないのだ。

涼二は肩を竦め、嘆息交じりに声を上げる。

「襲ってこようとこまいと、どうにした所で日本は動かざるを得なくなる。戦う事が確定している以上、迎撃戦の方が楽になるのは当たり前前の事だ。

幸い、場所さえセットできれば、アレを迎撃できるだけの能力者はいくらでもいる国だからな……おびき寄せる戦法も有り得なくはないだろう。まあ」

軽く手を合わせつつ料理に手を伸ばし、味噌汁を啜りながら方目をテレビへと向ける。

そのニュース番組では、万が一の時のために避難の準備を進めておくよう放送が成されていた。

この時点でそんな話が出ていると言う事は

「……こつちに向かってきてる可能性は十分にあるな。避難時に人が押し寄せてきた時の為に、ある程度の混乱を避ける為に予め言うておいた感じだ。

恐らく、少しでも避難者を減少させ、更に避難時の脱出方法を増やしているような段階だろうな」

「あー、船でも用意してんのか？」

「ここは海の上だから……逃げようとした所で、自然と方法は限

られる。今の内に出来るだけ大きな船でも準備してる所だろうよ」

旧東京 関東地方の水没した地域ならば、神話級フェアブラが全力で戦闘を行う事も可能だ。

その場合、ニヴルヘイムが拠点として使っていたあの建物が消滅する可能性もあるが。貯蔵していた品物を持ち出す余裕があるかどうか等と考え、涼二は小さく苦笑する。

恐らく、大量に保管してあるエロゲの持ち出しのためにスリスが泡を食っている事だろう、と。

そんな時、映像を見ていた桜花が、ふと思いついたかのように声を上げた。

「ねえねえ二人とも、アレってあたしの能力で大人しくさせられないかな？」

「おい、バカがまた何か言い始めたぞ？」

「バカはせめて休み休み言え、このバカ」

「ちょッ、何よ!？」

にべも無く切り捨てられ、桜花は憤慨した様子で声を上げる。

そんな彼女へと、涼二は半眼、双雅は苦笑を向けつつ声を上げた。

「あのな、桜花。お前の能力、精々『動物に好かれる』程度だろうが」

「まア、確かに常時発動系の能力ってのは結構珍しいけどよ、自分

より強大なプラーナ持つてる刻印獣ルーンクリーチャーに通用すると思ってるんのかア？」

実際の所ちらりと彼女の事を見た事があるガルムが、ロクに話してもいないのに好印象を持っていた辺り、格上の存在にも効果が有る可能性はあるが　と胸中で呟き、涼二は苦笑する。

相手は人間を餌としているような存在。果たして、そんなものに対して好印象を抱かせたからといって、効果があるのかどうか。

「……精々、『美味そうな餌』に見えるのが限界なんじゃねエの？」  
「と言うかお前、あんなバケモノ使役できるようになったからって、どうするつもりなんだ。困るだけだろ」

「言いたい放題言ってる……！　うー、カッコいいのになあ」

恨めしげな視線でテレビに映る姿を見つめる桜花。

生憎と、常人の感性から言えば、ニーズホツグは『恐ろしい』や『おぞましい』といった感想しか得られない姿をしているのだが。  
もそもそと食事を続ける桜花の様子を横目に見つつ、涼二は嘆息する。

（相変わらずの爬虫類好きだな……って言うか、ドラゴンは爬虫類に含めていいのか？）

元々、何らかの生物にルーンが発生し、その為に変異した生物がルーンクリーチャー刻印獣だ。

ドラゴンの姿をしているのであれば、元が爬虫類であった可能性は

十分にあるだろう。  
どうにした所で、原形を留めていないのは確かだが。

(しかし )

涼二は、視線を細める。

そこに宿るのは僅かな殺気、その奥に押し留めた燃え盛る憎しみを、彼は窓の外へと向ける。

分かっているのだ。これは、チャンスなのだ。

(もしも、あのバケモノと戦うために大神槍悟が出てくるのであれば、それはこれ以上無いチャンスになる)

あの男が戦って仕留めきれなかった存在　それと戦う事となれば、いかな大神槍悟とは言え、消耗は免れないだろう。例え消耗していたとしても、相手を簡単に討ち取れるとは思えない。けれど、消耗していない状況の相手と戦うよりは遥かに可能性があるだろう、と。

その千載一遇の機会が訪れるのであれば、あのバケモノの飛来も涼二にとっては歓迎出来るものであった。

故に

(あまり悠長にしている暇は無い……時間が無いんだ。決して、チャンス逃すな)

氷室涼二は、覚悟を決める。

決めるのは必殺と滅殺の誓い　もしも願い通りの展開が訪れたのであれば、命を懸けてその場に臨む事を。

そんな涼二の様子、僅かに滲み出ているさつきに気づいているのは双雅だけであった。

そう。それ故に　二人は、思い出せなかったのだ。

幼い頃から付き合ってきたこの少女が、有言実行を絵に描いたような人物であった事を。



突き出されてくる巨大な拳を、雨音は臆する事無くじっと見つめる。

下から掬い上げるようなその一撃は、躲さなければ一直線に鳩尾へと埋没するだろう。

その一撃を放ったのはガルム　身体強化こそ行っていないものの、鍛え上げられた肉体より放たれる攻撃は、十分な脅威となりえる。

加減が無ければ、一発で骨を砕き、内蔵を串刺しにするだけの破壊力を持っているだろう。

けれど雨音は、それを目前にしながらも大袈裟に躲すような真似はしなかった。

「　　っ！」

極限の集中力。

それと共に、下段で上向きに構えられていた雨音の右手が振り上げられ、ガルムの拳に合流した。

彼女の細腕から発せられる臂力では、砲弾のような彼の拳を止める事など叶わない。それは、雨音とて分かり切っている事である。故に、彼女が狙うのはそれとは全く別の事。

(合流して、僅かに逸らす )

手が合流した瞬間に掛けられた、雨音の僅かな力。

それはガルムの臂力からすれば、大河に合流する支流のようなものだ。

しかしその僅かな力は、ガルムの攻撃のベクトルを僅かながら上向きに変化させる。

そしてそれと共に、雨音の身体は拳の圧力に乗るようにしながら半歩ほど後退する。結果、ガルムの拳は雨音の鼻先ギリギリを掠めて上へと通り抜けて行った。

結果、ガルムの腕は大きく伸び上がり、上方へと振り上げられる。

それと共に、雨音はがら空きになった同へと左の拳を打ち込む

瞬間、雨音の身体はぐるりと回転していた。

「あわっ!?!」

「ははは、『流す』のは上手くなったな、雨音君」

バランスを崩してたたらを踏む雨音に、ガルムはそう上機嫌な様子で声を上げる。



何とか転ばないように体勢を立て直した雨音は、自分の左手を見ながらきよとんと首を傾げていた。

何が起こったのか、彼女にはさっぱり理解できなかったのだ。

「ええと……今も私がやったのと同じなのですよね？」

「うむ、その通りだ。まあ、君の力に私の力を合流させると、元が小さい分かなりのスピードになってしまおうのだがね」

「はあ……」

理屈は分かるもののイメージを掴む事ができず、雨音は再び首を傾げる。

元々、彼女の力ではガルムの攻撃を受け流す事は出来ても、彼のバランスを崩させる事は出来ない。

それ故に、ガルムはすぐさま体勢を立て直して雨音の攻撃を受け流したのだが、彼女には、そこまで知覚する事ができなかったのだ。

「しかし、流石と言う他無いか。まさか、これほど早く『流し』をマスターするとは」

「ガルム様の指導の賜物です」

「そう言って貰えるのはありがたいが、やはり君の才能に依存する部分が大きいから……これほど教え甲斐のある生徒もそういない」

言って、ガルムは苦笑する。

元々、雨音はかなり要領の良い人間である。ガルムとしても、それは十分に理解していた。

しかしながら、合気道における基本にして極意の力をこれほど容易く習得して見せたのは、彼としても驚愕せざるを得なかったのだ。相手の力に合流し、それを操る　　雨音ではまだ逸らす程度しか出来ていないが、それでも格上の相手に成功させる事は非常に難しい。

元々、彼女の護身術および能力に対する理解を深める為に始めた事ではあったが、予想以上の成果であったと言えるだろう。

「ともあれ、その感覚を忘れないようにする事だ、雨音君。そこそが、<sup>ソウイル</sup>Sにおける癒しの力の真髄なのだから」

「<sup>ソウイル</sup>Sの、ですか？」

「うむ。<sup>ソウイル</sup>Sの力は、他の力と一部違う点が存在する。それが分かるかな？」

その言葉に、雨音は口元に手を当てつつ視線を伏せる。

能力に関する参考書はかなりの量を読んでいる為、今の雨音にはそれなりに能力に関する知識があるのだ。

数ある能力の中で、<sup>ソウイル</sup>Sに特筆すべき点とは、やはり癒しの力だろう。しかしそれだけならば、他の能力にもそれぞれにしか不可能な事は存在する。

そんな中で特別な点とは

「……他者に、プラーナを分け与える事でしょうか」

「うむ、その通りだ。効果として相手のプラーナに干渉を掛ける物は存在するが、他者の体内に能力を帯びたプラーナを流し込むのは<sup>ソウイル</sup>Sだけだ」

雨音の聡明さに、ガルムは上機嫌になりながら深く頷く。  
N<sup>インク</sup>gやW<sup>ウインク</sup>のように、他者に効果を発揮するルーンは確かに存在する。  
しかし、S<sup>ソウイル</sup>には、相手の体内に直接プラーナを流し込んで作用させる使い方もあるのだ。

「これはかなりの高等技術ではあるが、これを使用した際の治癒能力は破格のものとなる。欠損してプラーナの流れが断絶した場所に、全体の流れから能力を伸ばせば、千切れ落ちた腕すら繋げる事が出来る」とされているからな」

「……その理論ならば、魂が抜け切る前ならば、人を蘇生させる事すら可能なのでは？」

「うむ、その通りだ。無論の事、体全体のプラーナの流れを操れるほどの干渉力を持つ者など、まず存在しないが……」

言いつつ、ガルムはちらりとその視線を雨音へと向ける。

彼女は、その最上至る力を持つS<sup>ソウイル</sup>の始祖ルーン能力者。

彼女の力ならば、或いは　　そう考え、ガルムは苦笑と共に思考を中断した。

実際に試す事もできない以上、考えただけでは詮無い事だ。

「ともあれ、そんな力であるからこそ、全体の流れに合流し、それを操る感覚と言うのは非常に重要になるのだ」

「その人が持つプラーナの流れに合流し、それを操って体全体に効率的な癒しの力を分散、或いは一点に集中させる……確か、そんな技術でしたよね？」

「うむ、その通りだ。尤も、初心者には感覚が難しくそうそう上手

く行かない技術ではあるが……今の雨音君ならば、可能かも知れぬな」

純粹に賞賛を交えたガルムの言葉に、雨音は少しだけ嬉しそうに顔を綻ばせる。

家族の愛というものを知らぬ彼女にとって、父親のように見守ってくれるガルムの存在は、新鮮であり暖かいものであった。

それを彼自身理解しているからこそ、言葉には決して虚偽を混ぜる事は無い。

笑みは消さないながらも、若干厳しさを交えた声音で、ガルムは声を上げる。

「だが、今日は少々集中できていなかったようだな」

「あ……はい、済みませんでした」

「ふむ。まあ、一瞬の油断が重大な怪我に繋がる事もある。それを理解してくれているのであれば構わんよ。しかし」

言って、ガルムはその視線を部屋の片隅へと向ける。

そこには、三台のノートパソコンを開いてそれぞれ別個に能力で操っているスリスの姿があった。

絶技といっても過言ではないその制御能力。彼女がそれを用いて集めているのは、恐らく

「気になるかな、ニースホッグの事が」

「……はい。苦しんでいる方が沢山いるのだと思うと……少し」

「君の優しさは美德ではあるが、あまり気にしすぎても仕方あるま

い  
」

今、世界のどこかで苦しんでいる不特定多数の人間を想った所で、現状が変わるような事は無い。

ガルム・グレイスフイーンは現実主義者だ。雨音の優しさは評価するものの、それまでである。

悲しみ、哀れんだとしても、それを救う力が無ければ意味が無い。ともあれ、雨音の様子に苦笑しながらも、ガルムはスリスの方へと向けて歩き始める。

追従する雨音を引き連れつつ、彼はスリスの傍へと歩み寄った。

「スリス、どうだ？」

「あー……うん、やっぱりユグドラシルの情報は集めづらいかなあ」

「あの、黒い龍の事ですよな？」

「そうそう。まあ、アジアコロニーの方の情報は結構手に入るんだけどね。でもまあ……おっちゃんの懸念は、どうやら大当たりみたいだよ」

口の端を笑みに歪め、スリスはそう口にする。

その言葉に、ガルムは苦笑とも嘆息ともつかない吐息を吐き出していた。

雨音はそれに対し首を傾げるが、スリスは気にせず続ける。

「一応、ニースホッグの出現に関しては一昨日ぐらいから情報は仕入れてただけど……これはまた、厄介なもんだよ」

「厄介、ですか」

「そ。恐らく、コイツぐらいじゃないかな？ 始祖ルーンを持つ刻  
クリチャー  
印獣なんてさ」

「……………！」

スリスの言葉に、雨音は大きく目を見開く。

そんな彼女の手は、知らず己の腹部へと触れていた。

そこに刻まれた、Sの始祖ルーンへと。  
ソウイル

「ニーズホッグは、Oの始祖ルーンを持つ刻印獣だよ。他にも、H  
ハガラス  
ウルス  
とUを持つてるらしいね。」

攻守共に優れたバケモノって所かな……………まあ、今のところファンク  
シヨンを使った気配は無いみたいだけど」

「知性の無い獣でなければ、もっと危険な事になっていただろう。  
不幸中の幸いと言えるだろうな」

「だね……………正直、神話級に輪をかけて危険な事になってるし」

肩を竦め、スリスはデータを呼び出す。

そこには、無数のミサイルを撃ち込まれてなお無傷の黒龍の姿が映  
像で映し出されていた。

全ての弾頭はニーズホッグに触れる前に地面へと落下し、巨大な爆  
炎を吹き上げているが、強靱な龍の鱗を貫通する事は決してなかつ  
たのだ。

その様子を眺め、ガラムは小さく呟き声を上げる。

「……………ふむ、Oの重力操作か。常人では近付く事すら叶わんだろう  
な」

「これで、ファンクションを使っていないんですか……？」  
「まあ、それを組み上げる知性が無いだろうからねえ。正直、単品でも洒落にならないけど」

雨音に気を使ってか、スリスは決してショッキングな映像を出そうとはしなかった。

が、彼女が集めたデータの中には、ニーズホッグの強大な能力が振るわれている様子を映し出したものも存在していた。

その能力圏内に入り込んだ者たちは、その強靱な肉体によって薙ぎ払われるか、激しい嵐に吹き飛ばされるか、強大な重力波に押し潰される。

並みの能力者では 否、ディザスター災害級ですら、まともに近付く事も叶わないだろう。

スリスは、肩を竦めつつ再び映像を出現させる。

そこに映し出されたのは先程と似ているが、少々状況の違う映像だった。

「個人的に、気になるのはこれなんだよねえ」

「この映像ですか……？」

椅子に座っているスリスに合わせ、雨音はしゃがみ込みながらパソコンの画面へと視線を向ける。

そこに映し出されていた光景は、無数の能力がニーズホッグへと向けられている映像だった。

ディザスターどれも災害級以上、並みの能力者ならばたった一つだけでも防ぎきれぬ威力ではないそれ。

しかしそれらの力は、全て黒き龍に辿り着く前に空気に解けて消滅

してしまっていた。

通常では有り得ないその光景に、雨音は大きく目を見開く。

「これは……？」

「能力の障害、か？ スリス、詳しい事は分からんか？」

「流石に、ちよっとね。もう少し時間があれば調べられると思うけど」

「ふむ……まあ、無理は言わんさ」

今すぐ分からなければならぬ情報という訳ではない。

苦笑しつつ、ガルムはスリスの言葉に首を横に振った。

この怪物と戦闘する予定があるわけではないのだ。確かにあったからといって役に立つと言う訳では無いが、あつて無駄と言う事も無い。

それを誰よりも心得ているスリスは、口元に小さな笑みを浮かべ、声をあげる。

「まあ、集められるだけ集めとくよ。いつ必要になるか分からない事には変わらないしね」

「必要になるか分からない……ですか？」

そんな彼女の言葉に、雨音は首を傾げる。

雨音にとっては心を痛める出来事ではあったものの、それはあくまで遙か遠く離れた場所で起こった出来事。

とても、そんな情報が必要になるとは思えなかったのだ。

しかし、スリスは小さく苦笑しながら首を振る。



「ちょっとした懸念があつてね。まあ、ボクだっておっちゃんがいなければそんな事気付きもしなかったけど」

「懸念ですか……何か、起ころうとしてるんですか？」

「まあ、起ころうつて言うか起こってるんだけど……いや怒ってるのかな？ とにかく、あの馬鹿でかいバケモノは、今まさに日本へ向かってきてるみたいなんだよ」

その言葉に、雨音は大きく目を見開いた。

無論、雨音とてその可能性を考えなかつた訳ではない。

だが、昨日今日遠く離れた場所で起こつた出来事に対し、『明日は我が身』などという実感が湧かなかつたのだ。

そんな雨音の様子に、ガルムは小さく肩を竦める。

そしてぼんやりと虚空を見上げ、彼はポツリと呟くような声音で声を上げた。

「私が日本に来た原因の一つに、あのニースホッグの事があるのだ」

「え……？」

「もう十四年も昔の事ではあるがね……現場のすぐ傍にいたと言う訳ではないが、それでも、アレが撃退される姿は遠くから目撃していた」

ガルムの瞳が映すのは天井ではなく、記憶の中にあるかつての映像。

あまりにも禍々しく、それでいてあまりにも幻想的なその光景。

「炎に燃えた街と、その中心で暴れまわる巨体。そして、その場所へと打ち込まれた黄金の槍。たった一人で、あの魔獣を退けた男

大神槍悟」

「その方は、確か涼二様の」

「そう……あの黒龍をたつた一人で退けた人物こそ、涼二が復讐を誓った人物だ」

ユグドラシル総帥、《クングニル必滅の槍》大神槍悟。

稀代のルーン能力者にして、かつてニーズホッグを退けた人物。

それに挑む事に対し、ガルムは無謀であるとの感想を否定す事は出来なかった。

しかし、それでもチャンスが無い訳ではない。相手は、人間なのだから。

「此度現れたニーズホッグが、何故この日本に向かってきているのか」

「……あの龍が、一体何を目的に動いているのか、という事でしようか？」

「元々知性なんて無いんだろうし、そんなただの偶然だよ……  
つて、言いたい所なんだけどさ。実際、否定する材料は存在しないんだよね」

スリスは、パソコンの画面に衛星で捉えたニーズホッグの飛行ルートを映し出す。

その動きは間違いなく日本　しかも、この密都こと新東京島へと向かってきていた。

恐るべき正確さで、真っ直ぐと。

「これは……！」

「あの龍がかつての事を覚えていて……そして、大神槍悟に復讐しようとしているのだとしたら」

「……涼二様とお友達に？」

「いや、流石にそれは無理だと思うけど」

真顔で言った雨音に突っ込みを入れつつ、スリスは嘆息する。

いつも通りの様子は崩さぬ雨音にガルムも苦笑はしつつ、しかしその視線はパソコンの画面に向けたまま声を上げた。

その声音の中に、真剣な色を宿して。

「あの龍は、間違いなくここに向かってくるだろう。無論、内陸に入られる前に迎撃はするだろうがね」

「ユグドラシルの方々が、ですよね？」

「間違いなく。そして、流石にその場に大神槍悟が出てくるとは思えない……が」

ガルムは、一つの懸念を抱いた。

ユグドラシルの戦力を考えれば有り得ないと言わざるを得ない事。彼らは能力と言う点に関してはまず間違いなく世界最強の組織であり、あらゆる兵器に狙われた所で意に介さないほどの戦力も持っている。

それでも、ガルムは一つの懸念を抱いたのだ。

本当に　　本当にあの大神槍悟以外の人間が、ニーズホッグを退

ける事が出来るのか、と。

「もしも防衛線が破られれば、最早ニーズホッグに相對する事が可能な存在は大神槍悟しか存在しないだろう。

そして……その時こそが、涼二にとって最初で最後のチャンスとなる」

「え……？」

「大神槍悟を前線に引きずり出し、尚且つ可能な限りの邪魔が存在しないタイミング　それこそが、涼二が待ち続けてきた機なのだ」

故に、このニーズホッグの襲来は、涼二にとっての追い風となる可能性がある。

無論、根拠の無い可能性の話ではあるが、それでもこれ以上の機会など存在しないだろう。

「果たしてこれが追い風となるのかは分からんが……注目する必要があるだろうな」

そう締めくくり、ガルムは静かに息を吐き出す。

そこには　どこか、武者震いのような震えが混じっていた。



## 04 - 4 : 黒き龍の情報

己よりも背の高い本棚の間を、**緋織**はゆつくりと歩き抜けてゆく。そこに保管されているのは、ユグドラシル創設以来記録されてきた様々な情報である。

しかしながら、現状ではこれらの記録が使われる事は殆ど無い。

それはこの中央情報室ミームルが使われていないという事ではなく

「……本当に、悠は凄いよ」

僅かながらに、緋織はプライベートな口調でそう呟く。

その言葉の中には、心からの実感が込められていた。

この視界を覆い尽くすほどの情報の山　　これらは全て、**詩樹悠**の脳内に保管されているのだ。

アンサス  
Aの始祖ルーン。

彼の持つルーンは、AとNとF。  
アンサズナウシズフェオ

その類稀な情報処理能力によって、悠は完全記憶能力を得ているのだ。

それこそが、彼の力である《口伝詩人》シグルドリーヴァ。この膨大な情報は全てルーンの力によって記憶されており、彼に問えばいかなる情報でも瞬時に答えが返ってくる。

無論、全ての情報請求を彼が担当する事は不可能であるからこそ、このミーミルが一つの職場として成り立っているのだが。

緋織はそんな事を脳裏に浮かべつつ、ゆっくりとその道を進んでゆく。

目指す先は、先日も来た事のある場所。ただし今回はムスペルヘイムの《災いの枝》レーヴァテインではなく、詩樹悠の友人である磨戸緋織するとのつもりであった。

そのため彼女の足取りは非常に軽く、以前とは違った様子である日のテーブルが置いてあった場所へと向かってゆく。

そこには、既に三人の人影があった。

その場所の主、詩樹悠は、緋織の姿を認めると嬉しそうに表情を綻ばせる。

「やあ、緋織。待っていたよ」

「悠……それに、美汐みしおと怜れいも」

「はー、やっと緋織ちゃんがいつも通りの口調で喋ってくれたよ」

「それは、私にだって立場と言うものが……」

悠と対角線上に座っていたのはユグドラシル次期総帥、《光輝な英雄譚》スング・サガこと大神美汐おおがみ。

そして悠の傍らに立ちながらティーセットを用意していたのはミー

ミル室長補佐、《植物園》こと伊藤怜だった。

アウレア・ポーマ

緋織は美汐の発した言葉に眉根を寄せつつ、クスクスと笑う怜の方へと一度睨みを利かせ、それから悠の正面の席へと腰掛けた。そんな彼女達の様子に、悠は小さく笑みを浮かべる。

「あんまり無茶を言っちゃ駄目だよ、美汐。緋織は融通が利かない……もとい、生真面目なんだから」

「ちよつと、悠！」

「はい、緋織ちゃん」

からかう悠に食って掛かろうとするものの、目の前に差し出された紅茶に、緋織は勢いを失った。

見上げれば、怜は温和そうな笑みを浮かべたまま緋織の事を見つめている。

そんな彼女の様子に毒気を抜かれ　怒りのタイミングを外されたとも言いが　緋織は静々と引き下がり、紅茶に手を伸ばした。怜の淹れるアップルティーは、若干ささくれ立った彼女の精神をゆつくりと落ち着けていった。

「さて、と。それじゃ、話をして行こうか、二人とも」

テーブルの中心にはお茶請けのクッキーが置かれ、怜も悠の隣に腰を下ろす。

彼の口調は、先ほどから変わらず穏やかでゆつたりとしたもの。けれど、その言葉の中にある僅かな硬さを、付き合いの長い三人は感じ取っていた。



それに対して僅かに表情を硬くする少女達の様子を感じ取り、悠は小さく笑みを浮かべてから声を上げる。

「まず、現状を確認しておこうか。怜、資料をお願い」  
「はい、これだよね」

悠の言葉に頷き、怜は傍らに置かれていたケースから二枚の書類を取り出す。

そして彼女は、それを前に据わっている二人へと差し出した。悠に対しては資料が必要ない事など、分かりきっている。

「《黒翼の悪龍》、ニーズホッグ。十四年前にこの地上に現れ、破壊の限りを尽くした刻印獣だ。ルーンクリーチャー  
オセルの始祖ルーンを持ち、強力無比な力を操るバケモノだよ。能力の研究が進んでいなかった十四年前当時、コレを倒せたのは奇跡に近いだろうね。」

……まあ、それを成し得たのが総帥だと言われれば、それはそれで納得できる事だとは思っけど」  
「それは、えっと……お父様だし」  
「それで納得してしまうのはどうかと思うのだけれど……」

笑顔で言った美汐に対し、緋織は小さく嘆息を零す。  
実際の所、ユグドラシルの中でも大神槍悟の能力を見た事がある者は殆ど存在しない。  
ムスペルヘイムの隊長である緋織すら、その能力行使を目の当たりにした事は一度として無かった。

かつての上官である涼二はそれを見た事があったようだが

「まあ、あの人が途方も無いほど強力な能力者だと言うのは今に始まった事じゃないし、それは気にしないでおいた方がいいだろうねともあれ、ニーズホッグは突如として復活を遂げ、アジア圏コロニーを襲撃、これを壊滅させた」

「一体、何処から現れたの？ 突然って言ったって、あんな大きなドラゴンだよ？」

「そうね……いくら何でも、あの強大なプレーナを見逃すなんて思えない」

二人の疑問と疑惑の視線。

けれど悠は、それに対して小さく肩を竦めて見せた。

「分からないんだよ。本当に、何処から現れたのか分からない。まるで、十四年前の日から突然タイムスリップしてきたように感じるよ」

「それは、流石に……」

「あはは、僕だって半分冗談だよ。いくら重力を操る事が出来るとはいえ、時間を跳躍するほどの力を集中させれば、地球自体が危うい。まあとにかく、僕らには説明できない事象だって事だよ」

悠の知識は、あくまで過去の記録を蓄積したものだ。

つまり、記録に無い出来事を把握する事は出来ず、観測されていない出来事を断言する事も叶わない。

彼に出来るのは、蓄積された大量の情報から、相手の動きを予測す

る事だけだ。

情報を処理する力を持つルーン、<sup>アンサズ</sup>Aの力。

その最上位たる始祖ルーンの能力は、この図書館じみた大量の書籍すら全て頭に叩き込み、その知識を自在に操るだけの処理速度を見せている。

しかし、その大量の知識からなる予測すら、彼の黒龍には通用しなかった。

「とにかく、アジアコロニーを滅ぼしたニーズホッグは、一直線に日本へと向かってきている」

「……悠君。もしかして、とは思うけど」

「確証は無いし、断言は出来ないけれど……そうだと思うよ、美汐」

具体的に言葉に出す事は無い。

けれど、その意味はこの場にいる誰もが理解している事だった。

示す内容はたった一つ

「ニーズホッグは、総帥の事を狙っている……それは、否定できないと思うよ」

「確定では無いけれど……そうね、最悪の場合も想定しておかないと」

ムスペルヘイムのかつての隊長から学んだ事の一つを思い起こし、  
緋織は小さく息を吐く。

最悪の想定はしておかなければならない。そして、それを起こさないように全力で行動する。

そして、今回における最悪の想定とはたった一つだ。

「お父様に危害が及んではいけない……だから、私達が頑張らないと」

「……美汐、一応言っておきたいのだけど」

「ん、何？ どうしたの緋織ちゃん？」

「普通に考えたら、貴方が出る方が有り得ないんだけど」

半眼で、睨むように緋織は呻く。

ぎくりと肩を跳ねさせる美汐に、緋織は小さく嘆息を零していた。彼女はある意味、総帥たる大神槍悟以上に重要な立ち位置にあるのだ。

出来ることならば、彼女は出撃しないほうがいい。だが

「そもも行かない理由があるんでしよう、悠。それじゃなければ、美汐をわざわざここに呼ぶ理由が無いわ」

「……何気にちよつと酷い事言ってる、緋織ちゃん？」

「あはは……まあこれは記録に残ってたし、予め分かってた事ではあったけどね。Oの始祖ルーンオセルによる領域展開……思った以上に厄介だよ。怜、お願い」

「うん、コレだよね」

悠の言葉に従い、怜は再び資料を取り出す。

それは十四年前に記録されたニーズホッグに関する資料。

当時まだ能力に関する研究は進んでおらず、能力ごとの特性に対する理解は浅かったが、それでも、一つの仮説が立てられていた。

その内容は、たった一つ。ニーズホッグの展開する領域の特性。それは

「能力の伝達の阻害……？」

「プラーナが大気中を伝わりにくくする効果、と言った感じかな」

「身体強化系や物質形成系ならともかく、放出系能力の使い手にとつてはかなり厄介な能力ね」

「そうだね。緋織なら能力の半分は問題ないだろうけど……：：：：：火炎の放出による攻撃は、威力がかなり減衰すると思うよ」

「……悠君、って言う事は、もしかして」

何かを思いついたかのように、美汐はそう声を上げる。

そんな彼女の表情に対し、悠は小さく笑みを浮かべながら頷いて見せた。

そう、それこそが、重要な立場にある美汐が駆り出された最大の理由なのだ。

「そう。君の《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》で、ニーズホッグの使う能力領域を上書きするか……：：：最低でも効力を弱められないか、という目論見があるのさ」

「成程、さすが悠君！ よく考えてるなあ」

「まあ、考えるのが僕の仕事だからね」

照れたように、悠は軽く頬を掻く。

悠の語った内容は、決して確証が持てるものではない。

けれど、数あるという言葉すら生温い、無数の能力資料の中から分

析し、彼はそう判断した。

彼の頭の中では、無数の可能性がシミュレーションされ、その中で高い可能性を判別し、それを元に作戦を立てているのだ。ともあれ、悠は小さく頷くと、怜から再び新たな資料を受け取る。

「作戦としてはこうだ。まず、ニーズホッグとの距離がある内に美汐が《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》を展開。

招集した能力者たちの中で、飛行能力を持たない者はその時点で全力を出し切ってもらおう」

「長く持たせるべきじゃないの？」

「僕の予想では、美汐の《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》も、ニーズホッグの能力を完全に打ち消すまでには至らない。

故に、災害級程度では、強化されていたとしても奴にダメージを与えられるかどうかは疑問なんだ。

その言葉は、無慈悲で淡々としたもの。

それは、ただ純粹に高い可能性を述べているに過ぎないからだ。

悠は頭の中に浮かべた無数の可能性の中から、最も高いものをピックアップする。

「《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》の力により、ディザスター災害級でも一時的にフェアブラ神話級に近い性能を得る。

それだけの攻撃に晒されれば、あのバケモノとて無視はできないはずだよ」

「……けれど、上書きは出来ないのでしょうか？ それでは、美汐の方が押し切られる可能性だって……」

「最初の砲撃で倒せれば問題は無いんだろうけど……まあ、そこま

で高望みは出来ないね」

悠は、そう言って小さく苦笑を零す。

多くの情報を知っていても、彼は決してニーズホッグの事を過小評価しない。

相手は、想像を絶するほどの怪物なのだ　　そう判断しているのだ。

「美汐の強化を受けても、恐らくダメージは通らないだろう。その攻撃の目的は、あくまでもニーズホッグの注意を引く事だ。他の能力者は、その砲撃と共に突撃、ニーズホッグの能力領域が出力を上げる前に攻撃を叩き込む」

「初撃が大事って事ね」

「うん。正直、正面から戦闘するのはかなり危険だ。手段も選ばず行きたい所だったけど、そんな手段すら通用しない場合が多くてね」

例えば、『グレイプニル』。

能力者を拘束し、あらゆる力やプラーナの出力を減衰させる道具。それさえあれば、確かにニーズホッグの力を抑えられるかもしれない。

その力は、彼の強大な能力者である《フロースワイトニル悪名高き狼》すら完全に押さえ込んでいたものなのだから。

けれど、と悠は思う。

『グレイプニル』はあくまでも人間用に作り出された道具なのだ。リンクリーチャー一応ながら刻印獣の拘束と言う形で使われた事もあるが、その使用

法は本分ではない。

通常の獣の領域を遙かに超えた魔獣、あの《黒翼の悪龍》を、高々ベルトごときで封じ込める事が出来るのか。

例えばルーンを押さえ込む事が出来たとしても、本来持つその力だけで引き千切られてしまう可能性が高い、と悠はそう判断していた。

「戦闘は回避を優先で。強力無比な重力波だけど、あの攻撃は相手の視界内に入っていないければ問題ない」

「……逆に言うと、視界内だったら何処でも潰されかねないって事？」

「そうだね、それが厄介な所だ。おまけに相手はHハガラスの暴風を纏っていて、飛行するのも結構大変だし」

「……本当に厄介ね」

頬を引き皺らせ、頬杖を突くように頭を抱えながらも、緋織は思わずそう呻き声を上げる。

予備動作は瞳を向ける事だけ。資料によればその攻撃はあまり広い領域に対して放たれる訳ではないようだが、それでも人体一つをペー  
ースト状に潰してしまう威力は危険極まりないものだ。

Hハガラス自体もかなりの破壊力を持っているルーンであり、チャンスが無ければ迂闊に近づく事は出来ないだろう。

「最初の一撃で倒す事が出来れば最高だけど、失敗する可能性を考慮しておいた方がいい。地上の人達は一旦下げ、美汐も上空へ行って能力を展開……出来るだけオセルに集中して、相手の領域を塗り潰すようにするんだ」

「それやっていると、私動けないと思うんだけど……」



「それなら、うちの隊員に抱えて飛んでもらうようにする？」  
「うーん……そうだね、それじゃあお願いしようかな」

語り合う美汐と緋織。その言葉に、傍らで話を聞いていた怜は小さく苦笑を零していた。

次期総帥たる大神美汐、その存在はムスペルヘイムの隊員と言えど雲の上の存在だろう。

それを抱えて飛ぶなど、畏れ多いにもほどがある。

若干ながらその人物に同情しつつ、怜は美汐へと視線を向けた。

「その状態で、ヴォルスング・サガ《光輝なる英雄譚》を展開できる？」

「……他のルーンに力を回す余裕があるかどうかは分からないけど、出来たらやってみる　ううん、やるよ。皆の為だもの！」

「うん、流石だね、美汐ちゃん」

「あんまり無茶はしないで欲しいけれどね」

小さくガッツポーズを作る美汐に怜は笑い、緋織は嘆息する。

かつてから変わらぬやり取り　しかし、最後にまとめの言葉を発する存在は、今はいない。

僅かな言葉の間にその空虚さを感じ取り、悠は思わず自嘲していた。考えていても、仕方が無いと。

「最悪の場合、撤退する事になる。けれど、総帥の準備が済むまでは持たせないと駄目だ。何の用意もなく戦いになってしまえば、この密都が戦場になってしまうかもしれないからね」

そんな言葉に、美汐と緋織は表情を引き締める。  
この場所を護る事こそが己の使命であると、そう信じているのだ。  
その真つ直ぐな視線に頼もしさを感じつつ、悠は締めくくる言葉を  
発する。

「それじゃあ、そろそろ行ってもらおうよ。正直、時間はかなり押し  
てるんだ。隊員への連絡は移動中にお願ひ」

「ええ、分かった。後方からの指示、期待してる」

「私達の力、悠君に預けるからね」

「……うん。頑張ってるね、二人とも」

僅かに己の無力を感じ、悠は苦笑する。

けれど、それは本当の無力ではないのだと、他ならぬ彼自身が理解  
していた。

この戦場こそが、己の誇りなのだ、かつて一人の友人が教えてく  
れたのだから。

四人は、小さく微笑みテーブルの中心へと手を伸ばす。

そこに重ねられた手は、僅かに下へと押され　そして、勢いよ  
く上へと解き放たれた。

「必ず勝つわ」

「負けない、仲間がいるから」

「うん、信じてる。だから二人とも、怪我しちゃだめだよ」

「必ず無事に帰って来る事……僕も、精一杯サポートするよ」

誓うよつに語り合  
いった。

そして、四人は己の戦場へと向かって

『彼』が手に入れた暮らしは、非常に平穏なものだった。とはいえ、最初は非常に大変なものだったのだが。

大災害による混乱は少女から家族を奪い、『彼』と少女は廃墟と化した街を歩き回る事になったのだから。

巨大な隕石の飛来による混乱、その中身がぶちまけられた事による火災　尤も、日本はその被害は殆ど無かったのだが　そして、迫り来る水位の上昇。

そんな中で生き延びる事が出来たのは、『彼』と少女が協力を忘れなかったからだ。

結果として、少女達は警察によって保護され、安全な場所へと移された。

「　　ずっと、いつしよだよ」

それでも、彼女が『彼』を離す事は無かったのだが。二人は、共に地獄と化した世界を歩いた親友同士だったのだ。その絆は、決して弱いものではなかった。故に、その絆が己をより孤独にするものであったとしても、少女は決して離そうとはしなかったのだ。

孤児院に預けられた少女は、周囲の子供達から距離を置かれていた。その理由など、考えるまでも無い。

(私が、いるからだ )

『彼』は、そう自覚する。そしてそれは、真実その通りであった。『彼』の存在は、少女にとってマイナスにしかなくなっていなかったのだ。

(……けれど)

だからと言って己が離れば、少女がそれ以上に傷つく事を『彼』は知っていた。その為に、『彼』には少女の傍から離れると言う選択肢を取る事は出来なかったのだ。何より、それは約束だったのだから。ずっといっしょ、なのだ。

(だから私は、彼女を護り続けよう)

それこそが、彼女に命を救って貰った己にとって何よりの義務なのだと　　そう、『彼』は己に言い聞かせていた。

彼女に降りかかる悪意を振り払おうと、常に彼女の傍にいたのだ。それによって少女がより孤独になっている事を理解しつつも、彼は決して彼女の傍から離れようとしなかった。

そして、少女の前に一人の少年が現れた。

「おう、お前、変わった奴だなア」

「……アンタに言われたくない」

それは、軽薄な笑みを浮かべた一人の少年。

大仰な首輪を付け、時折それを煩わしそうに触れている少年は、臆する事無く少女へと近付いてきた。

孤児院にやってきてからそれほど日を置いていない彼は、住んでいる子供達の間で瞬く間にの上がり、少女へと話しかけてきたのだ。『彼』の存在を気にせず、それどころか興味を持ち、ただ楽しそうにしている少年。

それが、少女にとってこの孤児院で初めての友達だった。

無口だった少女は、彼と付き合う事で本来持っていた筈の明るさを取り戻し、人の輪の中で徐々に受け入れられてゆく。

『彼』はそれを少々寂しげに見つめながらも、彼女が己を取り戻した事に安堵していた。

それは、『彼』にとって何よりも嬉しい事。

『彼』は、彼女の幸せを誰よりも願っていたのだから。

そして

「ちょっと、何一人でボーっとしてんの？」

「辛気臭エ面してんなア、おい」

「……何だ、お前ら」

二人は、暗い瞳をした少年と出会った。

最初の頃は目に包帯をしており、それが取れた後も、時折どこかに連れて行かれていた少年。

全てを拒絶しようとしているその眼差しは、二人に対してでも決して変わる事は無かった。

けれど。

「ほら、これ食べなさいって」

「だから、俺に構うな……って何でお前が食うんだ!？」

「お前が食わねエからだろ」

少年少女は、決して諦めなかった。

一人きりだった少年を、決して一人きりにはさせなかった。

それは残酷で、何より暖かい行為。青紫の瞳に絶望を浮かべていた少年は、その絶望を感じ取る暇すら奪われたのだ。

故に、アレは選ばざるを得なかった。そして、自らの足で歩む事を始めた。

『彼』は　　ずっと少女の傍で、その様子を見守り続けていたのだ。  
ずっと、ずっと、変わる事無く

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ふぁ……あ、と。あー、久しぶりにゆっくり寝た気がするな」

寝台から身体を起こし、涼二は小さくそつ口にする。  
しっかりと眠った頭にはそれほど眠気は残っておらず、視界の端に



映る時計は、いつもより三十分以上遅い時間を示していた。そこで、涼二はふと疑問に首を傾げる。

「……あいつら、今日は来てないのか」

ここの所毎日来ていた双雅と桜花　その二人の存在が無かった事に、涼二は違和感を感じていたのだ。

いつもなら何も言わないでも勝手に入ってきていると言つのに、今日はその姿が全く無い。

と、そこまで考え、涼二は思わず眉根を寄せながら嘆息していた。すっかり、あの二人がいる環境に慣れてしまっていたのだ。

「……変な事を言うつと付け上がるからな、あのバカ共」

とは言いつつも、涼二は手を伸ばして携帯を手に取った。

と　その携帯のランプが僅かに点灯する。

その淡い緑色の光は、メールを受信している事を示す合図だった。

ふむ、と小さく呟き、涼二は携帯を開く　そこに記されていた名前は、幼馴染の少女のものだ。

「桜花か……今度は何だ？」

とりあえず厄介事である、と最初から構え、涼二はメッセージを開く。

そこに書かれていたのは、ごく単純な内容。  
それ故に　　涼二は、思わず目を疑っていた。

『やっぱり気になるので、ニーズホッグが来そうな所を見に行つてくるよー』

その一文のみのメール。

涼二は思わずそれを凝視し、そして携帯をひっくり返して裏を眺め  
それほど動揺していたのだ　　その内容をようやく飲み込んだ頃、涼二はぼんやりと虚空を見上げていた。  
しばしそのまま沈黙し

「はぁッ!?!　何考えてんだあのバカ!?!　ってかマジで言ってるのか、コレ!?!」

携帯をベッドに叩きつけ、涼二は思わずそう叫ぶ。  
頭を抱えてうずくまり、しばし悩んだ後、彼はゆっくりと立ち上がった。  
半ば虚ろな瞳で、ゆっくりとキッチンの方へ歩いてゆく。

「……冗談だ。冗談だった。そういう事にしておいてくれ」

半ば呻くようにそう呟きながら、涼二は冷蔵庫の中身を漁ってゆく。

現実逃避のように朝食を作り始めた。そこで、唐突に携帯が鳴った。

思わず反射的に振り返り、その己の挙動そのものへと呆れを抱きながら、涼二は携帯を持ち上げる。

が、そこに表示されていた名前は、彼が予想していたものとは異なるものであった。

思わず眉根を寄せつつ、通話ボタンを押す。

「……なんだよ、双雅」

「おー、涼二。オマエ、バカのバカらしさが炸裂した、バカなりに何かバカっぽくバカな事を考えたあのバカなメールを読んだか？」

「バカがゲシュタルト崩壊するだろうが、このバカ……ああ、見だよ。目の錯覚であって欲しかったがな」

響いた声に嘆息しつつ、涼二はそう告げる。

その先の声　　双雅の声は、その言葉を笑い飛ばすものの、どこかいつもよりも精彩を欠いているようであった。

「あのバカがバカであった事は今更だけどよ、どうするんだ、涼二？」

「放っておけ……と、言いたい所なんだがな」

心底放っておきたい気持ちを抑え、涼二は肩を落とす。

放っておけない気持ちと、放っておけない理由が存在している事に、彼は頭痛を覚えていたのだ。

実際、感情を抜きにしても彼女を放っておく事は不可能だ。

何故なら

「あいつ、俺達がユグドラシルから追われてる事を知らないからな……」

『ああ……何も知らずに俺達の事口にしかねねエからな、本当に』

御津川<sup>みとがわ</sup>桜花は、涼二と双雅がユグドラシルに敵対する存在である事を知らない。

二スホッグの到達するであろう地域には既に封鎖線が張られており、一般人は立ち入れないようになってはいるが 国<sup>バカ</sup>一つ壊滅させるようなバケモノに好き好んで会おうとするような者はいないと言ふ事で、その警備は軽いものだ。

山道を辿って入って行けば、その封鎖戦を躲す事も不可能ではないだろう。

そして、二人は何よりも、彼女のその厄介さを知っていた。

「どう思う、双雅」

『そオだな。封鎖線躲して街中まで到達するに千円だ』

「俺は、到達予定地である海岸にひよっこり現れるに五千円……やりかねないから怖いんだよ、あのバカ」

涼二と双雅は、揃って嘆息する。

かつて涼二が八歳の頃、隣の県でやっている爬虫類展を目指して、桜花が一人で旅行に行ってしまった事があった。

普通に考えれば、孤児院に住んでいる十にも満たない子供の経済力で可能な行動では無い。

が、彼女はそれを実行したのだ。孤児院の先生達の手伝いをしてこつこつと溜めた小遣いを使い、しっかりとした計画まで立てて。それに面喰らったのは、普段彼女と付き合っていた涼二達だった。

「あの時、あいつがいなくなったことを隠すのがやばかったからな……」

『ってか、割に合わねエのはこつちだっただろ』  
「全くだ」

結局、涼二たちは二人で連れ戻そうと孤児院を飛び出し、二次的被害に遭う事となった。

結果的にこつぴどく怒られたのは二人だけで、桜花はいつの間にか孤児院に戻って平然としていたのだ。以来、二人は学んだ。やる気になった桜花に関わると、ロクな事が無いと。

深々と、嘆息する。

「……どうする？」

『どうもこつも、今回は流石にヤベエだろ』  
「だよな……」

桜花がニーズホッグに直面して、無事で済むとは到底思えない。そして、彼女がユグドラシルと対面すれば、自分達がただでは済まない。

後半に関しては彼女に責任は無いが、それでも恨み言の一つや二つは言いたくなるものである。

そんな事を考えながら嘆息し、涼二はベッドへと腰を下ろした。

「…………行くか」

『あア…………とりあえず、そっち寄ってから行くぜ。バイクでいいだろ?』

「正直、お前が先に行った方がいいと思うんだが」

『あのちまい嬢ちゃんのナビゲートが欲しいからな』

「…………了解、言っておく」

どの道、異常なまでの行動力を発揮する桜花を追うには、闇雲に探すだけでは意味が無いと分かっている。

スリスならば桜花の携帯のGPSなどを追って彼女の現在位置を割り出す事が出来るだろう。

現在位置を知る事に若干ながら恐怖を覚え 既に相当遠くまで行ってそうで怖いのだ 涼二は声を上げた。

「んじゃ、さつさと来い。どうせアレが付いて行ってるんだろうが、それでも何しでかすか分からないからな」

『確かにな。つー訳で、もうお前の家の前に着いたぜ』

「…………早いな、オイ」

感じるプラーナの気配に半眼を向け、涼二は取り出していた食材を冷蔵庫の中に戻していた。

代わりに取り出したチューブゼリーの蓋を開けつつ、小さく嘆息を零す。

「……どうしてこう、何かと厄介な事に巻き込まれるんだかな、俺は」

半ば宿命にすらなっているように感じる己の体質に辟易しつつ、涼二は空になったゼリー容器を凍結させて粉微塵に粉碎し、部屋の外へと歩いていった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ふう……いやあ、ハイキングなんて久しぶりだなあ」

リュックを背負い、山道を歩きながら、御津川桜花は上機嫌で頷いていた。

密都を出てしばらく。高速鉄道を乗り継ぎ、本州をほぼ横断して、彼女はニーズホッグが向かってくるであろう場所へと足を踏み入れていたのだ。

彼女は事前の調べでニーズホッグが襲ってきたアジアコロニーの位置を把握し、そこと密都を繋いだ直線から、ニーズホッグが現れる位置を予測しているのだ。

ちなみに、根拠は一切無い。

「ユグドラシルの人たちの封鎖線も張られてたし、人氣が無い辺り住民は避難させてるんだろっし……こりゃ、当たりかな」

しかしながら、桜花の直感は昔からかなり正確な、信用のおける感覚であった。

彼女が辿り着いた場所は、ユグドラシルの人間達が警戒している場所そのもの。

一部の狂いもなくそこに到達し、さらには警備の薄そうな山の中を地図もなくすたすたと歩き抜け　遠景には既に、目的地である海岸が見えていた。

その壮大な景色に、桜花は満足気な表情で頷く。

「うん、いい景色。旅行に来た甲斐があったなあ」



すっかり旅行気分である。

一応危険な事をしている自覚はあるものの、遠くから見ている分には大丈夫だろうという楽観的な思考の下、彼女はこの場に訪れていいのだ。

甘いと言わざるを得ない事ではあるが、生憎と彼女を諫めるようなものはここには存在しない。

ただ、見守る存在のみなのだ。

「よし、もうすぐでトカゲの王様とご対面よ。楽しみだねー、夜月」

その言葉と共に、口を引き絞ってあったナツプザックが蠢く。

そして、その口を内側から押し上げて現れたのは……1匹の、大きな蛇だった。

黒く光沢のある鱗、若干太い身体、そして切れ上がった輝く黄金の瞳。

夜月と呼ばれた蛇は、小さく舌を出し入れると、その鎌首を桜花の肩に乗せた。

桜花もまた、上機嫌でその滑らかな身体に頬をこすりつける。

「ふふつ。でもやっぱり、一番綺麗でカッコいいのは夜月だよ。いつもあたしを護ってくれるもの」

しゅる、と。まるで同意するかのように、黒き蛇は音を立てる。

桜花の持つルーン能力 動物に好かれると言つ中途半端な能力は、彼女にとっては非常に好ましいものであった。

その力があるからこそ、彼と……夜月と一緒にいる事が出来るからだ。

彼女は、この蛇の事を愛していた。ずっと昔から、己を独りぼっちにはしなかった彼の事を。

桜花は笑う。決して一人ではない事を理解して。

「ずっと……ずっと一緒だよ、夜月」

その言葉は                    どこか、誓いと契約にも似た響きを持っていたのだった。



04-6:桜花を追って(前書き)

資格試験の為、20日過ぎ辺りまでお休みします

機械的な線の走る視界の中、涼二はバイクに乗って広い道を疾走する。

追走する双雅の気配を感じながら、ヘルメットの下にバイザーを着した涼二は、備え付けられたマイクへと向かって話しかけていた。その通信が繋がっている先は、いつもと変わらぬ彼女の元だ。

「……ってな訳で、あのバカを捕まえに行ってくる」

『了解……一応前にちよつと話には聞いてたけど、本当にそこまで行動力ある人だったんだ、涼二の友達って』

「ああ……いや、別にそれが悪いと言うんじゃないんだがな」

普段で言うならば、人を引っ張ってゆく事の出来るその行動力は、美点として誇る事の出来るものだ。

しかしながら、今この状況ではそれも厄介と言わざるを得ない。

そんな事を考え、涼二は小さく嘆息を漏らしていた。尤も、彼女の事を知っている二人がそれを警戒しておくべきだったのもまた事実ではあるのだが。

「とにかく、お前の方であいつを追ってくれないか？」

『うん、それは了解だけど……涼二が辿り着く前に彼女がユグドラシルと接触しちゃってたらどうするの？』

「そんな時は……まあ、隙を見て連れ出すさ。しばらくすりゃ、ニーズホッグとの戦闘が始まる。流石に、その状況で部外者のことなんぞ気にしてる暇は無いだろっからな」

ユグドラシルが　主にムスベル Heim がニーズホッグの進路上に展開している事はほぼ間違い無い。

けれど、いかな最強の実働部隊とはいえ、あの黒龍を相手に楽な戦闘が出来るとは到底思えない。

彼らの実力をよく知る涼二だからこそ、それを確信する事が出来た。故に

『……涼二、分かっているとと思うけど』

「ああ……手は貸さないさ。気になる事は否定しないが、本末転倒になっちまったら意味が無いからな。桜花を回収して、とっとと離脱するぞ」

『うん、お願いだよ……って、ん？　どうしたの？』

「ん……？」

ふと、スピーカーの向こうのスリスの声が途切れる。

前方への注意を外さぬようにしながら、涼二はその向こうで交わさ  
れていると思われる会話へと耳を澄ませていた。  
けれどその音は遠く、さらにバイクの走行音で塗り潰されてしまい、  
鋭い涼二の聴覚でも聞き取る事はできない。

が　あまり、悩む必要は存在していなかった。

『聞こえますか、涼二さん』

「鉄森？　どうしてお前が出る？」

聞こえてきたのは、鉄森シアの声。

それに涼二は思わず首を傾げ、眉根を寄せていた。

今までも何度か彼女の前でスリスと通信を行ってきたのだが、この  
ように彼女が割り込んでくる事は今までに一度も無かったのだ。

その異変に疑問符を浮かべた涼二が問いかけた言葉に、シアはどこ  
か硬さを交えた声で返答した。

『これはわたくしからの正式な依頼です。状況を見て、大神美汐に  
命の危険が及んだ場合、彼女達に助勢してください』

「何……？」

そんな彼女の言葉に、涼二は思わず眉根を寄せる。

とてもではないが、正気という言葉とは思えなかったのだ。

今まで苦労して隠してきた正体を、そんな事で晒してしまうのはい  
かがなものか、と　しかし同時に、涼二にはもう一つ気になる  
事があった。

「鉄森……お前、美汐と何か関係でもあるのか？」

「……いいえ、わたくし自身には、彼女との深い繋がりなどありません」

「だが、お前の目的には美汐が関わってくると言っ事だな？」

「と言っより、彼女そのものがわたくしの目的と言いましようか」

今まで隠していた事柄。しかしそれにこだわるような様子は見せず、シアはそう口にする。

そこに含まれている覚悟、そして冷たい感情　　殺意にも似たそれに、涼二は小さく目を細める。

それはある種、彼女にとっての誇りなのだろう。

「わたくしは、彼女をユグドラシルのトップに置きたい。そして、大神槍悟には英雄としての死を与えたい」

「……それは」

「酷い女でしょう、軽蔑しましたか？ わたくしは、貴方達に『死ぬ』と言っているようなものでしたからね」

英雄が英雄として死ぬには、それ相応の何かを道連れにする必要がある。

シアは、その“何か”の役を涼二にやらせるつもりだったのだろう。だが　　今回、ここにニーズホッグという存在が現れた。

これは、彼女にとっては僥倖と言える事なのだ。

「これ以上、彼に台頭して貰う訳には行かないのです。彼のやり方



は苛烈で、同時に何処までも正しいもの。その清冽さは、これからの時代には必要ないのです』

「だから討つと？ 俺の言えた義理ではないが、随分と傲慢な物言いだな」

『自覚はしています。けれど、これは純然たる事実です』

その言葉に、涼二は思わず苦笑を浮かべていた。

それは呆れたからではなく、彼女の言葉に納得してしまっていたからだ。

大神槍悟のやり方は、彼女の言う通り非常に苛烈だ。

いかなる方法を以つてでも道を強制的に修正し、己の目指す理想へと突き進んでゆく。

それは弱者を守る事を目的としておらず、そんな一部を切り捨てても多くを救おうとするやり方。

『彼のやり方は、確かにあの混迷した時代を切り抜けるために必要なものでした。けれど、今は違う』

「完全とは言わないが、国内は安定してきている。故に、あの男のやり方は、最早犠牲を増やす結果にしかならないと言う事か」

『貴方自身が、そうであったように』

シアの言葉に、涼二はギシリと牙を剥き出しにする。

例え言葉の上だけだったとしても、その怒りと憎しみは止む事が無い。

大神槍悟の導く世界は、確かに住みよいものとなるだろう。

しかしそれは、全てが彼に隷属しているに等しいもの。そして、それを涼二は許す事が出来ない。

故に 利害は一致した。

「……美汐ならば、協力して歩むと言う道を選ぶ」

「人に好かれる事それ自体が能力である彼女ならば、多くの仲間と共に歩む事が出来るでしょう。故に、大神槍悟にはここで退場していただきたいと思うのです」

「これ以上あの男のやり方に染まれば、取り返しのつかない事になると？」

「ええ……もう少し時間を置いてから伝えるつもりでしたが、この状況では仕方ありません」

誰もこのような状況は予測できなかったのだから、仕方ないと言えは仕方がないのだが。

小さく苦笑しながらも、涼二は頷く。

依頼と言うのならば、異論は無いと 彼としても、美汐を次なる国のトップとして君臨させるつもりだったのだから。

それこそが彼の思い描く、全ての終わった世界の図だったのだから。

「……まあ、了解した。依頼を受けよう。とりあえず、もう一度スリスと変わってくれ」

「ええ、分かりましたわ……頼みましたよ」

「おう、分かってるさ」

小さな声と共に、シアの言葉は途切れた。

そしてスピーカーの先から気配が離れ、そして元の声に戻ってくる。

小さく嘆息した音を交え、スリスは声を上げた。

『全く……受けちゃうだねえ、涼二は』

「まあ、な。俺の願いに近いものだ……それを否定は出来ないさ」

それが例え、己の滅びに直結するはずのものだったとしても。

元より刺し違える覚悟であった涼二にとってシアの言葉は、己の果たした後を保証してくれる存在がいる事に安堵を覚えるものであった。

「とりあえず、そっちはどうする？」

『んー……そうだね。参戦する可能性があるなら、バックアップできる所にいたいんだけど』

「だな……ならどうする？」

『おっちゃんと雨音ちゃんに向かって貰うよ。おっちゃんなら戦力になるし、雨音ちゃんがいれば怪我の心配も無くなる』

「了解した。お前は残るって事は」

『うん、しっかりナビゲートする。だから、頑張って』

「……ああ」

小さく微笑み、涼二は頷く。

そしてそれと共に、スリスとの通信は終了した。

涼二の装着するバイザーにはまだ彼女からの情報位置は届いていないが、それも時間の問題だろうと

桜花の現在

『おう涼二、話は終わったかア?』

「ああ、とりあえず、もうじき地図が表示されるだろうよ」

『ソイツは重畳。しかし、このバイザー便利だなア、オイ。俺も一つ欲しいんだが』

「別にやってもいいぞ。持ってるのはこの二つだけじゃないしな」

スピーカーから響いた声に、涼二は苦笑を漏らす。

涼二は、所有しているバイザーの一つを双雅に渡していたのだ。

ヘルメットの下に着けていれば外から気づかれる事はなく、さらにバイクの走行音の中でも会話をする事が可能。

更に必要な情報は画面に表示される為、今この状況では非常に都合が良かったのだ。

『んで? どんなモンなんだ?』

「あ? 何がだよ?」

『助けるんだろオ? けどよ、そうしちまえば、もう後戻りは出来ないんだぜ?』

いつも通りの軽薄な様子の中 けれど付き合いの長い涼二は、

それが心から案じて発せられた言葉である事を知っていた。

故に、涼二は僅かながらに笑う。

双雅のその心に、感謝の念を抱きながら。

「もうとつくに、後戻りはできない位置に来てるさ……お前の事だ、気付いてるんだろ?」

『……ああ、まアな』

「そういう事だよ。意味のある戦いにしたいんだ、俺は」  
『そかい。んじゃ、まアとことんまで付き合ってやるさ』

呆れたような嘆息に、どこか諦観のようなものを混ぜ、双雅はそ  
う口にする。

そして彼に認められた事に、涼二はどこか苦笑のような笑みを浮か  
べていた。

「……さて、もうすぐ飛ばせるルートを示してくれるぞ」  
『応よ、さっさと行くとするかア』

どこか誤魔化すように、二人は笑い　遠く離れた地への道を、  
突き進んで行った。

「……アンタ達に協力するとは言ったけどさ。まさか、足として使われるとは思わなかったわ」

「世話をかけるな、スヴィティ君」

「いや、それは別にいいんだけど……」

後部座席に雨音とガルムを乗せ、スヴィティ・リユングはカーナビに表示されている道を進んでゆく。

運転している彼女には驚いた事に、それが渋滞や信号に掴まるような事はほとんどなく、三人を乗せた車はまるで高速道路を走るかのようにすすいと進んで行っていた。

遠距離からあっさりとカーナビを乗っ取っている事、そしてこの止まる事の無い車に戦々恐々としながら、スヴィティはガルムへと向けて話しかける。

「話聞く限り、アンタが一人で言った方が速いんじゃないの？」

「ふむ。それは確かにその通りなのだがな」

そんな彼女の言葉に、ガルムは小さく苦笑を浮かべた。

加速のルーンであるRラトを持つ神話級ルーンフアーブラ能力者。

そんな彼の持つ速さは、いかに高いスピードを持つスヴィティのス

ポーツカーでも、決して追いつく事は不可能だ。  
さらに身体強化のルーンであるTまで所有しているガルムは、基本的に疲れ知らずである。

彼の持つ力ならば、一人で行けばあっという間に目的地に着く事も可能だろう。

しかしながら、今回はそれをする訳にはいかなかったのだ。

「今回の敵は、計り知れないほどに強大だ。僅かな油断で、腕を引き千切られるとも限らぬのだ」

「私なら、それを癒してあげる事も可能かもしれませんが」

そんな雨音の言葉に、スヴィティは口元を引き攣らせる。

信じがたい回復能力　彼女は、雨音が始祖ルーン保持者である事を知っていた。

しかしながら、身近に始祖ルーンを持つ者がいたスヴィティも、その力を完全に把握している訳では無い。

それ故に、雨音に力は彼女にとって驚愕に値するものだったのだ。そして、それと同時に

「アンタ達がそこまでしなきゃならないようなニーズホッグって、一体どんなバケモノなのよ……?」

そんな疑問が、彼女の脳裏に浮かんでいた。

フェアブラ  
神話級は、ただそれだけで常識を覆してしまうほどの力を持った存在である。

そんなモノが束になってかからなければならぬような刻印獣……  
ルーンクリーチャー

それが、一体どのような存在なのか、と。

そしてそれに対する答えは、意外な所から返ってきた。

『教えてあげようか？』

「ツ……！？ あ、アンタ、どっから話しかけてくるのよ!？」

『え？ カーナビだけど』

「いや、音声を再生する機能はあるけど、通信機能なんて無かったよ……」

『フェアブラ  
神話級は常識外れである』と先ほど認識したばかりだったスヴィテイは、再び驚いてしまった事に深々と嘆息していた。

が、そんな彼女の様子は気にせず、その声　スリスは声を上げる。

『ニーズホツグは、始祖ルーンを持つ最強の刻印獣。ルーンクリチャー持っているルーンはOとHとU。オセル　ハガラスウルス』

知能は低いものの、その習性と性質のおかげで非常に厄介な存在だった　って、記録にはあるね』

「ふむ、その話は聞いていないな。新しい情報か？」

『うん、能力の詳細な情報っばいね…… ホント、厄介だよコイツ』

辟易したような声で、スリスはそう告げる。

そんな彼女の言葉に目を細め、ガラムは続けて声を上げた。

「習性と性質、だったか。それは？」



『人を襲って喰らう習性があるって言ったよね？ あれ、喰らった人間のプラーナを吸収してるみたいなんだ』  
「プラーナを、吸収……」

小さく、雨音が声を上げる。

その力は、彼女にとって忌むべきものであったからだ。  
雨音の反応が見えているのか、スリスは若干言葉を詰まらせた後、それでも説明せねばならないと声を上げた。

『何故プラーナを溜め込もうとするのかは分からない。けれど、それがニーズホッグの習性なんだ。』

そして、数え切れないほどの人間を喰らってきたその力は、最早無尽蔵と言うべきレベルまで高まっている』

「ふむ……成程、強力な訳だ」

「理由も無いのに人を喰らって……?」

『うん、だから、雨音ちゃんとは違うよ』

実際の所、雨音も理由があつてあの力を行使していた訳ではないが、操られていた以上あれは雨音の意志ではない。

スリスは言外にそう告げながら、車内の者たちへと続ける。

その言葉の中に、若干の硬さを交えて。

『けど、そのプラーナ量ならあの理不尽な力だつて納得が行く。〇オセルの始祖ルーンによって展開される領域は、プラーナの空気伝導率を著しく下げてしまう効果があるんだ』

「……能力の減衰領域って事?」

『お、さすが科学者、頭いいね』

茶化しているわけではないのだが、スリスのその物言いにスヴェイティは若干眉根を寄せる。

しかし特に何か言う事もなく、スリスに先を促した。

『その力は、ニーズホッグ本体に近づくほど強力になってゆく。正直、ボク程度の能力強度じゃ、触れる前に消滅する可能性もあるよ』  
「ちよつと待ちなさい、アンタ仮にも神話級でしょ!？」

『僕は攻撃系能力として使えるのはHしか持っていないからね。単品じゃ届かないよ』  
ハガラス

しかし、それでも巨大な雷を呼び出す事ができるほどの能力者である。

若干の眩暈を感じ、スヴェイティは深々と溜め息を吐き出していた。最早次元が違うのだ、と。今現在己がいる状況の異常さを、彼女はようやく自覚していた。

『とにかく、その力ゆえに最強と呼ばれてるんだ。HもUもかなり強度が高いしね』  
ハガラスウルズ

「……それ、どうやって勝つのかな?」  
『少なくとも大神槍悟は勝つたらしいけど。まあ、かつてよりも大量のプラーナ喰らって強化してるんだろうけど』

「ああもつ……!」

悪態を吐きながら、スヴィティは前方へのみ意識を集中させる事を決意する。

そんな彼女の意識の中にあっただのは、先行してその戦場へと向かって言った、双雅の事に埋め尽くされていたのだった。

遠く広がる海原と、足元に広がる砂浜。

それを眺め、緋織が思うのは、『踏み込み辛そう』などという少女らしからぬ感想だった。

彼女はその瞳でじつと海の向こうを睨むようにしつつ、沈黙を続けている。

と　そこに、後ろから声を掛ける存在があった。

「緋織ちゃん、体冷えるよ」

「美汐様……一人で出歩かないようにと申しているでしょう」

「今は緋織ちゃんがいるもん」

嘆息と共に、緋織は振り返る。

そこに立っていたのは響いた声の通り、黄金の髪を風に揺らす大神美汐だった。

冬の海に吹き荒れる寒風に少しだけ身を震わせるようにしながら、

彼女は笑う。

これから先に待つ凄惨な戦いを、微塵も気負う様子も無く。

(いや)

脳裏に浮かんだ言葉を、緋織は即座に否定する。

気にしていない筈が無い。彼女は、人の上に立つ教育を受けてはいるが、それでも根本は心優しい少女なのだ。

誰もが生き残れる保証など無い。むしろ、誰かが命を落とす可能性の方が遥かに高いだろう。

そんな戦場に立つ事は、彼女にとって苦痛にしかない筈だ。

だというのに、何故美汐は笑っている事が出来るのか。それが、緋織には分からなかった。

「ここが、戦場になるんだよね」

「え……？」

「夏なら綺麗なんだろうな、ってね。半年後には、しっかり直つてるようにしないと」

まるで呼吸するかのように、美汐は他者を思いやる。

例え裏切られようと、罵られようと、ただ真つ直ぐ立つ事を止めない少女。

愚かであると笑う者もいるだろう。けれど、それこそが彼女の霸道。他者の心を惹き付け、他者と共に立つ者。それ故に、緋織はその魂に魅入られたのだ。

緋織は口元に小さく笑みを浮かべ、声を上げる。

「……ええ、その為にも、貴方は生き残らなくては」  
「皆が、だよ。私は、皆が一緒にいるからやって行けるんだから」  
「ええ……そう、その通りですね」

それが叶わないであろう事は、緋織も美汐も分かっている。  
確かに、ここに集まっている人間達は最上位の能力者ばかりだ。  
緋織を始めとした、ムスペルヘイムに所属している災害級以上の能力者。

同じく、総帥の護衛のために残った徹以外の、フギンの上位能力者たち。

後方支援として、通信で指示を出すミーミル。  
この過剰ともいえる戦力は、例え軍隊が相手だったとしても敗北する事は無いであろうほどの力を有している。

が、それでもあのニーズホッグに対して無傷で勝利を収めるのは不可能であると、緋織は確信していた。  
けれども　　美汐は、決して諦めるような事はしない。そうであるからこそ、緋織もそれに応えようと思うのだ。

ディザスター  
「災害級の者達は後方に下がっている筈です。ですので、私達の戦い方次第で、被害はかなり減少させる事が出来るでしょう。そして、その戦い方は　　」

「悠君が伝えてくれる、だよな？」  
「はい。彼ならば、必ず私達に行くべき道を示してくれる筈です」

若干の無茶振りをしつつ、緋織は小さく苦笑する。

悠は今、本部に残りミームルで情報の編纂をしているのだ。彼の記憶だけでは間に合わない情報を集め、そこから二ーズホッグの攻略法を組み立てようとしている。

ディザスター

「災害級の皆は一発限りの大技を、私の領域の中から放って貰う。出来る事なら、それで落ちて欲しい所だけど……」

「悠の話を聞く以上、おそらく不可能でしょう」

「だね……でも、足止めにはなる。その後は、私達の仕事だよ」

ヴォルスング・サガ 本来、美汐の仕事はその稀有なファンクションである《光輝なる英雄譚》を展開する事。

ディザスター

その力によって強化された災害級の能力者、そして彼らの放つ乾坤一擲の一撃は、フェアブラ神話級の能力者に勝るとも劣らない威力となつて放たれる事となる。

一撃で都市一つを壊滅させられるような力　しかしながら、そのの集中を受けて尚二ーズホッグが落ちる事は無いと言う。

実際に相対した訳ではない為に半ば信じる事は出来ないその言葉。そう思いながらも、緋織は決して悠の言葉を疑ってはいなかった。

「私の力は、その後も必要になるからね。ちゃんと頑張るから……だから、私がもう一度《光輝なる英雄譚》ヴォルスング・サガを展開するまで、何とか持たせて」

「ええ、分かっています」

ヴォルスング・サガ

《光輝なる英雄譚》はその強大すぎる力ゆえ、あまり広い範囲に展開する事はできない。

二ースホッグとの戦闘の際には、一度展開した領域を消してから、もう一度展開し直さなくてはならないのだ。その間、緋織達は美汐の援護無しに戦う事になる。普段よりも力が弱体化してしまう二ースホッグの能力領域内では、致命的になりかねない時間だ。更に、美汐の能力が二ースホッグの能力に押し勝てるのか、という懸念もある。

(……………どうなってしまうんだろう)

僅かながらに、美汐は胸中でそう呟く。

能力が押し合った結果、どうなってしまうのか　それは、実際にやってみなければ分からない事だった。

二ースホッグの能力領域を押し退けて、《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》が展開されるのか。

はたまた、その力に抑え込まれ、能力領域を展開する事が出来なくなるのか。

もしくは、互いに相殺し合って能力が発動されないのか。

どちらの定める法が適応されるのか、力の使い手である美汐ですら判断する事は叶わない。

けれど

「気持ちで負けたら、押し負けちゃうもんね」

「美汐様？　どうかなさいましたか？」

「うっん、何でもない。ただ、頑張ろうって思ったただだよ」



吹きすさぶ風の中に消えた声に、緋織が首を傾げる。

そんな彼女の様子に、美汐は小さく笑みを浮かべていた。

言葉は純粹に真実のみを述べたもの。彼女は、ただ覚悟を決めていた。

『皆の為に』  
それこそが、彼女の行動原理であり渴望なのだから。

そんな美汐の表情に、緋織も頷く。

「はい、美汐様。私が、貴女を護ります」

「……うん。領域の展開に集中して、私自身の動きは疎かになるかもしれないから……お願いね」

「ええ、分かっています。あなたを失う訳には行きませんから」

普段ならば、美汐は是が非でも戦線に加わろうとする。

しかし、今回ばかりはその限りではなかった。

ニーズホッグには、中途半端な能力は通用しない  
例えそれが、  
フェアブラ

神話級の能力だったとしても。

《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》を展開している美汐は、その維持に意識を取られてしまう。

その状態ではニーズホッグに対してダメージを与えられないと、彼女は理解していたのだ。

美汐は、小さく笑う。

「私が、次期総帥だから？」

「……友達だから、です」

「うふふ、分かっているよ、緋織ちゃん」

「もう……からかわないで下さい、美汐様」

困ったように笑い、緋織はそう呟く。

例え、立場と言う枠に嵌められていたとしても、その友情に変化は無い。

かつて友と一緒に戦っていた時代　二人は、決してあの頃を忘れる事は出来ないから。

僅かながらに、かつての日々の事を懐かしく思いながら　ふと、二人は近付いてくる気配に気付いた。

対し、反応した緋織がそちらへと視線を向ける。姿を見せたのは、ムスペルヘイムの隊員の一人だった。

「隊長！　と、美汐様!？」

「ああ、私の事は気にしなくていいよ。それで、どうかしたの？」

「は、はあ……」

青年は美汐の姿を見て目を剥き、視線を右往左往させる。

そんな彼の様子に、緋織は小さく嘆息を零していた。

流石に、予想もしなかった場所に次期総帥がいればこのような反応をしてしまうのも無理は無い。

「……少し、この後の話をしていただけ。それで、何があったの？」

「は、はい……実は、市民を発見いたしました」

「え？」

「……住民の避難は優先的に行った筈では？　残っている可能性も確かにあっただけ……」

ニーズホッグが向かってきていると分かった時点で、ユグドラシ  
ルは既に進行ルート上の住民の避難を開始していた。  
未だ奥地は完全とは言いがたいが、それでもこの海岸付近は完全に  
閉鎖されている。

だと言うのに、何処に人が残っていたと言うのか　そんな疑問  
と共に、緋織は首を傾げていた。  
が、そんな彼女の言葉に対し、隊員は首を横に振る。

「いえ、それが……避難の遅れた住民ではないようで」

「は？ それじゃあ……外から入ってきた、と？」

「ええ、本人はそうのように申しております」

そんな彼の言葉に、緋織は思わずきよとんと目を見開いていた。  
理解が出来なかったのだ。これからこの場所は危険な戦闘区域とな  
る。

そんな場所に好き好んで入り込んできそうなものがあるとは、到底  
思えなかったのだ

「……とりあえず、今はどうしているの？」

「こちらで保護しております。流石に、連れ出すのに割ける人員も  
居らず、大人しくして貰うしか……」

「そう、分かった。案内して」

「よろしいのですか？」

「もし危険な能力者だったら、私以外の誰が対処すればいいと？」

小さく笑み、緋織はそう口にする。  
そして青年に対して案内するようにと告げ、彼の後ろについて歩き出した。

美汐も一緒に。

「……美汐様」

「一人になるなって言ったのは緋織ちゃんでしょ？」

「はあ……直接会うような事はしないで下さいね」

嘆息と共に追求を諦め、緋織は美汐の方に気を配りながらも歩いてゆく。

尤も、周囲の警戒など殆ど必要ない事は分かっていたが。  
この周囲の安全は既に確保されている。視界も広い為、危険は殆ど存在しないのだ。

懸念と言うならば、先ほど報告された謎の人物について程度である。

「……何なんだろう、一体」

そんな緋織の小さな呟きは、吹き荒ぶ風の中に白い吐息となって消えていった。

\* \* \* \* \*

朽ちたビルの合間に渦巻く風が、甲高い音を立てて吹き抜けてゆく。

一際高いビルの上に立ち、大神槍悟はただ静かに瞑目していた。一見すれば、ただ瞑想しているだけにしか見えないその姿。しかしながら、その体内で練り上げられるプラーナは、常人からすれば信じられないほどの密度となっていた。

(いや)

己の考えていた内容を、大神徹は傍らに立ちながら否定する。常人程度では、槍悟の力は決して測る事は出来ないのだ。

巨大すぎる。始祖ルーンを持つ能力者である徹ですら、その全貌を

掴む事ができない。  
ましてや、普通の能力者程度では、到底彼の力を感じ取る事など出来ないだろう。

(俺は、この領域に辿り着く事が出来るのか……?)

徹は、様々な能力者の存在を知っている。

彼の義妹であり、ユグドラシルの次期総帥の美汐。ある種完成された能力であると言える、《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》。

ムスペルヘイムの隊長たる、レイヴァテイン緋織。放出系の始祖ルーンが持つ圧倒的な火力を一点に凝縮した武器、《レイヴァテイン災いの枝》。

そして彼女の先任である、涼二。他の追隨を許さないほどに効率化されたエンチャント技能によって放たれる技、《フロステイレイン氷雨》。どれもこれも、非常に強力な能力であると言う事の出来るそれらの力。

しかし、槍悟の力はそれらすら見戯であると言わんばかりに完成されたものだった。

### 《ゲンケニル必滅の槍》。

いかなるルーンの組み合わせによって放たれるのか、それすら全く知覚出来ない強大な能力。

唯一判明しているのは、その素体となる槍がジユラJの始祖ルーンによって生成されている事だけだった。

その槍が一度槍悟の手によって放たれば、それはラドRの加速よりも速く宙を駆け、ハカラスHの暴風すらも吹き散らし、エイワズEの防御すらも易々と貫いて標的に命中する。

例え一度躲す事が出来たとしても、その一撃は一瞬で方向転換し、

命中するまで敵を追い続ける。

決して外れない槍　そしてその強大なプラーナの込められた槍は、命中した相手の内部で弾け、一撃で敵を撃滅する。

一対多に向いた能力とは決して言えない。決して届かない筈が無い。だと言いつのに、大神槍悟という男は未だに王者として、最強として君臨していた。

「どうかしたのか、徹」

「……親父」

ぼんやりと思考していた徹は、その声に意識を戻した。

槍悟は一度瞑想を止め、彼の方へと向き直っている。

普段と変わらぬ厳格な表情。巖のような佇まいに息を詰まらせながら、徹は遙か遠方へと視線を向けつつ声を上げた。

「……本当に良かったのか、美汐を行かせちゃって」

「心配か、徹」

「そりゃ、な。親父だって、五分だって思ってたんだろ？」

その言葉に、槍悟はわずかに表情を崩す。

口元に浮かんでいたのは、どこか苦笑めいたものだった。

彼は一度視線を元向けていた方へと戻し、声を上げる。

「そつだな。更なるプラーナを喰らい、強大化したニースホッグが相手では、あれだけの戦力でも五分と言った所だろう」

「だったら！」

「だが、あの娘達は死なん。私が、やらせない」

その言葉に、徹は驚愕を隠せぬまま沈黙していた。

一瞬だが、彼の言葉の意味が理解できなかった　　否、むしろ、

一瞬だけ理解出来てしまったのだ。

他の可能性を考えるのが普通だと言うのに、こう思ってしまったのだ。

「ここから……当てられるってのか？」

「ああ、そうだ」

何だそれは、と。徹は、今度こそ完全に言葉を失う。

一体どれほどの距離があると言うのだろうか。

領域外などという言葉では生温い。知覚する事すら出来ない筈の距離。

大神槍悟という男は、それを一撃で踏破する事が出来る

「流石に難しいが、大規模な戦闘が起これば流石に知覚する事はできる。私の槍を受ければ、奴はすぐにでもこちらに向かってくるだろう」

「……」

バカな、という声すら上げられず、徹は瞠目しながら沈黙する。

そんな彼の胸中を察しているのかいないのか、槍悟は再び前方を向



いて、静かに意識を集中し始めていた。

開戦の瞬間は、近い。

ある程度進んだ所で涼二達はバイクを降り、徒歩で山道を進んでいた。

険しく、若干断崖のような雰囲気さえある場所だが、二人は能力を軽く発動させながら身軽に飛び越えてゆく。

ルートとしてはあらゆる障害物を乗り越えて直線的に進む道筋である。

水のロープを頂上付近に打ち込みスルスルと登る涼二の横で、僅かな取っ掛かりに足をかけて跳躍を繰り返している双雅は、どこかうんざりとした様子で声をあげる。

「オイ涼二、飛んでった方が速いんじゃないのか、コレ」

「そりゃ確かにそうだろうが……密度の高いプラナーを撒き散らしたら流石にバレるだろ」

「どうせバレるんだし、いいんじゃない？」

その言葉に若干気持ちが揺らぎつつも、首を横に振りながら崖の上へと到達する。

遠景に見える海の町は、先ほどまでよりもかなり近付いてきている。そんな景色を見つめながら、涼二は小さく肩を竦めた。

「干渉するのは、その必要があった場合のみだ。必要も無いのに顔を見せちまったら、マイナスにしかならん」

「けどよ、あのバカは余計な事喋っちまってるんじゃないのか？」

「……まあ、そうだけだな」

バイザーに映し出された地図　そこに映る桜花の反応は、既に目的地へと到達してしまっていた。

彼女は既に、現地に展開したユグドラシルの者達と干渉してしまっているだろう。

そして、もしも緋織や美汐と出会ってしまったなら

「お前が自慢げにあの有名人二人の事話してたんだしよオ、顔見たら、お前の事喋っちまうだろ」

「分かってるよ……ったく、あいつまで巻き込む事になるとはな」

「家も引き払わねエとダメだろオな」

「ああ……全く、面倒臭い事してくれやがる」

嘆息しつつ、涼二は再び真っ直ぐと走り始める。

身体に満たされるプラーナの量を増やし、跳躍　水のロープを

巧みに操りながら、涼二は一直線に海辺の街へと駆けて行く。

そして、身体能力を強化した双雅も、それに続いた。身軽に木の上を飛び回りながら、彼はぼつりと呟く。

「しっかしまア……」

「ん、どうかしたか？」

「昔も、三人でハイキングとか来た事あったよなア。随分と前の話だが」

「ああ……そういえば、そんな事もあったな」

苦笑を交え、涼二はそう頷く。

何年前の事だったか、彼自身あまり詳しくは覚えていない。しかし、印象的だった出来事が一つだけあった。

「あの時も、あいつは迷子になったんだっただか」

「元々家出みてエなモンだったけどよ。更にどっか行くとは思わなかったぜ」

「こうやって二人で探したんだっただな……成長しないな、あのバカ」

「逆だ、バカだから成長しねエんだよ」

「成程、至言だな」

二人して、嘆息を零す。

涼二、双雅、桜花の三人は、孤児院の中でも問題児と呼べる子供達だった。

桜花が突拍子もない事を考え、双雅がそれに便乗し、涼二がフオロ―して穴埋めをする。

二人だけだったらあっさり捕まるであろうそれは、涼二の所為で悪

化していたとも言えるのだが。

「あの頃の三人がこんな形で変な事件に関わることになるとはな…  
…本当に、どうなるか分からんもんだよなア、オイ」  
「って言うか、作為的なものすら感じるだろ、コレ」

太い木の枝の上に着地し、再び跳躍。

器用に木の上を飛び回りつつ、滑るように目的地へと距離を詰めてゆく。

そんな中、涼二はふと思いついてしまった考えに対し、若干の寒気が走るのを感じていた。

「俺とお前…：…どちらも、路野沢が関わっていた。昔から、互いに強力な能力者であった事を隠されていたんだ」

「…：…つまり、あのバカも何かの能力者だって？」  
「可能性が無いとは言えないんじゃないのか？ 正直、あの男はなに考えてるか分からないしな。現に、俺達は互いの存在を全く知らされていなかっただろ」

「まア、そいつは確かだけだよ」

空中に金属の足場を作り出し、テンポ良く宙を蹴る双雅は、そんな涼二の言葉にがりがり頭を掻いていた。

どこか胡乱げな表情を顔に映し、双雅はやれやれと肩を竦める。そこには確かに路野沢を疑う気配はあったものの、それ以上に、良く知っている桜花にそんな凄まじい力がある事自体が信じられない、とでも言うような感情が込められていた。

「あのバカの事だ、スゲエ力持ってたら自分から言いふらしてるオよ」

「ああ、それは確かに。ってか、凄い力持ってなくても言いふらしてるからな」

『動物に好かれる』と言う、ある種珍しい力を持った御津川桜花という少女。

人間よりも動物の友達の方が多い、と自称する彼女に、胸を張って言う事じゃないとツッコミを入れたのはいつの事であったかそんな事を考え、涼二は小さく苦笑する。

以前彼女が操る犬の集団にのしかかられた事もあり、彼としても中々油断のならない相手ではあるのだが。少なくとも、ニシキヘビは十分な凶器となるだろう。

「あいつとの出会いは偶然だったんだ、気にする事でもねエだろうよ」

「それに関しちゃ、俺とお前もそうだったがな……まあ、あいつが強力な能力者だったのもおかしな話か」

「ああ、俺みたいに『グレイプニル』を嵌められてる訳でもねエしな。力を封じられてないなら、アレがあいつの実力って事だろ」

桜花には、昼夜問わず装着しているような装飾品の類は無い。少なくとも、『グレイプニル』のような道具で力を封印されているような気配は無かった。

そも、封印されていたとしても、動物に好かれる能力が強化された

所であり意味は無いが。  
まあ、と涼二は胸中で呟く。

(ニーズホッグを手懐けられるような能力だったら、それは確かに強力なのかもしれないけどな)

半ば冗談のようにそんな事を考え、苦笑したその刹那　強大  
なプラーナが、海の間隙から立ち昇った。

「　　ッ！」

「おいおい、こりゃア……」

大気を震わせるような気配、圧倒的な力の圧力。

常人ならば触れただけで動けなくなるようなプラーナの波動に、二人は驚愕を隠し切れず呻き声を上げる。

今までに出会ってきたどの能力者よりも重く、厚いそれ。

感じるのは研ぎ澄まされた鋭さではなく、圧倒的なまでの質量だ。

涼二のプラーナが極限まで研ぎ澄まされた刃だと言うのなら、今放たれているそれは迫り来る火砕流。

飲み込み、砕き、押し潰す圧倒的なまでの破壊力。

どちらも人を殺すには十分な威力であるが　　規模が違い過ぎた。

「コイツがニーズホッグだって？」

ファーブラ

「神話級だとか言われてたけどよオ、それどころじゃねエだろ、これ」

「それ以上のランクが無いからな……」

同時に、涼二は納得する。

ファンクションを組むだけの知恵が無いにもかかわらず、そこまで危険視されている存在。

これだけの力があるのならば、それも頷ける、と。

これは最早、人知を超えた領域　　文字通り、神話フェアブラに語られるべき力なのだから。

大気に満ちるプラーナの中、涼二は双雅へと向けて声を上げる。

「急ぐぞ、双雅。派手に能力を使っても構わない！」

「おいおい、いいのかよ？」

「ああ、これだけのプラーナ密度の空間じゃ、多少の能力行使は気付かれない。プラーナのはどうも、何処から発せられたか感知できないだろうよ」

「成程。まア、確かにそりゃそうだ」

双雅は、口元に愉悦を浮かべてくつくつと笑い声を上げる。

そして彼は、そつと首元に刻まれた始祖ルーンへと手を触れていた。それを横目に、涼二もまた己の瞳のルーンへと意識を集中させる。

「そんじゃ、急ぐとしようじゃねエか

「さて、どつ出るか　　ハガラスH！」

ラドR！」

その言葉と共に、二人の身体は一気に加速し、彼方にある海岸へ



の距離を縮めていったのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

隊員に案内されて緋織たちが向かった場所は、拠点として使っている仮設テントだった。

周辺の建物を借り受けても良かったのだが、その場合は危険が及んだ場合に逃げ遅れてしまう事がある。

常に靴を履いていて、更にすぐにも外に出られる場所。

寒さをしのぎ切れてはいないが、これからの戦いを鑑みれば非常に都合の良い道具であった。

「ここに、その人が？」

「ええ……」

若干困ったように眉根を寄せる隊員。

確かに、これから大きな戦いがあると言うのに、予想外の事態が起こってしまったては不安だろう。そう考え、緋織は小さく頷く。ここは自分に任せるように、と。

そんな彼女の様子に、隊員は僅かながらに安心したような表情を見せた。

それに満足しつつ、緋織は 結局ついてきた美汐と共に テントの中へと足を踏み入れた。

瞬間、声が響く。

「だから、ニーズホッグとか言うドラゴンを見に來ただけだってば  
！」

「ドラゴンじゃなくて刻印獣リオンクローチャーな。つーか、そんなモンをわざわざ見  
るために危険地帯までやって來るってのはどついう事なんだつて聞  
いてるんだよ」

「だって、ここに來ないと見れないじゃない」

簡易のテーブルに着いているのは、ムスペルヘイムの副隊長であ  
る新森にいもり。

そして、緋織たちの方へ背を向けるような形で座っている、茶髪の  
少女だった。

会話の内容から少女の目的を察しながらも、緋織は思わず眉根を寄  
せる。

あの禍々しい魔物にわざわざ会いに来ると言うその精神が理解できなかったのだ。

頬杖を突き、疲れた様子で嘆息していた新森は、入り口から入って来た緋織の姿に安堵したように息を吐く。

否　それは間違いなく、安堵していたのだろう。厄介な手合いを押し付ける事が出来て。

かつて涼二の部下をやっていた時代からの同僚である彼のその考えに気付き、緋織はぴくりと頬を引き攣らせる。

が、何とかその感情を抑え、緋織は声を上げた。

「副隊長、状況は？」

「ああ、隊長。まあ、見ての通りって所ですよ」

緋織にとって彼は、普段は気やすい相手であり、涼二がいた頃からも親交があったため、何かあった時には相談に乗って貰っている相手だ。

そんな彼に敬語を使われる事は、相変わらず慣れないと、緋織は小さく苦笑しながら机の方へと接近する。

と　新森の言葉にようやく気付いたのか、座っていた少女が緋織の方へと振り返った。

赤茶色の髪に、こげ茶の瞳。くりくりとした大きな瞳は、童顔の面差しを造り上げている。

美しいや綺麗とも違う、可愛いと言う表現が似合う造作。

そんな彼女の表情は、緋織の姿を見た瞬間に驚愕へと変化していた。

「あ……隊長つて、あのムスベルヘイムの隊長さん!？」  
「え、ええ。その通りですが……こほん。貴方は外から入って来たという報告を受けていますが、道路は封鎖されていた筈です」  
「でも、山の中は特に警備とかなかったけど」  
「……つまり、忍び込む意思があつて忍び込んだと言つ訳ですね」

その言葉に、少女　　桜花はぎくりと身を震わせた。  
そんな分かり易い様子に、緋織は深々と嘆息を零す。

「はあ……何故、そのような事を？」  
「いや、だからニーズホッグが見てみたかつたからなんだけど」

桜花の話の聞きながら、緋織はじつと彼女の瞳を見つめる。  
決して揺れる事のないこげ茶の瞳。一部の動揺も見せないそれは、  
確かに真実を語っているように感じさせるものだった。  
しかしながら、それは少々信じがたい言葉でもある。

「失礼ですが……私達には、あの凶悪な魔獣を見たがる理由が分からないのですが？」  
「そりゃ、カッコいいから見たいんだけど……それにあたし、爬虫類好きだから……って、あ！　ここ敬語使った方が良かった!？  
ごめんなさい、さつきから!」  
「い、いえ。それは構わないのですが……」

ちらりと、緋織は視線を横へとずらす。

そこに座っていた新森は、どこか疲れた様子で肩を竦めていた。そして、それと共に緋織は理解する。先ほど、どうしてここまで新森が辟易した様子を見せていたのかを。とどのつまりが、彼女の独特のペースに巻き込まれてしまっていたのだ。

( って言うか、爬虫類が好きだからって…… )

その為になんざ封鎖された地域の中に足を踏み入れ、更に山中まで通って封鎖線を潜り抜け、こんな危険地帯まで来たと言うのか。

とてもでは無いが、信じられない行動力だ。と、目の前の相手に気付かれぬよう、緋織は小さく嘆息する。

そんな緋織の様子には気付かず、桜花はふと視線を若干ずらしながら声を上げた。

「ところで、えっと……貴女が磨戸緋織さんでいいんだよね？」

「ええ、不肖ながら、ムスペルヘイムの隊長を務めさせて頂いていきます」

「で、そっちの人が大神美汐さん、だっけ？」

「あら？ 私の事も知ってるんですか？」

突然な前を呼ばれ、後ろで成り行きを見守っていた美汐がきよとんと首を傾げる。

緋織と美汐、二人の否定の無い様子に、桜花は楽しそうな様子でぱちんと手を叩きつつ歓声を上げた。

「やっぱり！ この間テレビで見た通りだ！」

「あー！ あの時のオペラの映像、見てくれたんですね。嬉しい！」  
「いえいえ、こっちも感動しちゃいましたー！」

テンションの高いガールズトーク　　と言っているのかは微妙な内容ではあったが　　を繰り広げる二人に、緋織は半ば嘆息を交えて頭を抱える。

美汐がすっかりと乗せられてしまったのだ。  
戦いにおいてもそうだが、独特のペースを持つ者の相手はやりづらい、と緋織は胸中で呻き声を上げる。

どうにした所で、もうすぐ戦闘が始まるのだ。あまり気を抜いてばかりもいられないと、彼女は二人へ向けて声を上げようとした。

「それに二人の事は涼二から聞いてたから。二人とも凄く綺麗で優秀だって。あいつ、あたしの事なんかほとんど褒めた事無いくせに

」

そんな、桜花の言葉を聞くまでは。

彼女の言葉に、呆然とした様子で美汐は声を上げる。

「……今、何て？」

「え？ 二人とも凄く綺麗で優秀　　」

「そこじゃない！ その前だ！」

「落ち着け隊長殿」

横から挟まった新森の言葉に、緋織ははっと目を見開き、動きを止める。

だが、動揺を滲ませていたのは決して彼女一人だけではなかった。彼女を諫めた新森自身も身を硬くしていたし、周囲の隊員達も作業の手を止めて桜花の方へと注目している。

その表情は、一様に驚愕だった。そんな視線に晒され、桜花は戸惑いながら身じろぎする。

対し、緋織は大きく深呼吸を行い　　ゆっくりと己を沈めてから、声を上げた。

「貴女は、前任……前隊長、氷室涼二とお知り合いなのですか？」

「え、う、うん。そうだけど」

「彼は、今何処に　　」

緋織が尋ねようとした、その瞬間　　周囲に、暴虐的なプライナの気配が満ちた。

「　　ッ!？」

「これは……ッ!」

「隊長!」

テントの外から声が上がり、中へと羽衣<sup>うい</sup>が走り込んでくる。彼女の表情の中には、若干の焦りと、大きな緊張が浮かんでいた。そんな彼女の言葉が、敵の来訪を告げる。

「反応接近！ ニーズホッグ、来ます！」

崩壊の足音は、最早すぐそこまで迫ってきていた



ニーズホツグの放つ凄まじいプラーナの波動は、ガルド達の所にも届いていた。

そのあまりの圧力に、ハンドルを握っていたスヴェイティの体が硬直し、車が制御を失う。

「きゃあ!?!」

「ぬっ、拙い!」

「ッ……舐めんじゃ、ないっ!」

派手に揺れる車内。しかしスヴェイティは気力を振り絞り、硬直しかけた身体を　足を動かし、ブレーキを渾身の力で踏みつける。既に閉鎖線近い場所であった事が幸いしてか、近くに他の車両はなかった。

その為対向車線にぶつかるような事もなく、スヴェイティの車は停止する。

しかしながら、彼女自身は決して無事と言えるような状況ではなかった。

「大丈夫か!？」

「お怪我はありませんか、スヴィティ様!？」

「……流石は神話級<sup>フェアブラ</sup>。この中でも普通に動けるって訳……ホント、規格外よね、アンタ達」

座席の背もたれに身体を預けつつ、息苦しそうな様子でスヴィティはそう苦笑する。

二ズホッグによって放たれる強大なプラーナの波動　決して高位の能力者とは言えないスヴィティは、その圧力の中で指一本動かす事が出来なくなっていたのだ。

車を急停止させた事による怪我も無かったが、これ以上の走行は不可能である。

「悪い、わね……これ以上は、送り届けられそうにないわ……」

「二ズホッグの力が予想以上だったとはいえ、私の配慮が足りなかった。君は十分に仕事をしてくれた、感謝する」

「ありがとうございます、スヴィティ様」

礼を述べながら、雨音は身を乗り出してスヴィティの胸元を少しだけ開けてゆく。

息苦しさから少しだけ解放された彼女は、小さく口元に笑みを浮かべながら、力なく声を上げた。

「まあ……どっち道、アタシの助けは封鎖線までだったし……後は、  
アンタ達で行けるでしょう？」

「ああ、十分だ。君はここで休んでいてくれ」

「車の中ですけど、ここに放置してしまつて大丈夫なのでしょう  
か？」

「うむ。幸い、道は直線だ。事故の危険はまず存在しないだろう」

現在三人がいる場所は、殆どカーブの無い直線的な道路の上。

遠くからでも、障害物があればすぐに気づく事が出来るだろう。

それにそもそも、今現在二・スホッグのプラーナによつて押さえつ  
けられているこの空間は、災害級ほどの力ディザスターがなければまともに動く  
事も叶わない。

元々車が少ない地域ではあるが、今はそれ以上に動いている車は少  
ないだろう。

雨音の心配そつな表情を見つめ、スヴィティは小さく苦笑を浮か  
べる。

「いい子だね、雨音ちゃん……あー、うちのバカにもこれぐらいの  
思いやりがあれば……」

「双雅様は、お優しい方ですよ？」

「そう言ってくれるアンタが優しいってのよ……ほら、行きなさい  
つて。しばらくすれば、慣れるから」

硬直していた身体を何とか動かし、スヴィティは扉のロックを外  
す。

そして彼女は、その手を雨音の頭の上に乗せた。  
きよとんと目を見開く雨音に、スヴィティは小さく笑いかける。

「車を、脇に寄せるぐらいなら出来るわ……アタシの心配より、あの危なっかしい子の心配をしてあげなさい……」

「……雨音君、あまり時間が無い。彼女のためにも、先を急ぐぞ」

荷物の中から長い紐を取り出したガルムは、車のドアを開けながら雨音へと声をかける。

子のプラーナの波動は、既にニーズホッグが接近してきている証拠。これ以上、時間を無駄にする訳には行かないのだ。

雨音はその言葉に小さく頷き　そつと、その手をスヴィティの胸に触れさせた。

そして、その力を発動させる。

「ソウイル  
S」

「え……？」

雨音がそう呟いた瞬間、柔らかな光が掌の下から漏れ出し、スヴィティの身体に吸い込まれてゆく。

そしてその瞬間、彼女の身体を包んでいた圧迫感は一瞬で消え去っていた。

動く世になつた身体にスヴィティは目を見開き、そしてその様子を見つめていたガルムもまた驚愕の表情を浮かべる。

そんな中で、雨音は小さく息を吐きつつ声を上げた。

「私の力を混ぜて、プラーナを活性化させました。外からの圧力によって障害されないようにしましたから、多少楽になるはずです」  
「……あ、ありがとう」  
「でも、無理はなさらないで下さい。多少でも能力を行使してしまうと、私の力も抜けてしまうかもしれませんから」

笑みを浮かべ、雨音は身を離す。

そして、ガルムに続くように外に出て、車の扉を閉めた。  
そのまま彼のほうへと振り返り　　雨音は、きよとんとした表情で首を傾げる。

「どうかなさいましたか、ガルム様？」

「いや……雨音君、今のは」

「ガルム様の教えのおかげです。私の力をスヴィティ様のプラーナの流れに合流させて、その流れをスムーズにさせただけなので、その場凌ぎでしかありませんが……」

申し訳ない、と雨音は視線を伏せる。

だが、ガルムはその言葉にただ単純な驚きを感じていた。  
確かに、理論上は可能なのだ。事実、体のごく一部だけならば、それも成功している。

しかし、体全体のプラーナの流れを把握し、それら全てに干渉すると言つのは、今までに誰も成功した事の無い神業と呼ぶべきものだ。  
雨音はそれを一瞬で、ごく当たり前のように成し遂げてしまった。

「君は……」

「ガルム様？」

「……いや、何でも無い。この紐を持っていてくれ、雨音君」

静崎雨音しずまきという少女が持つ天才性。

半ば冗談、半ば本気で語られていたそれは、まるで冗談にはならない事にガルムは気付いてしまったのだ。

成長半ばで、既に稀代の能力者というべき力を発現させた雨音

そんな彼女が、いずれ何処に辿り着いてしまうのか、ガルムは僅かながらの戦慄を感じる。

(……或いは、Sソウイルしか持たなかった事が幸福だったのかもしれない)

自身のファンクションたる《イラスト・ベステイア血染めの狼》を発動させつつ、ガルムは胸中でそう呟いていた。

もしも雨音が涼二のようなルーンを持っていたら、一体どれほどの力を操れたのか、と　そう考えてしまったのだ。

獣の姿に変化したガルムは小さく息を吐き出しつつ、雨音へと向けて声を上げる。

『……まあ、よい。雨音君、私の背中に乗って、紐を使って身体を固定するのだ。寝そべっていた方が安全だぞ』

「はい。ちよつと難しいですが……」

「ああほら、アタシがやってあげるからそこで止まりなさい」

紐を両手で持つて首を傾げ、悪戦苦闘していた雨音に、苦笑交じりの声がかかった。

車から降りたスヴィティが、二人の方へと近寄ってきていたのだ。彼女は未だ若干重い体に辟易しつつも、雨音から紐を奪い取る。そして雨音をガルムの背中に寝そべらせ、するすると手際よく、しかも簡単には外れないようにしっかりと結びつけた。

「はい、こんなモンでしょ。一応結び目は手が届く範囲にして置いたから、外す時は落ち着いてね」

「ありがとうございます、スヴィティ様」

『うむ、感謝する。後はゆっくりと休んでいてくれ』

「そうするわ……じゃ、あのバカの事、お任せするわよ」

後ろ手にヒラヒラと手を振り、スヴィティは車の中へと戻ってゆく。

その背中を見送ったガルムは、雨音に対して一度目配せすると、踵を返して歩き出した。

ゆっくりと加速をし始めるその巨躯は、やがて黄金の疾風となって山の斜面へと入ってゆく。

『大丈夫か、雨音君？』

「はい……辛くなったら、毛を引っ張って知らせますので」

『ああ、頼む。それでは　行くぞ！』

そして、ガルムはRの<sup>ラト</sup>ルーンを発動し　目的地へと向けて、一気に駆け抜けていった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「状況は!？」

テントの外に飛び出しながら、緋織はそう叫ぶように声を上げる。周囲は既に戦闘配備を進めており、実際に攻撃を行う役である災害級以上の能力者たちは、既に海岸に集結しようとしていた。混乱する事なく動く者達の間をすり抜けながら、緋織もまた海岸の方へと向かって行く。

追従する羽衣が、そんな彼女に合わせて声を上げた。



「距離的には、後二十分ほどで到達します。位置はミームルの予測通りです」

「流石は悠君だね」

「ええ……とりあえずは問題ないでしょう」

隣を歩く美汐に対して小さく微笑み、緋織はそう声を上げる。

彼女は、この作戦の要ともなる存在。

ここからの動きは、注意しなければならぬのだ。

「隊の展開は？」

「現在六割ほどが配置完了しています。詩樹うたぎ室長の指示通りの配置にしてあります」

「ええ、ありがとうございます。悠との通信は？」

「あちらで繋がっています」

羽衣が指差したテントの方へと視線を向け、緋織は頷いた。

そして、彼女はその視線を背後へと向ける。そこに立つ新森へと目配せをし、緋織は二人を置いてはそちらへと向かった。

それを見た二人は慌てて緋織に続こうとテントの方へ足を向けたが、新森に襟首を捕まれ動きを止める。

「わきゅっ!？」

「な、何ですか副隊長!？」

「お前さんらは向こうだ。攻撃配置につくメンバーだろうが」

「そ、それなら貴方だって　　あ、ちょっと!？」

引き摺られてゆく二人の抗議の声を聞きつつ、緋織は小さく嘆息を零す。

尤も、呆れていたのは付いて来ようとしていた二人に対してではなく、次期総帥たる美汐に対して凄まじい無礼を働いている副隊長に對してであったが。

ともあれ、経験という点では長年ユグドラシルに所属している緋織以上の実力者。

彼に任せておけば問題ないだろうと判断し、緋織は通信機のあるテントへと足を運んだ。

そんな緋織の姿を発見した隊員が、敬礼と共に声を上げる。

「お疲れ様です、隊長!」

「そちらも、お疲れ様。悠……ミールの室長との通話は繋がってる?」

「はい、こちらです!」

まだ若い隊員が差し出してきた端末　　ノートパソコン状のそ

れ　　に映っている悠の横顔に、緋織は小さく笑みを浮かべた。

画面の向こうの悠は様々な資料を読み漁り、忙しく指示を飛ばしているようではあったが、緋織の姿に気付くと微笑を浮かべた。

『やあ、緋織。どうやら出番が近いようだね』

「出番と言っならどちらも同じだと思っけれど……とりあえず、こちらは戦闘配備に着く。そちらに出向させた隊員は上手くやっってい

るかしたら？」

『うん、助かってるよ。それで、何か用かな？』

「……お見通しか」

呟き、緋織は苦笑する。

画面の向こうでクスクスと笑みを浮かべる悠は、最初から緋織の考えを見透かしていたのだ。

『僕が出来るのは大まかな指示だけ。後は現場の指揮官に任せるつもりなんだけど、僕に出来ることがあるかな？』

「いえ、出来る事と言うか……ちよつとした相談よ」

『相談ね。それで、どうかしたの？』

「ええ、実は……涼二の友人だつて人が現れて」

声を細め、他の隊員に聞こえないようにしながら、緋織はそう悠へと告げる。

そしてその言葉に、普段冷静沈着な悠は大きく目を見開いていた。

彼はその表情のまま、驚愕の色を隠せずに声を上げる。

『聞かせて貰える？』

「ええ。どうやら山の方から封鎖線を抜けてきたみたいなんだけど

……『ニーズホッグを見に来た』なんて言っていて」

『……成程、これは僥倖かもしれないね』

「え？」

『ああいや、何でもないよ』

小さな呟きを誤魔化すように笑み、悠はそう声を上げる。  
それに対し聞き逃した緋織も、思わず首を傾げながらも追求をする  
ような事はなかった。  
取り繕うような笑みを浮かべながらも、悠は続ける。

『それで、その人はどうしてるの？』

「送り届けるだけの余裕も無かったし……とりあえず、保護してる  
わ」

『そう……うん、その方が良いと思うよ。護衛をするにも心もとな  
いだろうしね』

「分かったわ。それで、彼女から涼二の事は」

『戦いが終わったら聞き出すと良いよ。だから、今は気にしないよ  
うに。変な所に注意を取られていたら、戦いに身が入らないよ？』

「う……そうね、ごめんなさい」

これから危険な戦場に赴くという時に、雑念があっては命に関わ  
る。

それを理解しているからこそ、緋織は深く反省し、視線を伏せた。

そんな彼女の生真面目な様子に、悠は僅かながらに苦笑の混じった  
声をあげる。

『焦らないようにね、緋織。時間さえあれば、いくらでも聞く事が  
出来るだろう？』

「ええ、そうね……ありがとう、悠」

『どういたしまして、だよ。さて、そろそろ時間じゃないかな？』

「そうみたいね。それじゃ……行って来るわ」

画面の中で告げる悠へと、緋織は笑いかけながら踵を返す。赴く先はままごうことなき戦場。命の危険があるかもしれない場所。しかしそれでも、彼女が臆する事は無い。故に、悠もまた純粹に応援をしていた。

『僕は現場に出られないけど……頑張つてね、緋織』  
「ええ、任せて」

そして、緋織はそのまま通信機器の置いてあるテントを後にしたのだった。  
そんな画面を挟んだ彼女の後姿を見つめ、悠はポツリと小さく声をあげる。

『涼二の知り合い、か……ある意味、いいタイミングかもしれないね。例の爬虫類好きの人かな？』

以前涼二と談笑していた内容を思い起こし、悠は僅かながらに笑む。

幼馴染の二人が、どんな人間であるかという事をひたすら聞かされていた頃。その内容を思い起こしたゆえの苦笑であった。

こんな危険な状況の中に飛び込んでくる件についてもプロファイリングは一致する。まず間違い無いだろう、と悠は小さく呟く。

そして　そんな彼女を大事にしている涼二もまた、これを見逃すはずは無い、と。

『もしも協力してくれるのなら……多少の不利も問題ない。出来るだけ、総帥の手は借りないようにしないとね』

もしかしたら、涼二が現れるかもしれない、と 僅かな期待を意識の中に埋没させつつ、悠は情報管理の仕事へと戻って行ったのだった。

彼との『勝負』を、頭の中に描きつつ。

04-10：それは英雄の戦い（前書き）

今回は投稿していただいた能力案をいくつか出させていた  
た。だきまし

ご協力いただき、ありがとうございます。

海岸線。遠く見える地平線の先に、僅かながらに見える黒い影。そこから放たれる強大なプラーナを肌で感じ取りながら、それでも美汐が怯むような事は決してなかった。

悠然と、凜々しく　ただ真っ直ぐに立つその佇まい。身体を圧迫されるような気配の中、ただ真っ直ぐと前だけを見つめ続ける美汐の姿は、周囲の隊員達にとって非常に心強いものでもあった。

「……そろそろ、始めた方がいいと……思います」  
「うん、そうだね。この距離なら、もう無駄になるほどの時間も無いだろうし」

美汐の傍に立つのは、黒い髪をポニーテールに纏めた少女。マフラーを口元まで巻き、若干ぼそぼそと話しているために聞き取りづらいが、その言葉に美汐は頷いていた。

そして美汐は静かに目を閉じ、意識を集中させる。発動させるのは、仲間に対する贈り物　己の力を分け与える、



美汐にのみ許された強大なファンクション。

「  
《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》  
」

その言葉と共に、美汐の背中に光が収束する。

それは薄く透き通る二対の翼を形成すると、残った部分は一気に周囲へと広がっていった。

薄暗い空の下であった周囲は、その瞬間に暖かな日差しのごとき明るさを得る。

そしてそれと共に、周囲の隊員達は己の力が瞬く間に増大してゆくのを感じ取っていた。

軽く息を吐き、美汐は隣の少女に振り返る。

「  
「ふうりんどうかな、風鈴ちゃん？」  
」

「はい、力は強化されています……コレなら、少なくとも貴方がここにいる間は指示に力を利用できるでしょう」

ぼそぼそと、呟くように頷くマフラーの少女。

ふゆき冬木風鈴      ムスペルヘイムに所属するディザスター災害級の能力者。

しかしながら、彼女は決して戦闘能力が高いと言う訳ではない。

その力の真髄は、また別の所に存在していた。

「  
ジュラ J、アンサズパース A、P P  
《ノルンスヴィジョン予言者の識》  
」

風鈴の若干薄く開かれていた瞳は、そんな言葉と共に大きく見開かれる。

普段は黒いその瞳は、その力の発動と共に翡翠の輝きを宿していた。彼女の持つ力は、未来予知。《予言の巫女》ヴォルヴァほど長い期間を予知する事は出来ないが、ごく短時間であればそれ以上の正確さでこの先起こる事を把握できる。

それと共に小型の刃物によって攻撃すると言う、完全に対人向きの能力。今回は、その予知能力を買われてここに立つ事となったのだ。

ヴォルスング・サガ  
《光輝なる英雄譚》によって強化されたその瞳でじつと二ーズホツグの現れる位置を睨み、彼女は静かに声を上げる。

「……あの大トカゲの進行ルートは、ミール室長の予測した通りです……攻撃目標地点まで、あと三分……流石ですね、次期総帥。ここまで先の事を予見出来たのは初めてです」

「あんまりこの感覚に慣らせちゃいけないって、緋織ちゃんにも言われてるんだけどね」

「厳しい方ですからね……前隊長に向けていたようなデレが欲しい」  
「妙な事言わないで、風鈴」

僅かながらに苛立った様子で、攻撃位置に配置されていた羽衣が声を上げる。

その言葉に振り返りながら、風鈴は見開いていた瞳を半眼に戻しつつ声を上げる。

「相変わらず不毛な感情を持っていますか、レズっ娘」

「だっ、誰がッ!？」

「隊長は前隊長にぞつこんラヴですからね。本人に自覚無いんですけど……ぶっちゃけ女として半分ぐらい終わってるような気がする」と風鈴ちゃんは思ってみたり」

「うーん、緋織ちゃん、相変わらず自覚無いんだねえ」

苦笑するように美汐は呟き、ちらりとその視線をテントの方へと向ける。

そこでは、ちょうど緋織がそのテントの中から姿を現すところであった。

傍で言い争いをする二人の少女の事は気にせず、美汐はただ緋織の抱いている想いの事を考えていた。

涼二がユグドラシルから抜けたあの日、二人は完全に擦れ違ってしまった。その時その場に居合わせる事が出来なかった事を、美汐は悔やんでいる。

二人を、少しでも話し合わせる事が出来れば

「おーいバカ共、これから作戦なんだ、どうでもいい事で騒ぐな」

「このレズ娘が一方的に突っかかってきただけですので、風鈴ちゃんノットギルティ」

「私はアンタに注意しただけでしょう!？」

「同罪だ、バカ共」

二人の少女の頭に拳骨を落とし、ムスペルヘイム服隊長新森かずお和尾は嘆息する。

そしてその視線をぼんやりと考え事をしてきた美汐の方へと移し、その頭を下げた。

「うちの部下達がご迷惑を」

「あ、いいんです。変にプレッシャーを感じるより、自然体の方がいいと思いますし」

「ま、それは確かに……うちの副官みたいにガチガチになられても困りますからなあ」

頭を掻き、新森はその視線を横へと向ける。

そこに立っていたのは、美汐よりも年上と思われる 恐らく徹

ほどの年齢の 青年だった。

彼は酷く落ち着かない様子で、周囲へキョロキョロと視線を向けたり、無意味に足踏みをしたりと常に何かしらの動きを見せている。

そんな彼の様子に、同じ隊の二人の少女は失笑気味の表情を浮かべていた。

「相変わらずの上がり症ね、みっはた光畑」

「単純火力だけなら隊長にも届こうとしてるくせに、相変わらずその自覚が無いのですから。ぶっちゃけ無様です」

「す、好き勝手言ってるなあ二人とも!？」

若干裏返った声を上げる青年。

しかし、僅かながらに気を紛らわせる事が出来た為か、その表情は少しだけ嬉しげだった。

ムスペルヘイム副隊長たる新森の副官 たける光畑武瑠は、そんな様

子そのまま声を上げる。

「大体、コレで緊張しないはずが無いだろう!? って言うか、何で二人は緊張してないんだ!？」

「緊張はしてるわよ。それを表に出さないようにしてるだけ」

「あー、きんちよーするー。こわいーいやだー」

「……うん、把柄わきびが言う事は分かるけど、冬木は全く信用できない!？」

「美女は信用してはならないものなのですよ。がつでむ」

「意味分かって適当に言ってるだろ、お前」

表情を変えぬまま棒読みで言い放つ風鈴に、新森は小さく嘆息する。

その場でくるくると回転する風鈴、呆れた表情の羽衣、そして頭を抱える武瑠。

そんなムスペルヘイムの者たちの姿に、美汐はクスクスと笑みを零していた。

そして、彼女はその視線を横へと向ける。

「前から思ってたけど、暖かい隊だね、緋織ちゃんの所」

「……恐縮です」

若干眉根を寄せ、頭を抱えた緋織が、そこに立っていた。

いつの間にか現れていたその姿に、羽衣たちは慌てて  
風鈴だけはマイペースに 敬礼の姿勢を取る。

そんな彼女達を制しながら緋織は前に出て、隊員たち全てを見渡せる位置へと立った。

隊員達はそれと共に沈黙し、緋織の方へと一様に視線を向ける。

それら全ての視線を受け 緋織は、声を上げた。

「総員。私達はこれより、ニーズホッグとの交戦を開始します」

遙か彼方から放たれるプラーナの圧力は、時間を追うことに指数関数の如く高まってゆく。

しかしそれらを受けながら、集った英雄たちは決して逃げようとはしなかった。

ここに集う者達は全て、すべき事を理解しているから。

「決して楽な戦いではない。全員が生き残れる事は、私も補償出来ない」

それは、全ての隊員が分かっていた事。

直接戦闘する神話級の能力者<sup>フェアプレー</sup>だけではない。

通信や治療などの補助の為にやってきた者達すら、全てが決死の覚悟を決めている。

故にこそ 緋織は、彼らの為に死力を尽くす事を誓う。

「けれど、私達は逃げない。私達の背中には、護るべきものがあるからだ」

力ない者たちを護る力である事  それこそが矜持であると、

緋織は学んできた。

誰よりも、何よりも強い能力者集団であるならば、それだけの義務

があるのだと。  
見返りは無いかもしれない。人々は、能力者を恐れているのだから。  
それでも

「私達の手に入れた秩序を、決して失う訳には行かない！ 故に、  
我らの秩序を奪うものをここで討つ！ 総員 攻撃準備！」  
『はッ！』

緋織は、叫びと共に己が剣 《レイヴァーティン災いの枝》を抜き放つ。  
灼熱を宿す緋色の刃は炎を放ち、使い手の体を包み込んでゆく。  
空を駆ける為の炎の翼。誰よりも強く戦場で輝く炎である事  
開戦を告げる号砲である事を望んだ力の形。  
それを構えながら、緋織は向き直る。  
目視できるほどにまで近づいた、ニーズホッグの方へと。

「 目標、攻撃区域に入りました。撃てます」  
「 往くぞ ツ！」

風鈴の呟いた声 それと共に、緋織は勢いよく地を蹴った。  
それに続くように、飛行能力を持つ神話級の使い手たちが続く。  
その人数は、僅かに七人。それが、ムスペルヘイムの所有する攻撃  
系の神話級能力者の数。  
彼女たちは大きく散開しながら、回り込むようにニーズホッグに向  
かって行く。  
そして、それに続くように

「砲撃準備ッ！」

海岸に残った能力者たちが、それぞれの能力を発動させる。美汐によって力を増幅された能力者たち。それぞれが最大の、そして過去最高の一撃を放とつと、練り上げられた力を開放する。

「うおおおおおッ！  
H、O、R  
ッ！」

先陣を切るのは、光焔武瑠。

その体に刻まれたルーンが輝くと共に、彼の周囲の空間が固定される。

そして、その前面に形成されるのは一本の砲身。その根元には、灼熱の輝きが収束していた。

Oによって集められた重金属粒子が、HとRの力で分解、加速してゆく。

放たれるのは、神速で駆ける灼熱。

「《必勝もたらず灼熱の槍》  
フリューナク  
ウウウウウウッ！！」

僅かに橙に輝く閃光。それは、その武瑠の叫びと共に放たれた。

単純な破壊力ならば、炎を収束した《災いの枝》  
レイヴァーティン  
渾身の一閃に匹敵するその威力。

それがニーズホッグへと突き刺さる刹那。もう一つの閃光が、



その隣から生まれていた。

「行くわよ……ッ！  
J、R、H！」  
ジュラ  
ラド  
ハガラス

《戦乙女》ヴァルキユリアの背中に形成されるのは、翼のように広がる九つの剣。しかしそれは一度砕け散り、粒子となって羽衣の頭上に収束してゆく。

形成されるのは、渾身のプラーナによって形作られた一本の槍。それは抑えきれぬと叫ぶかのように放電しながら、高速で回転してゆく。  
そして

「貫けッ！  
《世界樹の神槍》トネリコリンゼ・ヴォータンッ……！」

レールガン 電磁銃の要領で放たれた槍は、雷を放ちながら神速で目標へと向かって行く。

空を裂くように駆けた二つの神槍。

そしてそれに続くように、炎が、風が、雷が、氷が、巨石があらゆる力が、黒き巨体へと突き刺さった。

『G a  
A A A A H h h h h h h h h h o o o o o o o o o o o  
O ッ！』

低く、地に響くように、黒き龍の苦悶の音が轟く。

圧倒的な力を放っていたあの魔獣　それに確かに届いているのだと、羽衣は会心の笑みを浮かべる。そして同時に、全ての力を出し切った結果、体力を奪いつくされてその場に膝をついていた。疲労の色は濃く、立ち上がる事すらままならない。それでも

「後はお願ひします、お姉さま……」

任せろ、とでも答えるかのように　彼方を駆ける炎の翼は、一際強く輝きを放っていた。

\* \* \* \* \*

「隊長、分かってるな？」

「ええ、貴方と《閃光》グリントは攪乱を。隙が出来た瞬間に打ち込みます」

宙を駆ける緋織は、同じく隣を駆ける新森の言葉に対して頷く。灼熱の炎を纏っている緋織ではあるが、その力は完全に制御され、一部の放射熱も許してはいなかった。

その為、周囲の仲間達には全く影響の無い状態が維持されている。緋織は状況を確認しつつ、ニーズホッグへと駆け 瞬間、空を裂く閃光を見た。

「！」

「ほう、流星は《光輝なる英雄譚》ヴォルスング・サガによる強化か。普段とは比べ物にならないな」

「乾坤一擲の一撃だから、と言つのもあるだろう」

新森の言葉に頷いたのは、若干離れた場所を飛んでいた一人の男。一振りの居合刀を抱えた彼は、その鋭い眼光でニーズホッグを見つめている。

「私も前衛ではあるが……流星に、アレに近づくのは厳しいな。見  
てみる」

「防いでる、か……」



苦悶と、怒りの叫び。

それこそが、緋織たちにとって開戦の証となった。

「ラド  
R、H、S ハガラスソウイル

行くぞ、ゴッドスピード・ホロウ  
《比類なき神速の英雄》」

まず動いたのは、ムスペルヘイム副隊長たる新森和尾。

その姿は、そう呟いた刹那の内に消え去っていた。

そしてその瞬間、ニーズホッグを覆っていた煙が吹き散らされ、同時に巨大な打撃音が響き渡る。

「Ga

鈍いぞ、木偶の坊が」

それは人体の限界を超えた加速。

自らを壊す超加速と自らを癒す超再生を同時にこなし、自ら壊れ自ら修復されながら、誰も追いつけぬ速度で駆け抜け続ける。

煙の中から表れた、深手とは到底いえない傷を負ったニーズホッグに対し、新森は吐き捨てるように言い放つ。

「自動修復は俺の売りだ、勝手にパクるな」

ウルス  
Uによる自己強化

ニーズホッグの突き抜けた力は、傷を負った体を瞬く間に再生させてゆく。

自らの部下の努力を無駄にされたような思いに、新森は苛立ちを覚

えていたのだ。  
だが、やる事は決まってる。

「無駄にはしねえさ……鈍ってる間に、決める」

そう呟く間にも、新森は嵐を纏う無数の打撃をニーズホッグへと浴びせ続ける。

と　そこに僅かに及ばないながらも、同じほどに加速した青年が追いついてきた。

「飛ばしすぎですって副隊長！」

「黙ってついて来い、馬鹿者」

現れたのは、手に氷の剣を持つ青年。

シャルル・ヴィシロス

《閃光》<sup>グリント</sup>の二つ名を持つ<sup>ファーブラ</sup>神話級の能力者。

R、I、Tによる加速能力は、新森のそれに純粹な速度では劣るものの、相手を減速させることで喰らいついてゆく事が出来る。ただし

「くう……減速は効かないってか！」

能力を減衰させる領域では、広範囲に広がるような能力は到底通用しない。

故に、シャルルは手数の新森に対抗するように一撃の重さを優先させた。  
振るわれる氷の刃は神速に達し、相手の鱗に阻まれながらも確かな破壊力をニーズホッグに伝える。  
そして 二人の渾身の一撃が、巨龍を確かに怯ませた。

「カン K、ジュラ J、テイウス T  
ラド R、ジュラ J、ダガス D  
「

そして、上空に浮かぶ二人が、それを見逃すはずが無い。  
掲げられた緋色の刃と、構えられた居合刀。  
その二人は、刹那の隙を過たず飛び出す。

「レイヴァー 《災いの枝》 ツ！  
ダーインス 《血吸いの魔剣》 ツ！  
「

そして、比類なき破壊力を持つ二人の能力者の一撃が、ニーズホッグへと直撃した。





「ひゃっ!？」

鳴り響いた巨大な爆音に、桜花は思わず身を竦ませていた。かなり離れた場所で開いた戦端　その余波が、桜花のいる場所までわずかながらに届いていたのだ。荒々しく揺れるテントの中、それでも不安そうな表情は見せず、桜花は遠景に見えるニーズホッグを見詰めている。

「うわぁ、すっし……」

そこでは、最早常人の想像の域を超えた戦いが繰り広げられていた。炎が立ち上り、閃光が宙を舞い、海から巻き上げられた水が荒れ狂

う。  
フェアプレイ  
神話級の力を持つ者の戦い。そこで振るわれているのは、常識外れなほどに強大な力なのだ。訓練を受けていない人間ならば指先一つ動かす事が出来なくなるようなプラーナの密度。しかしそんな中で、桜花は平然とした表情のままその戦いに魅入られていた。

(ちょっと遠いのがもつたない……けど、流石に近づくのはねえ)

桜花とて、明確に見えている危険に自分から首を突っ込もうなどとは思わない。

明確に見えてなければ反応しないのか、と幼馴染の二人からしてみれば言いたい所であろうが。

ともあれ、しっかりとニーズホッグの姿を見る事が出来ない事に不満を覚えつつも、桜花はその場を動こうとはしなかった。

「あの……済みませんが」

「あ、はい？」

ふと声を掛けられ、桜花は振り返った。

そこに立っていたのは、同じテントの中にいたムスペル Heim 隊員の青年。

彼は何処か躊躇うような様子のまま、桜花へと向けて声を上げた。

「貴方は、確か前隊長……氷室涼二のお知り合いだと言っていましたね」

「え？ ええ、そうですね」

彼の問いに対し、桜花は肯定の言葉を発する。

先程語った通り、それは別に隠すほどの事でもなかったからだ。と言っよりも、むしろ

「あたしとしちゃ、あいつが隊長なんてすごい役職についてた事の方がびっくりなんですけど。あいつ、ユグドラシルでの事は殆ど話さなかつたし」

「そうですね……彼は、お元気ですか？」

「ん？ んー……まあまあ、じゃないかな」

若干、言いよんだその言葉　しかし桜花は苦笑と共にそれを振り払い、青年へと向けて声を上げる。

「それで、あいつが何か？　伝える事でもあるのなら、あたしから伝えておきますけど」

「いえ……我々の言葉に耳を傾けてくれるかどうかは微妙な所ですから」

そんな彼の言葉に、桜花は小さく首を傾げる。

彼女は、涼二がムスペルヘイムで何をしていたのかは知らない。

話に聞いていたのは、精々仲の良い友人同士で合った緋織たちの事だけだ。

どのような戦いをしてきたのか、どんなものを見てきたのか彼は、決して話しはしなかった。

そこにどのような思いがあったのか、それは桜花にはわからない。けれど、彼は確かに、戦いの日々から幼馴染二人を切り離そうとしていたのだ。

(あいつにとっての日常、か)

僅かながらに、桜花はそう考える。

戦いの日々を置いていた涼二にとって、少しだけでも安らげる場所。

それが、自分達の元であったならば、と。

(……不器用なのよね、あいつも)

桜花は、小さく苦笑する。

そんな彼女の様子に首を傾げつつも、ムスペルヘイムの青年は再び声を上げた。

「貴方にお聞きしたい事があるのですが」

「あ、はい。何ですか？」

「彼が……前隊長が何故ムスペルヘイムから、ユグドラシルから抜けたのか。我々は……隊長すらもその理由を知りません。貴方は、

何かお聞きしていませんか？」  
「何か、って言われても……」

青年の言葉に、桜花は眉根を寄せる。

彼がどうしてユグドラシルから抜けたのか　それ自体は桜花も  
問いかけていた事ではあった。  
けれど、彼はそれに答える事は無かったのだ。

「あいつは、あたしには何も言ってます。基本的に、そういう話  
を持ち込む事が嫌いな感じの奴です。今だって、探偵業みたいな  
仕事をしてるらしいけど、それに関しても全く話そうとしないです  
し」

「……そうですね、お手数おかけしました」  
「ただ」

一つだけ、気になっている事はある。  
彼は何も話さない、話そうとしないだろう。  
それでも、たった一つだけ　幼い頃から共に過ごしてきたから  
こそ、分かっている事があったのだ。

「……あいつらしくないって、思う」  
「はい？」

「初めて会った時のあいつは、もっと自己完結してる人間だった。  
ただ自分の世界に住んでいて、他人の事なんか気にしようとしな  
いって言うか……そんな感じだった。それが涼二の根本だった」

心の底で何を考えていたのかまでは桜花にも分からない。けれど、涼二は確かに、この世の全てを拒絶していたのだ。己だけの世界に存在し、そこには何者も立ち入らせようとしない。桜花もそれは間違った事であると思うし、それを変えたのは桜花の意志だ。

けれど

「涼二は、ユグドラシルを辞めてから歪んでしまった気がする。あいつは、他人に執着する人間じゃなかった。

あたしにだって、貴方達にだって……見せていたのは、ごく一面だけ。その時に見せていたのは確かに本心だろうけど、その他の部分は決して見せない」

「それは……」

「あいつはね、本当は他人の心配なんかする人間じゃないの……じやなかった、ないんですよ」

今まで忘れていた敬語を元に戻し、桜花は苦笑する。

その笑顔の裏で、たった一つの事を考えながら。

(そう、まるで……誰かに対して執着させられたみたいに)

脳裏で続けられようとしていた言葉　しかしそれは、周囲に響き渡った龍の咆哮によって遮られていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

《災いの枝》<sup>レイヴァーティン</sup>と《血吸いの魔剣》<sup>ダーインスレイヴ</sup>。

ムスペルヘイムでも最大級の力を持つ神話級能力者の二人。  
そしてそれは、その二人の放つ技能の名称でもあった。

武器形成型の緋織は、常時火力においてはムスペルヘイムはおろか  
ユグドラシルでも随一とされるだけの力を持っている。

その力は、余波だけで海の水を干上がらせるだけのエネルギーを有  
していた。

対し、正仁の《血吸いの魔剣》<sup>ダーインスレイヴ</sup>は

「うっはあ、流石正仁さん」

シャルルは二人の攻撃が命中したのを確認し、一度加速を止める。その口元に浮かぶ感心と驚愕の笑みは、眼下に広がった光景を見れば無理からぬものであった。

「……流石ですね、四之宮さん」  
「何、隊長もだ」

居合刀を納刀しつつ、正仁は小さく苦笑する。

その真下 緋織の一撃の余波によって蒸気の立ち上る海面。

そこは、まるでモーセの如く、一直線に海が割れていたのだ。

「<sup>ジュリア</sup>J」によって刀自体を強化し、<sup>ラド</sup>Rの加速と共に<sup>タガス</sup>Dのエネルギーを纏った刃を居合によって放つ。

その一点へ凝縮された破壊力は、緋織の火力すらも遙かに凌ぐほどの一撃であった。

が そんな一撃必殺とも言える技を放った正仁の顔に、油断の色は決して存在しない。

「油断するな、信じがたい事だが」

眩き、彼は再び刀を構える。

その鋭い視線は、一直線に割れた海の底へと向けられていた。





「セテイ、捕まえて！」  
「分かりました！」ラクス

頷き、セテイがその力を発する。

その身に刻まれたルーンは水を操る力たるラクス唯一つ。

シングルルーンはその力に多様性を持たせる事が出来ないが、その代わりとして非常に高い能力の強度を持つという特性がある。

高いプラーナの密度　それは、ニーズホッグに対しても十分に通用するものであった。

「ヤマタノオロチ  
《八岐大蛇》！」

そして何より、海上であるこの場はセテイにとって有利な空間。

虚空から水を生み出すと言う手間を省き、海面から力を操る事が出来るのだ。

セテイが生み出したのは八本の水の柱。

渦巻くそれは次第に精緻な造形を創り始め、八つの蛇の頭となって海底より飛び出してきたニーズホッグへと噛み付いた。

『G r r r r r ……!!』

「ッ、何て力……!!」

「でも動きは止まった！　いい仕事よ、セテイ！　次は　」

続いて、フォルスが手を掲げる。

天へと伸ばされたその腕の先にあるのは太陽　　否、そこに発生した黄金の火球だった。渦を巻くように、灼熱が天へと集ってゆく

「アタシの番よ……<sup>カン</sup>K！」

彼女の持つルーンは<sup>カン</sup>Kのみ。

しかしそれ故に、放つ炎の密度と範囲は緋織のそれを越えるものとなる。

そして、それを一点に凝縮した場合の火力は

「燃え尽きる！　《<sup>フラメ・リーゼ</sup>侵奪する炎の巨人》ッ！」

万物を灰燼に帰して尚余りある、圧倒的なまでの熱量となる。

その太陽と見紛うほどの輝きを放つ炎は、一直線にニースホッグへと向けて振り下ろされた。

それに合わせ、正仁は再び居合刀を構える。

フォルスの放つ灼熱を浴びれば、多少なりともニースホッグの鱗が柔らかくなるかも知れないと考えたのだ。

彼女の能力が解除され、突入しても熱量を防ぎきれぬ程度まで温度が下がったその刹那を決して逃さぬようにと

刹那。

『OoooooooooaaaaAAAAAAAAA』

ツ！！』

鼓膜を破らんと言わんばかりの咆哮が天へと放たれ　それと共に、緋織たちの構成していた飛行用能力が、強制的に解除された。

「っ!?!」

「うおッ!?!」

咄嗟に、ムスペルヘイムの面々は能力の出力を上げ、それぞれの力を発現させる。

だが、それに消費する必要があるプラーナは、先ほどよりもかなり上昇していた。

無論、飛行程度にそれほど多くの力を必要とするわけではない。だが

「何よ、これはッ!?!」

フォルスは、半ば悲鳴じみた絶叫を上げる。

先ほどの一撃は、全ての力を使い尽くすようなものでは無い。

しかし、決して手は抜かなかつた。確かに全力だったのだ。

にもかかわらず、視線の先に存在している魔獣は、それを見事に押し返して見せたのだ。

「どうしてアタシの炎が吹き散らされてるのよ!?!」

「フォルス、落ち着いてください！」

「ッ、こんなの あいた！？」

「冷静になれ、馬鹿者」

セテイの言葉も聞き入れず激昂しようとしていたフォルスは、新森に後頭部を小突かれてたたらを踏んだ。

咄嗟に振り返り、セテイは怒りに燃える目で新森を睨む。

が、彼はそれにも全く答えた様子は見せず、ニーズホッグから視線を外さぬまま声を上げた。

「激昂したまま戦って、勝てると思ってるのか？」

「それは……ッ！」

「戦うなどは言わん。だが、冷静になれ。お前達を無駄死にさせる訳には行かないからな」

言って、新森はちらりと緋織へ視線を向ける。

そして彼女もまた、その視線に対して小さく頷いて見せた。

「総員散開！ 固まらず、相手の攻撃を避けて！」

「機動力の低い二人には、私が付いています」

「《不<sup>アース</sup>破の城砦》……うん、任せる」

そう呼ばれたのは、長い黒髪の女性。

赤澗の眼鏡をかけた彼女は、緋織の言葉に頷きながら双子の方へと近寄る。

エイシール・ランドグリーズ。彼女は、防御系のルーン能力を持つ  
フェアブラ  
神話級の能力者だ。  
彼女ならばニーズホッグの攻撃も受け止められる。とりあえずの安  
堵と共に、緋織はニーズホッグから距離を置くように飛び離れ、そ  
の周囲を旋回し始めた。

「美汐様が到着し、能力を使用されるまでは牽制！ 無駄な力の消  
費を抑える！」

『了解！』

全員からの声に頷き、緋織はニーズホッグへと向けて牽制の火球  
を放ってゆく。

ある程度の力を込めなければ、その身体に近づく前に掻き消されて  
しまう。

オセル  
Oによって形作られた、ニーズホッグの領域。

（能力の減衰……ある程度予想はしていたけど、ここまでやりづら  
いとは！）

データが少なすぎる。内心の舌打ちを抑えながら、緋織はニーズ  
ホッグの放った風の渦を回避した。

悠に文句を言う事は出来ない。そもそも、ニーズホッグの戦闘デー  
タなど殆ど存在しないのだ。

無いものは想像の上でしか判断する事は出来ない。

しかしながら、ニーズホッグのそれは最悪の予想を更に超えていた  
のだ。

(領域の力を一点に集中すれば、フォルスの炎すら消し去れる力……となれば、全方位からの飽和攻撃でもなければ攻撃は通らない。そして、Uのルーンウルズによる肉体強度……四之宮さんの力すら防ぎ切る防御力は、生半可な攻撃ではダメージすら与えられない)

こんなバケモノに、彼の総帥はどうやって勝利したと言うのか。思わず愚痴りそうになる内心を抑え、緋織は宙を駆けた。

「やるしかない」

既に背水の陣に等しい状況。

ここから先へ、この魔獣を進ませる訳には行かないのだ。

そう覚悟を決め、緋織は　　そしてムスペルヘイムの面々は、ただひたすら反撃の好機を待ち続けていた。





無数の力が飛び交う。

それは炎であり、水であり、氷であり、光であった。

使い手からすれば抑えられている威力ではあるが、普通の人間なら一撃で消し飛ぶほどの力。その中心に晒されながら、尚も無傷で黒き王者は君臨する。

『○○○○○○○○aaaaAAAAAAAATT!』

黒龍の放つ力。

胸元で輝く<sup>オセル</sup>○の始祖ルーンは、その龍の周囲に黒い霧のようなものを発生させていた。

最初に現れた時には僅かに薄く広がっていた程度のそれ。

今では遠目からでも視認できるほどまで密度を増したそれこそが、ニーズホッグの放つ能力であった。

それへと向けて力を放ちつつ、周囲を飛び回っていた少女  
　　フ  
オルスは、忌々しげに声を上げる。

「本当に通らないわね、このバケモノッ！」

「……あまり立ち止まりすぎないで下さい」

「フォルス、速く！」

「ああもう、分かっているわよ！　ほんつとつに忌々しい！」

放たれた炎の槍は、ニーズホッグに近づくと共にその勢いを弱め、相手に到達するもその黒い頑強な鱗に弾かれてしまう。

ブラーナの空気伝達率を著しく下げてしまうニーズホッグの能力領域。

それは、エネルギーを放出する能力を持つ者達にとっては天敵と言えるものでもあった。

そして基本的に、高位の能力者は放出系の能力を持つ者に多い。  
即ち

『ぶつちやけダメージ与えようとしても無駄な事だと思えますよー、  
室長も言ってる事ですし』

「対策を考える連中がそんな事言っでどうするのよ！　さっさと次の行動指示！」

『はいはい、狙われてますよ、フォルスさん』

「げ……ッ!？」

およそ女性らしく無い声と共に、フォルスは頬を引き攣らせる。  
通信機の向こう側にいる風鈴　　彼女の告げる言葉は、数秒先に

現実となる未来だ。

そしてそれを肯定するかのように、ニーズホッグの七つの瞳がフォルス達の方へと向けられる。

その動作は、ミーミルによって告げられた情報と同じもの。

そう、それは最も注意しろと言われた動作だった。

それを見て、半ば引き攣った悲鳴を上げるかのように、セティが声を発する。

「エ、エイシールさん！」

「分かつてます。E、Z、O」  
エイワズアルジスオセル

《不破の城砦》！  
アースガルス

そんなエイシールの言葉と共に、銀の輝きが三人の周囲に広がる。それは、あらゆる能力の干渉を防ぐ防御領域。

始祖ルーンを持たないにもかかわらず、ユグドラシル中最も強固な防御能力を誇るとされたその力。  
アルジス

Zによって出力を強化されているそれは、仲間を護る時に最も強く力が発揮されるものであった。

そしてその力が放たれると共に、彼女達へとニーズホッグの力が襲い掛かる。

『G r a A h h h h H H ツ！』

「ッ  
」

放たれるのは強力な重力波。

その威力は、能力による防御が無ければ人体を一瞬でミンチにするだけの重さを秘めていた。

あまりにも強大すぎる力を息を詰まらせながらも受け止め、エイシールはじつとニーズホッグの姿を睨んでいた。

刹那。

「相手の視界に入るなって言っただろうがッ！」

『G o g a A A ツ! ?』

横合いから飛び込んできた疾風が、ニーズホッグの顔面を蹴り飛ばしてその視線を強制的に外させていた。そしてその仰け反った顔面へと向け、氷の剣を持つ閃光が襲い掛かる。

新森とシャルル 共に、最速の能力を持つ二人の能力者。

しかしその二人の連携も、ニーズホッグに対しては決して有効と叫べるものではなかった。

ニーズホッグの目へと向けて振り下ろされた刃は、しかし他ならぬその眼球によって受け止められたのだ。

「目まで堅いつてどういう事      おわあっ! ?」

引き攀った悲鳴を上げ、シャルルは放たれた重力波から身を躲す。<sup>ウルス</sup>Uによって強化されたニーズホッグの身体は、どの部分も変わらぬだけの強度を秘めていたのだ。

とりあえず能力による干渉から解放されて移動するフォルス達を横目に確認し、新森は舌打ち交じりの声を上げる。

「マトモにダメージを与えられるのは隊長や四之宮の強烈な一撃だけ……しかも、そのダメージだつてすぐに回復しちまうと来たか」

忌々しげにそう呟き、新森は再び移動する。

一箇所に留まっていれば、ニーズホッグの能力的となってしまうからだ。

高速で中を駆けながら、新森は冷静に分析を続けてゆく。

しかしながら 既に、一つの確信が彼の中に芽生えていた。

「……おい、聞こえるか冬木」

『はいはい、何でしょうかふくたいちよー』

「率直に聞く。ミーミルの坊主は何と言っている？」

『……』

通信機から僅かながらに響いたのは、その向こうにいる風鈴が息を飲む音だった。

そしてそれは、既に新森の考えを肯定しているような物でもあった。それに対して、新森は舌打ちを零す。

「やはり、そうなんだな？」

『……はい。正直に申しますと、美汐様の力無しでは、戦闘体勢になったニーズホッグに現状の戦力だけでダメージを与える事は叶わないでしょう』

「だろっな……直接戦つてりゃ誰だつて分かる」

『ですから、もう少しだけ待ってください』

「……急いでくれよ」

これは、見た通りのバケモノなのだ　　否定のしようのない  
その事実には、蹴りを放ちながらも新森は納得する。  
人体ならば容易く砕け散るその攻撃も、二丁ズボグに対しては大  
した痛痒も与えられていない。  
それだけに、それほどまでに、『格が違う』という言葉を実感した  
事は、新森には一度として無かった。

(いや　　)

一度だけ、たった一度だけ同じ感覚を味わった事があると、彼は  
かつての光景を思い返す。

あの黄金の槍が放たれた時に感じた感覚、どれほどの速さで駆けて  
も追いつけぬその差を思い知らされた瞬間の事を。

そして、同時に理解してしまう。あの男と同じだというのならば

(俺達では、コイツには　　)

ハッ、と。小さく笑い捨て、新森は思考を切り上げる。

その先を考えた所で、詮無い事だからだ。

敗北という未来は存在してはならない。元より、背水の陣なのだか  
ら。

「水を背にしているのは teme の方のはずなんだがな、トカゲ野郎が……！」  
『G A A A A A A A A A A A ツッ！！』

逆巻く嵐を、触れれば細切れにされる風の刃を躲し、肉薄した新森はニーズホッグの顎を蹴り上げる。

強烈なその威力に、龍の顎は天を向き　その首を刈らんとわんばかりに、光を纏う一閃が叩きつけられた。

正仁による強力な居合。その圧倒的な威力はニーズホッグの鱗を斬り裂き、その肉に刃を食い込ませる。

だが、それまでだった。人間で言えば薄皮一枚と言う程度の深さ、到底ダメージには数えられない程度のそれに、正仁は眉根を寄せながら後退する。

「やれやれ……最早詐欺だろう、これは」

刃を鞘に納め、正仁は R の力<sup>ラド</sup>で加速しながらニーズホッグの視界より退避する。

攻撃に特化した能力である為、防御にはあまり向いていないのだ。僅かながらにプライドを傷つけられつつも、彼は素直に距離を置く。冷静さを欠けば、<sup>フェアプレイ</sup>神話級の能力者として一瞬の内に敗北するであろう相手なのだから。

ニーズホッグは首に走った痛み<sup>に</sup>に怒りを燃やし、その傷を与えた相手を捉えようと強力な風を巻き起こす。

が　それと共に、大量の水がその周囲を逆巻き、ニーズホッグの視界を塞いでゆく。

セテイが海面から巻き上げた水。それは現象を発生させた事による力ではない為、消滅するという事はない。

そうして大量の水に視界を塞がれ、ニーズホッグは戸惑ったかのよう動きを止めた。

「シャルル！ アンタ、前の隊長みたいに触れたら凍る水とか作れないの！？」

「無茶言うな、あんな制御力ある訳ないだろ！ しかも、コレは俺の能力による水じゃないし！」

「とにかく、今は時間を稼ぐ もう少しだけ！」

そんな声と共に、ニーズホッグへと向けて二条の火炎が突撃する。金色の炎と緋色の炎 それぞれが鉄すらも蒸発させるほどの熱量を持つ一撃。

それは巻き上げられた大量の水を一気に蒸発させて水蒸気爆発を起こしながら、ニーズホッグの身体へと直撃した。

衝撃と共に紅蓮と黄金の花が咲き、余波が周囲の隊員達の髪を揺らしてゆく。

だが、彼らは決して足を止めようとはしなかった。全員分かつているのだ、あの程度では仕留められないと。

事実 黒い鱗の巨体は、発生させた嵐で水蒸気を吹き飛ばし、巨大な咆哮を発する。

『GrOOOoooooaaaaAAAAAAA ツ！』

バチバチと帯電するその体。



それを見て、舌打ちと共に新森とシャルルは接近による攻撃を止めた。  
ハカラス  
Hによる雷。その光を避けながらニーズホッグに接近する事は不可能だ。

『何か、だんだん強くなってきてないか……！』

『縁起でもない事言うな！ アンタ、Eの能力者でしょうが！ どつちかっていうと物質形成系に近いんだから、アンタ何とかしなさい！』

『無茶言うな！』

『無駄口を叩くな、バカ共 来るぞ！』

通信機から響いた新森の鋭い声と共に、隊員達は再び散開する。そして、そんな彼らの合間を縫うように、無数の雷撃が周囲へと向けて放たれた。雷を目視して躲す事は難しい。それこそ、速度重視の能力者達以外には不可能だ。故に、隊員達はそれぞれの能力を使って攻撃を防ぐ他無い。そして、そうすれば

(足を、止められてしまう !)

内心で悲鳴を上げつつも、緋織はその炎で駆け抜ける雷を相殺していた。

目に見えて飛行速度を落とされてしまった以上、相手の視界に入らないと言う戦い方するのは難しくなる。

そうならば、ニーズホッグの重力波攻撃を逃れる事は難しい。そして、相手の視線を強制的に外させようにも、雷を纏うあの状態のニーズホッグを相手には、スピード重視の二人も近づくと事は難しい。

どうすれば、と緋織が逡巡した、その瞬間だった。

身に慣れたプラーナの感触が、周囲全体に広がったのだ。

目を見開き、そして表情に歓喜を浮かべ、緋織は視線を上空へと向ける。

「ゲーボ  
ダガス  
オセル  
G、D、O

」

そこにいたのは、黄金を纏う美しき少女。

プラチナブロンドの髪を暴風の中に揺らめかせ、その金色の瞳は強大な敵を前にしても決して揺らぐ事は無い。

そしてそんな彼女の背には、輝く光によって形成された眩い翼が羽ばたいていた。

彼女は叫ぶように、祈るように、その力を広く広げてゆく。

ニーズホッグの力の中ですら、なお鮮烈に　　まるで、その何よりも真つ直ぐで強い意志を表すかのように。

光の翼はその羽を周囲へと撒き散らし、それがニーズホッグの薄闇を払って行く。

そう、それこそが

「ヴォルスング・サガ  
《光輝なる英雄譚》　っ！」

ユグドラシル次期総帥、大神美汐の持つ能力。

その力を感じると共に、緋織は大きくその刃を振りかぶっていた。背中から伸びる炎の翼はその勢いを増し、まるで噴出しているかのような様相を見せる。

そしてそれと同時に、手に携える《災いの杖》レイヴァーティンもまた、纏う炎の力を高めさせた。

その莫大な炎を、緋織は一気に振り下ろす。

「はあああああああああああッ！」

裂帛の気合。咆哮と共に放たれた炎は、先ほどまでとは比べ物にならないほどに強化されたもの。

その一撃は、周囲に吹き荒れていた嵐を消し飛ばし、ほぼ減衰する様子もなく二ーズホッグへと直撃した。

『 G a

』

咆哮は爆音の中に消え、巨大な熱量が周囲に撒き散らされる。

熱風に煽られながらも、緋織は決して油断する事無く刃を構えていた。

視線は外さぬまま、彼女は通信機へと向けて声をあげる。

「エイシール！」

『分かっていきます。二人の事は』

『自分の面倒ぐらい自分で見れる！ それに………』

『美汐様のおかげで、何とか出来そうですから』

双子の言葉に頷きつつ、緋織はエイシールに美汐の護衛に付くようにと指示を飛ばす。  
彼女は今、《光輝なる英雄譚<sup>ヴォルスング・サガ</sup>》の維持の為に動けない状態となっているのだ。  
彼女の能力による領域を維持する事こそが、勝利への鍵となる。故に、自分達の防御は二の次だった。  
例え、相手がまだ健在だったとしても。

『G R r r r r r r r r ……!』

煙の中から現れたニーズホッグは、相も変わらず痛痒を覚えた様子は無い。

が 僅かながらに、その胸の鱗が赤熱しているのが見て取れた。

(効いていない訳じゃない……倒せる相手なんだ)

自らにそう言い聞かせ、緋織は再び宙を駆ける。

そして、それは他の隊員達も同様だった。

強化された力 元より一騎当千であった<sup>フェアブラ</sup>神話級の能力者たちは、更なる力を手に入れているのだ。

いかな最強の刻印獣<sup>ルンクリーチャー</sup>が相手だったとしても、引けを取る筈が無い。神速で攻撃を加えてゆく新森とシャル、水と炎で動きを縛るリンド姉妹、そして強力無比な一撃を持つ緋織と正仁。

彼らの攻撃は、確かにニーズホッグへと届き、その肉体に僅かなが

らに傷を与えてゆく。  
先ほどまでとは違う、確かな手応え。それに、彼らが士気を上げた  
その瞬間。

□

アッ！』

最早言語にすら形容しがたい叫びと共に、ニーズホッグの周囲に  
薄闇が広がった。  
眩い光を放つ美汐の空間を、その靄で塗り潰さんとするように。  
そしてそれと共に、緋織たちは再び己の手応えが消失して行くのを  
感じていた。

『っ、これ……緋織ちゃん、相殺するのが精一杯……！』  
「分かりました、そのまま維持を！」

通信機の向こうより響いた美汐の声に、緋織は理解する。  
今、ニーズホッグは全力で〇の力を発揮しているのだと。  
もしも美汐の力が無かったとしたら、飛行の為の力すら維持できな  
くなり墜落するであろうと言う事も。  
大量の人間を喰らい、無尽蔵とも呼べるほどのプラーナを溜め込ん  
だ魔獣。  
元々の力の総量が違う。故に、全力で行使されたその力を相殺出来  
ているだけでも御の字なのだ。

□

隊長、気付いてるか？』

「ええ、この能力領域、攻撃の時には弱まっていた」

そして。彼らがもう一つだけ気付いた事実があった。

それは二丁ズボグの癖とでも呼ぶべきものか。黒龍は、Hの力ハガラスで攻撃を行おうとした際、必ず能力減衰領域の強度を弱めてしまうのだ。

その後すぐにまた強めてはいるが、攻撃発生時にはそれほどの妨害なく攻撃する事は可能らしい。

尤も、届いたとしてもダメージを与えるにはそれなりの出力が必要となるが、それも、美汐の参戦で解決している。

「だから、あと少し……！」

あと一手、それが足りない。

確実に攻撃を命中させる機会、それさえあれば、仕留める事も決して不可能では無いと、その確信が得られたのだ。

一瞬でもいい、その機会さえあれば、確実に

『 隊長！ 何か来ます！ 』

「っ!？」

刹那、緋織の耳に風鈴の音が響いた。

その言葉に緋織は目を見開き、周囲へと意識を分散させる。

彼女の能力である《予言者の識ノルンスウィジョン》は、数秒先の未来を予見する。

それに見えたとするならば、それはほぼ確実に現実となる光景なの

だ。  
事実 強大なプラーナの気配が、近付いてきている！

「ハツハアアアアアアアアッ！」

空を斬る甲高い音、そしてそれに付随するドップラー効果に揺れた笑い声。

突き抜けてきた鈍色の砲弾は、その鋭い拳をニーズホッグの胸へと叩きつけていた。

爆音のような衝撃が、周囲へと響き渡る。

「ッ！？」

堪らず、ニーズホッグは悲鳴を上げる。

いかなる威力を以ってして放たれたのか、その一撃はニーズホッグの身体を海面へと向かって吹き飛ばしていた。

先ほどまで魔獣が浮いていた場所 そこに立っていたのは、獣のような甲冑を纏った人影。

「ッ、《フロースヴァイトニル悪名高き狼》！？」

「おおっと、緊急事態なんだろう？ 野暮な言い合いは無しにしようや」

驚愕と共に放たれた緋織の声に、鎧の奥で皮肉った笑い声を上げ、

フロースウィートニル  
《悪名高き狼》

上狼塚双雅はそう口にする。

そしてそれに追隨するように、もう一つだけ響く声があった。

「こいつを逮捕したい気持ちも分からんでは無いが、優先順位は向こうが上だろう、《災いの枝》」

「え……!?!」

「まさか!?!」

それに反応したのは、双雅以外の全員だった。

いつの間そこにいたのか、黒いコートを纏った青年は、その視線を吹き飛ばされたニーズホッグへと向ける。

「  
イサ、ラクス  
I、L」

体勢を立て直そうと羽ばたいたニーズホッグ　その背後から、

大量の海水が巨大な手を形成してその身を掴み取る。

狼狽した唸り声を上げ、魔獣はその能力の領域を強化する……が、それよりも僅かに早く、大量の水は一瞬で巨大な氷の塊へと変化していた。

大冰山の中に封じ込められたニーズホッグを見下ろし、青年

氷室涼二は、小さく息を吐く。

「まったく……面倒な依頼をしてくれたもんだ。無駄遣いはしたくないんだがな」



僅かに一人ごちたその言葉は、周囲の誰にも届かない。けれど、その言葉が普通のトーンで放たれていたとしても、結果は同じだっただろう。

何故なら、その場にいた誰もが、その姿に驚愕を隠せずいたからだ。

「嘘……本物!?!」

「マジかよ……っ!」

「隊長!」

フォルスが、シャルルが、エイシールが歓喜の混じった声を上げる。セテイに至っては、驚愕で声も上げられぬ様子だった。

比較的落ち着いている大人達 新森や正仁も、決して驚きを隠し切れている訳ではない。

そして、残る二人は

「涼二君っ!」

「隊長……涼二、涼二ッ!」

満面の喜色と、様々な感情の入り混じった声。

それぞれらしい反応に小さく苦笑し、涼二は声を上げた。

「まだ終わってないんだ、気を抜いてんじゃねーよ、バカ共!」

それは紛れもなく

彼らの『隊長』の声だった。

びしびしと、氷の碎ける音が響く。

誰よりも会いたかった人物に目を奪われていた緋織は、その音によって我に返り、若干慌てつつその視線を音の方へと向けた。

そこにあるのは、巨大な冰山。

海面に立てば見上げるほどはあるであろう氷塊は、その内に二―ズホッグを閉じ込めている。

三対の翼を持つ黒き龍。しかしその身体を包む氷は、内側から徐々にひび割れてきていた。

その周囲は先ほどまでよりも濃い靄に覆われており、全貌を掴む事を難しくしている。

「……頭が良いんだか悪いんだか。出てきた瞬間の総攻撃も微妙な所って訳だ」

ぼやくような涼二の声。

二ズホツグに集中する周囲の者達はそれに答える事はなかったが、それでも僅かながらに意識を取られていた。

何故ここにいるのか、今まで何をしていたのか　聞きたい事は、山ほどあるからだ。

けれど、それを優先するようなものはこの場には存在しない。己のすべき事が何なのか、誰もがそれを自覚していたからだ。

(後で、ちゃんと話を聞こう)

胸中で、緋織はそう決心する。

聞きたかった事、聞けなかった事、かつて止め切れなかった事による未練はいくらでもある。

それでも、この場を疎かにする事はできないと　涼二の部下であった自分が、そんな無様は晒せないと、そう誓うように。

(……ああ、そうだ)

すとな、と。

胸の中で、揺れていた何かがあるべき場所に納まったような錯覚。何か足りないかと、何かがおかしいと、ずっと感じていたもの。

それが元通りの形になり、緋織は小さく安堵するように、穏やかな笑みを浮かべていた。

(私は、涼二の部下なんだ

)

涼二の許で戦い、その力を振るう事こそが己の在り方なのだ

それを理解しながら、緋織は刃を構える。

そしてそれとほぼ同時、ニーズホッグは、己を封じる氷を粉碎しながら空へと駆け上がった。

『GOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAッ!』

響き渡る巨大な咆哮。そこに満ちる怒りは、周囲の者達に本能的な恐怖を覚えさせる。

相手は人知を超えた怪物であり、圧倒的な力の差を見せ付けられた存在。

その気後れとて、決して無理のあるものではない。  
が

「皆、行くよっ!」

「攻撃は通じていたんだ、勝てない相手じゃない! ここで必ず討ち取るぞ!」

そこには、二人の英雄が存在していた。

恐れを知らず、仲間を信じ続ける強き少女。仲間を知り、敵を知り尽くした青年。

二人はそれぞれ異なる形で、自分達の勝利を信じていた。

そして、強大な敵を前にして尚曲がる事の無いその在り方は、周囲の者達に勇気を与える。

そんな信頼に、真つ先に応えたのは一人の青年。

「んじゃまア、行きますかねッ！」

鈍色か、黒ずんだ銀か。

獣のような鎧を纏った双雅は、その身から余計な武装を増やす事無く、まだ人に近い姿のままに宙を駆ける。

対するは、ニーズホッグの放つ無数の風刃。

無尽蔵に溜め込まれたプラーナより放たれるそれは、緋織ですら相殺するのに苦勞するほどの破壊力を持つものだ。

加速しながら瞬く間に向かつてくる死の刃　しかし、双雅はいつも通りの笑みを絶やす事は無かった。

「オオラアッ！」

放たれたのは、加速を得た拳の一撃。

互いの攻撃は真正面から激突し　双雅の拳は、ニーズホッグの攻撃を吹き散らした。

しかしながら、それはほぼ相殺されるような形。双雅の動きは、一瞬だけ止まる。

そんな状態に彼に向けられたのは、ニーズホッグの持つ七つの瞳だった。

対象を一瞬で握り潰す強力な重力波。いかに強力な甲冑に身を包んだ双雅と言えど、それを受ければひとたまりも無い。

が　そんなニーズホッグの眼前に、氷で形成された鏡が発生し



身体強化の極致、Tの始祖ルーン。

究極の加速能力たるRの始祖ルーンの力を伴い放たれる拳の一撃は、人知を超えた怪物たるニーズホッグの反射速度ですら捉えきれない速さを持つ。

そしてその一撃は狙い違える事無くニーズホッグの顔面へと放たれ、その頑強な瞳の一つを確実に砕き潰していた。

『

ッ!!!』

仰け反りながら、苦悶に身を振るニーズホッグ。

それと共に、その周囲を覆っていた黒い靄は、僅かながら確実にその密度を減らしてゆく。

身体強化と物質形成　ニーズホッグの能力減衰領域の影響を最も受けづらい双雅だからこそ、その破壊力。

他の人間であればこつも簡単には行かない。しかしながら、初めてダメージと呼べるダメージを与える事が出来たその光景は、ムスペルヘイムの隊員たちを奮い立たせるには十分すぎるものだった。

「よし　行くぞッ!」

「流れに乗るわよ!」

灼熱が猛る。

緋色の炎を纏う緋織と、黄金の炎を纏うフォルス。

二色の炎は、美汐の力の後押しを受けながら、その力を十全に解放



した。

尾を引くように二色の輝きは宙を駆け、仰け反ったニーズホッグへと隕石のように突撃してゆく。

纏う灼熱は、超高熱を保ちながらも、周囲への放射熱は完全な形で押さえ込む。

故に、その熱量は際限の無いものへと押し上げられていた。

「レイヴァーティン  
《災いの枝》

《グイソフニル・アルデアート  
黄金の頂を焼き尽くせ》ッ！」

「ヘーリオス  
《真焰天体》ッ！」

灼熱が宙を駆ける。

交差するように、その二つの一撃は仰け反ったニーズホッグへとほぼ同時に激突した。

纏う炎は敵を害する為だけに振るわれ、その圧倒的な熱量を完全な形で相手へと伝える。

「はあああああああああッ！」

「でええええええええええいっ！」

裂帛の咆哮は余す事無く存分にその力を発揮し、ニーズホッグの能力展開を許さぬままに通り抜けた。

正面から直撃した二つの炎は、黒龍の強固な鱗に覆われたその胸部を赤熱させ、融解させかかっている。

その強靱な筋肉にまではダメージを与える事は出来ていなかったが……一瞬とはいえ、その防御力を貫いたのだ。

そして、その僅かな好機を、最強の一撃を持つ剣士は見逃さない。

「今度こそ、斬る」

鋭い、研ぎ澄まされた刃のような殺気がニーズホッグを射抜く。獣であるからだろうか、魔獣は反射的にそれに反応し、身を焦がす熱に苦しみながらも無数の風の刃を剣士 四之宮正仁へと放つ。が そこに立ちほだかる者があつた。

「攻撃を通しはしない……！」

そこに立つのは、銀の領域を広げるエイシール。ユグドラシル最強の防御能力は、単一能力しか発動できぬニーズホッグの攻撃を危なげなく受け止める。その光景に、まるで苛立ったかのようにニーズホッグは唸り声を上げる。目の前の相手を許さぬという強い意思 故に、それは大きな隙となつた。

「捕らえて、《八岐大蛇》！」

『Ga ツー!?』

ニーズホッグのは以後よりせり上がった海水は、八つの顎を持つ巨大な蛇の形を形成する。

水の蛇は黒龍の持つ頭と尻尾、そして六つの翼に喰らい付き、その

動きを完全に止めていた。

重力と風を操る事で天を駆けるニーズホッグは翼を抑えられた程度で地に落ちる事は無いが、それでも僅かな時間拘束するには十分すぎる力。

『GuraaaaAAAAAAッ!』

ならば、とでも言うつもりか　ニーズホッグは、ハガラスHのルーンを輝かせる。

それに反応したのは、神速の能力を持つ二人の実力者だった。相手の攻撃パターンは既にいくつも見ているのだ。ニーズホッグが相手を近づけさせない為にどうするのか　それは、間近で相手の動きを見てきた彼らが最も良く分かっている。

「雷を纏うつてか……やらせる訳ねえだろうが!」

怒号と共に、新森は駆ける。

己の身を省みない威力で放たれた蹴りはニーズホッグの顎に突き刺さり、一瞬ながらにその意識を怯ませる。

そして、その仰け反った頭部へと駆ける影が存在していた。

「おりゃあああああッ!」

氷の剣を逆手に持ち、真上から墜落するように駆ける青年、シャ

ール。

彼の狙い定めたその場所は、新森の一撃によつてずれた頭部へと確実に向かつていた。

そんな彼の攻撃は、強大な破壊力を秘めた一撃ではない。

彼はあくまでもスピード型の能力者、相手の防御を許さず何よりも速く駆け抜ける事が仕事なのだ。

元より、今回の戦いで有効な打撃を与えられるなどとは考えていない。

だが　　今この瞬間だけは、例外だった。

「そこだあああああっ！」

まるで地面に突き立てるかのように、シャルルは刃を振り下ろす。その一撃は狙い過たず、砕け散ったニーズホッグの眼窩へと突き刺さっていた。

ただの一撃ではその鱗を貫けない、加速した一撃ですら、その瞳を斬り裂けない。

けれど、既に穿たれた傷に刃を突き込むだけならば、シャルルの攻撃力とて十分な痛痒を与えられるのだ。

尤も、この魔獣を仕留められるほどに深く刃を突き入れる事は出来なかったが　　それでも、一撃の隙を作るだけならば、十分すぎる。

「正仁さんッ！」

「ああ、感謝する」

その声が響いたのは、ニーズホッグの胸の前。  
十全な状態であれば飛行のための力すら維持が難しく、放たれる風  
や雷は到底防ぐ事もままならない死の領域。  
その場所に立ち、四之宮正仁は刃を構えながら静かに笑む。  
引き絞られたその姿は、限界まで張り詰めた弓の如く。  
融解しかかった胸の前に構えられる《ダイインスレイヴ血吸いの魔剣》。それは最早、  
必殺の刃を突きつけられた事に等しい。  
そして

「今度こそ 堕ちよッ！」

破滅の一閃は、反応すら許す事無く放たれた。

僅かになるのは鯉口を切る音。否、それすらも置き去りにし、神速  
の居合いは振り抜かれる。

下ろされた刃は血振りをされ、そしてゆっくりと鞘に納められる。

刹那 深く斬り裂かれたニーズホッグの胸より、銀色の体液が  
噴出した。

『 G u、 G g a 』

悲鳴すら上げられず、半ば呻き声のような音を立て、ニーズホッ  
グの身体はぐらりと揺れる。

初めて与えた、深手と呼ぶ事が出来るであろうダメージ。  
そして、それと共に完全に動きが止まったニーズホッグ。

この瞬間こそが、この敵を落とす千載一遇のチャンスだと、その場  
にいた誰もが理解した。

故に、全員がその力を解放しようと構える      その、刹那。

□

ツ！！  
『

咆哮と共に溢れた力      それに、涼二は思わず目を見開いていた。

「拙い、これは……！」

風が流れる。

それは二ーズホッグの放つHハガラスの力であったが、決して先ほどまでのように激しい嵐という訳ではなかった。

が、その持つ力は、先ほどとは比べ物にならぬほどに厄介なもの。何故なら      その風に触れた途端、体が酷く重くなってしまったのだから。

墜落しそうになる身体を何とか持ち上げつつも、緋織は呻くように声をあげる。

「エンチャント……ッ！？」

ハガラス  
Hの風に混ざるOオセルの重力。

触れただけでその身に掛かる重力を増加させる効果      それは決して、レベルの高い使い方という訳ではない。

事実、この風に触れただけで身体を潰されるような事はなかった。

だが、それでも決して軽い状況といえる訳ではない。  
何故なら、ニーズホッグの持つ力の総量は、<sup>フェアブラ</sup>神話級の能力者から見ても尚巨大と言わざるを得ないほどに強大なものだったからだ。  
そして何より、今まで使っていなかったはずの力を使った事。使っていなかったからこそ拮抗していたそのバランスを、崩されてしまったのだ。

「しま　　がッ!？」

誰もが驚愕と加重に動けずにいる中、最も近くにいた正仁が、強烈な尻尾の一閃によって薙ぎ払われる。

咄嗟に反応して刀を盾にするが、その圧倒的な質量は到底人間に受け止めきれぬものでは無い。

呆気無く弾き飛ばされ、正仁は海面へと墜落してゆく。

誰もがそちらへと一瞬意識を奪われた、その刹那　　再び、周囲へと強烈な風が吹き荒れた。

「く……ッ!」

それは暴風と言う表現すら生温い。

壁のように迫ってきたそれは、最早爆風と言うべきものであっただろう。

咄嗟にプラーナで防御するも、面々はその風圧に弾き飛ばされ、ニーズホッグから距離を開ける事となる。

そしてそれと同時に、ニーズホッグは拘束から逃れると、その巨体を動かし始めた。

海岸の、拠点の方へと向けて。

「しまった！」

「クソッ、双雅！」

「応よ！」

涼二の言葉に頷きながら、ニーズホッグを追って双雅は駆ける。あの場所には桜花が居るのだ、行かせる訳にはいかない、と。しかし、体が重い。未だに、加重の風はその効果を及ぼしていたのだ。

強靱な鎧を纏ったその身は、常人よりも遥かに重い。

故にこのままでは追いつけない。それを悟った双雅は、即座に身に纏う鎧を手甲を残して破壊した。

それでも体が重い事に変わりはないが、テイワズの始祖ルーンを持つ双雅ならば、それを無視して活動する事も可能だ。

急ぎ宙を駆け抜け、双雅はその拳を叩きつけようとする。が

「ッ            !?」

眼前に発生した風の刃に、双雅は咄嗟にその腕で顔面を庇っていた。

それとほぼ同時、鋭い風刃が叩き付けられる。

手甲の部分はまだしも、他は生身の体。テイワズによる極限の強化のおかげで深い傷には至らなかつたものの、双雅はその一撃に血を吹き出しながら吹き飛ばされていた。

その光景に歯を食いしばり、涼二はスリサズの力を発動しようとして、



硬直する。

(今、ここで見せる訳には )

それは一瞬の躊躇。

使えば、いかなニーズホッグとてその動きを封じる事は出来ただろう。

しかし切り札を見せる訳には行かない      その考えが、涼二を踏み止まらせてしまったのだ。

「みんなっ!」

「く……ッ!」

体勢を立て直し、飛び出して往く美汐と、それを追う緋織。

だが、間に合わない。神速を持つ二人の能力者はどちらもニーズホッグを止めうるだけの攻撃力を持ち合わせておらず、現状そのスピードすらも鈍っている状態なのだ。

舌打ちと共に、涼二もまた彼女達を追おうとし

「…………え?」

突如として、漆黒の何かが膨れ上がったのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「  
」

声を上げる事も出来ず、桜花は呆然とその光景を見上げる。  
突如として海岸の方へと向かってきたニーズホッグ　その状況を認識してからの出来事は、彼女の理解の範疇を大きく越えていたのだ。

まず、ニーズホッグが海岸へと到達した瞬間、それを押し留めようとしたムスペルヘイムの隊員達は易々と薙ぎ払われてしまった。力を残していた災害級の能力者として、黒翼の悪龍には到底届かない。

それを止める為、桜花は咄嗟に能力を発動していた。

が 能力を減衰させる力を持つニーズホッグ相手では、到底彼女のプラーナ密度による力は届かない。

それどころか、桜花を標的として定め、襲いかかろうとしていたのだ。

だが、その攻撃が果たされる事は無かった。何故なら、それを遮るかのように黄金の閃光が割り込んでいたのだ。

『雨音君！』

「はいっ！」

それは、一人の少女を背に乗せた黄金の狼。

その狼の一撃は桜花の眼前まで迫っていたニーズホッグを弾き飛ばす。そしてその背に乗っていた少女の手が龍の背に触れた途端、圧倒的な力の流れは一瞬にして収まっていたのだ。

そして、最後に起こった事。

「……夜月、なの？」

見上げるほどに巨大な、夜色の蛇。

それは最早、蛇であると言う事すら知覚できないほどに巨大な姿をしていた。

体高だけで五メートルはあるつかと言う体躯、ニーズホッグすら丸呑みにせんとするほどに巨大な口。

桜花がそれを己の親友だと知覚出来たのは、その漆黒の鱗と黄金に

輝く瞳の為だった。

夜空に浮かぶ月のような、美しい瞳。それこそが、己が親友の証であると、桜花はしっかりと認識していたのだ。

巨大化した夜月は、大きく牙を剥いてニーズホッグを締め上げる。慌ててその場から退避する黄金の狼と少女を尻目に、夜月はその長大な体軀を生かしてニーズホッグの身体を完全に拘束していた。強大な身体強化を持つが故に、ニーズホッグは何とかその締め付けに対抗している。が、到底そこから逃げ出す事は叶わない。そして、その数秒の拮抗は、ニーズホッグにとって致命的な隙となった。

「おおおおおおおおおおおおおッ！」

天より降下してきたのは、緋色の刃を携える炎の少女。

彼女は一つの矢のように刃を突き出しながら飛翔し、その切っ先を、碎け潰れたニーズホッグの瞳の中へと突き入れていた。火花が散り、衝撃が駆け抜ける、一瞬の静寂。そして

「碎け、散れえッ！！」

刃を伝って放たれた強大な爆焰が、ニーズホッグの頭部を内側から完全に打ち砕いていた。



04 - 14 : エピソード (前書き)

次回は12/20ごろから再開です

「はあっ、はあっ」

砂浜へと着地し、《レイヴァテイン災いの枝》を消失させた緋織は、荒い息を吐きながらその場にうずくまっていた。本当に全霊、今までにないほどの激しい戦いは、緋織の持つ大量のプラーナすら枯渇させかかっていたのだ。しかし、と緋織はその場で視線を上げる。

「……………美汐様、そこで待機を」  
『でも、緋織ちゃん！』

未だ上空にいる美汐へと通信機で告げ、何とか申し訳程度に息を整えた緋織は、立ち上がりながら眼前の存在を見上げる。

漆黒の　　あるいは、闇色の鱗を持つ巨大な蛇。

まず間違いなく刻印獣リンクリーチャーであろう存在であるそれは、ニーズホッグが沈黙すると共にその拘束を止め、静かに緋織の事を見下ろしていた。

(……敵意は、感じない。けど )

間違いなく神話級ファープラであろう刻印獣リンクリーチャーではあるが、決して緋織の事を威嚇しようとはしてきていない。

ただ静かに、その黄金の瞳で周囲の事を観察している。その姿は、非常に理性的なものにすら感じられた。と

「夜月！」

一人の少女が、巨大な蛇へと向かって駆け寄る。

咄嗟に緋織は止めようとしたものの、彼女はそんな緋織の仕草にすら気付かず、巨大な蛇へとその手を触れさせた。その顔に浮かんでいるのは、驚愕と歓喜。

「凄い、凄いよ夜月！ こんな事で来たんだ！ あははっ、流石あたしの親友！」

そんな桜花の言葉に、巨大な蛇 夜月は、僅かながらに息を鳴らした。

舌を出し入れし、空気が漏れるような音を鳴らしたその仕草。様子



を見つめていた緋織には、それがどこか苦笑のようにも感じられた。  
やはり、と 緋織は、小さく呟く。

（この刻印獣……人並みの知能を持っている）  
ルーンクローチャー

警戒しつつ、それでも手を出すような真似はしない。  
危険ではない相手を討ち取る必要は無いし、現状殆ど全員が疲弊してしまっている状態だ。

この状態では、無理な戦いは危険を伴ってしまうだろう。  
ただでさえ、一人重傷を負ってしまったというのに

「そうだ、四之宮さん！」

「戦いの後で気が抜けてるからって、忘れてるのはちっと薄情なんじゃないのか、隊長」

背後から声をかけられ、緋織は振り返る。

そこに立っていたのは、若干の苦笑を浮かべた新森だった。  
慌てた様子どころか、非常に落ち着いている彼に対し、緋織は小さく首を傾げる。

「副隊長、四之宮さんの救助は」

「ああ、《閃光》グリントにやらせた……と言ってもまあ、即死してないだけマシ、というレベルのダメージだったんだがな」

そんな彼の言葉に、緋織は唇を噛む。

ムスベルヘイムに所属する治癒系能力者でも、それほどの重傷を癒す事は難しい。

例え一命を取り留める事が出来たとしても、二度と剣を握れなくなってしまうのではないか　そんな事を考え顔を俯かせた緋織の頭に、ぽんと新森の手が乗った。

そして驚いて顔を上げた緋織の頭を、新森は強制的にある方向へと向けさせる。

そこには、地面に横たわる新森へと手を伸ばす着物の少女の姿があった。

「彼女は……？」

「……涼二の知り合いの、ソウエルSの能力者だそうだ」

少女　雨音は己が力を正仁の体内へと流し込み、そのプラ

ナの流れに乗りながら彼の体を癒してゆく。

潰れていた半身が瞬く間に再生されてゆくその姿に、緋織は思わず目を見開いていた。

あれほどの治癒能力は、ユグドラシルでも見た事が無かったのだ。

「やれやれ、あんなのと知り合ってるとは……一体、涼二の奴は何をしていたんだかな」

「……」

そっと、緋織は雨音から視線をずらす。

その傍らに立つ青年　氷室涼二へと。

彼は正仁の治療を終えた雨音へと一言三言話しかけた後、その視線をある方向へと向けた。  
そこにいたのは、先ほど蛇に話しかけていた桜花と、その傍らに立つ双雅の姿。

「……ああ、もう」

あまりにも多くの事が起こりすぎて、混乱している。

涼二と再会できた喜びもあるし、倒さなければならぬ能力者である《フローズン・ワイルド・ニール悪名高き狼》の事もある。

さらにはこの巨大な蛇の刻印獣ルンクローチャー、そして強大な治癒能力者の少女。何から処理していいのか分からぬまま、緋織は深々と嘆息していた。けれど、とりあえず

(……あの三人が、纏まっているんだったら)

涼二と双雅と桜花、その三人が幼馴染である事は、緋織は知る由もない。

二人の方へと近寄って言った涼二。そちらへと視線を向けている二人と、急速にその巨体を縮め、普通の蛇。それでも十分に大きいが、戻った夜月は、彼を歓迎するように迎えていた。

嘆息と共に、何事かを話している三人。それに僅かながらに羨望を感じながら、緋織は彼等の方へと歩み寄ってゆく。

と　ふと、緋織は視界の端に映ったものに視線を向けた。

それは、先ほどの正仁の事を癒した雨音の姿。彼女は黄金の狼を伴

つて、頭部を失い地面に倒れる二ーズホッグの方へと近寄っていたのだ。

まさか癒すつもりか　　などと考え、苦笑する。

生命活動の停止は確認したのだ。確実に絶命しているものを生き返す事はできないし、そんな事をするメリットもない。

心配はいらないだろうと判断し、視線を戻して

「逃げてくださいッ！」

絶叫が、響いた。

咄嗟に、全ての視線がその方向　　雨音の方へと向けられる。

彼女は狼の背に乗せられ回避しようとしている最中、周囲へと向けて大声で話しかけてきていたのだ。

「これは生き物じゃないんです！」

その言葉は、しかして、逆効果でもあった。

誰もがその言葉の意味を凶りかね、硬直してしまったのだ。

そしてそれは、最後の逃げる為のチャンスを潰してしまった。首を失った龍は爆発するようにその場から身を起こし

□

ッ！！』

吹き荒れた爆風によって、周囲の人々は逃れる間もなく吹き飛ばされていたのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「これが貴方の望みだと言っているのですか」  
「然り。育て上げてきた甲斐があったというものだよ、  
女<sup>ア</sup>」  
《予言の巫<sup>ヴォルウ</sup>》

対峙する二つの影。

一つはスーツに身を包んだ男、そしてもう一つは白いローブに身を

包んだ人物。

全身をすっぽりと覆うその姿は、見た目からでは女性と男性の区別をつける事すら出来ない。

辛うじて、鈴を鳴らすようなその声で女性であると知る事は出来ていたが。

ユグドラシルの最上階、大神槍悟が使っている執務室。  
大きくガラス張りになったそこは、曇り空を映している。

その下で、その手に折れた刀を携えながら、《ヴォルヴァ予言の巫女》  
かすみのみやせいな霞之宮星菜は声を上げる。

「……貴方はそれほどまでに、この世界が憎いと？」

「ああ、憎いよ。途方もなく、この在り方を認める事は出来ない。

故に」

その先を、己の渴望を語る事無く、男 路野沢は口を閉じる。

彼の様子に眉根を寄せつつ、星菜は小さく息を吐き、その折れた刀を構えた。

「……それが貴方の意思、この世界の行く末だと言うのなら」

その刀身に刻まれているのは、無数のルーン。

そしてそれを構える彼女の手には、無数の傷痕のようなものが刻まれている。

そう いくつもの、いくつもの、傷痕のようなルーンが。

「私は、あの方に選ばれた者として、一度彼の地に到達した者として、世界の意思に抗いましょう」  
「ああ、実に素晴らしい答えだよ、《予言の巫女》<sup>ヴォルツァ</sup>。実に度し難い。故に……」

路野沢は嗤う。

その口元に浮かぶ軽薄な笑みは、何処までも存在感が無く、まるで仮面のように歪んだもの。  
そんな路野沢の表情を不快感と共に受け止めながら、星菜は凜とした声を上げた。

「私は霞之宮星菜です。もう、貴方の操り人形でいるつもりはありません」

「おや……今まで無気力に従って来た者の言葉とは思えないのだがね」

「ええ、私は今まで貴方に従ってきた。最早届かぬと知ってしまっただから……あの方の祝福すら奪われてしまったのだから」

けれど、と星菜は呟く。

僅かに顔を上げる事で、そのロープの下の顔が僅かながらに明らかになる。

その顔にもやはり傷は刻まれ、それぞれが意味を成す形となっているのが分かる。

それは、この世の常識に当て嵌めればありえざるものだ。

「それでも、この剣を持つ者として、最期の責任を果たしたい  
結局は自己満足ですよ。私は私の剣を取り戻したい、誰よりも高  
く上り詰めたい。それが叶わないから……せめて一矢報いたい。他  
の人間は関係無い、ただこの一撃にのみ私の価値はある」

僅かながらに皮肉気な笑みを浮かべ、星菜はそう告げる。

折れた切っ先を突きつけるようにしながら、彼女はただ全てを燃や  
すかのように残る力を振り絞る。

その様を見つめ　　路野沢は、ただ楽しそうに笑い声を上げた。

「ふ、はははは……！　流石だ、忌まわしき天主に選ばれただけの  
事はある。その思想、己の為に生きる在り方　　やはり君は、超  
越せし者の器であったと言う訳だ」

それはこの世ならざる理。

全てを知るからこそ、二人の解脱者は必要以上の言葉を交わさない。  
大神槍悟ですら知らぬ、この世界の真実を。

「始まりの刃、全ての力が刻まれていたその根源……砕け散った君  
の刀は、僕の手で再生させよう。君もまた、我がヴァルハラで眠る  
がいい」

世界が、震える。

全てが塗り替えられてゆく感覚に、星菜は恍惚に満ちた戦慄を感じ  
ていた。



相手は遙か格上の存在。そして、それを理解出来ている自分の力を、肌で感じる事が出来たから。自らが積み重ねてきたその力もまた、決して無駄なものではなかったと分かったから。

「兄弟は兄弟に向かって争い、互いに殺し合う」

それは、世界に対する恨み言。

路野沢の口からこぼれ出たのは、何処までも深く醜い怨嗟だった。

「姉妹の子供たちは、親族関係を汚す」

それ故に、その恨みは世界を汚す力となる。

星菜は、ただその言葉をじっと聞いていた。

その力は圧倒的、そしてその力が使われれば、己に勝ちの目など一つとして存在しない。

「世界は恐慌に包まれ、姦淫は世を覆うだろう」

けれど、それは己の全てを曝け出す事に他ならない。

それは即ち、彼という存在の全てにダメージを与えられるのが、その刹那しか存在しないと言う事だ。

勝てはしない、必ず敗れるだろう。けれど、せめて一太刀　　そう決意し、星菜は枯渴しかかった己のプラナーを練り上げる。

その身に刻まれたルーンは、本来その身にあらざるもの。  
必要以上に刻まれたルーンは、例え一つだけであったとしても余分  
な魂の流出を招き、その命を削ってゆく。  
最早、後は無いのだ。

「 斧の時代、剣の時代。楯は斬り裂かれ地に墜ちる」

路野沢の足元より、炎が溢れる。  
しかしそれは何かを焼く事はなく 　ただ、周囲の全てを塗り替  
えてゆく。  
燃え堕ちる宮殿を、見上げるようにしながら。

「 風の時代、狼の時代。神々の黄昏は、今ここに始まるのだ」

星葉は、全ての魂を刃へと 　かつて、全ての始祖ルーンが刻  
まれていた神器へと注ぎ込む。  
鼻は何も感じず、手は刃を持っている実感すらなく、耳に入ってくる  
音も消える。  
その視界も徐々に薄暗く染まってゆく中 　彼女は、僅かながら  
に己を滅ぼす力の名を聞いた。

「 　　：燃え堕ちよ神々の栄華」  
　　ヘルメス・ラゲナロク

それは、炎に燃える楽園。

侵略する炎によって焼かれた神々の栄華。

形成された炎の奥に見えるのは、その身を焼かれながらも武器を振るう英雄達の断末魔。  
アインヘリアル

己もあの中の一人に加えられてしまうのだと知りながら  
星菜  
は、最期に小さく笑みを浮かべていた。

「予言しましょう、路野沢　　いいえ、ロキ」

清浄なる白色の輝きを纏う刀は、彼女の命全てを燃やしたものの。  
その一点に限り、彼女の輝きは、決してこの絶対なる世界に劣るもの  
ではなかった。  
それ故に、路野沢は彼女を祝福する。

「貴方は、あの子達を読み違える　　必ず、です」

そして

「さらばだ、英雄殿」

かつて日本に落ちてきた隕石の中身をたった一人で迎撃し尽くした英雄、霞之宮星菜は　　己の魂全てを焼き尽くし、絶命した。



## 05・1:プロローグ(前書き)

最近マジで忙しいので、二日に一回更新で行きます。

「ぐ、う……」

鈍い痛みが身体を支配する感覚に、涼二は思わず呻き声を上げながら意識を取り戻した。

体は鉛のように重く、視界はひどく霞んでいる。己の身体の鈍りに対して内心舌打ちしながらも、涼二は何とかその手を地面へと付いていた。

伝わる感触は、少し湿った土のもの。

「ッ……吹き飛ば、されたか」

気を失っていたのはどれほどの時間だったのか　涼二は無理矢理に身体を起こし、霞む視界を巡らせて周囲の状況を確認する。

先ほどまで戦闘をしていたのだ、悠長に気を失っている暇など無い。  
が　その視界に、彼の黒龍の巨体が映る事はなかった。

「何だと……？」

首を失っていたはずのニーズホッグが起き上がった場所は、大きくクレーターのようになっている。

その周囲は紅に染まり、近くにいた人間達が一撃で粉碎された事は容易に想像できた。

ある程度距離があった者、防御に成功した者は、今まさに涼二のように起き上がって周囲の状況を確認している。

「どういう事だ？　あいつは　」

「大丈夫か、涼二」

「っ！　ガルム！」

掛けられた越えに涼二が振り返れば、そこには金髪の偉丈夫が上半身裸で立っていた。

格好に関してはいつもの事なので気にせず、涼二は再び周囲へと視線を走らせる。

ガルムの傍に、あまね雨音の姿が無かったからだ。

「雨音はどうした？　無事なのか？」

「うむ、彼女に怪我は無い。近かったものの、一番最初に反応出来たのは我々だった。私が咄嗟に離脱しつつ庇い、雨音君も私の傷を

癒してくれた……問題はあるまいよ」

「……そうか」

「それに安心するといい、お前の友人達も無事だよ」

そういつて、ガルムはある方向を指し示す。

涼二がそちらへと視線を向ければ、そこには地面に片膝を付く双雅そうがと、そんな彼に手を当てる雨音の姿を確認する事ができた。

傍らに桜花おうかも倒れているものの、どうやら怪我は一つとしてないようであった。

更に、涼二は周囲が明るくなっているのに気付き、視線を再び移動させる。

大きな被害が出てしまった、その中心。全てに行き届くようにと光の翼を広げた美汐みしおが、緋織ひおりに肩を貸して立ち上がらせている所であった。

彼女が展開している《光輝ヴォルスング・サガなる英雄譚》は、雨音の力を強化する為のもの。

既にプラーナも限界近い筈であると言いつのに、律儀なものだと、涼二は苦笑しつつ、とりあえずの危機を脱した事に安堵を覚えていた。

だが、完全に気を抜く事もできない。小さく息を吐き、涼二は再びガルムの方へと視線を向けた。

「教えてくれ、ガルム。一対何が起こったんだ？」

「ああ。と言っても、私も直接見た訳ではないのだがな」

小さく肩を竦め、ガルムは息を吐き出す。



そんな彼の様子に首を傾げながらも、涼二は彼に続きを促した。  
嘆息しつつ、ガルムは続ける。

「私は雨音君をニーズホッグの攻撃から庇った為に、一時的に気を失っていた。知っているのは、雨音君から伝えられた話だけだ」

「……………ああ」

「まず、あの後だが……………ニーズホッグは、すぐさま頭部を再生させたそうだ」

その言葉に、涼二は顔を顰める。

あの時、ニーズホッグは確かに緋織の攻撃で致命傷を受けていたはずだった。

いかなる方法でも蘇生できない状況であった筈なのに、何故復活する事が出来たのか。

ガルムに対し視線で問いかければ、彼は小さく肩を竦めながら声をあげた。

「雨音君の言葉を聞いただけで、実際に確認できた訳ではない。だが……………彼女曰く、ニーズホッグにはプラーナの循環路と言うものが存在していなかったそうだ」

「何……………!?!」

人間に限らず、生物には必ずプラーナの循環路が存在している。それは、このように生きる生物にとって当たり前の事であった。

プラーナが巡らなければ、体のその部分は動かなくなってしまふ。プラーナの循環路が存在しなければ、その生物は動けないはずなの

だ。

「……『生き物じゃない』ってのは、そういう意味か」

「ああ、信じがたい事ではあるがな」

「けど、そうだって言うなら」

「ニーズホッグとは一体何なのか、だろう？」

ガルムの言葉に、涼二は小さく頷く。

信じがたい力を持っていたとはいえ、ニーズホッグは確かに生物に見えていたのだ。

意志を持ち、怒り狂い、その本能を以って涼二たちに襲い掛かってきていた。

あの存在が生物ではないのならば、一体何だと言うのだろうか。

どうにした所で、存在しうる可能性など一つしか存在しない。

「……何らかの能力によつて、生み出されていた？」

「可能性としてはそれしか存在せんだろうな。納得できる訳では無いが、それ以外に考えられん」

何らかの  
可能性があるとすれば、オセル 〇  
能力によつて生  
み出されていた人形。

その始祖ルーンと思われる力が見えていたのだから、二人が口にした仮説は決して頭ごなしに否定できるものではない。

しかし、その巨体から放たれていたプラーナは確実に本物で、しかもニーズホッグは十分に強力な能力を使っていたのだ。

そんなモノは、美汐と比べたとしてもなお特異すぎる能力である。

軽く頭を抱え、涼二は深々と嘆息を零しながら声を上げた。

「ニーズホッグは、何者かによって作り出された人形。それだけでもかなり信じ難い事ではあるが、とりあえずそれは事実であると仮定して話を進める。

それならば、そのニーズホッグの主人とやらの目的は一体何なんだ？」

「これもまた仮説でしか無いが、ニーズホッグの持っていた性質を考えれば予想は出来るだろう、涼二」

「……ああ」

半ばうんざりとした様子で、涼二は呻き声にも似た肯定の声を上げる。

これまでに分かっているニーズホッグの性質を考えれば、それも十分に予測できるものであった。

しかしながらそれは、理解できない上にどう考えても厄介事にしかならない仮説

「……ニーズホッグを使って人間を喰らい、大量のプラナーナを集める事。それを一体何に使うのかは分からないが……何にしたって、厄介事には変わりないだろ」

「全くだ。ムスペルヘイムのほぼ全力を投じても勝てぬほどの能力者、と考える事も出来るしな」

「味方にできりゃ心強いだろうが……そんな野郎とはつるみたくないな」

そんな涼二の言葉に、ガルムは若干の笑みを口元に浮かべる。彼のその表情に気付き、眉根を寄せると、涼二は肩を竦めながら半ば不機嫌な様子で鼻を鳴らしてから声を上げた。

「で、だ。そんなプラーナ蒐集機みたいなバケモノが、どうしてプラーナの宝庫である神話級能力者達の前から姿を消したんだ？」

今現在、この場には全体の確率から見ればありえないほどの数の神話級能力者が集まっている。

それは、ニーズホッグ およびその主 にとっては何物にも代えがたいほどの獲物だった筈だ。

それが何故、今このようにほぼ無傷でいる事が出来ているのか。涼二のそんな疑問を受け、ガルムは深く息を吐きつつその視線をある方向へと向けた。

そちらにあるのは、ニーズホッグがいたと思われるクレーター。爆心地のようになっているその場所には、一本の槍が突き立っていた。

「あ……ッ！！」

声にならぬ激情がこみ上げる。

それを何とか飲み下しつつも、荒れ狂う怒りを押さえきれず歯を食いしばりながら、涼二はその視線を槍から外した。

その正体が何であるかは、考えるまでも無い。

見覚えなど存在しないはずのそれ。しかし、そこにこびり付いたプラーナの残滓は見間違える筈も無い。

「《必滅グングニルの槍》、大神おおがみ槍悟そし……ッ！」

「とりあえず、目の前に相手はいない。今は落ち着いておけ、涼二」  
「ッ……あ、ああ」

深呼吸をして意識を鎮め、涼二はゆっくりと落ち着きを取り戻す。それでも槍が視界に入らぬように視線を逸らしながら、涼二はガラムへと問いかける。

「奴が、ここに来ているのか？」

「いや、信じ難い事だが……ここには来ていない」

「なら、何故あんなものがここにある!？」

「落ち着けとっているだろう、涼二。そもそも、いたとしても何の準備もなく唐突に戦って勝てる相手か？」

「ッ……!」

抑えきれぬ怒りを飲み下しつつ、涼二は深く息を吐く。

ガラムの口にした言葉は、何処までも正論だったからだ。

彼の槍、《必滅グングニルの槍》の主たる、大神槍悟。

彼は、涼二たちをして、決して軽視出来るような存在ではなかった。深く嘆息しつつ、涼二は小さく被り振って、ガラムに対して問いかける。

「改めて聞く。どうして、奴の槍がここにある？」

「……雨音君に聞いただけであり、私は直接見た訳ではないが……」

彼方から飛んできた、だそうだ」

「……は？」

その言葉に、涼二は思わず素っ頓狂な声を上げる。

そんな彼の反応を予測していたのか、ガルムは若干の苦笑を浮かべると、小さく肩をすくめながら返答した。

半ば、呆れにも似た感情をその内に込めながら。

「まず、ニーズホッグは起き上がると共にHの力を発動、周囲の人間を悉く吹き飛ばした」

「ああ、そこまでは俺も覚えてる。問題はその後だ」

ニーズホッグの 或いはその主の 目的がブライナの蒐集であれば、周囲に倒れた能力者達を喰らわない理由は無い。

例え気を失っていた時間が短かったとしても、それは十分に致命的な隙であった筈なのだ。

しかし現実、涼二を始めとして多くの能力者達が生き残っている。何かが起こったと考えるのが自然であろう。

涼二の言葉に対し、ガルムは小さく頷いてから声を上げた。

「お前の考えている通り、ニーズホッグはその後能力者達を喰らおうとした。まともに動く事が出来たのは、彼の大神美汐のみ。彼女はニーズホッグの前に立ちはだかったものの、彼女一人に抑えられるような相手ではない」

「ああ、そうだろうな」

だが、結末は違った。

涼二の意識の中にこびりついているのは、先ほど見た槍に染み付く  
プラーナの感覚。

たった一つだけの仮説ではあるが 涼二は、それを半ば確信し  
ていた。

「その時 雨音君は、黄金の流星を見たと言った」

「流星……それが」

「そう、あの槍だ。ユグドラシル総帥、大神槍悟が能力、《必滅<sup>ゲンゲ</sup>の  
槍<sup>ニル</sup>》。何処からか飛来したあの一撃は、狙い違わずニーズホッグに  
命中した」

信じがたい話であると同時に、涼二はその言葉に半ば納得を覚え  
ていた。

いかなる能力を用いて放たれているかすら定かでは無い、大神槍悟  
の能力。

その力は、絶対に外れる事の無い槍を投げ放つと言うものだった。  
音速をはるかに超越した速度で宙を駆けるその一撃は、突き刺さる  
と同時に敵の内部で込められたプラーナを解放、強烈な破壊力を吐  
き出す事となる。

その一撃を受けて、生存できる人間は存在しないとすら言われるほ  
どのものなのだ。

「……それで、ニーズホッグはどうなったんだ？」

トーンを落とした声で、涼二はそう問いかける。

相手が人間ならば、砕け散ったと考えても全く疑問では無いだろう。しかしながら、今回その槍の標的となったのは人知を超えた怪物だったのだ。

果たして、どちらの力に軍配が上がるのか　それは、涼二にすら想像出来ない事だった。

そしてそんな疑問に対し、ガルムは目を閉じながら深く頷く。

「　その一撃に、耐え切った」

「……ッ！」

涼二は、思わず息を飲む。

それは驚愕であり、同時に納得でもあった。

かつて大神槍悟とニーズホッグは、ほぼ同等の戦いを繰り広げたのだから。

故に、その一撃に耐えられたとしても不思議ではないのだ。

「ニーズホッグは《<sup>ケンゲニル</sup>必滅の槍》を受け、ダメージを負いはしたものの、すぐさま起き上がって見せた。

だが、流石に狙撃されている状況で悠長に食事をする事は出来なかったのだろう。ニーズホッグは空へと昇り、あちらの方角へと飛び去っていった」

ガルムの示した方向は、おおよそ南東と言った所。

そちらの方向は、正しく密都がある方角であった。



大神槍悟が一体何処からその力を放っていたのかは定かでは無い

(だが、あの男の元に向かったのは間違いないはずだ。だとしたら……これは、好機になり得る)

いかな大神槍悟とはいえ、ニーズホッグが相手では苦戦を免れないだろう。

かといって、安易な敗北をするとも思えない。

ニーズホッグを放置する事も出来ないが、大神槍悟を倒す事を目的とする涼二にとって、彼の男の疲弊は願っても無い好機であった。故に、ここで手を拱いている事はできない。

「ッ……」

鈍い痛みを返す身体に、僅かな呻き声を上げながらも、涼二は立ち上がる。

これ以上無いチャンスが迫ってきているのだ。今ここで、ゆっくりと休んでいる暇は無い。

ガルムもそんな涼二の思いを理解している為、その無茶を止めるような真似はしなかった。

「……ガルム、行くぞ」

「他の者は連れて行かんのか？」

「俺の戦いだ、勝手な都合で巻き込む訳にもいかんだろ」

「勝てるのか？」

「目はあるさ。それに、この機を逃す訳には行かない」

「待って、涼二君」

ふと、声がかかる。

凜とした、強い意思の籠った声。

涼二にとっては若干懐かしく、そして強い聞き覚えのあるそれ。

振り返れば　そこには、黄金を纏う少女と、そんな彼女に肩を貸される真紅の少女の姿があった。

「……美汐、緋織」

「うん、久しぶりだね、涼二君。元気そう良かった」

「はあ……そっちも、相変わらずみたいだな」

物怖じせずに話しかけてくる彼女に、涼二は小さく嘆息を漏らす。あまり踏み込まれる事を好まない涼二としては、それよりも言いあぐねている緋織の方が好ましい態度ではあった。

しかしながら、この状態から逃れる事は出来ないと言う事も、涼二は深く理解している。

疲れたように肩を竦め　彼は、どこか諦観の混じった苦笑を浮かべていた。

「さて　逃す気は無いんだろ？」

「うん、しっかりと話して貰うよ？」

「やれやれ……本当に相変わらずか」

しかし、そこにはどこか懐古の念も混じっており。  
そんな歪んだ心根を抱えたまま、涼二は胸中で、ゆっくりと己の取るべき行動を練っていたのだった

「それで、だ。お前達は、一体どうするつもりなんだ？」

傍まで寄ってきた二人の少女　美汐と緋織に対し、涼二は小さな苦笑と共に肩を竦め、声を上げた。

彼としても対応は考えあぐねている所。彼女達は、涼二の中でも少々特殊な部類に分類される人物だった。

上司、部下は関係なく、彼女達はかつての友人。

状況によっては敵である事に変わりはなく、そしてそうなった時には涼二としても手を抜くつもりなど無い。

しかしながら、現在は少々状況が微妙な所だった。

「……私達は、ニーズホッグを追います」

「その状態ですか？　総力を当てる尚討ち取る事は出来ず、満身創痍と言った状況。そして、奴と戦うにはプラーナも足りていないだろう。今の状態では、勝ち目があるとは到底思えないが？」

「それでも、だよ。涼二君」

涼二が口にしたのは純然たる事実。

しかしながら、それを受けても尚、英雄たる才覚を持つ少女は決して退く事はなかった。

その瞳に強い意志を込め、美汐は涼二へと語り掛ける。

「私達が二ーズホッグを倒しきれなかったから、命を落としてしまった人がいる。あの人達を死なせてしまったのは、私達の罪だよ。私達は、彼らの期待に応える事が出来なかった」

「だから今度こそ、つてか？」

「彼らは信じてくれたから。だから、その心に応えたい」

理想論だと断ずる事も出来るだろう。普通の人間であれば、口にするだけで実行する事など出来はしない。

けれど、涼二は、彼女が　　大神美汐が、それを違える事無く実行する人間であると知っていた。

故に、涼二は小さく嘆息する。彼の目的の一つであり、シアから受けた依頼　　美汐の護衛は、果たさなくてはならない課題であったからだ。

「……取引だ、美汐」

「何かな、涼二君？」

「俺達の事を……ここにいる面子で言うならば、俺を初めとして、ここにいる男やあその二人、そしてお前達を癒した女。俺達の事を見逃せ」

「涼二……ッ!?」

どこか咎めるように、そして信じられないとでも言うかのように、  
緋織が声を上げる。

彼女は、《フローズヴァイトニル悪名高き狼》

双雅と涼二が、協力関係にあると信

じたくなかったのだ。

同時に現れたのは偶然だと、あくまで無関係だと、そう思っていた  
かったのだろう。

それを他ならぬ涼二の口から否定され、緋織はその理由を問うかの  
ような視線を彼へと向けていた。

しかしそれに対して小さく苦笑すると、涼二は緋織から視線を外し  
て美汐へと向けた。

「俺達の事を見逃してくれるのならば、この後のニーズホッグとの  
戦いに協力しよう。どうせ、移動手段は用意してあるんだろう?」

「あはは、流石に分かってたね。うん、それじゃあその条件でお願  
いするね、涼二君。涼二君もそのお友達もすつごく頼りになるし、  
期待してる」

「美汐様!」

その言葉を聞きとがめ、緋織は大きく声を上げる。

しかし、美汐はそんな彼女の言葉に対し、普段とは違う凜とした表  
情を浮かべたまま首を横に振った。

その佇まいは、護られる姫のものではなく、兵を率い前に立つ王の  
もの。

故に彼女は、己の小さな願望よりも、多くの人を救う為の選択をす  
る。

「緋織ちゃん。私達のすべき事は、二ーズホッグを倒す事だよ。確かに、向こうにはお父様もお兄様もいる。でも、だからと言ってそれは絶対じゃない、だから私達は最善を期す必要があるんだよ」

「それは、そうですね……」

「別に、涼二君と話しちゃダメな訳じゃないんだよ。聞きたい事があつたら聞けばいい。だけど、今は急がないと」

美汐が視線を向ける先は遙か東、密都の方角。

そこに向かう事は、今この場にいる者達にとつての急務であつた。二ーズホッグは未だ健在、そして、その向かう先には護るべき者たちがいる。

ならば、美汐がそれを見過ごす道理は無い。

そのあり方を、彼女の道を見届け　　涼二は、小さく笑みを浮かべた。

「移動手段は《爪ナゲルファルの戦船》の力か？　どの道、あまりゆっくりしている暇は無いだろう？」

「うん、そうだね。緋織ちゃん、全体の状況確認と指示をお願い」  
「……はあ」

深く、本当に深く、緋織は息を吐く。

そして目を瞑り　　次に顔を上げた時そこにあつたのは、いつも通りの凜とした鋭い視線だつた。

ムスペルヘイムの隊長、磨戸緋織に相応しいその姿に、涼二と美汐は小さく笑みを浮かべる。

その姿こそが彼女に相応しいと、二人は誰よりも理解していたから。

「了解しました。隊員の状況……戦闘継続が可能かどうか、直ちに調べさせます」

「プラーナの補給はどうなってる？」

「……流石に、この状況を何とかできるほどの量は揃えてません」

プラーナを回復する事が可能な霊石はかなり貴重な道具である。いかなユグドラシルとはいえ、フェアブラ神話級を回復させ切るほどの量を用意できなかったのだ。

それは仕方ない、と涼二は小さく肩を竦め、周囲へと視線を巡らせる。

基本的に、周囲に散らばる隊員達は、補助系の者達以外はほとんど力を使い果たしている状況。

そして、先ほどニーズホッグと戦っていたフェアブラ神話級能力者達は、加速能力を持つ新森とシャル、そして防御の時のみ力を使っていたエイシール以外は、ほぼ力を使い果たしている状況だ。

正仁はそれなりにプラーナを残してはいるが、怪我の失血から意識が朦朧としている状態である。

(……直接戦闘は厳しいだろうな、こりゃ)

基本的に、上位の能力者であればあるほど、燃費は悪くなってしまうものである。

このような大規模な戦闘があった場合、フェアブラ神話級は継続して戦うのが難しくなってしまうのだ。



無論、節約を意識して戦えばその限りではないが。とはいえ、今回は節約など到底不可能な相手。これ以上無理に戦闘すれば、無駄に命を散らす事に繋がるだろう。

(それに )

大神槍悟には、消耗して貰わねばならないのだ。

万全の状態の彼を倒せるとは、涼二も思っていない。涼二にとっての目的は、あくまでも仇敵である男のみ。ニーズホツグなど、気にするべき相手ではないのだ。

隊員に指示を出すため踵を返した緋織の背中を見送り、涼二もまた仲間達の方へと歩き始める。

「ありがとう、涼二君」

「……礼を言われる筋合いはないと思うがな、美汐」

背中にかけられた言葉に、涼二は小さく肩を竦めながら振り返った。

変わらぬ様子で立っているのは、淡い笑みを浮かべた美汐。彼女の性格を把握しているが故に、言っても無駄であるという事を理解しつつも、涼二は小さく嘆息してから声を上げる。

「俺はあくまで、あのバカを……幼馴染を回収しに来たに過ぎん。全部俺の都合だ。だから、お前が気にする事じゃない」

「それでも、助けて貰ったんだから、お礼は言わないと」  
「……一々律儀な奴だな、お前は」

再び、嘆息。

やはり彼女には、その手の言葉は通じないと　相変わらずである事を呆れつつも、どこか懐かしさを覚え、涼二は苦笑を零していた。

そしてそれに合わせるかのように、美汐も笑う。

「……ねえ、涼二君」  
「何だ？」

一しきり笑った後、そう切り出した美汐。

そんな彼女の言おうとしている言葉を予測しつつも、涼二はそう問い返していた。

彼女の望みは、涼二も理解している。故に、彼女が口に出す言葉は

「私を……手伝ってくれないかな？」  
「……今回は協力すると、そう言ったが？」  
「もう。分かってるんでしょ、涼二君？」  
「……はあ」

三度目の嘆息には、どこか呆れのようなものが混じっていた。そこに僅かな苦笑を交え、涼二は一度目を閉じる。

涼二とて、美汐の言わんとしている部分は言われずとも把握している。

彼女の目指す頂点の在り方、彼女の目指す霸道は、共存を目的としたものだ。

故に彼女は、多くの手助けを必要としている。手を取り合って多くを救う道を選ぶ在り方こそ、大神美汐の性質なのだ。

故に　　涼二は、それに賛同する事は出来ない。

「私は……私だけじゃ、戦えない。皆の力が、涼二君の力が必要なの。だから」

「無理だよ、美汐。俺には無理だ。それに、お前は俺がいなくても戦えるだろう」

「そんな事っ」

「あるよ、もう俺は必要ない。お前にはもう十分、お前を慕ってくれる仲間がいるだろう」

言って、涼二は周囲を見渡す。

ここにいるムスペルヘイムの隊員達　　彼らもまた、美汐の為に戦う事が出来る人間達だろう。

彼女を慕い、彼女を護り、彼女を助ける為に戦う事が出来る者達だ。彼らのほかに、美汐を助けてくれる者などいくらでもいる。ミールも、フレキも　　皆、彼女の目指す理想の為に歩んでくれるだろう。

故に自分には必要ないと、涼二はそう口にする。

「大丈夫だよ、美汐。お前なら、きっとこの国を引っ張って行ける」

「なら……涼二君は、それを見届けてくれるんだよね？」  
「……ああ、当然だろ」

僅かながらの逡巡は、気づかれる事なく空気に溶ける。  
それが尾を引く前に僅かな苦笑で隠し、涼二は冗談交じりの声を上げた。

「しかし、今まで何をしてたのかを聞いてくるもんだと思ってたんだがな」

「あはは、それは緋織ちゃんが聞くべき事だと思うからね。だから、私は聞かないでおくよ」

「そうかい……ああ、そうだな」

踵を返し、涼二はヒラヒラと手を振ってみせる。

そして彼は、そのまま仲間達の方へと足を進めていったのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

風が流れる。

水没した高層ビルの上、遙か彼方を見渡せるその場所で座禅を組みながら、《必滅ゲングニルの槍》こと大神槍悟は静かに瞑想を続けていた。

先ほど、一度だけその力、必中にして必殺の一撃を放った後、彼は再び沈黙を保ち続けている。

そんな父親の背中を無言で見つめながら、大神徹つとむは所在無さげに視線を巡らせていた。

と　　そこに、階段を上がってくるような音が響く。

「ん……？」

誰か呼んでいたのか　　気にはなつたものの、瞑想している父親に問いかける事は憚られ、徹は訝しげな表情で屋上への入り口の方へと視線を向けた。

そちらからは確かに人の気配と、そして強力なプラーナの気配が近付いてきている。

感じる力の波動は、かなり上位の能力者である事を告げていた。

そして　　その扉が開く。

「やれやれ……私は科学者であって戦闘職では無いのですがね……  
こんな所まで昇らせないで頂きたい」

「《豊穰の飛剣》……！？ アンタまで来たのか？」

「ええ、総帥に呼ばれたもので。まあ、数合わせですよ」

現れたのは薄茶色の短い髪の男性。

彫りの深い精悍な顔には眼鏡がかけられており、どこか落ち着いた  
雰囲気をかもし出す人物だ。

しかしそれも、纏う白衣によって若干ちぐはぐな印象を受けてしま  
う。

とみねはるひでみゆい 豊崎翔平。《豊穰の飛剣》のコードネームを持つ、ドヴェルクの主  
任となつている男だ。

若干神経質そうな印象を受ける豊崎は、小さく嘆息を零しながら瞑  
想する槍悟へと声をかける。

「総帥、私はあくまでも科学者です。このような場所においても役に  
は立てないと思えますが？」

「謙遜するな、《豊穰の飛剣》。仮にも始祖ルーン能力者だ  
ろう」

「ここに居るのは全員がそうですがね……そもそも、データ上私の  
能力ではニースホッグにダメージを与える事は不可能な筈ですが」

「それで己がいる意味が無いというのなら、私は随分と貴公を過  
大評価していた事になるな」

「……やれやれ」

槍悟の物言いに、豊崎は再び深々と嘆息する。

彼には何を言っても無駄だと悟ったのだ。  
そんな二人の姿を交互に見比べ、徹はぼつりと声を上げる。

「始祖ルーン能力者三人か……確かに、現状だったら最大の戦力かもしれない。けどよ、親父。本当に大丈夫なのか？」

「ふむ……不安か、徹」

と　　そこで、今まで微動だにしなかった槍悟がようやく動きを見せた。

彼は肩越しに振り返り、徹の方へとその視線を向ける。

既に壮年と言うべき年齢ではあるが、その眼光の鋭さと、纏うプラ  
ーナの密度はいかなる者にも引けを取らない。

見知っているとはいえ強大な力の波動に、徹は思わず息を飲みながらも続けた。

「そりゃ、そうだろ。俺だって、普通の相手だったらここここまで言わないさ。けど、相手はこれでもかって言うほどの神話級<sup>フェアブラ</sup>能力者を退けた、文句なしのバケモノだ。それに、始祖ルーン能力者だって混じってたんだぞ？」

これで慎重になるなつてのが無理な話だ」

それは紛れもなく事実であり、そして実際には、徹が思う以上の能力者が集って、それでも勝てなかった相手なのだ。

槍悟による助けが無ければ、ムスベルヘイムの者達も、そして美汐も、決して命はなかっただろう。

それは、どれほど分の悪い戦いであろうか。

そんな徹の言葉を受け

槍悟は、口元に僅かな笑みを浮かべる。

「案ずるな、徹」

「……っ」

低く力強い声。それには、その言葉通りの力が込められていた。何事にも揺るがぬ巖のように、ただ悠然とそこにある。

ただそれだけであるというのに、その存在感は何処までも強大で、背後にある者達に安心感を与えるものだった。

それが大神槍悟の霸道　王者としての在り方。

それを見つけてきた徹だからこそ、決して揺るがぬ父の在り方に、ある種の安堵を覚える。

「成程、相手は確かに強大だ。何よりも強く、そして何よりも厄介な力を持っているだろう。」

だが、それは敗北に直結する理由にはなりえない　少なくとも、私にとっては」

その自信は、確かな実力に裏打ちされた事実。

彼が誰よりも強力な能力者である事は、紛れもなく本当の事だった。故にこそ、大神槍悟は揺るがない。

己が敗北する宿命に無い事を、誰よりも良く知っているのだから。

「ここは私の死すべき場所ではない……私は負けんよ、そしてお前達もだ。決して敗北は無い、安心するといい」



「やれやれ。一体何処からそれほど自信を持つてくるのやら、私としては疑問なのですがね」

「無論、私の《宿命》からだ」

どこか笑うように呟かれた言葉　その声色に、徹は思わず目を見開いていた。

真面目で実直、悪く言えば融通の聞かない父が、僅かながらに笑みを見せた事に驚いていたのだ。

しかしそんな笑みも僅かな時間で姿を消し、槍悟はゆっくりとその場に立ち上がった。

大きく伸び上がってゆくその背は、決して曲がる事無く真っ直ぐに天を目指している。

そしてその力強い視線は、射抜くように正面へと向けられていた。

「……来たか、宿敵よ」

僅かな声、力強い視線。

それによって、徹は己の父から視線を外し、父の視線の彼方へとその目を向けていた。

未だ見えぬその姿　しかし、既にその強大なプラーナの気配はこの場まで近付いてきていた。

強大な力と強靱な身体、全てを兼ね備えた真正の怪物、ニーズホッグ。

しかしそれを前にしながらも、《ガンゲニル必滅の槍》の鋭き意志には一部の曇りすら存在していなかった。

「では、開幕だ友よ。これが貴公の言う最後の戦争ならば、せめてその終わりまで楽しませて貰うとしよう」

そして　その身は、黄金のプラナーに包まれたのだった。

空を駆ける一隻の船。

木材と金属を組み合わせて作り上げられたそれは、言わずもがな能力によって作り上げられたものだ。

名を、《ナグルファル爪の戦船》。ムスベルヘイムに所属する能力者の力だ。流れてゆく下界の様子を眺めつつ、小さく笑みを浮かべながら涼しい声を上げる。

「相変わらず、大した力だな、《ナグルファル爪の戦船》」

「はっはっは！ アンタには負けるよ、大将！ それと、もう忘れちまったのかい？」

「っと、そうだったな『ナグルファル船長』」

豪快な笑い声を上げたのは、舵を取る一人の女性。

降りた<sup>ふりはた</sup>むきか<sup>むきか</sup>降旗麦香。《ナグルファル爪の戦船》の名を持つムスベルヘイムの能力者。

大きな船を作り出し、高速で空を駆ける事が出来る彼女の能力は、

大規模な運搬や移動などに重宝されていた。

それは涼二がムスペルヘイムに所属していた時代から変わらないことであり、涼二も彼女の事はよく知っている。

彼女が、能力を使っている間は『船長』と呼ばれたがっていると言う事もだ。

昔を懐かしむように、涼二は噛み締めるようにその呼び名をなぞる。

そんな涼二の様子に、麦香は口元を笑みにゆがめながら声をあげた。

「しかしまあ、久しぶりじゃないか大将。あんまり変わってないよ  
うで何よりだよ」

「さあ、どうだろうな……」

小さく苦笑し、涼二は船の縁に背を預けながら、肩を竦めつつ声を上げる。

向かう視線は、若干日に焼けた麦香の顔へ。

既に二十台も後半の年齢であった筈だが、相変わらずの健康的な若々しさである。

「それで、どうだ？ 緋織は上手い事やってるか？」

「ああ、勿論だよ。昔の初々しかったお嬢ちゃんは何処へやら……  
しっかり教育したじゃないか」

「そうか……ま、一応は安心か」

涼二は視線を僅かに傾け、周囲に指示を飛ばしている緋織へと向

ける。

涼二が路野沢からの指示で彼女の世話を引きつけた時 即ち、  
緋織がムスペルヘイムに配属された時から、涼二は彼女をこのムス  
ペルヘイムの隊長にする心算であった。

彼女がKの始祖ルーン能力者である事を知り、誰にも全力を見せる  
事が出来ない己自身よりも、彼女の方が隊長に向いていると考えて  
いたからだ。

本来ならば指揮官である隊長が前に出る事などは無いのだが、ムス  
ペルヘイムでは純粋な実力から隊長が選ばれる。

故に、その他の仕事の補佐をする為の副官が付けられるのだ。

「俺の指導も捨てたモンじゃないって所かね」

「何言つてんだい、あんなにしつかりと教育してやってたくせに。  
ムスペルヘイムを辞めて、教職にでも就いたんじゃないかと思つて  
たよ」

「教職ねえ……そんなガラじゃないと思うんだがな、俺は」

そう呟き、涼二は小さく苦笑する。

全くと言って良いほど、考えた事はなかったのだ。

姉の静菜を殺した人物を知ってから、常に頭の中に在ったのは復讐  
の事。

それ以外の自分は知らなかったし、それに己の全てを捧げるつもり  
でもあった。

故に、自分の生き方など、考えた事もなかったのだ。

「……」

「お？ 何だい大将、遠い目えなんかしてさ？」

「いや……行き着く先まで行ってしまった、そんな感じがするんだよ」

それは、本来人間が永い年月を欠けて辿り着くべき場所。

永い年月を生きた老人が、人生の最後にその生を肯定されたかのような

ある種、一つの境地。

生き急ぎ、駆け抜けてきた涼二だからこそ、僅かながらであろうともその片鱗を垣間見る事が出来たのだ。

己の辿り着くべき場所が、この船の向かう先に存在しているからこそ

その先に何も無い事に、気付いてしまう。

けれども、立ち止まる選択肢などはありませんでした。

「……大将、アンタ」

「俺はもう、戻らない。戻れない。決定的に変わってしまったんだ。もう、その選択肢は何処にも存在してないんだよ、降旗。」

だから、アンタ達は俺の事なんか気にしなくていい。緋織の事を見てやって欲しいんだ」

「どうしても、かい？」

「ああ、どうしてもだ。俺はもう二度と、ユグドラシルには……ムスペルヘイムには戻らない。美汐の配下レギオンに加わる事も、一生無いだろう。」

まあ、さっき断ったばかりだけどな。どうにした所で、俺に選べる未来は少ないんだ」

「……そうかい。全く、いい若者が何生き急いでるんだか」

やれやれと 嫌気が差したかのようになり、麦香はそう口にする。

彼女の視線は遙か先、空の彼方へと向けられていた。

その遠い視線は、どこか寂しさを覚えているかのように……引き返せない場所まで踏み込んでしまった若者を案じている。そんな彼女の様子に、涼二はただ小さく苦笑を零していた。

「生き急いでしまった結果だよ……でもまあ、最初から手遅れだった。もうずっと昔から、俺は引き返すと言う選択肢を失っていたんだ」

「へえ……また随分と、嫌な人生だねえ」

「……アンタだってまだ若いだろ。年寄りみたいな言い方するなよ」「誰が年増だつて!?!」

「言っていないだろ!?!」

互いに言つて睨み合い　そして、同時に相好を崩す。愉快だと、ただただ愉快だとそう言うかのように。事実、二人にとってはその通りであっただろう。それは、かつての二人と変わらぬやり取りだったのだから。

「ははははっ！　アンタはやっぱり変わってないよ、大将。もしも変わったつて言うんなら、それはきつと、あたしたちに出会う前からの話だ」

「そんなモンかね……」

「人間、そうそう簡単に変わったりするものじゃないつてね」

そういつて麦香は笑い、再び舵取りに集中し始める。

そんな様子を眺めながら、涼二は今告げられた言葉を一人ぼんやりと考えていた。

人間はそうそう簡単に変るものではない　　ならば、己が一番最初に抱いた願いは何だったのか、と。  
あの日、燃え尽きた街の中で光を失った自分は、一体何を願っていたのか、と。

「俺は　　」

「涼二」

と、そこに凜とした声がかかる。

船の外へと向けられていた視線を戻せば、涼二の目には緋色の少女の姿が飛び込んできた。

磨戸緋織　　涼二が、己の立ち位置を譲った少女。

彼女はその瞳に強い覚悟の光を込め、その視線で真っ直ぐと涼二の目を射抜いてきている。

その力強い佇まいに、涼二は小さく苦笑を浮かべていた。

「やれやれ、気合入ってるな……どうしたんだよ、緋織？」

「え、と……聞かせて欲しい事がある。色々……私は、知らない事が多すぎるから」

昔と変わらぬ様子で話しかけられたためか、緋織には若干の動揺が浮かぶ。

けれどそれをすぐさま消し、彼女は変わらぬ様子で声を上げた。

「涼二、貴方はどうして、ユグドラシルから抜けたの？」



「どつして、ね」

口元を僅かに苦く歪め、涼二は小さく反芻する。

涼二が彼女にそれを語らなかつた理由　それは、彼女が自身に依存している事に気付いていたからだ。

強大な能力から、幼いながらも　涼二も人の事は言えないが

最強の実働部隊に配属された緋織。

それはまだ経験の薄い少女にとって、どれほどの重圧となつただろうか。

そんな中で、年が近く親身に接してくれる者の存在とは、どれほど大きなものだっただろうか。

それを自覚していたからこそ、涼二は決して己の理由　復讐を口にする事は無かつたのだ。

告げてしまえば、彼女は必ず己に付いて来ると確信していたから。

「……やれやれ、こつなつちまうとはな」

「涼二！」

「分かつてる、分かつてるからちよつと待て」

逃げようにもここは空の上。無論、ハガラスHを使えば逃げる事は容易いが、わざわざそんな事の為に切り札を使う意義は無いし、それに逃げた所で意味は無い。

適当にはぐらかす事も不可能では無いが、涼二の中には、どこか諦めじみた感覚が芽生えていた。

もうじき戦いだから　己の仇敵と戦う場面が来るから。

だからこそ、全てを隠す事に意味はないと、そう思っているのかもしれない。そんな自身の考えを自覚し、涼二は思わず苦笑していた。

そして　　ぼつりぼつりと、涼二は若干内容をぼかしながら話し始める。

「例えば……そうだな。お前は確か、嫌いな能力者がいたな」

「え？　一体何を　　」

「そんな奴と、ずっと同じ部屋の中にいなきゃいけない。それは、どんな気分だ？」

「それは……嫌に、決まっている」

「だろっ？　つまり、そういう事だよ」

大神槍悟と　　姉を殺した者と同じ場所にいる事が、堪らなく苦痛だった。

彼の者の下で戦っていると考えただけで、吐き気がする思いだった。例え復讐を望まなかったとしても、己はユグドラシルから抜けていただろっ、と涼二は小さく苦笑する。

緋織を置いていってしまうのは、結果としては変わらなかったのかもしれないのだ。

緋織は涼二の言葉を分かりかねたように首を傾げる。

意味は分かるのだろっ。だが、緋織はユグドラシル内部での涼二の事を誰よりも知っている。

故に、涼二が言った存在が一体誰なのか、見当もつかない事が疑問だったのだ。

「それは、一体誰の……」

「言えない　　じゃ、さすがに納得しないだろっな」

そう呟き、涼二は再び苦笑する。

かつては、力で捻じ伏せた。しかし、今同じ事は出来ない。

故に、と　　涼二は、一つの言葉を切り出した。

「それじゃあ……そうだな。この戦いが終わったら、ニーズホッグを倒す事ができたら教えてやるよ」

「……本当？」

「ああ、約束する。知ってるだろ、俺は約束を破らないって」

「破らないのは、自分からした約束だけだったと思うけど。私が切り出した約束なんて、すぐに破ってた」

「そうだったか？」

おどけたように、涼二は笑う。

優しく親身で、時々意地悪な先輩の姿。それはかつて、涼二が演じ続けてきた姿だった。

しかし、決して偽りという訳では無い。涼二は確かに、緋織の事を気に入っていたのだ。

穏やかだった日々は、決して不快なものではなかったのだから。

故に　　涼二は忘れてしまっていた。

先ほど、己自身に対して感じていた違和感の正体を。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「あーまーねーちゃん」

「あ……こんにちは、桜花さん」

《ナグルファル爪の戦船》の上、ぼんやりとある方向を眺めていた雨音は、背後からかけられた声に振り返った。

そこにいたのは、漆黒の鱗に金色の瞳を持つ蛇　　ではなく、それを首に巻きつけた桜花の姿だった。

大人でも容易く絞め殺せそうな大蛇を巻き付けながらも、その表情の中には一部の恐怖心も存在していない。

そんな友への絶大なる信頼を垣間見て、雨音は小さく笑みを浮かべていた。

「どうかされましたか？ また、誰か怪我を？」

「ううん、違う違う。ってか、雨音ちゃんは働き過ぎだって。力凄  
いからって、他の人の仕事まで取っちゃダメだよ」

「他の方、ですか？」

「ムスペルヘイムにだって、治癒能力者ぐらいいるでしょ。雨音ち  
ゃんは、雨音ちゃんにしか治せないような人を助けてあげれば良い  
んじゃない？」

それは雨音を案じる言葉でありながら、同時に必要以上の事を誰  
かにする必要はないという彼女の考えでもあった。

否、彼女に限らず、それはかつての大災害を生き延びた者達に共通  
して存在する心理。

自分の事を考えなくては、他者の事ばかり気にしては生き残れ  
ない時代があったのだ。

けれどそんな言葉に対し、雨音は僅かながらに目を細め、穏やかに  
微笑しながら声を上げる。

「いいんですよ、桜花さん。私は、涼二様のためにこれをしている  
のですから」

「涼二の、為？」

「はい。それと、ガルム様にスリスさん……私を受け入れてくれた、  
家族の為に」

雨音にとっての世界は、酷く狭いもの。

幼い頃から軟禁され続け、そこから抜け出した後もあまり世間に出  
たとは言いがたい。

けれど、そんな狭い世界の中にも、雨音にとっては確かに大切であ

ると感じられる場所があった。  
暖かな陽だまりのような、彼女にとっての『家族』の居場所。

「涼二様は、私を助けてくださいました。ですから、私は少しでも涼二様の助けになりたいのです」

「……雨音ちゃん。あいつがやるうとしてる事、分かってるんだよね？」

「はい、桜花様も？」

「んー……双雅から聞いたのはついさっきだけださ、納得した感じだね」

納得した　その言葉に、雨音は思わず首を傾げる。

桜花は誰よりも昔から涼二の事を知っている。それ故に感じる事があつたのか。

そんな雨音の視線に、桜花は僅かに苦笑を零しながら声を上げた。

「まあ、あたしは昔からあいつの事を知ってて……あのままじゃいけないと思って、ちゃんと人付き合いが出来るように色々引つ張り回してただけだ。」

でも、今の状況を考えると、そんな事はやらない方が良かったのかもしれないなあ……ってさ。

きつと、涼二にとって『情』なんてのは邪魔でしかないだろうし」

「けれど、それがなければ、私は今ここにいないと思います」

「……そっか。うん、そう言ってくれると、あたしも嬉しいかな」

少々照れたように、桜花はぼりぼりと頬を掻く。

そんな彼女の様子を見つめつつ、雨音は小さく首を傾げた。そしておずおずと、どこか怯えるように声を上げる。

「あの……聞かないのですか、私がした事を」

「ん？ んー……ま、いいんじゃない？ 雨音ちゃんが涼二を大切にしているって事は、あたしも十分理解してるし」

優しき信頼、ある種重圧にもなるそれを向けられ、雨音は小さく息を飲む。

しかしながら、ムスベル Heim の眼があるこの場で詳しく話す事を避けられたのは僥倖であり、雨音も元より詳しく語るつもりはなかった。

小さく安堵の息を吐き、雨音はその視線を僅かにずらして、先ほどの方向 涼二と緋織が離れている方へと向ける。

桜花もまたその視線を追い、小さく苦笑を零した。

「あいつ、ユグドラシルでの事なんか全然話さないから殆ど知らなかったけど……あんな可愛い子誑かしちゃってまあ。あたしも、教育間違ったかなあ」

「桜花さんが涼二様のお母様なのですか？」

「や、その感想はおかしい。ってか、せめて姉とか……まあ、年齢的には妹だけどさ、あたし。それにあいつ、『姉』は神聖視してそうだし」

げんなりと、どこか引き攣った笑みを浮かべ、桜花は嘆息する。けれど、他者との関わりを完全に拒絶していた涼二を引っ張り出し

たのは、紛れもなく桜花と双雅だったのだ。

かつてを思い返すように目を細め　　桜花は、ゆっくりと声を上げる。

「あいつってさ……一番最初は、完全に自己完結してる人間だったんだよ」

「自己完結、ですか？」

「そ。あいつって、本当は他人の事なんかどうでもいいの。世界には自分とお姉さんだけがいればいい……お姉さんがいれば、あいつは満たされていた。

小さい頃さ、あいつって、一日中ずーっと鏡を見てたりした事があったんだけど……雨音ちゃんは、分かるよね？」

「……それは」

涼二の目の事は、仲間となった時に聞かされていた。

その眼球は姉のものであると、かつての目と姉を奪った存在に復讐するのだと。

姉　　氷室静奈を至上とする彼が、鏡を見続けていた理由など、考えるまでも無い。

「お姉さんがいない世界なんかには、価値は無い。ただ、自分の目だけがあいつにとっての価値だった。

例え一部分だけだったとしても、お姉さんの一部を傷つけたくなかったから、あいつは自殺なんてしなかつたんだろっけ。

自分が死んだら、目だって朽ちちゃうんだからね」

「そこまで……気付いていらっしやったのですか？」

「幼心にね。このままじゃいけないって、あたしは思ったんだよ。



だから、連れ出した」

氷の鏡に包まれた彼の世界に、桜花と双雅は無理矢理に足を踏み入れた。

このままじゃいけないのだ、姉の命を受け継いだのならば、もっと精一杯生きねばならないのだ。

「お姉さんが見れなかったものを、もっと見せてあげようって。ア  
ンタが見たものは、お姉さんが見たものになるんだからって。  
もっともっと、あんたが大切だと思えるものを見ていった方が良  
いんだって……あいつにとつての幸せを、あたしはすり替えた。

一人で、永遠に朽ちない氷像を抱いていた方が、きっと幸せだった  
んだろうけどね」

復讐も何も無い、戦いも何も無い。ただ、己だけで完結した世界。  
それならば、少なくとも彼は傷つく事はなかっただろう、と。  
けれど、それは変わってしまったのだ。それが例え、表面上だけだ  
ったとしても。

「あたしが中途半端な事をしたから、あいつも中途半端になってし  
まった。極端に言えばさ、手段を選ばなければどうだって出来た  
んだよ、涼二は。

本当に復讐に走るなら、この国ごと滅ぼしてしまう選択肢だっ  
た筈だから」

「でも、それをしなかったのは……」

「大切だと思えるものを、その錯覚を、あたしがあいつに抱かせて

しまったから。だから苦しんで、ボロボロになって、行き着くところまで行くことしちやってる」

深く、溜め息が零れ落ちる。

それとともに空を仰いだ桜花の表情は　　どこか、泣き笑いのように歪んでいた。

自分の生で、誰かが傷つく。その心境は、雨音には痛いほどに分かる。

彼女もかつては、望まぬ力で人を傷つけた存在だったのだから。

「だからさ……最後の最後になるけど、協力したいって思うんだ。もう手遅れかもしれないけど……少しでも、満足させてあげたいからね」

「……そう、ですね」

万感の想いで呟かれた言葉は冬の風に消える。

目的地へは　　もう間もなく、到着しようとしていた。



いくつものディスプレイが並び、目まぐるしくその画面を変化させてゆく。

その中心に座る少女は、目を閉じたまま周囲の画面たちへと分割した意識を傾けてゆく。

彼女　スリスが集めているのは、無数に飛び交うユグドラシルの情報であった。

リアルタイムの通信から過去の資料まで、無作為に飛び交う情報の中から、必要なものだけを抽出してゆく。

「　　どうなのかしら？」

「　　そうだね……ボクたちにとっては、最高の状態なんじゃないかな」

元より光を映さぬ目は開かぬままに、背後から聞こえた声に対してスリスはそう告げる。

いつからその場にいたのか、そこには彼女の雇い主たる鉄森シアの

姿があった。

しかしそれに驚くような事はせず　　元々監視カメラで部屋を見ていたのだ　　スリスは小さく肩を竦めながら続ける。

「ニーズホッグは防衛線を突破、密都へと向かって直進してる。戦闘ではムスペルヘイムから死者が十七人。

ただし、<sup>フェアブラ</sup>神話級に死者は無いみたいだね。まあ、流石に継続戦闘は無理だろうけど」

「と言う事は、次期総帥は無事ですのね？」

「掠り傷一つ無いよ。多分、一番無事な部類だね」

若干ながら、声音に不機嫌な色が混じる。

それを自覚しつつも直そうとはせず、スリスはパソコンの片隅で映像記録を再生する。

そこに映し出されていたのは、全くの無傷でムスペルヘイムの隊長

緋織を支えている美汐の姿だった。

ともあれ、これで依頼の内の一つを達成した事になる。

国内を混乱させない為に、ユグドラシルの存続は必須　　しか

し、大神槍悟の能力とカリスマ性によって成り立っていたかの組織は、並大抵の人材では運営する事は叶わない。

そして、彼の目指す方向性もまた、これからの国には不必要なものである。

シアはそう判断し、涼二たちに美汐の護衛を命じたのだ。

彼女もまた、彼の次期総帥の力に魅せられた者の一人なのだ

と、スリスは思考の片隅で小さく嘆息する。

(厄介だねえ、あの力。まあ、関係無いと言えば無いけど)

<sup>ゲーボ</sup>  
Gのルーン。

このルーンは珍しく常時発動方の力を持っており、常に周囲へとその力を振り撒いている。

しかし戦闘的に見れば、<sup>ゲーボ</sup>Gのルーンと言うのはそれほど強力なものと  
言う訳ではない。

相手に『何となく』好ましく感じさせる、という程度なのが普通である。

意識して発動すれば、相手に好印象を持たせる事は出来る　　が、  
それは洗脳と呼べるレベルには到底及ばない。

会話次第で簡単に覆ってしまう程度のものでしかないのだ。精々、  
第一印象をプラスできる程度のものであろう。

しかしながら、これに関して大神美汐はあらゆる意味で例外に当た  
るのだ。

彼女が持つのは、その中で最上位たる<sup>ゲーボ</sup>Gの始祖ルーン。

その力は、ほぼ大半の相手に対し、自動的に好印象を植えつけると  
言うレベルに達している。

無論、スリスや白貴のように、強い感情でそれを塗り替えてしまう  
場合も存在するのだが

(元々の人格がかなり人を惹きつけるのは厄介だよねえ。アレ  
<sup>ゲーボ</sup>はGの始祖ルーンのおかげでそうだったのか、それとも元々そうだ  
ったのか……)

大神美汐と言う人物は、彼女自身が非常に人を惹きつけやすい性

格をしている。

人が傷つく事を善しとせず、困っている人間には手を差し伸べ、自らが信じた正しき道を突き進んでゆく。

決して折れず、曲がらず。挫折すらも飲み込んで進む強さ。

それは最早、羨望や嫉妬を通り越し、偶像となってしまうレベルのものだ。

『羨ましい』と思うこと自体が馬鹿馬鹿しいと、初めから次元が違うのだと　そう感じさせてしまうほどの存在感。

それは、父である大神槍悟とはまた違った方向のカリスマ性であった。

絶対なる王者として君臨するか、手を取り合う英雄として先導するか。

シアが選んだのは、後者であったと言う事だ。

「　それで、ニーズホッグの方はどうなりますの？」

「　っと、ゴメンゴメン。ちょっとボーっとしてた」

シアの言葉に、スリスは再び情報処理を開始する。

とは言っても、意識を分割しているスリスは決して手を休めていた訳ではないのだが。

問われた内容に対して集中し、情報の取捨選択を行う

「　……やっぱり、予想通りだよ。迎撃には大神槍悟が出てくる。そ

れと、待機してた大神徹もね」

「　《必滅の槍》に《雷神の槌》……貴方はどう見ますか、スリスさん？」

「　現状なら、恐らく互角だろうね。ただ……」

小さく、吐き出すかのように、スリスは画面の一角にあるファイルを展開する。

それは簡素なテキストファイルであり、メモ書き程度に書き記された内容ではないもの。

だが、それは、此度の戦いにおいて何よりも重要な情報でもあった。

「ニーズホッグの正体……少しだけ見えてきたけど、これは謎のままだ」

「正体？」

「ニーズホッグは生物じゃない。Sの始祖ルーン能力者である雨音ちゃんが保障したんだ、コレはまず間違いないよ」

そこに記されていたのは、雨音からの報告をガルムが考察し、纏めた内容であった。

曰く、ニーズホッグにはプラーナの循環路が存在していなかった事。この事から、何らかの能力によって作り上げられた擬似的な生物であると言う可能性が出て来た事。

事実、頭部を粉碎しても絶命しなかった事。

それらの事を踏まえて、どのように対処すべきか

「こうなってくると正直、十四年前に大神槍悟がニーズホッグを撃退したのだからおかしな話なんだよ。

術者が消せば、ニーズホッグは消える。死体も残らず何処かへ消滅したのは、恐らくそういう理由なんだろうと思う。



けど、術者はどうして十四年も姿を消していたのか。そして、どうして今になって現れたのか。

ニーズホッグを使役する理由がプラーナの蒐集なら、何故今までその活動を行っていなかったのか　　謎だらけだよ」

「そんな事が……貴方の見立てでは、大神槍悟とニーズホッグの戦い、どうなると思います？」

「倒せはする。けど、涼二たちが戦ったときみたいに再生されたら、それこそジリ貧だよ。だから、ニーズホッグの術者を見極める必要があるんだけど……見当もつかないね、こんなモノ」

言って、スリスは小さく嘆息する。

ただでさえニーズホッグに関しては情報が少ないのだ。それらを考察しようにも、要素が少なすぎる。

一つ言える事があるとすれば

「その途方も無いほどに強力な術者は……本当に人間なのか、疑いなくなるってものだけだよ」

「ふむ……それは、現状調べて分かる事なのかしら？」

「微妙だね。可能性はかなり低いよ。でも……」

「でも、何です？」

「……ニーズホッグが現れる場所。そこに、その術者が現れる可能性は否定できないと思う」

まるで事件の犯人のように　　そんな言葉を飲み込み、スリスは小さく肩を竦める。

理由も根拠も無い予想であり、半ば妄言に近いものだ。そんなものは信用に値しない。

けれど、それ以外の可能性が思いつかないこともまた事実。

この状況でこれだけの不確定要素がある事に、スリスは若干の不安を覚えていた。

が、それでも

「……まあ、どっちにしるこのまま見過ごすつもりは無いしね。これは最初で最後のチャンス。仕組まれた感じがしないって訳じゃないけど、ここで手を出さないって選択肢もありえない」

言つて、スリスは立ち上がる。

そのまま踵を返し、部屋を出てゆこうとする彼女の姿を横目に見つめ、シアは小さく声を上げる。

「どちらへ？」

「ボクも準備。今回は、後ろに下がってるつもりは無いからね……それに、使えるものは全部使う。」

あの大神白貴（オウギ）だつて、十分使える戦力だよ」

大神美汐の弟 稀有な能力を持つ少年。

その名を口にする事に対して顔を顰めつつも、スリスは光を映さぬその目に強い覚悟を浮かべる。

やるべき事がある、倒すべき敵がいる。故に、最早見ているだけなど我慢ならないと。

「ボクは戦う……全部奪われたんだ。だから……今度はボクが奪う番だ」

吐き捨てるようにそう告げた。スリスは、部屋から去っていった。

その背中を肩越しに見つめながら見送り、シアは小さく息を吐き出す。僅かに硬直した身体を、解きほぐすようにして。

「やれやれ……見た目は小さな女の子だというのに、大した殺気ですわね」

スリスがその身に宿す怨念は、涼二やガルム以上であるといっても過言では無い。

彼女の纏うその殺意は、決して軽視できるものではない。

彼女こそが、ニヴルヘイムにおいては最も危険な人物なのだから。

深呼吸をして、シアは視線をパソコンの画面の方へと向ける。

今回の戦いに出てくる人間の名。そこには、確かに豊崎翔平と記されていた。

\* \* \* \* \*

強大な力が吹き荒れる。

その中心に立つのは、灰色の髪をオールバックにした壮年の男。

そして、それに対峙するは、遠く放れたビルの上にその巨体を降ろした漆黒の巨龍。

荒れ狂う二つの力は、どこか睨み合うようにしながら対峙している。

「ッ……」

その圧力をすぐ傍で感じながら、徹は戦慄と共にどこか歓喜にも似た感覚を感じていた。

最強のルーン能力者として名高い父、大神槍悟の力。

それは、息子である徹ですら殆ど目にした事の無いものであり、その全力などは誰も見た事が無いと言っても過言ではなかった。

故に、その光景を目の当たりに出来る事

それ自体が幸運であ

ると、彼はそう思っていたのだ。

(とはいえ、見てるだけって訳には行かないしな)

胸中で呟き、徹は己のプラーナを活性化させる。

彼もまた、始祖ルーンを持つ神話級のルーン能力者。

その力は、一般の能力者どころか神話級の力を持つ者の力からも一線を画するものである。

宿すルーンはU、J、H。Uの始祖ルーンを持つその身体能力は、他の能力を使わずとも十分に強大な一撃を繰り出す事が可能だ。しかし、それは彼の能力の名を表すものではない。

「行くぜ、《雷神の槌》」

僅かな呟きと共に、強大なプラーナがその手の中に集う。

その手の中に形成されるのは、頑強で巨大な一振りの戦槌だった。重さだけで地面を陥没させるそれは、能力など使わずとも人体を叩き潰す事は容易いだろう。

人間では到底持ち上げられない、動かす事すら叶わないその規格外な武器。

それを容易く持ち上げながら、徹は父の動きを一瞬たりとも見逃さぬよう意識を集中させた。

「J」 《必滅の槍》 「

小さく呟かれた言葉の中では、一体どのようなルーンが使われたのか判別する事は難しい。

しかし、無秩序に吹き荒れていたそのプラーナは、彼の掌の一点へと収束してゆく。

先ほども一度投げ放たれた、強力無比にして最強と名高いその能力。その発動と共に現れたのは、黄金に輝く長大な槍。

柄の半ばまでを覆う幅広の刃は、突くだけではなく斬る事も可能な一振りである。

石突の方にも同様の刃を小型化させたものが形成され、あらゆる形で敵を貫く事が可能なその槍は、完成して主の手の中に納まった。

『Grrrrrrr……!』

対するニーズホッグもまた、その周囲に力を発生させる。

現れるのは薄靄に包まれた空間。能力の伝達を阻害するその領域は、放出系能力を持つ者にとっての天敵である。

徹の持つHの力も、容易には通用しないだろう。

さらには周囲に風が逆巻き始め、それに触れた建物が次々に軋む音を立て始める。

荷重の風　触れたものの重さを倍増させるその力。

長年放置され、劣化を積み重ねたビルたちは、増加した自重に耐えかね自壊してゆく。

「……やれやれ、私がするのは妨害までですよ、総帥」

「十分だ、頼んだぞ」

「はあ……では、行きましょう。E、N g、J」

《豊穡の飛剣》

》  
「

豊崎がそう宣言する　　瞬間、周囲は大きな揺れに見舞われ始めた。

彼の能力を知る二人はそれに慌てる事無く、静かにその力の完成を待つ。

そして、次の瞬間　　水没した街の地面より、無数の巨木が姿を現した。

ビルに並び立つほどに巨大化したそれは、大きく枝葉を広げ、壊滅した都市の様相を更に大きく変化させてゆく。

これこそが、豊崎翔平を表すファンクション、《ユングリング豊穰の飛剣》。その巨木より舞い落ちる木の葉は、盾であり剣でもある。

一つ一つが名剣にも劣らぬ斬れ味を誇るそれは、Eの始祖ルーン能力者である豊崎だからこそ可能な芸当であった。エイワズ

とはいえ、彼もこの力で二ースホッグの鱗を貫けるなどとは考えていない。

「では、攻撃役は頼みましたよ、お二人とも」

「是非も無し。では、参ろうか」

「ま、やるだけやってみるさ」

黄金に輝く槍と、雷を纏う戦槌。

《レイヴァーティン災いの枝》と並べて武器形成能力の至上と称されるその力。

二ースホッグと直接の戦闘を繰り広げる役を承ったのは、その二人であった。

豊崎は、己の仕事を相手の妨害と割り切っている。

伸ばされる枝葉は巨龍の動きを妨害し、その巨大な幹は相手の攻撃

を受け止める盾となる。  
その防御能力は、Eエイフスの始祖ルーンの名に恥じないほどに強固なものだ。

魔境と化した眼下の世界を眺め　　大神槍悟は、最強の能力者は淡く笑む。

その手に携えられた神の槍を、ゆっくりと構えながら。

「では……開戦と往こうか、我が宿敵よ。何、今度こそ逃しはせぬ……貴公が我が滅びの宿命で無い以上、倒れるのは貴公の方だ」

彼以外が口にすれば、ただの傲慢でしか無いその言葉。  
けれど、彼にとってそれは、紛れも無い事実と信じている言葉であった。

己が滅びるのはここではないと　　そう確信しているかのように。  
万人が戯言と断じるようなそれは、しかしそれを信じさせるだけの力があつた。  
故に、彼に続く二人もまた、それに引き込まれるように戦いへと意識を向ける。

『O o o o O o o a a A A h h h h h h h h h h  
ッー！』

「さあ、開戦の号砲はここに在り！　どちらが先に果てるか試してみるがいい！」

そして　　ユグドラシル最後の皆で、最強の戦士による戦いの



火蓋が切って落とされた。

「おおおおおおおッ！」

まず、雄たけびと共に先陣を切ったのは、巨大な戦槌を構える徹  
だった。

彼はHの力を持つてはいるものの、その武器 ハガラス 《雷神ニルニルの槌》の  
重量の為に、飛行はあまり得意としていない。  
しかしながら、それでも高く跳躍する程度ならさほど問題はなく、  
さらにこの場は、無数の足場に溢れている。

「やれやれ、あまり枝を折らぬよう気をつけて頂きたいのですがね」

駆ける徹の足場を形成するのは、地面より生えた大木の枝。  
それを足場に駆け抜けながら、徹はただ一直線にニーズホッグへと  
向けて駆け抜ける。

しかし、対するニーズホッグも、それをただ無抵抗に眺めているつ

もりはなかった。

『OOOAahhhhhhh』

ツ!!

逆巻くのはOオセルの力を纏う黒い風。  
その力はただでさえ重い《雷神ミコルニルの槌》の重量を、更に増幅させて徹の動きを鈍らせる。

腕にかかるその巨大な重さに、徹は思わず舌打ちを零していた。

「く……ッ、面倒な事覚えやがって!」

そう呟くと共に、徹はUウルスの始祖ルーンへと回すプラーナの量を増加させる。

節約しながら戦って何とかできる相手ではない。それを、一瞬の内に悟ったのだ。

少しでも、一瞬でも手を抜けば、仕留められるのは自分なのだ。  
そしてほぼ同時、ニーズホッグの紅に輝く瞳。潰れた筈のそれも再生している。が、徹へと向けられる。

それを見届ける事無く、徹は即座に強化した身体で強く足場を蹴っていた。

次の瞬間、彼の足場となっていた巨木は強大な重力波に握り潰され、その枝葉を散らす。

「手荒いですね」

眩くような豊崎の声が空気に消える。

しかしその声音には、決して己の力が潰された事に対する怒りは含まれていなかった。

むしろそこに在るのは 相手に対する、嘲りの感情。

豊崎はその口元に僅かな嘲笑を浮かべ、そつと己の腕を掲げた。

その掌の向けられる先は、言わずもがな彼の黒龍が存在する方向へと。

「集え、《豊穰の飛劍》」

舞い集うのは、砕かれた巨木より散った無数の木の葉。

それは、破壊されたからといって決して消滅はせず、水流の如き音を立てながら宙を駆ける。

豊崎翔平の能力である《豊穰の飛劍》は、それによって作り上げた樹の全てが彼の武器となる。

葉は刃に、枝は槍に、幹は盾に。防御系の能力たるEをほぼ完全な形で、しかもこれほどに多様性のある操り方を実現したのは彼が初めてであり、そして彼以外にそれを操れる者は存在しない。

彼が持つのはEの始祖ルーン。それによって作り上げられた攻防一体の領域は、一切の無駄なくニーズホッグへと殺到する。

『G A A A A A ツ！』

対するニーズホッグは、その周囲に強大な嵐を発生させる。

天より降り注ぐのは無数の雷、それらは襲い掛かる無数の木の葉に直撃し、その多くを焼き尽くす。

しかしながら、その全てを破壊する事はいかな二ーズホッグとて不可能だった。

木の葉達は風に乗る、その暴風の流れを乗り越えて、黒い巨体へと向けて突き進む。

しかし 人体を斬り刻むには十分すぎるその斬れ味も、巨大な龍の鱗に傷をつけるには至らなかった。

「やはり、貴公の力では届かぬか」

「仕方ありませんよ。人知を超えたレベルのプラーナで、<sup>ウルズ</sup>Uのルーンを発動しているのですから。私程度の攻撃は到底届かない。だが

「

木の葉は風に舞い、そして折れた枝たちは時折弾丸の如く発射される。

それらの中心に巻き込まれ、二ーズホッグはその視線を右往左往させていた。

己を傷つける事が叶わない能力とて、決して目に入らないと言う訳ではないのだ。

元々の重量が低い木の葉達は、荷重の風で地に落ちる事は無い。その舞は、二ーズホッグが風を発し続ける限り、その視界を阻害し続ける事となるのだ。

そんな様子を見ながら、槍悟は小さく笑みを浮かべる。

「相手の動きを止めるには、十分と言う事か」

「そんな所です。ところで、貴方は行かないので？」

「何、息子に一番槍を譲つたまでだ」  
「槍を持つ貴方が言いますか」

そんな総帥の言葉に対し、豊崎は小さく苦笑する。

そしてそれとほぼ同時、ニースホッグの頭上に、一人の人影が姿を現した。

巨大な戦槌を構えるその青年　　徹は、裂帛の気合と共にその武器を振り上げる。

「ブツ潰れるオオオオオッ！」

振り下ろされるのは、雷を纏う銀の槌。

ニースホッグの領域内であるため、その雷光は力を弱めてはいるが、それでもその武器の強度と彼の身体能力が失われる訳ではない。

振り下ろされたその一撃は、ニースホッグの肩口へと命中しその破壊力を、存分に発揮した。

『 G a  
』

響く黒龍の苦悶。

それと共に、突き抜けた衝撃によってその巨体に乗っていたビルが爆ぜた。

頂点から地面へと、一瞬にしてビルに亀裂が走り、砕け散るように崩壊して行く。

しかし深追いするような事はせずに飛び離れ、徹は隣にあったビル

の屋上へと着地した。  
そしてその槌を下ろし、静かに目を細める。

(今は )

手応えはあった。が、致命的なダメージには程遠い。  
事実、その強大なブローナはまだその波動を弱めていない。  
油断せずに徹が構えた、次の瞬間 逆巻いた風の刃が、徹の立  
つビルを一瞬で輪切りにしていた。

「ちッ！」

舌打ちと共に、徹は再び飛び離れる。  
反応しきれぬほどに速い風の刃。徹がUのルーンウルズに集中すれば受け  
止める事も難しくは無いが、それでもその場に足を止める事になっ  
てしまうだろう。

この戦いにおいて、それは致命的としか言いようが無い。

徹はビルや巨木の上を移動しつつ、眼下の海面を確認する。

そこには、怒りに瞳を燃やすニーズホッグの姿が依然として存在し  
ていた。

肩の辺りの鱗は砕けているものの、それも徐々に修復されつつある  
状況。

確かに全力の一撃だったのだが、それをすぐさま再生されてしまう  
事に、徹は思わず舌打ちを零す。

と　　そんな彼の横を、黄金の輝きが通り過ぎた。

「え……？」

思わず目を見開き、そちらへと視線を向ける。

見えたのは、一人の男。衣服の裾をはためかせ、その手には黄金の槍を逆手に持ち、彼はその手を大きく振りかぶる。

発したプラーナは　　まるで爆発を間近に受けたと、徹が錯覚するほどのもの。

徹が気付く由も無かったが、ニーズホッグはその姿を確認した途端、徹への全ての警戒を排除して槍悟へと力を向けていた。

そして、最強と名高いその能力は、一切の容赦なく解放される。

「貫け　　《<sup>ゲンゲニル</sup>必滅の槍》」

『OOOOOOoaaaaaAAAhhhhhhhッ！』

投げ放たれた黄金の槍と、巨体の前に形成される黒い球体。

決して外れる事は無く、命中すれば必殺と名高いその槍の一投は、ニーズホッグの発生させた重力球と衝突し、破滅的な衝撃を走らせた。

重力の余波が周囲を陥没させ、砕けたビルをその一点へと凝縮し始め、それに突き刺さる黄金の槍は全てを貫こうと唸りを上げる。

その二つの力の余波　　否、プラーナの波動は、ただそれだけで周囲の建物を粉碎して行く。



そして 二つの極大は、同時に砕け散っていた。  
その様を見つめ、槍悟は口元を僅かに笑みの形へと歪める。

「流石だ、我が宿敵よ。我が一撃を防げた者は貴様をおいて他には  
いない」

それは、僅かな歓喜であっただろうか。

己の力を十全に發揮するに足りる敵 それは、槍悟には今まで  
存在していなかったものだったから。

そしてその言葉に応えるかのごとく、ニーズホッグも大きくその翼  
を広げる。

吹き荒れていた力は、その瞬間に静寂を取り戻す。

響くのは破壊された建物が立てた水音と、ビルの谷間を通り抜ける  
風の音のみ。

戦いの差中、一瞬だけ訪れた静謐な時間 しかしそこは、厳粛  
なまでに高い緊張感が支配する場所でもあった。

その真っ只中に立ち尽くし、ニーズホッグから距離を取る事すら忘  
れ、徹はその圧倒的な二つの存在感に目を奪われる。

知らず、彼はごくりと喉を鳴らしていた。

刹那。

「  
《ケンゲニル必滅の槍》  
」

『…………ツ！』

二つの力は、瞬時に喚起された。



ただの能力者ならば、一瞥で気を失う。

フェアフリア  
神話級という位階の頂点に至った存在すら、その槍の一投に耐えた者はいなかった。

その中で唯一この黒龍だけは、大神槍悟の力に耐えたのだ。

それも一撃だけでは無い、幾度も幾度も、無数に放たれた必殺を全て防ぎきったのだ。

かつて退けた時も、完全に仕留めたと言える状況ではなかった

故に、ニーズホッグは大神槍悟にとつての敵なのだ。

対等の戦いを繰り広げる事が出来る『宿敵』。故にこそ、大神槍悟は歡喜する。

『OOOOOOooaaaAAAAAッ!!』

しかし、本能だけの獣が相手の感情を理解する事は無い。

目の前にあるものは全て餌、その中で、自らには向かうだけの力を持つものを敵として認識する。

故に、ニーズホッグにとつて大神槍悟は最上位の『敵』であった。

鱗では防ぎきれない攻撃力、あらゆる攻撃をいなし、相殺するその技量。

そして、誰もが恐れる存在へと真つ直ぐに立ち向かうその精神。

異常と言つ言葉以外で表現する事が出来ないその男こそが、自らの

『天敵』であると、ニーズホッグはただそれだけを本能で理解していた。

「墮ちろ、我が宿敵よッ！」

『GAAAAAAAッ!!』

目の前の敵をただ倒すため 二つの力は、全てを忘れて荒れ狂う。

その様を、破滅を振り撒く二つの暴風を成す術無く見つめながら、徹は僅かながらに独りごちる。

《雷神の槌》<sup>ミール</sup>を握り締める手を 恐怖か、或いは羨望か  
僅かに震わせながら。

「何だよ、これは……」

彼には、己が最上位の術者である自覚があった。

他の能力者を隔絶する力を持つ神話級<sup>フェアブラ</sup>、その中でも始祖ルーン能力者は、それを持たぬ者達に対して一線を引いた力を持っている。

流石に始祖ルーンを二つ持つ者に対しては単純な力では及ばないと理解しているが、それでも、緋織や美汐に敗北する事はないと自負していた。

だが

「こんなの、手を出す隙すら無いじゃないか」

瞬く間に破壊されてゆく旧東京水没地域。

徹の力でも、それをする事は可能だろう。

だがそれは、あくまでその破壊を目的として能力を振るった場合のみだ。

間違っても、ただの余波で都市一つを破壊する事など不可能である。

その圧倒的な、自らがそこに届く姿を想像する事すら出来ない力の差に、徹はただ呆然とそう呟いていたのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「いよつとお！ おっし隊長、それに大将も！ もうじき目的地に着くよお！」

麦香の無駄に気合の入った声に、涼二は甲板の上で小さく苦笑を漏らす。

彼がいるのは船の最前部。その辺りで、縁に背を預けながら横目に

前方を見つめていた。

まだ若干遠い場所　けれど、その彼方より伝わってくる強大な  
プラーナの気配は、今や神話級フェアブラ以外の者達にすら感じ取れるほどに  
近付いてきていた。

この圧力の中、いまだに調子を変えず船を操っている麦香の姿に、  
涼二は若干の感嘆を覚える。

（鈍いんじゃない、それだけの胆力があるって事か……大したもん  
だ）

この事態だからこそ見えてくる、かつての部下達の姿。

慌しく走り回る彼らの姿を眺めながら　ふと、涼二は近づいて  
くる人影に気がついた。

多くの人々が存在する中、それでも一際目立つ和装を見間違える事  
は無い。

「雨音……お前は結構、感受性が高かったからな。大丈夫か？」

「はい。心配してくださってありがとうございます、涼二様」

涼二の言葉に対し、雨音は僅かながらに顔をほころばせ、その声  
を上げる。

その言葉の中には多少の緊張は含まれているものの、放たれるプ  
ラーナの力で負担を感じている気配は無く、涼二は僅かに安堵の息を  
漏らす。

とはいえ、いつまでもそのまま負担を感じずにいられるという保障  
は無い。

むしろ、この力の波動はこれからもっと強大になってゆくだろう。  
何故なら 涼二は今この場所からでも、大神槍悟の力を感じ取る事が出来ていたからだ。

（あの男が戦っている……この距離からでも分かるほどだ。抑えてはいないだろう）

最強の能力者たる大神槍悟、その力は、プラーナの波動だけで常人を圧倒する事が出来る。

そんな人物が全力で戦闘を行っているのだ。近付いて影響が無い筈が無い。

しかし その方向を見つめる雨音の視線には、強い意志の光が灯っていた。

「……一応言っておくが、お前は来ない方が良いぞ、雨音」

「ええ、涼二様ならそう仰るでしょう。ですが、退く気はございません」

「どうしても、か？」

「はい。私は、私の陽だまりを守りたい」

そっと、己の胸を押さえるようにしながら、雨音はそう口にする。そこに込められた万感を、抑えきれず声に出すかのように。

「私は、涼二様に会うまで、幸せと言うものを知りませんでした。

涼二様とスリスさん、ガラム様……そして双雅様や桜花様に触れて、

私はようやく幸せを知ったのです。  
だから失いたくない、だから誰も傷ついてほしくない……それが私の願いです、涼二様」

手に入れてしまったから、もう失う事は出来ない。

己の愛した暖かな場所を守りたい。

届かぬものに手を伸ばす、渴望ともいえるようなその感情に、涼二は小さく息を吐き出していた。

その意志の強さは、己の仲間のそれにも劣るものではないと、理解してしまっただからだ。

それは最早、理性ではなく感情なのだ。他者の言葉で止まるものではないと　涼二は、それを知っている。

「まったく……ガルムから離れるなよ？」

「はい。涼二様も、お気をつけて」

そんな雨音の言葉に苦笑し　涼二はふと、視線を先ほどとは逆の方向へと向けた。

その方向から姿を現したのは、緋色と金色の少女　緋織と美汐だった。

彼女達の若干緊張した姿に、涼二は肩を竦めつつも二人を出迎える。

「大丈夫か、お前達？」

「……ええ、まあ。といつても、先ほどよりは気が楽だけれど」

「まあ、今回は直接戦闘に参加って感じじゃないしね」



言葉とは裏腹に固くなっている緋織と、それに対して小さく苦笑している美汐に、涼二は僅かに視線を細める。

プラーナの大半を使ってしまった緋織は、最早ニーズホッグとの直接戦闘に耐えるだけの力は残されていない。

故に、彼女達の狙いはただ一つ　　《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》による大神槍悟の強化だった。

彼とニーズホッグの力は拮抗している。それ故に、美汐の全力の強化ならば、彼はニーズホッグを上回る事が出来るのではないかと涼二が進言したのだ。

緋織の仕事は、そんな美汐の護衛のみである。

「ま、なるようになる。賽は投げられたんだ、後は覚悟決めてやるしか無いだろ」

「……ええ」

「そうだね、涼二君」

緋織とは裏腹に、そこまで緊張した様子の無い美汐。

そんな二人の退避に苦笑しながら、涼二は視線を再び前方へと向けた。

(さあ……もうすぐ。もうすぐだ、姉さん)

漏れ出ることの無いように、その怨嗟を抑え　　涼二はただ、胸中でそう繰り返していたのだった。



空間のいたる所に配置された金属塊。

それを次々と蹴りながら、大神槍悟は加速してゆく。

彼の持つ能力は、一般には殆ど知られていない。能力にはすべて欠点や弱点も存在しており、それを知られない為とも言われているが

彼の場合、それはもつと単純な理由だ。

誰も、その力が発揮される場面を見た事が無かったと言っただけなのである。

槍悟の能力には、ただ一点を除いて特異な部分など存在していない。<sup>ジュラ</sup> Jによつて作り出された槍を、Rの加速を乗せながら放っている。

ただし、それではただ単に高速の槍が射出されるだけの話だ。

最高の技量を持つ能力者によつて放たれる、音速を遙かに突破した槍の一撃は確かに脅威ではあるが、それだけでは『必中』という凶悪極まりない性質には辿り着かない。

槍悟の能力を知る一部の人間は、その機能が彼の持つもう一つの始祖ルーン、Mによるものなのではないかと考えていたが、その仕組

みは未だ明らかになっていない。

「私としても……協調のルーンでそのような機能を発する方法など想像もつかないがね……それで、《雷神の槌》<sup>ミルニル</sup>殿、どうするつもりなのですかね？」

「どうするって、言われてもな……」

「ぼやくように、徹は呟く。

その視線は、最早諦めの境地に達しつつあった。

もとより高速戦闘はあまり得意ではない　　とは言っても、極限の身体強化である程度的高速移動は出来る　　徹であったが、この状況では下手に攻撃を振る事も出来なかつたのだ。

尤も、己の攻撃程度で父がどうにかなるとは考えられなかつたが、それでも戦闘の拮抗を崩してしまえばどちらに転ぶか想像もつかない。

槍悟に有利に働くような横槍を入れるには、徹の力は不向きだったのだ。

「俺の力じゃ、邪魔になるだけだろ」

「おや、確か一つ、この状況に適したファンクションがあつたと思うのですが？」

「……アレの事か？　使いどころが難しい上に、こっちにとっては最後の切り札なんだが」

身体強化と近接武器がメインである徹にとって、唯一といってい  
い遠距離攻撃手段。

その一撃は確かに強力極まりなく、彼の二ーズホッグが相手だとしても隙を作るには十分すぎるほどの破壊力となるだろう。しかしながら、その攻撃は放った直後に無防備になっってしまう、まさに徹にとつての切り札。

現在相手の目が己に向いていない状況であるのは確かだが、それでもおいそれと放つ訳には行かない一撃であった。

しかしながら、現状それ以外に手段が無い事もまた事実。

それを自覚し、徹は深々と嘆息を零していた。

「……分かった。けど、状況を見なきゃならない。下手に放つても無駄遣いになるだけだ」

「了解しましたよ。まあ、準備ぐらいならばしておいても良いのでは？」

「そうだな……よし、やるか」

呟き、徹は準備段階としての能力を発動させる。

と、その時、ふと感じた気配に、徹は視線をある方向へと向けていた。

北西の方角、そちらから近寄ってくる力の気配は

「……へえ」

その正体に気付き、徹は小さく笑みを浮かべていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

閃く黄金の閃光の中、多角的な動きで大神槍悟は駆け抜ける。その姿を追うように、削岩機の如き旋風が周囲を抉り取っていた。生える木々や建物は粉微塵に破壊され、その粉塵を周囲に巻き上げる。

そして走った雷光は、それらに火を着け破滅的な爆発を次々と引き起こしていた。

しかしそれの中を無傷で駆け抜けた槍悟は、手の中の槍をニーズホッグへと投げ放つ。

そして一度足場に着地すると、追って来た旋風を吹き散らすようにもう一投、そして更にもう一本を相手の顔面へと向けて放つ。

その襲い掛かる破滅に対して、ニーズホッグは勢い良く飛翔した。

「躲せはせぬよ。貴様も、それは理解しているだろう」

ニーズボツグの動きに対し、槍悟はそう呟く。

そしてそれとほぼ同時、放たれた《ケンゲニル必滅の槍》は、槍悟と同じように鋭角を刻みながら方向を変えた。

いかにした所で躲せはしない。絶対に命中し、命中すれば相手に極大のダメージを与える。

その理不尽なまでの力こそが、大神槍悟の能力なのだから。

対し、ニーズボツグは周囲に黒い球体を作り出した。

凝縮された0オセルの重力操作。それは僅かながらに《ケンゲニル必滅の槍》の軌道を逸らし、さらには周囲の空間を歪めてその動きを阻害する。

近寄っただけでもたちまち人体を捻り潰すほどのエネルギーの集中に、理不尽な槍悟の能力もその動きを鈍らせた。

中でも強大な重力を放っていた球体は《ケンゲニル必滅の槍》の動きを完全に絡め取り、身を翻したニーズボツグは、折れ曲がろうとしていた槍に喰らい付き、それを噛み砕いて飲み込んだ。

その所業に、流石の槍悟も驚愕に目を見開く。

「ははははッ！ やはり貴様は、予想もつかぬ事をやってくれるものだ！」

その声の中には、己の想像を超える事に対する歓喜が浮かぶ。

己の力を食らわれているにもかかわらず、そこには苦い感情など欠片として存在していなかった。

何処までも己の想像を超えて欲しいと、願いすら帯びるほどに。

「さあ　　今度はそちらの番だろう！」

『oooooAHHHHHH』

ッ！』

その槍悟の声に応えるように、ニーズホッグは咆哮する。

それと同時に、黒き巨体より放たれるのは無数の雷光。

能力はほぼ通用しない黒い霧の中、己の能力だけが使用できるという理不尽。

そんな圧倒的なまでの暴力を前にしても、大神槍悟が揺らぐ事は無い。

「貫け、《必滅の槍》よ！」

999

把桐羽衣わきりうい

《戦乙女》ヴァルキユリア

た槍悟は、その言葉と共に己へと殺到する雷光へと鋭い切っ先を射出した。

普通ならば、間に合うはずも無い。

しかし　　最強の能力者の力は、その道理すらも捻じ曲げる。

彼の周りに配置されていた槍たちは瞬時に加速し、本体たる槍悟へと雷光が到達する前に、その全てを吹き散らしたのだ。  
その様はまるで、実体の無い雷を貫いたかのように。

とはいえ、どれだけ強大な力を操り相手の力を迎撃したとしても、否が応でも動きは止まる。

そしてその隙を、ニーズホッグが見逃す事はなかった。



「 ツー！！ 」

短く鋭い叫び声。

それはHの力を伴って強大な衝撃波となり、槍悟の体を打ち砕こうと襲い掛かった。

人体を容易く碎き、その衝撃の余波のみで舞っていた木の葉達を容易く粉碎するその威力。

しかし、それほど力が相手だとしても、槍悟は一步たりとて退く事は無かった。

射出した槍は残っていない。今現在彼に動かす事が可能な武器は、その手に残った一本の槍のみだ。

槍悟はそれを深く構え Rの加速と共に、一直線に突き出す。

「 おおッ！ 」

その一閃は音を置き去りに、純粋な破壊力を一点に伝え、放たれた破壊に穴を開ける。

そして次の瞬間、彼の一閃を追うように発生した衝撃波が、ニーズホッグの一撃を喰い破り、巻き込んで逆流する。

流れ出たその力に、ニーズホッグは三対在る翼の内の一対を使い、己の身体を包み込むようにして防御していた。

能力によって現象を発生させたわけではなく、力と技量で放たれた一撃は、例えその能力領域が在るうとも弱める事は出来なかったのだ。

そしてその流れに乗るように、槍悟は強く足場を蹴る。

「防げるか？」

相手の視界を塞ぎ、接近戦における脅威である重力波を封じる。

その上でニースホッグへと接近した槍悟は、構えた槍を翼を突き破るかのよう<sup>レイヴァテイン</sup>に真っ直ぐと突き出した。

《災いの枝》ですら簡単には傷つけられなかったその翼膜。

しかしながら、槍悟の突き出した《必滅の槍》<sup>グングニル</sup>の一撃は、それを容易く突き破り、その奥へと込められたプラーナを炸裂させた。

『G a A A A A A A A ツ！』

その極光に身体を焼かれ、ニースホッグは苦悶の咆哮を響かせる。しかしながらその翼を振り払い、黒龍は至近距離で強大な竜巻を発生させた。

手を弾かれ、僅かながらに体勢を崩していた槍悟は、思わず眉根を寄せる。

竜巻は瞬時に槍悟の体に襲い掛かり 瞬時に抜き放たれた《必

滅の槍》<sup>グングニル</sup>が、その暴風と衝突した。

「ぬ、う………！」

横薙ぎの《必滅の槍》<sup>グングニル</sup>による一閃は、込められたプラーナが不完全であるにもかかわらず、ニースホッグの竜巻と拮抗する。

しかしながら、それはあくまでも危うい均衡の上。

そこから力を込め、押し返すというのは無理な状況であった。故に、槍悟は即座に押し返すと言う選択肢を排除し、足場を強く蹴って後退する。

強烈な風に乗るようにしながら己を加速させ、それでも、その一瞬前に吹き抜けた風の刃が、槍悟の腕を浅く斬る。

「ッ！」

初めて傷を負い、けれど、その程度で彼が冷静さを欠く事は無かった。

己へと襲い掛かる風の刃を正確に迎撃しながら、もう一つ生み出した槍を投げ放って巨大な竜巻を吹き散らす。

そして槍悟は足場へと着地し、左腕についた傷を押さえる。

僅かに滲む血は、灰色の外套を少しだけ染めるが、対して、ニーズホッグはすでに受けた傷を再生させつつあった。

駆け引きだけを見れば痛み分け、結果だけを見れば槍悟が確実に不利。

しかしながら、それでも彼は決して苦々しい表情を浮かべる事はなかった。

「貴様の力を流石と言うべきか、それとも私が衰えたのか」

眩きながら、槍悟は己のプラーナを傷口へと集中させる。

ソウイル Sなどの治癒やウルズ、テイワズ Tの自己修復を持たない以上、傷を再生させる事は出来ないが、それでもある程度の止血と痛み止めは可能だった。その場しのぎの治療でしかないものの、戦闘続行に支障は無い。

そして再び向かってきているニーズホッグへとその槍を構え  
槍悟は、ふと感じたプラーナの波動に目を見開いた。

それは、全てを包むような黄金のプラーナ。擬似的に作り出された  
羽と共に舞い降りるその力は、紛れもなく彼の娘のものであった。  
彼女の気配に今の今まで気付かなかった事実に対し、槍悟は小さく  
苦笑を零す。

「やれやれ、少々童心に返ってしまったか」

そんな呟きと共に、槍悟は手に持った槍を力強く振るった。  
それと共に吹き荒れた衝撃波は、嵐を纏って突撃してきていたニー  
ズホッグと衝突、互いの力は一瞬だけ拮抗し　そして、相殺さ  
れる。

互いに弾かれるように後退しながら、槍悟はふとその視線を上空へ  
と向けていた。

そこに在るのは、黄金の髪をたなびかせながら光の翼を広げる少女

大神美汐。

彼女の力たる《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》は、槍悟へと余す事無く降り注い  
でいた。

その輝きを一身に受けながら、槍悟は再び笑みを浮かべる。

「娘の手前、無様を晒す訳にも行かん。故に、名残惜しいがそろそ  
ろ閉幕としよう」

放たれた言葉は、何処までも穏やかなもの。

しかしそこに秘められた闘志は、今までに比しても尚強いものであ

った。

ゆっくりと構えられた槍は、最大の力を最高のタイミングで伝える為のもの。

変わらぬ槍の一閃ではあったが、込められたプラーナの量は、槍悟自身のものに加えて美汐の力も上乘せされている。

一度解き放たれば、ニーズホッグと言えど防ぎ切ることは出来ないだろう。

それを本能で理解しているからこそ、ニーズホッグは警戒し、その力を高ぶらせてゆく。

と その刹那、空気が弾けながら引き裂かれる音が響いた。

「そつちばっか見てつと」

響く声は、大神徹のそれ。

大きく振り回されるその手からは、伸びる一条の雷光が巨大な銀の槌へと繋がっていた。

その雷はまるでロープであるかのように《雷神の槌<sup>ミョルニル</sup>》を繋ぎとめ、ハンマー投げの如くそれを旋回させている。

強大なプラーナの込められた大質量は、まるで弾丸のように宙を駆けていた。

そしてそれは、一度大きく上空へと振り上げられ 見上げるほどに巨大な鉄槌へと変化する。

「ぶつ潰されんぞおおおおおッ！」

『！っっ』

そして、山すらも叩き潰さんとするような一撃は、容赦なく振り下ろされた。

本来の大きさですら既に十分すぎる重量を持っていたそれは、最早破壊の権化と言っても過言では無いほどの威力を秘めている。

その上で放たれた強大な一撃に、ニーズホッグは確かに脅威を感じ、その力を振り下ろされる戦槌へと向ける。

黒き靄の領域は磁力操作によって位置調整されていた槌の制御を外し、その上で操られた重力によってあらぬ方向へと攻撃は逸れてゆく。

違和感を覚えるほどに、酷く理性的なその対応。しかし　そこ　に、冷たい雨が降り注いだ。

『G r …… ツ!?!』

美汐を避けるようにして、天より降り注ぐ雨。

周囲の海面より引き上げられた水がIの力を帯び、その水自身を凍らせる事なく広く降り注がせる超高度なファンクション。

その水自体は実物であり、ニーズホッグの能力を以ってしても打ち消す事は出来なかった。

そしてそれを全身に浴びたニーズホッグは、周囲の廃墟と共に全身を凍て付かせてゆく。  
それは即ち

「よくやった、徹」

槍悟にとって、十分すぎるほどの隙であった。

刹那の間に接近し、槍悟はその槍に全霊を込めて突き出す。

その一閃は、Uのルーンウルスで強化されているニーズホッグの鱗を紙か何かのように突き破り

「私の いや、私達の勝ちだ、宿敵よ」

解放されたプラーナが、ニーズホッグの巨体を粉碎していた。





「ッ……！」

上空から大神槍悟の姿を確認し、涼二は小さく息を飲む。その姿に対して怒りを感じる事は確かであるが、涼二は今それ以上に、強い戦慄を感じていた。彼の一闪より放たれた、極大の破滅。その威力は、涼二が全力を出そうとも届かぬ程のものであった。黄金の輝きはニーズホッグの巨体を突き抜けながら駆け抜け、水没した都市を真つ二つに斬り裂いてしまったのだ。海が真つ二つに避けた光景は、先ほどのニーズホッグとムスペルヘイムの戦闘でも見れたものではある。しかしこの規模は先程よりも遥かに大きく、破滅的であった。だが

「まだ、です」

眼下の光景を見つめる涼二の隣から、そんな雨音の音が響く。彼女はじつと涼二と同じ光景を見つめ、普段柔らかなその表情を硬くしながらじつと睨むように視線を細めていた。普段の彼女には無い厳しい表情。それを認め、涼二は離れた場所に浮遊している美汐へと向けて声を上げた。

「美汐、まだまだ！ まだ終わっていない！」

「うん、分かった！」

予め警告はされており、さらに先ほど戦った時にも致命傷から再生した場面を見ている。

故に、美汐が警戒を怠る事は決して無かった。

彼女は声を張り上げ、下界にいる父へと向けて大きく声を上げる。

「お父様、まだです！ ニーズホッグはまだ倒れていません、再生しようとしています！」

その言葉が届いたのだらう、槍悟は再び油断無く構え、砕け散ったニーズホッグへと警戒を向ける。

そんな彼の様子からは視線を外し、涼二は雨音の視線を追うように砕けた黒龍の破片へと集中した。

大神槍悟の動向に意識を奪われそうになるのは事実であったが、今はそこに集中するべきでは無い。

彼に力を使わせた上でニーズホッグを倒す

その為には、ニ―

ズボツグを確実に葬る手段を探る事も必要だったのだ。とは言え、涼二にはそれを探る手段など存在してはいない。彼にとつての頼みの綱は、隣にいる少女のみであった。

「……………どうだ、雨音？」

「少々遠いですけど……………少しだけ、感じ取れます」

雨音の深い蒼の瞳は、そのプラーナの輝きによって僅かながらに  
燐光を放っている。

彼女の持つSソウルの力、そしてそれによって鍛えられたプラーナの流れを感じ取る能力は、既に涼二のそれを遙かに超えていた。

雨音は僅かながらに己の力を放ち、それをプラーナの流れに混ぜる事によって、その流れの向きを見極めようとしている。

忙しなく動く彼女の視線は、無数に分岐しているであろうプラーナの流れを観察し、その収束点を探っていた。

「……………涼二様、再生が始まります」

「分かるのか？」

「はい、プラーナが活性化しています。沢山吸収してあったプラーナを燃料にしている……………」

そう呟く雨音の表情は、悲しげに曇っている。

心優しき彼女には、人間を喰らうニーズボツグの所業は耐え難いものであった。

けれど、彼女がその視線を外そうとする事は無い。人々の行く末を哀れんだ所で、雨音にとつての家族の助けにはならないのだから。

故に、例え辛かったとしても、雨音はその有様を直視し続けていた。そして、その僅かな刹那の真実を、確かに感じ取る。

「あそこ……」

「！ 雨音、まだ口にするな」

「……いいのですか？」

「ああ。すべき事を見誤るな…… つつてもまあ、俺の都合だがな。だが頼む、まだ口にしないでくれ」

涼二のそんな言葉に、雨音は僅かながらに笑みを浮かべて頷く。そんな彼女の表情に、逆に涼二の方が驚き目を見開いていた。

心優しい存在である彼女が、人を見殺しにするような選択肢に快く応じるとは思っていなかったからだ。

涼二の浮かべた驚愕を認め、雨音は小さくクスクスと笑い声を零す。

「涼二様、私にとって最も大切なのは、私に陽だまりをくれた『家族』です。そんな貴方を悲しませた方を、私は許しません」

「……お前は、いいのか？」

「この状況なので、貴方は貴方の事だけを考えてください。私は、貴方に付いて行くだけです」

何の事は無い、ただ単に、彼女にとって最優先すべきは『家族』である、ただそれだけの事なのだ。

それは、ある種涼二にも近い在り方。まだ完全にその想いを遵守しているわけでは無いが、それでも己の道を信じ、進もうとする強さがあった。

それこそが己自身であると、言わんばかりに。  
そんな彼女の姿に対し、涼二は小さく嘆息を零す。

「……悪いな、雨音」

「いいんです。貴方は、貴方のすべき事を見失わないでいてください、涼二様」

自分の事は気にしなくていいから　　という、その言葉。  
それに胸中で感謝の意を告げ、涼二は再びその視線を下方へと向ける。

ニーズホッグは、今まさに再生を果たそうとしている所であった。

\* \* \* \* \*

「何だよ、そりゃ……！」

渾身の一撃を放ち、半ば脱力していた徹　彼は、目の前の光景に対して搾り出すようにそう呻き声を上げていた。

全力の攻撃は防がれたものの、大きな隙を作る事に成功し、それを逃さなかった父の一撃によって二ースホッグは倒された。

絶大なる力によって、その身は完全に打ち砕かれた筈だったのだ。

しかし、それで終わる事はなかった。

二ースホッグは、粉々に砕け散ったにもかかわらず、先ほどの戦闘の最中に見せた回復力を依然として持ち続けていたのだ。

それは、先ほどの戦闘以上とも言える極大の理不尽。

ほぼ全力をぶつけて尚効果が無いのであれば、どうすればいいのか

「ふむ、面倒だな」

ふと、そんな声が響いた。

その言葉に、徹は思わず目を見開きながら、声の方向へと視線を向ける。

そこには、依然として変わらぬ様子で前を見続ける父　　槍悟の姿があった。

彼の立ち姿は悠然としており、決して目の前の光景に対する畏怖な

どは存在していない。  
そして彼の態度の中には、欠片として絶望というものは存在していなかった。

これほどの力を前に、決して己の敗北を信じていないのだ。

槍悟は小さく嘆息すると、プラーナを放出しきった槍を手放し、新たな槍をその手に形成する。

再生途中のニーズホッグは、未だ活動を再開していない。

故に、今この機会に全て滅ぼすと　　そう言うかのように。

そして、大神槍悟は今度こそ全力を発揮する。

ワイアド

小さく、しかし鋭く囁かれたその言葉は、誰の耳にも届かなかっただろう。

けれど、その一言によって、槍悟のプラーナは更に燃え上がった。力は力で圧倒する。それを体現するかのごとく、彼の力は膨れ上がり　　手に持つ槍へと収束していった。

そこに込められた力は、先ほどの一撃のように巨大では無い。

けれどそれは、鋭く研ぎ澄まされたものでもあった。

先ほどの一撃が巨大な鉄槌による破壊ならば、この一撃は鋭い名刀の一閃。

「先ほどまでの見戯とは違う……これを避けられるか、宿敵よ？」

その言葉と共に　　大神槍悟の黄金は、投げ放たれた。

そこに込められた力は、秘されし25番目のルーン。  
四つ目のルーンの力を解放した槍悟の槍は、今まさに再生を完了させようとしていたニーズホッグへと突き進み　その身体に、無数の風穴を開けた。

「　　ッ！？」

その破壊力に、ニーズホッグは堪らず声にならぬ悲鳴を上げる。

見る事も　否、攻撃を受けた事すら知覚できない最速。

攻撃を放った瞬間には命中している、正に《必滅》を冠するに相応しい攻撃。

それは紛れもなく、誰も見た事の無い大神槍悟の本気であった。

普段ならば宣言せずとも発動しているその力を、あえて意識的に発動する事により、その出力を爆発的に高めている。

無論、消費する力の量も跳ね上がってはいるが、この場に美汐がいる以上圧倒的な優位に立てる事は事実。

故に

「どこが核かは知らぬが、全て塵と化せば同じ事だ」

理論的に言えば、確かに間違いでは無いだろう。

しかしそれは、<sup>フェアプレイ</sup>神話級ですら本気でなければ掠り傷一つ負わせられぬ相手に対してあまりにも非現実的すぎる。

だがそれは、槍悟にとっては当たり前すぎる答えであった。

その身から放たれるのは、莫大なまでの　人の身から発せられている事が信じられぬほどの力。



それによって現れるのは、ワイアドの力を纏った無数の槍の隊列であった。縦に並ぶそれらは、まるで相手を威圧するかのように静かに佇んでいる。

それは確実に仕留めるといふ撃滅の誓い。《ヴォルスング・サガ光輝なる英雄譚》のバツクアツプを存分に使い、槍悟はその力を引き出していた。

「消えよ。貴様は我が宿命ワイアドでは無い」

宿命を表す運命のルーン、ワイアド。

その力によって形成された無数の槍を背に、槍悟は腕を振り上げる。それと共に、縦に並んでいた槍達は、一斉にその矛先をニーズホッグへと向けた。

そしてその絶対の破滅を　彼は、容赦なく解き放つ。

「　貫け、《グンゲニル必滅の槍》」

無数の槍は空を裂く音を奏で、ニーズホッグへと殺到する。

最早目視は叶わない。再生すらも叶わぬ速度と威力で、槍悟の攻撃は襲い掛かる。

それを理解していたのだろう、ニーズホッグもまた、その力を周囲へと解き放つ。

能力を阻害し、その必中性をキャンセルしながら無数の槍を迎撃する　本来ならば、それが出来たはずであった。

けれど、この場に立っているのは娘の力によって更なる力を得た最強の能力者。

対等な条件でないのならば、その攻撃を受け止め切れる道理は無い。

』

ッ！！』

無数の槍は黄金の軌跡を僅かに宙に残して疾走する。

それらは一つ一つが必殺の力を持ち、ニーズホッグの身体を抉り、消滅させていった。

その僅かな肉片すらも容赦せず、飛び交う槍達はニーズホッグの肉体全てを破壊してゆく。

そして 僅かに残ったのは、地面へと落下してゆく白い物体だった。

「あれは……！」

その様を見つめ続けていた美汐は、僅かな驚愕を声に浮かべ、そう呟く。

漆黒の体を持っていたニーズホッグに似つかわしく無いそれは、白骨化した人間の死体であった。

小さな子供ほどの大きさであるそれは、自由落下に任せて地面へと墜落してゆく。

それを見つめ、大神槍悟はただ変わらぬ様子で槍を手にしていた。

「憐れよな」

槍は、再び黄金の燐光を放ち始める。

それは黄昏の光にも似て、人を包み込むような輝きを放っていた。あたかも、それが手向けであるかと言つかのよう。そして彼の手にある槍は、ゆっくりと投擲の姿勢へ移行した。構えながら、槍悟はただ淡々と 偲ぶように、声を上げる。

「せめて安らかに眠るが良い」

その言葉と共に、最後の《ケングニル必滅の槍》は解き放たれた。

真っ直ぐに飛んだ槍は、その名に恥じず白い骨に命中し、その身を完全に破壊する。

ぱきん、と軽い音を立て、白い骨は ニーズホッグの本体は、その役目を終えた。

黄金の光の中より一筋の光が駆け抜け、それは誰もが気付く間もなく天へと消える。

そして、辺りは完全なる静寂に包まれた。

「終わっ、た？」

ポツリと、小さな声が響く。

美汐のその声は、静寂に包まれた廃墟に響きわたる。そしてその言葉、その意味を、周囲の者達はゆっくりと理解した。

数瞬の後 美汐は、大きく歓声を上げる。

「やった！ お父様、勝ったんだ！ 凄い、凄いよ！ 流石」

「否……まだまだ、そうであろう？」

歓声を上げながら飛来する美汐を押し留めるかのように、槍悟はそう口にする。

美汐は身軽に彼の傍に着地しながらも、その言葉に首を傾げながら周囲へと視線を走らせていた。

周囲は先ほどの戦闘が嘘であったかのように静寂を取り戻しており、最早プラーナの活性化が起こる気配も無い。

「どうして？ もう、ニーズホッグは倒したのに」

「何、私に用がある者がいるようなのでな」

「お父様に？」

槍悟はその言葉と共に視線を上方へと向け、美汐もそれを追うように視線を上げる。

故に、彼女は気付けなかった。槍悟が、半ば苦笑のような表情を浮かべていた事を。

上空に浮かんでいるのは、《<sup>ナゲルファル</sup>爪の戦船》。

二人の視線を受け、それに答えるかのように　そこから、幾人かの人影が身を躍らせた。

その姿は多種多様、しかし　ごく一部を除いて　高所からの飛び降りにもまるで堪えていない様子であった。

降りてきたのは、甲冑を纏った男とそれに抱えられた少女、黄金の人狼とそれに背負われた和服の少女。

そして　コートを纏う深い青紫の瞳の男。

突如として降りて来た彼らに、美汐は思わず首を傾げる。

「涼二君？ 一体何を」

「ふむ……《フロースワイトニル悪名高き狼》」

ふと、槍悟が声を上げる。

彼は視線を走らせると、双雅からゆっくりと桜花の方へとそれを動かした。

「そちらは《ミスガルスオホルム世界を喰らうもの》か」

「え……！？」

そんな槍悟の言葉に、美汐は目を剥く。

そしてその周囲、破滅の三柱の存在を知る者は、揃って驚愕の表情を浮かべ、彼女の事を凝視する。

そんな中、槍悟は変わらぬ様子でその視線を動かし、それを、涼二の方へと向けた。

「そして、《ニガルヘイム氷獄》……いや」

と、僅かながらに槍悟の表情が揺らぐ。

表現しがたいそれは、僅かながらの悔恨であっただろうか。

彼はがじつくりと噛み締めるようにしながら口にしたその名は、涼二とは別の人物を表すものであった。

そう、それは

「今まで、そんな場所にいたというわけか、《死の女王》<sup>ニザルヘル</sup>」  
「ああそうだよ、この日を心待ちにしていたんだ、《必滅の槍》<sup>クングニル</sup>」

今、ここに 破滅の三柱と、最強の能力者が邂逅したのだっ  
た。

05・8：辿り着いた答えは

（何でだ？ 一体どうして ）

送られてくる情報を次々と捌きながら、詩樹悠は思考の片隅でそんな事を考えていた。

その原因となっているのは、前線より送られてきたニーズホッグとの交戦映像。

強力な能力者の戦闘データとして記憶していたのだが、その中の一部に違和感を覚えていたのだ。

それは他でも無い、涼二の戦いについて。

（涼二は何でここまで手加減してる？ プラーナの節約をしたいのは分かるけど、コレはいくらなんでも手を抜きすぎだ）

悠は、涼二の戦闘記録を誰よりも知っている。

故に、今回彼が戦闘時に殆ど力を入れていなかった事に気付いていたのだ。

悠としても、涼二が槍悟との戦闘に備えている事は理解出来ている。しかし、かつての仲間がいるその場所で、ほとんど人任せにしていた理由が分からなかったのだ。

彼はそんな事をする人間ではないと、悠はそう思っているのだから。

(旧東京での戦いもそうだ。使ったのは《氷雨》フロステイレンを一度だけ……しかも、規模は最低限だ。

涼二のプラーナ量なら、多少力を使ったって、一度の全力戦闘には何ら影響は無い。

節約しなきゃならないような状況なんて、それこそ長期戦を想定しているような場合だけだ)

氷室涼二は、始祖ルーンを使わずとも始祖ルーン能力者を制する事が出来る、悠の知る中でも稀有な人物だ。

能力の出力のみではなく、その緻密に計算された制御能力こそが武器であるとも言える。

故に、必要以上の力を使わない事は頷けるが、今回のそれは弱すぎたのだ。

(……考え方が違う？ 手を抜いたんじゃないじゃなくて、手を抜かざるを得ない状況だった？)

そこまで考え、悠は小さく嘆息する。

そのような状況に陥るとしたら、それは己の力を隠さなければなら



ないような場合のみ。

そしてそれに関しては、涼二は既に行っているようなものであった。二つの始祖ルーンの力　　涼二の実力を知っている槍悟に対して隠さねばならないのは、その二つの力程度である。

故に、槍悟の前で力を隠す事に意味は無い。

（今回はそんな状況って言う訳じゃなかった。以前より成長した力を隠すにしても、そこまで手を抜く必要は無い。

むしろ、不審に思われる可能性だってあるんだ。なら、他の可能性は　　）

そこまで辿り着き、悠は動きを止める。

ある一つの可能性、彼としてはとてでもないが信じたくないそれに、気付いてしまったから。

《並列思考》マルチタスクを停止させ、思わず己の頭を抱えながら、悠は震える声を上げる。

「そんな……まさか、そんな事」

信じられることでは無い。前例は無く、そのような事象が起こるなど考えづらい。

けれど　　思いついたその考えは、何処までも納得できる理論であった。

今までにそんな事例は聞いた事も無いと言う事は出来る。だが、能力の歴史は浅く、それだけの中で確かな事など口には出来はしない。何処までも不確かで、それ故に話しの上だけならば納得できてしま

うその言葉。

そして悠には、その過程を理論的に説明出来てしまっただけの知識があった。

「そうだ、涼二は前例の無い事だらけじゃないか。ルーンの移植……それも始祖ルーンを二つも。そして、四つのルーンを同時に運用している例だって」

「ゆ、悠君？ どうしたの？」

と ふとその場に、悠の様子を訝しむような声が響く。

そこにいたのは一人の少女、伊藤怜いとうれいであった。

悠の補佐官たる彼女はいくつもの書類を持ち、あちらこちらへと慌しく移動していたのだが 彼女の手を止めさせてしまったと、悠はバツの悪い思いで頭を掻きながら声を上げる。

「ゴメン、邪魔しちゃったね」

「うん、それはいいんだけど……どうしたの、様子が変わだよ？」

「うん……」

言い辛い言葉に、悠は一度言葉を切る。

そしてしばし逡巡し、脳裏で言葉を選びつつ、彼は声を上げた。その顔に、どこか硬いものを浮かべながら。

「思いついてしまった事があるんだ。これが事実なら、僕はもっと昔からこれに気付いているべきだった。」

もしかしたら涼二からのメッセージだったのかもしれないし、もしそうだったのなら気付けなかった僕のミスだ」

「ど、どういふ事なの？」

「……確証が無いし、君を不安がらせてしまうから、口にしたくは無。い。けど、怜。もしかしたら、君の力が必要になるかもしれない」  
「私の力が……？」

要領を得ない悠の言葉に、怜はただ疑問符を浮かべるのみである。しかしそれ以上の説明は行わず、悠は小さく苦笑して、腰掛けていた椅子から立ち上がった。若干硬くなった身体をほぐしつつ、その視線を真っ直ぐ前へと向ける。

そんな彼の様子に驚きつつ、例は手に持っていた書類を机の上に置いて問いかけた。

「悠君、どうしたの？」

「僕も出る。直接、涼二と話をしなきゃならない」

「え、え！？ でも、ミーミルは」

「僕の仕事は記憶する事だよ、怜。それだったら、後からでも十分出来る。書類の整理だけだったら、僕がいなきゃならない必要は無。いんだ」

それは事実であり、そして虚構でもあった。

曲がりなりにも彼はこのミーミルの室長であり、そしてそれに伴う責任が発生しているのだから。

彼自身それは理解しているし、その自覚もある。だが、今回ばかりは別であった。

自らの親友であり、尊敬する人物にかかわる事なのだ。ならば、今はこの仕事も優先順位は下である。

幸い、指示を出すだけならば己以外にも可能な人物は存在している。

「指示は別の人に任せる……僕は行くよ、行かなきゃならないんだ。今を逃せば、もうチャンスはなくなってしまいかもしれない」

「……本気、なんだね？」

「うん、その通りだよ」

揺らぐ事無く真つ直ぐと言い放たれる悠の言葉に、怜は思わず気圧され、そして深々と嘆息を零す。

こうなつては説得も不可能であると、そう気付いてしまったのだ。

そんな嘆息も吐き出しきれば、顔に浮かぶのは小さな苦笑。

それは、悠の事をどこまでも理解しているが故の笑顔であった。

「もう、仕方ないなあ、悠君は。こういう時は本当に頑固なんだから」

「あ、あはは……うん、ゴメン。迷惑かけるよ、怜」

「いいよ。たまにしか無いんだし、そういう一面が見られるのも楽しいからね」

そういつて、怜は嬉しそうに笑みを浮かべる。

そんな彼女の表情に安堵しつつ頷き、悠は出口へと向けて歩き出した。

向かう先は、彼らの戦いの場。

本来ならば出向いた所で役には立てないその場所に

悠は、足

を踏み入れようとしていたのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

どれほど、この瞬間を待ちわびただろう。

ただただそれだけの思いを胸に、涼二は真つ直ぐと視線を上げる。

その先にいるのは、飛びついてきた美汐を受け止めた体勢のままの  
仇敵　　大神槍悟。

しかし、その姿を思い浮かべただけで抑え切れぬほどに燃え上がった  
ていた筈の殺意は、いざその存在を目の前にしてなりを潜めていた。

(いや)

膨大な憎しみは、未だ己の中にある事を涼二は自覚していた。ただ、今はそれが振り切れて、逆に冷静になってしまっている。それすらも好都合だと切り捨てて、涼二はただその瞳を　　かつて、目の前の男に殺された姉の持っていた、青紫の瞳を向ける。

「……………今、《死の女王<sup>ニツルヘル</sup>》と言ったな。覚えているのか、姉さん……………氷室静奈<sup>なかし</sup>の事を」

「成程……………貴公は、あの少女の背負っていた少年であったか。ああ、覚えているとも……………片時も忘れた事は無い。私がこの手で殺めたのだからな」

その言葉に、傍にいた美汐が目を見開き、槍悟の事を見上げる。彼女も、ユグドラシルが決して口には出せぬような事をしてきたのは知っている。

しかしながら、その矛先が涼二の身内にも向かった事があるとは知らなかったのだ。無論、これを知っているのは極僅かな人間だけなのだが。

涼二はそんな美汐の反応を無視しつつ、槍悟の瞳から目を逸らさぬようにしながら声を上げる。

まるで、嘘偽りを許さないとも言つかのように。

「どうして、殺したんだ。俺達は何もしていなかった。ただ、生き残る為に逃げ回っていたただけだろう。それなのに何故だ、何故姉さ

んを殺す必要があった」

強くありつつも荒げられてはいない、けれど有無を言わさぬ口調で、涼二はそう言い放つ。

対し、槍悟はその瞳を閉じて小さく息を吐き出していた。

それはどこか諦観の混じった動作でもあり、涼二はぴくりと眉を動かす。

周囲の視線の集まるなか

槍悟は、ゆっくりと声を上げた。

「私のエゴだ、言い逃れなどせぬよ」

「ッ………どういう、意味だ」

荒げられそうになる言葉は、灼熱に燃える憎しみの中で逆に冷静なもの化する。

しかしそのそこに込められた感情には気付いていたのか、槍悟は小さく息を吐くと、それを真っ直ぐに受け止めながらに声を上げる。そこにはどこか、己の過ちを悔いるかのような色が含まれていた。

「何の事は無い。ただ、『死にたくなかった』………ただ、それだけなのだよ」

「そんな、物………姉さんだって同じだったに決まってるだろう!」

「ああ、然り。実にその通りだ 故に言い逃れなどはせぬ、懺悔もしない。私は、私のエゴで奪った命を、一瞬たりと忘れてはいない」

罪の告白であつても、懺悔ではない。赦されない事は知っているし、赦されようとも思わない。

それだけの硬い意志を込め、槍悟は言い放つ。しかし真つ直ぐと立つその姿は、決して断罪を目の前にした囚人のものではない。

それすらも捻じ伏せて進もうとする、覇者の姿であつた。

「《予言の巫女》<sup>ヴォルヴァ</sup>も、我が力も……私の死を予言した。そして、私の近しき者達の死を予言した。

貴公も私と同じく、何よりも家族を大切としていた者だろう、《氷獄》<sup>ヘイム</sup>。

私がユグドラシルを創つたのは、その障害となる多くを排除したのは、全て我が愛しき者達の為だ」

その言葉に、多くの人間が息を飲む。

全ては自分の為　　今の日本の姿すら、家族が安らかに過ごせるように作り上げた箱庭に過ぎないと、槍悟は言い放つ。

そしてその思いは、涼二にとつても理解できるものであつた。そして同時に

「　　そんなモノ、知るかよ」

至極、どうでもいいものでもあつたのだ。

槍悟が幸せを求めた為に己の姉が犠牲になつたのは確かな事で、故に涼二にはその幸せを認める事は出来ない。

彼にとつての事実はたった一つだけ。愛する家族が、永遠に失われ



たと言う事だけだ。

「この世界が、どんなに素晴らしいものになったって関係ないんだよ、大神槍悟。

そこに姉さんがいないんだ。貴様が何を創ったって、美汐がどんな世界を導いたって、俺には関係無い。

姉さんがいない、いないんだよ。そんなモノはどれも同じだ、何の価値も無い、塵芥も同然だ」

その言葉に、美汐は傷付いたように眉根を寄せる。けれど、涼二がそれを気にかける事はなかった。

美汐が素晴らしい世界を創るのは事実だろう。客観的に見て、彼女ならばこの混迷した世の中を導く事は出来る筈だ。

それを言葉で理解していたとしても、涼二にとっては何の意味も無い。

全てが価値の無いものだから 彼にとって唯一価値のあるものは、永遠に失われてしまったから。

ここに来て、涼二の価値観は、かつての 桜花達と出会う前  
のものに戻っていた。

たった一つの渴望を抱き、他の全てを拒絶していた頃の彼に。

けれど、唯一違っている事は 大神槍悟という『他人』に対し、憎悪と言う『感情』を抱いている事。

「だから貴様は死ぬ、大神槍悟。貴様の幸せなんて認めない。貴様は二度と幸せなんか感じるな」

「貴公か、私か……貴公が私の成れの果てであったのかも知れぬと

いうのは、確かにその通りなのかも知れんな。故に、貴公の刃には  
応えねばなるまいて」

そう言い放ち、進み出ようとした槍悟の前に、立ちはだかる姿が  
あつた。

大神美汐　　誰よりも、槍悟自身が護ろうとした彼の愛すべき家  
族。

彼女は瞳に涙を溜めながら、涼二と相互の間を遮るように立ち、声  
を張り上げる。

「ダメだよ、こんなのダメ！　お父様も涼二君も、こんな間違っ  
てる！」

「ああ、そうだな」  
「然り、このような答えが正しいなどは片腹痛いだろう」

二人のその言葉に、美汐は思わず絶句する。

彼らはあまりにも当然のように、己自身の言葉を否定したのだ。  
しかし、それもある種当然と言える。

何故ならば　　彼らにとつて、正しいか正しくないかなど、価値  
観の片隅にも引つかからない言葉であつたからだ。

「美汐、お前は下がれ。お前は関わるべきじゃない」

「嫌、嫌だよそんなの！」

「下がれ、美汐。お前は、この先この世界に必要な人間だ。我等の  
ようには行かぬだろう」

あまりにも当然のように、槍悟は己の価値を切り捨てる。  
そして、涼二もまた内心その言葉に　　不本意ながらも　　そ  
の言葉に同意していた。

自分達はこの世界に必要無いと、そう信じきっていたから。

「元より、人には過ぎたものだったのだ。このような力が溢れたか  
ら、我々の求めたものは衝突した。」

これは人にあらざる、人を超越したものが持つべき力なのだ。故に  
力を持ったが故に狂った者は、此の世に在るべきではない」

「忌々しいが、同感だ。消えるのは貴様だがな」

「違う、そんなの絶対に間違ってる！」

美汐は　　手を取り合う道を選ぶ少女は、二人の言葉にそう叫  
ぶ。

皆が生きて、並んで歩く事が出来る道。

今この場に生きているのなら、その道がある筈だと信じる。それこ  
そが、大神美汐の信じたもの。

それ故に、二人のその結論を認める事は出来なかったのだ。

故に彼女は叫ぶ　　助けて、と。

「お願い……二人を、止めてッ！」

瞬間　　幾つもの影が、彼女の前に割り込んでいた。

それは緋色の剣を持つ少女であり、巨大な鉄槌を構える青年であり、

白衣を纏った男性であり、神速を宿す男達であった。

「涼二……それが、理由だったんだ」

「だが生憎と、そいつを認める訳にはいかないな」

立ちほだかったのはかつての友人。

しかしそれを前にして、涼二の凍りついた瞳が動く事はなかった。元より、この展開は最初から予想していた事であったのだ。

そしてそれは、彼の後ろに立っていた者達も理解している事だった。

「よオ、俺はどいつを相手にすりやいいんだ？」

「ゴメンね夜月、もう一度頑張つて」

「あの白衣の男だけは譲ってもらおう……アレは、私の相手だ」

「ああ、頼んだ。双雅、桜花、ガラム……それに、雨音」

視界の端で、地面に降ろされた少女が微笑む。

それを認め、涼二は一度目を閉じ　そして、真っ直ぐと前を見据えていた。

その目に余計なものは何も映らない。ただ、在るのは倒すべき敵と、その間に存在する障害物だけだ。

最早遮るものなど、何も無い。

「往くぞ」

そして

最終戦争の火蓋は、切って落とされた。

「おおおおおおッ！」

真っ先に動いたのは、巨大な戦槌を持つ青年、徹であった。親しかった人物を相手に仕掛けあぐねている緋織たちを先導するかのように、彼は《雷神の槌》<sup>ミユルニル</sup>を手に涼二へと向かって突撃する。雷を纏う巨大な質量は、まともに受ければ一撃で打ち砕かれるであろう。だが、それに対して涼二はまるで反応しなかった。だが、それは決して諦めていると言う訳ではない。

「夜月、お願い！」

仲間の援護が在る事が、最初から分かっていたからだ。涼二を庇うように飛び出した桜花は、その腕に巻きついた黒い蛇を

掲げる。

彼女の腕の中から飛び出した夜月は、その量顎の下辺りに刻まれたルーンを起動し、瞬く間に巨大化してゆく。

そしてニーズホッグを越えるほどに巨大化した夜月は、振り翳したその尾で徹の身体を打ち据えた。

「ちっ！」

徹は咄嗟に《雷神の槌》<sup>ミョルニル</sup>でその攻撃を受け止める。

しかしその巨大な質量を受け止めかね、彼の体は大きく撥ね飛ばされた。

それでも、<sup>ウルズ</sup>ウの始祖ルーンを持つ徹の体に、ダメージと呼べるダメージは存在しない。

それを理解していたのか、夜月もまた彼を追ってその長大な身体を這わせながら追っていった。

桜花もそれを追うように、ビルの上から隠れながらその姿を消す。

そして入れ替わるように、神速の影が二つ、涼二へと向かう  
それを受け止めるのもまた、神速の獣だった。

「おおつとオ、行かせる訳にはいかねエな」

「ち……ッ」

「退けよ、隊長を止めなきゃならないんだ！」

ムスペルヘイムの副隊長たる新森と、その部下であるシャル。  
対するは、《<sup>フロースヴァイトニル</sup>悪名高き狼》たる上狼塚双雅。

彼の姿は既に、獣の如き鎧を纏ったそれへと変貌していた。背中からは四つの大鎌が伸び、尻尾のような連結刃が揺れる。そんな重装備にもかかわらず、双雅の動きは神速で駆ける新森たちに引けを取らない。否、それすらも上回る速度で動く事が可能であった。

鎧の奥で嗤いながら、黒銀の獣は咆哮する。

「こいつの邪魔をすんな雑魚共が！ この戦いこそがこいつの全てなんだからなア！」

「ぐツ！？」

「うおっ！？」

双雅はそう叫びつつ、二人の体を掴んで脇へと投げ飛ばす。

そしてそれを追うように、彼もまた戦場へと飛び出して行った。

その姿を見送る事もなく、ただ真っ直ぐと前を見据える大神槍悟は、隣に立つ男へと問いかける。

「ふむ……貴公は行かぬのか、《豊穰の飛劍》<sup>ユングリング</sup>」

「私と彼は相性が悪いもので。創り出した傍から凍て付いてしまっ  
ては、こちらも制御ができぬと言うものです。」

ルーンの差を埋めて余りあるほどに、彼の制御力は素晴らしい。まあそれに……私に用がある者もいるようですよ」

中指で眼鏡を押し上げる豊崎の視線は、涼二の横、そこに立つ黄金の人狼へと向けられる。

豊崎は知らない。彼が、いかなる経緯といかなる理由を持ってして、



この場に立っているのかと言う事を。

当の昔に過ぎ去ってしまった研究　そこに費やされた命の事など、記憶の片隅にも残っていなかったのだ。

そんな豊崎の姿を見つめ、ガルムは低く唸り声を上げる。

『涼……奴は、私が引き受ける』

「分かった……ここまでありがとうな、ガルム。お互い、目的を果たそう」

『ああ！』

力強い頷きと共に、ガルムはその姿を霞ませながら豊崎へと突撃していった。

その強靱な爪は、その先端だけでも届けは容易く人体を切り裂いてゆく。

しかしそれを阻むのは、伸び続ける大木の枝葉であった。

『オオオオオオオオッ！！』

「やれやれ、獣かと思いきや、理性はある訳か」

降り注ぐ刃の如き枝葉達を、ガルムは正確にその爪で破壊してゆく。  
Rの力で加速するガルムは、広い攻撃範囲を持つ豊崎の攻撃でも簡

単には捉える事は出来なかった。

小さく舌打ちした豊崎は、距離を開ける為にその幹を操り、ガルムもまたそれを追って飛び出してゆく。

轟音は瞬く間に遠くへ過ぎ去り　その背中を見送りながら、涼二の隣を歩み抜ける影があった。

「涼二様、私も行って参ります」

「……大丈夫なのか？」

「はい。ガラム様も心配ですから」

「俺の事は心配してくれないのか」

「勿論、一番心配しておりますよ。けれど、私では足手纏いにしかなりませんから……ですから、どうか」

そつと、雨音は涼二の手を握る。

革の手袋に包まれたその手　かつては、逆に雨音の方が手袋を嵌めていた。

今では逆転してしまったそれに小さく苦笑しながら、雨音は涼二の瞳を見つめて声を上げる。

「どうか、帰ってきてください、涼二様。私達、家族の元に」

「お前」

「では涼二様、『行ってらっしゃい』。私も、『行ってきます』の  
で」

そう告げて微笑み、雨音はその身体をプラーナで充足させる事によって強化し、ビルから飛び出していったのだった。

彼女の言葉に面喰らっていた涼二は、この戦いに入って初めて表情をその顔に浮かべる。

それは、いつも通りの苦笑に近いものであった。

けれどそれもすぐに消し、涼二は再び、その視線を正面へと向ける。その視界に入ってくるのは三人の人物　仇敵たる大神槍悟と、

その前に立ちほだかる二人の少女だった。

真紅に輝く炎の剣を構える緋織と、黄金に輝く光の剣を構える美汐。小さく息を吐き、涼二はその意識を集中させた。

「退け、緋織、美汐」

「嫌だ」

「退かないよ。友達が間違った道を進もうとしているなら、何が何でもそれを止める！」

力強く宣言する二人に、涼二は小さく息を吐き出す。

それは嘆息であり、どこか安堵のようなものでもあった。

もとより、彼女達はその言葉を発する事は分かりきっている。故に

涼二は、彼女達を退ける為に声を上げた。

「美汐、お前はその男の行いを　ユグドラシルが行ってきた事を知りながら、尚前に進もうって言うんだろっ」

「そうだよ、私は諦めない。誰かを犠牲にしたからこそ、私は皆が幸せになれる道を求め続ける！」

「ああ、大した女だ。だが……お前はどうか、緋織。お前は、ユグドラシルの行いを知ってどう思った？」

淡々と、ただ無表情に涼二は告げる。

元より、涼二は美汐の事を説得できるとは思っていなかった。

彼女の持つ理想は、涼二にとっての渴望に等しい。

それは互いに相反するものであり、永遠の平行線でしかない。いくら言葉を重ねたところで、妥協する点など見つからないのだ。

けれど、緋織は 彼女には、他の総てを擲ってでも求めようとするほどの渴望が存在しない。

「俺は、姉をその男に奪われた。先ほどの人狼は、ドヴェルクによつて妻子を奪われた。そして他にも、光まで奪われた者だっている。もう分かっただろう、緋織。俺がユグドラシルを抜けたのは……それが理由だ」

「ッ……けれど、それは！」

「他の多くを救う為、か。ああ、実に正しいな。より多い命を救うなら、俺だって一人一人なんて簡単に殺すだろうさ」

例えルーンと言う強大な力を持っていたとしても、それを選ばず全てを救うなど出来はしない。

宿命を操る事の出来る槍悟も、むしろその力ゆえに諦めたのだ。

それは決して間違いではない。全てを救う事が出来ないならば、多くを救う道を選ぶべきなのだ。  
けれど

「なら、その犠牲になった人間はどうすればいい？ 何を恨めばいい？ ただ、奪われたまま諦めて過ごせばいいのか？」

「それは、は」

「俺は、それが認められなかった。だから、その男の生が認められない。だからこそ、大神槍悟もまた、この戦いに応じたんだ。お前には……それを止めるだけの理由が、あると言つのか？」

涼二の怨嗟に満ちたその言葉に、緋織は声を失う。

以前も言った通りなのだ、そこに感情はあっても理性は存在しない。故に、涼二が言葉で止まるといふ事は無いのだ。

彼の発する怨嗟に対抗するには、それに匹敵するだけの感情がなければならぬ。

美汐にとってそれは、『皆と共に手を取り合って歩む世界』であり、槍悟にとっては『家族と自身が幸福を得られる世界』であった。

(私、は )

緋織は自問する。

何故、今己がこの場で迷っているのか、その理由を見つける為に。

何故自分は、彼に付いて行こうとしないのか。かつての自分ならば、迷う事無く涼二と共に歩んでいたと言うのに。 そんな自問が、緋織を満たす。

緋織は、かつて自身が涼二に依存していた事を自覚していたのだ。

彼以外に頼れる者の存在しなかったユグドラシルの中で、氷室涼二と言う先輩の存在は、緋織にとって絶対のものだった。

故に、彼が離反したとき、これ以上無いほどの大きな衝撃を受けていたのだ。

「私は……涼二が持っている理由を知った。それを理解できるなんて、無責任な事は言えない。

けれど、涼二が本当に、切実にそれを願っている……私だって、それぐらいは分かる」

かつての磨戸緋織であれば、彼の感情に賛同しただろう。

借り物の価値観に縋り、彼の敵を赦せぬと言い放っていたらう。けれど今、彼と共に歩みたいと叫ぶ感情を押さえつけているのは、それ以上に膨れ上がった感情の為だ。それは

「でも、それでも私は……貴方が、上官として最後に私に託した仕事を、放り出すなんて出来ない」

「……何？」

緋織は、伏せていた視線を上げる。

その瞳に宿っているのは、本当の決意に輝く真紅の炎。

ようやく見つけたと、そう叫ぼうとするかのような、感情の輝きであった。

「私はムスperlヘイムの隊長だ！ その仕事を、私の上官であった涼二から託された！ だから私は、最期までその仕事を完遂する

私は、涼二の部下だから！」

その叫びに、涼二は大きく目を見開く。

彼女こそがその場所に相応しいと、涼二はそう信じて隊長の位を緋織に託した。

けれど緋織の中にあつた心は、あくまでも『涼二の部下として任務を完遂する事』。

その姿勢のまま、彼女は理想の隊長であり続けようとして　　ついに、この場所に辿り着いた。

かつての涼二と同じく、隊員達から認められる隊長へと。

自らの古巣の事を思い出し、涼二は小さく苦笑する。

「……そうか。今の俺は、お前の上官とは言えないという訳か」  
「貴方が戻ってきてくれるなら、私はいくらでも貴方の命に従う」  
「やれやれ、また平行線か」

涼二は、もう二度と大神槍悟のいるユグドラシルを認められない。対し、緋織はただ純粹にムスペルヘイムの隊長であり続けようとする。

その想いは、決して交わる事は無い。  
ならば　と、涼二は笑みを消し、その視線を再び鋭いものへと変化させた。

「お前達は、俺の敵だ」

本来の氷室涼二にとって、他者は等しく無価値なものでしかない。その中で唯一価値のあるものは、大神槍悟という仇敵の存在のみ。しかし涼二はこの時、二人の事を『仇敵への道を阻む敵』として新たに認識し直していた。  
ここに存在するのは『道を作る仲間』と『道を阻む敵』　それは僅かながらに、涼二にとっても価値のあるもの。  
それが正であれ負であれ、涼二にとって他者への価値は、そこにしか発生する事は無い。

故に　　磨戸緋織は、この時初めて氷室涼二に認められたのだ。

涼二は、腕を広げる。

水に満たされた空間であるが故に、大気中の水分はそれなりに多い。その周囲の力を掻き集めながら、涼二はただ撃滅を宣言する。

「故に、お前達を本気で排除しよう。死なないように気をつけろ、お前達は次の時代に必要な人間なんだからな」

そんな時代など、涼二にとっては価値の無いものであったがそれは、元々依頼の一部。

涼二に残されたニヴルヘイムとしての最後の誠実さが、その言葉を告げさせていた。

二人は、そんな涼二の言葉に対し、僅かながらに悲しそうな表情を浮かべる。

けれど、それでも尚、二人が退くと言う事は無かった。己の掲げた願いの為に、決して退く事は出来ないと言うかのように。

「緋織ちゃん、チャンスは一度だよ」  
「分かっています」

既にプラーナの枯渇しかかった緋織たちでは、殆ど力を使っていない涼二に太刀打ちする事は不可能。それを理解しているからこそ、彼女達はただ一撃のみに全力を尽くす覚悟であった。

涼二はそんな二人へと、その右手を向ける。彼の周囲では無数の水球が発生し、それぞれがある形状へと変化していった。



「駆ける、《死を貪る北天》」  
フレスヴェルグ

それは、翼を広げた姿が2mはあろうかという大鷲。

その身体は、《氷雨》と同じく、触れただけで全てを凍て付かせる  
フロステイレン  
Iを纏った水で構成されていた。

高速で飛び交う鳥の、その体当たりを一度受けただけで致命傷となりうる力。

力の消費を最小限に、けれど効果は最大限に。

精密に引き絞られた力を、涼二は二人へと向ける。

「道を開ける　　高みの見物など、させてやるものか」

視線を二人へと向けながら　　その怨嗟は、いつまでも離れた  
場所に立つ仇敵へと向けられていた。



もたげられた巨大な頭部が、文字通り鎌のように振り下ろされる。その膨大な質量は《雷神の槌》のそれに匹敵し、振り下ろされる一撃では、いかな徹でも受け止める事は難しかった。

そのことに対し、舌打ちした徹は大きく跳躍してその攻撃を回避する。

極大の質量と速度によって振り下ろされた一撃によって、彼の立っていたビルは、まるで押し潰されるかのように拉げて砕け散った。

「バケモノばかりだな……！」

徹は舌打ち混じりに鉄槌を振り上げ、夜月の胴体へとその一撃を振り下ろす。

純粋な破壊力ではユグドラシルでもトップクラスに君臨するその力も、夜月に対しては有効打と言えるほどの威力を発揮する事はなか

った。

蛇として持つしなやかなその肉体は、鉄槌の一撃を受ける事であり、その威力を受け流してしまうのだ。

そも、夜月の身体はあまりにも巨大すぎる。その一点に攻撃した所で、ダメージと呼べるようなものを与える事は難しかった。

その巨体を蹴って飛び離れながら、徹は静かにその姿を観察する。

（コイツも、ニーズホッグと同じく始祖ルーン持ちの刻印獣か。ルーンフリーチャーそのくせ、人間に飼われてやがるってのはどういう事なんだか……）

胸中で呟きながら、徹は《雷神の槌》ミヨルニルを掲げ、その先端を夜月の方へと振り下ろす。

それと共に《雷神の槌》ミヨルニルは雷を纏い、幾糸もの輝きを大蛇へと向け、て解放した。

目を焼くような閃光と共に轟く雷撃は収束しながらその黒い鱗へと向かい、その表面を伝って、拡散される。

直撃を受ければ人間など一瞬で黒焦げになるほどの力ではあるが、この巨大な蛇に対してはあまり有効とは言えなかった。

舌打ちしつつ、徹はその力の分析を再開する。

（確認できたルーンは顎の下にあった一つだけ……ベルカナBの始祖ルーン。この巨大化を『成長』って言うていいのかは疑問だが、とりあえず巨大化してるのはその力だろう）

先ほど少女の腕の中から飛び出してきた蛇は、飼うには少々大きいサイズではあったものの、それでも普通の蛇の範疇であった。

ならば何らかの能力によって巨大化している考えた方がいいだろう。  
ベルカナ  
Bは成長のルーン　その力によって、このニーズホッグをも越える巨体を形成しているのだ。

それは、ニーズホッグのような偽りの肉体ではなく、本物の肉体であると言う事。

つまり、傷を与えればしつかりとダメージを負うし、致命傷を与えれば倒す事は出来る。  
けれど

「鈍すぎんだろ……」

打撃と雷撃を受けながら、何事もなかったかのように鎌首をもたげる夜月に、徹は頬を引き攣らせる。

夜月は、あまりにも巨大過ぎるのだ。

その大きさに合わせ、感覚の鈍さも、その肉体の強度も増加している。

その巨体に対する人間の大きさは、最早人と蟻の差に等しいものだ。規模が大きくなればなるほど、与えられるダメージは少なくなっていく。

ただ純粹に大きく、鈍い。ただそれだけであるのに、非常に厄介な存在でもあった。

「けどな、デカブツ」

再び突進してくる夜月に対し、徹は《雷神の槌》<sup>ミヨルニル</sup>を深く構え、小さく笑みを浮かべる。

動き回る極大の質量、ただそれだけで強大な力に対し、人間が出来ることなど何も無い。  
蟻では、人間の質量に対抗する手段など無いのだ。  
けれど、この場にいるのは

「覚えとけ！ 人間を噛み殺す蟻だっているんだよオツ！」

『ッ

』！

身体能力という点に関しては、最高位の能力者であった。  
大きく振りかぶられた《雷神の槌》は、突撃してきた夜月の鼻先に  
激突し、周囲に大きな衝撃を走らせた。

足場に使っていたビルがその衝撃で砕け、傍に立っていた大樹を揺らす。  
けれど、徹の身体は撥ね飛ばされる事なく、その場に留まり続けていた。

徹、夜月共々、攻撃を相殺されたかのように仰け反った状態。  
それはつまり、徹が確かに夜月の力に匹敵するだけのパワーを発揮した証拠であった。

「夜月……っ！」

遠くから、僅かに声が響く。

徹が後ろ向きに倒れてゆく夜月から視線を外し、そちらを見れば

そこにはこげ茶色の髪をした少女の姿があった。

御津川桜花、夜月の主人であり親友である少女。

無論、徹は彼女の素性など知る由も無いが、彼女がこの大蛇を使役

していると言う事だけは理解していた。

(あれが、術者か　　?)

夜月は<sup>オセル</sup>O等の能力で操られた人形ではなく、それ自体がプラーナを持った生物だ。

事実、徹は目の前の大蛇から、己以上に強大なプラーナの波動を感じ取っていた。

けれど、術者であるあの少女からは、そんな力は感じない。

距離で紛れてしまう程度の小さな　　世間一般で言えば普通の

力。精々、<sup>ティターン</sup>巨人級と言った所だ。

その程度の力で、何故アレほどに強大な生物を使役できるのか、それは徹には理解できなかった。

が、このような能力に関しては、ある種のセオリーが存在する。

「術者を潰せば……！」

操作系能力は、術者を倒せばそれで動きは止まる。

生物使役と言う能力はかなり珍しいものではあったが、それでも前例が無いわけではない。

そもそも、美汐の能力自体がある種それに近いものでもあるのだ。

<sup>ゲーボ</sup>Gや<sup>マンナズ</sup>Mは、他者を使役するのに適した能力であると言える。

そしてそれらの能力は、その能力を発している存在さえ潰してしまえば、後は指揮系統を失った存在が残るだけなのだ。

この大蛇に対してそのセオリーが何処まで通用するかは分からない

いが、それでもある程度の効果はあるだろう。  
そう判断し、徹は鉄槌の先端をその方向へと向けた。収束するのは、  
一条の雷撃。  
あまり力を入れていたとは言えない、けれど巨人級能力者を倒すに  
は十分すぎる破壊力の一撃。  
それは刹那に空を裂き 海面から飛び出してきた蛇の尻尾によ  
って、受け止められた。

「何!？」

驚愕し、徹は視線を夜月の頭の方へと戻す。

そちらもまた、今まさに身体を起こし、徹の方へと視線を戻してい  
る所だった。

頭部から尻尾までの距離はかなり離れている。にもかかわらず、天  
を突くほどに伸びる尻尾に、徹は思わず頬を引き攣らせていた。

( どんだけ長いんだよ、コイツ……! )

舌打ちと共に徹が《雷神の槌》ミョルニル 構え直した、その刹那。

夜月の巨体は、既に徹の眼前にまで迫ってきていた。

「な !？」

咄嗟に、徹は《雷神の槌》ミョルニル を立てて防御する。



一瞬ほどの間も置かず、夜月の突進は激突し、徹の身体は後方へと大きく吹き飛ばされた。

背後にあったビルを一つ貫き、その後ろに生えていた《豊穡の飛剣ユングリング》に受け止められ、徹は苦悶の息を吐き出す。

「が、は……っ、くそ、アレは……!!」

Uウルスの始祖ルーンによる極限強化によって、傷みはあるものの戦闘行動に支障は無い程度のダメージしか無い。

けれど、徹はそれでも戦慄を感じずにはいらなかった。

それは、撥ね飛ばされる寸前に見えた一つのルーン。今まで輝きを放っていなかったからこそ見えなかったそれは

「Zアルシズ、始祖ルーンだと……!!?」

保護を表す協力のルーン、Zアルシズ。

それは特殊なルーン能力の一つで、術者が『護りたい』と認識している存在を護ろうとする時に力を発揮するルーンであった。

基本的には、身体能力やルーン能力のブースト効果を発揮するが、今までその力は始祖ルーンが確認されていなかった。

Uウルスの自己修復によって身体を癒しながら、苦い笑みと共に徹は立ち上がる。

「それが、まさかこんな所にあるとはな……」

今、夜月は桜花を攻撃されそうになった瞬間、そのルーンの力を発動させた。

それによるブーストは、徹ですら戦慄を隠し得ないほどのもの。もしも捕らえる事が出来れば一手柄であるが、自分の身自体が危うくてはそうも言っていられない。小さく方を竦め、徹は嘆息する。

(出来れば、スカウトしたい所なんだけどな)

始祖ルーン能力者は貴重だ。

その力は、可能な限り失う訳には行かない。術者である少女に話をつける事が出来れば、この大蛇も止まるだろうとは徹も思う。

けれど、それでも涼二の行いを容認する事だけは出来なかった。

「まったく……何でこうなっちまったんだかなあ」

苦笑と共に、徹は《雷神の槌》<sup>ミルニル</sup>を肩に担ぐ。

ただニーズホッグと戦いに来ただけだったと言うのに、何故かつての友と戦う事になっているのか。

因果の皮肉さに嘆息し、徹は向かってくる夜月を睨み据えていた。術者を狙う事は帰って危険。ならば

「直接ブツ叩くしかねえってなあ！」

咆哮し、その槌に雷を纏わせ、徹は勢いよく飛び出していった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

上狼塚双雅

《フロースサイトニル悪名高き狼》が幼少の頃より警戒されていた

理由は、いくつが存在する。

予言に語られた存在である事、その精神性、人を食ったような態度でありながら、人を惹きつける才能。

しかし、それらの中でも最たる物として、保有するルーンの相性が良すぎると言っ点が挙げられる。

即ち

「カハハハハハッ！」

「ちッ！」

「う、わあっ!?!」

純粹に速く、純粹に強い。

重厚な鎧を纏っている双雅は、その重量にもかかわらず、ユグドラシルでも屈指の速度を持つ二人の能力者に匹敵する速力を見せていた。

この世のいかなる存在よりも速い証明であるRラドの始祖ルーンと、最強の身体能力の証であるTティフスの始祖ルーン。

ある種順当であるとも言えるこの力の組み合わせは、それだけに強力無比なものでもあった。

基本的に忠実、それゆえに欠点は少ない。双雅にとって、Jジュラの力というのはおまけ程度のものでしかなかった。

そんなモノなど無くとも、人を破壊するには十分すぎるほどの力を持っているのだ。

けれど、それでは面白くない。

その身を包む鎧は無駄なものだ。誰よりも速いものだから、頑丈さなど必要ない。

その背より伸びる大鎌は無駄なものだ。爪先さえ掠れば人体など容易く抉り取られる。

その臀部より垂れ下がる連結刃は無駄なものだ。そもそも機能としては役に立たない事の方が多い。

それでも、と双雅は嗤う。

「なア、楽しもうじゃねエかよ、おい。テメエ等強エんだろ？ 折角の祭なんだ、楽しもうじゃねエか」

「この、バケモノ……ッ！」

哄笑する獣に、シャルルは毒づく。

それほどに理不尽なその力は、ムスペルヘイムの神話級能力者二人を相手取って尚圧倒的であった。

加速した拳の一撃を何とかかわしながら、シャルルは氷の刃を双雅へと向けて振り下ろす。

しかしその一撃は、瞬時に動いた背中の鎌によって受け止められていた。

さらに残った鎌の内の一つが、その体を貫こうと切っ先を向ける。

「くそッ！」

舌打ちと共に、シャルルは後退してその攻撃を躲す。

しかし、純粹な速さでは双雅の方が上。すぐさま双雅は彼を追い、その拳を叩きつけようとする。が、そこに、横合いから放たれた蹴りが襲い掛かる。

双雅はその攻撃を目視してから躲し、二人に対して距離を開けた。蹴りを放った男。新森は、そんな双雅に対して小さく舌打ちをする。

その視線に含まれていたのは、僅かながらの疑問だった。

「小僧……一体何故、このような事に加担する」

「あア？」

「涼二に理由があるのは理解した。だが、あの人狼も、似たような理由だろう」

ガルムの発していた殺気を感じ取っていた新森は、あの姿を思い起こし、目を細める。

あれだけの恨みをユグドラシルへ　　というよりも、豊崎へと向けていた。

彼の戦う理由が涼二と同じようなものである事は、疑うまでも無い。だが、双雅と桜花　　涼二の両脇に立っていた二人の若者に関しては、ユグドラシルに対する敵意など存在していなかったのだ。

「だがお前達は何だ？　何故、ユグドラシルを敵に回すような事をする？」

「ふん……昔ユグドラシルに殺されそうになった　　とでも言やア満足か？」

「……その割には、随分とどうでも良さそうな口調だな」

「あア、どうでもいいね。俺は今生きてるんだし、過ぎた事グダグダ考えててもつまらねエしな」

くつくつと、双雅は嗤う。

そんな彼の様子に、ムスペルヘイムの二人は顔を顰めていた。

この男の事が分らないと、理解できないと　　そう言うかのように。

「なら何だ、友情とでも言うつもりか、獣のお前が？」

「まア、桜花の奴は難しい事をバカなりに考えた結果、煮詰まって妙にトチ狂ったんだろうけどよ。そんなモンは俺には関係ねエしな理由なんかねエよ。あえて言うなら、『楽しそうだから』ってトコだな」

「そんな下らない理由で、こんな事をやってるって言うのかよ、お前はッ！」

苛立ったように叫ぶシャルルの言葉　それに対し、双雅はぴくりと眉を跳ねさせる。

彼は初めてその笑みを消し、鋭いその視線に殺気を込めて、二人の姿を睨み据える。

息を飲む二人に対し、彼は小さく舌打ちをしてから声を上げた。

「あア、テメエにとっちゃア下らん話だろうよ。だが、俺は大真面目だ。俺は、真面目に楽しんでるんだよ」

「何を、言つてやがる……？」

「涼二の奴が抱いてる願望も、まあ壊れ果てたモンだろオよ。だがな、アイツは本気でその願いを掲げてんだ。

分かるか？　本気で、真面目に、アイツは破滅の願いを掲げてんだ。脇役が本気で追い求めてるってのに主役の俺がいい加減な訳がねエだろ」

傲慢に、不遜に、けれど真面目に。

上狼塚双雅は、己の本能に対して何処までも忠実に、そして何処までも真摯に向き合っていた。

幼い頃より縛り付けられてきた、そんな双雅が抱く渴望は

「俺は自由で在りたい。何者にも縛られたくない。ただそれだけだ。だから俺は、俺の願いを貫き続ける。ただ自由であり続ける。ただ己の欲望に従い続ける」

何処までも身勝手に、どこまでもはた迷惑な願いではあるがそれでも、その願いは本物だった。

故に、それは決して無価値なものではない。

涼二や、美汐や、緋織が抱いた願いと等価なものであった。

「願いに優劣なんてものは無エんだよ。あるのは、その道を貫き続ける事が出来るかどうかで事だけだア！」

双雅は咆哮する。

己の生き方を、そして涼二の生き方を否定する事は赦さないと。

それは　　確かに、一つの友情の形でもあった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8111v/>

---

Frosty Rain

2012年1月7日00時52分発行